

佐原市吉原三王遺跡

—東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅴ(佐原地区2)—

(本文編)

1 9 9 0

日本道路公団東京第一建設局
財団法人 千葉県文化財センター

佐原市吉原三王遺跡

—東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅴ(佐原地区2)—

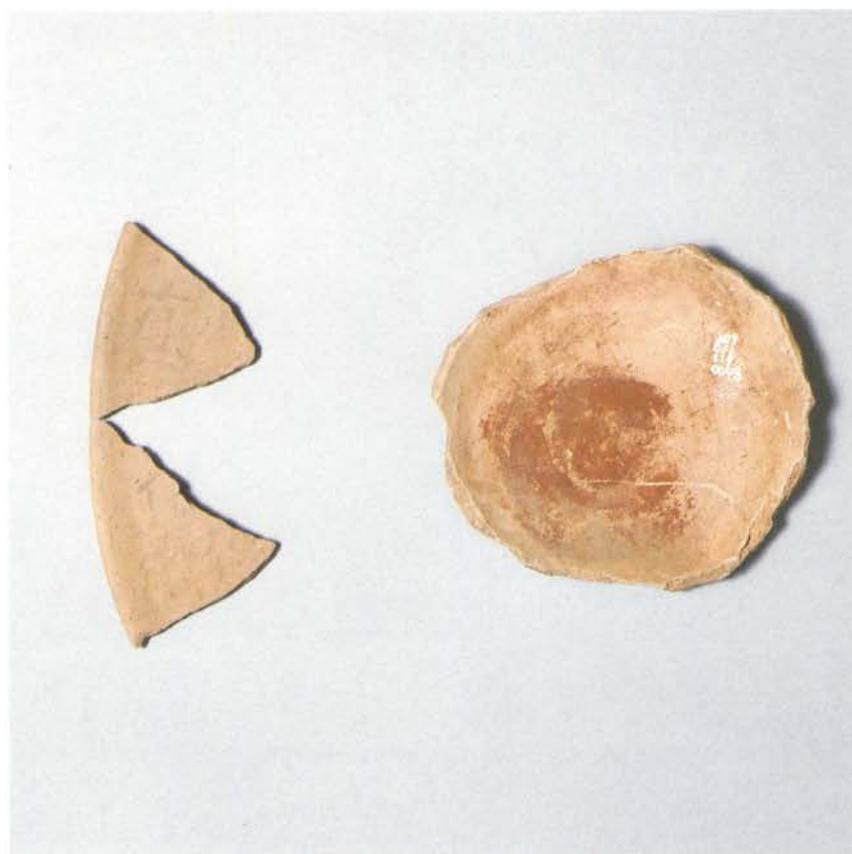
(本文編)

1 9 9 0

日本道路公団東京第一建設局
財団法人 千葉県文化財センター



墨書土器



朱書土器・朱溜

序 文

下総台地北西部に位置する佐原市は、北方を利根川が東流し、そこに流れ込む幾つかの小河川によって複雑に開析された小台地が形成されています。この地域は、昔から自然環境に恵まれていて、河川沿いの台地上には旧石器から中世にいたる多くの遺跡がみられます。

日本道路公団は、全国的な高速自動車国道網整備の一環として東関東自動車道（市川、潮来間）を計画し、既に市川、成田間は新東京国際空港関連区間として供用されているところですが、成田、潮来間（30.2km）の延長工事が計画されたため、千葉県教育委員会では、同事業地内に所在する埋蔵文化財の取り扱いについて、日本道路公団をはじめ関係諸機関と協議を重ねてまいりました。その結果路線の変更等でできるだけ現状保存を図る一方、やむを得ず路線内にかかる遺跡については、発掘調査による記録保存の措置をとることで協議が整い、昭和53年4月より（財）千葉県文化財センターが発掘調査を実施してまいりました。

調査は昭和59年3月に終了し、計57か所の遺跡から多くの貴重な資料を得ることができました。現在はこれらの各遺跡の整理作業を実施しており、成田・大栄地区および佐原地区の一部については既に「東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書」Ⅰ～Ⅳとして刊行しております。

このたび、佐原市に所在する吉原三王遺跡の整理作業が終了し、「東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書」Ⅴとして刊行する運びとなりました。

発掘調査の結果、縄文時代をはじめ古墳時代や中世に至る大規模な集落が検出されました。特に、平安時代の住居跡から出土した多量の墨書土器は、近接する香取神宮との密接な関係を示すものとして注目される一方、古代の神社を取り巻く周辺地域との実態を比較究明するうえで貴重な資料であります。

本書が学術資料はもとより、歴史に対する理解を深める教育資料として広く活用されることを望む次第です。

最後に、発掘調査から報告書刊行にいたるまで種々御指導いただいた千葉県教育委員会をはじめ、日本道路公団東京第一建設局、佐原市教育委員会、地元関係諸機関各位の御指導、御協力にお礼申し上げますとともに、酷暑酷暑の中、調査に協力された多くの調査補助員の皆様から謝意を表します。

平成2年3月

財団法人 千葉県文化財センター

理事長 岩瀬良三

凡 例

1. 本書は、佐原市丁字宇天ノ宮に所在する吉原三王遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査から報告書作成に至る業務は、東関東自動車道建設に伴う調査として、日本道路公団東京第一建設局の委託を受けた財団法人千葉県文化財センターが、千葉県教育委員会の指導のもとに行った。
3. 調査で使用した遺跡コードは209—021である。
4. 発掘調査は、下記により実施した。

昭和58年度 調査期間 昭和58年11月24日～昭和59年3月31日

対象面積 4000m² (No45)

調査担当 調査部長白石竹雄、部長補佐岡川宏道、班長齋木勝

調査研究員池田大助、岡田光広、澤野弘

昭和59年度 調査期間 昭和59年4月1日～同年10月31日

対象面積 5200m² (No45)、2000m² (No45-1)、6000m² (No45-2)

調査担当 調査部長鈴木道之助、部長補佐岡川宏道、班長齋木勝(4月1日～9月30日)、班長石田広美(10月1日～昭和60年3月31日)

調査研究員栗田則久、岡田光広、山田貴久

5. 整理作業は、昭和60年度から昭和63年度にかけて行った。
6. 整理作業および報告書の作成作業は、調査部長鈴木道之助、堀部昭夫、部長補佐岡川宏道、古内茂、班長高橋賢一、矢戸三男の指導のもとに、主任調査研究員栗田則久、藤岡孝二、調査研究員石橋宏克が行った。
7. 本書の執筆は、縄文時代全般を石橋が担当し、その他の執筆及び編集は栗田が行った。
8. 発掘調査から本書の刊行にいたるまで、千葉県教育庁文化課、日本道路公団東京第一建設局、同佐原工事事務所、同市原工事事務所、佐原市教育委員会の関係各位、並びに、国立歴史民俗博物館平川南氏をはじめ多くの方々の御指導、御協力をいただき、深く謝意を表わす次第であります。

目 次

巻首図版

序 文

凡 例

第1章 序 章	1
第1節 遺跡の位置と歴史的環境	1
第2節 調査の概要と方法	7
第2章 検出された遺構と遺物	11
第1節 古墳時代	11
1. 住居跡	11
第2節 奈良・平安時代	41
1. 住居跡	41
2. 掘立柱建物跡	160
3. 土壌	162
第3節 中・近世	185
1. 土壌墓	185
2. 粘土敷土壌	192
3. 地下式土壌	195
4. 大形土壌	199
5. その他の土壌	200
第4節 その他の遺構と遺物	219
1. 溝	219
2. 製鉄関連	235
3. グリッド出土遺物	235
第5節 旧石器・縄文時代	251
1. 土壌	252
2. 土壌出土遺物	257
3. グリッド出土土器	265
4. グリッド出土特殊土器及び土製品	271

5. グリッド出土石器	271
第3章 考察	278
第1節 吉原三王遺跡出土の土器	278
1. 古墳時代	278
2. 平安時代	280
第2節 カマド内遺物出土状況	299
第3節 出土文字資料について	302
第4節 平安時代末から中世にかけての土墳墓	331
第5節 集落の展開	332

挿図目次

第1図 吉原三王遺跡位置図 (1:50000)	2
第2図 吉原三王遺跡周辺図 (1:20000)	4
第3図 吉原三王遺跡周辺地形図 (1:20000)	5
第4図 吉原三王遺跡周辺地形図 (1:5000)	6
第5図 調査区位置図 (1:4000)	10
第6図 グリッド設定図	10
第7図 グリッド分割図	10
第8図 001～003・013号住居跡	19
第9図 015～018・043号住居跡	20
第10図 035・044号住居跡	21
第11図 057・059・062・101号住居跡	22
第12図 128・129号住居跡	23
第13図 001・002号住居跡出土土器	32
第14図 003・013号住居跡出土土器	33
第15図 015・016号住居跡出土土器	34
第16図 017・018号住居跡出土土器	35
第17図 018号住居跡出土土器	36
第18図 035・044号住居跡出土土器	37
第19図 043・057・059号住居跡出土土器	38

第20回	062・101・128・129号住居跡出土土器	39
第21回	住居跡出土石製品・鉄製品・土製品	40
第22回	005～009・012号住居跡	79
第23回	011・019・020号住居跡	80
第24回	021～023号住居跡	81
第25回	024～027号住居跡	82
第26回	028・030～034・037号住居跡	83
第27回	036・038～042号住居跡	84
第28回	045～047号住居跡	85
第29回	048～052号住居跡	86
第30回	055・056・058～061号住居跡	87
第31回	063～070号住居跡	88
第32回	071～075号住居跡	89
第33回	102～107号住居跡	90
第34回	108～113・116・117号住居跡	91
第35回	114・115・118号住居跡	92
第36回	119～124・126号住居跡	93
第37回	005～008号住居跡出土土器	127
第38回	011～012号住居跡出土土器	128
第39回	019・020・021・022号住居跡出土土器	129
第40回	023号住居跡出土土器(1)	130
第41回	023号住居跡出土土器(2)	131
第42回	023号住居跡出土土器(3)	132
第43回	024～027号住居跡出土土器	133
第44回	028・030・032～034・036・038・039号住居跡出土土器	134
第45回	040～042・045・046号住居跡出土土器	135
第46回	047号住居跡出土土器	136
第47回	048～051号住居跡出土土器	137
第48回	052・055号住居跡出土土器	138
第49回	056号住居跡出土土器	139
第50回	058・060・063・065・066・068・069号住居跡出土土器	140
第51回	070・071・073～075号住居跡出土土器	141
第52回	103号住居跡出土土器	142

第53図	107号住居跡出土土器	143
第54図	109～114号住居跡出土土器	144
第55図	115・119号住居跡出土土器	145
第56図	119・121・122・124・127号住居跡出土土器	146
第57図	谷部住居跡	148
第58図	201～204号住居跡出土土器	150
第59図	066号住居跡出土和鏡	151
第60図	住居跡出土鉄製品	153
第61図	住居跡出土土製品	154
第62図	住居跡出土土錘	155
第63図	住居跡出土支脚(1)	157
第64図	住居跡出土支脚(2)	158
第65図	住居跡出土石製品(1)	159
第66図	住居跡出土石製品(2)	160
第67図	掘立柱建物跡	161
第68図	平安時代土壇配置図(1)	163
第69図	平安時代土壇配置図(2)	164
第70図	平安時代土壇(1)	169
第71図	平安時代土壇(2)	170
第72図	平安時代土壇(3)	171
第73図	土壇出土土器(1)	179
第74図	土壇出土土器(2)	180
第75図	土壇出土土器(3)	181
第76図	土壇出土土器(4)	182
第77図	土壇出土土器(5)	183
第78図	土壇出土鉄製品	184
第79図	土壇出土土製品	184
第80図	中世土壇群配置図(1)	186
第81図	中世土壇群配置図(2)	187
第82図	501・508号土壇墓	187
第83図	土壇墓出土遺物	189
第84図	594・623号土壇墓	191
第85図	馬歯出土土壇	192

第86図	粘土敷土壇	194
第87図	地下式土壇(1)	196
第88図	地下式土壇(2)	197
第89図	大形土壇	198
第90図	土壇(1)	203
第91図	土壇(2)	204
第92図	土壇(3)	205
第93図	土壇出土土器(1)	211
第94図	土壇出土土器(2)	212
第95図	土壇出土鉄製品	213
第96図	土壇出土石製品	214
第97図	土壇出土五輪塔・宝篋印塔	215
第98図	輸入銭貨拓影(1)	216
第99図	輸入銭貨拓影(2)	217
第100図	寛永通宝・文久銭拓影	217
第101図	溝1・溝9・溝28	221
第102図	溝8・溝9・溝11・溝12	223
第103図	溝2・溝3(A)(B)	224
第104図	溝30	225
第105図	溝出土土器	229
第106図	溝出土陶磁器	231
第107図	溝出土土製品	232
第108図	溝出土鉄製品	234
第109図	溝出土石製品	234
第110図	鉄滓分布図	236
第111図	グリッド出土土器(1)	239
第112図	グリッド出土土器(2)	240
第113図	グリッド出土墨書・線刻土器	241
第114図	グリッド出土陶磁器	242
第115図	グリッド出土銅鏡	242
第116図	グリッド出土鉄製品	243
第117図	グリッド出土土錘(1)	244
第118図	グリッド出土土錘(2)	245

第119図	グリッド出土紡錘車・支脚	247
第120図	グリッド出土土製品	248
第121図	グリッド出土石器製品	249
第122図	旧石器時代確認グリッド配置図	250
第123図	吉原三王遺跡基本層序柱状図	251
第124図	旧石器時代石器実測図	252
第125図	縄文時代遺構配置図	253
第126図	縄文時代土壌(1)	254
第127図	縄文時代土壌(2)	255
第128図	縄文時代土壌(3)	256
第129図	遺構出土遺物(1)	261
第130図	遺構出土遺物(2)	262
第131図	遺構出土遺物(3)	263
第132図	遺構出土遺物(4)	264
第133図	グリッド出土土器(1)	268
第134図	グリッド出土土器(2)	269
第135図	グリッド出土土器(3)	270
第136図	グリッド出土土製品	272
第137図	グリッド出土石器(1)	273
第138図	グリッド出土石器(2)	274
第139図	古墳時代土師器分類図	279
第140図	奈良・平安時代土師器分類図(1)	281
第141図	奈良・平安時代土師器分類図(2)	282
第142図	外面同心円叩き須恵器出土遺跡分布図	294
第143図	外面同心円叩き須恵器集成図(1)	295
第144図	外面同心円叩き須恵器集成図(2)	296
第145図	カマド内遺物出土状況図(1)	300
第146図	カマド内遺物出土状況図(2)	301
第147図	023号住居跡墨書土器出土状況	303
第148図	047A号住居跡墨書土器出土状況	304
第149図	056号住居跡墨書土器出土状況	305
第150図	110号住居跡墨書土器出土状況	306
第151図	115号住居跡墨書土器出土状況	307

第152図	119号住居跡墨書土器出土状況	308
第153図	墨書土器時期別分布図(1)	310
第154図	墨書土器タイプ別分類図	311
第155図	墨書土器時期別分布図(2)	312
第156図	墨書土器タイプ別分類図	313
第157図	墨書土器時期別分布図(3)	314
第158図	墨書土器時期別分布図(4)	315
第159図	墨書土器タイプ別分類図	317
第160図	墨書土器時期別分布図(5)	318
第161図	墨書土器時期別分布図(6)	319
第162図	地名墨書土器関連小字位置図	324
第163図	出土文字資料(1)	329
第164図	出土文字資料(2)	330
第165図	出土文字資料(3)	331
第166図	出土文字資料(4)	331
第167図	集落変遷図 古墳時代Ⅰ期	341
第168図	集落変遷図 古墳時代Ⅱ期	342
第169図	集落変遷図 古墳時代Ⅲ期	343
第170図	集落変遷図 古墳時代Ⅳ期	344
第171図	集落変遷図 古墳時代Ⅴ期	345
第172図	集落変遷図 奈良・平安時代Ⅰ期	346
第173図	集落変遷図 奈良・平安時代Ⅱ期	347
第174図	集落変遷図 奈良・平安時代Ⅲ期	348
第175図	集落変遷図 奈良・平安時代Ⅳ期	349
第176図	集落変遷図 奈良・平安時代Ⅴ期	350
第177図	集落変遷図 奈良・平安時代Ⅵ期	351
第178図	集落変遷図 奈良・平安時代Ⅶ期	352
第179図	集落変遷図 奈良・平安時代Ⅷ期	353
第180図	集落変遷図 奈良・平安時代Ⅸ期	354
第181図	集落変遷図 奈良・平安時代Ⅹ期	355
第182図	集落変遷図 奈良・平安時代Ⅺ期	356
第183図	集落変遷図 奈良・平安時代Ⅻ期	357
第184図	竪穴住居跡時期別主軸方向変遷図(古墳時代)	358

第185図	竪穴住居跡時期別主軸方向變遷図（奈良・平安時代）	359
第186図	江原台遺跡掘立柱建物跡分布図	360
第187図	江原台遺跡墨書土器時期別分布図(1)	361
第188図	江原台遺跡墨書土器時期別分布図(2)	362
附図 1	吉原三王遺跡全測図	
附図 2	古墳時代出土土器變遷図	
附図 3	奈良・平安時代出土土器變遷図	

第 1 章 序 章

第 1 節 遺跡の位置と歴史的環境

吉原三王遺跡は、房総半島の北側、下総台地の北東側に位置する。この付近は、常陸風土記の香島郡に「西は流海」と記されているように、旧鬼怒川が流入する広大な入江を呈していたようである。津宮等の泊に関係するような地名が多く残ったり、香取の旧名が「楫取」であろうという説があるのもこの入江に関係するのであろう。本遺跡周辺は、この「流海」に北西方向に流入する小河川によって開析された標高40m程のやや広い平坦面をもつ台地が展開している。本遺跡が所在する台地は、南側を小野川、北側を根本川によって開析され、東側は、小見川町に北東方向に流入する小河川によって侵食を受けた比較的広い平坦面を有している。また、周囲の水田面とは、比高差30m程あり、台地の斜面は急崖の様相を呈している。この状況はこの付近一帯に共通するものであり、斜面上に集落を営むような状況はほとんど認められないようである。ただし、谷がしらに相当する部分は比較的傾斜が滑らかであり、本遺跡でも住居が検出されたように可能性は多く存在するであろう。

このように、樹枝状に複雑に開析された本遺跡周辺の台地上には多くの遺跡が所在している。ここでは、本遺跡の主体となる古墳時代以降の遺跡を時代順に記載していく。

古墳時代の遺跡としては、利根川を望む台地上及び低地上に古墳が形成される。周辺の古墳で最も古い段階に位置付けられるのは、馬の背状を呈する狭小な台地上に所在する山之辺手ひろがり古墳群(3)である。正式な報告書が刊行されていないため詳細は不明であるが、長方墳4基、方墳2基、円墳1基等が検出されているようである。3号墳からは石枕・特異な形態の立花状石製品等が出土し、また、他の古墳では底部穿孔の小形壺が確認されており、本古墳群の成立は4世紀末まで遡る可能性が考えられている。6世紀代になると低地（自然堤防）上に森戸権現前古墳・浅間神社古墳・変電所裏古墳等の前方後円墳が築造されるようになる。これらの古墳にはすべて埴輪が伴っており、埴輪の様相より、森戸権現前古墳が6世紀初頭から前半にかけての所産、やや遅れて浅間神社古墳等が構築されているようである。この地域一帯の低地の前方後円墳は前方部を西に向けているのに対し、5世紀前半から中葉にかけての構築とされる三ノ分目大塚山古墳に代表される小見川町一帯の前方後円墳は前方部を東側に向けており、明らかに支配勢力の差による規制がみられる。一方、利根川からやや離れた台地の奥部には円墳を主体とする綱原古墳群・片野新林古墳群等の古墳群が形成される。綱原古墳群は、5基の円墳が調査され、奥部に位置する古墳群のなかでは比較的古い時期のものである。新林古墳群は、造り出し付円墳1基と円墳1基が調査され、雲母片岩を利用した箱式石棺を内部主体とす



- | | |
|---------------|--------------|
| 1. 吉原三王遺跡 | 18. 中山遺跡 |
| 2. 香取神宮 | 19. 馬場遺跡 |
| 3. 山之辺手ひろがり古墳 | 20. 東野遺跡 |
| 4. 片野新林古墳 | 21. 磯花遺跡 |
| 5. 網原古墳群 | 22. 長部山遺跡 |
| 6. 森戸権現前古墳 | 23. 丁子コバッチ遺跡 |
| 7. 浅間神社古墳 | 24. 神田台遺跡 |
| 8. 変電所裏古墳 | 25. 仏師台遺跡 |
| 9. 神道山古墳群 | 26. 阿広台遺跡 |
| 10. 又見古墳 | 27. 岩ヶ崎城 |
| 11. 玉造上の台遺跡 | 28. 大崎城 |
| 12. 玉造谷津遺跡 | 29. 本矢作城 |
| 13. 牧野大荒久遺跡 | 30. 山崎城 |
| 14. 荒久遺跡 | 31. 網原屋敷跡 |
| 15. 側高遺跡 | 32. ひさご塚・丸塚 |
| 16. 丁子山遺跡 | 33. 角ノ谷遺跡 |
| 17. 丁子後谷遺跡 | |

第1図 吉原三王遺跡位置図 (1:50,000)

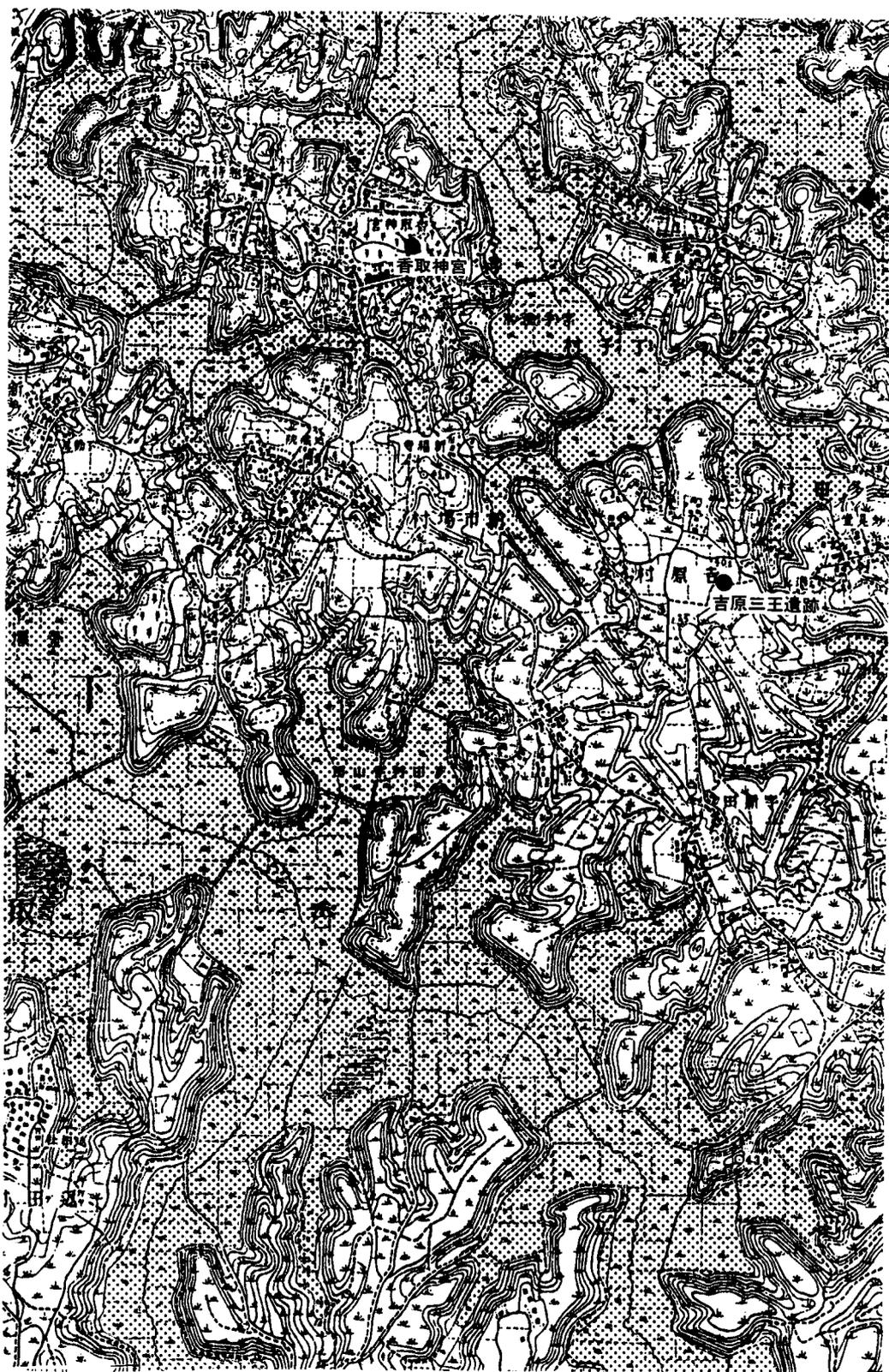
東横東自動車道
18/19
39.6

第一
第二
第三
第四
九美上
油田

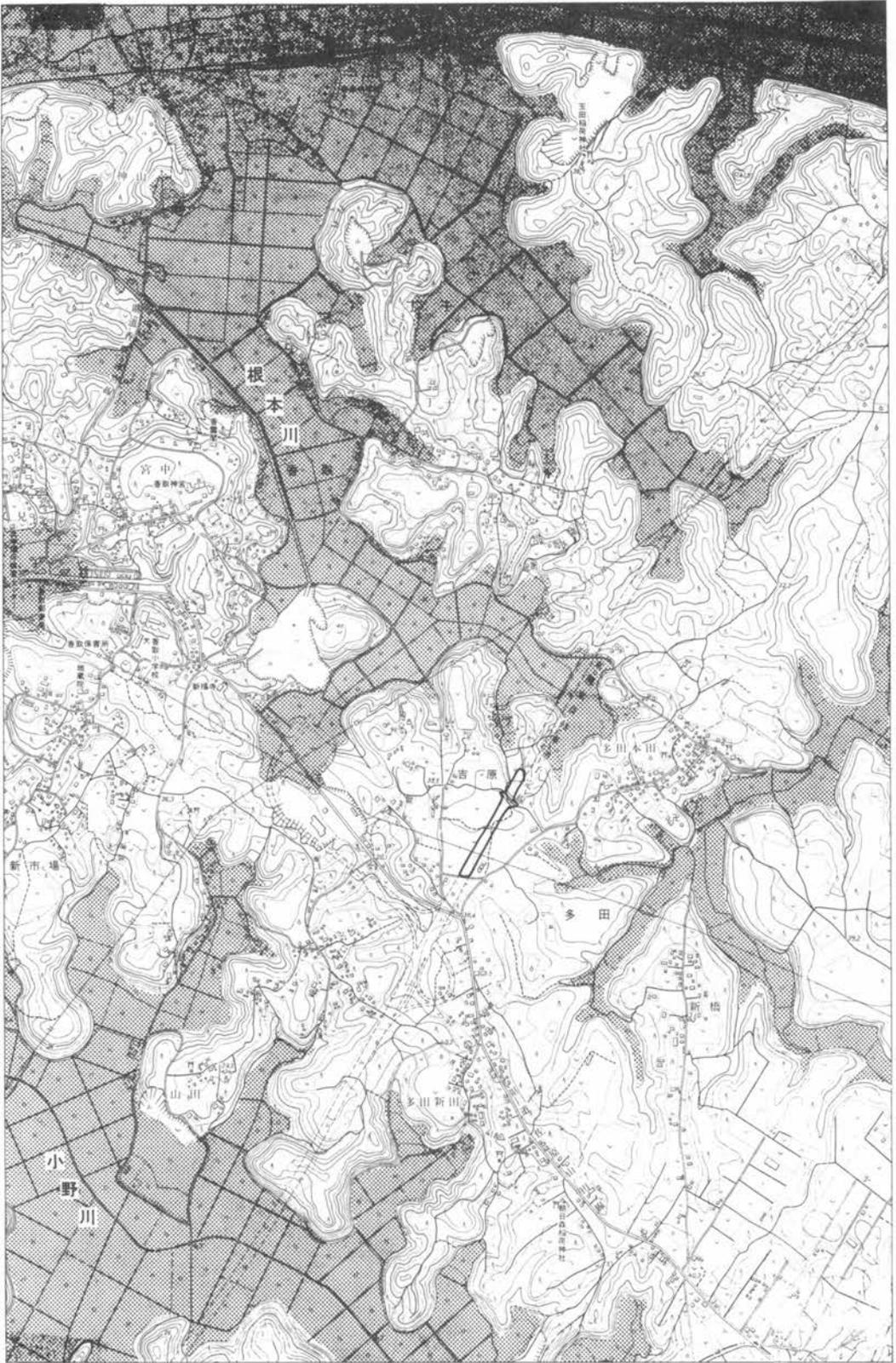
るいわゆる「変則的古墳」であることが判明した。主体部及び周溝内から出土した須恵器長頸瓶より、7世紀前半から中葉にかけての時期と想定される。香取神宮の北1kmには、市の指定史跡となっている前方後円墳1基と円墳11基から成る神道山古墳群が所在する。また、香取神宮の西0.5kmには特異な構造を持つ「箱式横穴式石室」と呼ばれる主体部を有する又見古墳が位置する。本古墳は香取神宮の元摂社である又見神社の境内に所在し、7世紀前半から中葉の構築と考えられている。香取神宮と関連して注目される古墳である。

古墳時代の集落としては、玉造上の台・玉造谷津・牧野大荒久・荒久・側高遺跡等が鬼高段階になって成立してくる。上の台・谷津遺跡は同一台地上に位置し、古墳時代の大集落を形成している。特に上の台遺跡では、古墳時代の竪穴住居106軒と掘立柱建物群が検出されている。掘立柱建物の中には、豪族の館跡と考えられている四面廂付の大形のものが存在する。また、「玉造」の地名が物語るように、玉造の工房跡も確認されている。利根川を望む台地の先端に位置する側高遺跡では、7世紀代の竪穴住居13軒とともに7世紀後半の方墳が2基検出されている。

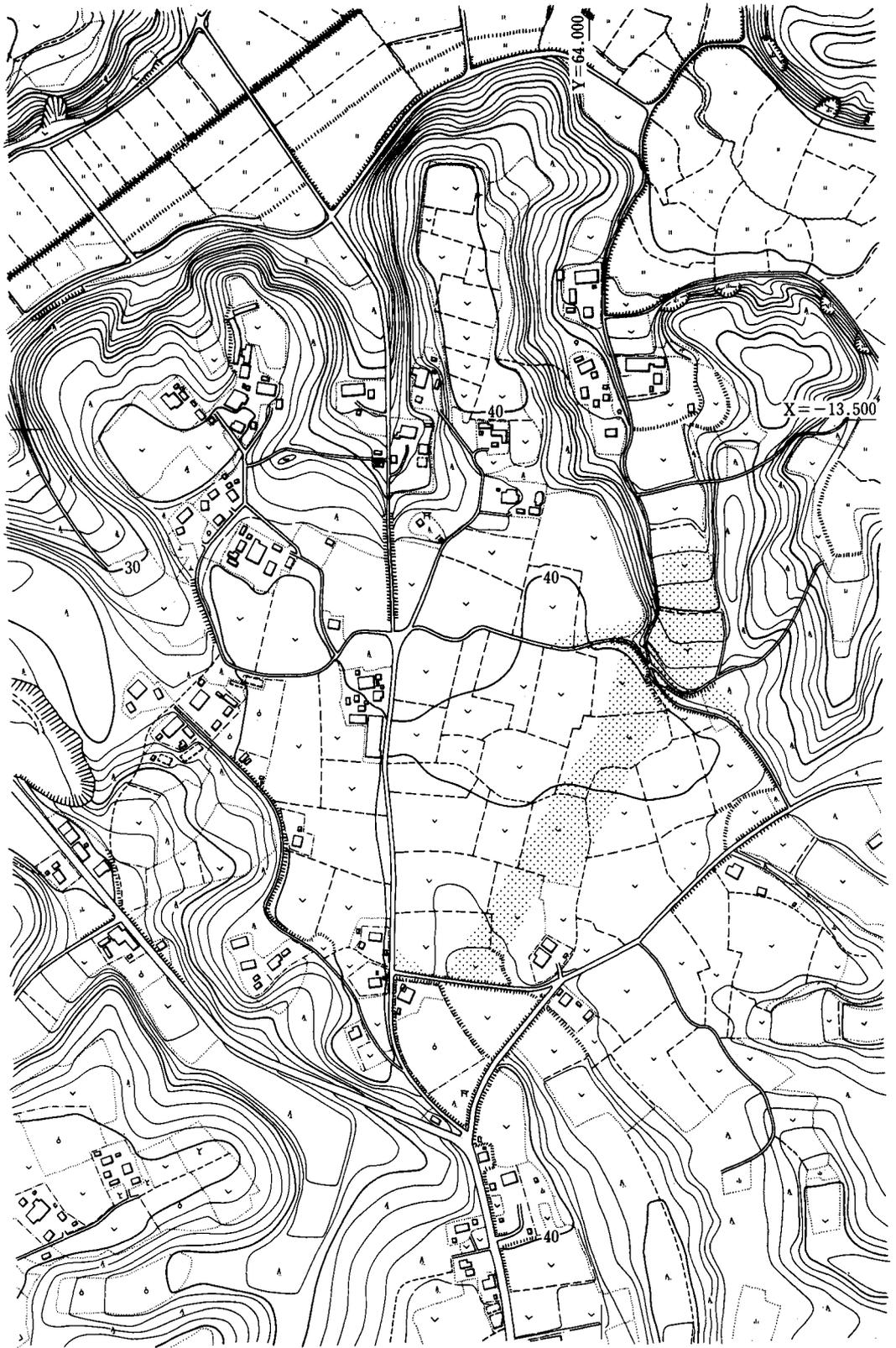
奈良・平安時代になると集落が増大・拡散するようになる。流域ごとにみていくと、太平洋に流れる栗山川と、利根川に注ぐ小野川の支流葛西川との分水嶺に当たる地域では、中山・馬場・東野・磯花遺跡等が調査されている。いずれも多くの墨書土器が検出されており、中山では「郡上」、馬場では「鹿郷長鹿成里成里□、小山□」、東野では「國玉」が主体をなし注目される。磯花遺跡では、掘立柱建物跡とともに「寺七日」の墨書土器が出土しており、集落内寺院の存在が予想される。本遺跡の立地する根本川流域には、長部山遺跡・丁子コバッチ遺跡等がみられる。長部山遺跡は、香取神宮の南東0.5km程、吉原三王遺跡との中間に位置し、「姦」の墨書土器が注目される。大禰宜家文書中の大禰宜職に付属する金丸・犬丸各畠の所在地として、香取村に「姦畠六丁三段小」と記されており、「姦」の存在より本遺跡周辺を香取社領と想定することができる。また、吉原三王遺跡と谷を挟んで北側0.6kmに所在する丁子コバッチ遺跡では、竪穴住居10軒と2×3間の総柱を含む2棟の掘立柱建物跡が検出されている。ここから出土した「丁」の墨書土器も、中世の大宮司實秀等連署和興状のなかに「下総国香取社領……丁古……」とみられ、やはり香取社領の一地名として捉えることができよう。一方、小野川と大須賀川の間台地上に位置する遺跡としては、先にあげた玉造上の台遺跡の他に神田台遺跡・仏師台遺跡・阿広台遺跡がある。神田台遺跡は奈良時代を主体とする小規模な集落で、9世紀前半の2軒の竪穴住居から墨書土器が検出されている。このうち、008号住居跡出土の「神宮」・「毛神」は香取神宮との関係を想定させるものである。この住居跡からは、須恵器甕の胴部片を利用した転用硯が1点確認され、墨と朱墨の両方が付着している。「神宮」の墨書土器が外面赤彩されていることと関連して興味深い資料である。また、阿広台遺跡では、小規模な集落ながら短冊形透かしを有する円面硯が出土している。



第2図 吉原三王遺跡周辺図 (1:20,000)



第3図 吉原三王遺跡周辺地形図 (1:20,000)



第4图 吉原三王遺跡周辺地形図 (1 : 50,000)

中世になると、香取神宮の権力の衰退とともに、千葉氏及び国分氏の香取社領に対する侵略が企てられ、それらの居城として、本矢作城・大崎城・山崎城・岩ヶ崎城が建立される。また、綱原屋敷跡では中世の葛原の牧に関連する馬土手及び掘立柱建物跡が検出されている。一方、ひさご塚・丸塚・角ノ谷遺跡では塚が調査されている。いずれも方形に巡る周溝の1辺が部分的に途切れる共通の形態を有する。

第2節 調査の概要と方法

1. 調査の概略

吉原三王遺跡の発掘調査は、昭和58年11月24日から昭和59年10月31日まで約1年の期間をかけて実施された。調査総面積は17,200㎡である。

昭和58年度

本年度は、本線内台地上の8,850㎡(No.45)のうち4,000㎡の発掘調査を行なった。調査範囲は、本年度4ヶ月分の作業量と道路公団側の工事計画を考慮してセンター杭から東側半分程とし、調査終了後にこの部分の引渡しを行なった。本遺跡は現地踏査の段階で多量の遺物が確認され、相当数の遺構の存在が予想されたため、当初から10%の確認調査を行わずに本調査を開始した。ただ、表土層の厚さ及び遺構の密集度を把握するために数本のトレンチを設定している。発掘調査の結果、古墳時代から中世にかけての竪穴住居跡27軒・土壇36基・土壇群3・地下式土壇2基・溝10条等が検出された。出土した遺物は、「吉原仲家」等の墨書土器を含む土師器・須恵器と中世の遺物群などである。墨書土器を検出した竪穴住居は、他の竪穴住居に比べて規模が大きく、壁柱穴を付設する特徴がみられた。また、13世紀の方形土壇内より和鏡、合子(白磁)、碗(青磁)、鉄製品(短刀・鋏・毛抜き)が一括出土している。鎌倉時代以降の本遺跡の状況を知るうえで貴重な資料である。

発掘調査は昭和59年3月31日に終了したが、当初の調査範囲以外に遺構が展開することが予想されたため、調査区南側に隣接する部分2,000㎡をNo.45-1、北側の小支谷部分6,000㎡をNo.45-2として新たに調査範囲に加え、来年度に調査することとした。

昭和59年度

本年度は、No.45の残り部分4,850㎡と前述したNo.45-1、No.45-2の発掘調査を実施した。No.45-1は全面本調査、No.45-2は確認の結果750㎡の本調査となった。また、No.45は調査の終了段階で東側の取り付け道路部分350㎡の調査が新たに加えられた。それに伴い発掘終了の時期を9月30日から10月31日に変更した。

発掘調査の結果、古墳時代から中世にかけての竪穴住居跡79軒、土壇205基、掘立柱建物跡3

棟、溝25条等を検出した。前年度に引き続き多くの墨書土器の出土が注目された。特に023号住居跡からは「…□香取郡大杯郷中臣人成女之替進上承□…」に代表される多量の墨書土器が出土し、香取神宮との関係を想定させるものとなっている。また、遺跡内を東西南北に走る溝は8世紀初頭段階の掘削と考えられ、この時期以降集落の展開は溝によって規制されるようである。多量の墨書土器の分布とこの溝の関係に注目される。

整 理

整理は、昭和60年度に水洗注記、61年度に図面整理と実測の一部を行なった。昭和62年度には、実測及び写真撮影、レイアウトを実施し、63年度で原稿執筆を終了した。なお、各年度の担当職員は下記のとおりである。

昭和60年度

調査部長 鈴木道之助
部長補佐 岡川 宏道
班 長 高橋 賢一
調査研究員 栗田 則久

昭和61年度

調査部長 鈴木道之助
部長補佐 岡川 宏道
班 長 高橋 賢一
調査研究員 栗田 則久・藤岡 孝司・岡田 光広

昭和62年度

調査部長 堀部 昭夫
部長補佐 古内 茂
班 長 矢戸 三男
調査研究員 栗田 則久、石橋 宏克

昭和63年度

調査部長 堀部 昭夫
部長補佐 古内 茂
班 長 矢戸 三男
調査研究員 栗田 則久

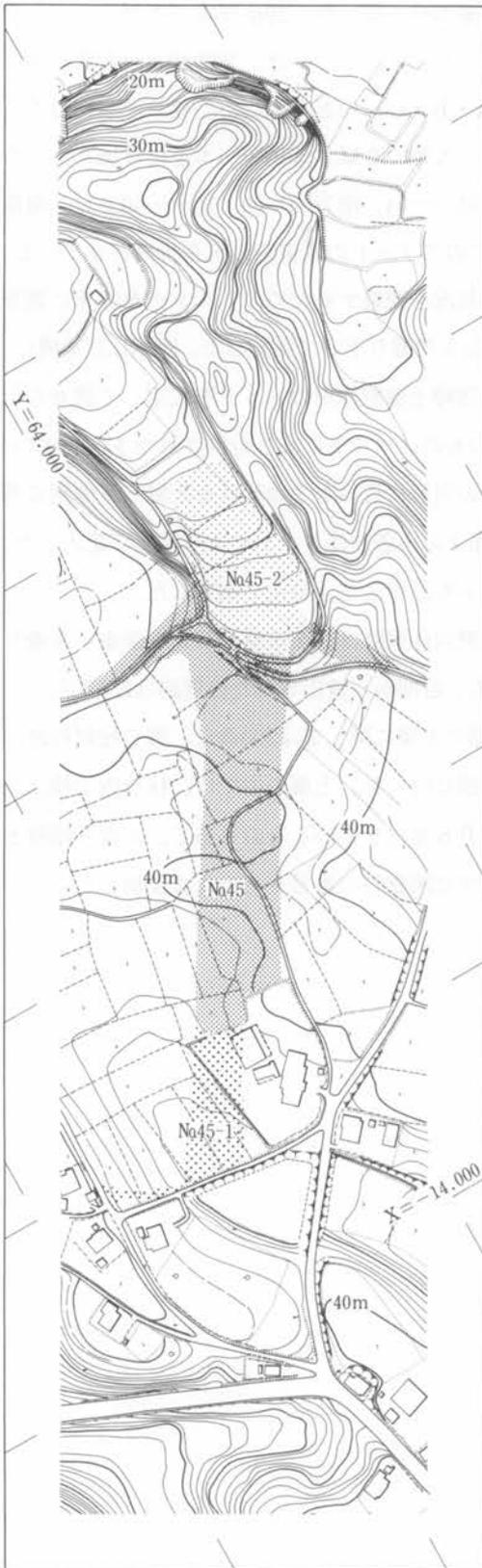
2. 調査方法

吉原三王遺跡の発掘調査にあたっては、公共座標（第IX座標系）に従って調査区全域にグリッドを設定した。方眼測量は測量業者に委託せず、調査担当者が実施し、道路公団側が設定し

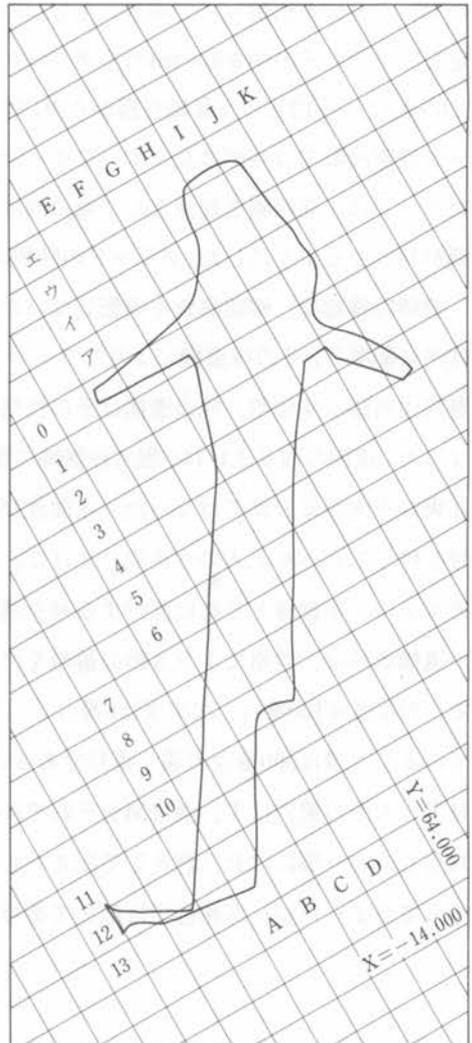
たセンター杭を利用して、端数の生じない地点に基本杭を置いた。20m間隔で大グリッドを設定し、さらにその中を4×4mの小グリッドに分割した。大グリッドは、Y軸が北から南に向かって0・1・2……13とし、X軸を西から東に向かってA・B・C……と呼称した。なお、当初のグリッド設定段階では谷部に及んでいなかったために、X軸の0以北はア……エを付け加えた。小グリッドは、北西隅を起点として東に向けて00・01……04、南方向に00・10……40とし、南東隅が44となるようにした。グリッドの呼称はすべてのグリッドの北東端の杭を付帯させている。

遺構の確認は、確認調査を実施しないため土層状況を観察するためのトレンチを任意に調査区内に配置し、その後重機によりソフトローム上面まで掘り下げて実施した。確認した遺構は、竪穴住居跡は4分割、他の遺構はその性格により随時土層観察用のベルトを設定して調査を行なった。遺物の取り上げは、竪穴住居跡の覆土中のものはベルトにより分割された4区を用い、北東から南西に分けて行なった。床面及び覆土中の完形に近いものは形状を記録し、個別に番号を付してレベル記入のうえ取り上げた。又、床面上の小破片はドットにより図面に記入した。カマドは、中軸線とそれに直行する袖を通るベルトを設定して4分割で調査した。

遺構番号は、性格により3桁の番号を付した。竪穴住居跡は、2年度にわたる調査を考慮して、初年度は100番台、次年度は0番台とした。また、谷部から検出された住居跡は200番台としている。土壌は500番台の通し番号であるが、谷部の土壌に関しては300番台、掘立柱建物跡はHT、大形の竪穴はT、溝はMをそれぞれ番号の頭に付した。土壌の中では、住居内で検出されたものの一部にはP、群として捉えたものにはPSを付しているものもある。かなり煩雑となってしまったが、本報告では敢えて番号を替えずに調査時の番号をそのまま使用した。



第5図 調査区位置図 (1 : 4,000)



第6図 グリッド設定図

00	01	02	03	04
10	11			
20		22		
30			33	
40				44

第7図 グリッド分割図

第2章 検出された遺構と遺物

第1節 古墳時代

本遺跡における古墳時代の住居跡は、調査区北東の小支谷を望む位置に集中する傾向が見られる。検出された住居跡は12軒で、7世紀代を中心とする。

1. 住居跡

001号住居跡（第8図、図版4）

調査区北西端D0区に位置し、002号住居跡と近接する。南半部分が道路により削平されているが、ほぼ正方形を呈するものと思われる。カマドを通る主軸はN-32°-Wである。規模は不明であるが、一辺7m前後を測るものと思われる。確認面からの掘り込みは40cm程である。床面はハードローム中に形成され、平坦できわめて堅緻である。周溝はカマド部分を含み全周するものと思われる。柱穴は、北東隅に径35cm、深さ65cmの支柱穴が1本検出された。これを取り囲むように深さ20~30cmの3本のピットが見られる。カマドの両側には、深さ15cm程の浅いピットが掘り込まれる。カマドに付随する施設であろうか。カマドは北西壁ほぼ中央に設けられ、遺存はきわめて良好である。周溝の掘り込み後構築されたものである。壁を40cm程半円状に掘り込み煙道部を形成する。燃烧部は床面より10cmほどの深さで、壁面から若干離れる。袖部は、部材構築前に床面を5cm程掘り込んでプランを設定しているようである。下半部にはローム粒子を多く含む砂質粘土、上半に純粋な灰白色の砂質粘土を用いて袖を構築している。燃烧部内には焼土の堆積が多く見られるが、かなり軟質である。床面上の東側には、焼土及び炭化材が多量に残存している。焼土の堆積はかなり厚く、炭化材を被覆するような状況が見られる。この焼土はおそらく屋根上にあつたものが崩落して形成されたものと思われる。

遺物の出土はあまり多くないが、その出土状況は特徴的である。カマド左側に完形の杯、前面には底部を打ち欠いた甕が出土している。甕の出土状況を観察すると、焼土及び炭化材の上面にあり、住居焼失後横位に置かれたものと考えられる。カマド内では、燃烧部に支脚を立てて16の手捏ね土器を意図的に上に被せる状況が認められる。

002号住居跡（第8図、図版4）

D0区に位置し、001号住居跡に近接する。北側半分は調査区域外にあるためカマド等は検出されなかった。平面形は正方形を呈すると思われ、規模は現認される南辺で5.6mを測る。確認面からの掘り込みは30cm程で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面はハードローム中に形成され、

平坦できわめて堅緻である。周溝は深さ5～10cm程で全周するものと思われる。柱穴は調査区内において4本検出された。南側の柱穴は円形プランを呈し、深さ60cmと深いのに対し、北側の柱穴は方形プランを呈した8cm程の掘り込みにすぎない。支柱穴とは異なる性格のものであろう。カマドは北側の調査区域外に存在すると考えられる。床面上には炭化材及び焼土が若干ながら検出された。

遺物の出土は多くないが、南東側の柱穴部分を中心に遺存している。

003号住居跡（第8図、図版5）

E0区、002号住居跡の東側5m程に位置する。南側1/4程が農道によって削平されているが、周溝及び柱穴は確認された。平面形は方形を呈し、南北長4.2m、東西長4.4mを測る。カマドを通る主軸はN-5°-Wである。確認面からの掘り込みは40cmで、壁はやや斜位に立ち上がる。床面はハードローム中に形成され、平坦で堅緻である。周溝はカマド部分を含み全周する。幅20cm、深さ5cm前後で、西壁及び北壁のカマド西側部分は壁から15cm程離れた位置に設けられる。南西コーナーの柱穴に向けて、深さ4cmの溝が南壁周溝より延びている。柱穴は、対角線上に4本と南壁側に1本の5本が検出された。北側の2本は径20～30cm、深さ50cmのきれいな円形を呈するのに対し、南側の2本は径40cm、深さ50～70cmの楕円形プランを呈する。南側の5本目の柱穴は、28×40cmの主軸方向に長い楕円形を呈し、中央部に向けて深くなる。最も深いところで21cmを測る。北東コーナー部には、長軸60cm、短軸46cmの長方形プランを呈する貯蔵穴が掘り込まれる。住居跡の覆土はその状況より埋め戻された可能性が強い。カマドは北壁中央部に位置する。壁を30cm程掘り込んで煙道部を形成する。立ち上がりは比較的急である。燃烧部は周溝より内側に設けられ、床面より15cm程深く掘り込まれる。袖・天井部とも遺存は不良で、崩落した焼土塊が内部に見られる。

遺物はカマド周辺に集中するが、量は少なく、杯類が主体となる。25の杯はカマド左側の壁に寄り掛かるような状況で出土している。

013号住居跡（第8図、図版6）

F0区に位置し、北側1/3程が調査区域外にある。2軒の重複であり、土層状況等より外側の住居跡のほうが新しい。いずれも方形プランを呈すると思われ、内側は1辺3m程を測る。確認面からの掘り込みは、若干斜面上に位置するため西側で36cm、東側で26cmを測る。壁の立ち上がりはほぼ直角である。床面はハードローム中に形成され、比較的堅緻である。周溝は全周すると思われるが、内側・外側とも深さ2～5cmと浅い。ピットが、外側の住居跡の南壁中央部によった位置に1本検出された。長径34cm、短径20cmの楕円形プランを呈し、深さ26cmを測る。出入口に伴うピットであろうか。柱穴と思われるピットは調査区内では検出されなかった。

覆土は自然堆積の状況である。

遺物は、東壁に寄った調査区端部側の床面上に集中する傾向が見られる。甕を主体としているが、調査区域外に延びる可能性が強く、杯等は北側のカマド周辺に存在するのであろう。南東コーナー部にはほぼ完形の杯が1点正位で出土している。

015号住居跡（第9図、図版7）

F0区のほぼ中央に位置し、南側で016号住居跡と重複するが、016号住居跡の覆土中に貼り床が認められることから、本住居跡のほうが新しい所産であることは明らかである。平面形は方形を呈し、南北長4.2m、東西長4.5mを測る。カマドを通る主軸はN-12°-Eを指す。確認面からの掘り込みは20cmで、周溝はカマド部分を除き壁下に全周する。床面は、016号住居跡の覆土中に白色の砂質粘土を混ぜた貼り床を行なっているために全体に堅緻な状況である。床面積は14㎡を測る。柱穴は対角線上に4本検出された。径40cm程とほぼ同様の規模を有し、いずれもコーナーに向けてやや楕円形状を呈する。深さは40~45cmを測るが、南東側は56cmと深くなり、2段掘りされる。カマドは北壁中央に位置する。壁への掘り込みはきわめて小さく、壁の傾斜を煙道部としているようである。燃焼部は周溝の内側に設けられ、径45cmの円形を呈し、床面より6cmの深さである。袖及び天井部の遺存はあまり良くないが、ローム土を主体とした土を袖の基盤層としているようである。底面にはレンガ状に焼けた焼土と灰が厚く堆積している。

遺物の出土は比較的多く、完形あるいは完形に近い土器が多く遺存している。壁際、特に西側の柱穴と壁の間にほとんどの遺物が集中する。須恵器の杯蓋は南壁の直下に正位で置かれていた。38は南西柱穴、39は南東柱穴の外側に位置する。40の杯は南東柱穴と東壁の間に伏せられた状態である。50・51の同タイプの甕は南西コーナー部に2個体並んで正位で床面上に遺存している。カマド左袖外側の壁下に手捏ね土器、左袖前方に杯が正位で検出された。

016号住居跡（第9図、図版8）

F0区、013号住居跡の南西10m程に位置し、南西コーナー部が若干調査区域外となる。また、北側を015号住居跡、北東コーナーを558号土壌によって切られているが、床面まで及ぶものではなく、遺存は比較的良好である。平面形は正方形を呈し、規模は南北長4.9m、東西長4.7mを測る。カマドを通る主軸はN-12°-Wである。確認面からの掘り込みは25~30cmを測り、南壁がやや斜位に立ち上がる以外はほぼ垂直である。床面はハードローム中に形成され、平坦で堅緻である。床面積は18㎡を測る。周溝はカマド部分を除き全周するがきわめて浅い。柱穴は、支柱穴4本と第5柱穴の5本が検出された。いずれも径20cmと小規模であるが、支柱穴の深さは60cm前後を測る。柱穴の掘り方は特徴があり、南西コーナー以外の支柱穴は外側に傾斜する

状況が見られる。第5柱穴は、深さ20cmと他に比べて掘り込みが浅くなっている。覆土の状況より本住居跡は埋め戻された可能性が強い。カマドは北壁中央部に設けられるが、015号住居跡によりほとんど削平されており、わずかに燃焼部が遺存するにすぎない。

遺物はほぼ全面に散布しているが、量はそれほど多くない。床面中央部に高杯のミニチュア、南壁寄りに手捏ね土器が集中する。第5柱穴付近には滑石製の紡錘車の出土が見られた。南西側の柱穴付近には土製の勾玉が床面より1点出土している。以上のように、本住居跡では祭祀に関係するような遺物が多くみられる点特徴的である。

017号住居跡（第9図、図版8）

F0区、015号住居跡の東1.5m程に近接する。平面形は正方形を呈し、南北長4.9m、東西長4.8mを測る。カマドを通る主軸はN-8°-Eを示す。確認面からの深さは25cm平均である。床面は平坦で、カマド前面から支柱穴間にかけて良好に踏み固められている。周溝はカマド部分を除き全周するが、カマド右側から東壁にかけてやや幅広となる。支柱穴は対角線上に4本検出された。西側の2本は径22cmの円形を呈するのに対し、東側は東西方向に長い楕円形で一回り大きな掘り方となる。深さは50cm前後である。出入口に伴うピットは南壁中央の壁から80cm離れた位置に設けられる。46×40cmの主軸方向に長い楕円形を呈し、23cmの深さを測る。東壁に接して掘り込まれたピットは、深さ25cmで西側が一段深くなっている。性格は不明である。カマドは北壁のやや東側に位置し、袖のみが遺存する。煙道部は壁を方形状に小さく掘り込んで形成され、燃焼部の規模も小さくなっている。掘り方は幅1m程を測り、床面より22cmの深さである。底面にはロームブロックを主体とした土を厚さ10cmで貼りつけており、この段階で袖部の範囲を決めているようである。

遺物はそれほど多くないが、北東柱穴からカマドにかけて甕が集中してつぶれた状態で出土した。須恵器の杯蓋は南西柱穴付近、64の杯は南東コーナー付近で検出された。

018号住居跡（第9図、図版9）

F0区、013号住居跡の東3m程に位置し、東に小支谷を望む台地端部に構築される。遺存はきわめて不良で、南半分は道路により削平され、現存する床面の1/3程が攪乱されている。平面形は方形を呈すると思われ、規模は残存する北辺で4.8mを測る。カマドを通る主軸はN-84°-Eを指し、古墳時代の住居跡のなかでは唯一東西に主軸を有するものである。確認面からの掘り込みは、東側に向う緩い傾斜地にあるため西壁で28cm、東壁で5cmとなる。床面はハードローム上面にあり、比較的堅緻である。床面積は、残存する部分がほぼ半分と考えられることより、15m²程を測るであろう。周溝はカマド部分を含めて全周するものと思われる。柱穴は、北東コーナー部に1本検出された。径30cm、深さ46cmを測る。他の柱穴は後世の攪乱により削平

されている。北東隅には長径70cm、短径54cm、深さ33cmの楕円形プランを呈する貯蔵穴が1基設けられる。カマドは東壁中央部に位置するが、遺存は不良である。壁を若干掘り込んで煙道部を形成し、燃焼部は周溝に接続するように形成される。床面からの掘り込みは10cm程である。袖部は砂質粘土で構築され、ロームブロックを主体とした土を基盤としているようである。

遺物は、削平が激しいにもかかわらず多量に出土している。カマド左側には甕及び杯が、床面中央部には甕が集中して出土している。貯蔵穴内には杯と鉢が流れ込んだ状況で検出された。また、壺のミニチュアが北壁中央部に、手捏ね土器がカマド内に遺存している。

035号住居跡（第10図、図版15）

G1とG2区にまたがって検出された住居跡で、本遺跡の中では最大規模を有する。北側部分を溝、南端部を565号土壌によって切られている。平面形は正方形を呈し、規模は南北長6.8m、東西長6.7mを測る。カマドを通る主軸はN-6°-Wを指す。確認面からの掘り込みは、30~35cmを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面はハードローム中に形成され、しっかりと固められている。床面積は39.5m²を測る。周溝は北壁で部分的に途切れるが、他は壁に沿って掘削されている。幅20~30cm、深さ5~10cmで南東コーナー部分が若干深くなる。柱穴は、対角線上に4本検出された。径50cm程の円形プランを呈し、深さは60cm前後である。南東コーナーの柱穴には2段の掘り込みが見られ、全体に柱の掘り方が大きいことから、本住居の柱はすべて抜き取られた可能性が高い。貯蔵穴は確認されなかったが、北西コーナーの攪乱部分にあったかもしれない。住居跡の覆土はローム粒子を多く含む層で形成されており、人為的に埋め戻されたようである。カマドは北壁中央部に設けられ、天井部が崩落するものの遺存は比較的良好である。壁を半円状に掘り込み煙道部を形成する。燃焼部の掘り込みはほとんど無く、焚き口部が壁より80cm程離れた位置に径1.3m、深さ15cmで設けられる。袖は砂質粘土で構築されるが、基盤にロームブロックを突き固めた土を用いているようである。燃焼部内底面にはかなり焼けた焼土層が厚く堆積している。床面上には焼土及び炭化材が少量ながら遺存している。

遺物の量はそれほど多くないが、手捏ね土器及び杯を主体に特徴的な出土状況を示している。手捏ね土器は床面南東隅に集中し、カマド内には杯4個体が一括して検出された。

043号住居跡（第9図、図版16）

F1区南東端、044号住居跡の北西3m程に所在する。南側が溝により攪乱されるが、床面まで及んでいないため全体を確認することができた。平面形は長方形を呈し、南北長4.9m、東西長6.0mを測る。カマドをとる主軸はN-105°-Eを指す。確認面からの掘り込みは20cm前後を測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面はハードローム中に形成され、きわめて堅緻である。床面積は22.7m²を測る。周溝はカマド部分も含み、幅20cm、深さ5cm程で全周する。底面は平

坦である。径30cm、深さ15～30cmの小ピットが壁際に4本検出された。規模は小さいがその位置から柱穴となるものであろう。床面中央には直径90cm、深さ45cmの断面三角形状を呈するピットが掘り込まれる。南側に存在する2基の大形ピットは後世の土壙と思われる。カマドは東壁中央に位置する。袖の基底面が若干認められるのみであり、人為的に破壊された可能性が強い。周溝の掘削後燃焼部を掘り込み、周溝部分にはローム土を貼り付けている。煙道部は壁を半円状に掘り込んで形成し、燃焼部から急激に立ち上がった後テラスを有して壁外に延びている。燃焼部は径1m程の円形を呈し、床面から7cmの深さを測る。前面には焚き口が設けられる。基底部のみ遺存する袖は砂質粘土により構築されている。燃焼部底面には被熱したロームブロックが堆積し、その上に炭化物及び砂質粘土が認められる。

遺物の出土は少ない。内面に斜格子状暗文を施す112の杯は北壁直下の床面上、116の甗はほぼ床面中央に遺存する。また、113の杯はカマド内から検出されている。支脚は確認されなかった。

044号住居跡（第10図、図版17）

F2・G1・G2区にまたがって検出され、035号住居跡の西側2m程に近接する。北側が溝によって攪乱される。平面形は正方形を呈し、南北長5.0m、東西長4.9mの規模を測る。カマドを通る主軸はN-43°-Eを指す。確認面からの掘り込みは30cm前後で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面はハードローム中に掘り込まれ、平坦で堅緻である。床面積は17.9㎡を測る。周溝はカマド側を除き壁に沿ってコの字状に設けられる。南西壁中央部は周溝が途切れ、若干の高まりがみられる。また、第5柱穴に向って溝が延びており入り口施設の存在が想定される。柱穴は、対角線上にある4本の主柱穴とカマド対壁側の第5柱穴の5本で構成される。径25～45cm、深さ50cm前後を測る。第5柱穴は38cmとやや浅くなる。カマドは北東壁中央部に設けられるが、溝による攪乱のため掘り方が検出されたのみである。焚き口部は壁より1m程内側に掘り込まれる。

遺物は全体に散布するが、カマド右側に集中する傾向が見られる。手捏ね土器・鉢及び台石状の石製品は南西壁直下に検出された。杯はカマド右側の出土である。

057号住居跡（第11図、図版21）

F3区に所在し、西側1/3程が調査区域外となる。南側は058号住居跡と重複する。平面形は方形を呈すると考えられ、規模は調査区内で確認された東辺で3.6mを測る。カマドを通る主軸はN-25°-Eを指す。確認面からの掘り込みは25cm程と浅く、壁はやや斜位に立ち上がる。床面はハードローム中に形成され、平坦で堅緻である。周溝は、カマド部分を除き深さ5～10cmで全周し、コーナー部分が若干深く掘り込まれるようである。柱穴は、対角線上に4本と南壁

の周溝内に1本の5本が検出された。いずれも径30cmの円形を呈し、深さ37cmを測る。カマドは北壁中央部に位置する。煙道部の壁への掘り込みはほとんどなく、壁の傾斜を利用しているような状況である。燃烧部は略円形を呈し、床面より12cm程掘り込まれる。袖の遺存は不良であるが、ロームブロック及び黒色土を突き固めて基盤としているようである。

遺物の出土はあまり多くないが、カマド右側及び南東コーナー部に集中している。カマド燃烧部内より鉢が検出された。

059号住居跡（第11図、図版21）

E3区南東端に所在し、西側半分程が調査区域外となる。南側で060号住居跡と重複するが、本住居跡の覆土中に貼り床が施されていることから本住居跡の方が古い所産であることは明確である。平面形は不正な方形を呈すると思われ、規模は確認された東壁で南北長4.7mを測る。カマドは検出されなかったが、後述するように北側に存在が想定されることから、主軸方向はN-12°-Eとなろう。確認面からの深さは30~40cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面はハードローム中に形成され、中央部が特に堅緻である。周溝はカマド部分を除き全周するものと思われる。幅10cm、深さ10cmと全体に深くなる。柱穴は西側に2本検出された。径20cm程の円形を呈し、深さ50cm前後を測る。住居の覆土全体にローム粒及びロームブロックが多く含まれていることから、本住居跡は人為的に埋め戻された可能性が強い。カマドは検出されなかったが、北壁の調査区域外との接点部分に焼土がまとまって検出されていることから、ほぼ北壁中央に存在することが予想される。周溝がこの部分で途切れることもその証左であろう。

遺物は比較的多く出土したが、カマド付近に集中する傾向が見られる。123と126底部に木葉痕を有する杯は南東コーナー付近の遺存である。

062号住居跡（第11図、図版22）

E4区に所在する。平面形は横長の長方形を呈し、規模は南北長3.8m、東西長4.1mを測る。カマドを通る主軸はN-20°-Eを指す。確認面からの掘り込みは、東側に緩く傾斜する位置に構築されるため、西側で20cm、東側で27cm前後を測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面はハードローム中に形成され、カマド側に向かってやや下り勾配となるものの良好に固められている。周溝はカマド部分を除いて全周するが、深さ3cm程と浅い。柱穴は、対角線上に4本と出入口に伴う1本が検出された。主柱穴は径25~50cmとバラツキがあり、掘り方が上方で広がっていることより抜き取られた可能性が強い。深さは40~50cmを測る。出入口の柱穴は、33×26cmの主軸方向に長い楕円形を呈し、深さ12cmを測る。カマドは北壁中央部に設けられる。壁を三角形に掘り込んで煙道部を形成し、燃烧部より階段状に立ち上がる。焚き口の掘り込みは15cm程である。袖・天井部とも遺存は不良であるが、袖部はローム土主体の基部に砂質粘土を積み

上げている。

遺物の出土は少ないが、北東コーナー側に甑、カマド内煙道部に支脚が検出された。

101号住居跡（第11図、図版25）

G2・G3にまたがって所在し、北から延びる小支谷の谷頭に位置する。東側半分が道路により削平され、西側の一部はP21土壌と重複する。平面形は方形を呈すると思われ、規模は確認された西辺で5.2mを測る。確認面からの深さは35cmを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面はハードローム中に形成され、比較的堅緻である。周溝は確認された部分では全周する。幅15cm、深さ8cmを測る。柱穴は北西隅に2本検出されたが、内側のものが主柱穴となろう。径50cm、深さ46cmである。削平された東側部分にも主柱穴の痕跡が確認されたが、南西コーナーの柱穴はP21によって消失している。カマドは削平されているが、北側にロームが焼土化している部分が若干認められており、カマドの存在が想定される。

遺物は杯を主体に検出された。北西コーナーと南壁側に集中する傾向が見られる。

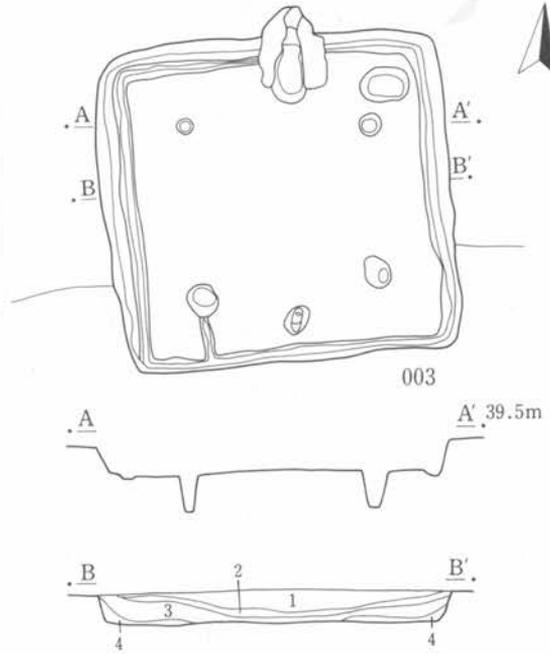
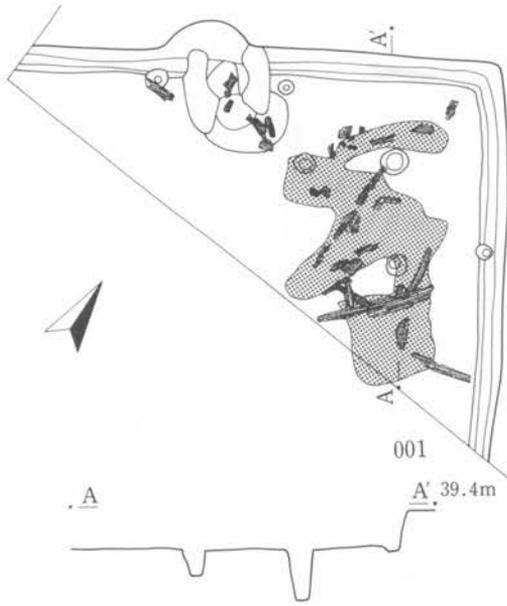
128号住居跡（第12図、図版31）

D7・D8区にかけて所在し、9号溝により東側半分が削平される。平面形は方形を呈し、規模は確認された西辺で4.1mを測る。カマドを通る主軸はN-6°-Eを指す。確認面からの掘り込みは25~30cmで、壁はやや斜位に立ち上がる。床面はハードローム中に形成され、平坦で堅緻である。周溝はカマド部分を除き全周するものと思われる。幅30cmと比較的広いが、掘り込みはきわめて浅い。柱穴は現存する床面で2本検出された。北側の柱穴は1辺70cmの方形プランを呈し、南側は70×50cmの楕円形となる。深さはいずれも50cmを測る。掘り方がきわめて不整形となることより、柱が抜き取られたものと考えられる。カマドは北壁中央部に設けられるが、遺存は不良である。壁を方形に掘り込んで煙道部を形成し、燃焼部は比較的小さい。燃焼部内には焼土が厚く堆積する。

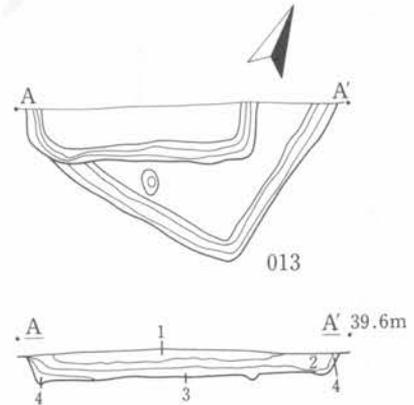
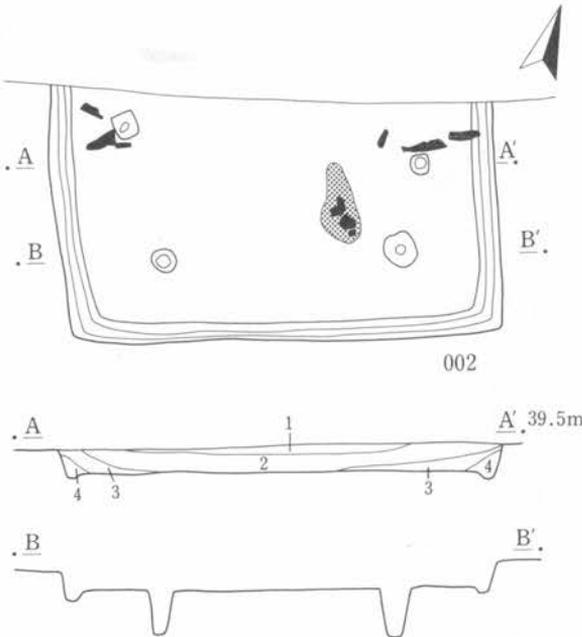
遺物の出土は少ないが、カマド燃焼部内に完形の杯が1点出土した。

129号住居跡（第12図）

E7区の調査区東端に位置し、北西コーナー部分を検出したにすぎない。平面形は方形を呈すると思われるが、規模等の詳細は不明である。



- 1層 褐色土(ローム粒多く含む)
- 2層 黒褐色土(ロームブロック少し含む)
- 3層 黄褐色土(ロームブロック少し含む)
- 4層 黄褐色土(ロームブロック多く含む)

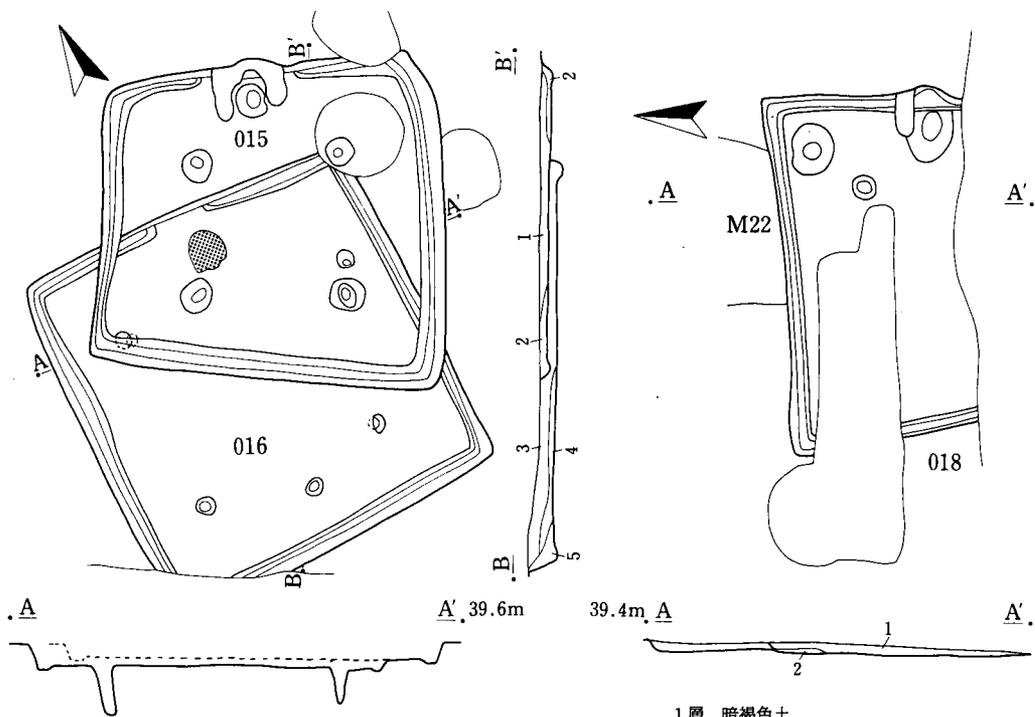


- 1層 暗褐色土
- 2層 黒褐色土
- 3層 黒褐色土(ロームブロック少し含む)
- 4層 黄褐色土(ロームブロック多く含む)

- 1層 暗褐色土
- 2層 暗褐色土(ローム粒多く含む)
- 3層 褐色土(ローム粒・ロームブロック多く含む)
- 4層 黒褐色土(ロームブロック多く含む)

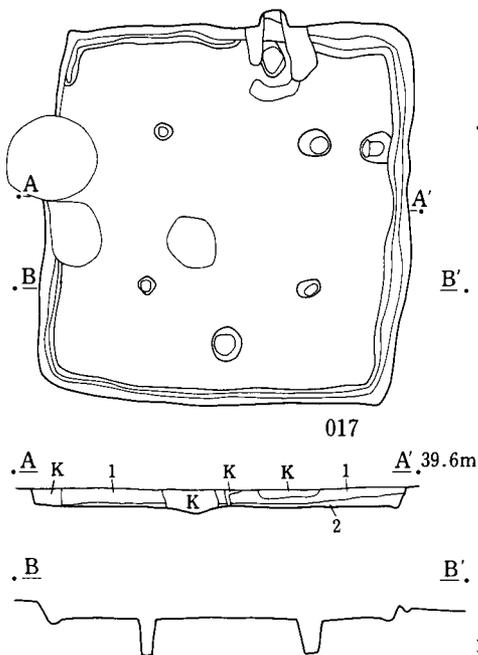


第8図 001~003・013号住居跡

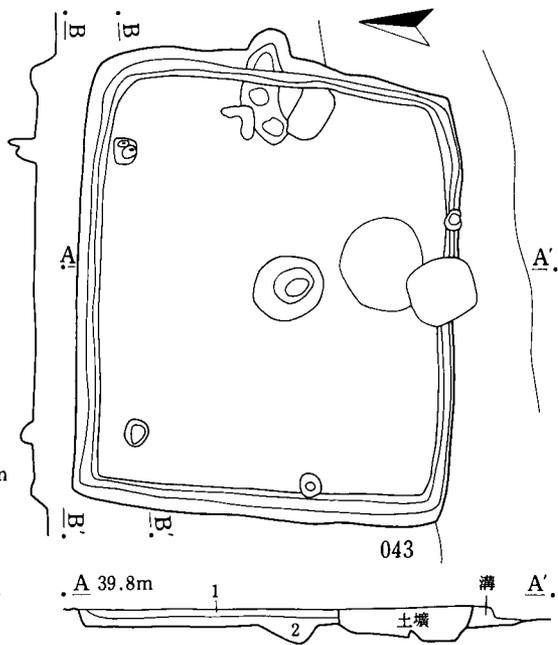


- 1層 暗褐色土
- 2層 黒褐色土
- 3層 暗褐色土(ロームブロック含む)
- 4層 暗褐色土(ロームブロック・炭化粒少し含む)
- 5層 黄褐色土(ロームブロック多く含む)

- 1層 暗褐色土
- 2層 黄褐色土(ロームブロック含む)



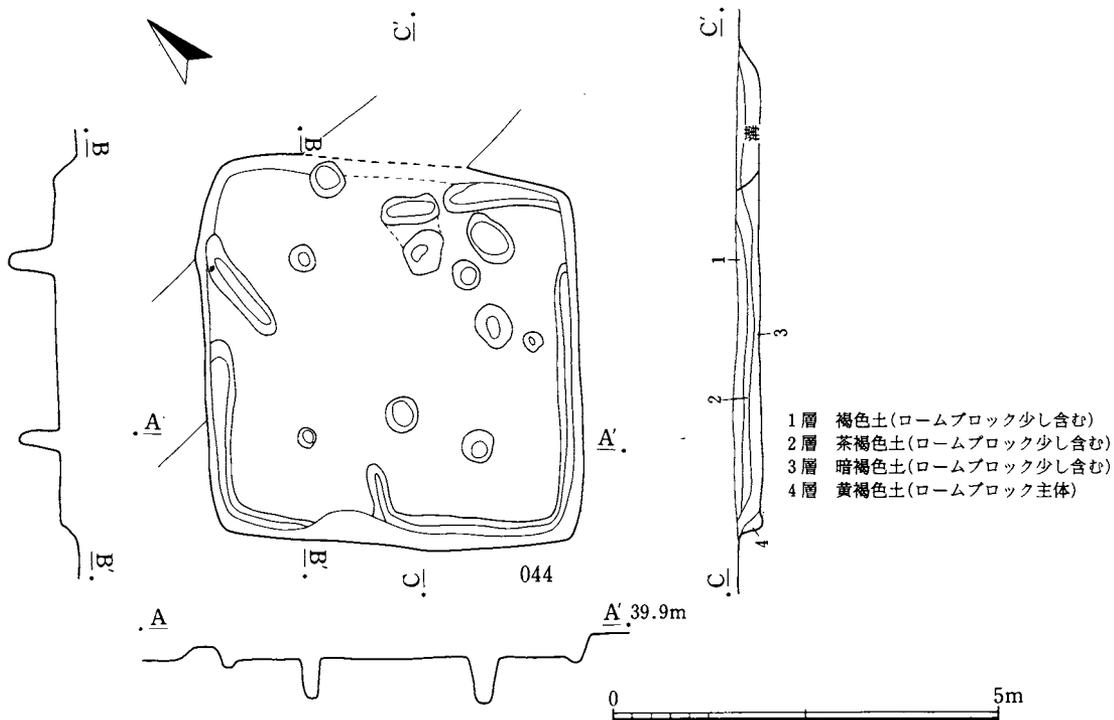
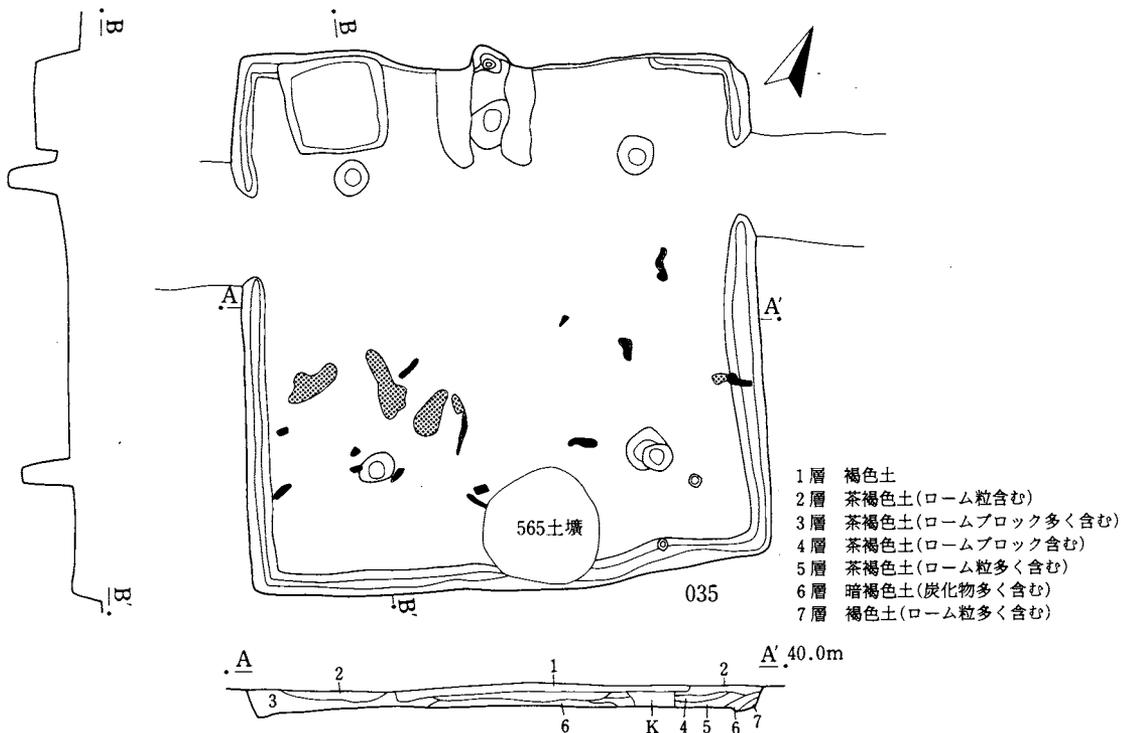
- 1層 暗褐色土(炭化粒・焼土粒含む)
- 2層 黄褐色土(ローム粒多く含む)



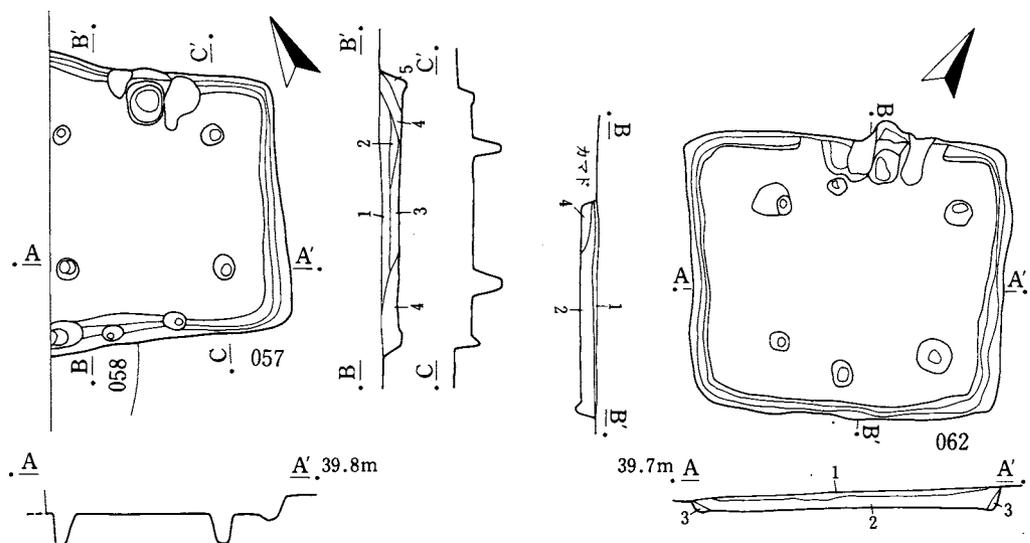
- 1層 褐色土(ローム粒・焼土粒・炭化粒少し含む)
- 2層 暗褐色土



第9図 015~018・043号住居跡

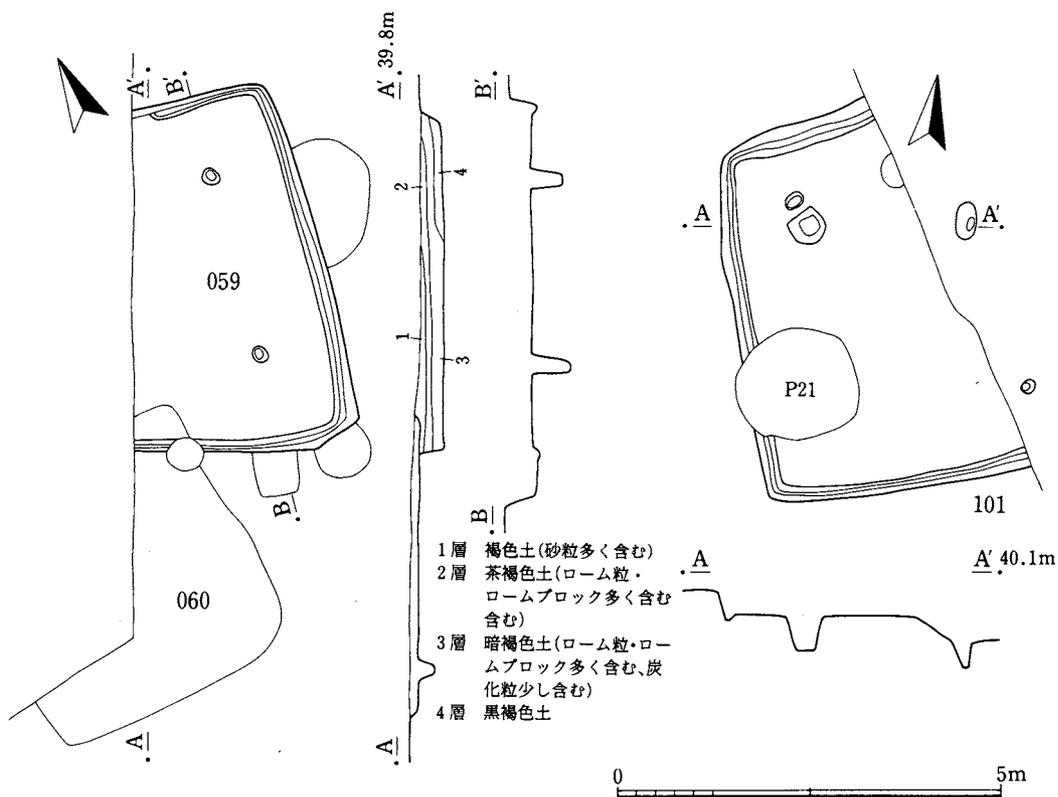


第10図 035・044号住居跡



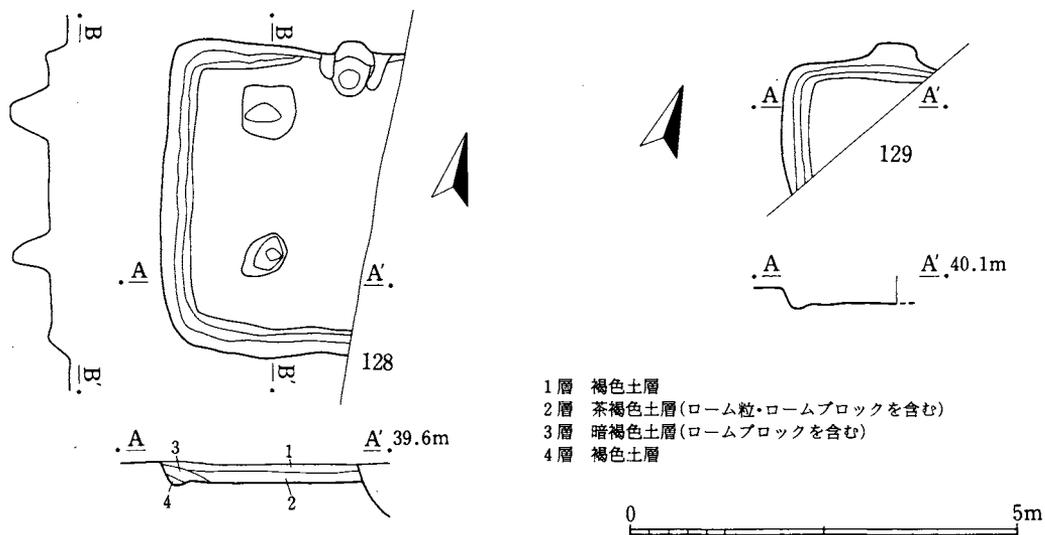
- 1層 茶褐色土(ロームブロック少し含む)
- 2層 明褐色土(ロームブロック主体)
- 3層 茶褐色土(ローム粒少し含む)
- 4層 明褐色土(ローム粒・ロームブロック多く含む)
- 5層 暗褐色土(ローム粒少し含む)

- 1層 褐色土(ローム粒・焼土粒少し含む)
- 2層 茶褐色土(ロームブロック・焼土粒・炭化物少し含む)
- 3層 明褐色土(ローム粒多く含む)
- 4層 茶褐色土(ローム粒・炭化物少し含む、焼土粒多く含む)



- 1層 褐色土(砂粒多く含む)
- 2層 茶褐色土(ローム粒・ロームブロック多く含む)
- 3層 暗褐色土(ローム粒・ロームブロック多く含む、炭化粒少し含む)
- 4層 黒褐色土

第11図 057・059・062・101号住居跡



第12図 128・129号住居跡

住居跡出土土器

001号住居跡 (第13図1~18、図版40)

1~7は土師器の杯である。1~3は口縁部が内傾するタイプで、3はやや内湾気味に内傾する。1・3の口縁部下端の稜は外側にやや突出する。調整は同様で、体部外面がヘラケズリ、体部内面及び口縁部内外面には横位のミガキが施される。1の底部内面には「十」の線刻(焼成後)が部分ながらみられる。色調は黒色に近いが、内黒処理を施したものではない。2はほぼ完形で、口径12.0cm、器高4.4cmを測る。4・5は鋭い稜を有して口縁部が直立する。調整は同様であるが、5の口縁部内外面は横ナデのままである。6は稜が弱く、短い口縁部が直立する。体部外面ヘラケズリ、他はミガキ調整が施され、赤褐色の色調を呈する。8は高杯の脚部片である。外面はヘラケズリ後縦位の丁寧なミガキが施される。上端の杯部との接合面中央にはヘラによる切込みが縦横にみられる。接合をより強固にするための所作であろう。赤彩は認められないが、赤褐色の色調を呈する。9は須恵器の器台の脚部片であろうか。小破片のため明瞭ではないが、拓影の左端には長方形透かしの一辺が残っている。器表面に櫛描波状文が施される。胎土は緻密で、色調は暗灰色を呈する。10~12は甕である。10は完形に近いが、底部が遺存しておらず、意図的に打ち欠いた可能性が強い。胴部外面は縦位の幅広のヘラケズリ、他は横ナデが施される。胴部外面にはススの付着が認められる。胎土中に長石・石英を多く含み、燈褐色の色調を呈する。13・14は小形の甕である。13は口径15.6cm、器高14.0cmを測る。口縁部横ナデ後胴部外面にヘラケズリを施す。胴部下半は被熱による器壁の剝落が顕著で、上半はススによる黒変が認められる。14の器外面の剝落も著しい。15は土師器の鉢である。ほぼ

完形で、口径10.0cm、器高7.6cmを測る。口縁部内外面横ナデ、胴部外面ヘラケズリ、内面指ナデ調整される。16～18は手捏ね土器である。16は完形で、口径7.6cm、器高5.2cmを測る。内外面とも指ナデが施され、底部には粗いナデが加えられる。17・18の底部には木葉痕が残る。17の体部内面のナデは丁寧である。

002号住居跡（第13図19～24、図版40）

19～22は土師器の杯である。19は口径14.0cm、器高4.8cmを測り、内面黒色処理される。口縁部は中央がやや肥厚して若干外傾する。口縁部下端の稜は明瞭である。口縁部内外面及び体部内面はミガキが、体部外面はヘラケズリ後ナデが施される。20～22は短い口縁部がやや外傾するタイプである。20は完形で、口径15.2cm、器高4.4cmを測る。調整は同様で、体部外面ヘラケズリ後粗いナデ、内面ミガキとなる。22の口縁部はミガキが加えられ、体部内面のミガキは粗い格子状を呈する。21は小片であるが、器高3.6cmと浅い。23は甕の底部片である。ヘラケズリの幅が広い。24は完形の手捏ね土器である。内外面とも指頭によるオサエの痕跡が顕著である。底部はナデ調整される。

003号住居跡（第14図25～32、図版40）

25～28は土師器の杯である。25は完形で、口径15.6cm、器高5.0cmを測る。口縁部は直立し、稜は比較的明瞭である。体部外面はヘラケズリ後弱いミガキ、内面は横位のミガキ、底部内面は直線のミガキが施される。胎土中に雲母・長石等の砂粒を多く含み、赤褐色の色調を呈する。内外面ともにススが部分的に付着する。26はS字状を呈する口縁部を有する。全体に薄手で、比較的丁寧な整形である。内外面ともミガキ調整が加えられる。27は短い口縁部が弱い稜を有して立ち上がる。口唇部はやや内そぎ気味となり、内外面とも丁寧にミガキ調整が施される。28は短い口縁部が内屈し、全体に部厚い造りである。体部内面のミガキは幅2～3mmできわめて丁寧に施され、体部外面はミガキ様の長いヘラケズリとなる。内面黒褐色、外面燈褐色を呈する。29は高杯の杯部片である。内面は黒色処理され、外面には赤彩が施される。内面のミガキは、上半が横位、下半が弧状となる。30は小片であるが、口径20.8cmを測る大形の椀となろう。体部内面から口縁部外面にかけて丁寧なミガキが施され、体部外面はヘラケズリの後弱いミガキが加えられる。31・32は甕で、口縁部がくの字状に外反する。いずれも長石・石英等の小砂粒を多く含む。

013号住居跡（第14図33～37、図版41）

33は素口縁の半球形を呈する土師器杯である。ほぼ完形で、口径12.1cm、器高3.9cmを測る。体部内面から口縁部にかけて丁寧なナデ、体部外面は斜位のヘラケズリが施される。ヘラケズ

りは口縁部外面の横ナデの後に行なわれており、ヘラケズリの上端部の稜により、口縁部と体部の境を意識しているようである。器肉はかなり薄く、胎土中に雲母・長石粒を多く含むが、緻密である。色調は黄褐色を呈する。34～37は甕で、口縁部の形態が2タイプみられる。35は口唇部を上方につまみ上げるように成形し、胴部は球形に近い。34・36・37は口唇部を外側に屈曲させるために、コの字状を呈する。胴部はやや長胴になる。調整は同様で、口縁部横ナデ、胴部内面丁寧なナデ、胴部外面ヘラケズリが施される。36の口縁部内面には粘土の接合痕が1条明瞭に観察される。胎土も同様で、長石・酸化鉄粒を多く含み、色調はいずれも黄褐色を呈する。

015号住居跡（第15図38～52、図版41）

38・39はハの字状に口縁部が開く須恵器の杯で、ほぼ完形である。38は口径16.6cm、器高5.0cmを測る。底部と体部の境は丸味を有する。体部の横ナデは左回転で体部下端から底部全面に回転ヘラケズリを施す。胎土中に長石の大粒子を多く含み、焼成は良好で暗青灰色の色調を呈する。39はやや小形になり、口径14.8cm、器高4.2cmとなる。底部と体部の境が明瞭で、底部は比較的平坦になる。体部は直線的に外反する。底部には回転ヘラケズリが施される。胎土・色調とも38とはまったく異なる。胎土は長石粒とともに金雲母を多く含み、やや軟質となる。色調は淡灰色を呈する。40～46は土師器の杯である。40は丸底状で、口縁部が僅かに直立する。体部外面は斜位のヘラケズリ、内面は丁寧なナデの後放射状に粗いミガキが施される。黄褐色の色調を呈する。41・42は平底状となり、口縁部が若干内傾する。調整は同様で、体部内面から口縁部は横ナデ、体部外面はヘラケズリとなる。42の底部には木葉痕が認められる。43は1/2程の遺存であるが、口径14.0cm、器高3.0cmを測る扁平な形態を示す。口縁部が若干内湾する。体部内面は丁寧なナデが加えられ、外面はヘラケズリが施される。底部は一方方向の直線的なケズリで調整される。胎土中に石英・雲母粒を多く含む。44は素口縁の半球状を呈する。調整は41と同様である。かなり薄手で、色調は黄褐色を呈する。46は完形で、特異な形態を示す。口径16.6cm、器高4.1cmを測り、口唇部は若干外側につまみ出され、端部は平坦となる。体部内面は丁寧な横ナデ、外面はヘラケズリ後横位のミガキが加えられる。胎土はきわめて緻密で、長石・雲母の微粒子を含む。色調は赤褐色である。47は器高8.8cmを測る深い碗である。口縁部は僅かに外反し、底部は丸底となる。体部内面には不定方向の粗いミガキが施され、黒色処理が加えられる。胎土中には長石・石英・赤色粒子を多く含む。48は手握ね土器で、口縁部と体部以下を別々に成形してつなぎ合わせた状況が明瞭に観察される。口縁部内面は指によるナデツケが強いため器面が凹み、底部側に粘土がはみ出している。底部のナデは比較的丁寧である。49～52は甕である。50・51は形態・法量等全く同様で、口径17.5cm、器高17.0cm、底径7.8cmを測る。口縁部は緩く外反し、底部中央の器厚はかなり薄くなる。胴部外面は縦位のヘラケズリ

の後弱いミガキが加えられる。いずれにもヘラケズリの際の「カンナ飛び」状の痕跡が明瞭にみられることは興味深い。51の胴部上半には、粘土紐の輪積痕が6条程残っている。50の胴部外面にはカマドの砂質粘土及び煤の付着が観察される。

016号住居跡（第15図53～62、図版41・42）

53～56は土師器の杯である。53・54は明瞭な稜を有し、口縁部がやや外傾する。53はほぼ完形で、口径14.4cm、器高4.2cmを測る。体部内面から口縁部は横位のミガキが施され、体部外面はヘラケズリ後弱いナデが加えられる。底部外面中央には焼成前に「◎」のヘラ記号が刻まれている。54は内外面とも黒色処理される。ミガキは丁寧で、体部外面はヘラケズリ後縦位のミガキが加えられる。器表面には輪積痕が1条巡る。55は短い口縁部が僅かに内傾する。内面のミガキは口縁部が横位、体部が四分割の弧状となる。底部は焼成後穿孔され、孔の周囲に研磨が施される。57は小形の甕である。口唇部が外側につまみ出され、口縁部には下方向への粗いミガキが加えられる。胴部外面はヘラケズリ後弱いナデが施される。胎土中に長石・石英・赤色粒子を多く含む。58は鉢のミニチュアであろう。体部内面から口縁部は丁寧な横ナデが施され、口縁部外面のナデが強いため体部との境には明瞭な稜が形成される。底部には木葉痕が観察され、一部体部下端にまで伸びている。体部下半の器表面に輪積痕が残る。59～61は手捏ね土器である。59は輪積痕が明瞭に残る。内面にはミガキが加えられ、底部には木葉痕が残る。60・61は全体に歪みが激しい。調整は、60が指ナデ、61がヘラケズリとなる。長石・石英粒を多く含み、燈褐色を呈する。62は高杯のミニチュアであろうか。裾径6.2cmを測り、歪みが激しい。裾底面には木葉痕の痕跡が認められる。

017号住居跡（第16図63～67、図版42）

63は須恵器の蓋で、口径11.8cm程を測る。つまみ及びカエリを欠損するが、破損状況から意図的な行為が窺われ、しかも内面が丁寧に磨られていることから他の用途に使用しようとしたものかもしれない。天井部には回転ヘラケズリが加えられ、自然釉が部分的に付着する。胎土はかなり緻密で、灰白色を呈する。湖西産と思われる。64は器高4.0cmを測る丸底の杯である。体部内面から口縁部は横位のミガキが施され、内面にはさらに放射状の暗文が加えられる。体部外面のヘラケズリは幅が広い。胎土は緻密で、長石粒を僅かに含み、色調は黄褐色を呈する。65は口径17.0cm、器高6.5cmを測る大形の杯である。口縁部は外反気味に直立し、底部は厚く丸底となる。体部内面から口縁部は丁寧なナデが施され、内面には斜格子状の整った暗文が加えられる。体部外面は底部を中心として二次的な被熱による器壁の剥落が顕著である。長石の細粒子を多く含み、黒褐色を呈する。66は胴部が直線的で、口唇部が外反する無頸の甕である。全体にバケツ形を呈する。ほぼ完形で、口径21.6cm、器高19.9cmを測る。口縁部横ナデ、胴部

外面ヘラケズリ後弱いナデが加えられる。胴部内面はヘラケズリ後粗いミガキが施される。胎土中に石英粒を含み、色調は内面赤褐色、外面黄褐色となる。67は口縁部が緩く外反する甕である。口縁部及び胴部下半から底部の器肉が厚くなる。外面全体に煤、下半には砂質粘土が付着する。

018号住居跡（第16・17図68～93、図版42～43）

68～80は杯である。68・69は器高の深い丸底を呈する。69はほぼ完形で、口径14.7cm、器高4.7cmを測る。全体に器肉が薄く、口縁下に輪積み痕が1条残る。内面は丁寧な横ナデが施され、外面は68がヘラケズリ後ナデ、69がヘラケズリのままである。胎土中に長石・石英粒を多く含み、体部外面には焼成時の黒斑が認められる。70・71は器高が4.0cm前後とやや浅くなり、底部が平底状を呈する。胎土は68・69と同様で、色調は暗褐色である。71の口縁部には輪積痕が部分的に残り、底部外面には断面三角形を呈する直線状の研磨痕が1条観察される。72～75は弱い稜を有して短い口縁部が立ち上がるタイプで、全体に厚手の造りである。調整は全く同様に、体部内面から口縁部は丁寧な横位のミガキ、体部外面は細かいヘラケズリ後粗いミガキが加えられる。すべて内面黒色処理される。胎土は緻密で、砂粒の混入は少ない。74以外は完形で、法量は口径13.6～14.0cm、器高4.2～4.5cmを測る。76は小片であるが、推定口径16cmを測る大形の杯である。口縁部はほぼ直立し、口唇部が尖る。口縁下の稜はやや突出する。体部内面から口縁部には横位の丁寧なミガキが施され、内面黒色処理される。体部外面はヘラケズリである。77も小片であるが、かなり厚手の造りである。内外面とも丁寧なミガキが加えられ、黒色処理が施される。78・79は口縁部が内傾するタイプで、口縁下の稜は明瞭である。79はほぼ完形で、口径14.6cm、器高4.1cmを測る。体部内面から口縁部は横位のミガキ、体部外面はヘラケズリ後弱いミガキが加えられる。内面には体部を8分割する焼成前のミガキが観察される。80は推定口径9.4cm、器高4.6cmを測る深い杯である。口縁部は外湾気味に大きく内傾し、体部とは別に成形され接合されているようである。体部内面から口縁部は横ナデ、体部外面はヘラケズリが施されるが、ヘラケズリが深いため器表面にはやや凹凸が残る。燈褐色を呈する。81・82は高杯で、直接接合しないが同一個体の可能性が高い。杯部は明瞭な稜を有して口縁部が外傾する。内外面とも横位のミガキが施され、赤彩される。口径17.1cmを測る。脚部は裾が大きく開く形態で、薄手である。外面には赤彩が施され、裾内側にはカマド部材の砂質粘土が部分的に付着する。裾径15.8cmを測る。83は壺のミニチュア土器で、口縁部を欠く。全体にナデ調整され、焼成は良好である。84は歪みの激しい鉢である。口縁部は横ナデ、体部外面から底部はかなり強いヘラケズリが施されるため、器表面に凹凸が残る。口縁下に輪積痕が1条巡る。85は比較的整った手捏ね土器である。体部外面から底部のナデは丁寧である。内面には指頭によるオサエが花卉状にみられる。86は推定口径18cm、器高33.5cmを測る常総型の甕で、最大径

を胴部中央に置く。胴部内面から胴部外面上半には丁寧なナデ、胴部外面下半には細かいミガキが加えられる。底部はナデ調整される。胎土中に長石・石英・雲母粒を多く含み、色調は黄褐色を呈する。87～90は小形の甕である。87はほぼ完形で、口径13.3cm、器高16.2cmを測る。胴部は球形を呈し、口唇部が大きく外反する。口縁部横ナデ、胴部外面ヘラケズリ後ナデが加えられる。外面には二次的に被熱した痕跡が窺える。91・92は甕の口縁部である。91の口縁部及び胴部内面には輪積痕が残る。92は推定口径22.7cmを測る大形の甕で、胎土中に長石・石英の大粒子を多く含む。93は丁寧な造りの甕であろう。口縁部横ナデ、胴部内面丁寧なナデ、外面ヘラケズリ調整である。石英・雲母粒を多く含む。

0 3 5号住居跡（第18図94～101、図版44）

94～96は土師器の杯である。94はほぼ完形で、口径11.9cm、器高4.8cmを測る。口縁部は明瞭な稜を有して直線状に内傾する。調整は同様で、体部内面から口縁部は横位のミガキ、体部外面は粗いヘラケズリが施される。95・96は二次的な被熱により器面が荒れている。97～100は手捏ね土器で、底部外面にはいずれも木葉痕が観察される。胎土中に長石・雲母粒を多く含む。101は高杯の脚部片である。杯部はミガキが施され、内面黒色処理される。脚部外面は丁寧なヘラケズリ調整で、赤彩が認められる。

0 4 3号住居跡（第19図112～116、図版45）

112・113は杯である。112は口径15.6cm、器高5.0cmを測る。底部と体部の境は不明瞭で、やや平底気味となる。口縁部内側が沈線状に凹むため口唇部が内傾するような感を受ける。器肉が厚い点特徴的である。体部外面はヘラケズリ後丁寧なナデが加えられ、内面は斜格子状の整った暗文が施される。胎土は緻密で、砂粒の混入は少ない。113の体部外面には口唇部まで及ぶヘラケズリの後にナデが加えられる。内面は弱いミガキがみられる。114・115は甕の口縁部片である。116は長胴の土師器甕である。口径20.7cm、器高28.8cmを測る。口縁部は短く外反し、横ナデ調整される。胴部外面は上半に縦位、下半に横位のヘラケズリが施される。内面下端は面取り状のヘラケズリ、以上はヘラナデが加えられる。

0 4 4号住居跡（第18図102～111、図版44・45）

102は口径13.2cm、器高4.9cmを測る杯で、突出する稜を有して口縁部が内傾する。口縁部から体部内面上半は横位のミガキ、下半は縦位の直線状ミガキとなる。体部外面はヘラケズリが加えられる。胎土は緻密で、長石・石英粒を多く含む。103はヘラケズリにより底部を平底状に整形する。内面は丁寧にナデ調整されるが、一次調整のヘラの当たりが部分的に観察される。体部外面のヘラケズリは口縁部の横ナデ後施される。砂粒の混入は少ない。104は完形の手捏ね

土器で、整形は比較的丁寧である。底部には木葉痕が残る。105は口径24.4cm、器高12.8cmを測る大形の鉢で、体部外面に輪積痕が部分的に残存する。内面は上段に横位、下段に斜位の粗いミガキが施され、体部外面から底部はヘラケズリの後弱いミガキが加えられる。106～109は小形の甕である。口縁部の形態はそれぞれ異なるが、調整は同様に、口縁部横ナデ、胴部内面ヘラナデ、外面縦位のヘラケズリとなる。110は完形に近い甕で、口縁部がコの字状を呈する。最大径を胴部上半に持つ。胴部外面はヘラケズリで、下半のみに粗いミガキが加えられる。内面はヘラナデで、ヘラの当たりが部分的に観察される。111は常総型の甕である。口唇部が外側に引き出され、三角形状を呈する。内外面ともナデ調整で、胴部外面下半には粗いミガキが加えられる。石英・雲母粒を多く含み、黄褐色を呈する。

057号住居跡（第19図117～121、図版45）

117は1/2程の遺存であるが、口径14.0cm、器高3.9cmを測る。口縁部は直立し、口縁部から体部内面は横ナデ、外面はヘラケズリが施される。内面下半に弱いミガキが加えられる。底面はかなり厚い。118は口縁部が外反する杯の小片である。119は器高6.9cmを測る深い碗である。口縁部は比較的明瞭な稜を有して短く立ち上がり、口唇部がやや肥厚する。口縁部から体部内面のナデは丁寧で、内面下端には横位のミガキがみられる。色調は淡褐色を呈する。120は平底状を呈する鉢である。内面はヘラナデの後下半を中心に斜位のミガキが加えられる。外面はヘラケズリされるが、輪積痕が部分的に観察される。胎土中に石英・雲母粒を含む。121は厚手の小形甕で、短い口縁部がやや外傾する。内面はミガキ様の丁寧なナデで、外面はヘラケズリ後ナデが施される。底部には直線状の研磨痕が数条認められる。

059号住居跡（第19図122～128、図版46）

122は須恵器の高台付杯である。口径14.1cm、器高4.7cmを測る。体部は丸味を有し、なだらかに底部に移行する。底部は器肉が厚く、接地面は高台底面と同一レベルである。丁寧な右回転ヘラケズリ調整が施される。高台は断面方形に近く、短くやや外側に踏張る。砂粒の混入が少ないが比較的軟質な胎土である。焼成は良好で、色調は暗灰色を呈する。123～126は土師器の杯である。123・124は器高4.5cm程の丸底状を呈する。調整は、内面横ナデ、外面ヘラケズリである。124の体部外面には弱いナデが加えられ、123の底部にはヘラケズリで消された木葉痕が部分的に観察される。125・126は器高5.8～5.4cmと深く、体部外面に輪積痕が残存する。底部は小さい平底となり、126は木葉痕をヘラケズリで調整している。調整は125が口縁部横ナデ、体部内面丁寧なナデ、外面ヘラケズリ、126が内面ミガキ、外面上段ヘラケズリ後指ナデ、下端ヘラケズリとなる。胎土中に長石・石英粒を多く含む。127は口径13.8cm、器高17.7cmを測る小形の甕である。口唇部がやや外反し、底部は突出するため不安定である。底部内面は立ち上が

り部を指頭によりオサエているために中央が高くなる。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面ヘラケズリ調整である。128は完形の甕で、口径20.1cm、器高20.1cmを測る。口縁部は短く外反し、最大径を胴部上半に持つ。胴部内面はヘラナデで、下端にヘラケズリがみられる。中段には粗いミガキが部分的に観察される。胎土中に長石・石英・雲母粒を含み、黄褐色を呈する。

062号住居跡（第20図129、図版46）

本住居跡出土の土器は少なく、図示できたのは129の土師器甕1点のみである。底径9.2cmを測り、胴部の器肉がかなり厚い。外面はヘラケズリ後上半に粗いミガキが加えられる。内面はミガキが施され、下端には面取り状のヘラケズリが残る。赤褐色で、光沢がある。

101号住居跡（第20図130～135、図版46）

130～134は杯である。130・131は器高が5.0cmと深く、口縁部が直立かやや外傾する。調整は同様に、口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラケズリ、口縁部内面横位ミガキ、体部内面弧状のミガキとなる。いずれも内面黒色処理される。132は器高4.2cmと浅くなる。明瞭な稜を持って口縁部がほぼ直立する。体部内面から口縁部は横位のミガキ、体部外面はヘラケズリ後弱いミガキが加えられる。体部内面下半には炭素吸着による黒色処理がなされるが、内面全体には及ばない。炭素が二次的に消失したというよりも炭素吸着の方法による結果であろう。133は小片で、口縁部が大きく開く形態となろう。内外面ともナデが施されるが、体部外面は器面が荒れているため詳細な調整は不明である。132と同様体部下半に黒色処理がなされる。胎土は粗く、長石・雲母粒を多く含む。134は完形の杯で、口径11.1cm、器高5.1cmを測る。底部は小さな平底に近くなり、口縁部は短く内傾する。体部内面から口縁部は横ナデ、体部外面はヘラケズリ後弱いナデが加えられる。器表面には輪積痕が部分的に残存し、ヘラケズリの押しが強いためか粘土の割れが上半部に多くみられる。長石・石英・雲母粒を多く含む。135は推定口径25.6cmを測る大形の高杯の杯部片である。外面赤彩、内面黒色処理される。口縁部外面横ナデ、体部外面は不定方向のヘラケズリが施される。内面は横位のミガキである。長石・石英・雲母粒を多く含む。

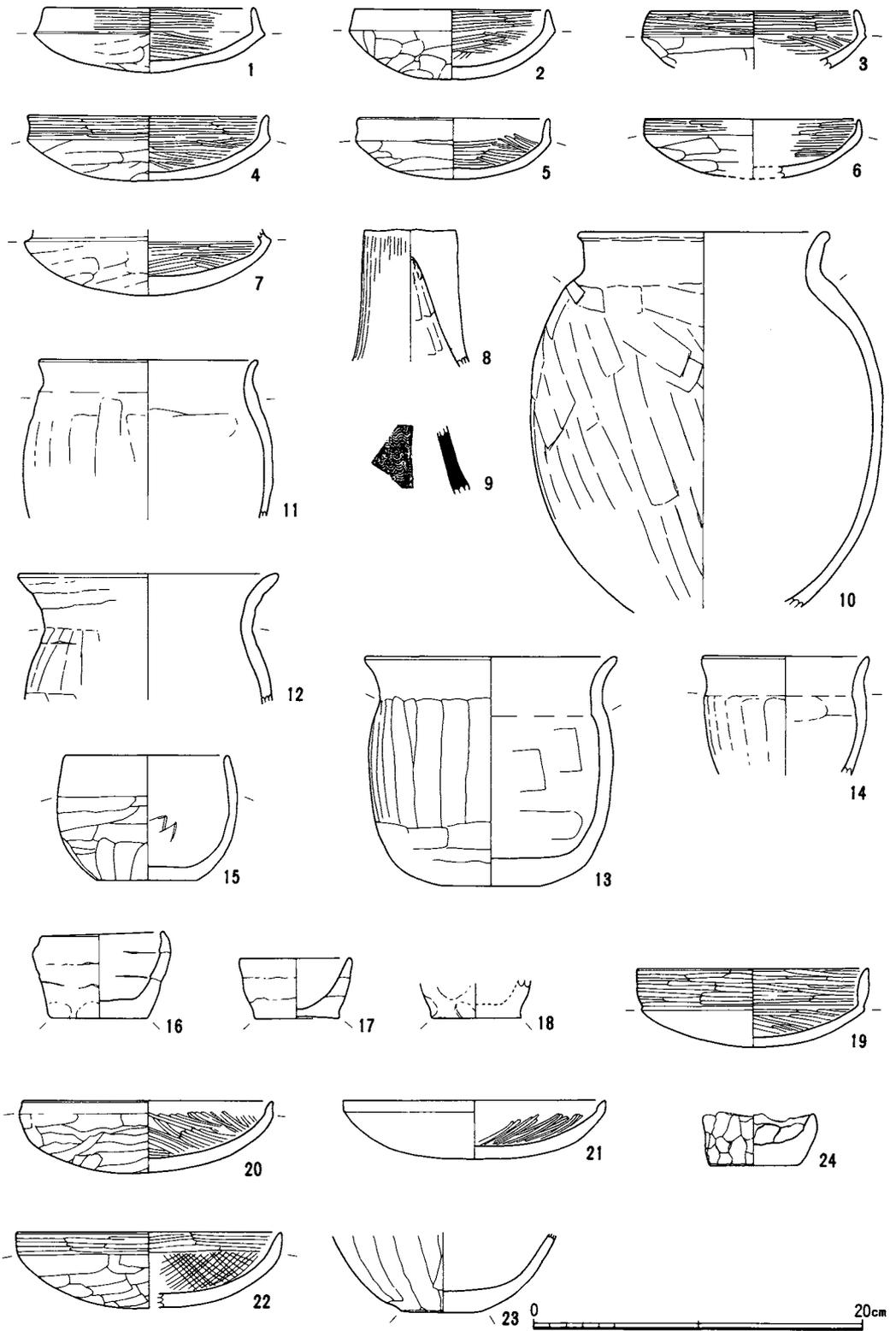
128号住居跡（第20図136～139、図版47）

136は口径10.0cm、器高5.4cmを測る鉢である。口唇部はやや内削ぎとなる。内面の体部と底部の境は指により強くオサエられているために、一段凹み器肉が薄くなる。底部から体部外面は横位のヘラケズリ、内面は弱いミガキが施される。長石・赤色粒を多く含み、赤褐色を呈する。137は完形の小形の杯で、口径7.9cm、器高2.4cmを測る。体部内面から口縁部は横ナデ、底部から体部外面はヘラケズリ調整で、体部と底部はヘラケズリにより不明瞭であるが稜を持つ

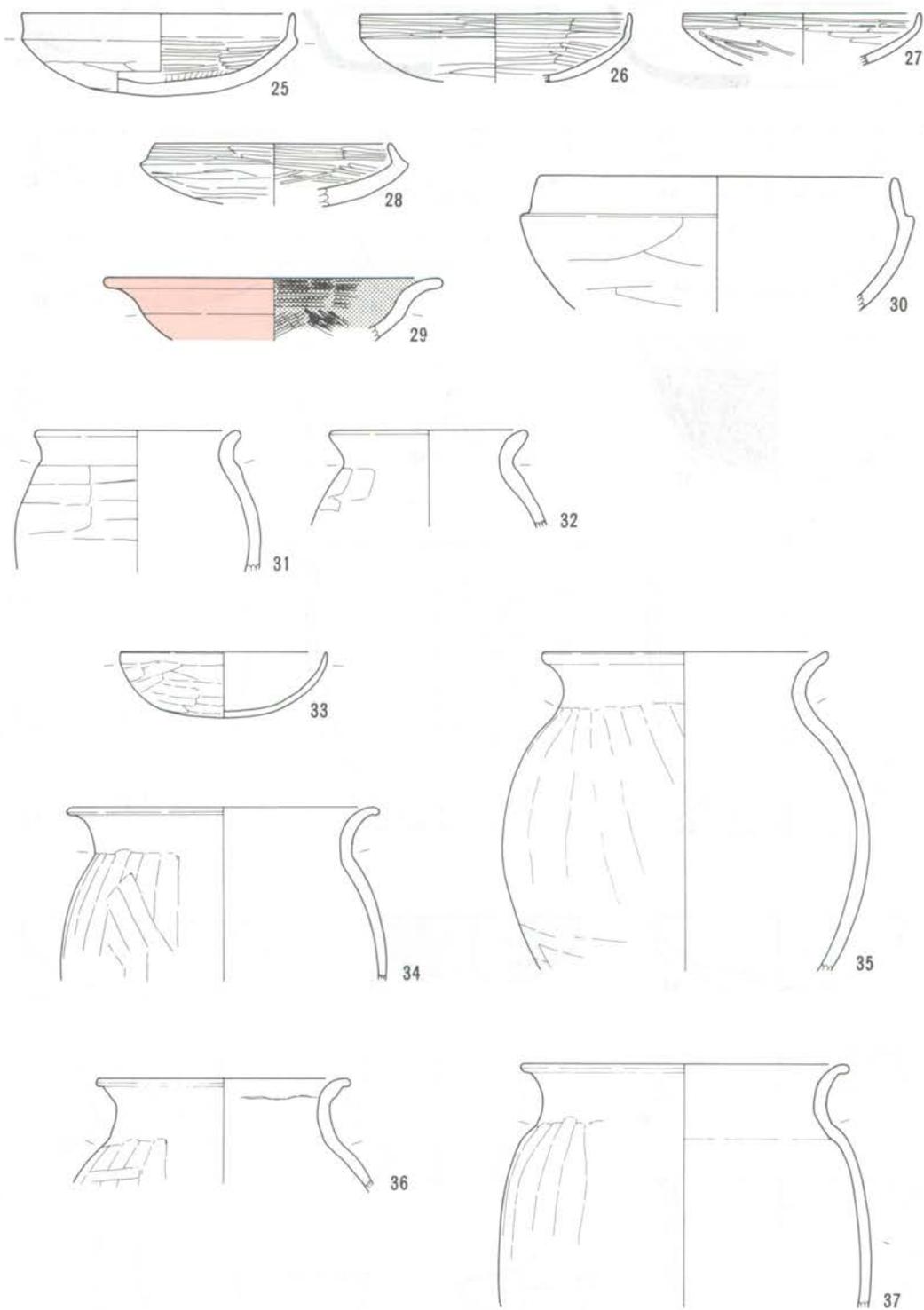
て区別されているようである。胎土中に長石・石英粒を多く含む。138は手捏ね土器である。底部には木葉痕が残存し、焼成時の黒斑が全面にみられる。139は須恵器の甕の胴部片である。内面には、ナデにより消失しているが円状の当て具痕が僅かに認められる。外面は直径5cm程の同心円の叩きが施される。胎土は軟質で、雲母粒をかなり多く含む。断面の色調が特徴的で、内外面が灰白色、中央部が黒色となる。

129号住居跡（第20図140、図版47）

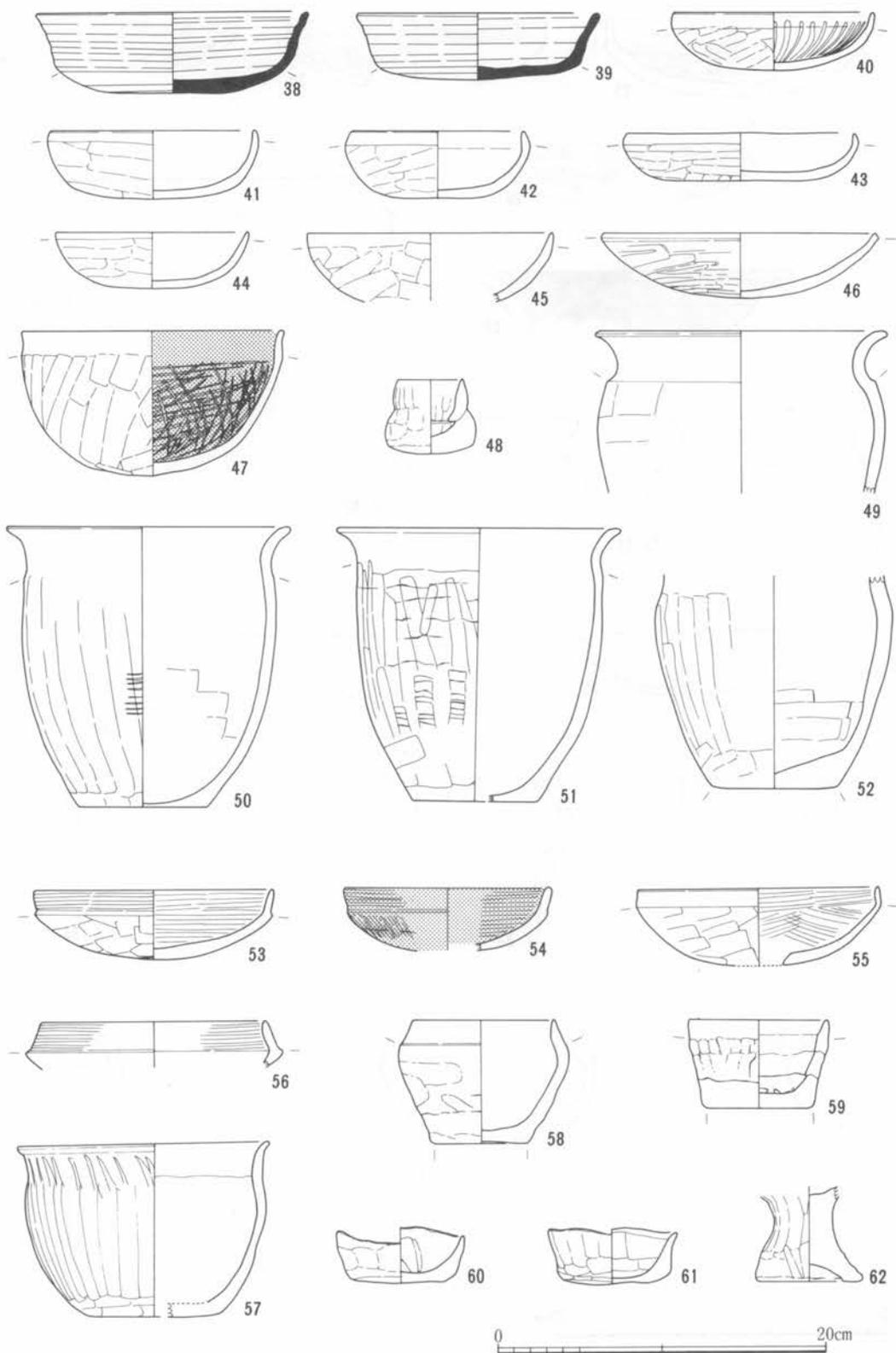
140は土師器の杯で、口径12.1cm、器高4.0cmを測る。口縁部は短くやや内傾する。体部外面は横位のヘラケズリ、内面はミガキ様の丁寧なナデである。胎土中に小砂粒を多く含み、黒褐色の色調を呈する。



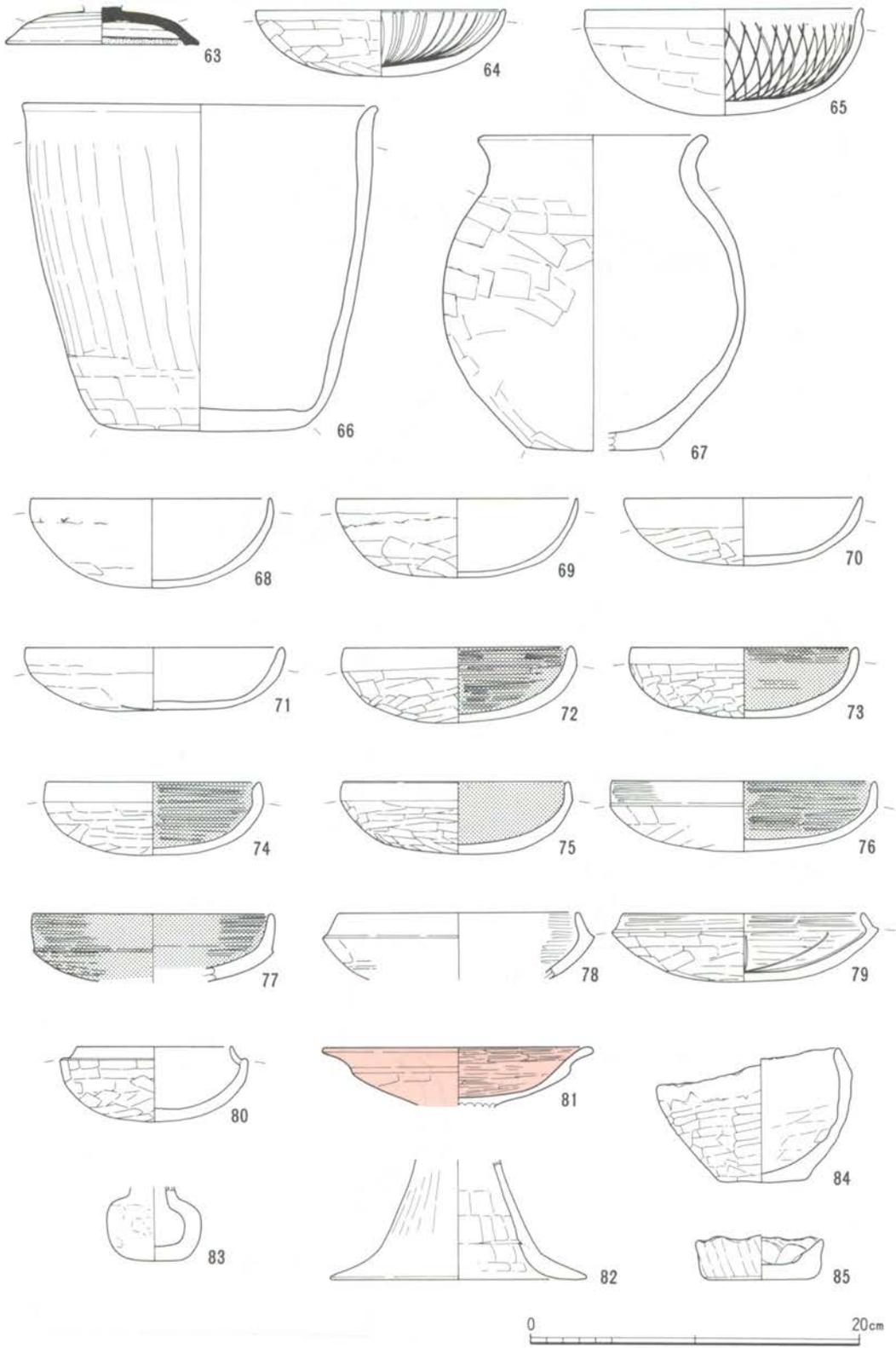
第13图 001(1~18)·002(19~24)号住居跡出土土器



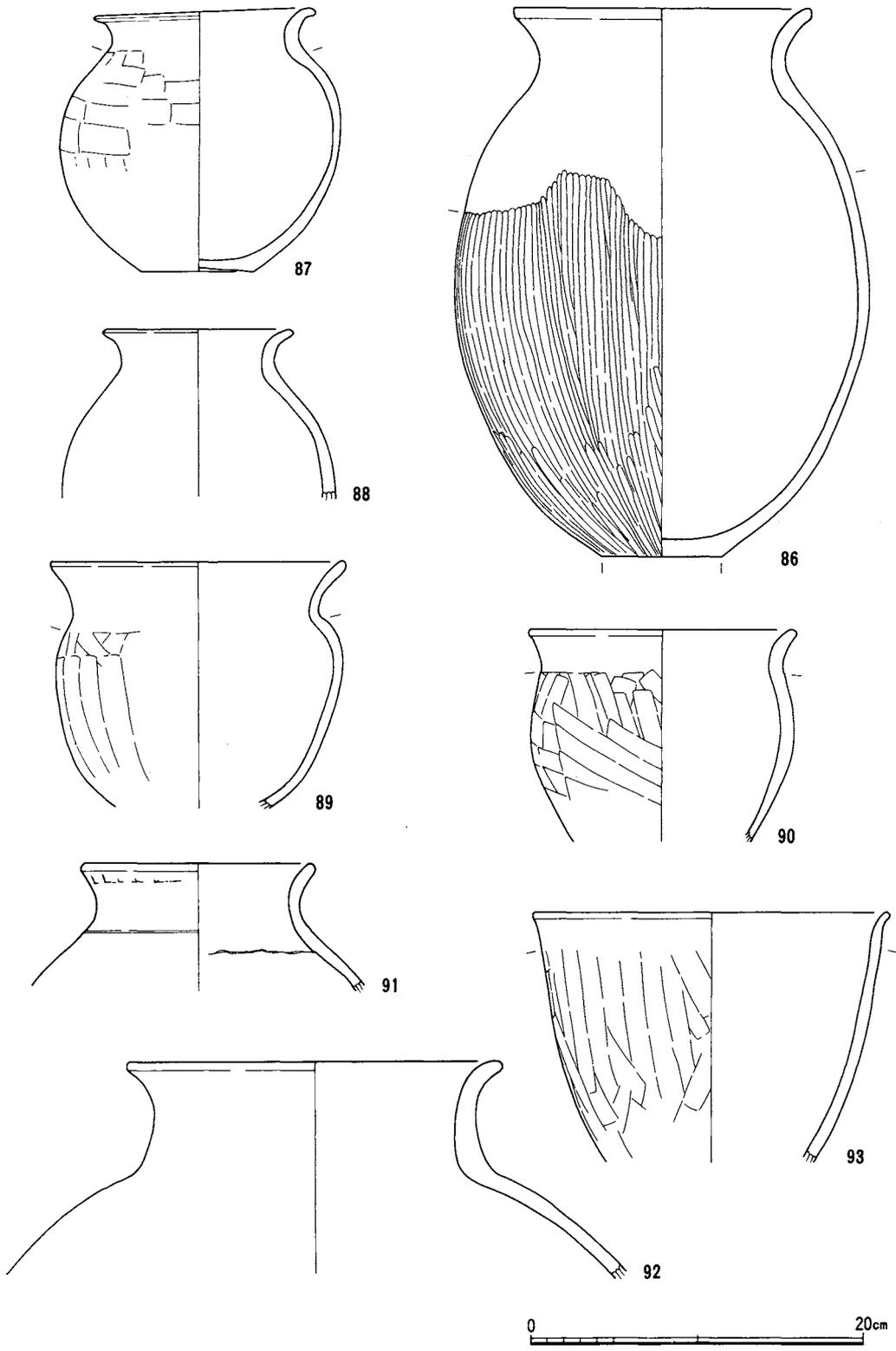
第14图 003(25~32)·013(33~37)号住居跡出土土器



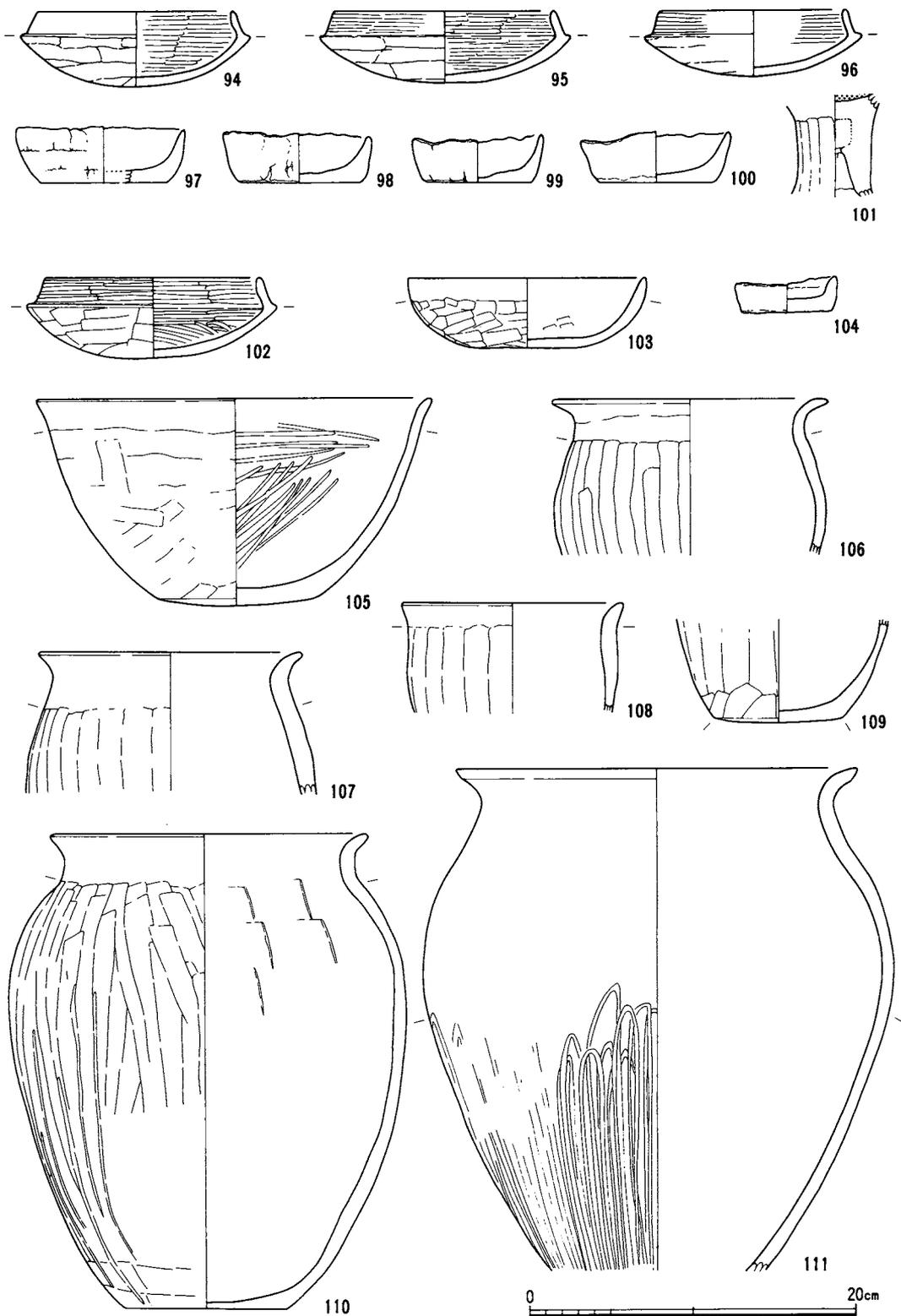
第15图 015(38~52)·016(53~62)号住居跡出土土器



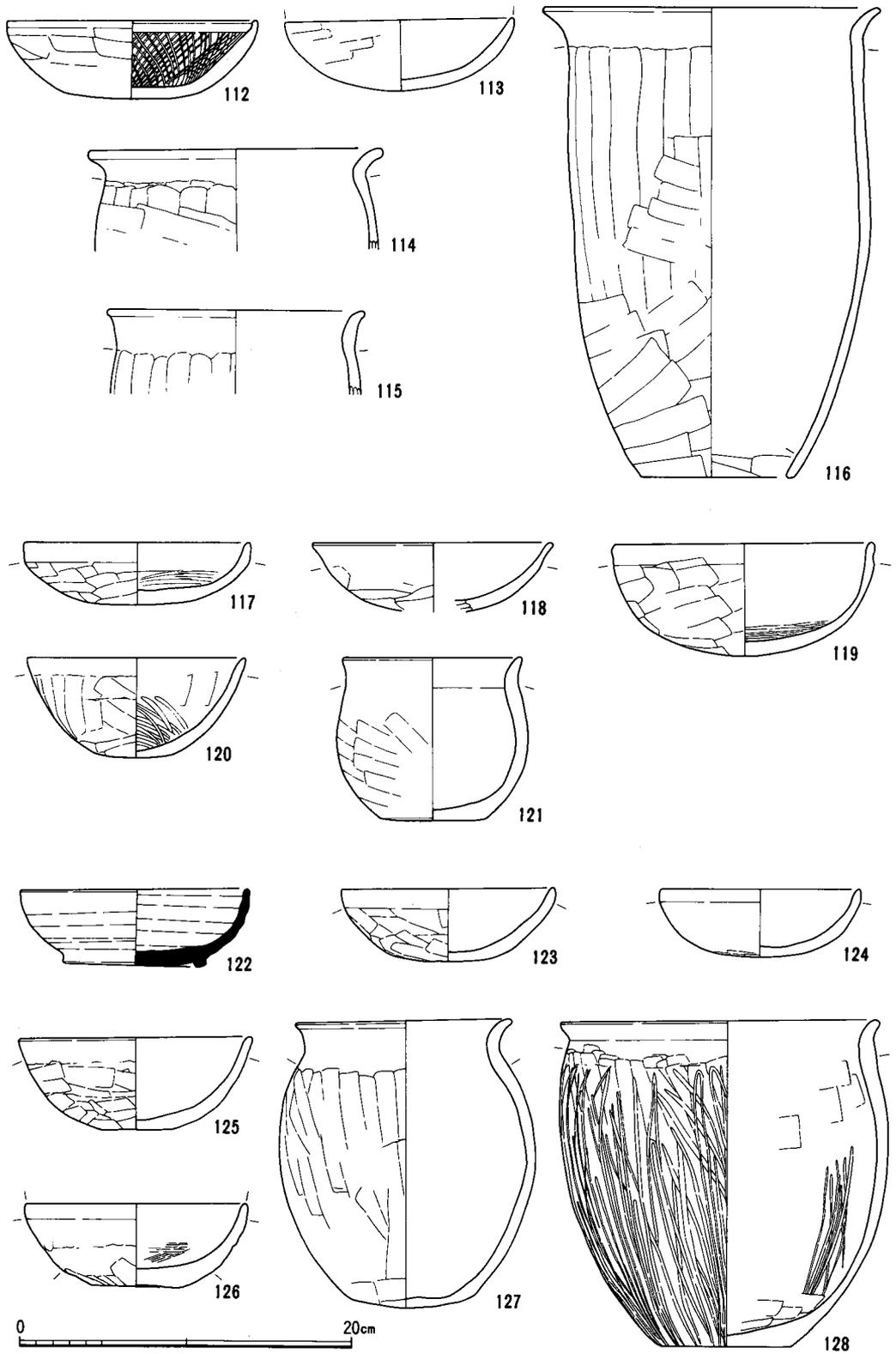
第16图 017(63~67)·018(68~85)号住居跡出土土器



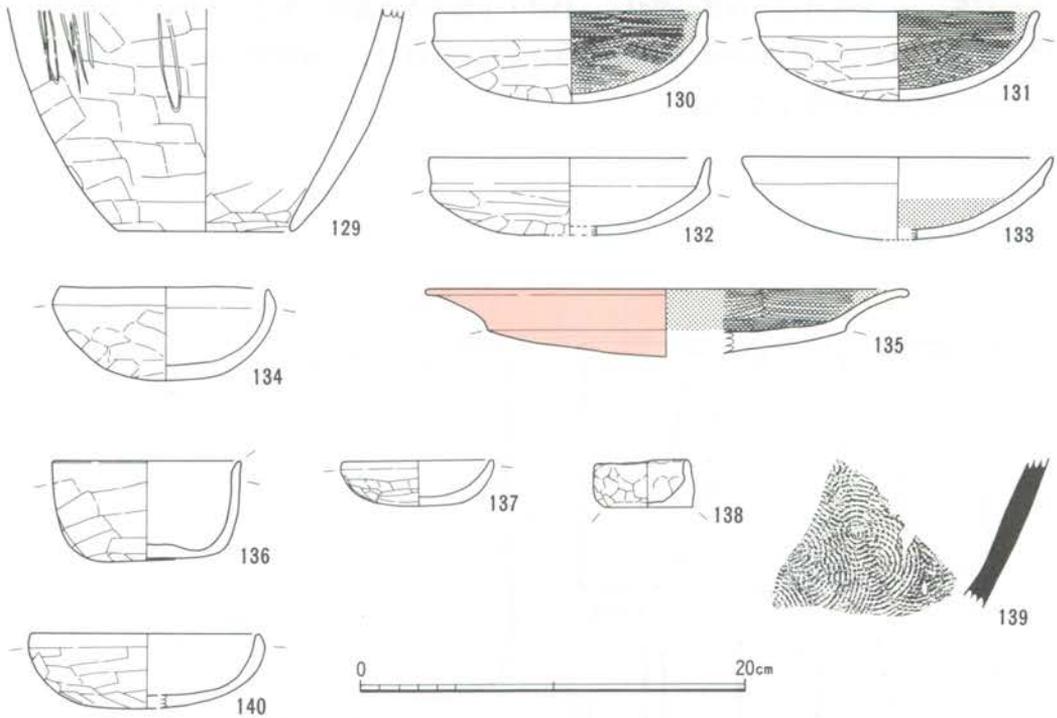
第17图 018号住居跡出土土器



第18图 035(94~101)·044(102~111)号住居跡出土土器



第19图 043(112~116)·057(117~121)·059(122~128)号住居跡出土土器



第20図 062(129)・101(130~135)・128(136~139)・129(140)号住居跡出土土器

住居跡出土石製品・土製品・鉄製品 (第21図、図版86)

砥石 1は044号住居跡出土で完形品となる。上端に両側から穿孔しようとした痕跡が認められるが、貫通していない。全体にかなり使用しており、孔の存在する面には線状の研磨痕が残る。あるいは面により使い分けがあったかもしれない。2・3は破損品である。4も破損しているが、かなり大形となるものである。破損面にも研磨された痕跡がみられ、全体に被熱している。

鉄製品 5・6とも001号住居跡出土である。扁平な断面を有する。小形の刀子の茎であろうか。

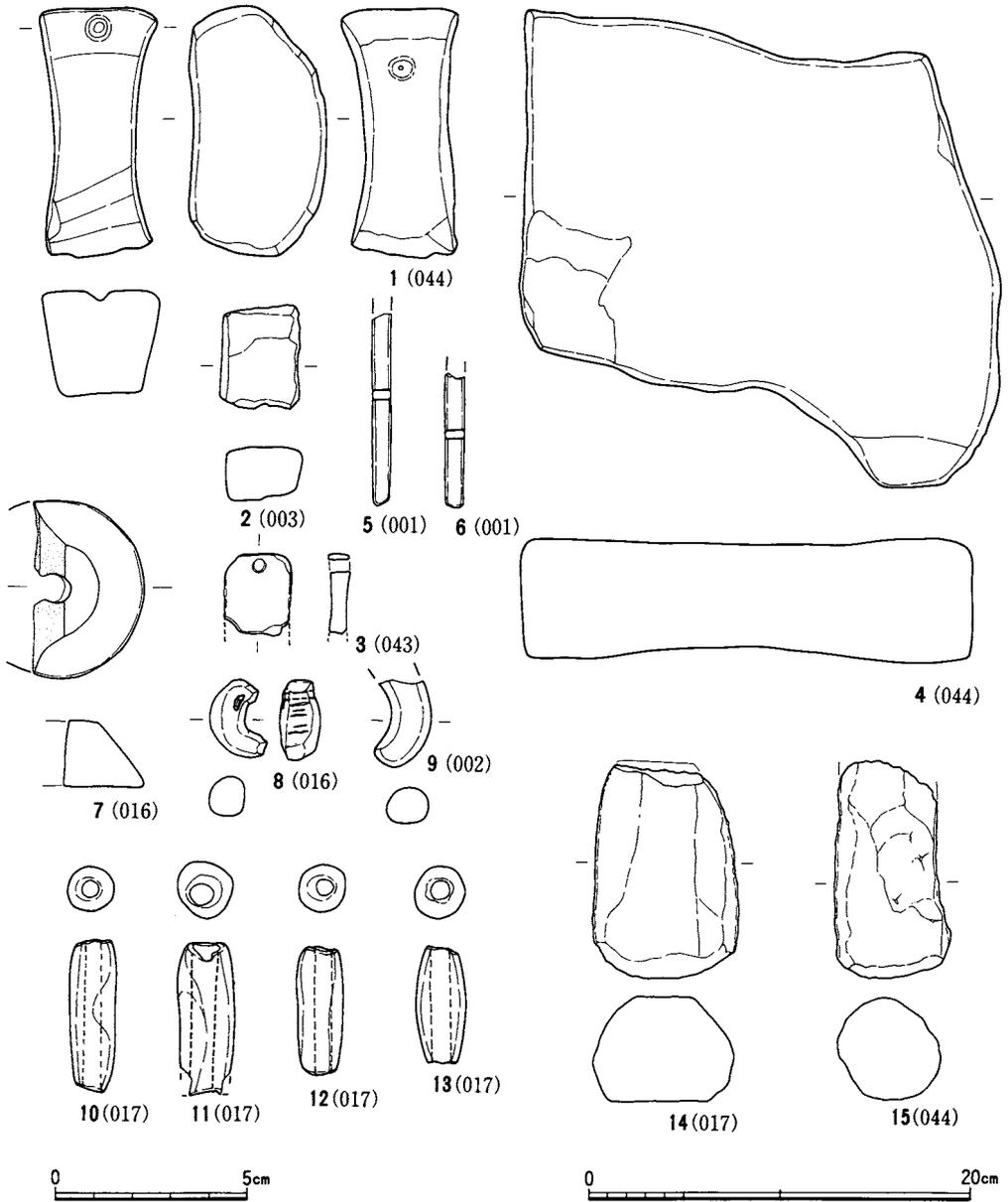
紡錘車 7は016号住居跡出土で、滑石製である。台形状を呈し、全体に丁寧な研磨が加えられる。

勾玉 8は016号住居跡出土の土製品である。造りはやや粗雑で、頭部・尾部とも端部は平坦である。9は002号住居跡の確認面からの出土であり、住居に伴うかどうかは不明である。頭部を欠損する。瑪瑙製である。

土錘 10~13は017号住居跡出土で、造りはきわめて丁寧である。両側の孔の同一方向に通した紐による磨耗が認められる。胎土は緻密で、小砂粒を多く含む。焼成は良好である。

支脚 14は上端部を若干欠損する。全体に面取りが施されるが二次的な被熱のため器面の

荒れが著しい。胎土は粗く砂質を帯びる。15は下半部だけの遺存である。手捏ねにより成形しているため、粘土の接合面が部分的に観察される。胎土は14より緻密で焼成も良好である。カマドの砂質粘土が付着している。



第21図 住居跡出土石製品・鉄製品・土製品

第2節 奈良・平安時代

当該期の集落は本遺跡の主体を占め、調査区内だけで92軒の住居跡を検出した。台地上における住居跡群の占地状況は、前代に引き続き北側から延びる小支谷を望む台地北端部に集中する傾向が強いが、調査区南側にも拡散する様相が認められる。一方では、北側の小支谷斜面部にテラス状の平坦面を設けて、住居跡及び土壌群を形成している。また、調査区内を東西南北に走る溝は、この時期になって始めて掘削されており、本遺跡の性格を考えるうえにおいてきわめて重要な要素となっているようである。

1. 住居跡

005号住居跡（第22図、図版6）

E0区、東側に小支谷を望む位置に構築される。005～009号住居跡の5軒が重複する。本住居跡は、006号住居跡及び009号住居跡を切っており、遺物の様相からみてもこの5軒の住居跡群のなかでは最も新しい所産である。南側半分は道路により削平されている。平面形はほぼ方形を呈し、規模は不明瞭であるが、確認された北辺より1辺3.3m程を測ると思われる。確認面からの掘り込みは5～15cmと浅く、壁はあまり明瞭ではない。床面の状況は比較的軟質であるが、中央部は若干踏み固められたようである。周溝は、確認した部分をみるかぎり掘り込まれていない。ピットは5本検出されたが、このうち支柱穴となるものは西側の2本であろう。径22cmの円形を呈し、深さ25cm程を測る。床面上東側にはカマド部材と考えられる砂質粘土が検出されており、カマドが東壁に存在していたことが想定される。

遺物の出土は少なく、杯類・小皿が床面上より若干検出された。

006号住居跡（第22図、図版6）

E0区に位置し、005・007・008・009号住居跡と重複している。土層状況等より、本住居跡は005号住居跡によって切られ、007・008号住居跡を切っている。重複する5軒の住居跡群のなかでは、比較的遺存の良好な住居跡である。平面形は方形を呈し、規模は南北長3.4m、東西長3.2mを測る。カマドを通る主軸はN-70°-Eを指す。確認面からの掘り込みは5cm程ときわめて浅い。床面はソフトローム中に形成されるが、黒色土及びローム土を突き固めた貼り床を行なっているため、良好な状況を呈している。床面積は9.7m²に想定される。支柱穴は4本検出された。南東コーナー側の柱穴は対角線からずれた位置に設けられる。径20～40cm、深さ18～26cmの略円形を呈する。主軸線上西壁寄りに、円形を呈する掘り込みが認められる。その位置からみて、出入口施設に伴うピットと思われる。カマドは東壁ほぼ中央部に位置するが、南側1/3程を005号住居跡によって切られている。壁を30cm程半円状に掘り込んで煙道部を形成する。

燃焼部より急激に立ち上がり、煙出口の傾斜が緩やかになる。燃焼部は横長の楕円形を呈し、焚き口部は30×25cmの楕円形プランで、摺り鉢状に掘り込まれる。床面からの掘り込みは5cm程と浅い。袖の遺存は不良であるが、白色の砂質粘土を用いているようである。燃焼部底面にはロームブロックを貼っており、その上に焼土および灰が厚く堆積する。床面西側には焼土の堆積があり、覆土の状況より本住居跡は埋め戻されたようである。

遺物の出土は多く、椀および小皿類を主体とする。出入口と北壁側に集中して検出された。カマド北側の周溝上面より器台の完形品が出土している。

007号住居跡（第22図、図版6）

本住居跡は006号住居跡によって切られ、北側が大きく攪乱されている。検出された部分が限られているため、詳細は不明である。平面形は方形を呈すると思われ、確認面からの掘り込みは2cm程度にすぎない。床面はソフトローム中に形成されるが、ローム土および黒色土を突き固めたきわめて堅緻な貼り床が施されている。周溝および柱穴は確認されなかった。南西コーナー側に径96×85cm、深さ66cmの略円形を呈する貯蔵穴が検出された。貯蔵穴内の覆土状況は、ロームブロックを多く含み、上層に移行するに従いしまりが良好になる。カマドは006号住居跡によって削平されたものと思われる。

遺物は貯蔵穴内上層に集中して検出された。完形あるいは完形に近い杯および小皿で構成される。焼失の痕跡がなく、まだ使用に耐え得る日常雑器が住居の廃絶に伴い遺棄されるとは考えがたく、前述の貯蔵穴内覆土状況を考え合わせると貯蔵穴の埋め戻しに伴って意識的に埋置された可能性が強い。

008号住居跡（第22図、図版6）

E0区に位置し、北側が調査区域外となる。南側は006号住居跡によって切られ、さらに風倒木に大きく攪乱されているために検出された範囲はきわめて小さい。平面形等の詳細は不明である。壁は西側で若干検出されており、確認面からの掘り込みは10cmである。床面は007号住居跡同様丁寧な貼り床を行なっている。ピットが東西方向に3本並んで検出された。東側のピットは径60cmの円形を呈し、深さ27cmの摺り鉢状の断面を有する。抜き取られた柱穴のようである。他のピットは柱穴かどうか疑わしい。焼土が部分的に遺存しているが、調査区外にかかる焼土中には遺物が多く含まれており、カマドに近い部分かもしれない。

遺物の量は少ないが、杯および甕が調査区外にのびる焼土中から検出された。

009号住居跡（第22図、図版6）

005・006・007号住居跡と重複しており、南側は道路によって削平される。壁および床面とも

不明瞭であるが、柱穴と遺物の出土より住居跡と想定した。005号住居跡の西側に接して柱穴が検出された。径25cm、深さ18cmの円形を呈する。

遺物は006号住居跡の南側のピット付近で小皿と高台付杯を出土したにすぎない。

011号住居跡（第23図、図版5）

調査区北端F0区に位置する。南東側にゆるく傾斜する台地縁辺部にあり、012号住居跡と西壁で接する。平面形は長方形を呈し、規模は南北長2.8m、東西長3.2mを測る。カマドを通る主軸はN-98°-Eである。確認面からの掘り込みは南東側にやや傾斜するため、北壁で10cm、南壁で5cm程となる。床面はソフトローム中に形成されるが、ローム土に砂質粘土を含んだ硬い貼り床が施される。床面積は6.6m²を測る。周溝は幅5cm前後でカマド部分を除き全周する。柱穴は3本検出された。径20~25cmと小規模の円形を呈し、深さは北東側が33cm、南東側が22cm、北西側が16cmとバラツキがある。南西コーナーには、壁に接して貯蔵穴が設けられている。84×77cmの隅丸形状のプランを呈し、深さ24cmを測る。貼り床の下から径50cm、深さ17cmのピットが検出された。図中に点線で示したようにカマド前面に位置する。カマドは東壁のやや南側に構築される。煙道部は壁を三角形に掘り込んで設けられ、燃烧部は周溝の延長線上の外側に位置するようになるが、床面からの掘り込みは15cmと比較的深い。底面には焼土化したロームブロックが厚く堆積する。袖の遺存はきわめて不良であるが、砂質粘土によって構築される。

遺物の出土量はそれほど多くないが、完形に近い杯類の遺存が特徴的である。26の杯は西壁直下に、27の杯は北壁直下、28の高台付椀は貯蔵穴上面というように完形品が壁に沿って遺存している。カマド内燃烧部の覆土上層から高台付椀が、煙道部にあたる位置から立った状態の支脚がそれぞれ出土している。

012号住居跡（第22図、図版5・6）

011号住居跡の西側に接して構築される。本住居跡は、貼り床下に軸を同一にする一回り小さい住居跡が検出されており、拡張した住居跡の可能性が高い。下層の住居跡は、南北長2.8m、東西長3.3mを測り、長方形のプランを呈する。東側にカマドの存在が想定されることより、主軸はN-91°-Eを示す。床面はハードローム中に形成され堅緻である。周溝は北壁で部分的に途切れるが、ほぼ全周する。柱穴は、周溝の内側で検出された4本が主柱穴になると思われる。すべて各コーナーに向いた楕円形の掘り方を呈し、底面に比して上面がかなり大きく掘られていることを考えるといずれの主柱穴も引き抜かれた可能性が高い。出入口に伴うピットは南壁中央部に設けられる。カマドにむかって右側の位置である。掘り込みの深さは他の柱穴と同様である。カマドは東壁中央部に存在するが、建替えのために削平されている。カマドの掘り方

は特徴的で、1.3×0.6mの横長の長方形プランを呈する。床面から燃焼部底面までの掘り込みは10cmを測る。内部に焼土と灰の堆積が認められる。袖部にあたる位置の両側に2本1対のピットが設けられる。カマドに伴う施設と思われる。

建替えされた上層の住居跡は、南北長4.0m、東西長4.3mを測る方形の平面形を示す。カマドを通る主軸はN-2°-Eを指し、下層の住居跡とはほぼ90°主軸を異にする。床面はロームブロックに暗褐色土を混ぜた土で貼り床を行なっているためかなり堅緻な状況である。特に柱穴間の床は良好である。周溝はカマド部分を除き深さ5~10cmで全周する。本住居跡に伴う柱穴は7本検出されたが、支柱穴となるのは対角線上に配置された4本であろう。径30cm、深さ45cmとほぼ同じ規模で掘り込まれる。出入口に伴うピットは南壁側中央に位置する。深さ34cmで、支柱穴より浅い。貼り床下の住居跡の柱穴を利用するのではなく、柱穴1本分外側に移動している。カマドは北壁中央に位置する。袖等の遺存は比較的良好である。壁への掘り込みは小さく、煙道部は燃焼部より緩やかに立ち上がる。燃焼部は周溝より内側に掘り込まれ、80×50cmの楕円形プランを呈し、床面より10cm程の深さである。袖は幅広く構築され、白色粘土を突き固めた層を基盤としている。上層はローム土と砂質粘土を混ぜた土で袖を形作っている。天井部は崩落しているが、土層状況より甕の掛け口が観察される。燃焼部底面にはロームブロックを敷いているようであり、上層に灰および焼土の堆積がみられる。

貼り床下住居跡からの遺物の出土は少ないが、建替えた住居に伴う遺物は床面中央からカマドにかけて比較的多く検出された。35の杯は南壁下に完形で出土した。37・38の杯身と杯蓋は北西側の柱穴付近より検出されており、法量的にセットとなるものであろう。カマド上面からは甕類が一括して出土している。39の完形の小形甕は焚き口部上面に口縁を壁側に向けて横位に置かれていた。

019号住居跡（第23図、図版9）

F0区に位置し、南側で020号住居跡と重複する。土層状況より、本住居跡のほうが明らかに新しい。平面形は主軸方向に長い長方形を呈し、南北長3.4m、東西長3.0mを測る。カマドを通る主軸はN-0°-Eを指す。確認面からの掘り込みはほぼ11cmと浅い。床面は020号住居跡の覆土中にかかるため貼り床を形成しているが、それほど顕著ではなくやや堅緻な状況にすぎない。床面積は8.4㎡を測る。周溝は、東側で若干途切れるもののカマド部分を除き全周する。柱穴は西側に1本検出されたのみである。径40cm、深さ39cmの円形プランを呈する。カマドは北壁の中央やや東側に設けられる。袖の基部を若干残しているものの、遺存状況はきわめて悪く自然的というよりもむしろ人為的に取り壊された可能性が強い。壁を半円状に掘り込んで煙道部を形成し、燃焼部は周溝の延長線上に位置する。

遺物の出土は少ないが、取り壊されたカマド中に完形にならない甕と内面黒色の杯が各1個

体出土している。またカマド前面には土錘が1点検出された。

020号住居跡（第23図、図版9）

北側で019号住居跡と重複し、南西側1/3程が調査区域外となる。平面形は方形を呈し、規模は南北長5.0m、東西長4.7mを測る。カマドを通る主軸はN-3°-Eを指し、確認面からの深さは30~35cmである。床面はハードローム中に形成され、平坦で堅緻である。床面積は15.1㎡と推定される。周溝はカマドおよび貯蔵穴部分を除き全周すると思われる。支柱穴は3本検出された。南西側の支柱穴は調査区域外に存在すると思われる。北東の柱穴は上場が60cmの不整形方形を呈し、下場が径12cmの円形となる。深さ61cmで2段に掘り込まれる。他の2本は径40~45cmの円形プランで、65cm程の深さである。いずれも抜き取られたものと思われる。中央部に存在するピットは径35cm、深さ43cmと比較的しっかりした掘り方であるが、その位置からして柱穴とするには疑問である。カマド左側の2本のピットは掘り込みも浅く性格不明である。北東コーナーには、70×52cmの長方形を呈する貯蔵穴が設けられ、深さ15cmときわめて浅い。カマドは北壁中央に位置する。壁への掘り込みは小さく、煙道部はほぼ垂直に立ち上がる。燃焼部は長径1.2m、短径0.8mの楕円形を呈する。床面からの深さは17cmと比較的深い。燃焼部の前方には横長の焼き口部が設けられる。床面側でもっとも深く11cmを測り、燃焼部に向けて徐々に浅くなる。袖は幅広く構築され、基底部にはロームブロックを含んだ褐色土を積んでいるようである。砂質粘土を用いている。焼き口から燃焼部にかけての底面にロームブロックを敷き、その上面に硬化した焼土層が厚く堆積する。

遺物の出土は少なく、ほとんど破片の状態である。ただ、3点検出された杯はいずれも全面赤彩され、内2点には底部に「十」の線刻が施される。

021号住居跡（第24図）

G0区西側に位置し、東側で022号住居跡と重複する。土層状況より本住居跡のほうが明らかに新しい。床面中央が560号土壌により大きく攪乱される。平面形は方形を呈し、規模は東辺が不明なため明瞭ではないが一辺2.5m程を測ると思われ、本遺跡のなかではもっとも小さい住居跡である。カマドを通る主軸はN-8°-Eを指す。確認面からの掘り込みは25cm平均である。床面はハードローム中に形成され堅緻な状況であるが、土壌により大きく攪乱されている。床面積は4.4㎡と想定される。周溝は検出されなかった。柱穴は南側に3本設けられる。いずれも径25cmを測り、深さは15~20cmである。西壁中央に近いピットは、その位置からあるいは出入口に伴うピットかもしれない。カマドは北壁中央に位置する。土壌による攪乱のため痕跡を検出したにすぎない。覆土状況より本住居跡は埋め戻された可能性が高い。

遺物の出土は少なく、南東側の遺構確認面より完形の杯が1点倒位で出土した。

022号住居跡（第24図、図版10）

021号住居跡と西側で重複するが、床面が深いために壁の上方を若干攪乱されたのみで遺存は良好である。北東コーナーが道路によりやや削平される。平面形は東西にやや長い長方形を呈し、規模は南北長3.8m、東西長4.3mを測る。カマドを通る主軸はN-0°-Eを指す。確認面からの掘り込みは40cmと本遺跡のなかでは比較的深い。床面はハードルーム中に形成され平坦で堅緻である。床面積は10.1mを測る。周溝はカマド部分を除き全周する。幅30cm平均、深さ5~10cmの比較的大きな掘り方を呈する。主柱穴は対角線上に4本検出された。北側の2本は径40cmを測り、深さは北東が57cm、北西が52cmとなる。南側は径30~35cmとやや小さくなり、深さは南東が52cm、南西が58cmとなる。北西の柱穴は掘り方がやや内傾する。出入口に伴うピットは、南壁の中央近くに存在する。40×30cmの横長の楕円形を呈し、2段に掘り込まれる。最も深いところで床面より15cmを測る。カマド前面には2本のピットが設けられる。径30cm、深さ20cm前後で、主柱穴よりも下場が小さくなる。南東コーナーには径35cm、深さ21cmのピットが掘り込まれる。性格は不明である。カマドは北壁中央に位置するが、北側が道路により若干削平される。壁への掘り込みは長方形状で、煙道部の立ち上がりは急激である。燃焼部の深さは床面より7cmを測る。袖の遺存は不良であるが、砂質粘土を構築材とし、ロームブロックを主体とした土を基盤層としているようである。

遺物は杯類を主体とするが、出土量は多くない。集中する傾向はみられず、全体に散在する。完形の55の内外面赤彩杯は北東主柱穴上、58の手捏ねは東壁直下に検出された。

023号住居跡（第24図、図版10・11）

F0・G0・F1・G1区の4区にまたがって検出された住居跡である。東側は調査区域外に接する。南東コーナー部分で024号住居跡と重複するが、土層状況等より本住居跡のほうが新しい所産である。また、北側は562・563号土壌により若干切られる。平面形はほぼ正方形を呈し、規模は南北長4.8m、東西長4.5mを測る。カマドを通る主軸はN-9°-Eを指す。確認面からの掘り込みは35cm平均で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面はハードルーム中に形成されきわめて堅緻であるが、東側に向けてやや傾斜する。床面積は19.4mである。周溝はカマド部分を除き全周する。幅は西側で20cmとなる以外は15cmを測り、深さは5~15cmと一定していない。主柱穴は4本検出されているが、北側と南側の柱穴どうしが内側によっているために配置的には南北に長い長方形を描く。南東コーナー側の柱穴が50×40cmの楕円形を呈すのに対し、他の3本は径70cm前後の円形プランとなる。いずれも2段に掘り込まれており、掘り方がきわめて大きくなることより柱が抜き取られた可能性が強い。深さはばらつきが顕著で、南西柱穴が最も深く80cm、南東柱穴が最も浅く41cmを測る。出入口に伴うピットは南壁側の中央に設け

られる。74×43cmの主軸方向に長い楕円形を呈し、内側に向って徐々に深く掘り込まれる。最も深いところで床面より29cmである。北西コーナーと南東コーナーの周溝中に相対するかのよう深さ30cm前後の2本の小さなピットが設けられる。壁柱穴になるのであろうか。他のピットは掘り込みも浅く性格不明である。カマドは北壁中央に位置するが、562号土壌により北西側が攪乱される。壁への掘り込みは大きく、煙道部の長さは壁より60cmを測る。燃焼部も比較的大きく、煙道部に向って徐々に深くなる。焚き口部は燃焼部と明確に区別され、径52cm、深さ16cmの円形を呈する。袖・天井部とも遺存は不良であるが、袖はロームブロック土層を基盤としているようである。

遺物の出土量は本遺跡のなかでは最も多く、墨書土器が多量に検出された。墨書土器の出土状況については後章で検討するが、住居跡西側半分に集中する傾向が強い。東側で出土した土器は少ないが、壁際に遺存している。床面から覆土上層にかけて途切れることなく土器が出土しており、住居跡の廃棄後連続と土器の投棄が行なわれていたようである。ただし、床面と上層の土器の間にほとんど時期差が認められないことから、投棄はきわめて短期間であった可能性が強い。また、完形とはならないが鉄鏃と刀子が2本ずつ床面上で検出された。カマド内からは支脚片と小形・大形の甕各1個体分が検出された。

024号住居跡（第25図、図版12）

G1区に位置し、023号住居跡により北西コーナー部分を切られる。東側では025B号住居跡と接する。平面形は正方形を呈し、規模は南北長4.5m、東西長4.3mを測る。カマドを通る主軸はN-11°-Wを指す。確認面からの掘り込みは西側で38cmを測る。床面はハードローム中に形成され、カマド前面から南側の柱穴にかけて良好に固められている。床面積は13.5m²を測る。周溝は幅20cm程でカマド部分を除き全周する。支柱穴は南側に2本検出された。西側は径40cmの円形を呈し、深さ59cmを測る。東側は上場が66×44cmの楕円形を呈し内部に2本の柱穴が掘り込まれる。深さはいずれも36cmである。西側がやや不明瞭であるが、2本の支柱穴は建替えられたものと思われる。東壁の周溝内に径25cm、深さ15cmのピットが設けられる。壁柱穴となるのであろうか。他の2本のピットは掘り込みも浅く性格不明である。覆土中にローム粒を多く含むことより、本住居跡は埋め戻された可能性が強い。カマドは北壁中央に位置するが、023号住居跡により西側を若干削平される。壁を三角形状に掘り込んで煙道部を形成し、燃焼部からの立ち上がりは緩やかである。燃焼部の掘り込みは、床面より11cmを測る。袖部は地山を掘り残してプランを設定し、その上に砂質粘土を積んでいる。また、燃焼部底面にはロームブロックを敷いており、焼土はその上に堆積する。

遺物の出土は少ない。短刀片と思われる鉄製品はカマド右側の壁下で検出された。また、「正足」と記された墨書土器が1点出土しているが、覆土上層からの検出であり、本住居跡に伴う

ものではなからう。

025A号住居跡（第25図、図版12）

G1区に位置し、5軒の住居跡と多くの土壌が重複する。025B号住居跡と重複するが、不明瞭ながら025B号住居跡の覆土上面に貼り床が認められることと北西側の壁を共有することより025B号住居跡を拡張した住居と考えられる。平面形は長方形を呈すると思われ、規模は南北長5.8m、東西長4.3mを測る。カマドを通る主軸はN-12°-Wを指す。確認面からの掘り込みは5~10cmときわめて浅い。床面は貼り床が施され、堅緻な状況であり、床面積は22.6㎡と想定される。周溝および柱穴は確認されなかった。カマドは北壁中央からやや東寄りに位置する。遺存はきわめて悪く、掘り方のみを検出したにすぎない。025B号住居跡のカマドを再利用したようで、燃焼部内にも貼り床が施されている。

遺物の出土は少なく、内黒の椀片が若干出土したにすぎない。

025B号住居跡（第25図、図版12）

025A号住居跡の貼り床下に検出され、025C号住居跡の覆土上面に貼り床を施した住居である。また026号住居跡を切っている。平面形はほぼ正方形を呈し、規模は南北長4.5m、東西長4.3mを測る。カマドを通る主軸はN-10°-Wを指す。025A号住居跡の床面からの深さは15cm程である。床面は貼り床が施されきわめて堅緻である。床面積は15.2㎡を測る。周溝・柱穴とも検出されなかった。カマドは025A号住居跡により再利用される。

遺物の出土はみられなかった。

025C号住居跡（第25図、図版12・13）

025A・B号住居跡および026号住居跡の貼り床下に検出され、南東側で027号住居跡を切っている。平面形はほぼ長形状を呈し、規模は南北長3.0m、東西長3.5mを測る。カマドを通る主軸はN-9°-Wを指す。025B号住居跡の貼り床からの深さは30cmを測る。床面はハードローム中に形成され、カマド前面から主柱穴間にかけて良好に踏み固められている。床面積は8.2㎡を測る。周溝は西側で若干途切れるものの基本的には幅20cm平均で全周する。主柱穴は各コーナーに4本検出されたが、北西側の主柱穴はやや南側にずれ、南東側のは周溝に接する。掘り方の規模にはバラツキが認められ、径は北東側で最小25cm、南東側で最大40cm、深さは南西側で最浅6cm、南東側で20cmを測る。床面中央東側に径25cm、深さ21cmのピットが設けられる。補助柱穴か出入口に伴うピットであろう。カマド前面には深さ5cmの小さなピットが掘り込まれるが、性格は不明である。覆土中にロームブロックを多く含むことより、本住居跡は埋め戻された可能性が強い。カマドは北壁中央に位置する。煙道部は壁を40cm程掘り込んで比較的長

く壁外にのびる。燃焼部は径50cmの円形を呈し、床面より5cmの深さを測る。袖の遺存は比較的良好で、砂質粘土をかなり強く突き固めている。燃焼部底面には炉壁のようにかなり強く焼けた焼土が厚く堆積し、その上層に灰が6cmほどの厚さで確認された。

遺物の出土は少ないが、床面上より2点の墨書土器が検出された。「田」の墨書土器は床面中央からやや南側に寄った位置に正位で置かれていた。「八富」は床面中央の小ピット付近に遺存している。カマド右袖上面からは甕が小破片でまとまって出土した。また、燃焼部内では底面から10cm程浮いた状態で支脚が立てられていた。

026号住居跡（第25図、図版13）

重複する住居跡群の北端に位置し、土層状況等より025A号住居跡より古く、025C号住居跡よりも新しい。また、東側は道路により削平される。平面形はほぼ正方形を呈し、規模は南北長3.0m、東西長3.3mを測る。床面はほぼ平坦で、床面積は重複する部分を想定して9.4㎡程を測られる。周溝は検出されなかった。支柱穴は4本確認されたが、規模・配置とも不規則である。深さは東側の2本が17cm、北西が33cm、南西が24cmとなる。カマドは確認されなかったが、東端中央に焼土が確認されていることより、東壁に存在していたものが道路により削平されたものと思われる。

遺物の出土はきわめて少ない。

027号住居跡（第25図、図版13）

G1区の北端に位置し、東側は道路により床面まで削平される。また、北東コーナーは584号土壌により攪乱を受け、北西側を025C号住居跡により切られる。平面形は正方形を呈し、規模は1辺3.1mを測られる。確認面からの深さは西側で15cm程度である。床面はハードローム中に形成され比較的堅緻であるが、やや東側に傾斜する。周溝は道路等により攪乱される部分のみみられるが、全周するものと思われる。南側周溝に接してピットが2本検出された。いずれも南北にやや長い楕円形を呈し、床面より25cm掘り込まれる。柱穴というよりも出入口に伴うピットの可能性が強い。カマドは検出されなかったが、道路により削平されたものと思われる。

遺物の出土は少なく、図示した土器も出土状況より本住居跡に伴うものではなからう。

028号住居跡（第26図、図版14）

G1区、027号住居跡の南2m程に位置し、谷頭を東に望む台地縁辺部に構築されるため、東側にやや傾斜する。東壁付近は道路により削平される。南側で033B号住居跡と接し、南東コーナーで032号住居跡を切っている。平面形は方形を呈し、規模は確認された南北長が4.0m、東

西長は東壁が削平されているものの、柱穴の位置よりほぼ4.0mと想定される。カマドを通る主軸はN-10°-Wを指す。確認面からの掘り込みは、東側に傾斜する面に構築されるため、西壁で最も深く41cmを測り、東に移行するにつれて徐々に深さを減じる。床面はハードルーム中に形成され、平坦で堅緻である。床面積は10㎡前後に想定される。周溝は東側が削平のために確認されなかったが、カマド部分を除き全周するものと思われる。西壁下は幅15cm、深さ5cmを測るのに対し、南側は幅40cm、深さ10cm前後と規模が大きくなる。主柱穴は対角線上に4本検出された。西側の2本は径46～56cmと比較的広い掘り方を有するのに対し、東側は径20～30cmと小さくなる。ただし、東側の柱穴付近は削平により床面が5～10cm程低くなっており、掘り方は確認したものよりやや大きいことが予想される。掘り込みの深さは不規則で、北西側が最も深く70cm、南西側が28cmを測る。いずれも掘り方底面に対して上場が大きくなっていることより、主柱穴は引き抜かれた可能性が高い。また、北西コーナーおよび南西主柱穴の北側に径20cm、深さ10～15cmの小ピットが設けられる。補助柱穴となるのであろうか。カマド対壁側には径28×23cm、深さ20cmの主軸方向にやや長い楕円形を呈する出入口に伴うピットが付設される。覆土中にローム粒および焼土を多く含むことから、本住居跡は埋め戻されたようである。カマドは北壁中央に位置するが、攪乱が激しいため、掘り方および右袖の基部を検出したにすぎない。壁への掘り込みは三角形で、燃焼部の規模は小さい。

遺物の出土は少なく、全形を窺えるものは壁下で検出された3点の杯のみである。166の杯は東側の削平部分で出土したが、その出土状況より本住居跡に伴うものと考えてさしつかえないものである。

030号住居跡（第26図、図版14）

G1区、028号住居跡の南西コーナーに接するように位置する。また、033・031号住居跡と重複するが、土層状況より本住居跡が最も新しい所産と考えられる。カマド部分は土壌により攪乱される。平面形は正方形を呈し、規模は南北長2.8m、東西長2.9mを測る。カマドを通る主軸はN-93°-Eを指す。確認面からの深さは20～24cmを測る。床面はハードルーム中に形成されきわめて堅緻であるが、東側に向けて徐々に低くなる。床面積は8.3㎡を測る。周溝はカマド部分を除き、幅15～20cm、深さ5cm平均で全周する。西壁の周溝からカマド側に向けて幅25cm、深さ2cm程の溝が1条設けられている。何を目的としたものかは明らかでない。床面には2本のピットが検出された。北東側のピットは34×20cmの楕円形を呈し、深さ4cmときわめて浅い。また、南西コーナーのピットは径55cm、深さ49cmの円形を呈する。いずれも柱穴となるものではなかろう。覆土全体に細かなロームブロックを多く含むことより、本住居跡は意図的に埋め戻された可能性が高い。カマドは東壁中央に位置するが、土壌により大きく攪乱される。ただ遺存する部分からは、壁への掘り込みが大きく燃焼部も壁外にあたる位置に設けられたようで

ある。

遺物の出土は比較的少ないが、カマド前面に杯類が集中する。カマド内の底面からやや浮いた状態で支脚が1点検出された。

031号住居跡（第26図、図版14）

030号住居跡と重複し、西側部分が若干遺存するのみで大部分が030号住居跡により削平される。プラン・規模とも不明であるが、現存する西壁では2.8mと030号住居跡よりさらに小さくなる。確認面からの掘り込みは19cmを測り、床面は比較的堅緻である。周溝は幅25cmとやや幅広く設けられるが、確認された北壁では検出されなかった。柱穴・カマドは不明である。

遺物の出土は細片のみである。

032号住居跡（第26図、図版14）

G1区、033B号住居跡の東側に位置する。東側の谷に向かう緩い斜面上にあり、しかも道路により大きく削平されたため南西コーナー付近の周溝と床面の一部を検出したにすぎない。周溝は幅20cm、深さ5cmで検出された。

遺物の出土は少なく、覆土中より内外面赤彩の杯片がみられる程度である。

033A号住居跡（第26図、図版14）

G1区に位置し、030・034号住居跡によって北西隅と南東隅を切られる。北側で033B号住居跡と重複するが、調査時においては1軒の大形の住居跡と考えていた。しかし、土器の様相およびカマド・柱穴の在り方から2軒の住居跡の重複の可能性が強く、(A)・(B)として扱った。平面形は正方形を呈するが、北側ははっきりしない。規模は1辺5m程に想定される。確認面からの掘り込みは、壁が残存する南側で30cmを測る。床面はハードローム中に形成され比較的堅緻である。床面積は22㎡程であろう。周溝は南壁側にのみ検出されたが、本来は全周していたものと思われる。幅20～30cm、深さ10cm程度とやや規模が大きい。支柱穴と思われるピットは南西コーナー側に1本検出された。径60cm程の不整形を呈し、2段掘りされる。深さは35cmを測る。意図的に引き抜かれたものであろう。北東側にも深さ22cmの2段掘りされるピットが設けられるが、位置的にやや疑問である。カマドは検出されなかったが、東壁にあったものが034号住居跡によって攪乱された可能性が高い。

床面中央部には焼土が部分的に遺存する。遺物の出土は少なく、西壁下で杯、南壁下で甕がみられる程度である。

033B号住居跡（第26図、図版14）

030・033A号住居跡と重複するが、遺構面からの新旧関係は不明である。また、プランも不明瞭でカマドおよび柱穴の配置よりその存在を推定した。平面形は方形を呈すると思われ、規模は1辺3.4m程であろう。カマドを通る主軸はN-90°-Eと想定される。床面は033A号住居跡同様比較的堅緻である。支柱穴は東側の2本のみ検出された。径25cmで、深さは北東が23cm、南東が20cmを測る。南東の柱穴には同様の深さの2本の柱穴が重複しており、その切り合い関係より柱が内側に建替えられたことが考えられる。カマドは東壁中央に位置すると思われる。道路による攪乱が激しく、袖等の遺存はなく、掘り方のみを検出しただけである。壁への掘り込みは半円状を呈し、燃焼部を含めた掘り方は径42cmの円形となる。床面からの深さは5cm程である。

遺物の出土は比較的多いが、小破片となるものが多く全形を窺えるものはそれほど多くない。図示できた土器はカマド前面から検出され、杯2個体と手捏ね2個体である。カマド内からは支脚とともに須恵器の甕が出土した。

034号住居跡（第26図、図版14・15）

033A号住居跡の東側を若干切って構築され、東側1/3程は道路によって削平される。平面形は方形を呈し、南辺中央がやや内側に湾曲する。現存する西辺で2.9mを測る小形の住居跡である。カマドを通る主軸はN-12°-Wを指す。確認面からの掘り込みは南西コーナーで43cmを測り、緩い斜面上に位置するため、東に移行するにつれて壁高を減じる。床面はハードルーム中に形成され、良好に固められているが、カマド前面は特に堅緻である。周溝は南に向かって幅を広げ、南壁では35cmを測る。深さは逆に北に向かい徐々に深くなり、カマド左側で11cmとなる。ピットは北西隅とカマド左側に2本検出された。いずれも深さ10cm未満で柱穴となるものではなからう。カマドは北壁中央に位置するが、遺存はきわめて不良である。カマドの掘り方は非常に特徴的で、住居の主軸方向に対して14°程傾いている。また、壁への掘り込みが小さく、焚き口が壁から離れて床面上に位置するプランは当該時期の住居跡ではきわめて希である。

遺物の出土は少なく、カマド前面から杯、南壁下から甕片が検出されたのみである。

036号住居跡（第27図、図版15）

G1区、024号住居跡の南2m程に位置する。036・038～042号住居跡の6軒が重複して検出されたが、床面がほぼ同一レベルであり、しかも掘り込みが浅く覆土から新旧関係を明確にすることは困難である。ただ、周溝およびカマドの状況と伴出する土器から036号住居跡が最も古く構築されたようである。南西コーナーを038号住居跡によって切られ、床面中央は土壌により攪乱される。平面形はほぼ正方形を呈し、規模は南北長3.9m、東西長3.6mを測る。カマドを

通る主軸はN-64°-Eを指す。確認面からの掘り込みは、南西コーナーで10cm、北東コーナーで5cmときわめて浅い。床面はハードローム上面に形成され、比較的堅緻である。床面積は11.9㎡を測る。周溝は幅20cm、深さ4～8cmで南壁のみに検出された。ピットは不規則に9本検出されているが、支柱穴と考えられるピットは南西コーナー側の1本のみであろう。径43cmの略円形を呈し、床面より61cm掘り込まれる。南壁に掘り込まれた2本のピットは、その位置から出入口の両側に設けられた柱穴の可能性が高い。径35cmで、床面からの深さは北側が22cm、南側が33cmを測る。他のピットは性格不明である。カマドは東壁の中央やや北寄りに位置する。遺存はきわめて不良で、袖等は確認されなかった。煙道部は壁を三角形に掘り込んで設けられ、燃烧部は明確に掘り込まれなかったようである。底面にはロームブロックを貼った層がみられる。

遺物の出土は少なく、覆土中から杯2点、北西コーナーより小皿1点が検出された程度である。また、カマド燃烧部内より内黒の杯が1点ほぼ完形で出土した。

037号住居跡（第26図、図版16）

F1区、042号住居跡の西側1m程に所在する。西側の大部分が調査区域外にあたるため詳細は不明である。平面形は方形を呈すると思われ、確認面からの深さ40cmを測る。周溝は幅20cm、深さ5cm程で壁下に巡る。柱穴は不規則に2本検出された。深さは南側が50cm、北側が10cmである。南壁際に入りに伴うピットが掘り込まれる。

038号住居跡（第27図、図版15）

北東コーナーで036号住居跡を切り、西壁部分を039～041号住居跡によって削平される。カマドを通る主軸はN-9°-Wを指す。平面形は方形を呈し、規模は確認された東壁で3.1mを測る。確認面からの掘り込みは、南東コーナーで23cmを測る。床面はハードローム中に形成され、比較的堅緻である。周溝は南および東壁下に検出されたが、カマド側の壁を除き全周するものと思われる。幅20cm、深さ2～5cmとやや浅い。ピットは3本検出されたが、東側の床面上に位置するもののみが柱穴と考えられそうである。35×27cmの楕円形を呈し、床面より19cmの深さである。南東コーナーに設けられたピットは、径55cm、深さ18cmの摺り鉢状を呈する。やや浅いが、位置からみて貯蔵穴となるのであろうか。カマドは北壁中央よりやや東側に位置するが、破壊が著しいため袖等の状況は不明で、掘り方を確認したにすぎない。壁への掘り込みは少なく、燃烧部が壁の内側に位置する。底面には灰の堆積が1層みられる。

遺物の出土は少ない。「前」の墨書土器は床面中央、灰釉の広口瓶片は南壁下周溝上でそれぞれ検出された。

039号住居跡（第27図、図版15・16）

重複した6軒の住居跡群の南端に位置する。覆土および遺構の残存状況より本住居跡が最も新しく構築されたことが窺える。平面形はやや横長の長方形を呈し、規模は南北長3.9m、東西長3.1mを測る。カマドを通る主軸はN-87°-Eを指す。確認面からの掘り込みは18cm前後と浅い。床面はハードローム上面に設けられ比較的堅緻であるが、貼り床は認められない。床面積は8.8㎡を測る。周溝はカマド側の東壁を除き、幅20cm、深さ3cm平均で掘り込まれる。床面上には4本のピットが検出された。この中で柱穴と考えられるものは、西壁側に位置する径35cm程のピットである。深さは、南側11cm、北側15cmと浅い。北側の柱穴は040号住居跡の壁柱穴の可能性もあるが、上面に硬い面が認められないことより、本住居跡の柱穴と考えたほうがより自然であろう。南東コーナーに近く、92×79cmの楕円状を呈する大きなピットが検出された。床面より57cm掘り込まれ、壁はほぼ垂直である。底面から20cmほど浮いた状態で炭化材が面的に認められており、その上面に土器片が出土している。この下からは遺物の出土が認められない。これらの状況より、このピットは上に木の蓋をかぶせた貯蔵穴である可能性が強い。また、北東コーナーを切った状態で90×70cmの摺り鉢状を呈するピットがみられる。おそらく本住居跡よりも新しい所産であろう。カマドは東壁中央に位置する。袖等の遺存はきわめて不良で、左袖は040号住居跡の柱穴上に設けられる。壁を三角形に大きく掘り込んで煙道部が形成され、燃焼部の掘り込みが壁の延長線上に位置するようになる。袖は砂質粘土により構築され、燃焼部底面にはロームブロックが貼り付けられる。

遺物の出土は比較的多いが、破片となるものが主体で全形を窺えるものは少ない。ただ、カマド燃焼部の覆土上面で小皿・椀・足高高台椀等が一括して検出された。また、南西の柱穴内に落ち込むような状態で191の小皿がみられた。

040号住居跡（第27図、図版15・16）

重複する4軒の住居跡群の中央に位置するためプラン等は明確ではないが、カマドの存在と039号住居跡の床面に検出された周溝により本住居跡の構築が想定された。038号住居跡を切つてカマドが設けられていることより、本住居跡のほうが新しく、039号住居跡の床面直下から周溝が検出されていることから、本住居跡が古いことが想定される。041号住居跡との新旧関係は明確ではないが、土器様相からそれほど時間差はないと思われる。南西コーナーに遺存する周溝とカマドより、1辺3.5m程の方形プランが想定される。カマドを通る主軸はN-87°-Eを指す。039号住居跡のカマド袖下の南東コーナーに相当する位置に柱穴と思われるピットが1本検出された。カマドは東壁中央に位置するが、遺存はきわめて不良である。

遺物の出土は少ないが、カマド内覆土上面から椀と足高高台杯が一括して検出された。

041号住居跡（第27図、図版15）

042号住居跡と北壁で重複するが、カマドの状況より本住居跡のほうが新しいことは明瞭である。平面形は方形を呈し、カマドを通る主軸はN-7°-Wを指す。確認面からの掘り込みは、壁が確認された西側で12cmを測る。周溝はカマド側の北壁を除き全周するものと思われる。支柱穴と思われるピットは確認されなかったが、北東コーナーの壁際に掘り込まれたものはあるいは壁柱穴となるかもしれない。深さ13cm程度である。カマドは北壁中央に位置するが、遺存はきわめて不良で袖の痕跡と掘り方を検出したにすぎない。壁外への掘り込みは30cmで、全体の掘り方は楕円形を呈する。床面からの深さは10cm程度である。

遺物の出土はやはり少ないが、図示した土器はすべて底面から20cm浮いた状態でカマド煙道部より一括出土している。

042号住居跡（第27図、図版15）

南端を041号住居跡、東壁中央を土壌により切られる。平面形はやや横長の方形を呈し、南北長2.5m、東西長3.0mを測る。カマドを通る主軸はN-10°-Wを指す。確認面からの掘り込みは5~10cmと全体に浅い。床面はハードローム上面に形成され、貼り床も施されないが比較的堅緻である。床面積は6.2m²を測る。周溝は、カマド右側の北壁下を除き全周するものと思われる。ピットは北壁に沿って3本検出された。北東コーナーのピットは径36cmの円形を呈し、深さ16cmを測る。北西側の2本は周溝内に掘り込まれ、径18cm程度であるが、東側のは46cmと深い。補助柱穴となるであろうか。カマドは北壁中央に設けられるが、袖等の構築材は完全に破壊されているようである。壁へは奥行50cm、幅55cmで半楕円形状に深く掘り込み、煙道部は燃烧部から緩いテラスを形成して立ち上がる。燃烧部はほぼ円形を呈するが、焚き口にあたる部分はやや横長となる。床面からの深さは10cm程である。

遺物の出土はきわめて少なく、カマド底面から20cm浮いた状態で内黒の杯が2個体分出土した。また、燃烧部北側から立った状態で支脚が検出された。

045A号住居跡（第28図）

Gア区、東側に谷を望む緩い斜面上に位置する。045B号住居跡を切って構築されるが、全体のプランは明瞭ではない。平面形は方形を呈すると思われる。規模は南側が若干調査区域外となるため詳細は不明であるが、1辺3m前後となるであろう。カマドを通る主軸はN-80°-Eを指す。床面はハードローム中に形成されるがやや軟弱である。ピットは4本確認された。北壁沿いの2本は支柱穴となるものであろう。38×30cmの楕円形を呈し、深さは東側が34cm、西側が20cmを測る。南側の支柱穴は調査区域外に存在すると思われる。西側のカマドに対峙する2本のピットは出入口に伴う掘り込みであろう。壁側のピットは深さ46cmの円形を呈し、内側

のピットは51×26cmの南北に長い楕円形を呈する。深さは13cmと浅い。カマドは東壁中央に位置するが、痕跡程度の遺存状況であり詳細は不明である。

遺物の出土は少なく、ほとんど小破片である。

045B号住居跡（第28図）

045C号住居跡上面に貼り床をして構築される。南側を045A号住居跡、東側を045D号住居跡に切れ、北側は調査区域外に延びる。平面形・規模とも不明である。壁は西側部分が若干確認され、確認面から床面までの掘り込みは7cm程度である。床面はハードルーム中に形成されきわめて堅緻である。特に045C号住居跡上面は丁寧に貼り床が施される。柱穴・カマドは検出されなかった。

遺物の出土は少ないが、西壁上面で鉄製の鋤先が1点検出された。

045C号住居跡（第28図）

045A・B・Dの3軒の住居跡下で検出された小さな掘り込みで、カマド等の施設がなく性格は不明であるが、住居跡として説明する。覆土上面に貼り床が施されるため、いずれの住居跡よりも古い所産である。672号土壌により北東部分が攪乱される。平面形は方形を呈し、規模は南北長2.6m、東西長2.3mを測る。床面積は4.2m²程であろう。床面は比較的堅緻であるが、カマド・柱穴等は検出されなかった。

遺物の出土はなかった。

045D号住居跡（第28図）

045C号住居跡の貼り床を切って構築されるが、斜面上に位置するため西側のプランが若干認められるのみで、東側は不明である。北壁は調査区域外に延びるようである。確認された壁から、正方形プランを呈し、1辺3m前後の規模を有すると想定される。床面は比較的堅緻である。ピットは2本検出されたが、柱穴と考えられるのは北西側の1本のみである。672号土壌により攪乱されているが、径30cm程の円形を呈するであろう。南東壁側のピットはその位置より出入口に伴うものと思われる。床面から68cmとかなり深く掘り込まれ、壁側に傾斜する掘り方を有する。カマドは北西壁に設けられるが、主体は調査区外にあり、調査区内ではカマドより流出した砂質粘土を確認したにすぎない。

遺物の出土は少なく、図示できるものはない。

046A号住居跡（第28図）

045号住居跡群の東側で、東に谷を望む斜面上に構築される。表土の堆積が厚く、現地表面よ

り1～1.5m程下で確認された。2軒の住居跡が重複するが、本住居跡の覆土上面に貼り床を施してB号住居跡が構築されることより、本住居跡の方が古いことは明確である。東側が調査区域外にあるためプランは不明であるが、やや隅の丸い方形を呈するであろう。確認面からの深さは29cmを測る。床面はハードローム中に形成され、きわめて堅緻である。カマド・柱穴等は確認されなかった。

遺物の出土は少ないが、床面中央より内黒の高台付椀が1点出土した。

046 B号住居跡 (第28図)

046A号住居跡上に貼り床を施した住居跡である。東壁が不明であるが、南北長2.5mを測る方形プランを呈する。カマドを通る主軸はN-0°-Wを指す。確認面からの掘り込みは、西壁で最も深く42cmを測る。床面はハードローム中に貼り床を施すために非常に堅緻な状況である。周溝・柱穴は確認されなかった。カマドは北壁に設けられるが、遺存がきわめて不良で詳細は不明である。

遺物の出土は少なく、杯類が若干見られる程度である。

047 A号住居跡 (第28図、図版17)

F2区北東端、044号住居跡の南西2m程に位置する。2軒の住居跡が重複するが、本住居跡の覆土中に貼り床を施していることより、本住居跡の方が明らかに古い所産である。平面形はほぼ正方形を呈し、規模は南北長4.4m、東西長4.6mを測る。カマドを通る主軸はN-2°-Wを指す。確認面からの掘り込みは30cm平均である。床面はハードローム中に形成され、厚さ2cm程の貼り床が施される。床面積は15.1㎡を測る。周溝はカマド部分を除き幅20cm、深さ5～10cmで全周する。支柱穴は対角線上に4本検出されたが、西側の2本はやや南側にずれて掘り込まれている。北東側の柱穴が径50cm、深さ30cmとなる以外は全体的に規模が大きい。南東が上場92×80cm、深さ74cm、南西が上場107×82cm、深さ79cm、北西が上場80×68cm、深さ78cmを各々測り、いずれも楕円形プランで2段に掘り込まれる。柱穴下場の規模と掘り方の形状から柱穴はすべて抜き取られたものと考えられる。掘り方の規模の違いは柱穴の深さと関連し、深いものほど大きな掘り方を有することは当然であろう。北東コーナーと南東コーナーには深さ16cm程のピットが2本検出された。補助柱穴となるものであろう。カマドは北壁中央に位置する。B号住居跡により攪乱されており、掘り方を検出したにとどまった。

遺物は、杯を主体に比較的多く検出された。特に墨書土器が7点出土し、215以外は完形あるいは完形に近いものである。出土状況の詳細は後章で触れるが、いずれも壁直下に置かれたような状態で検出されている。

047B号住居跡（第28図、図版17）

047A号住居跡の覆土中に貼り床を施したものである。東壁が明瞭ではないが、平面形はほぼ正方形を呈し、規模は南北長3.4m、東西長3.2mを測るものと思われる。カマドを通る主軸はN-2°-Eを指す。床面は、ローム粒子・黒色土・砂質粘土を混ぜた土で貼り床を施しているため、かなり堅緻な状況である。床面積は7.6㎡程であろう。周溝は、土層断面の東壁にあたる位置に周溝状の落ち込みが認められることより、カマド部分を除き全周していたものと想定される。北西コーナーと南西コーナーに長径1m、深さ38cm程の大きなピットが2本検出された。若干疑問が残るが、柱を抜き取った跡の掘り方と思われる。カマドは北壁中央に位置する。壁への掘り込みは小さく、燃烧部が壁より内側に位置する。袖はロームブロックを突き固めた基盤の上に砂質粘土を積み上げて構築される。燃烧部底面には焼土が厚く堆積する。

遺物は壁に沿って比較的多く検出されたが、小破片となるものが多い。222は東壁、223は西壁直下で出土した。225は右袖外側で検出された。

048号住居跡（第29図、図版18）

G2区南西側、047号住居跡の南東6m程に位置する。049号住居跡とカマドを接するように構築される。平面形は横長の長方形を呈し、規模は南北長3.3m、東西長2.3mを測る。確認面からの掘り込みは、東側で22cm程である。床面はハードローム上面に形成され、中央部を中心に堅緻な状況である。床面積は5.3㎡を測る。周溝はカマド部分を除き全周する。ピットは北壁に1本検出されたが、本住居跡に伴うものではなかろう。カマドは東壁の南コーナー近くに位置する。カマドの位置に先行する土壌が掘り込まれており、土壌の覆土中に燃烧部が形成される。煙道部は壁外に40cm程延びており、立ち上がりはほぼ垂直に近い。壁外には崩落した砂質粘土が馬蹄状に遺存し、底面にはブロック化した焼土が厚く残る。本住居跡は、覆土状況より埋め戻された可能性が強い。

遺物の出土は少ないが、カマド燃烧部内より杯3個体が検出された。229の完形の内黒の杯は倒位状態でカマド上面からの出土である。床面上では南壁中央直下から232の甕の底部が検出された程度である。

049号住居跡（第29図、図版18）

048・050号住居跡に南壁と北壁を接するように構築される。平面形は方形を呈し、規模は南北長2.8m、東西長3.3mを測る。カマドを通る主軸はN-6°-Wを指す。確認面からの掘り込みは15cm平均である。床面はハードローム上面に形成され、比較的堅緻である。周溝はカマド側の北壁を除き全周する。柱穴となるものは検出されなかった。カマドは北壁中央に位置するが完全に破壊されており、掘り方を検出したにとどまった。周囲に構築材である砂質粘土が散在

する。燃焼部内にはブロック化した焼土が多く見られる。

遺物は壁沿いに散在する。南壁直下に234の高台付椀、東壁側に233の杯、235の須恵器甕、カマド前面に236の甕が検出された。

050号住居跡（第29図、図版18）

049号住居跡の南壁に接するように構築された住居跡である。北西コーナーが049号住居跡側に突出しているが、何を意図したものかは不明である。平面形はほぼ正方形を呈し、規模は南北長3.0m、東西長2.8mを測る。カマドを通る主軸はN-48°-Eを指すが、壁の主軸方向はほぼ真北に近い。確認面からの掘り込みは20cm程である。床面はハードローム中に形成され、中央付近が特に良好に踏み固められている。周溝は北東コーナーに位置するカマド部分を除き、幅15～20cmで全周する。床面上には2本のピットが検出されたが、北側の大きなものは明らかに後世の攪乱である。南壁に接する60×37cmの楕円形を呈するピットは、壁上場がやや外側に突出している状況からみて、おそらく出入り口に伴うものとなろう。床面からの深さは34cmである。カマドは北東コーナーに位置する。いわゆる隅カマドとなるものである。燃焼部は床面より10cm程掘り込まれ、煙道部は一旦平坦面を形成して壁外へ延びる。袖は現存する部分を見るかぎり、壁に砂質粘土を貼ってハの字状に広がるようである。燃焼部底面には焼土粒子を多く含んだロームブロック土を厚さ8cm程貼っている状況が観察される。

遺物は東側半分に集中する傾向が強いが、小破片となるものが主体で器形を窺えるものは高台付杯3点程である。

051号住居跡（第29図、図版18・19）

F2区とF3区にまたがって所在し、050号住居跡の西側7m程に位置する。重複する住居跡はない。平面形はやや横長の長方形を呈し、規模は南北長3.0m、東西長2.6mを測る。カマドを通る主軸はN-95°-Eを指す。確認面からの掘り込みは5cm程ときわめて浅い。床面はハードローム中に形成され堅緻な状況であるが、特に柱穴間は良好に踏み固められている。床面積は5.9m²を測る。周溝は北西コーナー部を除き確認されたが、この部分は掘り込みがほとんど認められないため、周溝が消失した可能性が強く、本来は全周していたものと思われる。床面上には5本のピットが検出された。径20cm前後、深さ10cm程と全体的に小規模である。南東コーナーのピットを除いた4本が支柱穴となるであろう。カマドは東壁中央よりやや南側に位置する。遺存はきわめて不良で、掘り方を確認したにすぎない。径40cmの円形プランを呈する。掘り方内部には焼土および砂質粘土が充満していた。床面上には焼土および炭化材が良好に遺存する。炭化材は中央に向けて放射状に認められ、おそらく寄棟構造の屋根の垂木を検出したものと思われる。カマド左側には焼土とともにカヤと思われる屋根材が炭化して出土した。また、

炭化材上に焼土が堆積する状況も認められることより、屋根上に土を被覆していた可能性も考えられる。

遺物は、カマドのある南東コーナーを中心に検出されたが、量的には少ない。

052号住居跡（第29図、図版19）

F3区、051号住居跡の北西3mに所在する。平面形はほぼ正方形を呈し、規模は南北長3.1m、東西長3.4mを測る。カマドを通る主軸は、南東コーナーにカマドが位置するためN-142°-Eを示す。壁の方向はN-7°-Eとなる。確認面からの掘り込みは15cm程である。床面はハードローム中に形成され、平坦で堅緻である。床面積は6.3m²を測る。周溝はカマド部分を除き深さ5cm平均で全周する。床面上には小規模のピットが多く検出されたが、支柱穴と考えられるものはないようである。カマドは南東コーナーに位置する。壁への掘り込みは小さく、コーナーを利用して煙道部を形成している。燃烧部の掘り方は対角線上に長い長楕円形を呈し、床面から11cmの深さである。袖は壁に沿って貼り付けられ、ハの字状を呈する。燃烧部内の焼土は少ない。床面上には部分的に焼土の遺存が見られるが、炭化材はほとんど認められない。焼失家屋という状況を考えると、家を焼く段階で主要な部材をほとんど持ち去ったことが想定されよう。

遺物の出土は少ないが、壁下およびカマド内に集中して検出された。249の杯は西壁下（倒位）、252の小皿は北壁下（正位）の出土である。カマド内からは内黒の椀2個体、小皿1個体、甕の小破片が1点廃棄されていた。いずれも被熱していない。

055号住居跡（第30図、図版20）

F3区中央に所在し、南壁で056号住居跡と重複する。土層状況および遺物様相より本住居跡の方が新しいことは明確である。北側は598号土壌に切られる。平面形はほぼ正方形を呈し、規模は南壁が明瞭ではないが、1辺4.3m程と思われる。カマドを通る主軸はN-95°-Eを指す。確認面からの掘り込みは15cmと浅い。床面はハードローム上面に形成され、056号住居跡の覆土中には砂質粘土を含んだ貼り床が施される。床面積は13.5m²を測る。周溝は、南側が不明であるが、カマド部分を除き全周していたものと思われる。床面上には4本のピットが検出された。北側の2本は径20cm程の円形プランを呈し、深さは東側が16cm、西側が24cmとなる。小規模であるが支柱穴となろう。南側の支柱穴は056号住居跡の覆土中にあるため検出できなかった。カマド脇のピットは性格不明である。西壁中央近くのピットは、出入口に伴うものである。径15cm、深さ5cm程で、主軸方向にやや長い。カマドは東壁中央に位置する。天井部は崩落するものの比較的遺存は良好である。壁を50cm程三角形に掘り込んで煙道部を形成し、楕円形を呈する。燃烧部からの立ち上がりは緩やかである。燃烧部の床面からの深さは19cmとやや深い。

袖は砂質粘土で構築され、燃焼部底面にはハードロームのブロックが貼り付けられている。その上面にブロック化した焼土層が堆積する。北西の主柱穴上には、砂質粘土を含む焼土層が検出された。

遺物の出土は少ないが、カマド内に集中する傾向が強い。燃焼部の最奥部には支脚が立った状態で検出された。カマド内の土器は255・257・260の内黒の椀、263・265の小皿と甕が1点である。床面上では壁下から完形に近い小皿類が出土した。269・270は北壁下、267・268は南壁下で、270の高台付小皿は壁上から落ち込んだような状況である。

056号住居跡（第30図、図版20）

北側で055号住居跡と重複するが、掘り込みが比較的深度のため遺存は良好である。平面形はほぼ正方形を呈し、規模は南北長5.0m、東西長4.8mを測る。カマドを通る主軸はN-8°-Eを指す。確認面からの掘り込みは東壁で最も深く48cmとなる。床面はハードローム中に形成され、柱穴間はきわめて良好に踏み固められているが、柱穴外は脆弱な状態である。床面積は16.7㎡を測る。周溝はカマド側の壁を除き全周するが、平坦ではなく西側が全体的に深くなる。床面上には対角線上に4本の主柱穴が掘り込まれる。径40~50cmで、深さは南東側が57cmとなる以外は70cm程と深くなる。北東側の主柱穴は建替えられているようである。南壁中央には主軸方向にやや長い深さ32cmの出入口に伴うピットが設けられる。東西の両壁の相対する位置に深さ30cm平均の7本の壁柱穴が配置される。北東コーナーには検出されなかったが、粘土塊が置かれていることよりこれを壁柱の支えとして代用していたことも考えられる。カマドは北壁中央に位置するが、土壌により煙道部が攪乱される。燃焼部は70×60cm、深さ16cmの略円形を呈し、袖は基底部で最大幅70cmと大きく作られ、ロームブロックを主体とした基盤の層上に粘性の強い黒色土を主体とした土を突き固める。その上に砂質粘土を積み上げて成形している。燃焼部底面にはハードロームのブロックを10cm程敷いており、その上面にブロック化した焼土が堆積する。

遺物は床面全体に比較的多く散在するが、破片となるものがほとんどで、復元できる土器は壁に沿って検出された。出土遺物の中では墨書土器の存在が注目される。16点検出され、その内カマド内から10点出土している。「吉原大島」と判読できる墨書土器が11点と主体を占める。南東主柱穴付近には鉄鏃と刀子が各1点検出された。

058号住居跡（第30図）

F3区北西側に所在し、057号住居跡の覆土中に貼り床を施して構築される。西側半分が調査区域外となる。平面形は方形を呈し、規模は確認された東壁で2.4mときわめて小さい。確認面からの掘り込みは10cm程度である。周溝・柱穴・カマドは確認されなかった。ただ、北東壁の

調査区域ライン付近でカマド部材と思われる砂質粘土が検出されており、調査区域外にカマドが存在する可能性が高い。

遺物の出土は少なく、小皿が北壁側で3点検出された程度である。

060号住居跡（第30図）

E3区南東端に所在する。059号住居跡と北東端で重複するが、覆土中にカマドが掘り込まれており、明らかに本住居跡の方が新しい。北西2/3程が調査区域外となる。平面形は正方形を呈し、規模は1辺3.4mを測る。カマドを通る主軸はN-91°-Eを指す。確認面からの掘り込みは8cm前後と浅い。床面はハードローム上面に形成され、中央部付近が良好に踏み固められている。床面積は9.4㎡と想定される。周溝は検出されなかった。ピットは南壁側に1本掘り込まれる。深さ20cmで、南北方向に長い楕円形を呈する。その位置から見て、柱穴というよりも出入口に伴うピットの可能性が高い。カマドは東壁の北東コーナー近くに位置する。遺存は不良で掘り方のみを検出したにすぎない。46×42cmの楕円形を呈し、床面から13cmの深さである。焼き口部から前面にかけて灰が厚さ5cm程で堆積する。燃烧部底面にはブロック化した焼土が見られる。

遺物の出土は少なく、302・304はカマド上面から検出された。

061号住居跡（第30図、図版22）

F4区西側に単独で所在する。平面形は正方形を呈し、規模は南北長2.5m、東西長2.4mを測る。カマドを通る主軸はN-107°-Eを指す。確認面からの掘り込みは5cm平均ときわめて浅い。床面はハードローム上面に形成され、カマド前面から柱穴にかけて良好に踏み固められている。床面積は5.4㎡を測る。支柱穴は西壁側に2本検出された。径25~30cmの円形プランを呈し、深さはいずれも5cmと浅い。周溝は確認されなかった。カマドは東壁中央に位置するが、掘り込みが浅いため詳細な状況は不明である。

遺物の出土はない。

063号住居跡（第31図、図版22）

D6・D7区にまたがって所在する。064・065号住居跡と重複するが、覆土中に065号住居跡の貼り床が認められることより、これより古く、064号住居跡よりは新しい。北壁は653・654号土壌により一部攪乱される。平面形はやや横長の長方形を呈し、規模は南北長4.0m、東西長4.6mを測る。カマドを通る主軸はN-9°-Wを指す。確認面からの掘り込みは東側で最も深く24cmとなる。床面はハードローム中に形成され全体に堅緻な状況であるが、カマド前面から柱穴間は特に良好である。床面積は12.7㎡を測る。周溝は、カマド部分を除き深さ10cm前後で全周し、

底面はほぼ平坦である。対角線上に配置された4本のピットは支柱穴である。掘り方の上場プランにはバラツキが認められるが、いずれも2段に掘り込まれる。底径に比べて上径がかなり大きいことを考えると、いずれも柱が抜き取られた可能性が強い。深さは北側の2本が50cm前後、南東が74cm、南西が65cmとなる。南壁側中央には出入口に伴うピットが設けられる。径65cm、深さ38cm程の円形プランで、掘り方が南壁に向かってやや突出する。この突出部には方形のテラスが形成される。カマド前面には径30cm、深さ11cmの小ピットが掘り込まれるが性格は不明である。カマドは北壁中央に位置する。土壌により北側が攪乱され、遺存も不良である。燃焼部は周溝の延長線上に位置し、床面から13cmの深さである。

遺物は、覆土中の小破片が多いが、304の盤は出入口ピットから南壁にかけて、307の甕は南東支柱穴と東壁の間でいずれも破片状態で検出された。

064号住居跡（第31図）

063号住居跡によって大部分が切られており、北東側の一部を検出したにすぎない。方形プランを呈し、10cm程の掘り込みである。

遺物は検出されなかった。

065号住居跡（第31図、図版22・23）

D7区に所在する。063・066号住居跡と重複するが、床面の状況より本住居跡の方が新しい。平面形はほぼ正方形を呈し、規模は南北長3.3m、東西長3.1mを測る。カマドを通る主軸はN-88°-Eを指す。確認面からの掘り込みは5cm程と浅い。床面はハードローム上面に形成され、黒色土を含んだ貼り床が施されるため、床面中央部を中心にかなり堅緻な状況である。床面積は8.2㎡を測る。周溝はカマド部分を除き、幅15cm、深さ5cmで全周する。支柱穴は対角線上に4本検出された。北側の2本がやや西にずれた位置に配置されるが、これは、カマドの位置が北に寄ったための結果であろう。径30cmの円形プランを呈し、深さは北側の2本が25cm、南東が7cm、南西が18cmと北側がやや深くなる。カマドに対面する西壁中央のピットは出入口に伴うものである。深さ12cmの円形プランを呈する。カマドは東壁北側に位置する。遺存は不良で、掘り方のみを検出したにすぎない。焚き口部からカマド前面にかけて焼土および灰が厚く堆積する。

遺物の出土はそれほど多くないが、北壁側中央の床面上で16点の管状土錘が一括して検出された。また、これに混在するように完形の鑿状工具が出土した。土器は、カマド前面でロクロ整形の甕、カマド内で内黒の椀の底部が廃棄されていた。他にカマド内では横位の状態で支脚と砥石に利用した砂岩もみられる。カマド内の遺物はすべて確認面からの出土であり、カマドを意識的に壊したのちに一括して廃棄したものと思われる。

066号住居跡（第31図、図版23）

3軒の住居跡が重複するが、065号住居跡より古い。067号住居跡との新旧関係は不明である。平面形は方形を呈し、規模は確認された東壁で3.1mを測る。カマドを通る主軸はN-93°-Eを指す。確認面からの掘り込みは5cmと浅い。床面はハードローム上面に形成され、比較的堅緻な状況である。床面積は9㎡程であろう。柱穴・周溝は確認されなかった。カマド前面には42×37cm、深さ15cmの方形を呈するピットが掘り込まれる。内部に焼土粒・炭化粒を含む土が入り込む。カマドは東壁中央に位置するが、遺存はきわめて不良で、掘り方のみを検出したにすぎない。燃焼部内にはブロック化した焼土が厚く堆積する。また、南西コーナーには部分的であるが焼土が遺存している。

遺物の出土は少ないが、カマド右側の床面上から、鏡面を上にした状態で八稜鏡が1点検出された。土器は、北東コーナーに309の内黒の椀、カマド前面のピット上面に内黒の椀の底部が出土した程度である。

067号住居跡（第31図、図版23）

3軒の住居跡の重複のため、北東側半分が不明である。平面形はほぼ正方形を呈し、規模は南北長3.0m、東西長3.3mを測る。確認面からの掘り込みは4cmと浅い。床面積は8.8㎡と推定される。南壁側に2本のピットが掘り込まれ、径25~30cmの円形を呈し、15cmの深さを測る。主柱穴となろう。カマドは検出されなかった。

遺物の出土は少なく、小破片のみで図示できるものはなかった。

068号住居跡（第31図、図版23）

D6区北側に所在する。069号住居跡と重複するが、土層状況および遺物の様相より本住居跡の方が新しい。平面形はほぼ正方形を呈し、規模は南北長2.6m、東西長2.8mを測る。カマドを通る主軸はN-12°-Wを指す。確認面からの掘り込みは北壁で11cmを測る。床面はハードローム中に形成され、比較的堅緻な状況である。床面積は5.5㎡を測る。周溝は東壁下のみに設けられ、深さ5cm程である。柱穴は南西コーナー側に1本掘り込まれる。23×26cmの略円形を呈し、深さ18cmを測る。外側に傾く掘り方を呈していることより、柱を抜き取ったことが想定される。カマドは北壁中央よりやや東側に位置する。壁への掘り込みは大きく、煙道部の傾斜はかなり急である。燃焼部の床面からの深さは4cmと浅い。袖はハの字状に短く開き、ロームブロックを突き固めた基盤土の上に砂質粘土を積んで形成される。底面にはロームブロックが敷かれ、その上面に焼土の堆積が認められる。本住居跡はロームブロックと砂質粘土を主体とした土でいっきに埋め戻された可能性が強い。

遺物の出土は少なく、カマド内より311の杯および甕の小片、床面上から312の灰釉の長頸瓶が検出された程度である。

069号住居跡（第31図、図版23）

068号住居跡により北側を攪乱される。平面形はほぼ正方形を呈し、規模は南北長3.2m、東西長3.5mを測る。カマドを通る主軸はN-17°-Wを指す。確認面からの深さは5cm平均である。床面はハードローム上面に形成され、比較的堅緻である。床面積は9.1m²程に想定される。周溝は、深さ3cmで南西コーナーのみに掘り込まれる。ピットは南西側に3本検出された。南西コーナーのピットは、径48cm、深さ9cmの規模で、深さに対して径が大きくなる。おそらく抜き取られた柱穴と思われる。南壁側ほぼ中央に、主軸方向に並んで2本のピットが掘り込まれる。深さは、北側が17cm、南側が24cmを測る。いずれも出入口に伴うピットとなる。カマドは北壁に位置するが、068号住居跡によって破壊されており、床面上で痕跡を確認したにすぎない。

本住居跡に伴う遺物は少ないが、覆土中から、「正上」等の墨書土器が3点検出された。

070号住居跡（第31図）

D6区・D7区にまたがって所在し、063号住居跡の東1m程に構築される。北西コーナーを676号土壌により若干切られる。平面形は東壁が短い不整形を呈する。規模は、最も長い部分で南北長3.0m、東西長3.1mを測る。カマドを通る主軸はN-7°-Eを指す。確認面からの掘り込みは14cm平均である。床面はハードローム中に形成され、中央部を中心に良好に踏み固められている。床面積は7.6m²を測る。周溝・柱穴は検出されなかった。カマドは北壁中央に位置する。壁への掘り込みは小さく、燃焼部はほぼ平坦である。焼土の堆積は少ない。袖はローム土の基盤層の上に砂質粘土を積んで形成される。覆土中にローム粒を多く含むことより、本住居跡は埋め戻されたことが予想される。

遺物の出土は少なく、319の杯が南壁下、318・321の杯・甕がカマド右側で検出された程度である。覆土中では、墨書土器片が1点認められる。

071号住居跡（第32図、図版22・23）

D6・7、E6・7区の4区にまたがって検出された住居跡で、9号溝により東側が攪乱される。平面形は方形を呈し、規模は、現存する西壁で3.5mを測る。カマドを通る主軸はN-23°-Wを指す。確認面からの掘り込みは、西側で14cm程である。床面はハードローム中に形成され、カマド前面から支柱穴間にかけて良好に踏み固められている。周溝は、現存する部分内ではカマドを除き全周する。支柱穴は対角線上に3本検出された。南東側は溝により削平されている。径30cm程で、深さは北西が37cm、南西が24cmとなる。北西コーナーのピットは深さ10cm

で、補助柱穴となろうか。カマドに対する南壁側には深さ20cmの小ピットと不整形の掘り込みが検出された。小ピットは出入口に伴うものと思われるが、不整形の掘り込みは溝に伴う攪乱であろう。ただ、その位置からみて、出入口ピットが存在していた可能性も強い。カマドは北壁中央に位置する。住居規模に比べて大きく造られる。壁への掘り込みは小さく、燃焼部は壁の内側に配置される。燃焼部の深さは、床面より13cmである。袖は南に真っすぐ延び、先端部でやや内湾し、ローム基盤層の上に砂質粘土を積んで構築される。底面にはロームブロックが敷かれ、焼土の堆積はあまり見られない。焚き口部には灰および炭化材を掻きだした層が認められる。

遺物の出土は少ないが、図示した土器はすべてカマド内に遺存していた。特に、322・324の杯（正位）および蓋（倒位）は左袖中に並んで置かれていた。

072号住居跡（第32図）

D5区東側の調査区西端に位置し、西側が調査区外に延びる。土壌による攪乱が著しく、詳細は不明であるが、周溝の存在により住居跡と考えた。平面形は方形を呈し、規模は1辺2m程と思われる。掘り込みはきわめて浅く、床面の状況もそれほど良好ではない。ピットは北側で3本検出されたが、柱穴となるものではなからう。カマドは検出されなかった。

遺物の出土は少なく、覆土中より土器片を検出したにすぎない。

073号住居跡（第32図、図版24）

C9区中央、遺跡の南側に所在する。南東コーナーが土壌により攪乱される。平面形は横にやや長い方形を呈する。規模は南北長2.6m、東西長3.0mを測る。カマドを通る主軸はN-9°-Wを指す。確認面からの掘り込みは20cm程である。床面はハードローム中に形成され、中央部を中心に良好に踏み固められている。床面積は6㎡を測る。周溝は、南東コーナーが攪乱されているが、カマド部分を除き全周するものと思われる。深さ3cm程で、北東コーナー付近がやや幅広となる。柱穴は確認されなかった。カマドは北壁中央に位置する。遺存は不良で、掘り方を確認したにとどまった。壁への掘り込みは半円状を呈し、燃焼部は床面より14cmの深さである。左袖の状況を見るかぎり、地山を掘り残して袖部の形状を確定し、それに砂質粘土を貼りつけて全体を形成したことが窺える。覆土状況より、本住居跡は埋め戻された可能性が強い。

遺物はカマド付近に集中する。焚き口部付近で326～328の杯が、燃焼部内で329の高台付皿が出土した。325の墨書土器は北東コーナーで倒位で検出された。326の墨書土器も倒位である。支脚はカマド前面右側からの出土である。

074号住居跡（第32図、図版24）

C9区南西端、遺跡の南端に位置する住居跡である。北東コーナーは溝により切られるが、床面までは達していない。地山は緩く西側に傾斜する。平面形は正方形を呈し、規模は南北長4.0m、東西長3.9mを測る。カマドを通る主軸はN-15°-Wを指す。確認面からの掘り込みは、東側で45cm、西側で33cmとなる。床面はハードローム中に形成され堅緻な状況であるが、特にカマド前面から支柱穴間は良好に踏み固められている。床面積は11.0㎡を測る。周溝はカマド部分を除き全周する。深さは6cm程であるが、南壁中央下のみ13cmと深くなる。また、東壁ほぼ中央から床面中央に向けて幅58cm、深さ5cmの溝が掘り込まれる。支柱穴は4本検出されたが、規模・配置ともきわめて不規則である。掘り方の大きさは、北西が径50cm、深さ12cm、北東が径34cm、深さ25cm、南側の2本が径28cm、深さ14cmを測る。南壁中央には径20cm、深さ10cmの小ピットが設けられる。出入口ピットとなろう。南壁周溝内の2本の小ピットは、壁柱穴というよりも、他の施設の支えのピットと思われる。また、南壁やや東側に壁外に張りだして方形の掘り込みが検出された。床面から17cm程上に底面を持ち、このレベルから一括して土器が検出されているが、後世の土壌と考えられる。カマドは北壁中央に位置するが、遺存は不良である。壁への掘り込みは浅く、三角形状を呈する。燃焼部の深さはほとんどなく、煙道部の傾斜は急である。底面には灰を主体とした層が厚く堆積する。

遺物の出土は比較的多いが、カマド内からはまったく検出されなかった。332・333・335の杯が床面上からの出土で、336～338は南壁の土壌内からの出土である。

075号住居跡（第32図、図版25）

東側の取り付け道路部分の調査区内で単独に検出された住居跡である。すぐ北側に急斜面を望み、住居跡の北東部分が農道により削平される。平面形は南北にやや長い長方形を呈し、規模は南北長4.3m、東西長3.7mを測る。カマドを通る主軸はN-12°-Wを指す。確認面からの掘り込みは70cmと本遺跡のなかではきわめて深い。床面はハードローム中に形成されきわめて堅緻で、特に支柱穴間は良好に踏み固められている。床面積は11.5㎡と想定される。周溝はカマド部分を除き全周すると思われるが、東に移行するに従い徐々に深くなる。この状況は、東に向けて緩い下り勾配となるため壁高が減じる結果生じたものと考えられる。支柱穴はほぼ対角線上に4本検出されたが、北東側のみやや北方向にずれる。径50～80cmと大きな掘り方で、プランは不規則である。深さは北西が43cm、南西が22cm、北東が63cm、南東が61cmと西側に比べて東側の支柱穴が深くなる。これも東側の斜面と関係する可能性が強い。また、南側の2本は2段に掘り込まれ、北側も底面がかなり大きいことから、支柱穴はすべて抜き取られたと思われる。南壁ほぼ中央には出入口に伴うピットが3本検出された。深さ33cmの円形小ピットおよび対になる方形のピットは施設の支えとしての機能を有していたものであろう。中央の大き

な方形の掘り込みは部材を抜き取る際に掘り込まれたものと思われる。カマドは北壁中央に位置するが、道路により大きく攪乱されており、詳細は不明である。

遺物の出土は比較的多いが、破片となるものが主体で図示できた土器は4個体のみである。

102号住居跡（第33図、図版25・26）

G2区東端に所在し、103号住居跡によって大半を切られる。北東側に谷を望む台地縁辺に位置する。平面形は正方形を呈し、規模は南北長3.5m、東西長3.4mを測る。主軸方向はN-1°-Eを指す。確認面からの掘り込みは15cm平均である。床面はハードルーム上面に形成され、現存する部分ではそれほど堅緻ではない。床面積は8.4m²と想定される。周溝は、幅20cm、深さ5cmで全周すると思われる。南東コーナーには深さ9cmのピットが掘り込まれる。他のコーナーでは検出されていないが、柱穴となろう。カマドは103号住居跡によって削平されたため確認できなかった。

遺物の出土はなかった。

103号住居跡（第33図、図版25・26）

102号住居跡を切って構築された住居跡である。平面形は正方形を呈し、規模は南北長3.9m、東西長3.8mを測るが、南壁西側がやや外に張り出す。カマドを通る主軸はN-2°-Eを指す。確認面からの掘り込みは20cm平均で、102号住居跡の床面より5cm程低い。周溝はカマド部分を除き全周するが、北側に移行するに従い徐々に深くなる。床面はハードルーム中に形成され、中央部を中心に良好に踏み固められている。西側1/3程が他より8cm程高くなる。床面積は10.3m²を測る。柱穴は北側に2本検出された。いずれも径22cm、深さ14cmを測る。南側の掘り込みは性格不明である。カマドは北壁中央よりやや西側に位置する。壁への掘り込みは小さく、煙道部は急傾斜で立ち上がる。燃烧部の深さは8cmを測る。燃烧部底面にはロームブロックを主体とした土を貼りつけ、上面にブロック化した焼土が堆積する。袖は砂質粘土で構築される。カマド前面には砂質粘土と炭化材を含む焼土の堆積が認められる。カマド部材の流出と想定されなくもないが、床面から浮いて検出されている状況を考えると、屋根材の崩落したものと考えたい。覆土中にローム粒子を多く含むことより、本住居跡は埋め戻された可能性が高い。

遺物の出土は多いが、東側半分特に北東側に集中して検出された。砂質粘土と焼土が遺存している部分であり、杯・壺とも混在した状況を考えると、住居の廃棄の段階で一括して投棄されたものと思われる。西壁下では鉄鏝が1点見られる。カマド内の遺物はなかった。

104号住居跡（第33図、図版26）

G3区西端、103号住居跡の東1m程に位置する。東側1/3程が道路により削平される。平面

形は方形を呈し、規模は確認された南北長で4.1mを測る。カマドを通る主軸はN-2°-Wを指す。東に傾斜する面に構築されるため、確認面からの掘り込みは西側で最も深く34cmを測る。床面はハードルーム中に形成され、中央部を中心に良好に踏み固められている。全体的に平坦であるが、南壁および西壁南半分程の壁側の床面がやや高くなる。周溝は検出されなかった。ピットは3本確認されたが、いずれも小規模である。北西側は深さ11cmを測り、柱穴となろう。南側の2本は、深さが壁側19cm、中央側が9cmとなり、出入口に伴うピットと思われる。カマドは北壁に位置するが、遺存はきわめて不良である。

遺物の出土はきわめて少なく、図示できるものはなかった。

105号住居跡（第33図）

H2区南西端、104号住居跡の南2m程に所在する。北半分が耕作により大きく攪乱されており、遺存は不良である。平面形は方形を呈すると思われ、規模は、確認された東西長で3.5mを測る。カマドを通る主軸はN-94°-Eを指す。確認面からの掘り込みは5cm程と浅く、周溝は確認されなかった。床面の詳細は不明であるが、ハードルーム中に形成され、比較的堅緻である。ピットは西側に2本検出された。北側は、長径49cmの楕円形プランを呈し、深さ24cmを測る。南側は壁に掘り込まれており、深さ46cmを測る。いずれもしっかりとした掘り込みであり、柱穴になると思われる。カマドは東壁南端に位置するが、遺存は不良で掘り方を検出したにすぎない。長径84cm、短径45cmの楕円形を呈し、床面からの深さは6cmを測る。

遺物の出土はまったくなかった。

106号住居跡（第33図、図版26）

H3区北西端、015号住居跡の南1m程に所在する。平面形はやや隅の丸い方形を呈するが、北辺が南辺より長いいため台形状となる。規模は、南北長が2.4m、東西長が北辺で3.0m、南辺で2.6mを測る。カマドを通る主軸はN-94°-Eを指す。確認面からの掘り込みは10cm程と浅い。周溝はカマド北側を除き深さ3cmで壁下をめぐる。底面はほぼ平坦である。床面はハードルーム中に形成されきわめて堅緻である。柱穴は検出されなかった。床面上の北半に集中して焼土および炭化材が多く遺存している。炭化材が少ないこととルームブロックを多く含んだ層が主体となっている状況を考え合わせると、家屋を放棄した段階で取り壊し、主要な部材を持ち出したのちに人為的に焼失させルーム土を含んだ土でいっきに埋め戻したことが想定されよう。カマドは東壁南側に位置するが、遺存が不良で掘り方のみを検出したにすぎない。壁への掘り込みは大きく、カマド全体の位置が壁外に設けられるようになる。袖は検出されなかったが、掘り方の形状から砂質粘土を壁に貼りつけて成形したことが考えられ、床面側にはあまり延びないようである。

遺物は覆土中に小破片が若干見られるのみで本住居跡に伴うものはなかった。住居を廃絶する段階で持ち出した状況が想定される。

107号住居跡（第33図、図版27）

G3区南東端に所在する。平面形は正方形を呈し、規模は南北長5.5m、東西長5.4mを測る。カマドを通る主軸はN-3°-Wを指す。確認面からの掘り込みは40cm平均で、比較的しっかりした掘り方である。周溝はカマド部分を除き全周する。幅20cm、深さ5cmで丁寧に掘り込まれ、底面は平坦である。床面はハードローム中に形成され堅緻であるが、カマド前面から主柱穴間にかけては特に良好に踏み固められている。全体的に平坦であるが、南東コーナー付近の床面がやや高くなる。床面積は20.8m²と本遺跡のなかでは大形の住居である。主柱穴は対角線上に4本検出された。いずれも長径80~100cmの対角線上に長い楕円形を呈し、2段に掘り込まれる。すべて柱が抜き取られたものである。深さは北西が62cm、北東が49cm、南東が72cm、南西が68cmを測る。北西コーナーと南西コーナーには補助柱穴が各1本ずつ掘り込まれる。深さは北側が15cm、南が35cmとなる。南側の補助柱穴は南西主柱穴と同じ掘り方内に位置するが、これは最終的な抜き取りに際して一緒に掘り広げられた痕跡である。北側の柱穴には同様の状況が見られないが、浅い掘り込みのため広げなくても抜き取ることが可能であったためであろう。南壁側中央には出入口に伴うピットが設けられる。46×37cmの主軸方向に長い楕円形を呈し、深さ25cmを測る。カマドは北壁ほぼ中央に位置する。壁への掘り込みは小さく、煙道部は比較的急に立ち上がる。燃烧部は大きく設けられるが、掘り込みはきわめて浅い。袖の遺存は不良で、燃烧部を囲むように先端部で内湾する。本住居跡の覆土は、ローム粒子およびロームブロックを多く含んだ層で構成されており、埋め戻されたことが想定される。

遺物はカマド内に集中し、甕・甑各2点が検出された。

108号住居跡（第34図、図版27）

H3・H4区にまたがって所在し、南東部分が調査区域外となる。掘り込みが浅いため壁はほとんど検出されず、遺存はきわめて不良である。平面形はほぼ正方形を呈し、規模は確認された面で南北長3.2m、東西長3.1mを測る。周溝は確認されなかった。床面はソフトローム中に形成され、部分的に踏み固められているが全体的に脆弱である。床面積は8m²程であろう。北東コーナーと南西コーナーに相対してピットが2本ずつ掘り込まれる。小規模で、深さは北東が18cm、南西が5cmを測る。床面中央には厚さ5cm程の焼土の堆積が認められる。他にも焼土と炭化材の散布が検出されたことより、本住居跡は焼失したものと思われる。カマドは確認されなかった。

遺物は小破片のみで、図示できるものはなかった。

109号住居跡（第34図、図版27）

G3・G4区にまたがって所在し、107号住居跡の南2m程に位置する。平面形はほぼ正方形を呈し、規模は南北長3.9m、東西長4.1mを測る。カマドを通る主軸はN-25°-Wを指す。確認面からの掘り込みは、南東側で40cm、北西側で30cm程でしっかりとした掘り方である。周溝はカマド部分を除き、幅25~30cm、深さ4cmで全周する。底面は平坦である。床面はハードルーム中に形成され全体に堅緻であるが、特にカマド前面から主柱穴間は良好に踏み固められている。床面積は10.7㎡を測る。主柱穴は対角線上に4本配置される。いずれも長径60~70cmの不整形を呈し、基本的に2段に掘り込まれる。深さ40cm前後とほぼ一定する。この2段掘りは柱抜き取りに際して広げられたものであろう。南東側の主柱穴には2本の掘り方が見られる。配置から外側が主となることは間違いなく、内側の柱穴は柱のみの建替えか支えとしての補助柱のいずれかの可能性が強い。南壁側の南西主柱穴寄りには深さ26cmの出入口に伴うピットが設けられる。カマドは北壁中央に位置する。壁を三角形に掘り込み、煙道部は幅12cmで細長く外側に突出する。燃焼部は略円形を呈し、床面より12cmの深さである。

遺物の出土は少なく、しかも覆土中のものが主体となる。365の杯は北西主柱穴付近で検出されており、本住居跡に伴うものである。他にカマド上面より甕の破片が数点認められるのみである。

110号住居跡（第34図、図版28）

G4区、109号住居跡の南に近接する。5軒の住居跡が重複するが、確認面からの掘り込みが浅く、しかも床面のレベルがほとんど同様という検出状況であるために新旧関係の明確な判断は困難である。ただ遺物の様相から、本住居跡より111号住居跡の方が新しいことは確実である。平面形は主軸方向に長い長方形を呈し、規模は南北長3.8m、東西長3.3mを測る。カマドを通る主軸はN-6°-Eを指す。確認面からの掘り込みは25cm程度である。周溝はカマド部分を除き基本的に全周するが、西壁の一部と南東コーナーで途切れる。深さは東壁下で2cm、西壁下で8cmと西側に移行するに従い徐々に深くなる。床面はハードルーム上面に形成され、全体的に堅緻である。床面積は9.1㎡を測る。床面上には2本の小ピットが検出された。深さ13cmと浅く、配置も不規則であるため柱穴とは断定できない。南西コーナーの周溝中には深さ51cmのピットが掘り込まれる。周溝に沿って北側に引き抜かれた痕跡が認められることより、柱穴として使用されたことが想定される。カマドは北壁中央やや西側に位置する。壁への掘り込みは小さく、袖は比較的幅広に成形される。焚き口部には15cmの深さで小さな掘り込みが認められる。北東コーナーの床面上には高さ5cm程のルームブロックを突き固めた小さな段が設けられる。上面に甕が遺存しており、何らかの目的をもった施設であろう。

遺物の出土は比較的多いが、覆土中の小破片となるものが主体である。366・368・369の杯は

床面上からの出土で、壁側に寄っている。373の甕は北東コーナーの段上からの検出で、破損しているが横位に置かれていた。6点検出された墨書土器は、366が床面上、367がカマド内となる以外は覆土中からの出土である。

111号住居跡（第34図、図版28）

110号住居跡と北壁で、117号住居跡と東側で重複する。110号住居跡より新しいことは明瞭であるが、117号住居跡との新旧関係は判断できない。ただ、本住居跡のカマド状況から見ると117号住居跡より新しい可能性が強い。また、西側で112・116号住居跡と重複するが、覆土状況から本住居跡の方が新しくなるようである。平面形は正方形を呈し、規模は南北長3.5m、東西長3.4mを測る。カマドを通る主軸はN-102°-Eを指す。確認面からの掘り込みは3~10cmときわめて浅く、北壁および南壁下のみ浅い周溝が掘り込まれるようである。床面はハードローム上面に形成され、ロームブロックと黒色土を含んだ貼り床が施されるために良好な状態となっている。西側がやや低くなる。ピットは西壁側に4本検出された。南西コーナーの掘り込みは後世の攪乱であろう。北西側は深さ19cm、南西側は深さ35cmを測り、ともに支柱穴になると思われる。西側中央の2本のピットは出入口に伴うピットであるが、2本同時か建替えられたものかは不明である。深さは南側が27cm、北側が17cmを測る。カマドは東壁中央に位置するが、痕跡を確認したのみで詳細は不明である。

確認面からの掘り込みが浅いために、遺物の出土は少ないが、完形あるいは完形に近い杯・椀が床面上から検出されている。375・376の椀は北壁寄りの出土で2個体が並んで伏せられていた。377の杯は北西柱穴上面、379・380の小皿は出入口ピットの上面からの出土である。

112号住居跡（第34図、図版28）

111号住居跡に切られ、116号住居跡と重複するが、新旧関係は不明である。平面形は方形を呈し、規模は確認された南北長で3.4mを測る。南西コーナーに深さ27cmのピットが掘り込まれるが、性格は不明である。カマド・周溝は検出されなかった。

遺物は、高台付小皿が1点認められるが、本住居跡に伴うかどうか不明である。

113号住居跡（第34図、図版28）

G4区西端、112号住居跡の西2m程に所在する。地山がやや西側に傾斜する面に構築される。平面形はほぼ正方形を呈し、規模は南北長5.2m、東西長5.4mを測る。カマドを通る主軸はN-5°-Wを指す。確認面からの掘り込みは、緩い傾斜面にあるため東側で54cm、西側で30cmとなる。周溝は幅20~25cm、深さ5cmでカマド部分を除き全周する。床面はハードローム中に形成され全体に堅緻で、カマド前面から支柱穴間は特に良好に踏み固められている。北東コーナー

には砂質粘土とロームブロック・黒色土を混ぜた土が貼り付けられており、1段高くなる。主柱穴は対角線上に4本検出された。規模は、南西側が最も小さく径70cm、北東側が最も大きく径122cmとかなり大きくなる。深さは北西が56cm、北東が54cm、南西が62cm、南東が69cmを測る。北東側の掘り方を見るかぎり、柱は抜き取られたようである。南側中央には深さ27cmの略円形の出入口ピットが設けられる。床面中央に見られる2本の小ピットは柱穴というよりも屋内施設の支えの掘り込みと思われる。深さは5cmである。カマドは北壁中央に位置する。焚き口が床面側に位置し、床面より14cm掘り込まれる。袖は砂質粘土で構築され、左袖下には深さ13cmの小ピットが検出された。

遺物の出土は比較的多いが、覆土中となるものが主体である。383の盤・385の椀は南壁中央直下、カマド左脇から387の手捏ね（倒位）、右脇から386の手捏ね（正位）が検出された。

1 1 4 号住居跡（第35図、図版28）

F 4 区とG 4 区にまたがって検出され、113号住居跡の南西1mに近接する。確認面は北西方向に向かって低くなる。平面形はほぼ正方形を呈し、規模は南北長・東西長とも4.0mを測る。カマドを通る主軸はN-95°-Eを指す。確認面からの掘り込みは南東側で28cm、北西側で8cmを測る。周溝は幅25cm、深さ10cm平均でカマド部分を除き全周する。床面はハードローム中に形成され、全体に堅緻である。床面積は11.1㎡を測る。主柱穴は、各コーナーに近接して4本検出された。深さ50~60cmで、径が南西側47cmとやや大きい以外は20~30cmと深さに対して径が小さくなる点、他の住居跡と比べて特徴的である。南壁中央には深さ24cmの南北方向に長い楕円形を呈するピットが掘り込まれる。間柱穴とも考えられるが、相対する北壁側には検出されず、しかも他の主柱穴と比べて浅い掘り方である点を考慮すると出入口に伴うピットの可能性が強い。南西隅を除く各コーナーには深さ20~25cmの壁柱穴が設けられ、南西コーナーの壁柱穴は張り出し部に位置する。カマドは東壁ほぼ中央に構築される。燃焼部底面にはロームブロックが敷かれ、上面に焼土が堆積する。

遺物はカマド周辺に集中するが、小破片となるものが多く器形を窺えるものは少ない。389・390の杯はカマド両側に正位で置かれていた。391の墨書土器は床面中央に遺存する粘土の上面からの出土である。カマド内からは388・393の杯・甕の他に平行叩き目を施した甕の破片も検出された。

1 1 5 号住居跡（第35図、図版29）

F 4 区とF 5 区にまたがって検出され、114号住居跡の南西1m程に位置する。確認面は南西側に傾斜する。平面形は正方形を呈し、規模は南北長・東西長とも5.5mを測る。カマドを通る主軸はN-15°-Eを指す。確認面からの掘り込みは、傾斜面に構築されるため北東側で45cm、

南西側で16cmとなる。周溝は幅20～25cm、深さ5～10cmでカマド側の壁を除き壁下にめぐる。床面はハードルーム中に形成され全体に堅緻であるが、カマド前面から支柱穴間は特に良好に踏み固められている。床面積は22.7㎡と本遺跡の中では大規模な住居跡である。支柱穴は対角線上に4本配置される。いずれも掘り方は楕円形状を呈し、長径90～110cmを測る。深さは北東96cm、南東80cm、南西77cm、北西84cmと北東側が最も深く、南西側が19cm程浅くなる。これは、北東から南西に向けてやや傾斜した地山上に構築されるため、柱の上面のレベルを揃えるための結果であろう。いずれも低径に比べて上径がきわめて大きく、しかも2段掘りされている状況を考えるとすべての支柱は抜き取られた可能性が強い。また、東・西壁には壁を掘り込んで柱穴が設けられる。東側はほぼ等間隔で8本掘り込まれるのに対し、西側は不規則で基本的に7本配置される。深さは20～68cmと底面が一定していない。ただ、四隅と両壁中央部は50～68cmと他に比べて掘り込みが深くなる。いくつかの壁柱穴では立て替えられた痕跡が窺える。出入口ピットは検出されなかったが、壁柱穴および支柱穴の配置から、南壁に出入口が設けられたことは明確である。東西支柱穴間中央の床面上には厚さ5cm程の焼土が堆積し、底面も焼化している。位置的になにか示唆するものが想定されるが、断定はできない。カマドは北壁中央に位置するが、遺存は不良である。壁への掘り込みは小さく、煙道部は緩やかに立ち上がる。袖の外側で幅2.8mを測り、カマドの規模はかなり大きくなる。

出土した土器は杯が主体で、破片となるものが多い。「大畠」と記された墨書土器が特徴的である。カマド内からの遺物の出土はきわめて少ないが、支脚が右袖内側底面に横位で置かれていた。廃棄段階で意図的に置かれたのであろう。

116号住居跡（第34図、図版28）

東側の大部分を110・111号住居跡によって切られており、詳細は不明である。平面形は方形を呈し、規模は確認された南北長で3.5m程を測る。確認面からの深さは北西コーナーで8cmと浅い。周溝は南壁側のみの検出であるが、壁側のレベルがやや低くなっていることから本来は全周していた可能性が強い。ピットは南側に検出されたが、柱穴とするには疑問が残る。

遺物の出土はなかった。

117号住居跡（第34図、図版28）

111号住居跡と重複して検出された住居跡である。東壁と南壁の一部を確認した程度で遺存はきわめて不良である。平面形は方形を呈し、規模は確認された南北長で3.2m程を測る。確認面からの掘り込みは10cm平均で、周溝は検出されなかった。柱穴は西壁側に2本確認されたが、111号住居跡内で検出されたピットに相当しそうで、断定することは困難である。掘り方は径80～100cmと大きく、深さは北側が16cm、南側が28cmを測る。いずれも抜き取られたものであろう。カ

マドは東壁側に認められるが詳細は不明である。

遺物の出土はなかった。

118号住居跡（第35図、図版29）

E7区、119号住居跡の南東コーナーに接するように所在する。カマドが検出されないため性格の判断は困難であるが、一応住居跡として説明する。平面形は長方形を呈し、規模は南北長4.0m、東西長3.4mを測る。長軸方向はN-27°-Eを指し、確認面からの掘り込みは7cm程である。周溝は検出されなかった。床面はハードローム上面に形成され、全体に軟質である。床面積は11.9m²を測る。ピットは床面上で12本検出された。深さは5~42cmと一定せず、配置も不規則である。

遺物の出土は少なく、北壁側で甕の小片が確認されたのみである。

119号住居跡（第36図、図版30）

E6・E7区にまたがって所在し、9号溝と主軸方向を同一にする。平面形は正方形を呈し、規模は南北長・東西長とも5.1mを測る。カマドを通る主軸はN-1°-Eを指す。確認面からの掘り込みは、地山が北西側に緩く傾斜するため南東側で最も深く54cm、北西側で最も浅く25cmとなる。周溝は幅30cm、深さ7cm平均で、カマドには達していない。しっかりと掘り込まれており、底面はほぼ平坦である。床面はハードローム中に形成され、全体に堅緻であるが、特にカマド前面から支柱穴間は良好に踏み固められている。床面積は18.8m²を測る。支柱穴は北壁・南壁に寄った位置に4本配置される。規模は、北西が径58×46cm、深さ38cm、北東が径60cm、深さ96cm、南西が径103×85cm、深さ100cm、南東が径90×84cm、深さ93cmを各々測る。北西支柱穴がかなり浅くなるが、位置から支柱穴と考えて良いであろう。また、北西を除く3本の深い支柱穴の土層状況より、柱を掘り方底面に直接立てるのではなく、底面から20~30cm程ロームブロック主体の土を積み上げたうえに柱を立てていることが窺える。南側および東側の支柱穴間には深さ20~28cmの長楕円形を呈する2段掘りのピットが検出された。壁柱穴との関係より、南側が出入口ピット、東側が間柱穴となろう。壁柱穴は東壁に4本、西壁に3本掘り込まれる。本来は各コーナーおよび壁中央に対になって6本整然と立てられたものであり、東壁の北から2番目の柱穴は補助的なものか、あるいは補修の段階で掘り込まれたものと思われる。また、壁外の煙道部両側に検出されたピットは住居跡に伴うものと思われるが確実ではない。カマドは北壁中央に位置する。壁への掘り込みは大きく、煙道部は緩やかに立ち上がる。燃焼部は長形状を呈し、床面より18cm程の深さである。燃焼部底面にはロームブロックが敷かれその上に焼土が堆積する。袖は砂質粘土を部材とするが、左袖最下層にはロームブロック土、右袖最下層には黒褐色土を突き固めた層がみられる。本住居跡の覆土はレンズ状に堆積し、覆

土中にローム粒子・ハードロームブロックを多く含むことより埋め戻された可能性が強い。

遺物は、完形あるいは完形に近い土師器杯を主体として多く検出された。特に「吉原仲家」に代表されるような墨書土器が12点出土しており、検出された土器の半数以上を墨書土器が占めている。この出土状況の詳細は後述するが、東壁と南壁直下に集中している。西北コーナーに近く床面からやや浮いて、土師器杯の底部を転用した朱墨の硯が1点出土している。本住居跡からは朱墨で記された土器は検出されておらず、混入したものと思われる。カマド内からは420の杯と429・430の甕が出土している。確認された袖上面のレベルで一括して検出されており、なかには袖上面に遺存している土器がみられることから、カマドの上半部を壊したのちに一括して土器を廃棄した過程が想定される。また、この一括土器の中央に支脚が直立しておりこれを取り囲むように杯や甕が遺存している。一見乱雑に廃棄したようであるが、あるいは意図的な所産かもしれない。

120号住居跡（第36図、図版30）

F6・F7区にまたがって所在し、東側は調査区域外となる。平面形はほぼ正方形を呈し、規模は南北長2.6m、東西長2.8mを測る。カマドを通る主軸はN-18°-Wを指す。確認面からの掘り込みは48cm平均である。周溝は幅15cm、深さ3～5cmでカマド部分を除き全周する。全体に一定した丁寧な掘り方である。床面はハードローム中に形成され、カマド前面から中央部にかけて良好に踏み固められている。床面積は7.0㎡を測る。ピットは3本検出された。西側の2本は深さ6cmと浅いが、柱穴となろう。南西の柱穴は不整形で、建替えの痕跡と思われる。東側の柱穴は確認されなかったが、掘り込みが浅いために掘り方としては残らないものの本来は存在していた可能性が強い。南壁中央に接して主軸方向に長く掘り込まれたピットは出入口に伴うものであろう。深さ18cmと柱穴より深い掘り込みである。カマドは北壁中央よりやや東側に位置する。燃烧部は床面より14cm掘り込まれ、底面にはロームブロックを7cm程敷きつめる。焼土はこの層上に堆積する。本住居跡の覆土中には全体的にローム粒子およびロームブロックを多く含んでおり、人為的に埋め戻したものである。

遺物の出土はほとんどない。住居の廃棄の段階ですべて持ち出されたのであろう。

121号住居跡（第36図、図版30）

E7区はほぼ中央、119号住居跡の南3.6m程に所在する。南側で122・123号住居跡と重複するが、貼り床状況より本住居跡の方が新しいことは確実である。平面形は正方形を呈し、規模は南北長3.0m、東西長3.1mを測る。カマドを通る主軸はN-10°-Wを指す。確認面からの掘り込みは東側で26cm、西側で16cmとなる。周溝・柱穴は検出されなかった。床面はハードローム上面に形成されるが、ロームブロックを主体とした土で貼り床が施されており、カマド前面か

ら中央部にかけて良好に踏み固められている。床面積は8.0㎡を測る。カマドは北壁中央に位置する。壁への掘り込みは横長となり、煙道部の傾斜は緩やかである。焚き口部は径40cmの円形を呈し、床面より11cm掘り込まれる。底面にはローム土を敷いており、支脚がこの層上に立てられていた。床面東側には焼土および炭化材が散在する。炭化材上に焼土が載っている部分が認められ、しかも全体的に焼土のレベルが高いことより、この焼土は屋根上に貼られていた被覆土の可能性が強い。

遺物の出土は少ない。431の杯は東壁直下からの出土である。カマド内からはほぼ現位置で支脚が検出された。

1 2 2号住居跡（第36図、図版30）

121号住居跡の貼り床により覆土上層が攪乱され、123号住居跡をロームブロックで埋めて床面を形成した住居跡である。平面形はほぼ正方形を呈し、規模は南北長3.4m、東西長3.7mを測る。カマドを通る主軸はN-8°-Eを指す。確認面からの掘り込みは35cm平均である。周溝は幅20cm、深さ7cm平均でカマド部分を除き全周するが、カマド側に移行するに従い徐々に深くなる。北西コーナー側では下位の123号住居跡の周溝を利用している。この状況から、本住居跡は123号住居跡を拡張したものとも考えられる。床面はハードローム中に形成され、123号住居跡をハードロームブロックで埋め、良好に踏み固めている。床面積は7.9㎡を測る。ピットは南東コーナーに近く1本掘り込まれる。深さは52cmである。カマドは北壁ほぼ中央に位置するが、121号住居跡により西半分の上層が攪乱されるために遺存は不良である。掘り方は比較的大きく設けられる。

遺物の出土は少なく、434の須恵器高台付杯は東側の床面上からの検出である。

1 2 3号住居跡（第36図、図版30）

122号住居跡下で検出された住居跡で、ロームブロックで埋め戻されている。平面形は正方形を呈し、規模は南北長2.7m、東西長2.8mを測る。カマドを通る主軸はN-8°-Eを指す。周溝はきわめて浅いが、カマド部分を除き全周する。北西コーナーで122号住居跡の周溝に再利用される。床面はハードローム中に形成されきわめて堅緻である。床面積は5.3㎡と小規模である。ピットは北東側に1本検出された。径35cm、深さ47cmを測る。カマドは北壁中央に位置するが、122号住居跡のカマドにより削平されており、掘り方の一部を確認したにすぎない。横長の長方形プランを呈するようである。

遺物の出土はなかった。

124号住居跡（第36図、図版31）

D9区東側に所在し、掘立柱建物跡と重複するが、柱穴自体の切合いはない。平面形はやや横長の方形を呈し、規模は南北長3.2m、東西長3.6mを測る。カマドを通る主軸はN-28°-Wを指す。確認面からの掘り込みは31cm程である。周溝は幅25cm、深さ7cmと一定し、底面も平坦である。床面はハードローム中に形成され、きわめて堅緻である。床面積は7.4m²を測る。東西両壁に相對するように掘り込まれた2本のピットが柱穴となろう。他の住居跡には見られない柱の配置である。深さは、西側が5cm、東側が47cmとなる。南壁中央に接するように設けられたピットは出入口に伴うものである。径40cm、深さ20cmの略円形を呈する。カマドは北壁中央よりやや東側に位置する。遺存は比較的良好である。壁への掘り込みは55cmと長く、煙道部は先端で急激に立ち上がる。燃焼部は細長く、焚き口部は床面側に若干突出し深く掘り込まれる。袖は短く、砂質粘土で構築されるが、基底部にはロームブロック土が厚さ5~10cm程積まれている。また、燃焼部底面にもロームブロックが敷かれており、その上面に灰・焼土の堆積が認められる。本住居跡の覆土中にはローム粒子・ロームブロック・砂粒子が多く含まれており、人為的に埋め戻した可能性が強い。

遺物の出土は比較的多いが、ほとんど覆土中からの出土であり、埋め戻しの際に一括して廃棄されたものであろう。カマド内からは436の須恵器杯が検出された。カマド内の土器と覆土中に出土した土器には時期差が認められない。

126号住居跡（第36図）

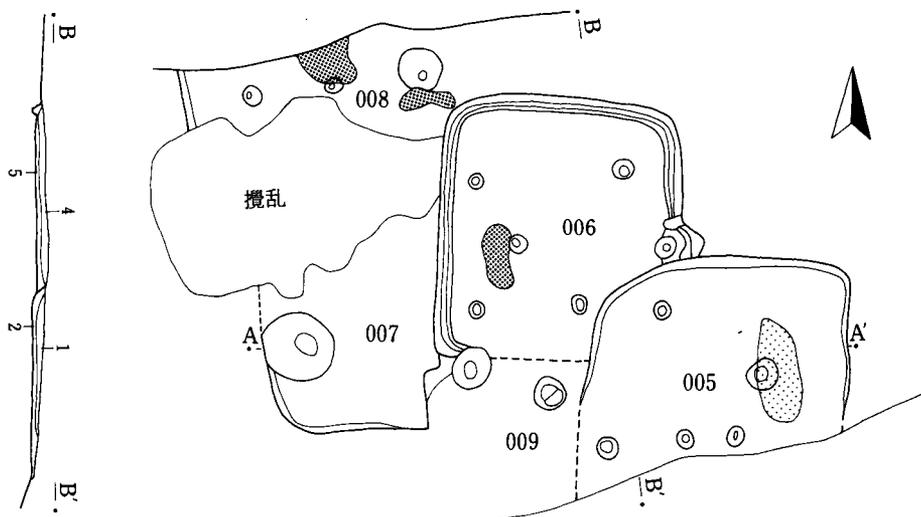
E8区南西端に所在し、11号溝と重複するが、掘り込みがきわめて浅いため新旧関係は不明である。平面形はやや横長の方形を呈し、規模は南北長2.9m、東西長3.3mを測る。カマドは削平されているが、北壁に位置していたものと思われることより、主軸方向はN-17°-Wとなる。周溝は全周すると思われるが、北西側は攪乱のため確認できなかった。床面はハードローム中に形成され比較的良好である。床面積は7.2m²と想定される。柱穴・カマドは検出されなかった。

遺物の出土はなかった。

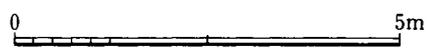
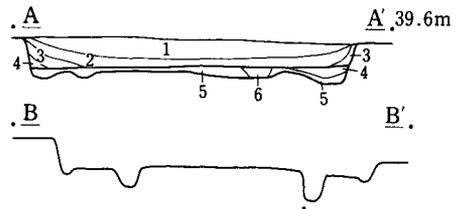
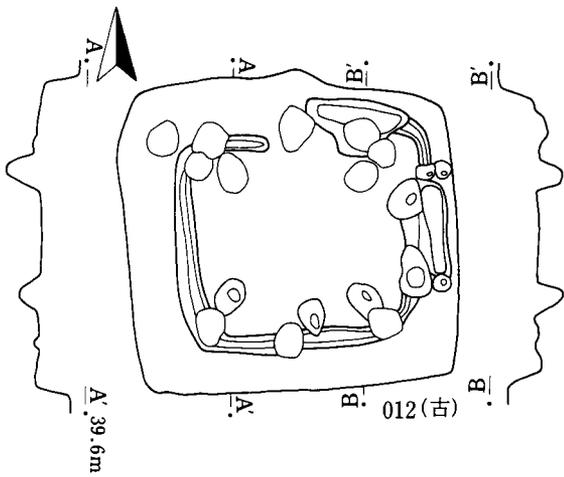
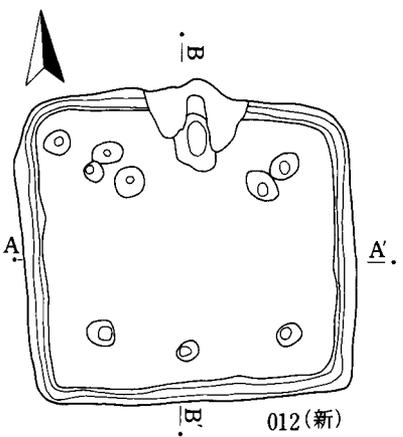
127号住居跡（第102図）

E8区の杭を中心に所在する住居跡で、9号溝と重複する。西側で周溝を確認したことにより住居跡と判断したが、遺存はきわめて不良である。平面形は方形を呈すると思われる。カマド・柱穴は確認されなかった。

遺物は、杯が1点出土したが本住居跡に伴うかどうかは断定できない。

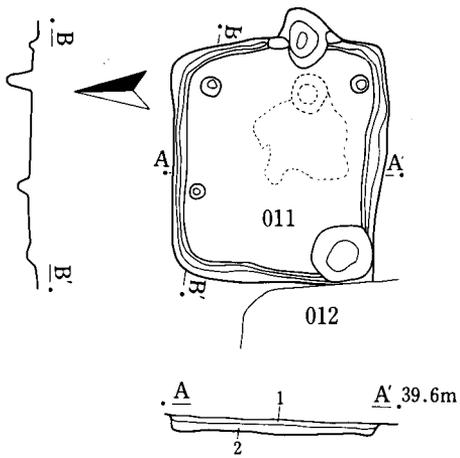


- 1層 暗褐色土(焼土粒多く含む)
- 2層 暗褐色土(ローム粒・ソフトロームブロック含む)
- 3層 黄褐色土(ロームブロック多く含む) .A
- 4層 暗褐色土(焼土粒少し含む、ローム粒多く含む)
- 5層 黄褐色土(ソフトロームブロック含む)
- 6層 暗褐色土(焼土粒少し含む)
- 7層 暗褐色土(ロームブロック多く含む)
- 8層 黄褐色土(ロームブロック多く含む)

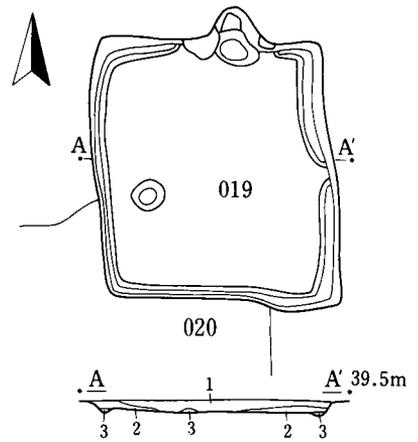


- 1層 暗褐色土(焼土粒・炭化粒少し含む、ロームブロック含む)
- 2層 暗褐色土(ローム粒・焼土粒含む)
- 3層 黄褐色土(ローム粒・焼土粒多く含む)
- 4層 黄褐色土(ロームブロック多く含む)
- 5層 黄褐色土(ロームブロック含んだ貼床)
- 6層 赤褐色土(焼土)

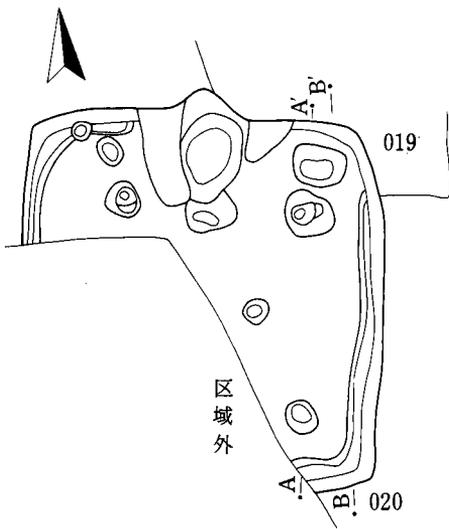
第22図 005~009・012号住居跡



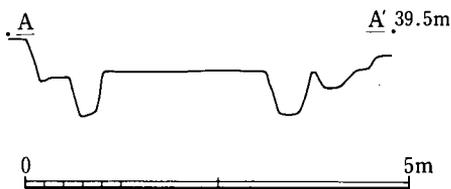
- 1層 暗褐色土(ローム粒少し含む)
- 2層 黒褐色土(焼土粒・ロームブロック少し含む)



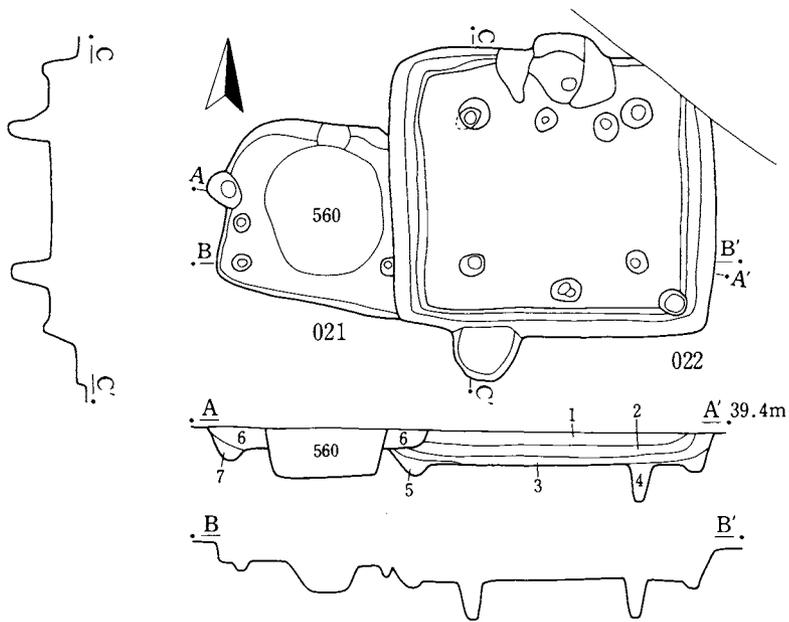
- 1層 暗褐色土(ロームブロック・焼土ブロック少し含む)
- 2層 暗褐色土(ローム粒・焼土粒少し含む、炭化材多く含む)
- 3層 黄褐色土(ロームブロック多く含む)



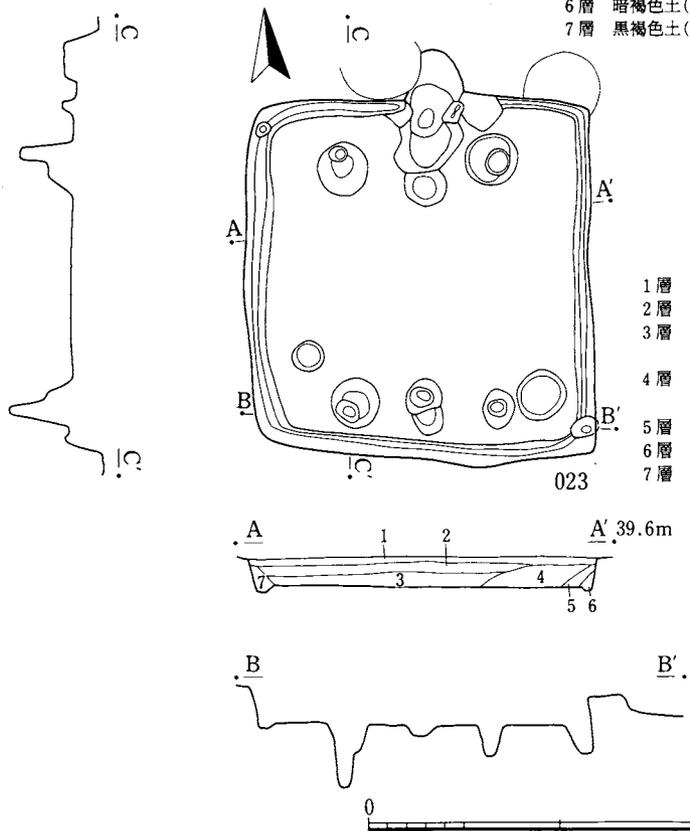
- 1層 暗褐色土(ロームブロック・焼土ブロック少し含む)
- 2層 黒褐色土(焼土ブロック・砂質土・炭化材少し含む)
- 3層 暗褐色土(焼土粒・黄褐色土ブロック少し含む)
- 4層 暗褐色土(焼土粒多く含む)
- 5層 黄褐色土(ロームブロック少し含む)



第23図 011・019・020号住居跡



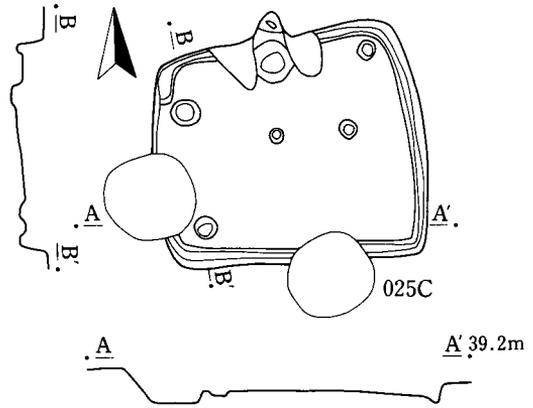
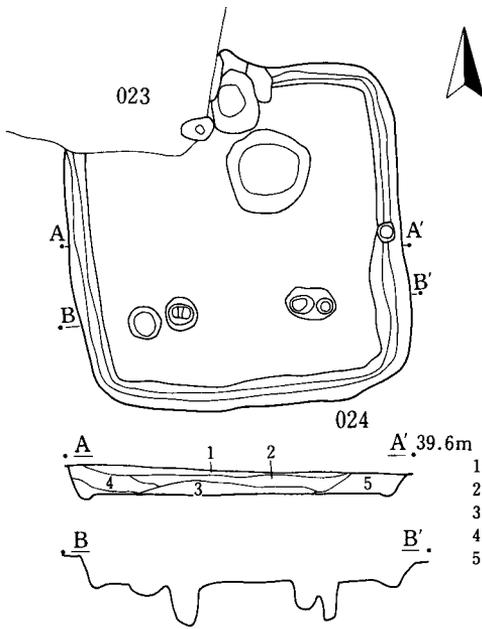
- 1層 暗褐色土(ローム粒・焼土粒少し含む)
- 2層 明褐色土(ローム粒・焼土粒少し含む)
- 3層 褐色土(ローム粒・焼土粒少し含む)
- 4層 褐色土(焼土粒少し含む)
- 5層 明褐色土(ローム粒多く含む)
- 6層 暗褐色土(ローム粒多く含む)
- 7層 黒褐色土(ロームブロック多く含む)



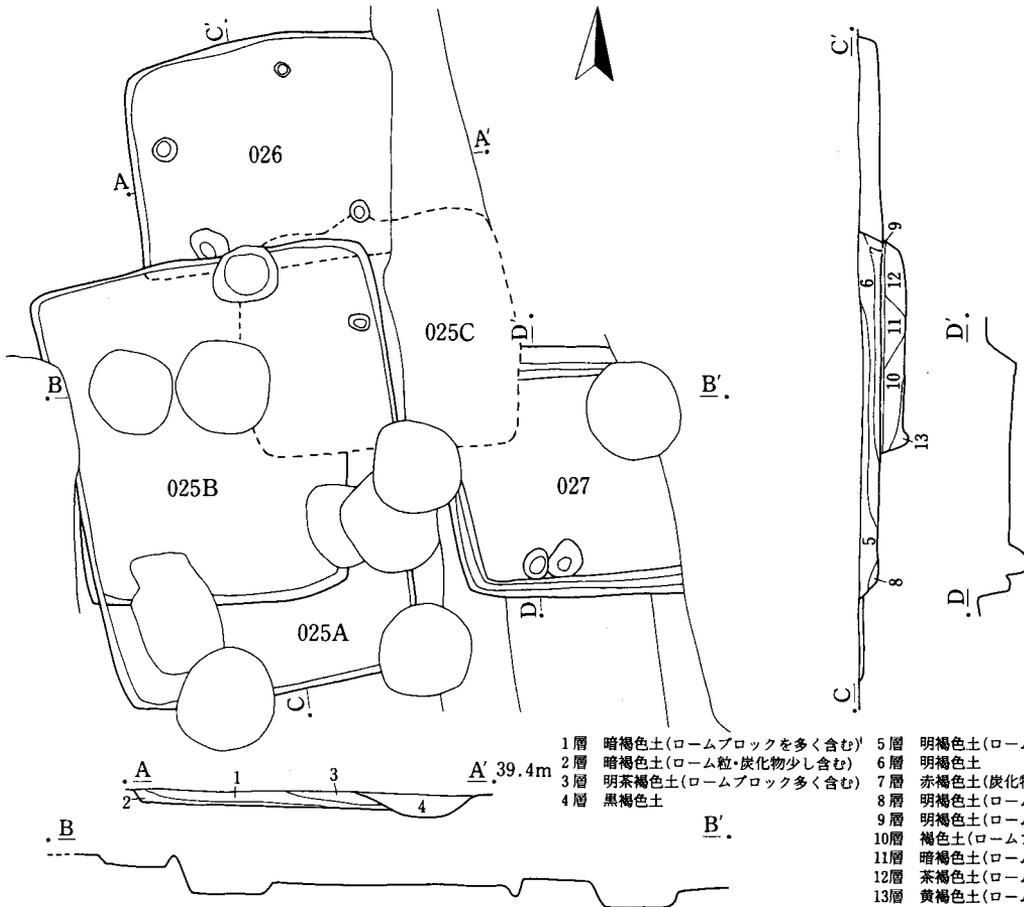
- 1層 褐色土(ローム粒・炭化物・焼土少し含む)
- 2層 茶褐色土(焼土・炭化物多く含む)
- 3層 暗褐色土(ロームブロック・焼土・炭化物少し含む)
- 4層 黒褐色土(ロームブロック・焼土少し含む、炭化物多く含む)
- 5層 暗茶褐色土(ローム粒少し含む)
- 6層 暗褐色土(ローム粒少し含む)
- 7層 明褐色土(ロームブロック含む)

0 5m

第24図 021~023号住居跡

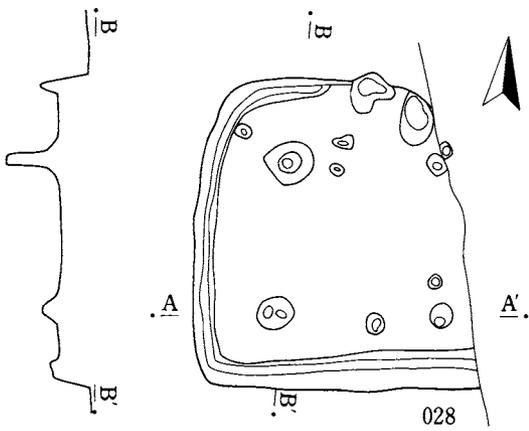


- 1層 褐色土(ロームブロック・炭化物・焼土粒少し含む)
- 2層 暗褐色土(ロームブロック・炭化物・焼土粒少し含む)
- 3層 茶褐色土(ローム粒・ロームブロック・焼土粒多く含む)
- 4層 暗褐色土(ロームブロック・ローム粒多く含む、焼土粒少し含む)
- 5層 明褐色土(ロームブロック多く含む)

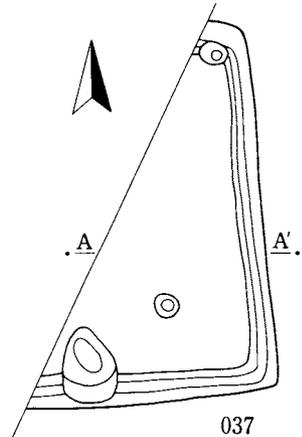


- 1層 暗褐色土(ロームブロックを多く含む)
- 2層 暗褐色土(ローム粒・炭化物少し含む)
- 3層 明茶褐色土(ロームブロック多く含む)
- 4層 黒褐色土
- 5層 明褐色土(ロームブロック少し含む)
- 6層 明褐色土
- 7層 赤褐色土(炭化物多く含む)
- 8層 明褐色土(ローム粒主体)
- 9層 明褐色土(ロームブロック含む、貼り床)
- 10層 褐色土(ロームブロック含む)
- 11層 暗褐色土(ロームブロック多く含む)
- 12層 茶褐色土(ロームブロック多く含む)
- 13層 黄褐色土(ローム粒含む)

第25図 024~027号住居跡



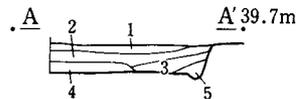
028



037



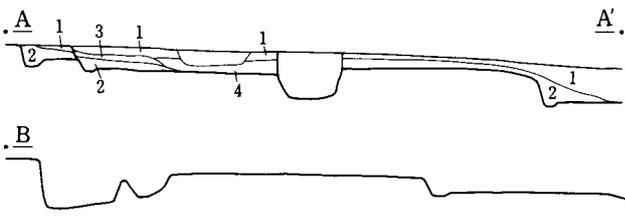
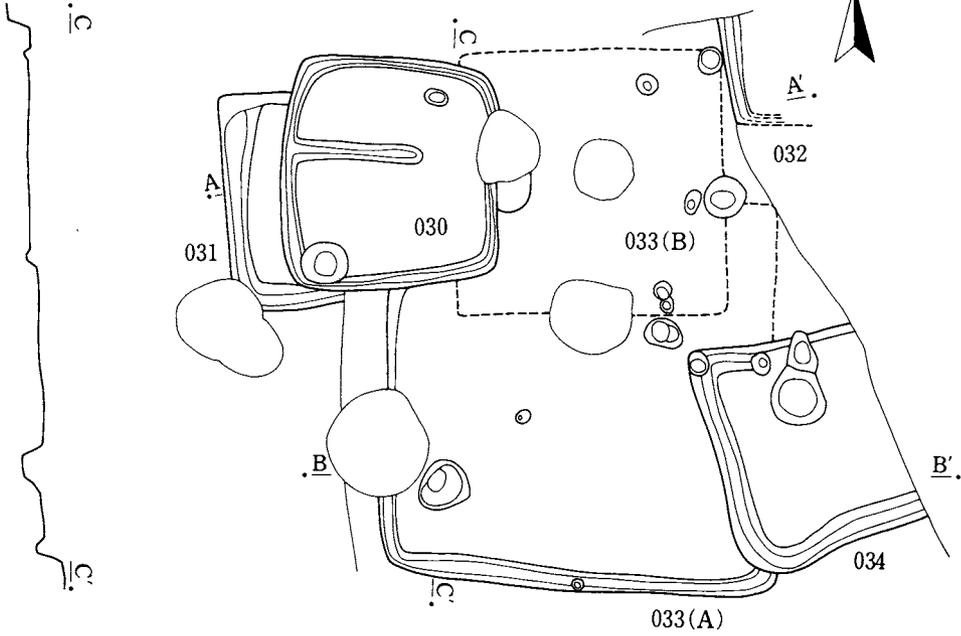
A' 39.2m



A' 39.7m

- 1層 褐色土(ローム粒少し含む)
- 2層 暗褐色土(ローム粒・焼土粒少し含む)
- 3層 明褐色土(ローム粒・ロームブロック少し含む)

- 4層 黒褐色土(ローム粒・ロームブロック少し含む)
- 5層 茶褐色土(ロームブロック少し含む)

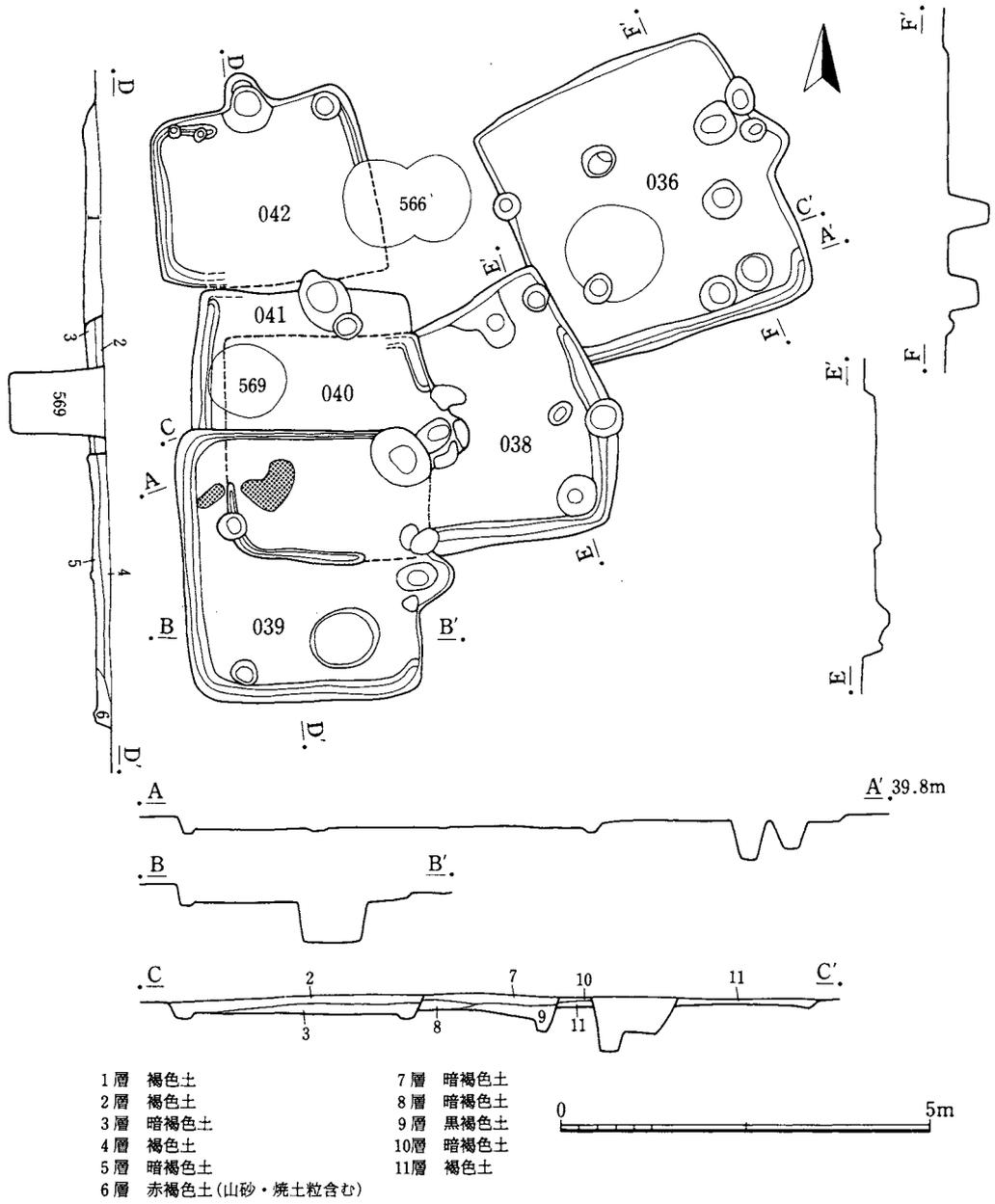


B' 39.7m

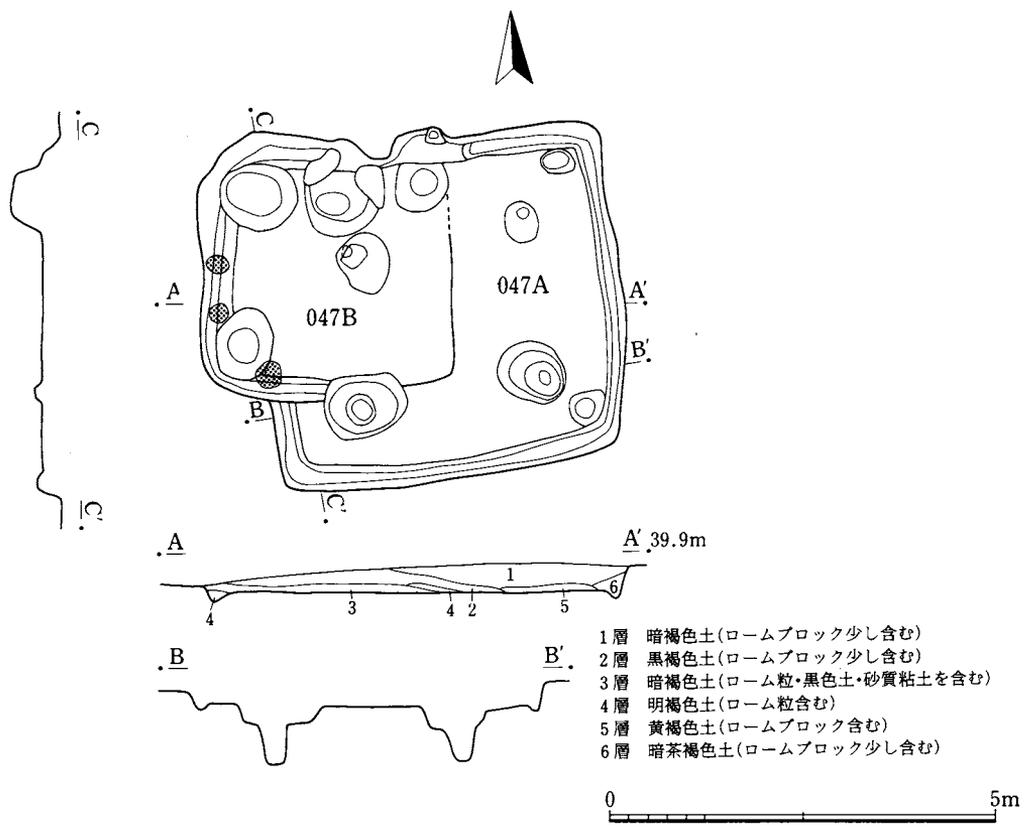
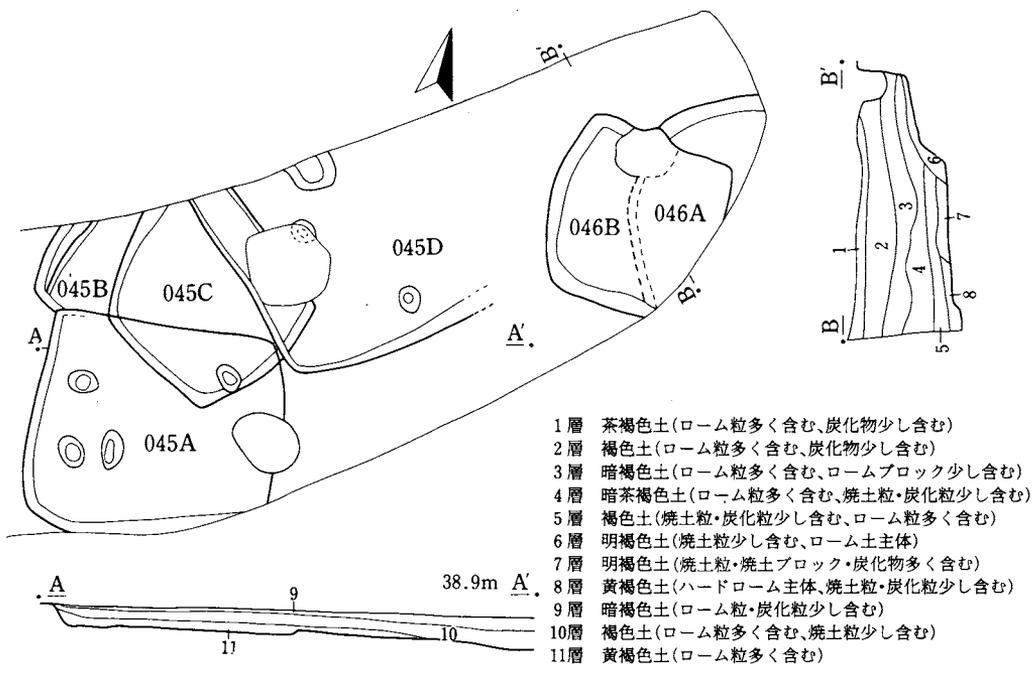


- 1層 明褐色土(ロームブロック多く含む)
- 2層 茶褐色土(ロームブロック多く含む)
- 3層 明褐色土(ロームブロック主体)
- 4層 暗褐色土(ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少し含む)

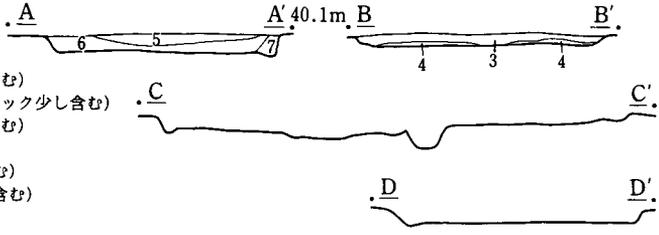
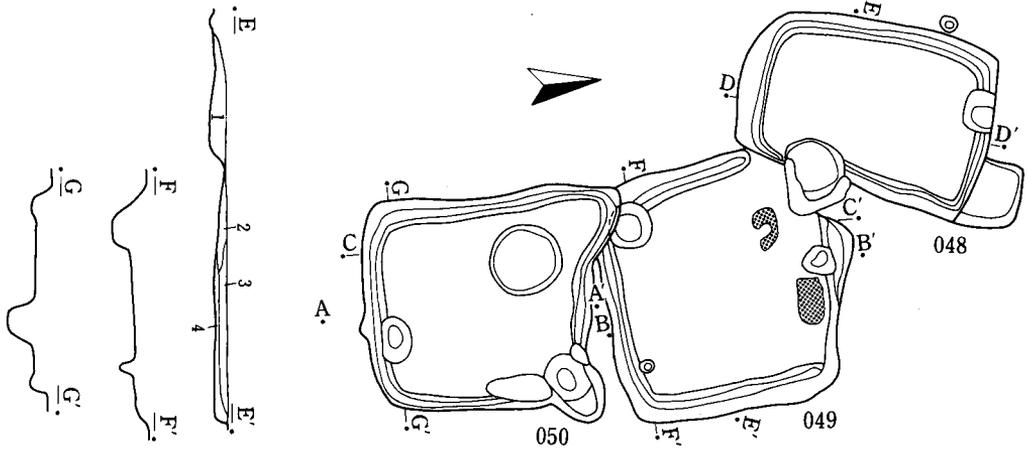
第26図 028・030～034・037号住居跡



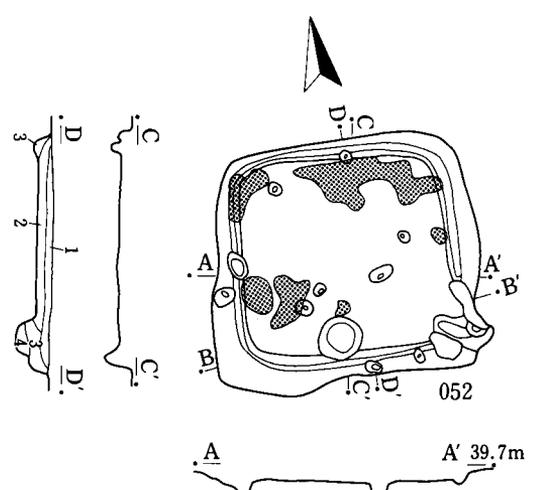
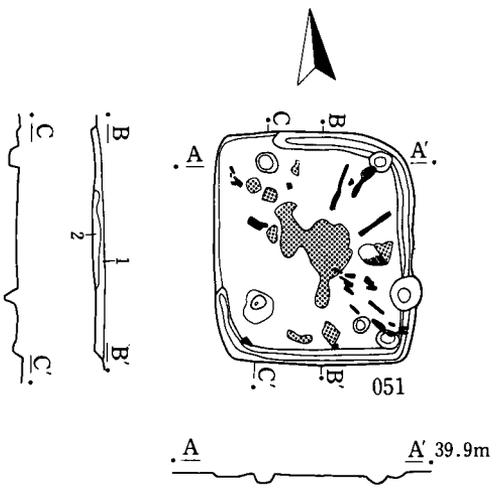
第27図 036・038~042号住居跡



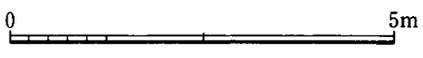
第28図 045~047号住居跡



- 1層 褐色土(ローム粒・焼土粒少し含む)
- 2層 暗灰褐色土(砂質粘土・焼土ブロック少し含む)
- 3層 褐色土(ローム粒・焼土粒少し含む)
- 4層 黒色土(炭化物多く含む)
- 5層 褐色土(ロームブロック多く含む)
- 6層 暗褐色土(ロームブロック多く含む)
- 7層 明褐色土(ローム粒多く含む)

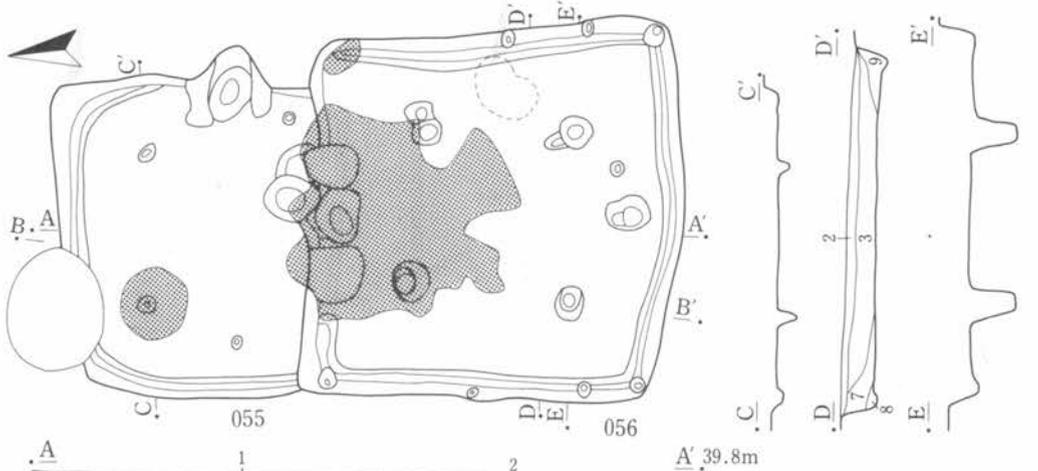


- 1層 暗茶褐色土(炭化材多く含む)
- 2層 焼土(炭化材・焼土粒少し含む)

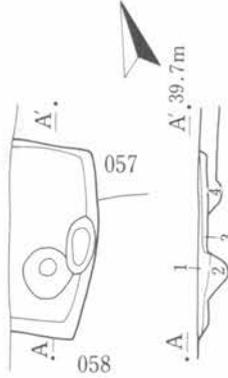
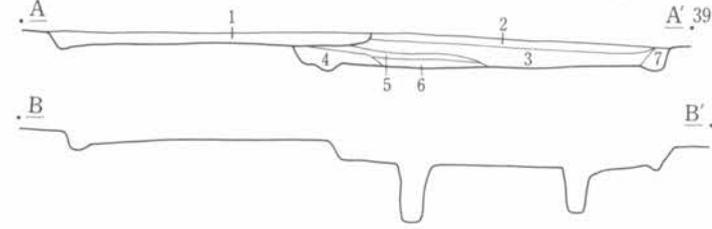


- 1層 暗茶褐色土(ローム粒多く含む)
- 2層 褐色土(ローム粒・焼土粒・炭化物粒少し含む)
- 3層 明褐色土(ローム粒多く含む)
- 4層 黒褐色土(炭化物多く含む、灰含む)

第29図 048~052号住居跡



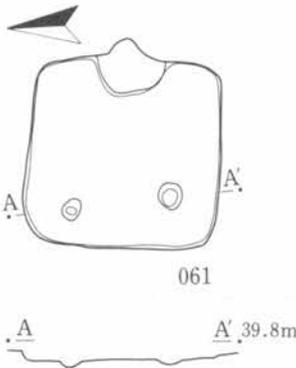
- 1層 暗褐色土(ローム粒・焼土粒含む)
- 2層 褐色土(ロームブロック・焼土粒少し含む)
- 3層 暗褐色土(ロームブロック・焼土ブロック少し含む)
- 4層 粘質山砂(ローム粒含む)
- 5層 黒褐色土(砂粒・焼土粒・炭化物多く含む)
- 6層 黒色土(ロームブロック多く含む)
- 7層 褐色土(ローム粒・炭化物粒少し含む)
- 8層 黒褐色土(ロームブロック多く含む)
- 9層 暗茶褐色土(ローム粒・ブロック粒多く含む)



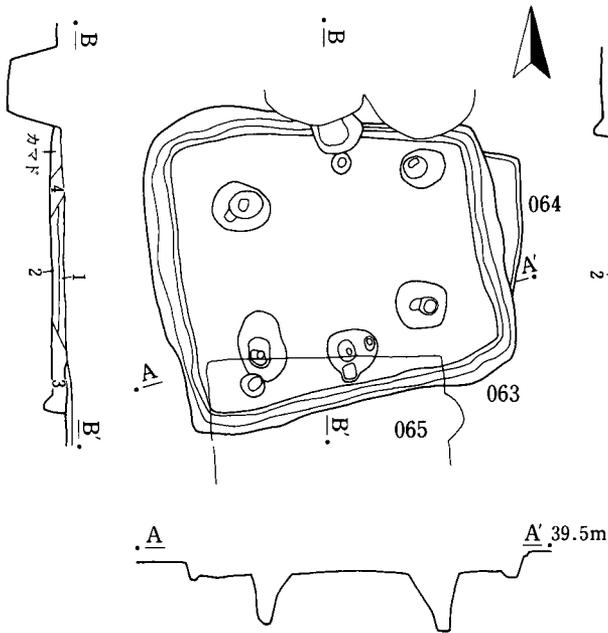
- 1層 暗茶褐色土(ロームブロック・焼土ブロック少し含む)
- 2層 灰褐色土(灰多く含む、焼土・炭化物少し含む)
- 3層 明褐色土(ローム粒含む)
- 4層 茶褐色土(ロームブロック・ローム粒多く含む、焼土少し含む)



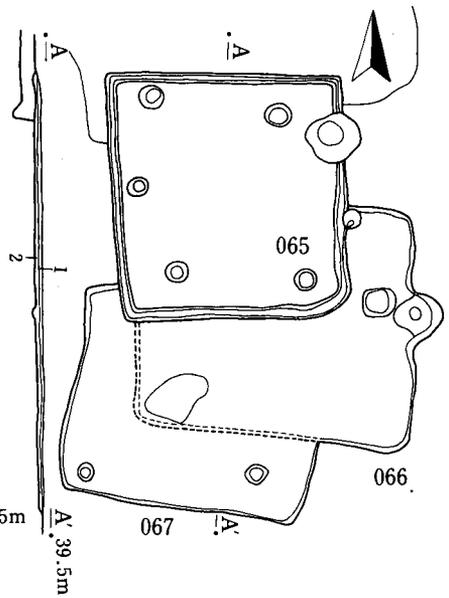
1層 暗褐色土



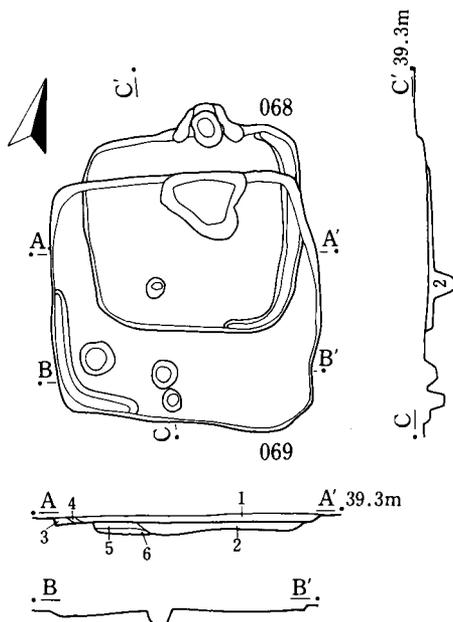
第30図 055・056・058～061号住居跡



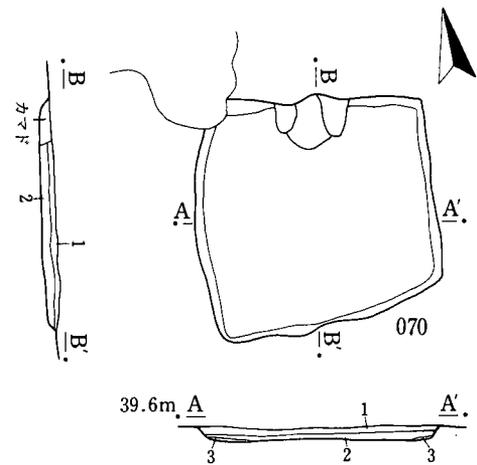
- 1層 暗褐色土(粘土粒・ローム粒含む)
- 2層 褐色土(ローム粒・焼土粒・粘土粒含む)
- 3層 明褐色土(ロームブロック主体)
- 4層 黒褐色土(やや砂質)



- 1層 暗褐色土(粘土粒・ローム粒少し含む)
- 2層 褐色土(ローム粒・焼土粒・灰少し含む)



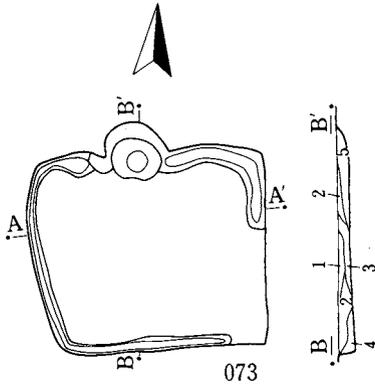
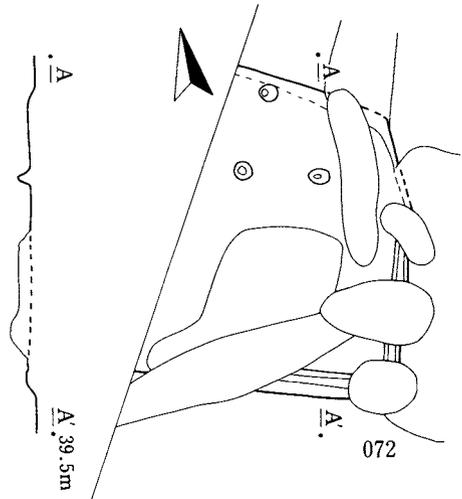
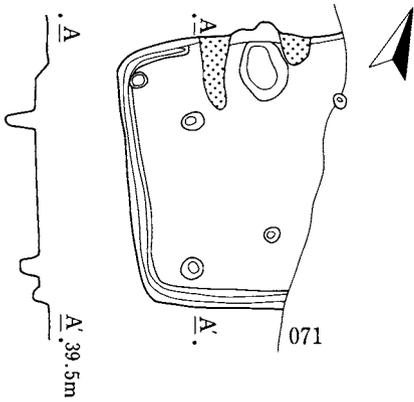
- 1層 暗褐色土(ローム粒・焼土粒少し含む)
- 2層 褐色土(砂質粘土多く含む、ロームブロック含む)
- 3層 黄褐色土(ローム粒主体)
- 4層 黒褐色土(ローム粒含む)
- 5層 暗褐色土(ローム粒・小ロームブロック含む)
- 6層 黄褐色土(ハードロームブロック含む)
- 7層 黒褐色土(ロームブロック多く含む)



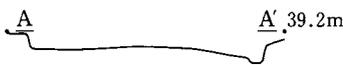
- 1層 褐色土(ローム粒少し含む)
- 2層 暗褐色土(ローム粒・砂粒・焼土粒多く含む)
- 3層 暗褐色土(ローム粒主体)



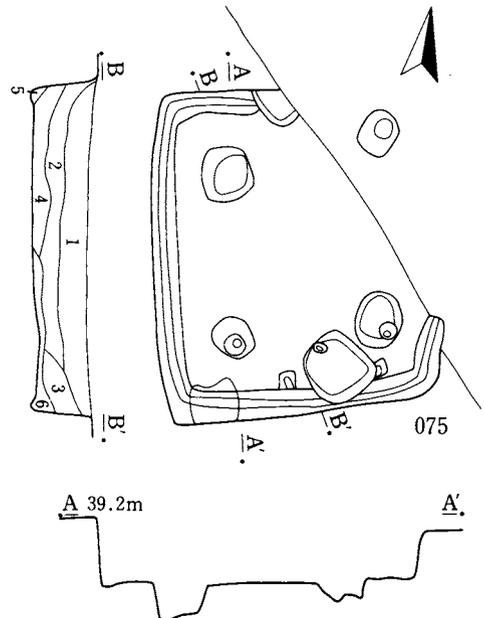
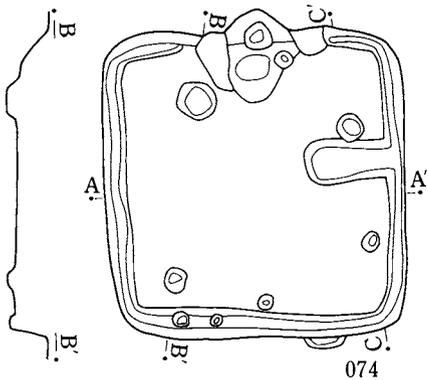
第31図 063~070号住居跡



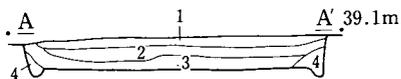
- 1層 褐色土(ローム粒・ロームブロック粒・炭化物少し含む)
- 2層 明褐色土(ロームブロック粒・炭化物少し含む、ローム粒多く含む)
- 3層 暗茶褐色土(ロームブロック粒・焼土粒・炭化物少し含む)
- 4層 明茶褐色土(ロームブロック粒少し含む、ローム粒多く含む)
- 5層 灰褐色土(砂粒・焼土粒少し含む)



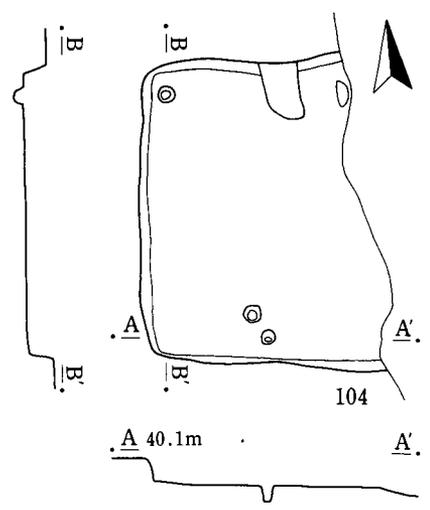
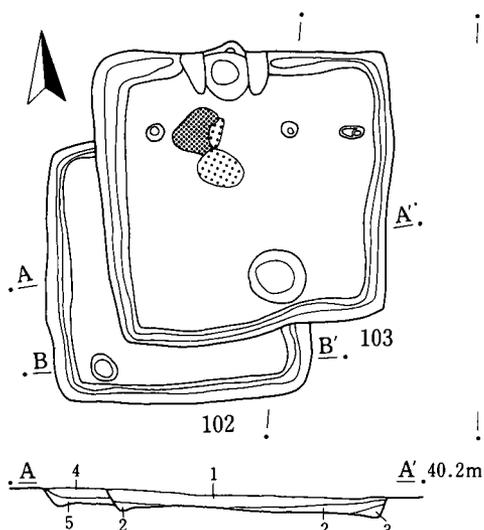
- 1層 褐色土(ローム粒多く含む、炭化物・焼土粒少し含む)
- 2層 茶褐色土(ロームブロック粒・炭化物・焼土粒少し含む)
- 3層 暗茶褐色土(ロームブロック粒・炭化物・焼土粒少し含む)
- 4層 明褐色土(ローム粒多く含む、ロームブロック少し含む)



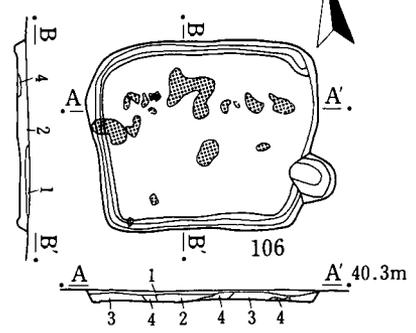
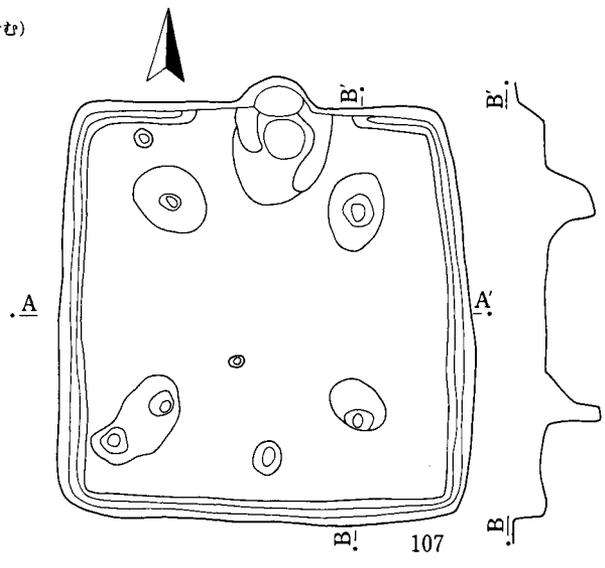
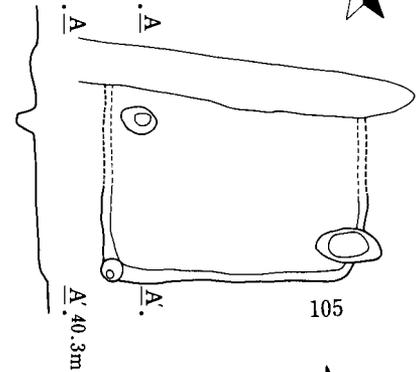
- 1層 暗褐色土(ローム粒含む)
- 2層 茶褐色土(ローム粒多く含む)
- 3層 褐色土(ローム粒多く含む)
- 4層 茶褐色土(ロームブロック多く含む)
- 5層 明褐色土(ローム土主体)
- 6層 暗褐色土



第32図 071~075号住居跡



- 1層 褐色土(ロームブロック多く含む)
- 2層 暗褐色土(ロームブロック含む、炭化物少し含む)
- 3層 黄褐色土(ローム粒含む)
- 4層 暗褐色土
- 5層 褐色土(ロームブロック含む)

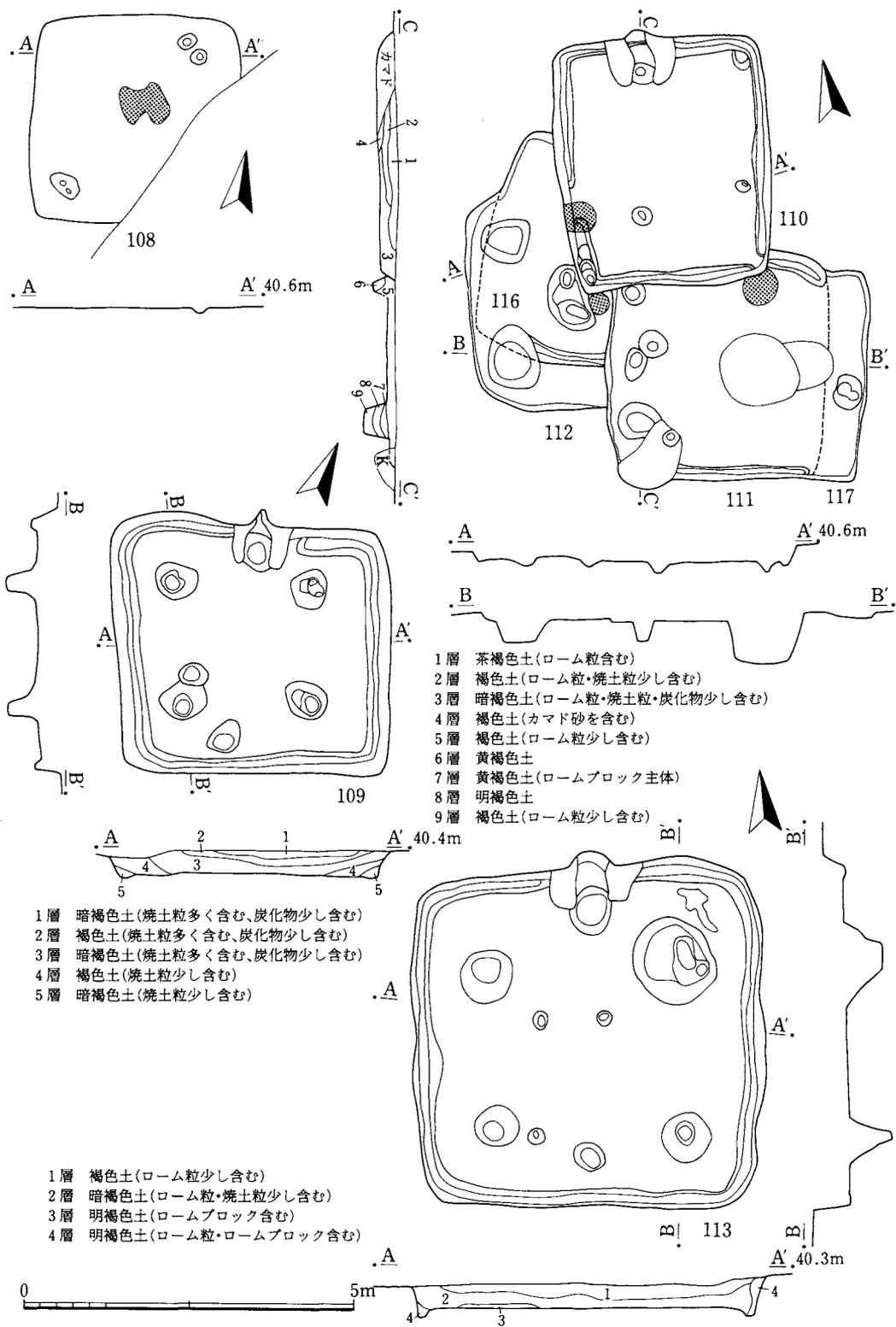


- 1層 褐色土(ローム粒・炭化物含む)
- 2層 明褐色土(ロームブロック多く含む)
- 3層 暗褐色土(ロームブロック少し含む)

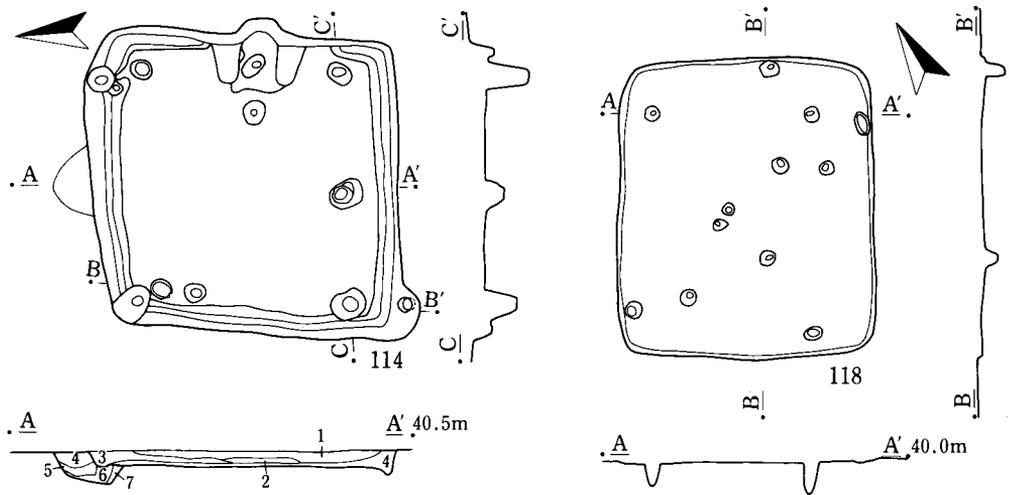
- 1層 暗褐色土(ロームブロック少し含む)
- 2層 褐色土(ロームブロック多く含む)
- 3層 黒色土(炭化物多く含む、焼土粒少し含む)
- 4層 赤褐色土(焼土多く含む、火成したローム少し含む)



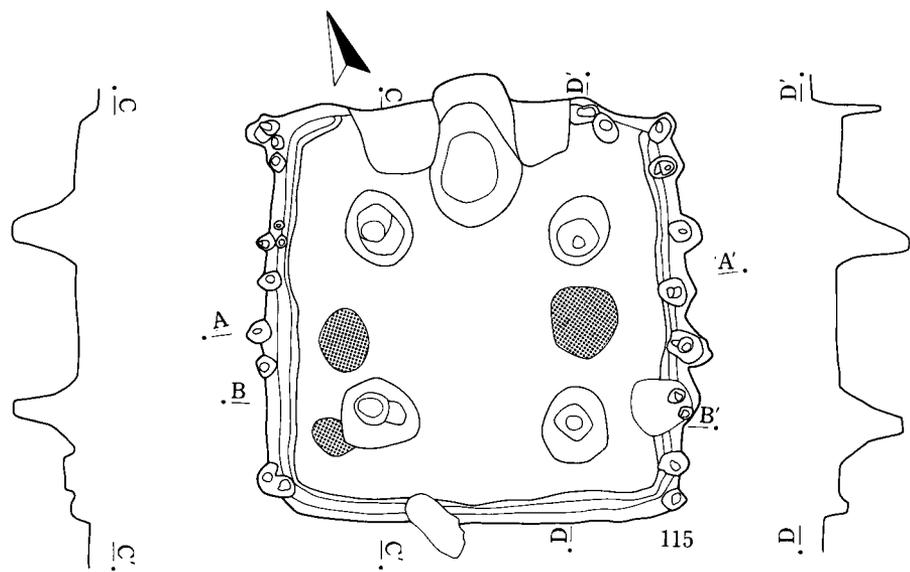
第33図 102~107号住居跡



第34図 108~113・116・117号住居跡

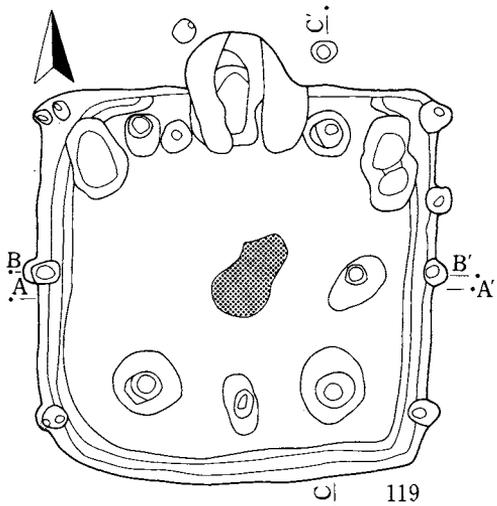


- 1層 褐色土(カマドの砂・ローム粒少し含む)
- 2層 黒色土(炭化物多く含む、焼土粒少し含む)
- 3層 暗褐色土(ローム粒少し含む)
- 4層 明褐色土(ローム粒・ロームブロック多く含む)
- 5層 褐色土(ローム粒・ロームブロック多く含む)
- 6層 暗褐色土(ローム粒少し含む)
- 7層 黄褐色土(ロームブロック主体)

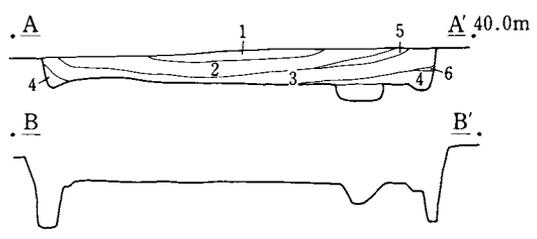


- 1層 暗褐色土(ローム粒多く含む)
 - 2層 黒褐色土(ローム粒少し含む、焼土粒・炭化粒多く含む)
 - 3層 暗黄褐色土(ローム粒・ロームブロック多く含む)
 - 4層 暗褐色土(ローム粒・ロームブロック多く含む)
- 0 5m

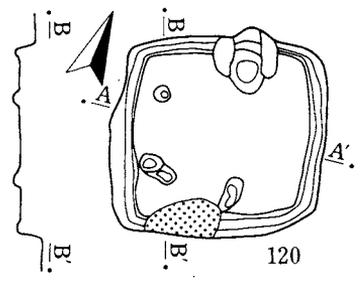
第35図 114・115・118号住居跡



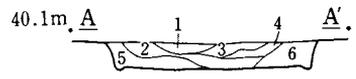
119



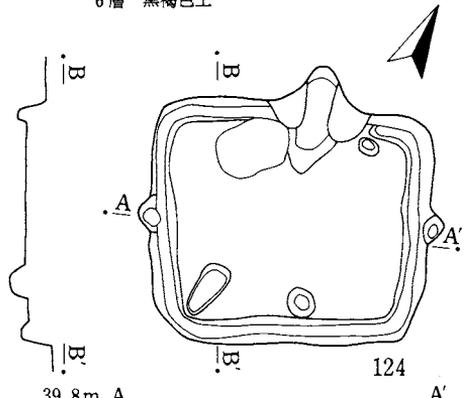
- 1層 暗褐色土(ローム粒少し含む)
- 2層 暗褐色土(ローム粒・ロームブロック多く含む)
- 3層 暗褐色土(ローム粒少し含む)
- 4層 暗黄褐色土(ローム粒・ロームブロック多く含む)
- 5層 黄褐色土(ローム粒多く含む、ロームブロック少し含む)
- 6層 黄褐色土(ローム粒主体)



120



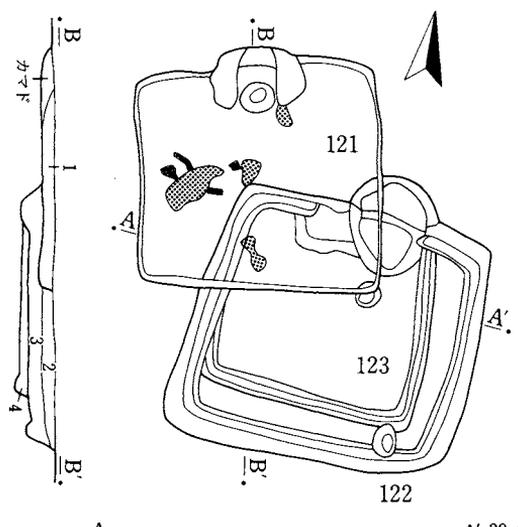
- 1層 褐色土(ローム粒少し含む)
- 2層 茶褐色土(ロームブロック・ローム粒多く含む)
- 3層 暗茶褐色土(ロームブロック少し含む)
- 4層 褐色土(ロームブロック少し含む)
- 5層 暗茶褐色土(ロームブロック少し含む)
- 6層 黒褐色土



124



- 1層 暗褐色土(ロームブロック少し含む)
- 2層 褐色土(ローム粒含む)



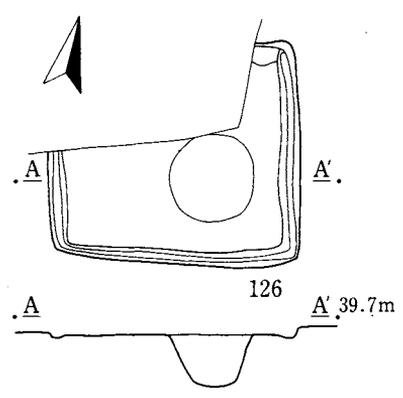
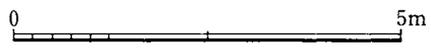
121

123

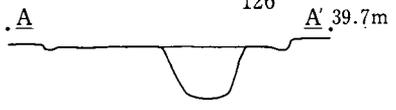
122



- 1層 暗褐色土(焼土粒・ローム粒少し含む、炭化物粒多く含む)
- 2層 茶褐色土(ロームブロック少し含む)
- 3層 褐色土(ロームブロック・炭化物・焼土粒少し含む)
- 4層 明褐色土(ロームブロック多く含む)



126



第36図 119～124・126号住居跡

住居跡出土土器

005号住居跡(第37図1~3)

1は土師器の無高台の椀である。内面黒色処理される。体部は内湾気味に開き、口縁部が外反する。回転は右で、体部外面は横ナデ、内面には粗いミガキが加えられる。底部は回転糸切り未調整である。胎土はやや粗い。2は高台付椀で、内面黒色処理される。内面のミガキは体部が四分割の弧状、底部が直線状である。底部は回転糸切り後未調整である。付け高台で断面三角形を呈し、ハの字に開く。内面は沈線状にやや凹む。1・2とも口径17.0cmを測る。3は土師器の小皿で、口径8.3cm、器高1.2cmを測る。内外面とも横ナデ調整され、底部内面には回転痕が明瞭に残る。底部外面は回転糸切り未調整である。胎土は緻密で、明褐色を呈す。

006号住居跡(第37図4~12、図版47)

4は体部が内湾気味に開き、底部が形態的に台状底部に近くなる。底部外面は回転糸切り未調整である。体部は右回転で横ナデされる。胎土中に雲母粒を多く含む。5は口径17.3cm、器高5.9cmを測る無高台の椀である。炭素吸着により内面黒色処理されるが、黒色は口縁部外面にまで及ぶ。特異な形態で、明瞭な底部を形成せず、体部からなだらかに移行している。内面は四分割の丁寧なミガキで、繰り返し施されているようでありかなり光沢がある。底部外面には手持ちのヘラケズリが加えられている。体部外面は左回転の横ナデで、口縁部外面にはミガキが施される。胎土は緻密で、赤色粒が目立つ。色調は黄褐色を呈する。6・7は高台付椀で、口縁部が外反する。回転方向は右である。内面のミガキは6が口縁部横位、体部内面四分割、底部内面横位と3段認められるが、7は口唇部まで四分割のミガキが施されており、2段となる。体部外面は6が全面横ナデ、7が横ナデ後下半に回転ヘラケズリが加えられる。底部は回転糸切り未調整である。高台は貼り付けで、6の外側には明瞭な稜が形成される。黒色処理は7のみみられる。8~10は土師器の小皿である。8・9は体部が直線的に延び、口縁部が外反するのに対し、10は体部中央で屈曲する。内外面とも横ナデ調整されるが、回転方向は8のみ左で9・10は右となる。底部は回転糸切り未調整である。口径は、8が10.6cmとやや大きく、9・10は9.0cmを測る。11は完形の小形器台である。口径9.0cm、器高4.9cmを測る。かなり丁寧に成形され、内外面とも左回転の横ナデ調整が施される。胎土中に長石・石英粒を含み、黄褐色を呈する。12は土師器の甑である。口唇部は受け口状につまみ出され、最大径を胴部上半に持つ。内外面とも丁寧なナデが施されるが、胴部外面下端は横位のヘラケズリ調整である。底部の遺存は部分的であるが、その残存状況より3孔と推定される。孔の周囲はヘラにより丁寧に面取りされる。胎土中に長石・石英を多く含む。

007号住居跡（第37図13～17、図版47・48）

13～15は土師器の杯で、13・14が口径11.0cm、器高3.2cm、15が口径10.6cm、器高3.4cmを測る。14・15は底部がやや突出し体部下端が屈曲する特徴が認められるが、これは体部下端のナデが強いための結果であり、形態的には3点とも同様である。体部外面は横ナデ、底部は回転糸切り未調整である。回転方向は、13が左、14・15が右である。色調は黄褐色を呈する。

008住居跡（第37図20～25）

20～22は土師器杯である。20は推定口径13.0cm、器高4.7cmを測る。体部内外面横ナデ調整で、ロクロ目が強く残る。底部は回転糸切り離しで、周縁に僅かにヘラケズリを加える。胎土はやや粗く、雲母粒を多く含む。21の体部内面には炭化物の付着が認められる。23～25は小形の甕である。24の底部に木葉痕の痕跡が観察される。

009号住居跡（第37図18・19、図版48）

18は完形の皿で、口径9.6cm、器高1.6cmを測る。体部中央が外側に張り出し、やや歪みが認められる。底部は回転糸切り未調整である。砂粒を多く含み、黄褐色の色調を呈する。19は高台の付く杯となろうか。体部が直線的に開く。焼成は良好で硬質である。

011号住居跡（第38図26～34、図版48）

26・27は土師器の杯である。26はほぼ完形で、口径13.6cm、器高3.5cmを測る。体部内外面とも左回転の横ナデ調整で、底部は回転糸切り未調整となる。胎土は緻密で長石・雲母粒を多く含む。黄褐色の色調を呈する。27の胎土・調整は26と同様であるが、口縁部の外反は見られない。28～33は高台付き椀で、体部内面にミガキが施される。内面黒色処理されるものは28・29・31・32である。28は完形で、口径16.4cm、器高5.9cmを測る。内面のミガキは4分割である。高台は短く、下半が外側に屈曲する。34は厚手の小形甕で、小石を多く含む。

012号住居跡（第38図35～44、図版48）

35・36は土師器の杯である。35はほぼ完形で、口径15.5cm、器高3.6cmを測る。全体にやや厚手である。内面は、上段が6分割の斜位、下段に直線状のミガキが比較的雑に施される。体部外面から底部にかけてはヘラケズリの後部分的にミガキが加えられる。口縁部外面は横位のミガキで、体部のヘラケズリの上端を揃えている。胎土は緻密で、砂粒の混入は少ない。色調は、内面暗褐色、外面赤褐色を呈する。36は小片であるが、内外面とも赤彩される。35よりは薄手である。内面は丁寧な横位のミガキ、外面はヘラケズリ後ミガキが加えられる。胎土は35と同様である。37は須恵器の杯の小片である。体部は直線状に開き、体部と底部の境は比較的不明

瞭である。口縁部に比べて底部がやや厚くなる。底部は器面が荒れているために切り離し・調整とも不明であるが、砂粒の動きよりヘラケズリ調整されているようである。胎土中に長石・石英を多く含み、灰黄褐色を呈する。常陸産であろう。38は口径17.1cmを測る大形の須恵器蓋である。つまみ部を欠く。内面に弱いカエリを有するが、かなり形骸化している。天井部外面は右回転のヘラケズリ、他は横ナデ調整される。胎土中に長石・石英・雲母粒を多く含み、色調・焼成とも37と同様である。やはり常陸産であろう。39は完形の小形甕である。口径9.2cm、器高7.7cmを測る。胴部内面から口縁部には横ナデ、胴部外面から底部にはヘラケズリが加えられる。胎土中に長石・小礫を多く含み、燈褐色を呈する。40も小形甕で、口縁部と胴部の境が不明瞭である。胴部内面から口縁部には丁寧なナデ、胴部外面はヘラケズリ後弱いナデがみられる。口縁部外面には2条の輪積痕が観察される。長石・石英粒を多く含む。41～43は土師器の甕である。41は底部を欠くが、口径21.8cmを測る。口唇部は若干つまみあげられ、受け口状となる。調整は、口縁部横ナデ、胴部内面小口によるナデ、外面幅広のヘラケズリとなる。胴部外面の器面の割れが顕著にみられる。長石・石英の大砂粒を多く含む。42は大形の甕の下半部である。胴部の器肉はかなり薄く仕上げられる。胴部内面下端に輪積痕が1条認められる。調整は、内面ヘラナデ、外面幅広のヘラケズリ、底部ヘラケズリ後ナデである。胎土中に長石・石英粒を多く含み、赤褐色を呈する。器外面には砂質粘土の付着がみられる。43は口縁部内外面に横ナデ後弱いミガキが加えられる。44は土師器の甕の口縁部片である。口縁部は短く開き、口縁部に最大径を持つ。口縁部下に低い突起が貼り付けられる。破片のため確認したのは1個であるが、対となるものであろう。胴部内面のナデは小口状工具によると思われる。長石・石英・雲母粒を多く含み、赤褐色を呈する。

019号住居跡（第39図45～48、図版48）

45・46は内面黒色処理の高台付椀である。45は左回転で成形され、体部下端に回転ヘラケズリが加えられる。底部外面は回転糸切り後全面回転ヘラケズリされる。高台は貼り付けで、ハの字状に大きく開くが、底面が磨耗しているために詳細な形状は不明である。胎土中に石英を主体とする小砂粒を多く含む。46は推定口径20.0cmと大形で、きわめて丁寧に仕上げられる。貼り付けの高台を欠く。内面のミガキは横位でかなり丁寧である。外面のミガキも丁寧であるが、横方向後斜位のミガキを重ねている。底部外面は回転糸切り未調整で、高台の貼り付け時に外周をナデる。胎土は緻密で、砂粒の混入は少ない。46とはやや異なり、洗練された胎土である。47は口径8.8cm、器高1.3cmを測る土師器の小皿である。全体に右回転の横ナデ調整が施される。底部中央は体部のナデが強いため肥厚する。底部外面は回転糸切り未調整である。長石等の小砂粒を多く含む。48は推定口径22.8cmを測る土師器の甕である。外面はかなり火を受け、口縁下から胴部全面にカマド部材の砂質粘土が付着する。口縁部はくの字状に外反し、口

唇部が凹面を形成する。口唇直下にも浅い沈線が巡る。最大径は胴部上半に位置し、比較的長胴となろう。胴部外面はヘラケズリの後丁寧なナデが施されていると思われるが、器面が荒いため詳細は不明である。胎土中に砂粒を多く含み、特に雲母粒が顕著にみられる。色調は黄褐色である。

0 2 0 号住居跡 (第39図49～52)

49～51は内外面に赤彩が施される杯である。49は推定口径15.5cmを測る。体部は左回転で横ナデ調整され、体部下端から底部全面にかけて手持ちヘラケズリが加えられる。底部中央には部分的な遺存であるが、外面から内面に向けて焼成後の人為的な穿孔が施される。さらに底部外面には「十」の焼成後の線刻が認められる。胎土は緻密で、小砂粒を多く含む。50は推定口径13.6cm、器高3.8cmを測る。体部は右回転の横ナデが施されるが、手持ちヘラケズリが口縁部近くまで加えられる。底部は全面一方向のヘラケズリで、49と同様「十」の線刻がみられる。胎土は49と同じである。51は推定口径16.6cm、器高6.0cmと深くなる。上半に火を受けているようで、器表面が荒くなり、口縁部が黒変している。底部がかなり厚い。体部は横ナデで、下端に手持ちヘラケズリが加えられる。底部には静止糸切り痕が明瞭に観察され、周縁に僅かに手持ちヘラケズリが施される。胎土は49・50と同様である。52は甕の口縁部片である。器肉はかなり薄い。口縁部はくの字状に大きく外反し、口唇部が上方につまみあげられて受け口状を呈する。胴部内面から口縁部には横ナデ、胴部外面には縦位のヘラケズリが施される。胎土中に長石・雲母粒を多く含み、赤褐色を呈する。

0 2 1 号住居跡 (第39図53、図版49)

53は完形の土師器の杯である。やや歪みがあるものの全体に丁寧に仕上げられる。口径12.5cm、器高4.6cmを測る。いわゆる箱形の器形を呈し、口唇部が若干外側につまみだされる。内面の底部と体部の境は指頭による強いナデのため明瞭に凹む。体部外面下端には手持ちヘラケズリが加えられる。底部は回転糸切り後全面に丁寧な手持ちヘラケズリが施される。胎土は緻密で、黄褐色を呈する。

0 2 2 号住居跡 (第39図54～58、図版49)

54は須恵器の杯である。1/3程の遺存であるが、推定口径15.0cm、器高4.8cmを測る。右回転で成形され、体部外面のロクロ目が顕著に残る。体部外面下端から底部にかけて回転ヘラケズリが施される。胎土中に黒色粒を含み、灰色を呈する。湖西産と思われる。55・56は内外面に赤彩が施される杯・皿である。調整は同様で、内面ミガキ、外面ヘラケズリ後ミガキである。55はほぼ完形で、口径15.4cm、器高3.5cmを測る。56は小片であるが、推定口径19.8cm、器高

2.4cmと大形の形状を呈する。口縁部の立ち上がりの稜は明瞭である。火を受けているようで、外面全体に煤が付着する。この煤は口縁部の破損面に及んでおり、ある程度破損した段階で被熱を受けたようである。57は器肉の厚い小形の杯である。体部外面はヘラケズリ後弱いミガキが加えられる。胎土は55・56と異なり、長石・石英の小砂粒を多く含む。58は木葉痕を残す手捏ね土器である。外面には幅2cm程の輪積痕がみられる。長石・雲母粒を多く含む。

023号住居跡（第40図59～147、図版49・50）

59～82は土師器の杯である。59～62はほぼ同様のプロポーシオン・調整である。口径12cm、器高4cm前後を測る。体部は内湾気味に立ち上がり、口唇部でやや外反する。調整は体部内外面横ナデ、底部回転糸切り後全面手持ちヘラケズリが施される。回転方向はすべて右である。胎土中に長石・石英粒を含み、黄褐色を基調とする。すべて墨書が記される。59は「□香取郡大杯郷中臣人成女之替承□」、60は「□香取郡大杯郷中臣人成女替□ □年四月十日」と判読できる。61は墨痕が薄く明確に判読できないが、「替」の字の存在により59・60と同様の交替に関する内容と思われる。62は体部外面と底部外面に認められる。体部墨書は字体がやや大きい、61と同様な内容であろう。底部は「主」を墨で抹消した可能性が高い。63は体部が直線的に開く。59～62よりやや深くなる。底部は回転糸切りで、周縁に手持ちヘラケズリが加えられる。胎土はやや粗く、砂粒を多く含む。墨書は体部外面に上下2段にみられるが、59～62とは向きを異なる。上段と下段では字体・筆とも違っており、一部重複していることから時間的差をもって記されている可能性が高い。おそらく、「□加万附申上□」の後に「福」「□」を付記したのであろう。64は小片であるが、体部外面に判読不明の墨書が認められる。体部下端には手持ちヘラケズリが加えられる。65・66は口径12.5～13.0cm、器高3、8cmとやや扁平になる。器形・調整とも同様に口縁部はやや肥厚して外反する。体部下端と底部周縁には手持ちヘラケズリが加えられる。底部は回転糸切り離しで、回転方向は右である。胎土中に雲母等の中砂粒を多く含む、黄褐色を呈する。底部外面に墨書が記され、65は「主」、66は「大門」と判読される。67は底部片で、全面ヘラケズリ調整される。色調は黄白色を呈する。底部外面には「大家」と墨書される。68は口径11.6cm、器高3.9cmを測る。体部下端から底部全面にかけて手持ちヘラケズリされる。底部外面の墨書は「息」となるか。69は推定口径12.0cm、器高3.2cmとかなり扁平になる。回転方向は右で、底部は回転糸切りされる。体部下端から底部周縁にかけて手持ちヘラケズリされる。底部外面の墨書は2文字であるが、明瞭に判読できない。70は口径14.0cm、器高4.2cmとやや大形になる。口縁部の外反は比較的大きい。体部内面はヘラミガキ後黒色処理が施される。回転の痕跡は非常に弱く、体部下端から底部全面は手持ちヘラケズリが加えられる。底部外面の墨書は、欠損と器面の磨耗のため偏の一部を確認したにすぎない。71は口径13.5cm、器高3.9cmを測り、口縁部がやや外反する。内外面とも丁寧な右方向の横ナデが施され、体

部下端は手持ちヘラケズリとなる。底部は回転糸切り後手持ちヘラケズリが加えられる。胎土中に長石・赤色粒子を多く含む。色調は黄褐色を呈する。体部下端から底部にかけて焼成時の火襷痕がみられる。72・74はほぼ同形態の杯である。回転方向は左となる。体部下半に丸味を有し、開きはあまり大きくない。口唇部で若干外反する。整形も同様で、底部は回転糸切りされ、体部下端から底部全面に手持ちヘラケズリが施される。胎土はきわめて緻密で、砂粒の混入も少ない。色調は燈褐色を呈する。73は体部が直線的に開くタイプである。体部の横ナデは丁寧で、底部には全面ヘラケズリ調整が加えられる。長石・石英等の砂粒の混入が多い。75は完形品で、特徴的な器形を呈するが、全体に歪みが認められる。口径12.6cm、器高3.8cmを測る。体部は内湾して大きく開き、椀形に近くなる。体部下端には僅かに手持ちヘラケズリが加えられる。底部は小さく、回転糸切り後全面ヘラケズリされる。体部内面には相対して2ヶ所の炭化物の付着が認められる。灯芯の痕跡と思われ、灯明皿として利用されていた可能性が強い。76は59～62と同様の形態でやや体部の開きが大きくなる。口径12.1cm、器高4.2cmを測る。体部は横ナデ、底部外面には全面手持ちヘラケズリが施される。体部外面には墨書が認められるが、墨痕がかなり薄いため判読不能である。77はほぼ完形で、口径11.4cm、器高3.9cmを測る。体部の開きは直線的で、体部下端に細かい手持ちヘラケズリが加えられる。底部は全面手持ちヘラケズリ調整される。底部外面には焼成後の線刻が認められる。胎土はやや粗く、砂粒を多く含む。焼成はやや不良で、赤褐色の色調を呈する。78は口径12.1cm、器高4.1cmで、体部が内湾気味に開き、口縁部が若干外反する。底部がかなり厚くなる。体部は丁寧な横ナデ、底部は右回転の糸切り後周縁部に手持ちヘラケズリが加えられる。中砂粒を多く含み、黄褐色を呈する。体部外面には「正上」の墨書が倒位に記される。79は77とほぼ同様のプロポーションであるが、器肉がやや厚くなる。底部は回転糸切り後全面手持ちヘラケズリ調整される。底部内面には墨痕が部分的に観察されるが、文字ではなく墨の容器として使用された可能性が強い。80～82は底部片で外面に墨書がみられる。80は体部外面に横位で「春」と観察されるが、体部上半が欠損している状況を考えると、確認される部分は漢字の傍の可能性もあろう。「椿」等の文字も想定されよう。81は一部欠損するが、「便」であろうか。82は「禾」と判読できる。灰白色の色調を呈し、還元炎焼成に近くなる。83は須恵器の杯であるが、調整は土師器と同様である。長石・石英・雲母・赤色粒子を多く含み、焼成はそれほど良好ではない。色調は暗灰色を呈する。84～86は土師器の皿で、84のみ高台が付される。84は高台を欠損するが、接合面には貼り付けのためのヘラによる沈線が数条巡る。体部は直線的に大きく開き、口縁部でやや外反する。口唇部は尖頭状となる。底部は右回転の糸切り未調整、体部下端には回転ヘラケズリが加えられる。体部内面はヘラミガキ後黒色処理が施される。底部外面には「濱」と墨書される。85は推定口径15.8cm、器高1.5cmを測る。底部と体部の境が不明瞭で、口唇部がやや内屈する。底部は回転糸切り離しで、体部下半から底部全面に回転ヘラケズリが加えられる。回転方向は右である。中

砂粒を多く含み、暗茶褐色を呈する。底部外面に「野」の墨書が観察される。86は内面黒色処理される。器高2.9cmとやや深くなる。体部内面は6分割のミガキ、外面下端には回転ヘラケズリが施される。底部は右方向の回転糸切り後全面回転ヘラケズリが加えられる。胎土は緻密で、雲母粒を僅かに含む。87～140は墨書土器片で、89・90のみ朱墨使用となる。積文は考察編の一覧表を参照していただきたい。141～144は小形の甕である。口縁部形態はほぼ同様に、口唇部が上方につまみあげられ、受け口状を呈する。141はほぼ完形で、口径13.6cm、器高12.8cmを測る。胴部外面は上半縦位、下半横位のヘラケズリ、内面は横ナデが施される。内面下端にはヘラの当たりが部分的に観察される。胎土中に長石・石英・雲母粒を多く含み、赤褐色を呈する。142・143の胎土も同様である。144は須恵器瓶の底部片である。高台は貼り付けで、胴部外面下端には回転ヘラケズリが施される。底部内面中央には自然釉が付着する。145は須恵器甕の底部片で、胴部には斜位の平行叩き目、下端には幅広のヘラケズリが加えられる。内面は指頭ナデによる凸凹が顕著で、輪積み痕が確認される。胎土中に長石・石英の大砂粒を多く含み、暗灰色を呈する。146は土師器の甕で、調整等よりいわゆる常総型と呼ばれるものであるが、器肉がかなり薄い点特徴的である。胴部外面上半は横位の平行叩き目後弱いナデ、下半には縦位の粗いヘラミガキが施される。内面はナデられるが、幅2cm程の粘土板を積み上げた痕跡が顕著に観察される。孔の部分はヘラによる面取りが丁寧に加えられる。底部は破損しているが、単孔になると思われる。胎土中に長石・石英・雲母粒を多く含む。器表面は熱を受け、胴部下半にはカマド部材である山砂が付着する。147は甕で底部を欠く。口縁部がつまみあげられ、胴部下半に粗いヘラミガキを施す常総型の甕である。胴部外面下半には146同様山砂が付着する。

024号住居跡（第43図148～151、図版51）

148～150は土師器の杯である。148はほぼ完形で、かなり厚手のつくりである。口径11.1cm、器高4.2cmを測る。箱形に近い形態であるが、体部下端に回転ヘラケズリが加えられるため、立ち上がりの開きは大きくなる。回転方向は左である。149はやや扁平な形態で、148に比べて器肉は薄くなる。右回転で、体部は横ナデ、体部下端から底部周縁には手持ちヘラケズリが施される。底部の切り離しは回転糸切りである。148・149とも回転痕は弱い。150は底部片で、外面に「正足」と墨書される。外面手持ちヘラケズリ、内面ヘラミガキがみられる。土器のタイプ・墨書の内容より023号住居跡の一括土器と同様の性格が考えられ、本住居跡の覆土中に混入したものであろう。152は常総型の甕である。胴部下半には比較的幅広のヘラミガキ、上半にはヘラミガキの際の当たりが認められる。胎土中に長石・雲母粒を多く含み、器表面は火を受けている。

0 2 5 A号住居跡（第43図152～154）

3点とも内面黒色処理される土師器の椀である。破片であるため高台の有無は不明である。口径は推定であるが、153・154が17.0cm、155が16.2cmを測る。153・154は内外面とも丁寧なミガキが加えられ、155は体部内面から口縁部外面にかけてミガキが認められる。153は他に比して口唇部の外反度が強く、器肉も厚くなる。いずれも胎土中に長石・雲母の小砂粒を含み、焼成は良好である。

0 2 5 C号住居跡（第43図155～158、図版51）

155・156は土師器の杯である。155はほぼ完形で、口径11.9cm、器高3.8cmを測る。器肉は厚く、体部上半の横ナデは強い。体部外面下端から底部全面には手持ちヘラケズリ調整が施される。底部の切り離しは不明である。胎土は中砂粒を多く含み、やや粗雑である。底部外面には「田」の墨書が記される。156は底部片で、回転糸切り後周縁に手持ちヘラケズリを加える。外面に「八富」と墨書される。157は小形の甕で、推定口径15.0cmを測る。口唇部を上方につまみあげ、胴部は球形に近くなる。長石・石英の小砂粒を多く含む。158は推定口径21.9cm、器高33.2cmを測る土師器の甕である。口縁部の外反は大きく、最大径を胴部のかなり上方に置く。器肉は比較的薄い。胴部外面上半は丁寧なナデ、下半は横位のヘラケズリ後粗いヘラミガキが加えられる。内面には最下段の輪積み痕が1条残る。底部は未調整であるが、木葉痕はなかった。胎土中に長石・石英・雲母粒を多く含む。色調は口縁部付近が黄褐色で、他は被熱のため暗褐色に変化している。

0 2 6号住居跡（第43図159、図版51）

159は高台付杯の高台部片である。足高高台に近い形態であるが、裾部がかなり大きく開く。胎土は緻密で、黄褐色を呈する。

0 2 7号住居跡（第43図160～163、図版51）

160は内面黒色処理される小形の高台付椀であるが、高台部を欠損する。推定口径10、2cmを測る。体部は丸味を有し、口唇端部は平坦に近くなる。外面は右回転の横ナデ、内面には丁寧なミガキが施される。長石粒を主体とする小砂粒を多く含むが、胎土はかなり緻密で焼成も良好である。161は完形の小皿で、口径8.5cm、器高1.6cmを測る。体部はかなり薄くなり、口唇部は尖る。左回転のロクロ成形となる。底部は回転糸切り未調整で、切り離しは中心切りとなろう。長石・石英の小砂粒を多く含み、暗褐色を呈する。162・163は墨書土器片で、162は体部外面、163は底部外面に記される。162は「前」であるが、前後の文字の有無は不明である。163は判読不能である。

0 2 8号住居跡（第44図164～166、図版51）

164は須恵器の杯である。1/2程の遺存で、推定口径13.2cm、器高3.9cmを測る。体部は外反気味に開き、体部と底部の境はやや不明瞭である。調整は、体部内外面右回転の横ナデ、底部回転糸切り後全面回転ヘラケズリである。底部外面には焼成後「×」の線刻が施される。胎土中に長石粒等の大砂粒を多く含み、暗青灰色を呈する。165・166は土師器の杯である。165は口径12.2cm、器高4.3cmを測り、箱形を呈する。底部は厚く、体部は口縁部に移行するに従い徐々に厚さを減じる。底部は全面手持ちヘラケズリされる。体部外面全体に煤が付着する。166は口径17、3cm、器高3.6cmと盤状に近くなる。体部は外反気味に立ち上がり、形状的に164の須恵器杯と似る。調整は、体部外面横ナデ、内面ミガキ、底部は雑な不定方向のヘラケズリが認められる。体部内外面には赤彩が施される。

0 3 0号住居跡（第44図167～169、図版52）

167・168は完形の土師器杯である。167は口径11.6cm、器高3.2cmを測る。体部は丸味を有して開き、底部は回転糸切り未調整となる。胎土中に雲母粒を含み、色調は赤褐色を呈する。内外面に煤が付着しており、灯明皿として使用した可能性が強い。168は口径10、8cm、器高3.5cmを測る。口縁部が若干外反し、底部はやや突出する。調整は、体部右回転の横ナデ、底部は回転糸切り未調整となる。胎土中に長石・雲母の小砂粒を多く含む。内外面とも煤が付着する。169はほぼ完形の高台付椀である。明瞭ではないが内面黒色処理される。口径13.2cm、器高5.2cmを測り、口唇部は尖頭状でやや外反する。高台は貼り付けで、若干外側に開く。高台の裾底面には沈線状の凹みが巡る。底部の切り離しは回転糸切りで未調整である。体部調整は、外面横ナデ、内面横方向の細かいミガキが施される。胎土は緻密で、長石・石英の小砂粒を多く含む。

0 3 2号住居跡（第44図170）

170は土師器の杯で、内外面ともに赤彩が施される。推定口径15.0cm、器高3.3cmを測る。体部と底部の境はなだらかに移行しており、底部中央がかなり薄くなる。体部内面には粗いミガキ、外面にはヘラケズリ後口縁下のみに若干ミガキが加えられる。胎土中に長石・赤色粒を含む。

0 3 3 A・B号住居跡（第44図171～177、図版52）

171～173は土師器の杯である。172は体部が内湾気味に開き、底部が若干突出する。調整は右回転の横ナデで、底部は回転糸切り未調整である。糸切りは中心切りに近い。胎土はかなり緻

密で、砂粒の混入が少ない。色調は黄褐色を呈する。全体にかなり丁寧な造りである。172・173は底部が突出するタイプである。底部は回転糸切り未調整である。172は体部下半の屈曲が大きく、口縁部が若干肥厚する。173は体部下半の稜が弱くなり、内湾気味に開く。器肉が全体に厚い。回転方向はいずれも右である。胎土・焼成とも171とは異なり、やや砂質の胎土で、長石・石英等の小砂粒を多く含むようになる。色調は茶褐色で、二次的に火を受けているため、内外面に煤が付着している。174は口径11.4cmを測る小形の甕である。口縁部に最大径を有し、内外面に輪積痕が観察される。調整は、口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面指頭によるナデツケ様のオサエである。胎土中に砂粒を多く含む。175・176は手捏ね土器である。175の底部外面には木葉痕が残る。177は底径13.8cmを測る須恵器甕の底部片である。胴部下端にはヘラケズリが加えられ、上部には格子叩き目が施されているようである。底部外面は未調整が主体であるが、一部ヘラケズリされる。色調は茶褐色を呈し、小石を多く含む。焼成は良好である。

034号住居跡（第44図178・179）

178は推定口径11.8cm、器高2.7cmを測る土師器の皿である。体部は内湾気味に開きそのまま口縁部に移行する。底部はやや突出し、切り離しは回転糸切りとなる。体部は丁寧に横ナデされる。胎土は緻密で小砂粒を多く含む。色調は黄褐色を呈する。179は小形甕の下半部で、器肉がかなり厚い点特徴的である。胴部は内面ナデ、外面ナデ後ミガキが加えられる。底部はヘラケズリ調整される。二次的に火を受けているため器面がやや荒れている。胎土は比較的粗く、長石等の小砂粒を多く含む。

036号住居跡（第44図180～183、図版52）

180は炭素吸着による内面黒色処理を施した土師器の椀である。口径15.9cm、器高5.5cmを測る。底部は厚く、口縁部がやや肥厚して外反する。体部内面は比較的幅広のミガキが粗雑に繰り返し加えられるが、光沢はあまり認められない。外面は横ナデ後斜め方向のやはり幅広のミガキが施される。底部は回転糸切り未調整である。回転方向は左である。胎土は緻密で、長石・雲母の小砂粒を多く含む。181は推定口径13.6cm、器高4.7cmを測る土師器の杯である。器形的には180と相似で、口縁部が肥厚し大きく外反する。左回転で、内外面ともに丁寧に横ナデされる。体部内面下半には爪先のあたりか沈線状に回転痕が残る。底部は回転糸切り未調整である。胎土は180と同様で、色調は黄褐色を呈する。182は口径13.2cm、器高3.7cmを測る土師器の杯で、181を小形にした器形である。回転方向はやはり左で、内外面とも丁寧に調整される。底部は回転糸切り未調整である。底部内面中央部が若干磨耗している程度で他には使用されたような痕跡は認められない。色調も鮮やかな黄褐色を呈する。183は土師器の小皿で、口径8.9cm、器高1.8cmを測る。体部は内湾気味に開き、口唇部が上方につまみあげられ三角形を呈する。内外

面とも丁寧な調整で、底部は回転糸切り未調整である。胎土は緻密で、小砂粒を多く含む。焼成はかなり良好で、色調は赤褐色を呈する。

038号住居跡（第44図184～188、図版52）

184・185は土師器の杯であるが、胎土・調整等異なる。184は口径11.3cm、器高3.0cmを測るが、全体に歪みが認められる。体部は内湾気味に開き、口唇部は丸く収められる。体部外面下端は横ナデが強いため直線状となる。体部の調整は内外面とも丁寧で、底部は右回転で糸切りされる。胎土は緻密で、小砂粒を多く含む。色調は黄白色を呈する。185は器肉が厚く、体部が直線的になる。底部は剝離が激しいため切り離し不明であるが、残存部分からみると突出する形態となろう。調整は、体部内外面横ナデ、外面下端回転ヘラケズリが加えられる。胎土は184よりやや粗く砂質を帯び、赤色粒子の混入が目立つ。かなり重い質感である。186は土師器杯の小片で、「前」と思われる墨書が記される。調整・胎土とも184と同様である。187は高台付碗の高台部である。碗部内面にはミガキが施され、黒色処理される。高台は貼り付けで、高台底面には浅い沈線が一条巡る。188は灰釉の長頸瓶となろう。推定底径13.6cmを測る。胴部は直線的に開き、外面は図示した部分では回転ヘラケズリが認められる。高台は貼り付けで、低く外側に開く。胎土は灰白色で、黒色の吹きだしが多くみられる。折戸53号窯式段階に相当しよう。破損面に磨った部分が認められ、何らかの目的に使用しようとしたのであろうか。出土状況より本住居に伴うものであろう。

039号住居跡（第44図189～194、図版53）

189・190は土師器の高台付碗である。ほぼ同様の形態で、高台は貼り付けで外側に開き、口縁部は外反する。底部は回転糸切り未調整である。調整は、体部外面横ナデ、内面四分劃のミガキとなる。190には口縁部外面にまでミガキが施される。189は口径15.0cm、器高5.0cmを測る。胎土はやや粗く、長石粒を主体とした小砂粒を多く含む。色調は暗灰褐色を呈する。190は口径12.6cm、器高4.6cmと189より一回り小さくなる。全体の造りは189よりかなり丁寧である。胎土は緻密で、雲母粒を含む。色調は赤褐色を呈し、外面に煤が付着する。191は口径10.0cm、器高2.5cmを測る土師器の皿である。左回転で、体部は丁寧な横ナデ調整が施される。底部は回転糸切り未調整で、切り方は中心切りとなる。胎土はやや粗く、長石・石英・赤色粒を多く含む。色調は燈褐色を呈する。192・193は足高高台付杯の高台部である。192は裾径9.7cmを測り、ロクロ目が顕著に残る。杯部底面は平坦で、内側にカマド部材が付着している。胎土は緻密で造りも丁寧である。193は裾径11.6cmと大きく、扁平になる。杯部は底部が丸くなり、碗に近い形態となる可能性が強い。胎土は粗く、砂粒を多く含んでいる。色調は黄褐色で、カマド内の出土でありながら火を受けた痕跡は認められない。194は土師器の甕で、胴部には縦位のヘラケズ

りが加えられる。砂粒を多く含み、胴部外面に一部煤が付着する。

0 4 0 号住居跡（第45図195～199、図版53）

195は小形の土師器の杯で、体部は直線的に開き、口縁部でやや内湾する。調整が特徴的で、体部下端に手持ちヘラケズリが加えられる。底部は荒れており、切り離しは不明である。底部外面にはカマド部材が若干付着している。196・197は土師器の高台付椀で、1/3程の遺存である。いずれも炭素吸着による内面黒色処理が施される。調整は、体部外面横ナデ、内面かなり丁寧な細かいミガキとなる。底部は回転糸切り未調整である。胎土は緻密で砂粒の混入も少ない。いずれもカマド内の出土で、体部外面あるいは底部の破損面にカマド部材の付着が若干ながら観察される。また、熱を受けた痕跡が断面にまで及んでいることを考えると、カマド内に廃棄された後に焼かれていることが想定される。198・199は高台付杯で、高台下半を欠損する。体部は直線的に開き、口唇部で肥厚してやや外反する。内外面とも横ナデされる。胎土が異なり、199は軟質で砂粒の混入が少ない。200は硬質で、長石・石英・雲母粒の大砂粒を多く含む。いずれも二次的に火を受け、煤が付着している。

0 4 1 号住居跡（第45図200～205、図版53）

200・201は足高高台付杯の杯部及び高台部であるが、同一個体ではない。200は体部が直線的に開き、口唇部で若干肥厚する。回転方向は右で、内外面とも横ナデ調整である。胎土はやや砂質を帯び、雲母・赤色粒の混入が目立つ。色調は黄褐色を呈する。201はロクロ目が弱く、丁寧に調整される。胎土は緻密で、小砂粒を多く含み、焼成も良好になる。杯底部内面にはカマド部材が付着する。202・203は土師器の甕で、遺存は不良である。202は球形の胴部から短く外反する口縁部に移行する。口唇端部は平坦で、やや凹む。胴部内面から口縁部にかけて横ナデ、胴部外面にはヘラケズリが施される。胴部外面のヘラケズリは上半に弱いナデが加えられる。また、口縁部外面の横ナデはかなり強く、胴部のヘラケズリの後に施されるため、粘土が若干下方にはみ出している。胎土はやや粗く、小石・小砂粒を多く含む。二次的に火を受けており、胴部外面に若干カマド部材が付着する。203の胴部は直線的に底部に移行し、つまみあげの口縁部が肥厚する。口唇端部は平坦である。胴部外面のヘラケズリ調整は雑で、器面に凹凸が残る。胎土は202よりさらに粗くなり、小石・小砂粒の混入も多くなる。やはり二次的な火を受けている。204は土師器の甕で、破片状況であるが、五孔形態となるものであろう。外面の調整は幅広のヘラケズリで、孔の部分はヘラにより面取りされる。胎土は緻密で、赤色粒の混入が目立つ。205は須恵器の甕の底部である。内面が磨られており、墨痕が認められることより転用硯として利用されていたようである。また、破損面にカマド部材が付着しており、転用硯としての機能停止後カマド内に廃棄された可能性が強い。

0 4 2 号住居跡 (第45図206・207、図版53)

206は口径12.4cm、器高3.9cmを測る丁寧な造りの杯である。口唇部が若干肥厚して外反する。体部外面は丁寧な横ナデ、内面は細かいミガキが繰り返し施され、炭素吸着による黒色処理がなされる。底部はやや突出し、右回転の糸切り離し未調整となる。207は高台付椀で、高台部を欠損する。貼り付けの高台は外側に位置し、口唇部はかなり肥厚する。体部内面のミガキは206に比べてやや雑になり、やはり炭素吸着により黒色処理が施される。外面は横ナデ後上半部に斜位のミガキが加えられる。206・207ともカマド部材及び煤が付着しており、二次的に火を受けた痕跡が認められる。

0 4 5 A 号住居跡 (第45図208)

208は器肉がかなり薄い甕の底部片である。胴部外面はヘラケズリ後ナデが加えられる。胎土は緻密で、小砂粒を多く含む。

0 4 6 A 号住居跡 (第45図209)

209は内面黒色処理の高台付椀の下半部である。杯部に比して高台が小さい。内面は丁寧なミガキ、外面は横ナデ後上半部に粗いミガキが加えられる。高台の開きは少なく、裾底面内側が明瞭に一段高くなる。底部は高台貼り付け時にナデが施されているが、中央に残る痕跡から、切り離しは回転糸切りとなる。胎土は緻密で、砂粒の混入も少ない。

0 4 6 B 号住居跡 (第45図210・211)

210は土師器の杯で、体部の開きがかなり大きい。調整は体部内外面丁寧な横ナデ、外面下端手持ちヘラケズリとなる。底部は回転糸切り後全面手持ちヘラケズリが加えられる。胎土はやや砂質を帯び、長石粒を主体とする小砂粒を多く含む。色調は燈褐色を呈する。211は特徴的な器形で鉢となろうか。口縁部が直角に外屈し、口唇部が上方に若干つまみあげられる。内外面ともに刷毛状工具による回転ナデの痕跡が顕著に観察される。胎土はきわめて緻密で、砂粒の混入も少ない。焼成良好、色調は黄白色を呈する。口縁部内面から外面全体に煤の付着が顕著である。使用状態を示すものであろう。

0 4 7 A 号住居跡 (第46図212～221、図版53・54)

212～220は土師器の杯である。212～218は底部外面に墨書が記され、212～216は「八富」、217は「磁刀自」、218は「刀自女」と判読できる。212～214は体部が内湾気味に開き、口縁部で若干外反する形態で、調整も含めて同一タイプのものである。「八富」の書体にも共通した様相が

認められる。回転方向は右で、体部内外面とも細かい横ナデが施され、体部下端には手持ちヘラケズリが加えられる。底部は回転糸切り離し後周縁部に手持ちヘラケズリが行なわれる。212の手持ちヘラケズリは、かなり乾燥してから施されたため、ヘラの引っ掛かりが顕著に認められる。法量は、口径12.0～12.4cm、器高3.6～3.7cmを測る。胎土は緻密で、長石粒を主体とした小砂粒を多く含む。焼成は良好で、色調は赤褐色に近い。215は破片資料であるが、体部が直線的にのび、体部下端から底部周縁に手持ちヘラケズリが加えられる。底部は回転糸切り離しである。胎土は粗く、小砂粒の混入が多くなる。体部外面に煤の付着が観察される。216は体部の開きが大きく、体部下端のナデが強いため、底部が突出気味となる。回転方向は右で、体部内面は丁寧にナデ調整される。底部の切り離しは、全面に手持ちヘラケズリが加えられるために不明と言わざるを得ないが回転糸切りであろう。ただ、ヘラケズリがかなり深いため、ヘラの当たりが明確に残っている。胎土は緻密で、赤色粒の混入が目立つ。色調は燈褐色を呈する。底部外面の「八富」は書体がやや異なり、「富」の一番下に「一」が余計に付されている。218は、胎土及び「厩刀自」の書体・記入位置からみると213と同様であるが、形態が異なる。体部はほぼ直線的に開き、体部下端のヘラケズリは認められない。底部は全面手持ちヘラケズリ調整である。口径12.0cm、器高3.8cmを測る。胎土中に小砂粒を多く含み、色調は赤褐色を呈する。218は、口径・器高とも217と同様であるが、底径が大きいため体部の開きが小さくなっている。体部の横ナデは強く、口縁部はかなり薄く仕上げられ、口縁端部が外反する。底部は回転糸切り離しで、体部下端から底部周縁には手持ちヘラケズリ調整が加えられる。色調は黄褐色に近い。「刀自女」の書き方は、217が「刀」を利用して「自」と一緒に続けて書かれているのに対し、字が重複するもののそれぞれ独立した文字となっている。同一住居内でありながら、土器のタイプとともに文字の書き手が異なっているようである。219は口縁端部の形状に違いが認められるが、タイプのには218と同様であろう。底部は回転糸切り離しで、体部下端から底部周縁には手持ちヘラケズリ調整が加えられる。220は推定口径17.6cm、器高4.4cmを測る大形の杯で、内面黒色処理される。ミガキは内面全体及び体部外面上半に施される。内面は6分割の丁寧なミガキで、かなり光沢があるのに対し、外面はやや粗いミガキが横位に認められる。底部は全面手持ちヘラケズリ調整され、焼成時の黒斑が残る。胎土は比較的緻密で、長石・石英粒を主体とした小砂粒をかなり多く含む。色調は燈褐色を呈する。221は土師器甕の上半部である。口唇部が上方につまみあげられ、胴部がヘラケズリによりかなり薄く仕上げられている。

047B号住居跡（第46図222～227、図版54）

222は、口径13.6cm、器高4.0cmを測る土師器の杯で、厚く仕上げられる。体部は内湾気味に開き、口唇部で外反する。体部は横ナデ調整、底部は回転糸切り離し未調整となる。底部の切り離しは回転力が弱いいためか円状に1ヶ所に収束せず、静止糸切り状に平行に近い痕跡を残す。

色調は黄褐色を呈すが、二次的に火を受けているようであり、内面全体に煤が付着する。223は内外面とも丁寧な調整される土師器の杯で、横ナデが強いため体部外面の稜が明瞭に観察される。回転方向は右で、底部は回転糸切り未調整である。胎土はきわめて緻密で、砂粒の混入が少ない。体部内面に残る煤の痕跡から、灯明皿として利用した可能性が高い。なお、底部外面には焼成後「×」の線刻が施される。224は推定口径16.6cm、器高5.1cmを測る大形の椀で、内面黒色処理が施される。内面には丁寧なミガキ、外面上半にはやや粗いミガキが加えられ、体部外面下端から底部全面に右方向の回転ヘラケズリが施される。底部の切り離しは不明である。胎土はきわめて緻密で、砂粒の混入も少ない。二次的に火を受けたためか、赤褐色の色調を呈する。225・226は内面黒色処理が施された土師器の高台付椀である。内面のミガキは丁寧に繰り返されているためかなり光沢がある。225には粗いミガキが体部外面にも観察される。底部は回転糸切りで、高台貼り付け時にナデ調整が加えられる。胎土は、225がかなり緻密で小砂粒の混入が少ないのに対し、226はやや粗くなり、長石・雲母粒を多く含むようになる。法量は、225が口径13.6cm、器高6.1cm、226が口径18.0cmを測る。なお、225は二次的に被熱し、カマド部材の付着が認められる。227は、回転整形痕が明瞭に残る土師器の小形甕で、上半部を欠損する。回転方向は右である。器肉が厚く、かなり重量感がある。体部下端には手持ちヘラケズリが加えられ、底部は回転糸切り未調整となる。胎土は緻密で小砂粒を含み、燈褐色の色調を呈する。

048号住居跡（第47図228～232、図版54）

228は推定口径10、5cm、器高3.4cmを測る小形の土師器杯で、かなり薄く仕上げられる。体部はほぼ直線的に開き、口唇部でやや肥厚する。体部内外面とも丁寧なナデで、底部は回転糸切り未調整である。胎土は緻密で、黄白色の色調を呈する。229はほぼ完形の杯で、炭素吸着により内面黒色処理される。口径16.6cm、器高4.7cmを測る。体部は外湾気味に開き、口唇部でやや肥厚して外反する。体部と底部の境は不明瞭である。底部内面周縁は指頭によるオサエが強いため、中央がやや高くなる。内面のミガキは幅広く粗雑に施される。外面は二次的に被熱したため器面の磨耗が激しく詳細は不明であるが、上半部には粗いミガキが加えられていたようである。底部は回転糸切り後周縁部に手持ちヘラケズリが施される。胎土はやや粗く、雲母粒を多く含む。230・231は特徴的な形態を呈する高台付土師器杯である。杯部は下端で屈曲し、直線的に開いた体部が口唇部で外反する。高台は底部中央に近い位置に貼り付けられる。高台の形態も特徴的で、外側に強く踏張り、底面に明瞭な稜を有して沈線状に巡っている。内面のミガキは4分割で外側には及んでいない。底部は回転糸切り離しで、230は全面ナデ調整が加えられている。なお、黒色がほとんど認められないが、二次的に火を受けて炭素分が消失してしまったようで、本来は内面黒色処理を施したものであろう。232はかなり厚手の土師器の甕で、底部周辺の遺存である。カマド内で使用されていたようで、器面の磨耗が激しく調整は不明であ

る。胎土はやや粗く、長石粒を主体とした大砂粒を多く含む。

049号住居跡（第47図233～236、図版55）

233はほぼ完形の土師器の杯で、口径12.3cm、器高3.7cmを測る。体部内外面の横ナデは強く、特に体部下端のナデが強いため、底部は突出気味となる。口唇部は肥厚して外反する。底部は右回転の糸切り離し未調整である。胎土は緻密で小砂粒を含み、色調は燈褐色を呈する。234は完形の小形高台付椀である。口径11.4cm、器高4.8cmを測る。体部は内湾し、口唇部で肥厚して若干外反する。高台は貼り付けで、ハの字状に大きく開く。内面は横方向の丁寧なミガキで、炭素吸着により黒色処理される。底部はナデ調整が施される。胎土はきわめて緻密で、小砂粒の混入も少ない。二次的に火を受けているようで、赤褐色の色調を呈する。235は須恵器甕の上半部で、推定口径25.2cmを測る。口縁部は短く屈曲し、口唇部が平坦に近くなる。調整は、口縁部内外面横ナデ、胴部外面格子叩き、内面ナデとなる。内面に当て具の痕跡は確認されなかったが、ナデにより消失したものと思われる。胎土はやや粗く、長石粒等の大砂粒を多く含む。焼成は比較的軟質で、色調は暗灰褐色を呈する。236は全体に歪みが激しく、粗雑なつくりの土師器甕である。

050号住居跡（第47図237～239）

237～239はかなり丁寧なつくりの高台付の椀で、口径17cm前後を測る。237・239は器高5.9cm、238は6.6cmとやや深くなる。高台は低く踏張った形態である。底部は回転糸切り離し未調整で、高台貼り付け時に周縁がナデ調整される。内面は丁寧にミガキが施され、光沢がある。黒色処理は239に顕著に認められるが、237・238には肉眼では観察されない。おそらく被熱により消失したものであり、本来は処理されていたのであろう。

051号住居跡（第47図240～245、図版55）

240・241は無高台の大形土師器椀である。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部で大きく外反する。底部は、体部下端のナデが強いためやや突出するが、240は丸味を帯びるようになる。体部内外面とも横ナデ調整で、241の内面には4分割の弧状のミガキが加えられる。底部は回転糸切り離しで、241は未調整、240は全面ヘラケズリ調整される。内面黒色処理は241のみに認められる。胎土は緻密で、長石・石英・雲母粒の小砂粒を含むが、241の方がやや洗練された感を受ける。法量は、240が口径16.8cm、器高5.7cm、241が口径17.8cm、器高5.8cmを測る。242・243は同タイプの高台付椀である。243はほぼ完形で、口径15.3cm、器高6.2cmを測る。無高台の椀に比べて椀部が扁平で、口縁部の外反度が弱い。体部内面は4分割の丁寧なミガキが施され、外面上部にもやや粗いミガキが加えられる。底部は回転糸切り未調整である。貼り付け高台は

ハの字状に開く。242と243では胎土が異なり、242は粗く長石・石英粒を多く含むのに対し、243はかなり緻密で、小砂粒の混入も少ない。244は推定口径15.9cmを測る小形甕である。口縁部はかなり強く横ナデが施されるため器肉が薄くなる。口唇部は上方につまみあげられる。胴部外面はナデ調整で、下半にヘラケズリが加えられる。内面は細かい刷毛状工具によりナデ調整される。胎土はやや砂質を帯び、大砂粒を多く含む。246は上半部を欠損する大形の甕である。胴部外面は縦位及び斜位のヘラケズリ、内面は丁寧な横ナデが施される。底部は五孔形態で、孔はヘラによる面取りがなされる。胎土は緻密で、長石粒等の小砂粒を含む。外面は二次的に被熱し、煤の付着が認められる。

052号住居跡（第48図246～254、図版55）

246は、口径17.2cm、器高6.2cmを測る高台付碗である。内面は比較的丁寧な横位のミガキ、外面は二次的に火を受けているため明瞭ではないが口縁部に粗いミガキが加えられているようである。高台は磨耗が激しく、詳細な形態は不明である。図示した高台よりはやや高くなるものと思われる。胎土は緻密で、長石・雲母粒を含む。体部下半及び破損面にカマド部材の付着が認められる。247はほぼ完形の碗で、口径17.2cm、器高5.3cmを測る。器肉が全体に厚く、重量感がある。内面のミガキは幅広でやや粗く、ミガキの単位が明瞭に観察される。外面にはミガキが及ばず、他に比べて回転整形痕が明瞭に残る。底部は回転糸切り未調整である。胎土は緻密で、雲母粒を多く含む。二次的に被熱し、外面全体にカマド部材が付着する。246・247とも炭素吸着により内面黒色処理が施される。248は足高高台の付く皿であろうか。皿部が若干遺存するのみである。大きく外反する口縁部を有する。胎土はやや粗く、砂質を帯びる。色調は黄褐色を呈する。249・250は土師器の杯で、底部回転糸切り未調整である。249は完形品で、口径13.2cm、器高3.5cmを測る。かなり丁寧なつくりで、内外面ともナデ調整される。ただナデが強い内面に粘土の割れが若干認められる。底部は回転糸切り未調整である。胎土は緻密で砂粒の混入が少なく、色調は暗黄褐色を呈する。250は推定口径10.8cmと一回り小さく、体部が直線的になる。器形的には小皿に近くなる。胎土は粗く、長石・石英を主体とした大砂粒を多く含む。焼成は良好で、色調は暗褐色を呈する。251～254は底部回転糸切り未調整の土師器の小皿である。分量・形態ともやや異なる。251は口径9.4cm、器高1.7cmを測り、大きめの底部から体部が直線的に開く。252は口径8.8cm、器高1.5cmと一回り小さくなる。体部は外反気味に開き、口唇部が上方につまみあげられる。251・252とも同様の胎土で、長石・石英・雲母粒を多く含む。色調は赤褐色を呈する。253・254は胎土が比較的洗練されたもので、251・252とは異なる。253は口縁部が内湾し、底部がやや突出する。黄白色の色調を呈する。254はもっとも小形で、推定口径8.5cm、器高1.6cmを測る。体部中央に稜を有し、底部が突出する。体部の開きは大きい。体部から底部外面には赤彩が施されており、きわめて特異な例である。

055号住居跡（第48図255～273、図版55・56）

255～257は炭素吸着による内面黒色処理が施された無高台の椀である。体部内面から口縁部外面にかけてやや粗い横位のミガキを粗雑に加える。底部は回転糸切り未調整となる。255・257は法量・胎土とも同様で、口径17.0cm、器高5.5cm前後を測る。257の底部がやや厚くなる。胎土は緻密で、長石・石英・雲母粒を比較的多く含む。色調は燈褐色を呈する。体部から底部外面全体にカマド部材の付着が認められる。256は口径16.1cm、器高5.6cmとやや小さく、全体に厚手である。底部が小さいため、他に比べてやや安定感にかける。胎土はかなり緻密で、砂粒の混入も少ない。色調は黄白色を呈する。258は全体に雑な造りで、やや歪みが生じている。口径15.1cm、器高5.3cmを測る。底部は回転糸切り未調整で、若干上げ底である。体部は内外面とも横ナデで、ミガキは認められない。二次的に被熱しているようである。259は内外面とも丁寧なミガキが施された椀の体部片である。内面は黒色処理される。無高台の椀のミガキが口縁部外面までであるのに対し、260～262の高台付椀のミガキが体部外面全体に及んでいる状況を考えるとこの椀は高台を有するものと思われる。胎土は260と同様かなり緻密である。260～262は高台付椀である。260は口縁部を若干欠損するものの、口径17.8cm、器高6.8cmを測る大形品である。内外面とも炭素吸着による黒色処理が施される。体部のミガキは内外面とも同様で、1本の幅が観察できないほど丁寧に施されるが、4分割を基本としているようである。高台はハの字状に開き、内外面にミガキが加えられる。底面は磨耗している。胎土はきわめて緻密で、砂粒の混入は少ない。外面は二次的に火を受け、部分的に赤変している。261・262は内面黒色処理の高台付椀の底部片である。内外面ともミガキが施されるが、260程丁寧ではない。胎土は緻密で、長石粒等の小砂粒を多く含む。261の底部外面には、焼成後線刻が施される。263・264は椀の口縁部片で、黒色処理は認められない。263は内外面とも横ナデ、264は内外面ともミガキが加えられる。265～271は回転糸切り未調整の土師器の小皿である。265は最も大きく、口径11.8cm、器高2.5cmを測る。底部はやや上げ底で、口唇部で肥厚して外反する。体部外面は丁寧なナデ、内面には粗いミガキが加えられる。胎土は緻密であるが、長石・石英・雲母粒を多く含む。体部内面を中心に被熱している。266は口径9.6cm、器高2.2cmを測り、体部が直線的に開く。内外面のナデは丁寧で、底部の切り離しは中心切りに近い。胎土はやや砂質を帯び、長石粒を主体とした小砂粒を多く含む。268は底部がやや突出し、体部が外反気味に大きく開く。胎土中の砂粒の混入がかなり多いため、器面がざらつく。267・269～271はほぼ同様の形態を呈する。体部が外反あるいは直線的に開き、口縁部で上方につまみ上げられる。口径で2種に分類でき、267・269が9.3cm、270・271が8.0cmとなる。器高は267が最大2.0cm、271が最小1.1cmを測る。いずれも右回転で調整される。胎土は267がやや粗く砂粒の混入が多いのに対し、269～271はきわめて洗練された粘土を使用している。色調は黄褐色を呈する。272は完形の高台付小皿で、

口径9.8cm、器高2.8cmを測る。内外面ともきわめて丁寧にナデ調整される。回転方向は左である。高台は貼り付けで、裾が大きく外側に屈曲する。胎土はやや砂質を帯び、小砂粒を比較的多く含む。黄褐色の色調を呈する。使用された痕跡はほとんど観察されない。273は口縁部が水平に近く開く土師器の甕である。胴部内面から口縁部は横ナデ、胴部外面は縦位のヘラケズリ後ナデが加えられる。器肉は厚く、胎土中に長石・雲母粒を多く含む。

056号住居跡（第49図274～297、図版56・57）

274～280は土師器の杯である。274・275は体部が直線的に開き、口縁部でやや外反する。回転方向は左である。274は器肉が薄く、体部下端に手持ちヘラケズリが加えられる。底部は回転糸切り後周縁部に手持ちヘラケズリを施す。黄褐色の色調を呈する。底部外面には「吉原大島」と墨書される。推定口径12.6cm、器高4.1cmを測る。275は口径11.6cm、器高4.1cmを測り、箱形に近い形態である。体部は丁寧な横ナデで、下端に回転ヘラケズリが加えられる。底部は回転糸切り後全面回転ヘラケズリ調整となる。274に比べて器肉が厚く、長石・石英・赤色粒子の混入が目立つ。色調は赤褐色を呈する。276は器高が深く、回転調整痕が強く残る。体部下端から底部全面に回転ヘラケズリを加える。胎土は緻密で、赤色粒子の混入が目立つ。遺存する底部外面に「島」の文字が認められるが、その記載位置からすると「吉原大島」の一部である可能性が高い。277は口径12.4cm、器高3.4cmと扁平な形態を呈する。体部内外面とも丁寧にナデ調整され、下端に手持ちヘラケズリを加える。底部の切り離しは不明であるが、全面に手持ちヘラケズリを施す。胎土は緻密で、小砂粒を含む。二次的に火を受け、煤の付着が認められる。底部はほとんど残っておらず、墨書の一部を確認したにすぎないが、「吉原大島」の「吉」の残画と思われる。279はきわめて丁寧な造りで、口径12.3cm、器高4.0cmを測る。体部は内湾気味に立ち上がり、口唇部でやや外反する。体部内外面は丁寧な横ナデ、底部は全面手持ちヘラケズリ調整される。胎土は緻密で、長石・石英・赤色粒子を含む。色調は燈褐色を呈する。280は体部の開きが大きいため、体部下端から底部全面に左回転の回転ヘラケズリが加えられる。胎土はやや粗く、長石・赤色粒子を多く含む。二次的に火を受け、内面の器面の荒れが顕著である。278・281～291は墨書土器片である。記載部位は287のみ体部外面で、他はすべて底部外面である。287は内面黒色処理の椀の可能性が高く、重複する055号住居跡から混入したものと思われる。289・291は判読不能の文字であるが、他は「吉原大島」として解釈できるものである。また、土器の胎土・調整等より同一個体となる可能性はなく、本住居跡内には12個体の「吉原大島」と記された杯が存在していたこととなる。292はつまみを欠損する土師器の蓋で、推定口径17.0cmを測る。天井部は器肉が厚く、口唇部内側に浅い沈線が1条巡る。体部内外面とも丁寧な横ナデ、天井部外面には左回転のヘラケズリが加えられる。胎土中に雲母粒を多く含み、二次的に火を受けている。天井部外面には墨痕が薄い「正上」と判読される墨書が記される。

294は土師器の皿で、高台は付かない。推定口径17.6cm、器高2.6cmを測る。体部内外面には丁寧な横ナデ、体部下端から底部全面には回転ヘラケズリが施される。胎土はやや砂質を帯び、長石・雲母粒等の小砂粒を多く含む。色調は燈褐色を呈する。295は須恵器の壺の底部片であろう。内面中央には自然釉が付着する。底部外面は回転ヘラケズリ調整される。なお、底部外面は中央部を中心に磨耗しており、不明瞭ではあるが墨痕が若干認められる。転用硯として再利用した可能性が強い。296は土師器の高台付き盤で、体部上半を欠く。体部内外面横ナデ、底部外面は回転ヘラケズリ調整が施される。高台は貼り付けで、開きは少ない。胎土はやや粗く、雲母粒を多く含む。在地か常陸産であろう。内面はやや磨耗しているが、明瞭な墨痕はなく、積極的に転用硯と判断できない。293はいわゆる常総型の甕で底部及び胴部の一部を欠損する。口径20.6cm、器高33.7cmを測る。口縁部は短く立ち上がり、胴部は長胴形態となる。底部には木葉痕が残る。胴部内面から胴部外面上半は丁寧なナデ、外面下半には縦位の粗いミガキが施される。胴部外面上半には、ミガキの際の当たりが横位に残る。胎土はやや粗く、長石・石英・雲母粒を多く含む。胴部外面下半にはカマド部材が多量に付着している。色調は黄褐色を呈する。297も常総型甕の上半部で、293より球形胴に近くなるようである。胎土・調整は同様である。

058号住居跡（第50図298～301、図版57）

298～300は底部回転糸切り未調整の土師器の小皿である。298・299は口径9.2cm前後、器高1.8cmを測る。胎土は緻密で砂粒の混入も少ない。色調は黄褐色を呈する。298は二次的に火を受けている。300は口径7.7cm、器高1.4cmと一回り小さくなる。301は高台付杯の高台部であろう。かなり分厚い造りで、杯部内面にタールの付着がみられる。

060号住居跡（第50図302・303、図版57）

302は口径16.8cm、器高5.2cmを測る土師器の椀である。体部の内湾度は弱く、口唇部で外反する。体部外面は丁寧な横ナデで、下半には細かい回転痕が明瞭に残る。内面は粗いミガキが比較的雑に施される。底部は回転糸切り未調整である。回転方向は左となる。胎土はきわめて緻密で、砂粒の混入も少ない。本来は内面黒色処理が施されているが、二次的に被熱したため黒色がほとんど消失してしまっている。なお、底部内面には焼成後「大」の線刻が刻まれている。303は高台付皿の皿部であろう。口縁部が大きく外反する。内外面にカマド部材の付着がみられる。

063号住居跡（第50図304～307、図版57）

304・305は内外面赤彩の皿である。304は口径20.1cm、器高2.8cmを測る。全体に分厚い造り

である。内面はナデ後横位のミガキ、体部外面はヘラケズリ後横位のミガキ、底部外面はヘラケズリ後粗いミガキが加えられる。胎土は緻密で、長石の小砂粒を多く含む。305は口径20.9cm、器高2.5cmを測る。形態・調整・胎土等304と同様であるが、ミガキに比較的規則性が認められる。体部内面は横位、立ち上がり部が格子状、底部内面は一方向の直線的な粗いミガキとなる。また、体部外面は横位の丁寧なミガキ、底部外面は井桁状の粗いミガキが明瞭に観察される。306は手捏ね土器である。器肉がかなり厚く、底部には木葉痕が明瞭に残る。体部外面下端に輪積み痕が観察されるが、内外面とも比較的丁寧にナデ調整される。胎土は粗く、長石小砂粒を多く含む。色調は燈褐色を呈する。307は口径15.4cmを測る甕で、口縁部がかなり分厚く造られる。胴部内面から口縁部には横ナデ、胴部外面は縦位後斜位のヘラケズリが施される。胴部内面には輪積み痕が若干残る。胎土はかなり粗く、長石・石英の大砂粒を多く含む。使用時とともに、割れた後の遺棄段階で火を受けたようで、胴部外面及び断面にも煤が付着している。

065号住居跡（第50図308、図版58）

308は口径21.0cmを測る土師器の甕で、口縁下に右回転のロクロ目が残っている。以下はナデによりロクロ目を消している。口縁部は短く外傾し、口唇部を上方につまみ上げている。胎土は緻密で、長石・雲母の小砂粒を含む。黄褐色の色調を呈する。

066号住居跡（第50図309・310、図版58）

309は推定口径19.6cm、器高5.2cmを測る大形の杯である。底部は小さく、体部が内湾気味に大きく開き、口唇部で外反する。内外面とも器面の荒れが激しく詳細な調整は不明であるが、体部内面及び外面上半にはミガキが施されているようである。内面黒色処理される。底部は回転糸切り未調整となる。胎土は緻密であるが、やや砂質を帯び長石・石英の小砂粒を多く含む。310は高台付椀の高台部で、内面黒色処理される。

068号住居跡（第50図311・312、図版58）

311はほぼ完形の土師器杯で、口径12.9cm、器高3.7cmを測る。底部は厚く、体部がやや内湾気味に立ち上がり、口縁部で若干外反する。内外面とも丁寧に横ナデ調整される。底部は回転糸切り未調整である。胎土は緻密でやや砂質を帯び、雲母粒を多く含む。色調は暗黄褐色を呈する。312は灰釉の長頸瓶の胴部片である。丁寧にロクロ調整されるが、焼成時の焼き膨れが顕著に認められる。釉は濃緑色で、胴部上半に刷毛塗りされる。ただ、釉の攪拌が充分でないため、斑状を呈する。胎土はきわめて緻密で、砂粒の混入が少なく、黒色の吹き出しが認められる。折戸53号窯式段階の所産であろう。

069号住居跡（第50図313～317）

313は器肉が薄い杯で、体部が強く内湾して立ち上がり口唇部で肥厚して若干外反する。底部は上げ底となる。調整は、体部内外面横ナデ、体部外面下端から底部全面に手持ちヘラケズリとなる。胎土は緻密で、長石粒等の比較的大きな砂粒を多く含む。色調は黄褐色を呈する。口縁部の一部に煤の付着が認められる。314～316は墨書土器片である。314は、体部内外面横ナデ、底部回転糸切り後周縁部に手持ちヘラケズリを施す。胎土は緻密で、長石・赤色粒子の混入が目立つ。墨書は底部外面にみられ、比較的大きな書体で「正上」と記される。315は体部外面、316は底部外面に墨書されるが、小片のため判読できない。317は推定口径12.6cmを測る小形の甕である。口縁部横ナデ後胴部外面に縦位のヘラケズリが施される。胎土はきわめて緻密で、砂粒の混入も少ない。黄褐色の色調を呈する。

070号住居跡（第51図318～321、図版58）

318・319は土師器の杯である。318は口径12.8cm、器高3.8cmを測る。体部は内湾気味に立ち上がり、そのまま口縁部に至るが、口唇部でやや肥厚する。底部は若干突出する。体部内面横ナデ、外面及び底部全面ヘラケズリ調整で、粗いミガキが全面（底部外面にも）に加えられる。胎土は緻密であるが、長石・雲母粒を多く含む。二次的に火を受けており、外面を主体に煤の付着がみられる。319は口径12.0cm、器高3.8cmを測る。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部で若干外反する。体部内外面とも丁寧に横ナデ調整され、体部外面下端及び底部全面に右方向の回転ヘラケズリが加えられる。318同様火を受け、黒褐色の色調を呈する。320は体部外面に「取」の墨書がみられる。後に文字が続くものと思われる。321は口径20.0cmを測る甕で、胴部がかなり薄く仕上げられる。胎土中に雲母粒を多く含む。

071号住居跡（第51図322～324、図版58）

322・323は土師器の杯である。322は口径16.8cm、器高4.4cmを測る。成形がかなり粗雑で、器肉も分厚い。体部外面には輪積み痕が残る。底部は平底となり、木葉痕が明瞭に観察される。体部内面は比較的丁寧なナデ、外面はナデ調整で、部分的にヘラケズリを加える。なお、明瞭ではないが外面には粗いミガキが施されているようである。胎土は粗く、砂粒を多く含む。二次的に被熱し、口唇部が全体に磨耗している。323は口径15.6cm、器高4.3cmを測り、丸底を呈する。体部内面は比較的丁寧なナデ、外面はナデ調整で、部分的にヘラケズリを加える。なお、明瞭ではないが外面には粗いミガキが施されているようである。胎土は粗く、砂粒を多く含む。324は還元炎になりきれない須恵器の蓋である。口径15.4cm、器高3.0cmを測る。端部はほぼ直角に折れ曲がるが、外面の稜はそれほど強くない。つまみは環状に近い形態で、中央部が周縁と同じ高さの高まりとなる。全体にナデ調整で、外面上半には左方向の回転ヘラケズリが加え

られる。つまみは丁寧なナデにより整形される。胎土は比較的緻密であるが、長石・石英・雲母粒を多く含む。外面には土器焼成時の黒斑が顕著に残り、内面は灰色に近い茶褐色を呈する。

073号住居跡（第51図325～330、図版58）

325～327は土師器の杯で、それぞれタイプが異なる。325は口径12.8cm、器高3.5cmを測る。体部の開きは大きく、口縁下に強い横ナデを施すために、口唇部が肥厚してやや外反する。調整は、体部内外面右回転の横ナデ、底部回転糸切り後全面手持ちヘラケズリとなる。胎土は緻密で、長石・赤色粒の混入が目立つ。色調は暗黄褐色を呈し、底部内面に炭化物の付着が認められる。なお、体部外面には「子吉原」の墨書、底部外面には焼成後「×」の線刻が施されている。326は器高がやや深くなる。体部内外面とも丁寧な横ナデ調整で、体部外面下端に手持ちヘラケズリが加えられる。底部は全面に手持ちヘラケズリが施される。胎土は緻密で、やや粗い砂粒を比較的多く含む。色調は黄褐色を呈する。底部外面には「野邊」の墨書が端部に近い位置に小さめに記される。327は底部回転糸切り未調整となる。推定口径11.8cm、器高3.8cmを測り、体部が直線的に開き、そのまま口唇部に至る。暗赤褐色の色調を呈する。328は須恵器の杯で、口径12.9cm、器高4.2cmを測る。底部は厚く仕上げられ、体部は直線的に開き口唇部に至る。体部は内外面とも右方向の横ナデ調整で、外面には強いロクロ目が残る。体部外面下端及び底部全面には手持ちヘラケズリが加えられる。胎土は緻密で、長石粒を含み、灰白色を呈する。329は推定口径14.2cm、器高3.3cmを測る須恵器の高台付皿である。器面は滑らかな感を呈する。体部は直線的に大きく開き、底部は丸味を以て外側に突出する。高台は貼り付けで、開きは少ない。内外面とも右回転の丁寧な横ナデ調整が施される。砂粒の混入が少なく、暗灰色を呈する。330は「野」と思われる墨書が記された杯の体部片である。

074号住居跡（第51図331～338、図版59）

331～335は土師器の杯である。331～333は、体部が内湾気味に立ち上がり、口唇部でやや外反する共通の形態を呈する。体部内外面とも右回転の丁寧な横ナデで、体部下端に手持ちヘラケズリが加えられる。底部は回転糸切り後、331・332が全面、333が周縁部に手持ちヘラケズリが施される。この3個体は法量的に異なり、口径・器高はそれぞれ331が12.4cm、4.1cm、332・333が12.01cm、3.6cmと2つのグループに分けられそうである。334は土師器杯の体部片で、体部外面に横位で墨書が記される。部分的な遺存であるが、他の住居跡例から「濱」と判読できそうである。335は器肉がやや分厚く、体部が直線的に開くものである。上記の杯よりは器高がやや低くなる。体部内外面横ナデ、体部下端及び底部周縁には手持ちヘラケズリ調整が加えられる。底部の切り離しは回転糸切りとなる。胎土は緻密で、長石粒等の小砂粒を若干含む。色調は暗黄褐色を呈する。336～338は底部が回転糸切り未調整となるもので、後世の混入品であ

る。336は推定口径15.6cm、器高5.7cmを測る椀である。体部は内湾して開き、口縁部で外反する。体部内外面とも横ナデ調整で、内面のミガキ及び黒色処理は認められない。胎土はやや粗く、長石・雲母の小砂粒を多く含む。色調は暗褐色を呈する。337・338は内面黒色処理を施した小皿である。体部はほぼ直線的に開き、口縁部でやや外反する。ミガキは337が体部内面、338が体部内面及び外面上半に加えられる。胎土は比較的緻密で、長石・石英粒を多く含む。色調は赤褐色を呈する。法量は、337が口径9.6cm、器高2.7cm、338が口径8.9cm、器高2.7cmで、338の底径が小さくなる。

075号住居跡（第51図339～342、図版59）

339は内外面赤彩の杯である。口縁部は弱い稜をもって立ち上がる。調整は、内面横位のミガキ、口縁部外面横ナデ、体部外面幅広のヘラケズリとなる。胎土はやや粗く、小砂粒を多く含む。340は推定口径13.6cm、器高6.5cmを測る鉢である。体部は内湾気味に立ち上がり、底部は丸味を有する。体部内面は器面の剝離が顕著で明瞭ではないが横位のミガキ、外面はヘラケズリの後に粗いミガキが加えられる。底部はヘラケズリ調整となる。胎土はやや粗く、長石・石英・雲母の小砂粒を多く含む。二次的に被熱し、多量の煤が外面に付着している。341は手捏ね土器である。底部内面周縁が強くオサエられるため、中央が突起状に残る。内外面とも指頭により成形された後、斜位のミガキが全面に加えられ、若干光沢を有する。胎土はかなり緻密で、小砂粒の混入も少ない。赤褐色の色調を呈する。342は底径9.6cmを測る土師器の甕で、底部付近の遺存である。胴部内面はヘラナデ、外面には縦位の粗いヘラミガキが施される。底部には木葉痕が明瞭に残り、二次調整は加えられていない。胎土はやや粗く、長石・石英・雲母の大砂粒を多く含む。色調は暗黄褐色を呈する。胎土及び調整より、いわゆる「常総型」の甕と呼ばれるものである。

103号住居跡（第52図343～359、図版59・60）

343は須恵器の杯で、本住居跡内の他の土器より明らかに先行する時期の所産である。推定口径15.2cm、器高4.9cmを測る。体部は直線的に開き、口唇部でやや外反する。体部内外面とも左回転の横ナデ調整で、外面下端に回転ヘラケズリが施される。底部は回転ヘラ切り後周縁に不整方向の雑な手持ちヘラケズリが加えられる。胎土は比較的緻密であるが、雲母粒の混入が目立つ。色調は黄灰色を呈する。常陸産のものであろう。344・345・348は回転糸切り未調整の土師器の杯である。回転方向は左となる。344はほぼ完形で、口径15.4cm、器高4.9cmを測る。底部を厚く残し、体部は内湾して立ち上がり、口唇部で若干外反する。体部内外面は丁寧な横ナデで、外面にはロクロ目が明瞭に残る。現底面より4mmほど上で底部の切り離しを行なおうとしたが、途中で止め、底部の粘土を上方に延ばして切り離し面を塞ぎ、現底面で再度切り離しを

施した痕跡が観察される。胎土は緻密で、砂粒の混入も少ない。内面には油煙の付着が部分的にみられる。345もほぼ完形で、口径12.2cm、器高3.7cmを測る。底部は厚く、体部は上方に移行するに従い徐々に厚さを減じる。口縁部の外反度は大きい。胎土は緻密であるが、やや砂質を帯び、長石・雲母の小砂粒を多く含む。二次的に火を受けている。348は体部が直線的に開くもので、ロクロ目は弱い。胎土は345同様砂質を帯び、小砂粒の混入が多くなる。色調は燈褐色を呈し、二次的な被熱のため黒変している。346・347・349は内面黒色処理を施した土師器の高台付椀である。346・347は火を受け、黒色がほとんど残っていない。346は推定口径14.3cm、器高5.4cmを測る。体部は内湾し、そのまま口縁部に至る。高台下端は磨耗が激しいため、詳細な形状は不明である。体部内面は4分割の丁寧なミガキ、外面は横ナデで、下端に回転ヘラケズリを加える。底部は回転糸切り未調整となる。胎土はやや砂質を帯び、長石・雲母小砂粒を多く含む。燈褐色の色調を呈する。347は口径12.9cm、器高5.1cmを測り、口縁部が外反する。高台はハの字状に開き、下端は磨耗が激しいが大きく外反するものと思われる。調整は346と同様で、胎土はより緻密となる。349は完形品で、口径11.6cm、器高4.0cmを測る。体部外面から高台部は丁寧な横ナデ、体部内面は3分割のミガキ、底部内面は一方向のミガキがきわめて丁寧に施される。口縁部外面にも部分的にミガキが認められる。底部は回転糸切り後、高台貼り付け時にナデ調整を加える。胎土はかなり緻密で、小砂粒の混入も少ない。色調は外面黄褐色を呈する。350は口径15.2cmを測る高台部を欠く椀で、口縁部が外側に屈曲する。体部内外面左回転の丁寧な横ナデ、外面下端には回転ヘラケズリが加えられる。底部は回転糸切り後全面ナデ調整となる。高台は欠損するが、貼り付け時に底部側に螺旋状の切り込みを入れる。胎土は緻密で、長石・雲母小砂粒を含む。色調は黄褐色を呈するが、外面は火を受けているようである。なお、口縁部が若干欠損している部分の内外面及び破損面に煤が付着しており、灯明として利用した可能性が強い。351～356はいわゆる足高高台の付く杯である。351はほぼ完形で、口径15.0cm、器高7.8cmを測る。杯部と高台部の高さがほぼ同様である。口縁部の外反度は弱い。高台はハの字状に開き、端部が大きく外反する。内外面とも左回転の丁寧な横ナデ調整が施される。底部は回転糸切り後丁寧にナデが加えられ、その後高台が貼り付けられる。胎土はかなり緻密で、雲母小砂粒を多く含む。内外面に煤の付着が観察される。352は口縁部の外反度がやや大きく、杯部が深くなる。杯部と高台部の境は351ほど明瞭ではない。高台は比較的短いが、端部が磨耗しており図示より若干長くなる可能性もある。胎土・調整は同様で、やはり内外面に煤が付着している。353は体部が直線的に開き、口縁部で大きく外反する。高台の開きが大きくなる。胎土は緻密であるが、砂質を帯びるようになり、ややざらついた感を呈する。黄褐色の色調を呈する。354～356は高台部片で、354は底部がやや丸底に近くなり、高台も低くなる。357は胴部を若干欠損する甕で、口径20.4cm、器高28.7cmを測る。口縁部はくの字状に外反し、口唇部が上方につまみ上げられ、端部が平坦となる。胴部は長胴で、底部が大きめに造られる。口縁

部内外面丁寧な横ナデ、胴部内面ナデ、外面ヘラケズリ調整となる。胎土は緻密で、長石・雲母小粒子を多く含む。色調は黄褐色であるが、外面はかなり火を受けており、器面の剝離と煤の付着が顕著である。358は推定口径24.6cm、器高21.9cmを測る土師器の甕である。最大径を口縁部に有し、口唇端部を平坦に整形している。調整は、口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面上半複節の縄による叩き、中央部横ナデ、下端ヘラケズリとなる。胴部内面の当て具痕は丁寧なナデにより消される。胎土はやや粗く、長石・石英等の大砂粒を多く含む。色調は黄褐色を地色とするが、二次的に被熱して、赤変している。359は甕の上半部片で、口唇端部が沈線状に調整される。胎土は358と同様である。

107号住居跡（第53図360～364、図版60）

360は口径13.4cm、器高4.1cmを測る土師器の杯である。体部はほぼ直線的に開き、口唇部で若干肥厚する。底部は上げ底で、回転糸切り離しとなる。体部内外面横ナデ、体部外面下端から底部周縁には手持ちヘラケズリが施される。胎土はやや粗く、長石・石英の小砂粒を多く含む。二次的に火を受けるため、器面が赤変し、剝離及び煤の付着が激しい。底部外面には一部欠損するが「吉原大島」の墨書が記される。361は須恵器の甕で、1/2程の遺存である。底部はほとんど欠損しているが、僅かに残る底部片より、五孔形態のものと思われる。推定口径38.4cm、器高28.6cmを測る。口縁部は水平に大きく開き、口唇部が三角形状を呈する。胴部はバケツ形となり、ほぼ直線状に底部へ移行する。調整は、口縁部内外面丁寧な横ナデ、胴部外面横位の目の細かい平行叩き後下端にヘラケズリを施す。胴部内面は縦位の粗いナデ調整で、輪積み痕が部分的に残る。底部の孔の部分はヘラケズリにより面取りされる。胎土はやや粗く、長石・石英の大砂粒を多く含む。焼成は良好で、色調は暗灰色を呈する。二次的に火を受けた痕跡はあまり認められない。362は還元炎焼成になりきれない須恵器の甕である。器形は361とほぼ同様であるが、口縁部の開きはそれほど大きくない。胴部外面の平行叩きは縦位で、361よりやや目が幅広く、叩き具は異なっているようである。胎土はやや緻密で、雲母粒の混入が目立つ。焼成もやや軟質である。363・364は、口唇部を上方につまみ上げ、胴部下端にヘラミガキを施す「常総型」の甕である。363はほぼ完形で、口径18.9cm、器高32.5cmを測る。胴部はかなり薄く仕上げられる。調整は、口縁部横ナデ、胴部内面ヘラによる丁寧なナデとなる。胴部外面は、上半ヘラケズリ後ナデ、下半幅5mm程のミガキであるが、上半は器面の荒れが激しいため詳細な調整は不明である。胎土は粗く、石英の大砂粒をかなり多く含む。焼成は不良で、色調は二次的に火を受けているため赤褐色を呈する。364は器肉が厚く、胴部下半が大きくすぼまる。胴部内面下半は輪積み痕が明瞭で、特に下端は段状を呈するほどである。調整は363と同様で、胴部外面上半にはナデを加えたヘラケズリが明瞭に観察される。底部はナデが加えられ、木葉痕が痕跡程度に残る。胎土は363とやや異なり、緻密で石英の混入が少なく、雲母粒が特に

目立つ。焼成は良好で、色調は黄褐色を呈する。胴部下半にはカマド部材及び煤の付着が認められる。

1 0 9号住居跡（第54図365）

365は推定口径22.0cmを測る大形の杯である。器肉がきわめて厚い点特徴的である。体部内面はナデ後粗いミガキ、外面はヘラケズリ後粗いミガキが施される。胎土はやや粗く、長石・石英粒を多く含む。焼成は良好で、色調は赤褐色を呈する。ミガキによる光沢があり、赤彩は施されないものの土器の色調がその効果を示しているようである。

1 1 0号住居跡（第54図366～374、図版61）

366～369は土師器の杯である。366は体部が直線的に開き、そのまま口縁部に至るが、口唇部でやや肥厚する。体部と底部の境は不明瞭である。体部内外面は丁寧な右回転の横ナデ、底部は回転糸切り未調整となる。胎土は緻密で、砂粒の混入は少ない。黄褐色の色調を呈する。底部外面ほぼ中央に「大島」の墨書が記される。367は体部下端から底部全面に手持ちヘラケズリを施す。366よりやや胎土が粗くなる。底部外面の墨書は、「田」の部分が遺存しているが、366同様「大島」となるであろう。368・369は体部が内湾気味に開き、口縁部でやや外反するタイプである。口径12.0cm、器高4.0cmを測るが、368の底径がかなり小さくなる。調整は、体部内外面横ナデ、底部は368が回転糸切り未調整、369が回転糸切り後全面手持ちヘラケズリとなる。胎土は緻密で、368は長石・石英の小粒子を多く混入する。370～372は墨書を施した底部片である。370は内面黒色処理の高台付杯で、「大」の残画がみられるが、その記載位置から「大島」となる可能性が強い。371は回転糸切り未調整で、「吉原」の文字が残っているが、本来は「吉原大島」となるであろう。372は内面黒色処理の杯で、墨書は判読できない。373はほぼ完形の甕で、推定口径21.3cm、器高13.2を測る。器肉はかなり薄く仕上げられ、口唇部を上方につまみ上げる。口縁部内外面横ナデ、胴部内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ調整が施される。底部はヘラケズリとなる。胎土は緻密で、長石・石英粒を多く含む。色調は暗赤褐色を呈する。374は底径13.2cmを測る須恵器の甕の底部付近である。胴部には縦位の平行叩き目が施され、下端に幅広のヘラケズリを加える。底部には二次調整が認められない。胎土は緻密で、小砂粒の混入が少なく、黒灰色の色調を呈する。

1 1 1号住居跡（第54図375～381、図版61）

375・376は炭素吸着による内面黒色処理を施した土師器の高台付椀である。375は口唇部を欠くが、推定口径16.8cm、器高6.5cmを測る大形品である。全体に器肉が厚く、かなり重量感がある。口縁部には浅い沈線状の凹みが一条巡る。調整は特徴的で、体部内面横位の粗いミガキ、

外面は横ナデ後粗いミガキで、下端には左方向の回転ヘラケズリが加えられる。底部は回転ヘラケズリ調整となる。高台は貼り付けで低く、やや内湾気味にハの字状に開く。胎土は緻密で、長石・石英の小砂粒を多く含む。376は完形で、口径15.2cm、器高5.7cmと375より一回り小さい。体部は大きく内湾し、口縁部で外反する。体部内面は4分割の弧状ミガキ、外面は丁寧な横ナデで、口縁部にミガキを加える。底部は回転糸切り未調整となる。高台は貼り付けで、断面三角形形状を呈する。高台と体部の接合部外面は沈線状に明瞭に凹む。377は口唇部の磨耗が激しい口径14.5cm、器高5.3cmを測る杯である。口縁部が大きく外反し、底部は回転糸切り未調整となる。体部内外面の横ナデは丁寧である。胎土は砂質を帯び、ざらついた感を受ける。雲母粒の混入が目立つ。378は全体に歪みが激しい小形の杯である。体部中央に稜を有し、口縁部が肥厚する。底部は突出し、回転糸切り未調整となる。胎土はきわめて緻密で、小砂粒の混入も少ない。色調は黄褐色を呈し、外面に若干煤が付着する。379・380は底部回転糸切り未調整の小皿である。379は口径8.5cm、器高1.9cmで、器形的には378と類似する。胎土は粗く砂質を帯び、小砂粒の混入が多い。内面は火を受け、煤が全体に付着する。380は全体に厚い造りで、体部の深さがほとんどないタイプである。かなり重量感がある。胎土はきわめて緻密で、黄褐色の色調を呈するが、内面は被熱による黒変がみられる。381は高台を欠く小皿である。口縁部が大きく外反する。内外面とも左回転の横ナデ調整が施される。底部はナデが加えられるが、高台の接合面に回転糸切り離しの痕跡が残る。

1 1 2号住居跡 (第54図382)

382は上部を欠くが、小形の碗となろう。体部内面は4分割のミガキで、黒色処理される。高台は下端部で大きく開き、かなり安定感がある。胎土は緻密で、砂粒の混入も少ない。色調は黄褐色を呈する。

1 1 3号住居跡 (第54図383～387、図版62)

383は1/3程の遺存であるが、推定口径24.0cm、器高3.3cmを測る大形の皿である。口縁部は中央に弱い稜を形成して2段口縁状となる。調整は、体部内面横位のミガキ後放射状の粗いミガキ、外面はヘラケズリ後粗いミガキとなる。口縁部外面は、丁寧な横ナデに弱いミガキが加えられる。胎土はきわめて緻密で、小砂粒の混入も少なく、他の土器の胎土に比べてかなり洗練されたものである。色調は燈褐色を呈し、底部外面には焼成時の黒斑がみられる。384は須恵器の蓋のつまみ部である。扁平な形態で、中央と周縁の高さが同じである。貼り付けで、丁寧にナデ調整される。胎土中に石英大粒子を多く含み、黒灰色の色調を呈する。385は口径14.8cm、器高6.8cmを測る碗である。体部に比べて底部が薄く仕上げられる。体部内面は横位のミガキ、外面はヘラケズリ後粗いミガキが施される。底部にも粗いミガキが加えられる。胎土は緻密で、

小砂粒の混入が少なく、383の胎土と似る。色調は赤褐色を呈し、内面には炭化物の付着が若干みられる。386・387は完形の鉢のミニチュアである。底部には木葉痕が明瞭に残る。内面調整は丁寧なヘラナデであるが、外面は386が平滑なヘラケズリ、387が指ナデで、輪積み痕が観察される。胎土はやや粗く、長石・石英・雲母粒を多く含む。色調は赤褐色を呈し、焼成時の黒斑が認められる。

114号住居跡（第54図388～393、図版62）

388～391は土師器の杯である。388は口径12.8cm、器高4.5cmを測る。全体にかなり薄く仕上げられる。口縁部が大きく外反し、底部がやや突出する特徴的な形態を呈する。体部下半及び底部全面に手持ちヘラケズリ調整が施される。胎土はやや粗く、長石・赤色粒を多く含む。色調は黄褐色を呈する。389は完形で、口径12.2cm、器高3.9cmを測る。体部は内湾して開き、口縁部で肥厚してやや外反する。調整は内外面とも丁寧な横ナデで、平滑に仕上げられる。底部は全面に一方向のヘラケズリが加えられる。胎土はきわめて緻密で、雲母小粒子を多く含む。色調は燈褐色を呈し、外面に煤の付着が認められる。口唇部の磨耗が激しい。390も完形で、口径12.9cm、器高4.0cmを測る。器形は特徴的で、小さな底部から体部が内湾気味に大きく開き、口縁下に明瞭な稜を形成して口縁部が外湾気味に外傾する。体部は丁寧な横ナデ調整で、体部外面下端から底部周縁に手持ちヘラケズリが加えられる。底部は回転糸切り離しである。胎土は砂質を帯び、雲母粒を主体とした小砂粒を多く含む。色調は黄褐色を呈し、外面にはカマド部材の付着が全面にみられる。391は底部回転糸切り未調整の杯片である。体部外面には「濱」の旁が遺存している。392は内面黒色処理を施した高台付皿である。高台の開きは小さく、口縁部が大きく外反する。体部内面はミガキ、他は丁寧な横ナデで、底部は回転糸切り未調整である。口唇部の磨耗が激しい。393は小形甕で、口縁端部がくの字状に外傾する。胴部外面のヘラケズリによりかなり薄く仕上げられている。

115号住居跡（第55図394～408、図版62）

394～402は土師器の杯である。いずれも遺存はあまりよくない。394～397は体部が直線的に開き、そのまま口縁部に至る形態を呈する。体部内外面横ナデ、底部は回転糸切り後全面ヘラケズリ調整が加えられる。口径13.0cm前後、器高3.5cm前後を測る。胎土・色調はやや異なり、394がやや粗く黄白色を呈するのに対し、395～397は緻密で、長石・赤色粒子を含み、燈褐色を呈する。394は全体に磨耗が激しい。396は体部外面に、判読が難しいが「吉」、397は底部外面に「大畠」の墨書が施される。395にも墨書が認められるが、墨痕程度の遺存であり、判読できない。398は器高4.2cmとやや深くなり、体部が内湾気味となる。体部下端及び底部周縁に手持ちヘラケズリが加えられる。底部は回転糸切り離しである。胎土は緻密で、長石を主体とした

小砂粒を多く含む。色調は黄褐色を呈する。底部外面の縁辺寄りに「大畠」の墨書が記される。399は推定口径12.2cm、器高4.5cmを測る。体部の内湾度はさらに強くなり、口縁部が外反する。底部は突出して切り残される。調整は内外面とも丁寧な横ナデ、底部は全面ヘラケズリとなる。胎土は緻密で、小砂粒の混入も少ない。色調は黄褐色を呈し、外面に一部火襷が認められる。底部外面には「上」の墨書が遺存しているが、その記載位置より2文字で構成されていた可能性が高い。400・401は口径12.5cm前後、器高3.7cmを測り、口縁部がやや肥厚して外反するタイプである。体部内外面とも丁寧な横ナデで、底部は全面ヘラケズリ調整される。400の体部下端には手持ちヘラケズリが加えられる。胎土は緻密で、長石・赤色粒子を含み、黄褐色の色調を呈する。402は器高が深く、体部が直線的に開くものである。底部は厚くなる。体部下端及び底部全面に手持ちヘラケズリが加えられる。胎土・色調は394と同様である。403～406は墨書土器片である。403は内面黒色処理で、底部は全面ヘラケズリされる。底部外面に「大畠」と記される。405も「大畠」で、体部外面に横位で施される。404・406は胎土が同様で、外面に火襷を残す。底部外面の墨書は、一部欠損しているため明瞭ではないが、いずれも「濱」と思われる。407は器肉をきわめて薄く仕上げた土師器の甕である。口縁部はゆるく外傾し、口唇部がほぼ水平に外反する。口縁部内外面横ナデで、その後胴部外面のヘラケズリを施す。内面はヘラにより丁寧に調整される。胎土は緻密で、長石・雲母粒を多く含む。408は土師器甕の底部片である。胴部は直線的に開く。上部には縦位の平行叩きが施され、下端に幅広のヘラケズリを加える。底部は磨耗が激しく、調整は不明である。胎土中に、長石・石英の大粒子と雲母小粒子を多く含む。色調は赤褐色を呈する。底部のほぼ中央に、焼成後径7mmの孔が穿たれる。孔の周囲は丁寧に調整されている。

1 1 9号住居跡（第55図409～第56図430、図版63・64）

409～426は土師器の杯である。409～415は底部外面に「吉原仲家」の墨書が記される。409は推定口径12.6cm、器高3.7cmを測る。体部は若干内湾し、口縁部内面に明瞭な稜を形成する。体部内外面は右回転の横ナデ調整で、体部下端及び底部全面に手持ちヘラケズリが加えられる。胎土は緻密で、長石・石英・赤色粒子を多く含む。色調は黄白色を呈する。410は口径12.2cm、器高4.4cmと口径に比して器高が深くなる。底部は回転糸切り離しで、体部下端から底部周縁に手持ちヘラケズリが加えられる。胎土はやや軟質で、小砂粒を多く含む。底径が小さいため、墨書が一部体部にまで及んでいる。411・412はほぼ完形で、口径12.1cm、器高4.0cmを測る。体部内外面とも右回転の丁寧な横ナデで、外面は板状工具または爪の当たりによるロクロ目が沈線状に巡る。底部は回転糸切り離しで、411は全面、412は周縁に手持ちヘラケズリ調整を施す。胎土中に小砂粒を含むが、かなり緻密で精選されたものである。色調は黄褐色を呈し、412の体部内面には煤が付着する。413～418は炭素吸着により内面黒色処理が施された無高台の杯であ

る。413・415は口径15.1cm、器高4.5cmを測り、胎土・調整とも同様のものである。底部は若干突出し、体部は413が直線的、415がやや丸味を有する。口唇部は肥厚して外反する。体部外面は右回転の丁寧な横ナデで、比較的強いロクロ目が残る。内面は幅広のミガキを雑に繰り返して施している。ミガキの方法は横位後弧状である。底部は全面手持ちヘラケズリ調整となる。胎土は緻密で、長石・石英の小砂粒を比較的多く含む。色調は黄白色を呈し、415の底部外面には焼成時の黒斑が認められる。この2個体は土器のタイプとともに、墨書土器の書体がきわめて類似しており、その共通性がうかがえる。詳細については後章で検討する。414も土器のタイプからすると415と共通するものがある。ただ、全体に器面の磨耗が激しく、内面のミガキも観察困難な状況である。底部の墨書もかなり薄くなっている。416・417は、体部下端に弱い稜を有して、上半部が外反気味に開くタイプである。胎土は緻密で、小砂粒の混入も少ない。416は体部下端から底部全面に手持ちヘラケズリ調整を加え、内面には5分割のかなり細かいミガキが丁寧に施される。417は、体部下端に爪の当たりのような沈線状のロクロ目が残り、底部が全面ヘラケズリされる。底部外面には焼成時の黒斑がみられる。418は胎土・調整とも414とまったく同様のものである。419～421は、口径11.5cm前後、器高4.0cm前後を測るやや小形のものである。419・420は同様の造りで、口縁部の外反が弱く、底部が回転糸切り末調整となる。体部内外面は右回転の丁寧な横ナデ調整で、体部下端には細かいロクロ目が残る。胎土は緻密で、小砂粒を比較的多く含む。色調は暗黄褐色を呈する。419の底部外面には「濱」が大きめに墨書される。421は、体部の内湾及び口縁部の外反度がやや大きくなる。底部は全面ヘラケズリ調整される。内外面とも丁寧な横ナデで、平滑に仕上げられる。胎土中に雲母小粒子の混入が目立つが、かなり精選されたものである。色調は黄褐色を呈する。体部外面には、正位で「吉」と墨書される。この書体は115号住居跡の396と同じである。422は底部がやや丸味を持つもので、全体に厚く仕上げられている。体部は丁寧な横ナデで、底部は全面手持ちヘラケズリ調整される。二次的に火を受け、赤変及び煤の付着が顕著である。423は口径11.7cm、器高3.4cmとやや浅くなる。口縁部はほとんど外反せず、底部が全面手持ちヘラケズリされる。胎土はやや粗く、長石・石英の小粒子を多く含む。二次的に被熱しているようである。424・425は墨書土器の底部片で、底部全面ヘラケズリ調整される。いずれも中央からややずれた位置に、それぞれ「濱」、「吉原仲家」と墨書される。426は体部下端から底部全面に手持ちヘラケズリを施す杯の底部片で、内面に朱墨が明瞭に遺存している。427は内面黒色処理の土師器の高台付皿である。推定口径13.8cm、器高3.4cmを測る。体部はほぼ直線的に開き、そのまま口縁部に至る。高台は貼り付けで、やや内湾気味に開く。体部内面は井桁状の4分割のミガキが施され、底部には丁寧な回転ヘラケズリが加えられる。二次的に火を受けているためか、赤褐色の色調を呈している。428は皿か杯の高台部である。やはり内面黒色処理が施されている。底部は回転糸切りで、高台貼り付け時に周縁にナデを加える。底部外面の中央からずれた位置に墨書が記される。判読する

のが難しいが、「濱」を意識したものと思われる。429はほぼ完形の小形甕で、口径11.8cm、器高10.6cmを測る。やや歪みが認められる。口縁部はくの字状を呈し、口唇部が大きく外反する。胴部外面のヘラケズリをかなり深く施すため、器肉が薄くなっている。胎土は緻密であるが、長石・石英の小砂粒を多く含む。被熱による黒変が著しい。430も小形甕で、429と同様の胎土・調整である。

1 2 1号住居跡（第56図431・432）

431は推定口径12.8cm、器高4.0cmを測る土師器の杯である。体部内外面横ナデ、底部は回転糸切り未調整である。口唇部の磨耗が激しい。胎土は緻密で、小砂粒の混入も少ない。色調は赤褐色を呈する。432は高台付皿で、高台部を欠損する。体部はかなり厚く仕上げられ、ほぼ直線的に開き、口縁部でやや外反する。高台は体部に比べて径が小さい。胎土は緻密で、黄褐色の色調を呈する。

1 2 2号住居跡（第56図433・434）

433は推定口径12.2cm、器高3.6cmを測るやや扁平な形態の土師器杯である。全体に分厚い造りで、体部が直線的に開く。体部内外面は丁寧な横ナデで、平滑に仕上げられる。体部外面下端から底部全面に手持ちヘラケズリ調整が加えられる。底部の切り離しは不明である。胎土は比較的緻密であるが、石英・赤色粒子を多く含む。底部外面には焼成時の黒斑が残り、色調は、内面赤褐色、外面黄褐色を呈する。434は須恵器の高台付杯である。図示した部分の1/2程の遺存である。体部は大きく開いた後に強い稜を有して直線的に口縁部に移行するものと思われる。体部は内外面とも丁寧に横ナデ調整される。底部は左回転のヘラ切りで、焼成前のヘラ記号が施される。現存する部分では「一」のみであるが、「十」の可能性が強い。高台は低く、安定感がある。高台底面は磨耗している。胎土は緻密で、長石の比較的大きな粒子を多く含む。色調は暗青灰色を呈する。

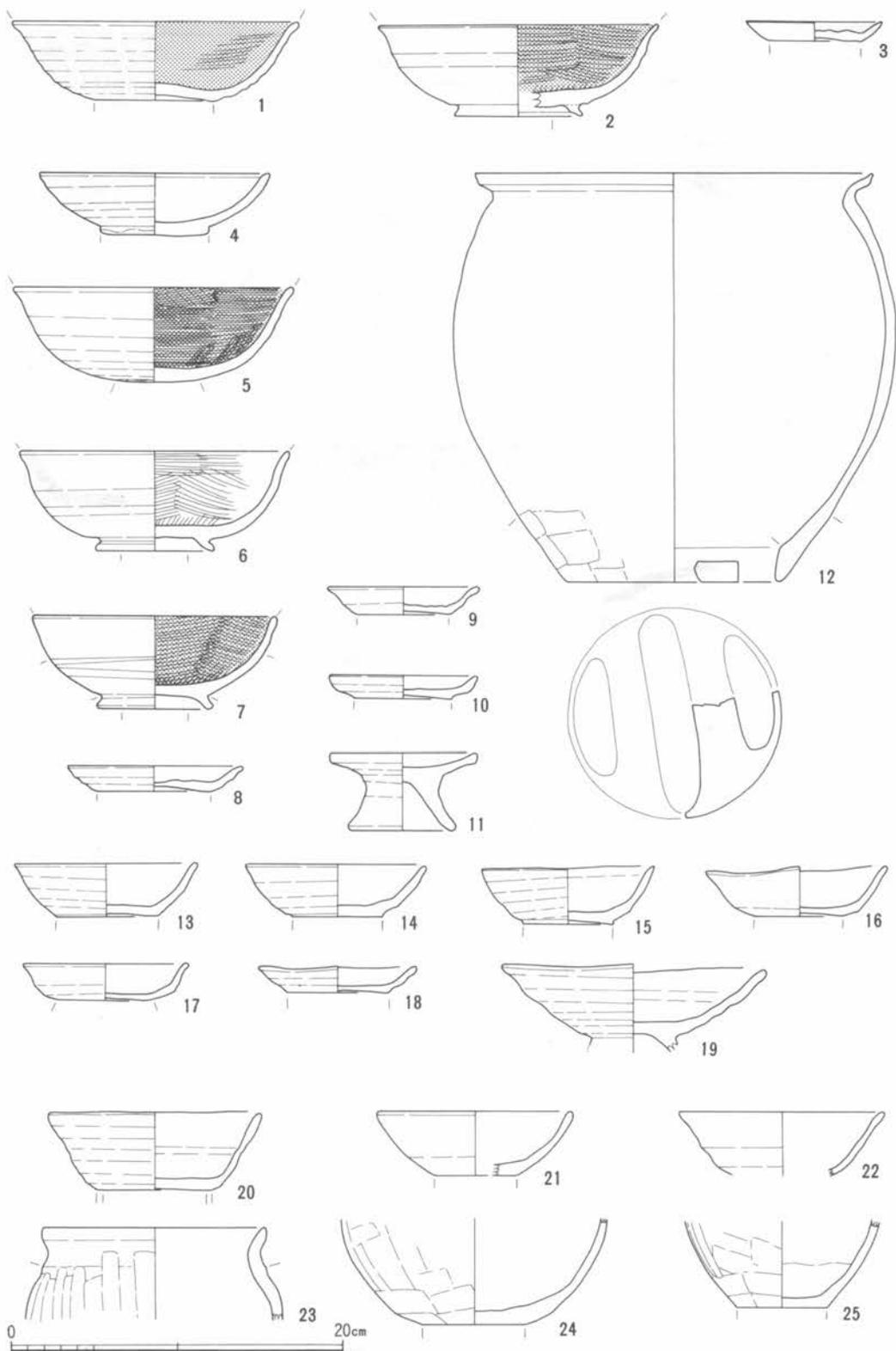
1 2 4号住居跡（第56図435～441、図版64）

435は推定口径16.2cm、器高4.7cmを測る大形の杯である。全体に厚く仕上げられ、体部は内湾気味に開き、そのまま口縁部に至る。体部と底部の境は明瞭ではない。体部内面は丁寧なナデ後、非常に細かいミガキが加えられる。ただ、ミガキが弱いいためか光沢はあまり良好でない。外面は、斜位のヘラケズリ後粗いミガキを施す。このミガキは底部外面にまで及んでいる。胎土は比較的緻密で、長石の小砂粒を多く含む。赤彩は施されていないが、赤褐色の色調によりその効果は充分に果たしているようである。436～438は須恵器の杯である。436・437は胎土・調整とも同様のものである。体部は直線的に開き、そのまま口縁部に至る。底部と体部の境は、

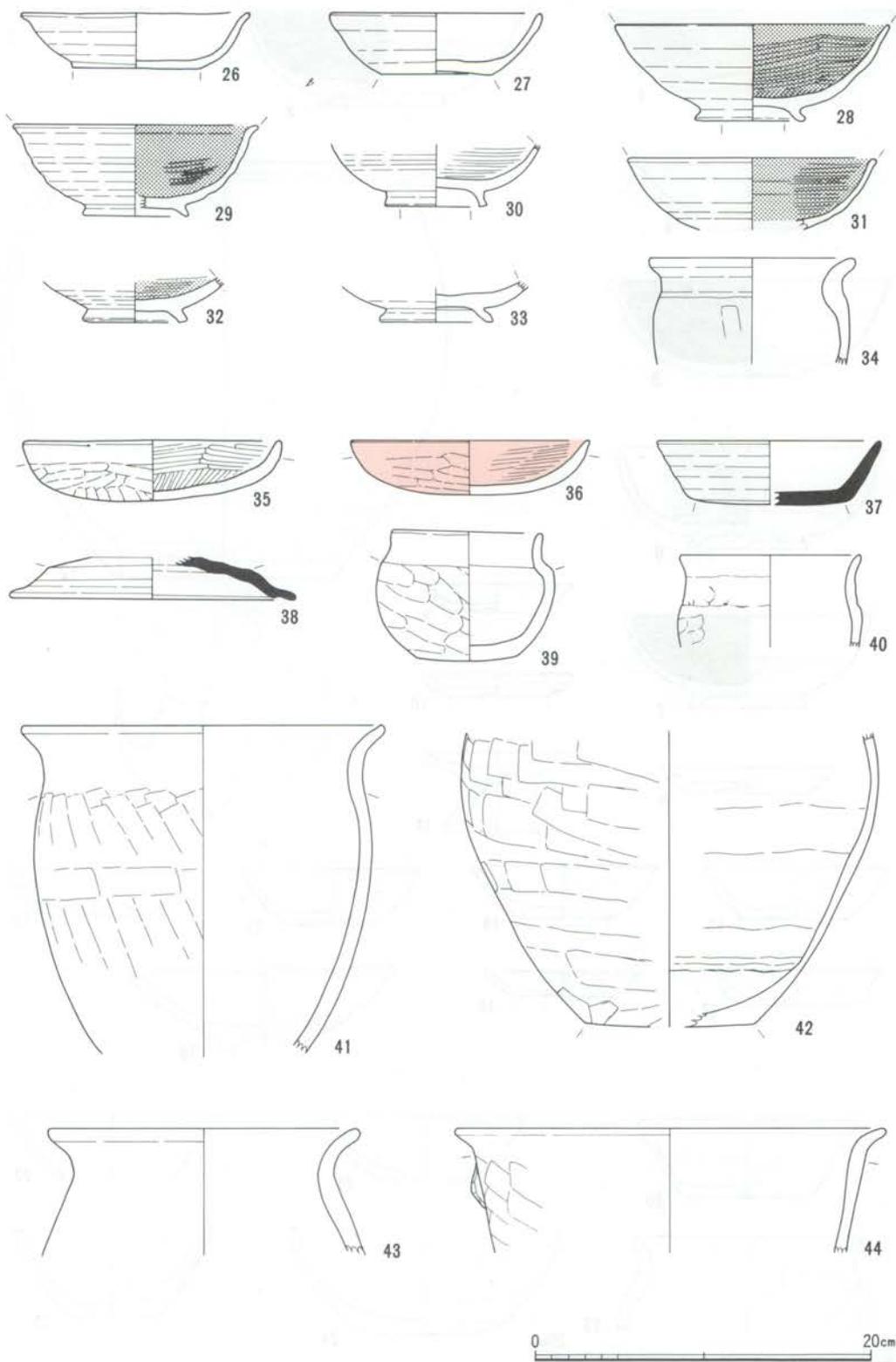
436が比較的明瞭であるのに対し、437は丸味を有するようになる。体部内外面は右回転の横ナデで、体部外面下端から底部全面は回転ヘラケズリ調整が施される。胎土は粗く、長石・石英の大砂粒及び雲母小粒子をかなり多く含む。いずれも口唇部の磨耗が激しい。437は完全に還元炎焼成となるが、436は下半部が酸化炎に近い色調を呈している。法量は、436が口径14.8cm、器高4.2cm、437が口径14.0cm、器高4.2cmと436が若干大きい。438は437と同様の形態を示すが、調整はやや異なる。体部外面のロクロ目が強く残り、体部下端は回転ヘラケズリ、底部外面は一方向の手持ちヘラケズリ調整が加えられる。胎土は比較的緻密となり、砂粒の混入もやや少なくなる。焼成も良好になり、全体的に堅緻な感を受ける。439は口径12.0cm、器高8.7cmを測る鉢である。口縁部は短く外傾し、胴部の脹らみはほとんどない。口縁部外面から胴部内面上半は丁寧な横ナデ、胴部内面下半はヘラナデ調整される。胴部外面はヘラケズリされるが、被熱による器面の剝離が顕著なため明瞭ではない。底部には木葉痕が明瞭に残る。胎土はやや粗く、長石・石英粒を多く含む。440は口径22.8cmを測る甕である。口縁部はくの字状に外傾し、口唇部が明瞭な稜を有して上方につまみ上げられる。胴部は長胴気味となり、かなり薄く仕上げられる。調整は、口縁部内外面横ナデ、胴部内面は丁寧なナデとなる。胴部外面は、斜位の平行叩き目後比較的幅広のヘラケズリが加えられる。胎土は緻密で、小砂粒を多く含む。色調は赤褐色を呈し、胴部外面にカマド部材の付着が認められる。441は胎土等から440と同一個体と思われる。

127号住居跡（第56図442、図版64）

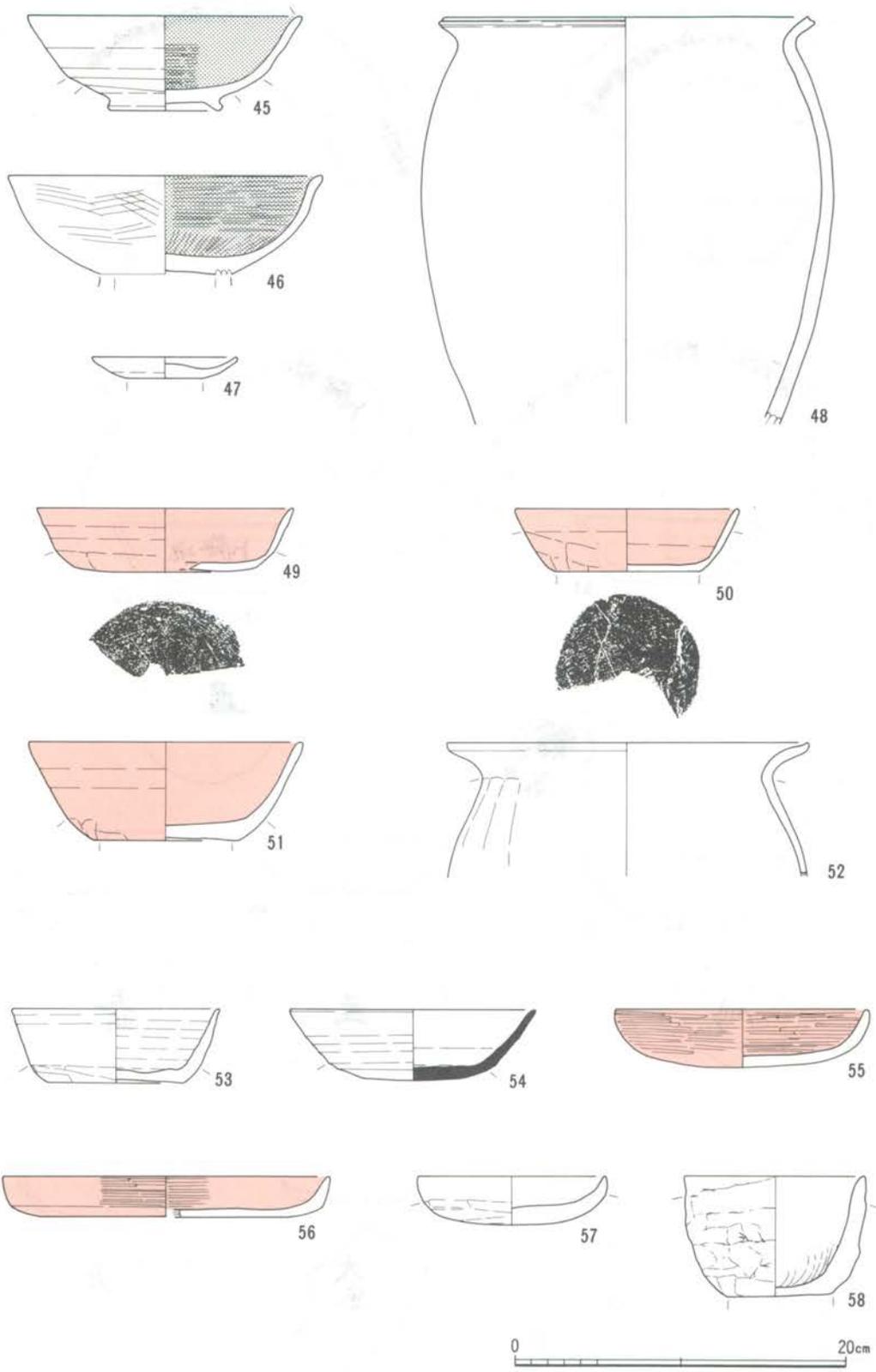
442はほぼ完形の土師器の高台付椀である。口径14.4cm、器高5.4cmを測る。かなり丁寧な造りで、炭素吸着により内面黒色処理が施される。体部は内湾気味に開き、口縁部が若干外反する。高台は短く外側に強く踏張る。体部内外面とも4分割の丁寧なミガキが加えられる。底部は回転糸切り未調整で、高台貼り付け時に周縁がナデ調整される。口縁部の磨耗が激しい。胎土は非常に緻密で、雲母粒を比較的多く含む。



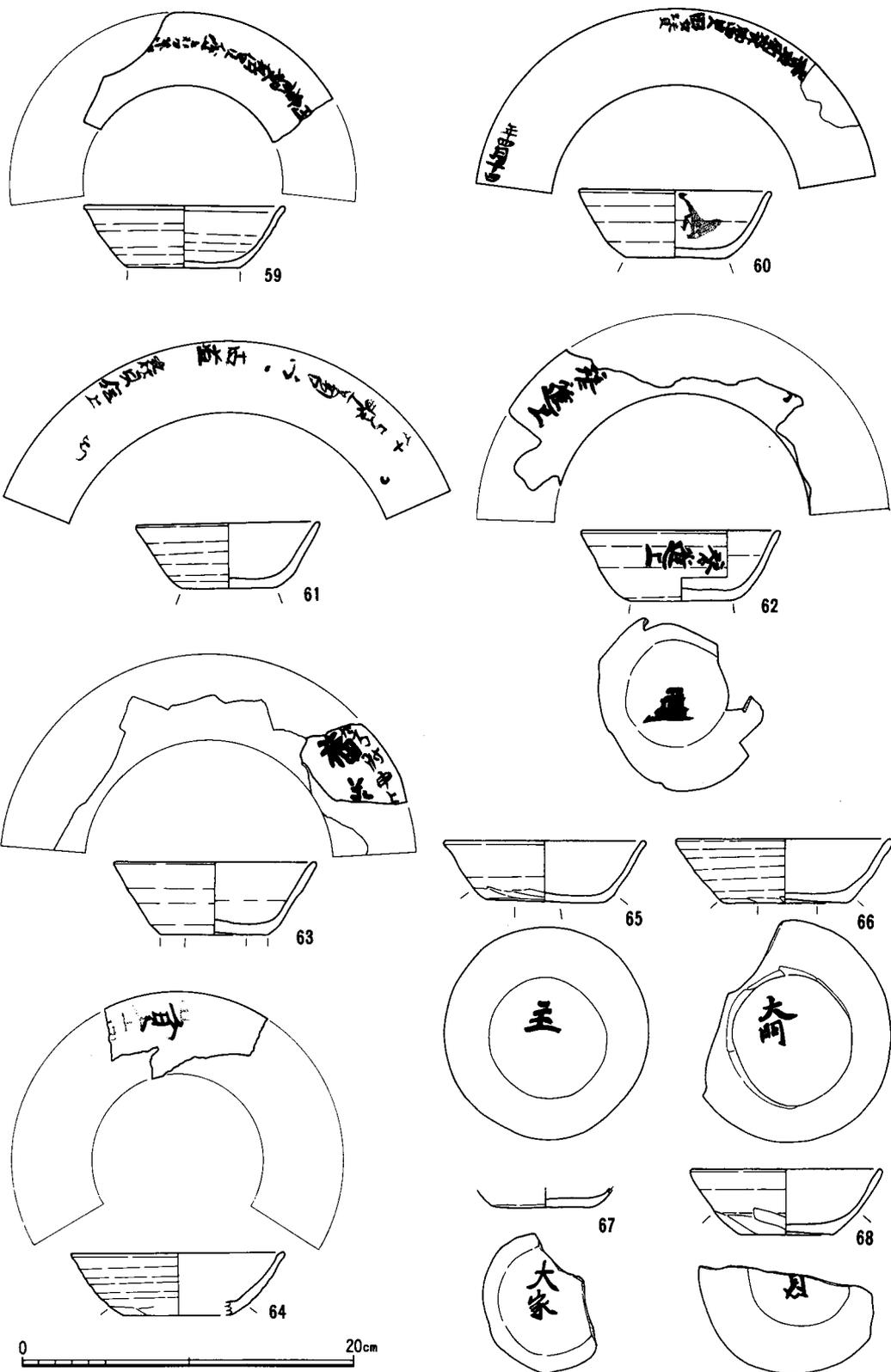
第37图 005(1~3)·006(4~12)·007(13~17)·009(18·19)·008(20~25)号住居跡出土土器



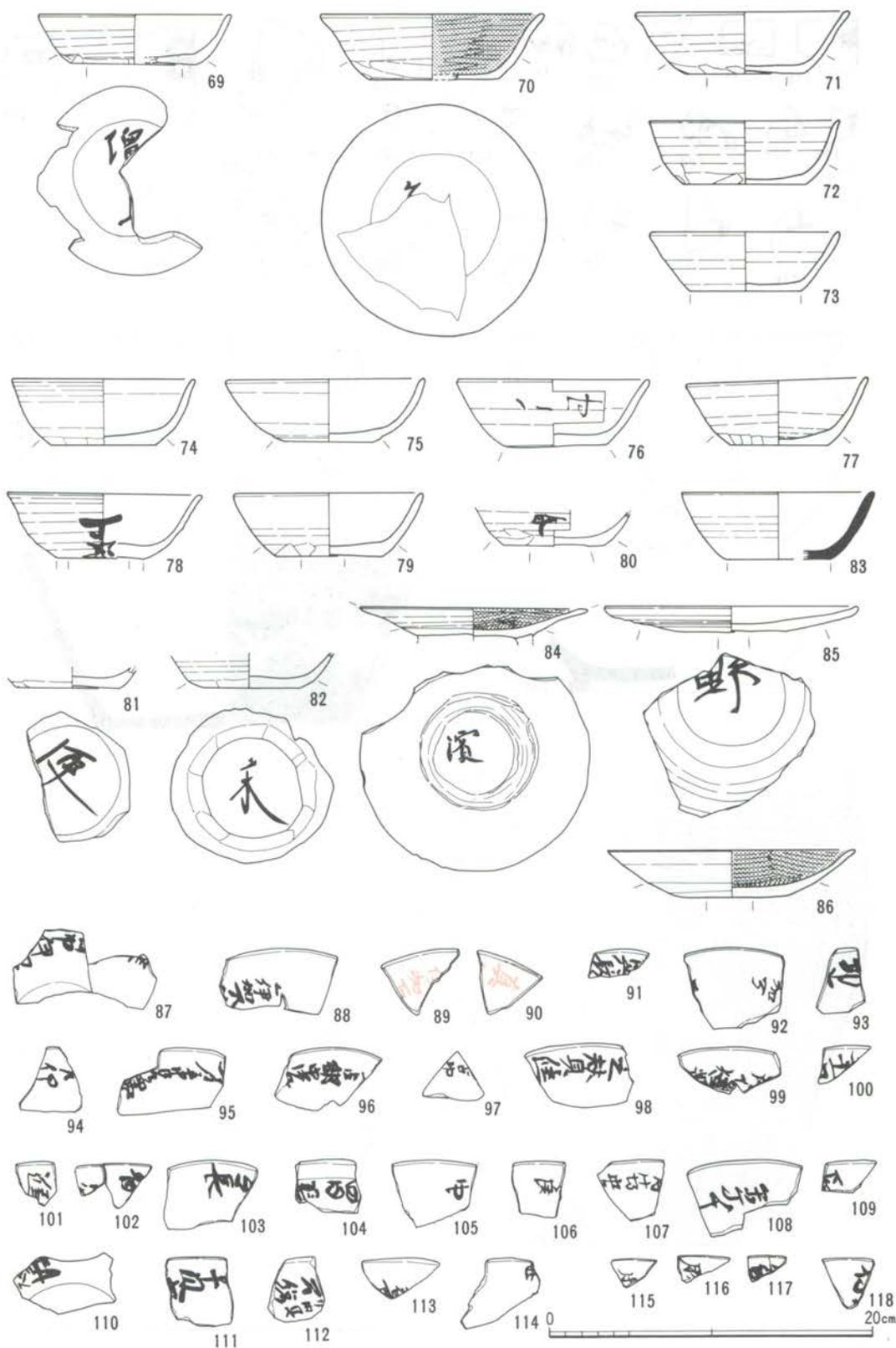
第38图 011(26~34)·012(35~44)号住居跡出土土器



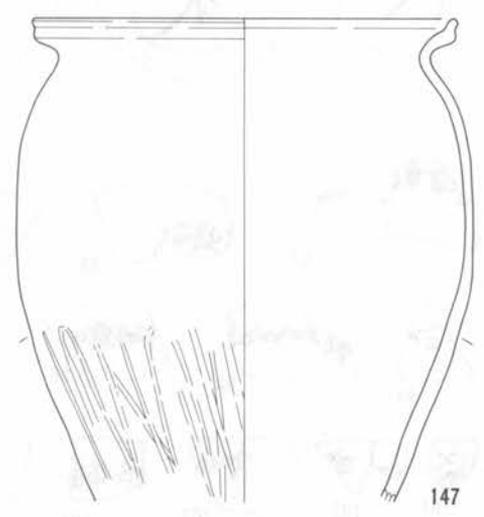
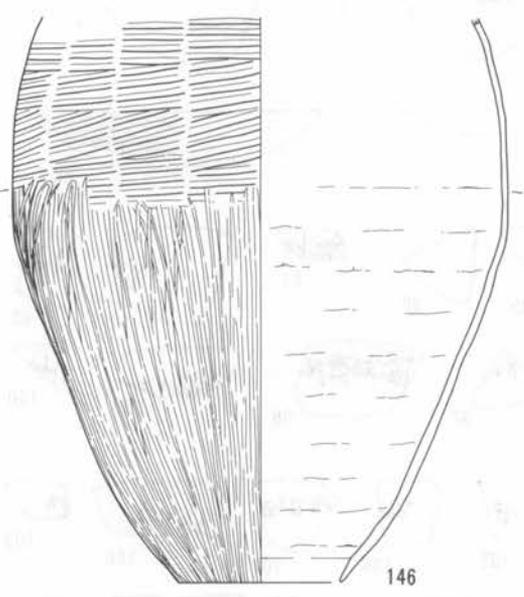
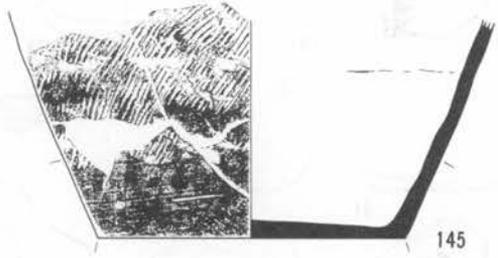
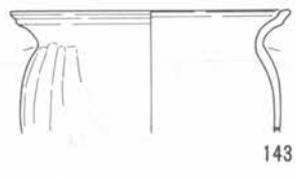
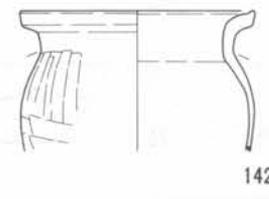
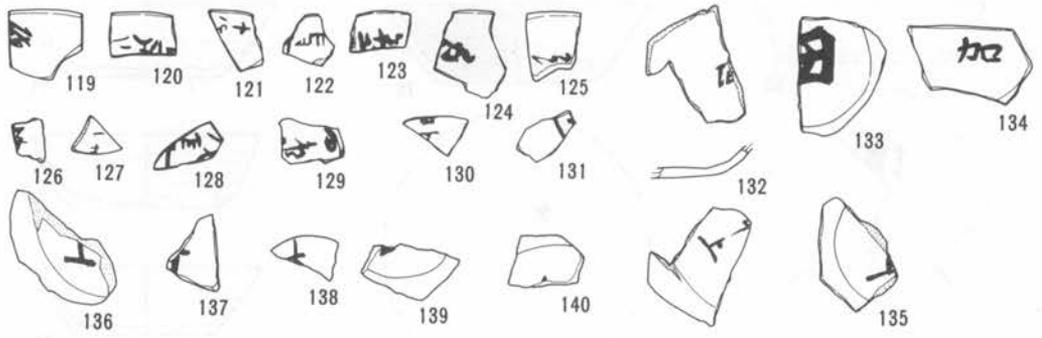
第39图 019(45~48)·020(49~52)·021(53)·022(54~58)号住居跡出土土器



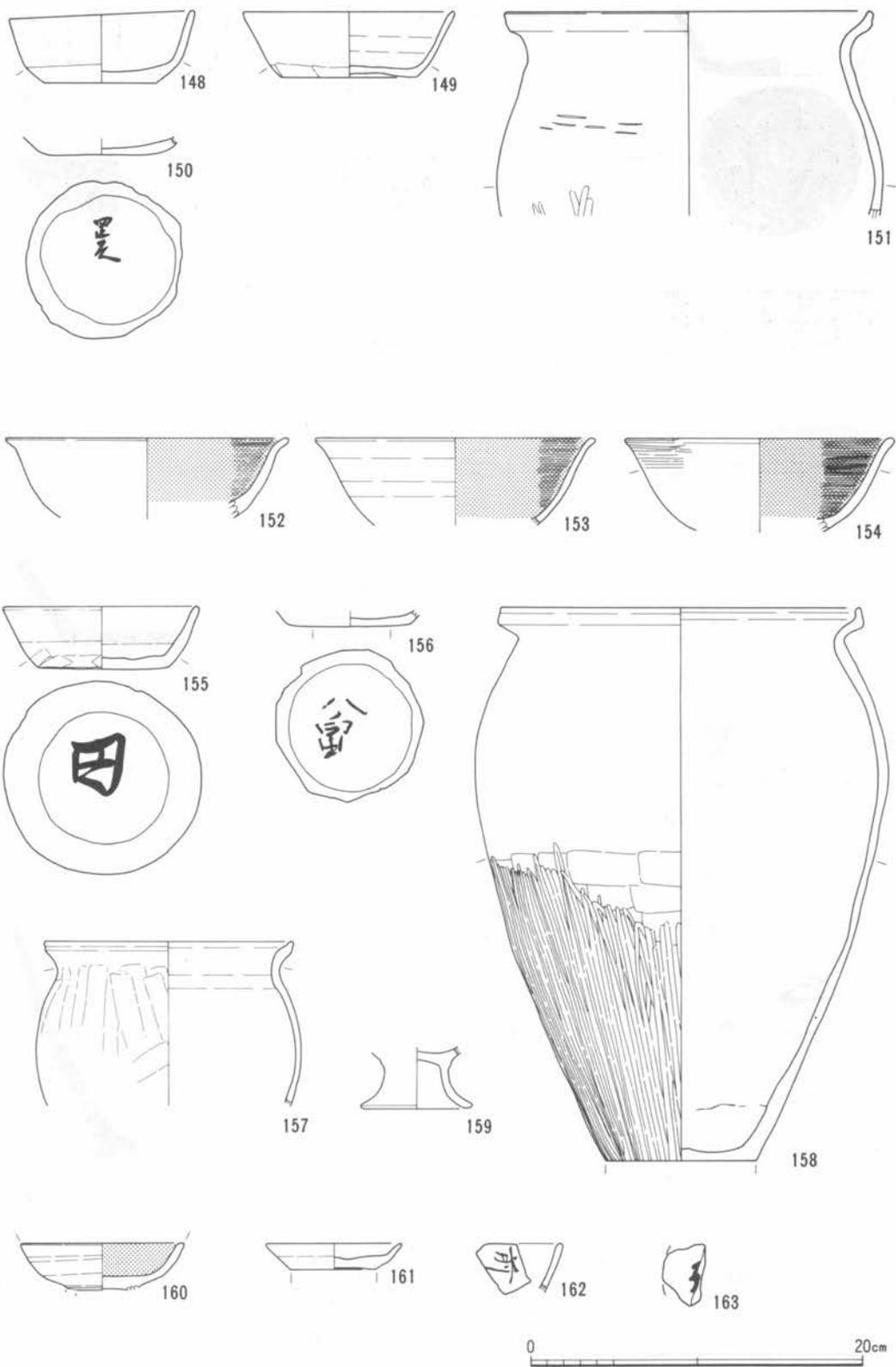
第40图 023号住居跡出土土器(1)



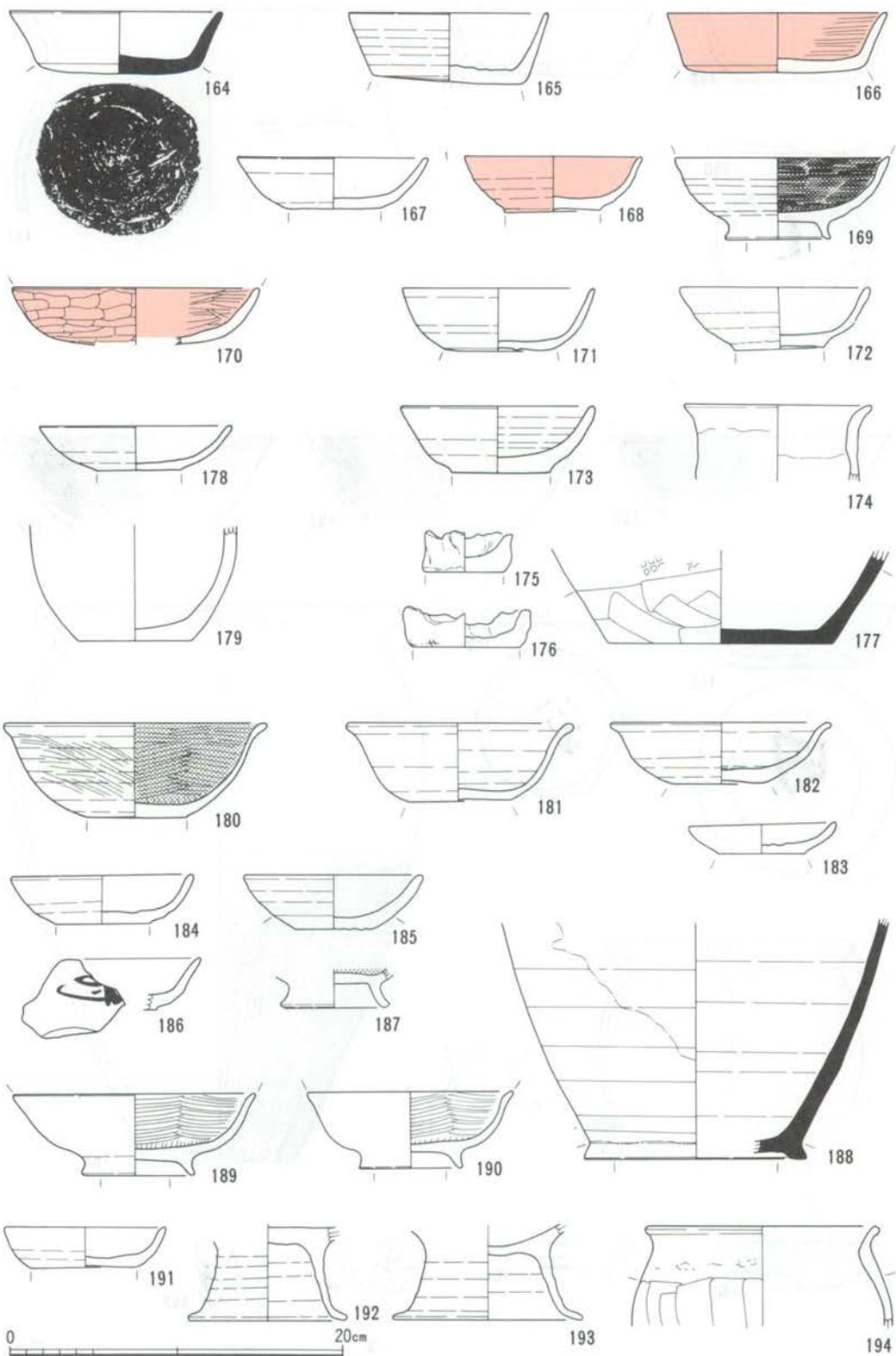
第41图 023号住居跡出土土器(2)



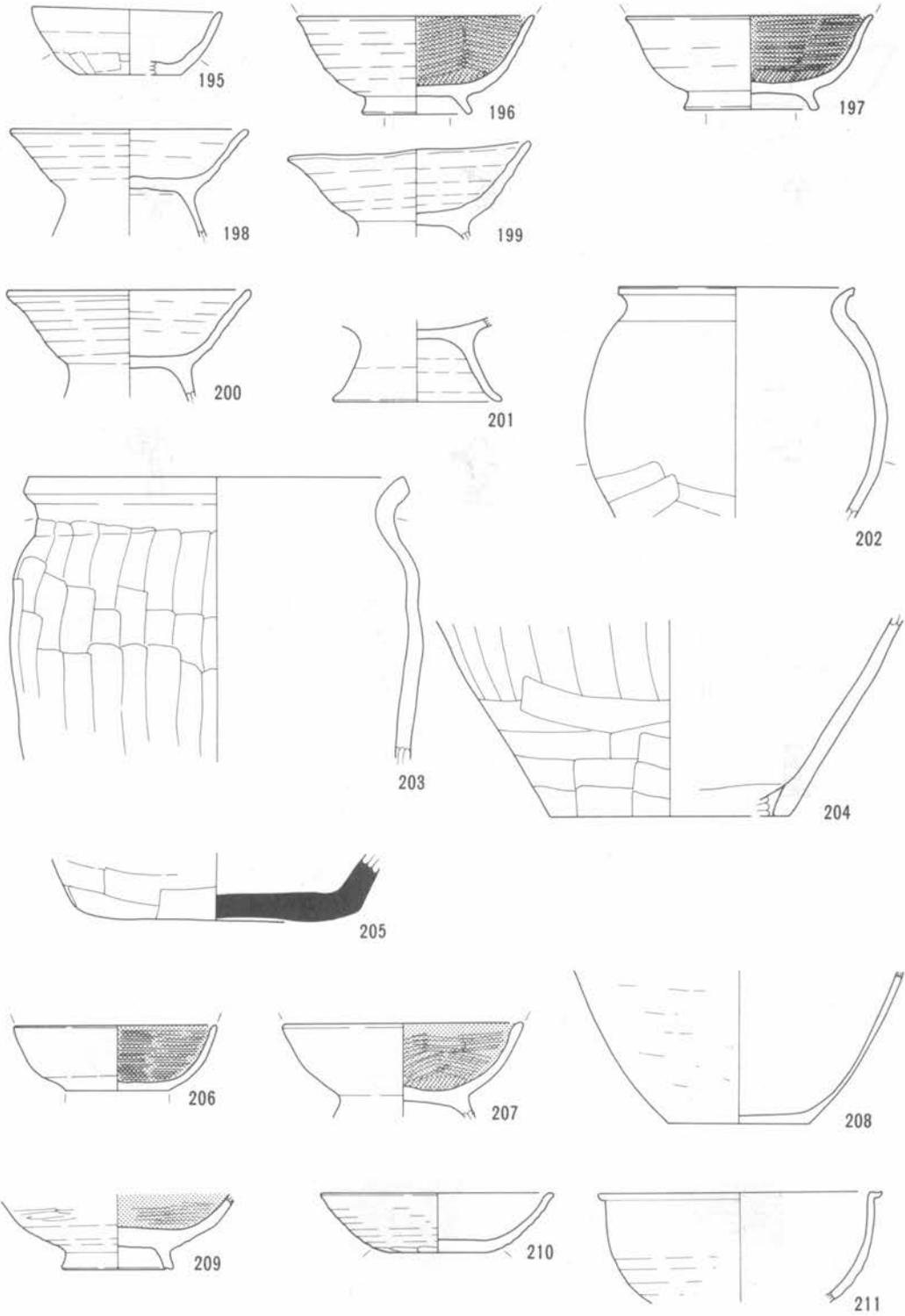
第42图 023号住居跡出土土器(3)



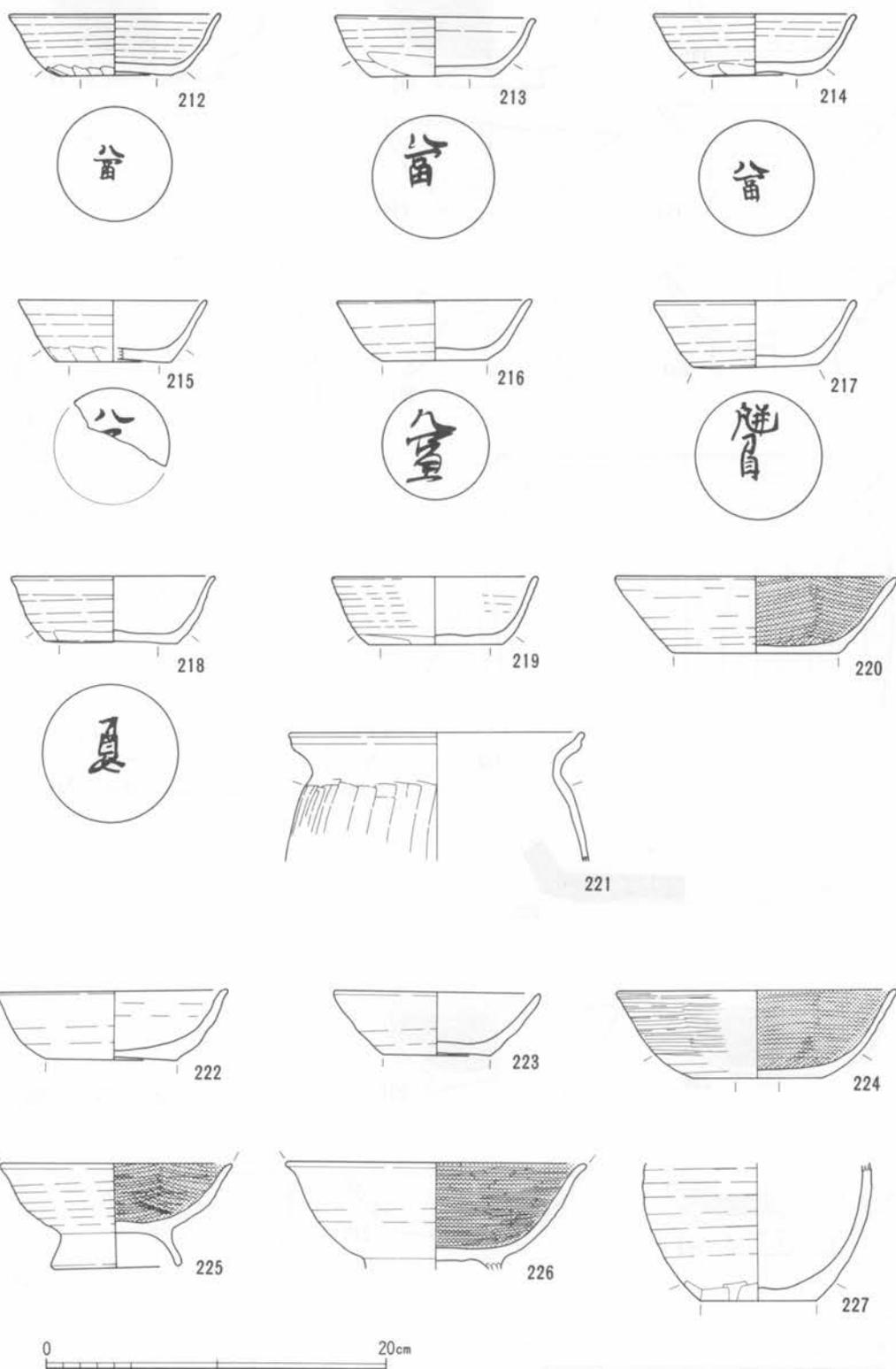
第43図 024(148~151)・025A(152~154)・025C(155~158)・026(159)・027(160~163)号住居跡出土土器



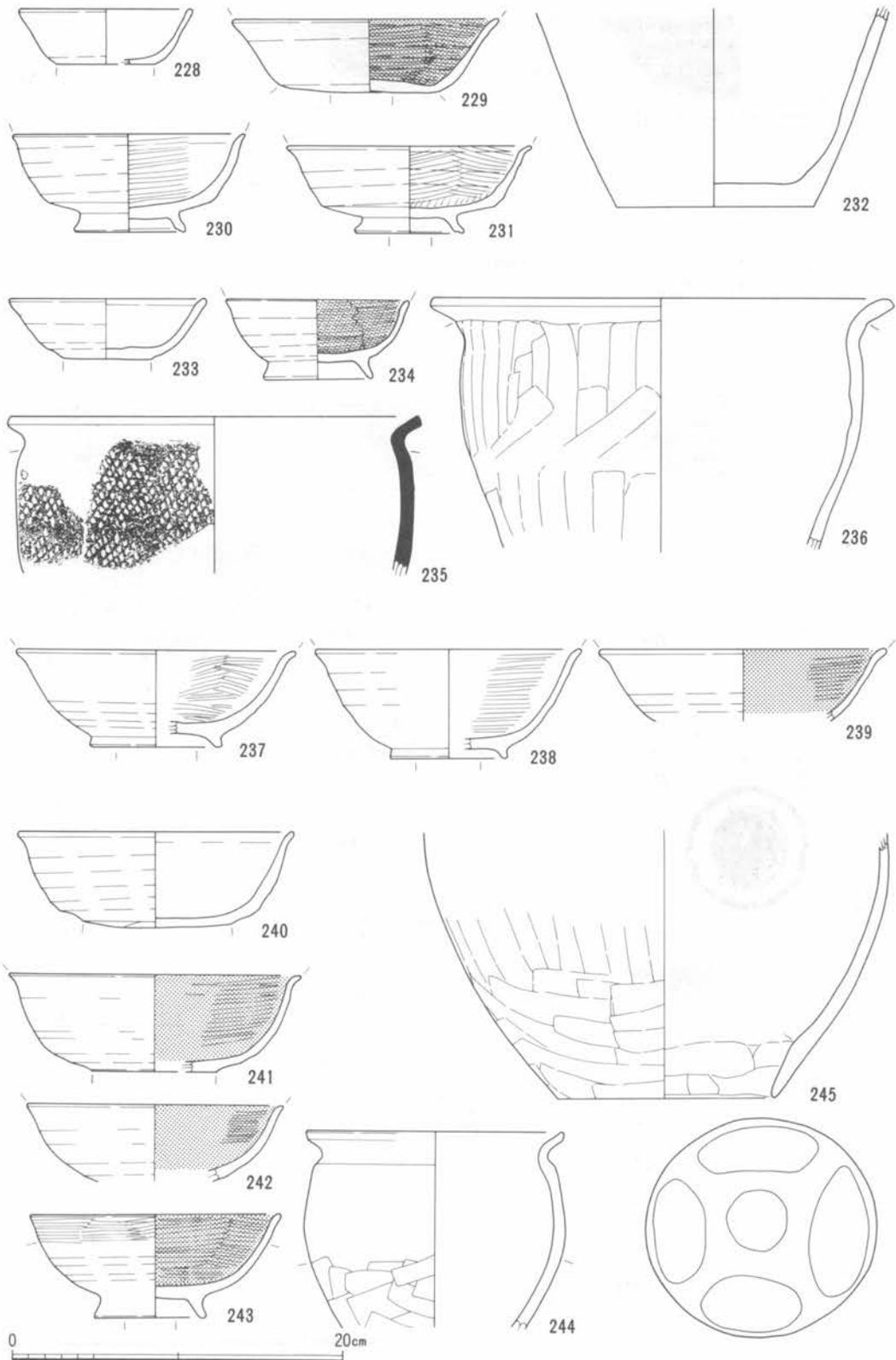
第44图 028(164~166)·030(167~169)·032(170)·033A(171·174)·033B(172·173·175~177)·
 034(178~179)·036(180~183)·038(184~188)·039(189~194)号住居跡出土土器



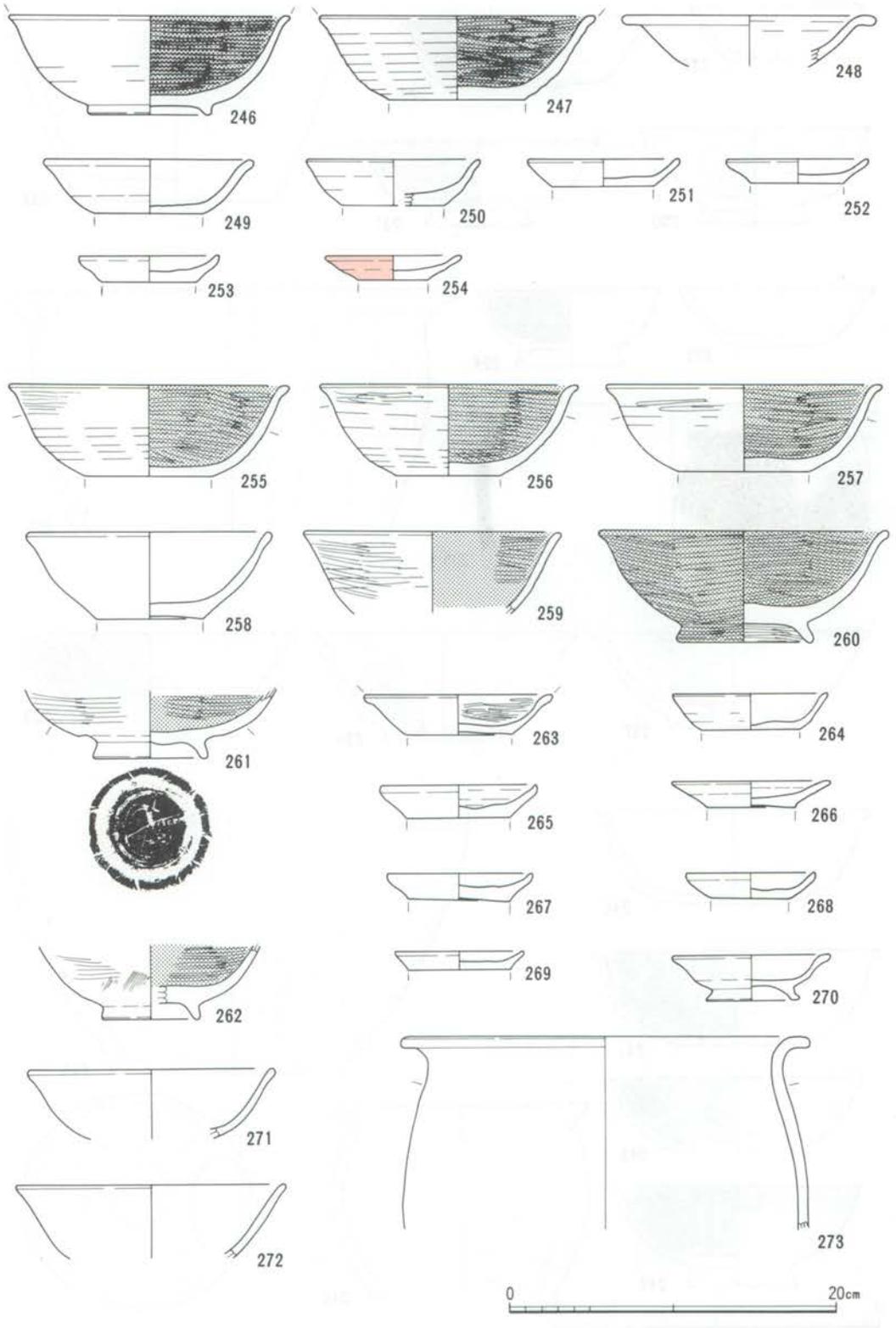
第45图 040(195~199)·041(200~205)·042(206·207)·045A(208)·
046A(209)·046B(210·211)号住居跡出土土器



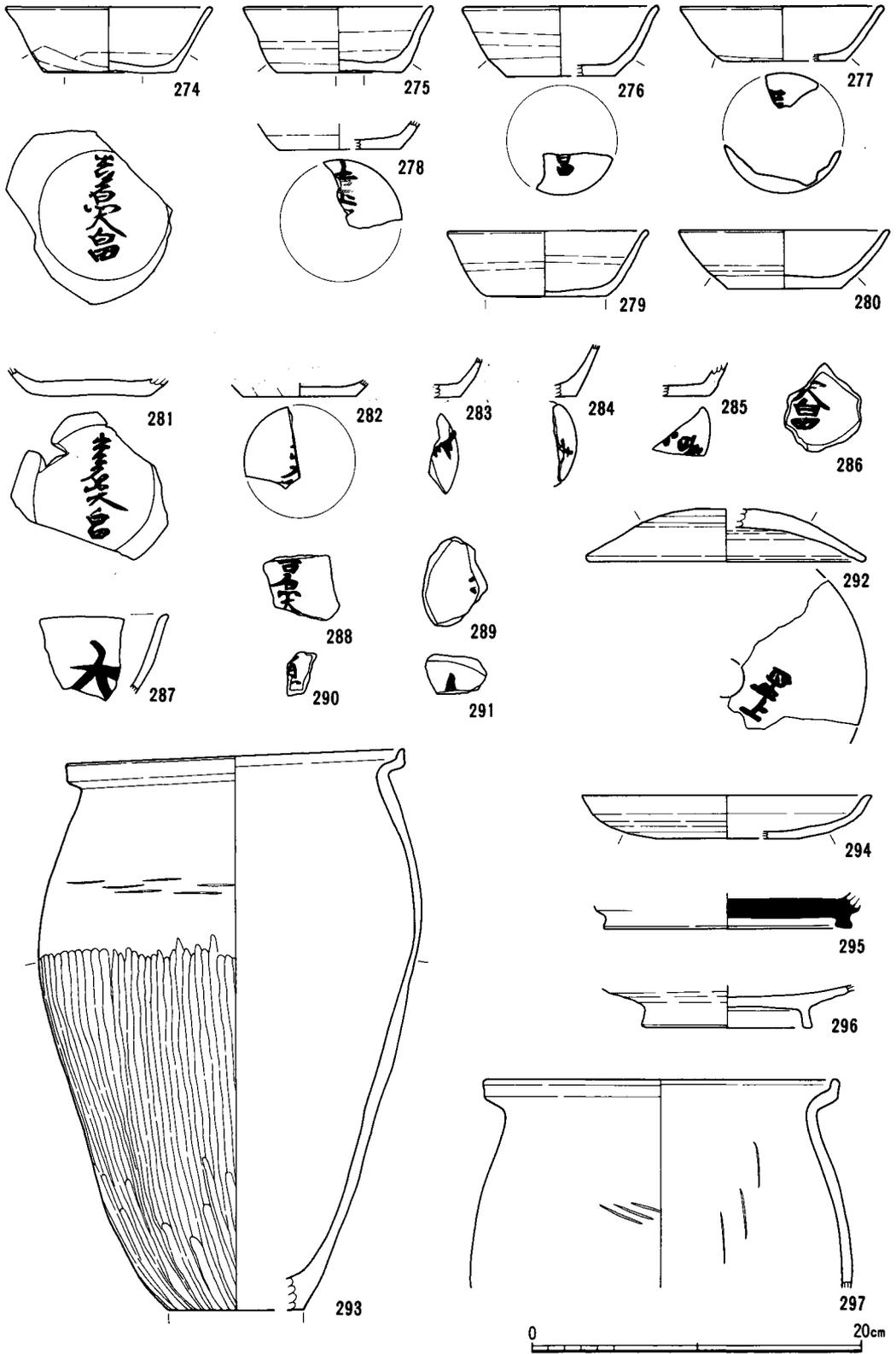
第46图 047A(212~221)·047B(222~227)号住居跡出土土器



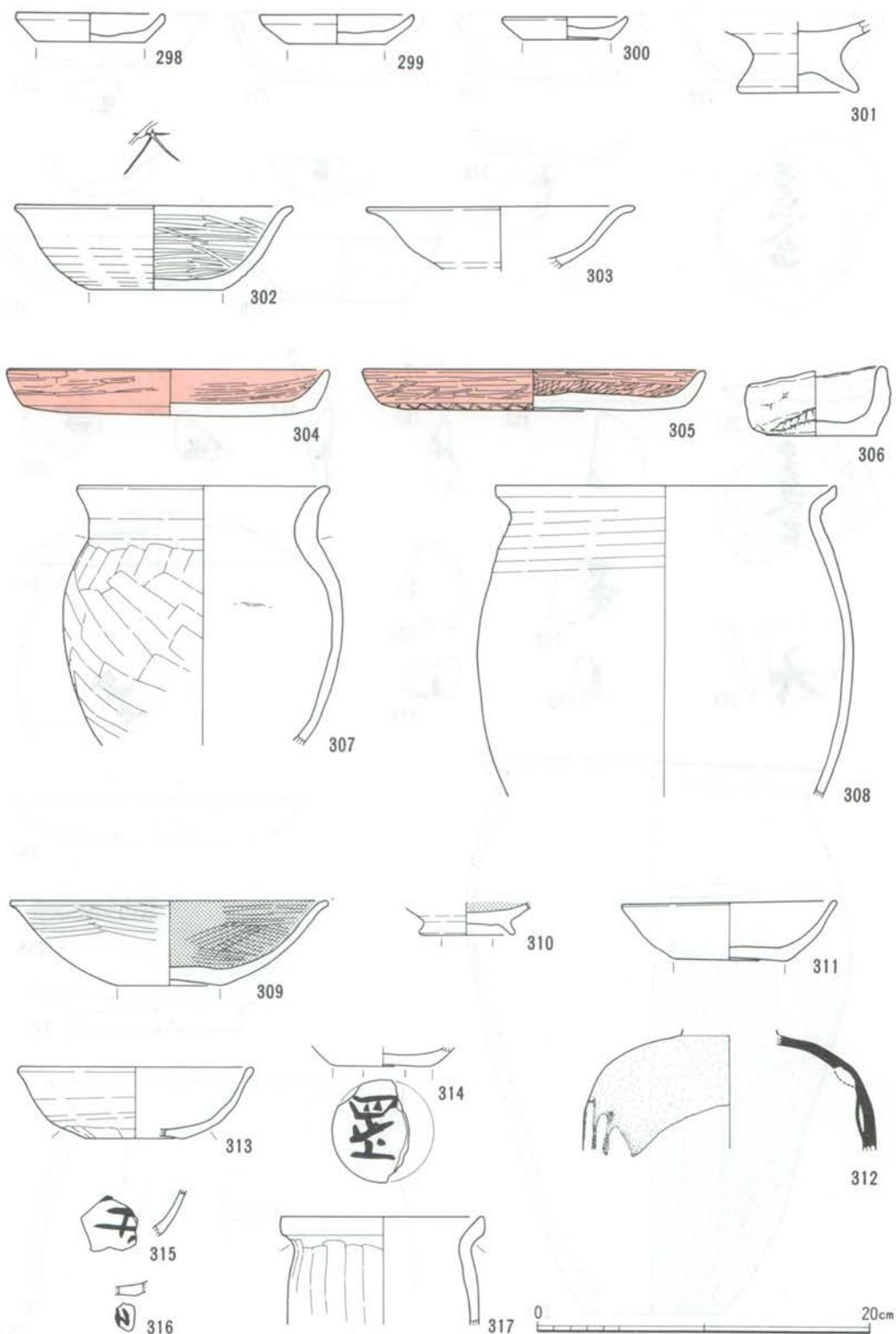
第47图 048(228~232)・049(233~236)・050(237~239)・051(240~245)号住居跡出土土器



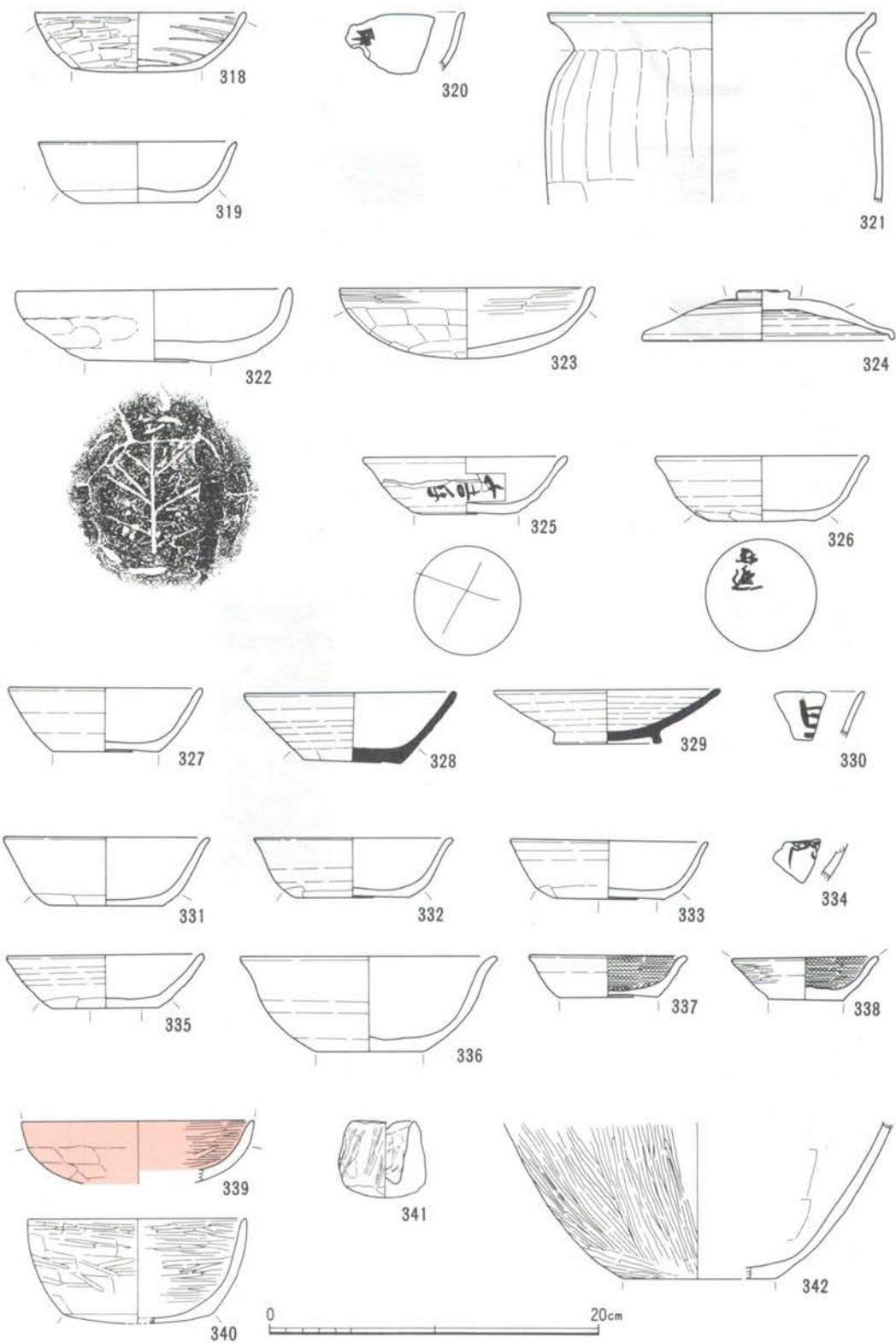
第48图 052(246~254)·055(255~273)号住居跡出土土器



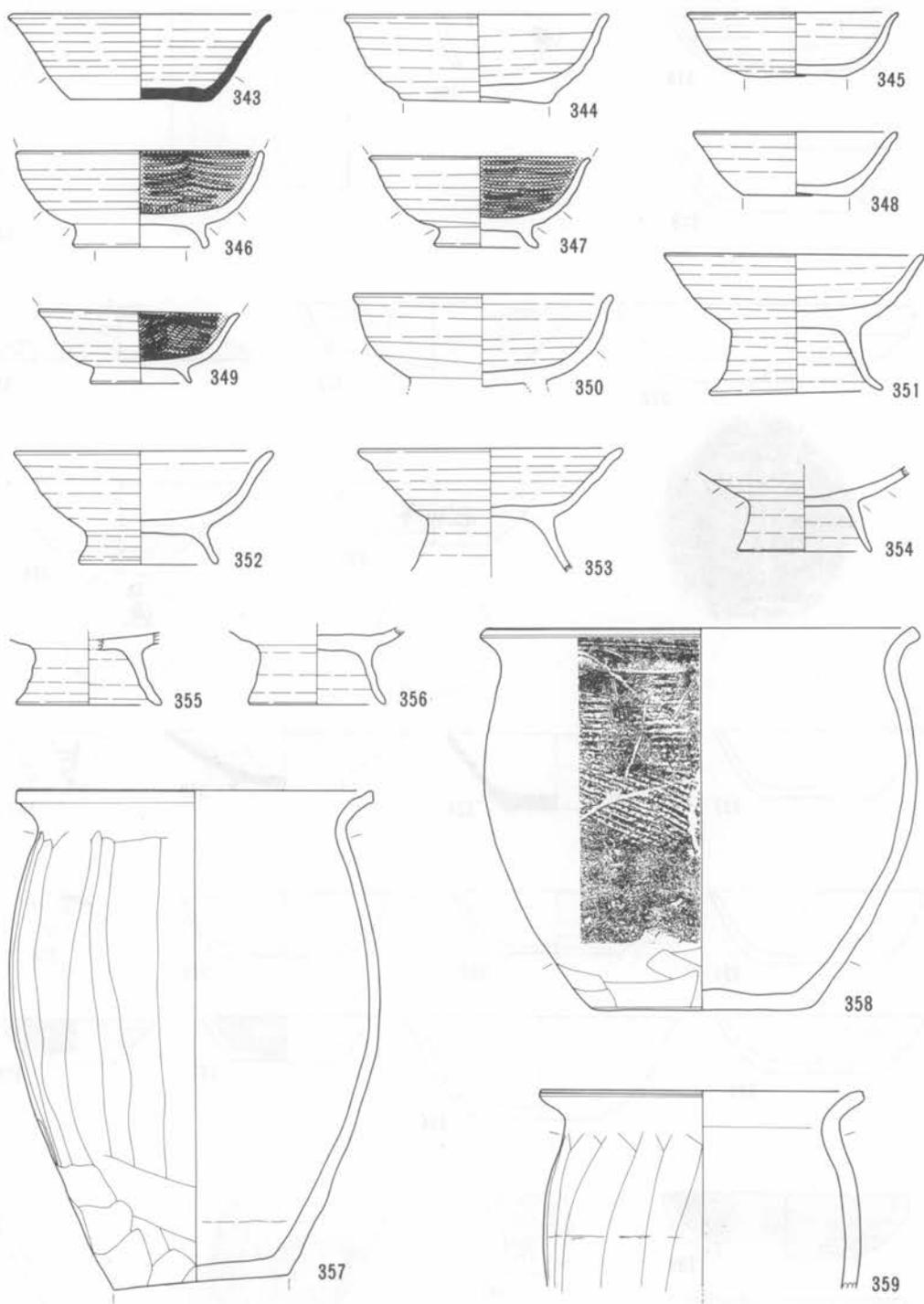
第49图 056号住居跡出土土器



第50图 058(298~301)·060(302·303)·063(304~307)·065(308)·066(309·310)·
068(311·312)·069(313~317)号住居跡出土土器

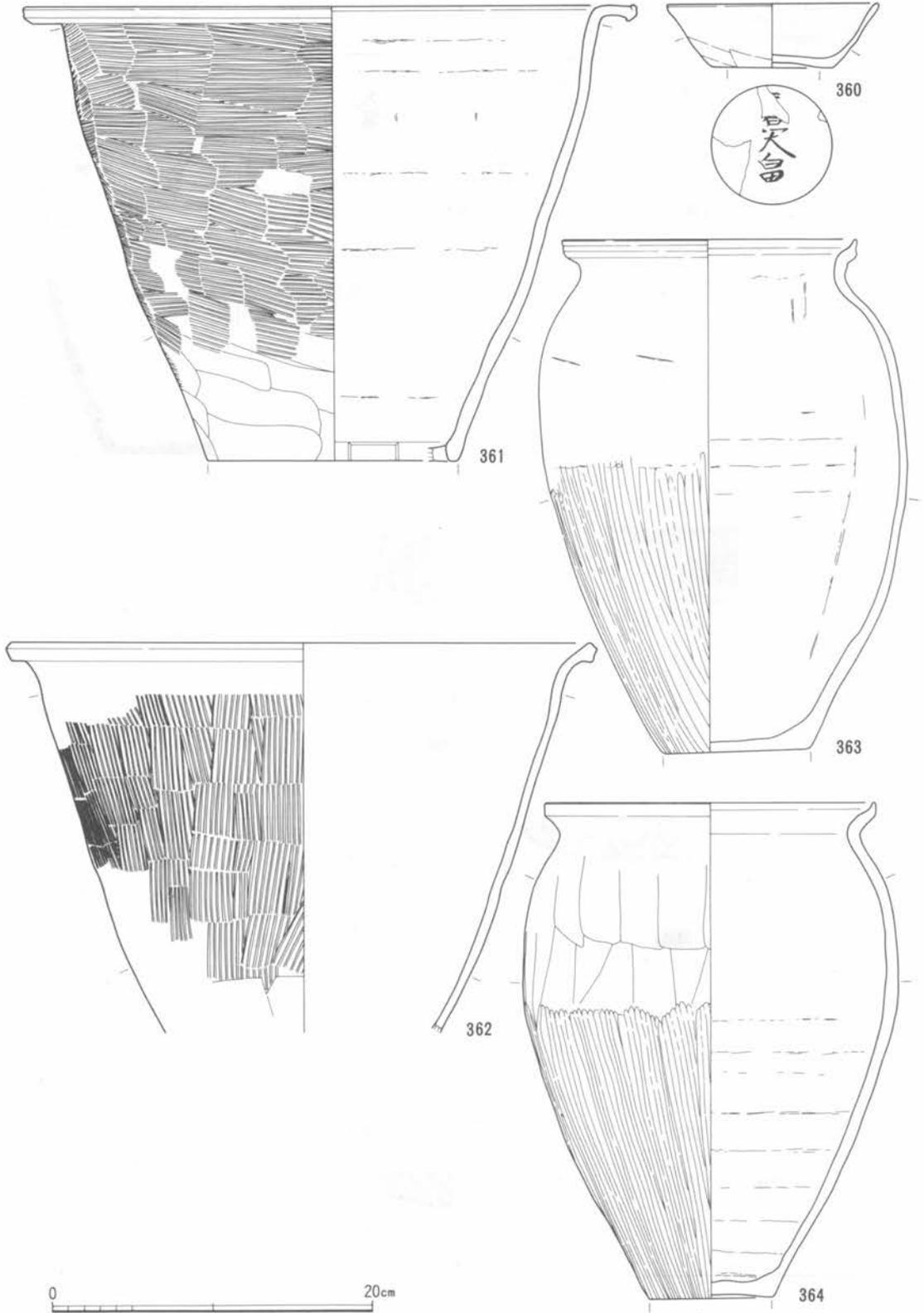


第51图 070(318~321)·071(322~324)·073(325~330)·074(331~338)·075(339~342)号住居跡出土土器

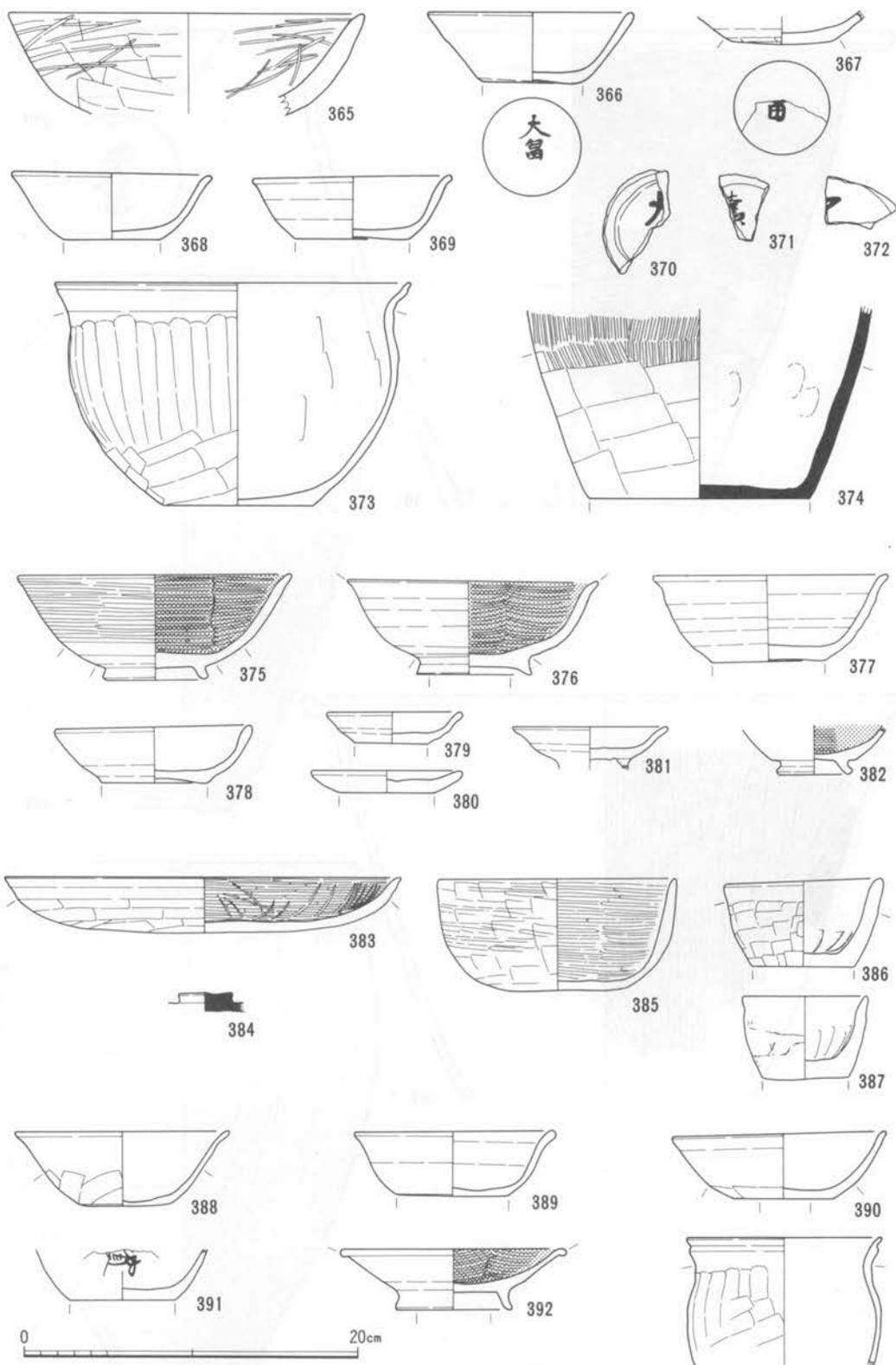


0 20cm

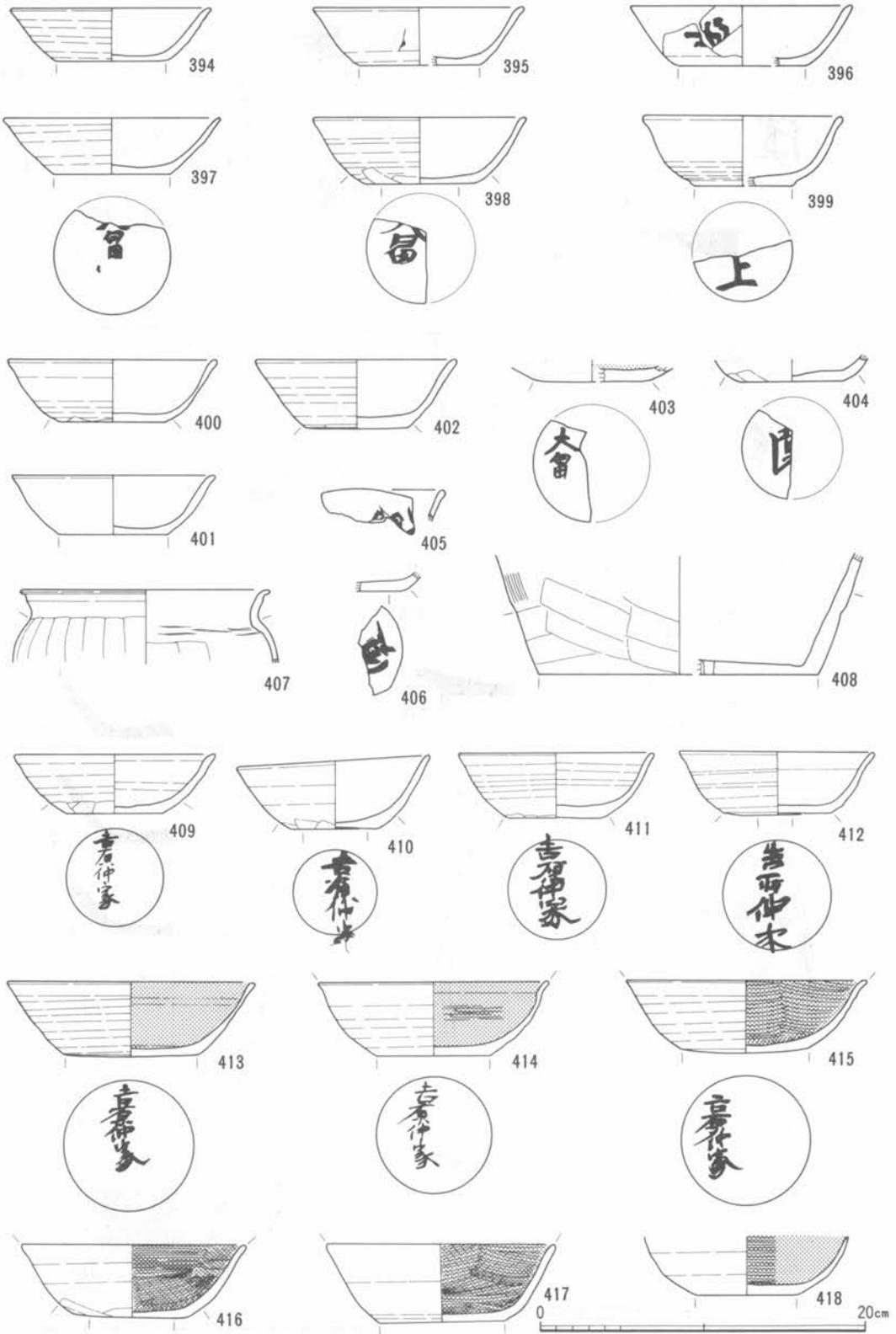
第52图 103号住居跡出土土器



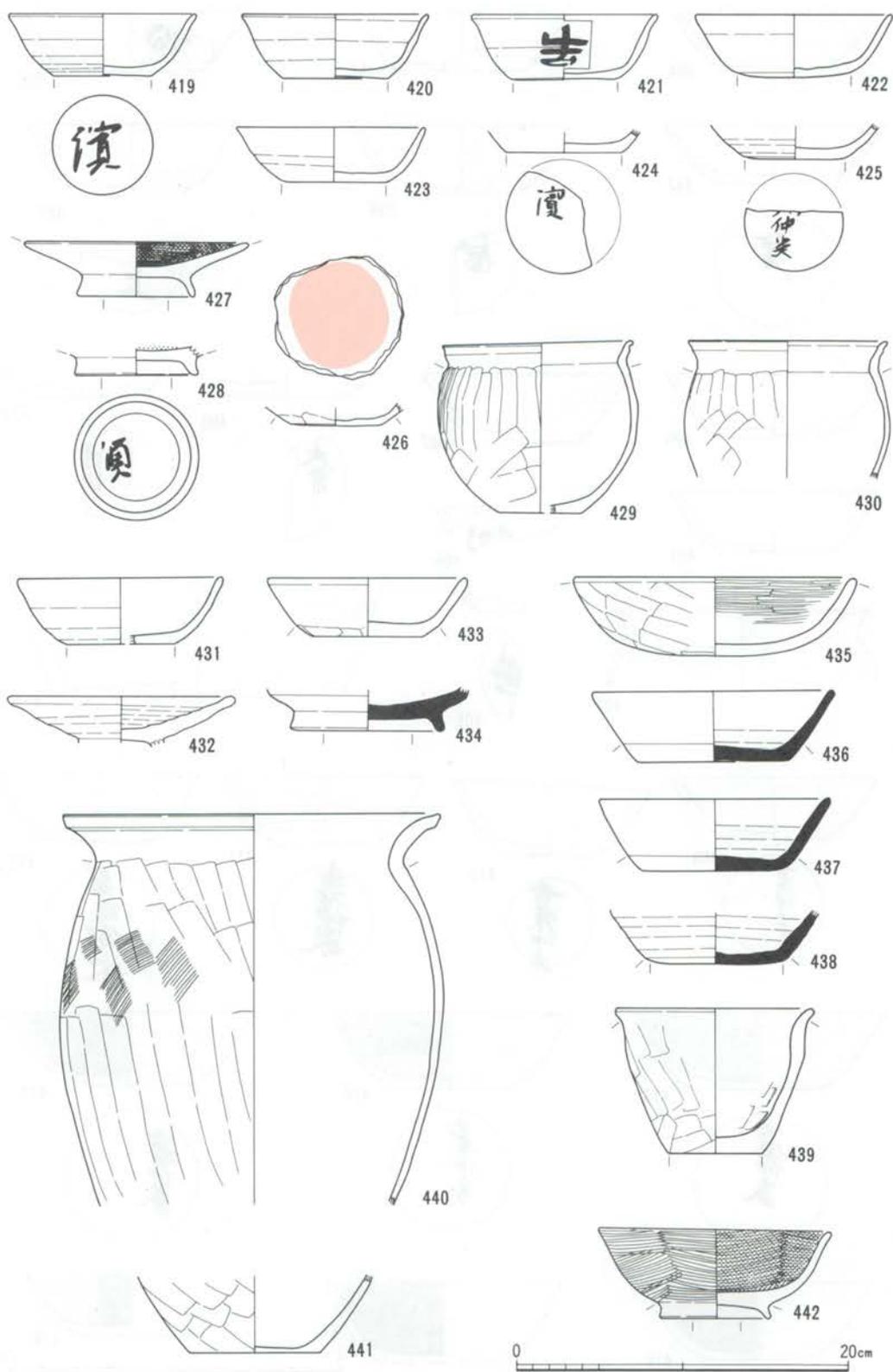
第53图 107号住居跡出土土器



第54图 109(365)·110(366~374)·111(375~381)·112(382)·
 113(383~387)·114(388~393)号住居跡出土土器



第55图 115(394~408)・119(409~418)号住居跡出土土器



第56图 119(419~430)·121(431·432)·122(433·434)·124(435~441)·127(442)号住居跡出土土器

谷部の遺構（第57図）

遺跡北側の小支谷から、比較的狭い範囲に竪穴住居跡4軒と土壇9基を検出した。この遺構群は、厚く堆積する粘性の強い黒色土中に掘り込まれ、覆土もほぼ同様に壁の確認はきわめて困難であった。

201号住居跡（第57図、図版31）

谷部調査区内北端、Iア・Jアにまたがって位置する。平面形はほぼ正方形を呈し、規模は南北長3.9m、東西長4.0mを測る。カマドを通る主軸はN-90°-Eを指す。確認された壁高は2~5cm程度である。床面は黒色土中に形成され、砂質粘土および炭化材・焼土が貼り床状に薄く堆積している。床面積は13.9m²を測る。周溝・柱穴は確認されなかった。カマドは東壁中央に位置するが、袖等はまったく遺存していない。掘り方は、85×60cmの楕円形を呈し、壁への掘り込みは少ない。燃焼部内には焼土の堆積がほとんどない。

遺物の出土は比較的多いが、カマド内および周辺に集中する。443・446の内面黒色処理の椀は南壁外から正位で検出された。444はカマド北側、445は南側の出土である。447・448の甕は燃焼部内に浮いた状態で廃棄されている。煙道部の立ち上がり部には支脚が立ったまま残っている。

202号住居跡（第57図、図版31）

201号住居跡の南8m程に位置する。平面形は長方形を呈するが、明瞭な掘り込みが確認されないため、床面の範囲から推定したものである。それによると、規模は南北長3.8m、東西長2.7mを測る。カマドを通る主軸はN-92°-Eを指す。床面はあまり明瞭ではないが、炭化材および焼土が厚さ10cm程で水平に堆積していた。周溝・柱穴は検出されなかった。カマドは東壁ほぼ中央に位置する。砂質粘土を部材とした袖が若干残るのみである。掘り方は1.0×0.5mの楕円形を呈し、壁への掘り込みは少ない。焚き口付近に集中して厚さ3cm程の焼土が堆積する。

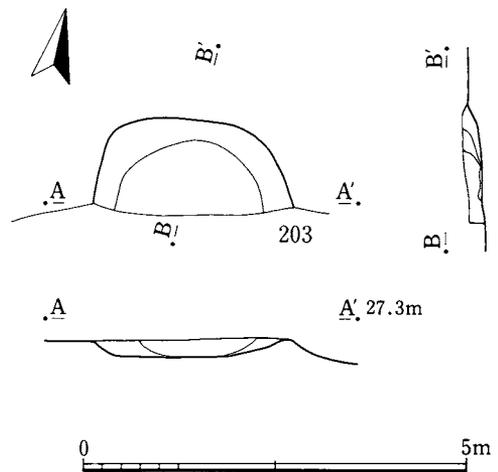
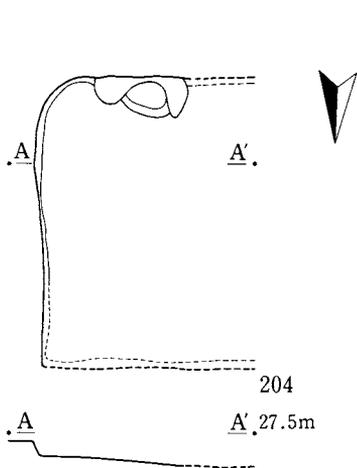
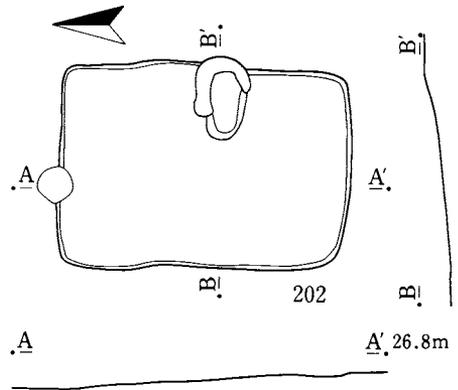
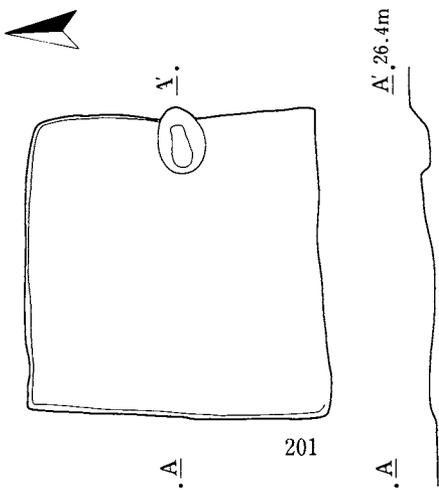
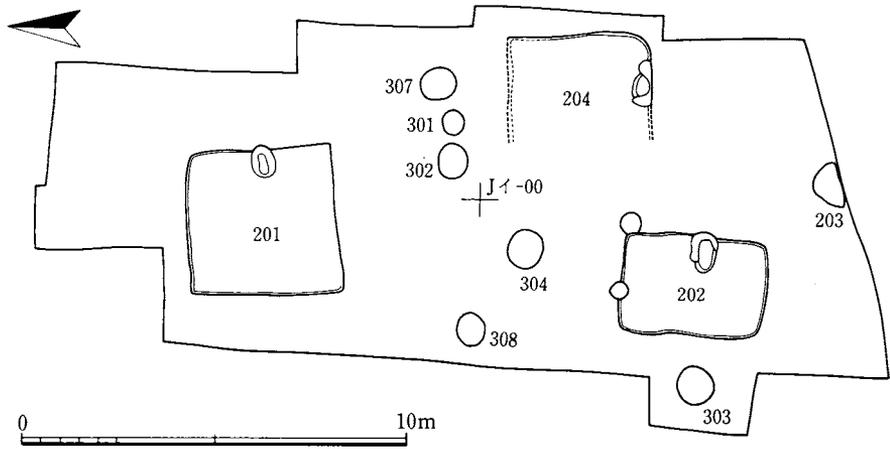
遺物はカマド周辺に多く検出された。449は燃焼部内、450は右袖外側からの出土である。

203号住居跡（第57図）

202号住居跡の南東2m程に位置するが、カマドのみを検出したにすぎない。遺物の出土は少なく、掘り方の端によって支脚が1点出土している。

204号住居跡（第57図）

202号住居跡の北東3m程に位置する。南東側の立ち上がりを僅かに検出した程度で、全体の形状は不明である。確認面からの掘り込みは、南東側で20cm程である。カマドを通る主軸はN



第57図 谷部住居跡

—180°—Eと想定される。周溝および柱穴は確認されなかった。カマドは南壁に位置する。袖はやや幅広に残り、砂質粘土で構築される。焼土の遺存はほとんどなかった。

遺物は、東壁際に若干検出されたが、ほとんど破片状態であった。

出土土器

201号住居跡（第58図443～448、図版65）

443は内面黒色処理を施した無高台の椀である。完形で、口径16.9cm、器高5.9cmを測る。内外面ともミガキが加えられていると思われるが、器面の荒れが著しく明瞭ではない。底部は回転糸切り未調整である。胎土は粗く、長石・雲母・赤色粒子を多く含む。色調は外面黄褐色を呈するが、被熱により部分的に赤変している。444は推定口径15.4cm、器高4.2cmを測る杯で、体部が大きく開く。体部内外面とも丁寧な横ナデが施されるが、外面中央および底部内面には爪先の当たりのような細かい回転痕が残る。体部外面下端には手持ちヘラケズリ調整が加えられる。底部は回転糸切り未調整である。胎土は緻密であるが、長石・石英の小砂粒を多く含む。内外面とも二次的に被熱している。445はほぼ完形の小形の杯で、口径13.4cm、器高3.5cmを測る。体部下半で屈曲し、口縁部が外反する形態を呈する。体部内外面とも丁寧な左回転の横ナデで、底部は回転糸切りにより厚く切り残される。胎土はかなり砂質を帯び、雲母小粒子の混入が目立つ。446は丁寧に整形された完形の無高台付椀である。口径16.4cm、器高6.7cmを測る。443と同様の形態であるが、体部の脹らみが大きくなる。内外面とも丁寧な左回転の横ナデ後ミガキが加えられるが、やはり器面の磨耗が激しいため明瞭ではない。内面は炭素吸着により黒色処理が施される。底部は回転糸切り未調整である。高台は断面三角形で外側に踏張る。胎土はやや砂質を帯びるものかなり緻密で、砂粒の混入も少ない。色調は黄褐色を呈する。447は底部を欠く小形の甕である。胴部外面には横位の線状の痕跡が残っており、刷毛状の工具によるナデが加えられているようである。胎土は粗く、長石・石英粒を多く含む。全体に被熱している。448は口唇部が平坦になり、胴部がほぼ直線的になる甕である。内外面ともヘラナデ調整で、外面にはカマド部材が付着している。胎土は粗く、全体的に分厚い。

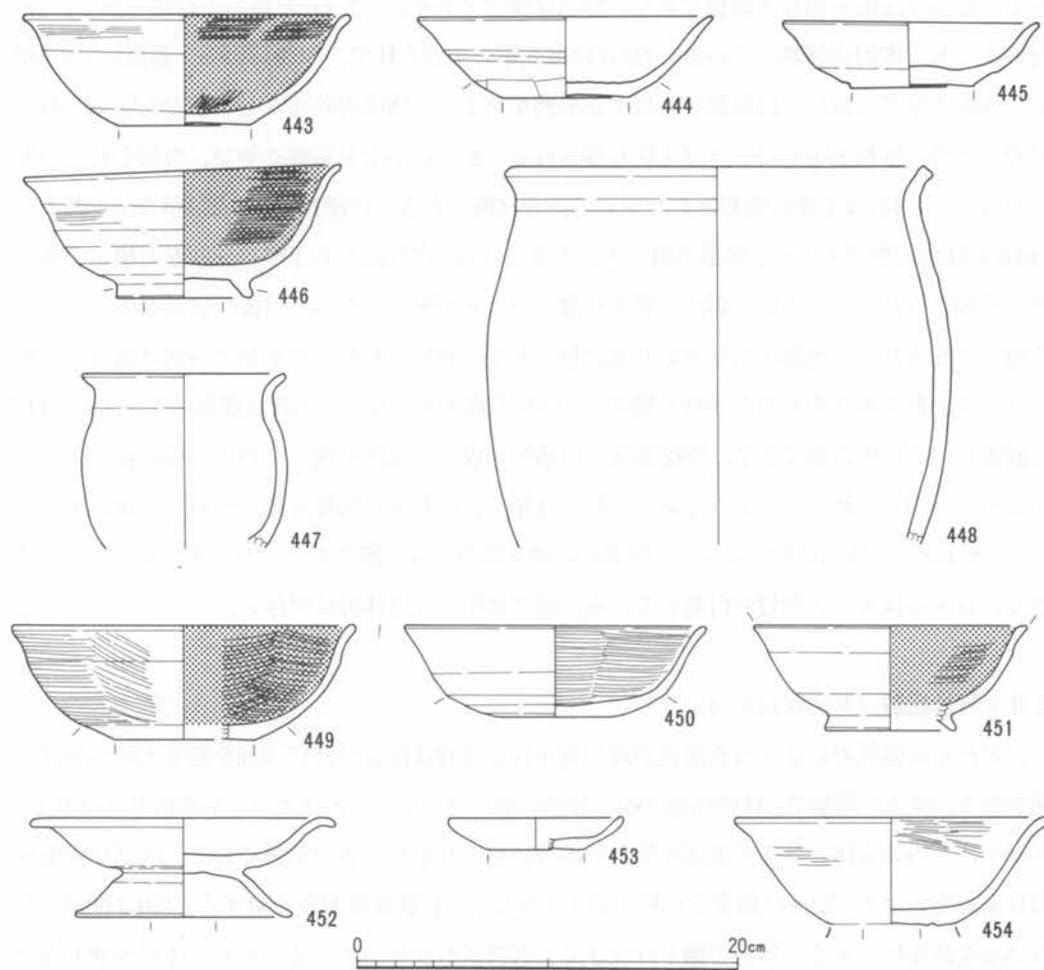
202号住居跡（第58図449～451）

いずれも炭素吸着による内面黒色処理が施される。449は推定口径17.8cmを測る大形の無高台椀である。横ナデ調整で、体部外面下端には強い横ナデが加えられるため、やや絞込まれる。ミガキは、内面全体、外面下端部を除いた部分に施されるが、やや粗雑である。底部は回転糸切り未調整となる。胎土は緻密で砂粒の混入も少ない。色調は黄褐色を呈する。450は推定口径15.8cmを測る杯である。体部の開きは大きく、底部がかなり小さく造られる。体部外面下端には回転ヘラケズリ調整が加えられ、内面には丁寧なミガキが施される。底部は中心切りに近い

回転糸切り離し未調整である。胎土はやや砂質を帯び、雲母粒の混入が目立つ。451は推定口径14.2cmを測る高台付椀である。口縁部は、横ナデが強いため明瞭な稜を有して外反する。内面は丁寧なミガキが施されるが、器面の荒れが激しいため明瞭ではない。高台は三角形を呈し、外側に強く踏張る。

203号住居跡 (第58図452・453)

452はかなり扁平な足高高台付杯である。1/3程の遺存であるが、丁寧に調整される。口縁部はほぼ水平に開き、高台部の開きも大きい。底部は回転糸切り未調整である。胎土は緻密で、砂粒の混入が少なく、かなり精選されている。色調は黄白色を呈する。453は推定口径9.2cmを測る土師器の小皿である。口縁部がやや肥厚して内湾する。底部は回転糸切り未調整である。内面は被熱による荒れが激しい。胎土はやや砂質を帯び、小砂粒の混入が多い。



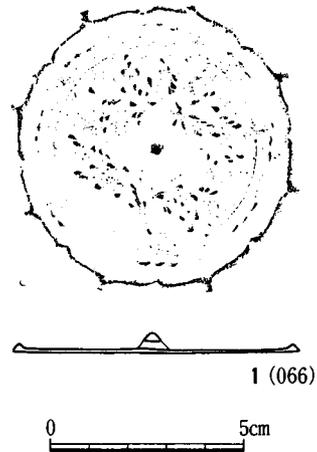
第58図 201(443~448)・202(449~451)・203(452・453)・204(454)号住居跡出土土器

204号住居跡 (第58図454)

454は推定口径16.4cmを測る高台付椀で、高台部を欠く。体部の脹らみは弱く、口縁部が大きく外反する。器面の荒れが激しいため、詳細な調整は不明であるが、部分的にミガキの痕跡が認められることより内外面ともミガキ調整が加えられているようである。黒色処理は施されていない。底部は回転糸切り未調整で、高台貼り付け時に周縁に沈線状の凹が巡らされる。なお、高台接合面にも糸切り痕が残るが、底部の糸切りとは糸の種類が異なる。二次的に被熱し、赤変している。

和鏡 (第59図、図版95)

066号住居跡のカマド右側床面上より鏡面を上にした状態で検出された。やや緑青が噴き出し、部分的にひび割れが認められるものの遺存は比較的良好である。蒲鉾式膨側縁の八稜鏡で、鏡面が背面側に若干反っている。鏡背面の文様はかなり磨耗しておりあまり明瞭ではないが、内側で直径5.24cmを測る二重の界圏(細圏)により内区と外区に分けられている。外側の界圏は肉眼ではほとんど確認できないほどであるが、圏線間の幅は0.2cmを測る。鈕は円錐形で、背面より0.38cmの高さを測る。内区の文様は、鈕を中心にして秋草が対称的に上下に配される。外区は、外側の界圏に接するように8単位の文様が巡っている。単位間の間隔は一定ではない。この文様も内区同様秋草を意識したものと思われる。法量としては、直径7.86cm、縁高0.21cm、鏡胎厚0.07cmを測る。現重量は28.3gである。全体の形状及び文様構成から平安時代中期の所産と考えられる。



第59図 066号住居跡出土和鏡

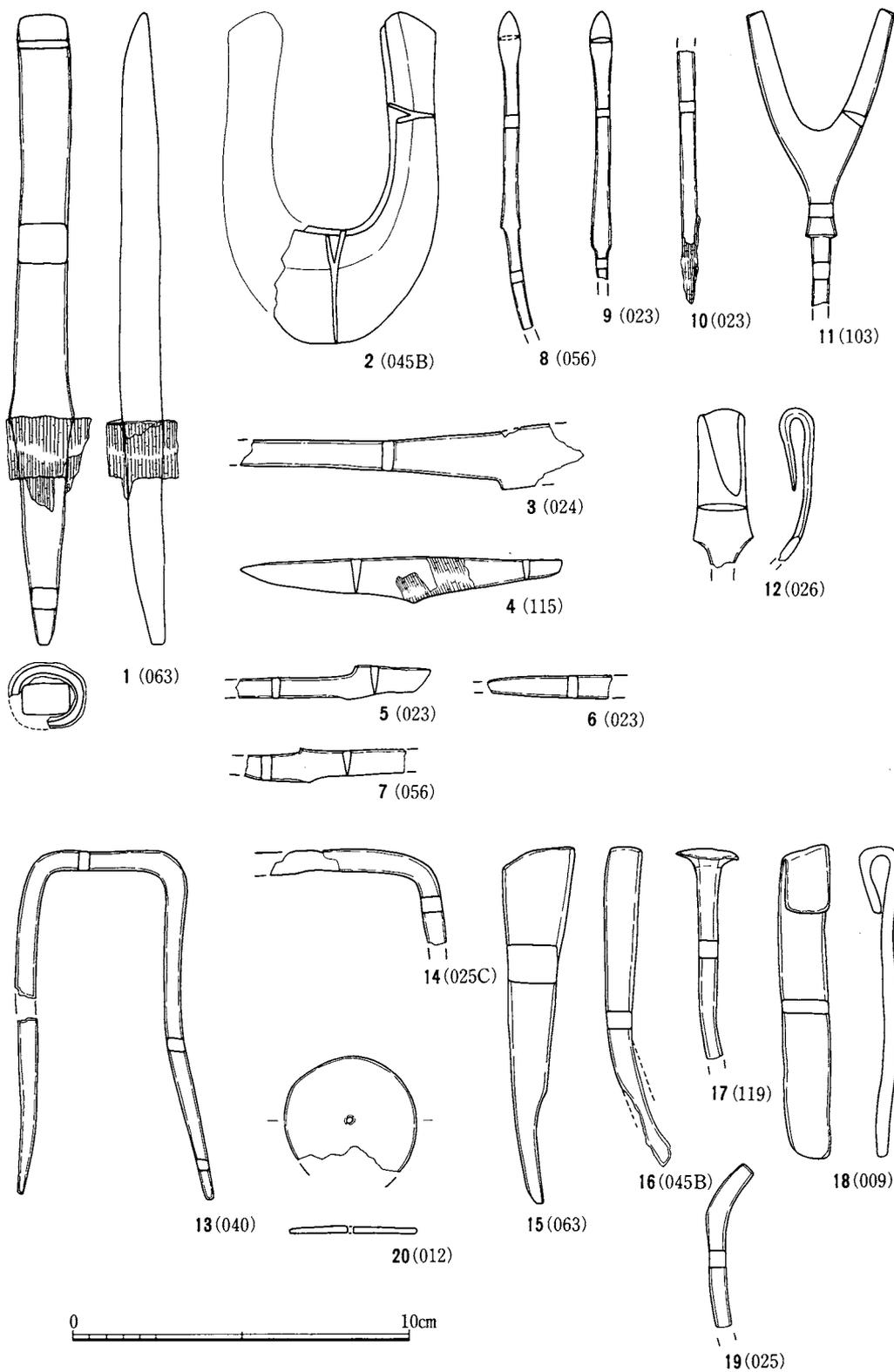
鉄製品 (第60図、図版89)

1は063号住居跡出土の鑿である。カマドに対する壁際の床面上20cmから検出された。全長18.8cm、身長12.0cm、茎長6.8cmを測る。身部は幅1.4cm、厚さ1.2cmの断面方形を呈し、刃部側で急激に厚さを減じる。関は鈍角の三角形状を呈する。茎は断面長方形で、尻に移行するに従い徐々に幅・厚さを減じる。関部には長径2.2cm、短径1.8cm、長さ1.6cmの楕円形を呈する縁金具が遺存している。内外面に木質の付着が観察される。2は045B号住居跡出土の鋤先である。全長9.9cmを測る小形品である。刃部はかなり薄く仕上げられている。3～7は刀子である。3は身部の大半を欠損するが、他に比して大形となろう。片関で、茎が長くなっている。4は唯一の完

形品で、115号住居跡より出土した。全長9.7cm、身部長5.2cm、茎長4.5cmを測る。切先から茎にかけて棟側がやや内湾し、刃部側に三角形の関を有する。身部は細身であり、何度か研ぎだされたものと思われる。関部から茎にかけて木質が遺存している。5は茎尻を欠損する。身部は長さ2.4cmと短く、かなり小形になっている。何度か研ぎだした結果このような形態になったと思われる。棟側に直角の関が形成される。6は茎片で5同様023号住居跡出土であるが接合はしなかった。同一個体ではなかろう。7は茎から身部にかけての断片である。5同様何度か研ぎだされて身部が小さくなっている。棟側には直角、刃部側には三角形の関が認められる。8・9は無関鑿箭式の鉄鏃である。8は056号住居跡の南東柱穴付近床面上で検出された。身部は両丸造りになると思われる。篋被ぎは断面長方形を呈し、茎に移行するに従い徐々に幅・厚さを増す。篋被ぎと茎の境は直角となる。9は023号住居跡出土である。篋被ぎがやや扁平になるが、形態は8と同様である。10は、関の部分が明瞭ではないが、鉄鏃の篋被ぎから茎にかけての断片であろう。茎部に木質の遺存がみられる。11は茎尻を欠損する雁股の鉄鏃である。103号住居跡の西壁下の床面上より検出された。身部先端は平坦で、短い篋被ぎがスカート状に開く。12は026号住居跡の覆土中から検出された鉄鏃と思われる。両丸造りの柳葉式となり、篋被ぎ以下を欠損する。先端部が故意に折り曲げられているが、身部の復元長は6.4cmを測る。13は039号住居跡北東端のピット中から検出された。脚がかなり長いことから、鏃ではなく門の金具と思われる。ほぼ完形で、全長10.2cm、幅4.9cmを測る。断面長方形で、先端部に移行するに従い正方形に近くなる。脚端部は尖る。14も13同様門金具になると思われる。13よりは大形になるろう。15は063号住居跡の床面中央部に遺存していた。完形品で、全長10.6cmを測る。頭部は分厚く、先端部がくびれて扁平になる。楔状の用途が考えられるが明瞭ではない。16～18は釘と思われる。17は119号住居跡の南東コーナー近くの床面上から出土している。全体の腐食が激しいが、頭部は1辺1.9cmの角頭状を呈する。19は用途不明の板状製品である。12同様端部が意図的に折り曲げられている。完形品で、復元長10.9cm、幅1.4cmを測る。20は012(新)号住居跡の覆土中から出土している。一部欠損するが、径4.0cm、厚さ0.1cmを測る。中央部に径0.2cmの孔が穿たれている。軸棒は認められないが、紡錘車となるろう。

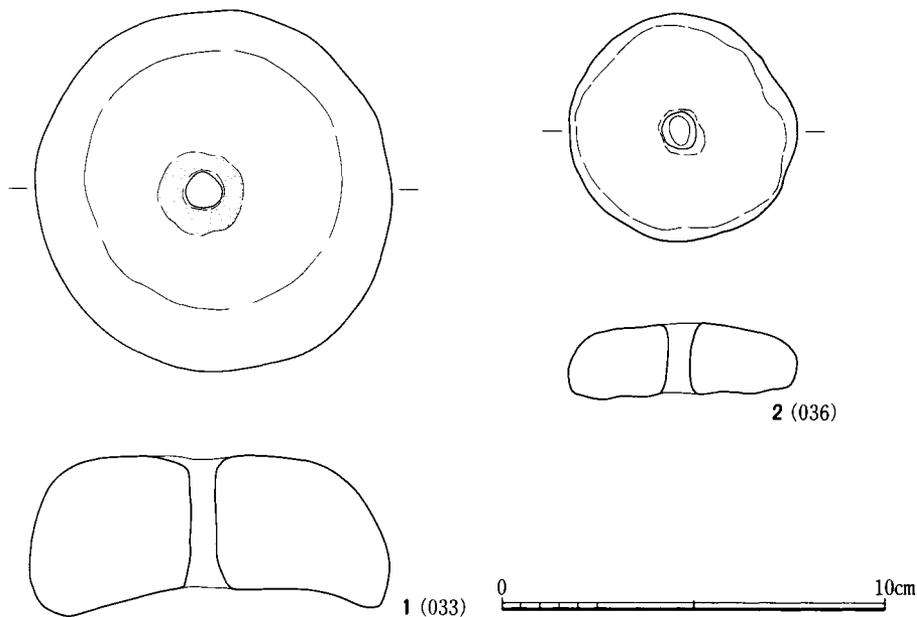
紡錘車 (第61図、図版91)

いずれも土製である。1は033号住居跡南壁際の床面から若干浮いた状態で検出された。最大径9.6cm、厚さ4.3cm、重量408gを測る大形品である。若干凹凸が認められるが、全体的に丁寧なナデ調整が加えられている。中央部には底面で径1.2cmを測る孔が穿たれている。図の上面の孔周囲には円形の剝離が観察される。使用時の剝離と思われる。また、孔の周囲には円形に擦れて凹んでいる部分が僅かながら認められる。おそらく、図の下を上にした状態で使用されたことが想定され、この痕跡は紡錘車を軸棒に止めておくものの当たりと考えられる。図底面の



第60図 住居跡出土鉄製品

周囲は若干磨耗している。胎土はやや粗く、長石・石英・雲母粒を多く含む。焼成は良好である。2は036号住居跡の覆土中から出土した。径5.8cm、厚さ1.9cmを測る。手捏ね整形で全体に歪みが認められるが、上面から側面にかけて丁寧なナデ調整が加えられる。底面は粗雑な仕上げで、成形後ヘラ状工具による粗いケズリが部分的に加えられる。底面には穿孔時の粘土のみだしがみられる。胎土は比較的緻密で、砂粒の混入も少ない。



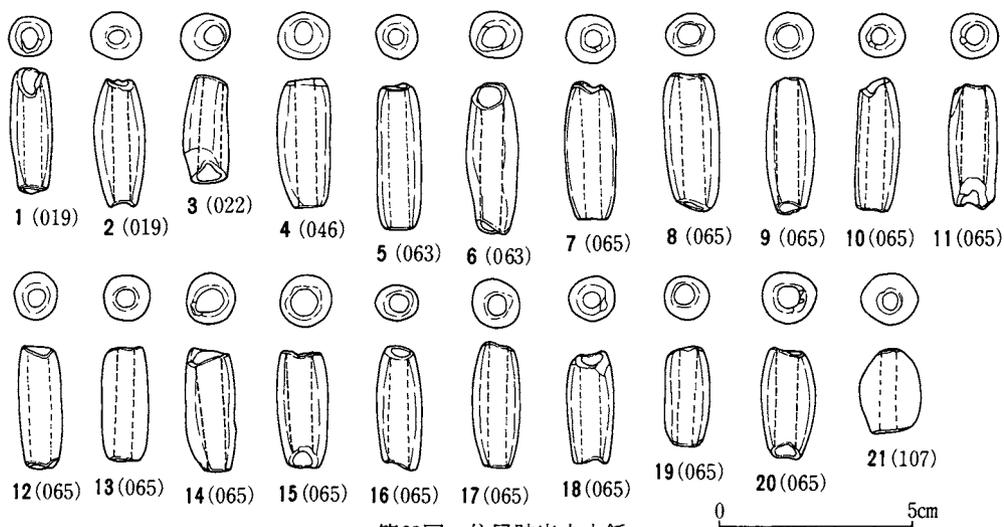
第61図 住居跡出土土製品

土錘 (第62図、図版92)

平安時代の住居跡から出土した土錘は21点を数えるが、数軒の住居跡に集中して検出された。1・2は019号住居跡のカマド前面、3は022号住居跡、4は046号住居跡の覆土中、5は063号住居跡の南壁中央直下の出土である。6～20は065号住居跡の床面中央からやや北西寄りに纏って検出された。21は107号住居跡のカマド前面からの出土である。形態的に、中央部が脹らんで縦長の算盤玉状を呈するもの(2・20)、側縁が楕円状を呈するもの(3・4・7・15)、円錐状を呈するもの(6・9・10・15～18)、管状を呈するもの(1・5・8・11～14・19)、扁平な算盤玉状を呈するもの(21)に分けられる。ただ、065号住居跡で一括出土した土錘には幾つかのタイプが含まれており、使い分けが存在した可能性は少ない。胎土は全体的に砂質を帯びて軟らかく、小砂粒を多く含む。一方、孔の部分の状況を詳細に観察すると、上下ともほぼ同一方向に破損及び磨耗が認められる。これは、土錘の使用に伴って生じた痕跡と考えられ、興味深い状況である。

住居跡出土土錘計測表

番号	長さ(cm)	径(cm)	孔径(cm)	重さ(g)	出土遺物	番号
1	3.17	1.1	0.5	3.5	019	0015
2	3.3	1.3	0.42	4.9	019	0009
3	2.78	1.2	0.6	3.8	022	0019
4	3.26	1.3	0.57	5.8	046	0019
5	3.67	1.13	0.54	5.3	063	0038
6	3.9	1.4	0.55	5.9	065	0025
7	3.55	1.32	0.51	5.8	065	0013
8	3.64	1.25	0.6	5.3	065	0032
9	3.96	1.24	0.5	5.0	065	0017
10	3.45	1.18	0.55	4.6	065	0023
11	3.2	1.3	0.63	4.4	065	0022
12	3.24	1.14	0.6	3.9	065	0021
13	3.0	1.24	0.53	4.2	065	0016
14	3.2	1.4	0.52	5.0	065	0014
15	2.94	1.33	0.65	4.6	065	0026
16	3.14	1.14	0.6	3.9	065	0021
17	3.16	1.24	0.52	4.3	065	0027
18	2.78	1.18	0.54	4.1	065	0019
19	2.55	1.24	0.62	3.3	065	0015
20	2.8	1.36	0.6	4.1	065	0020
21	2.12	1.6	0.61	4.3	107	0001



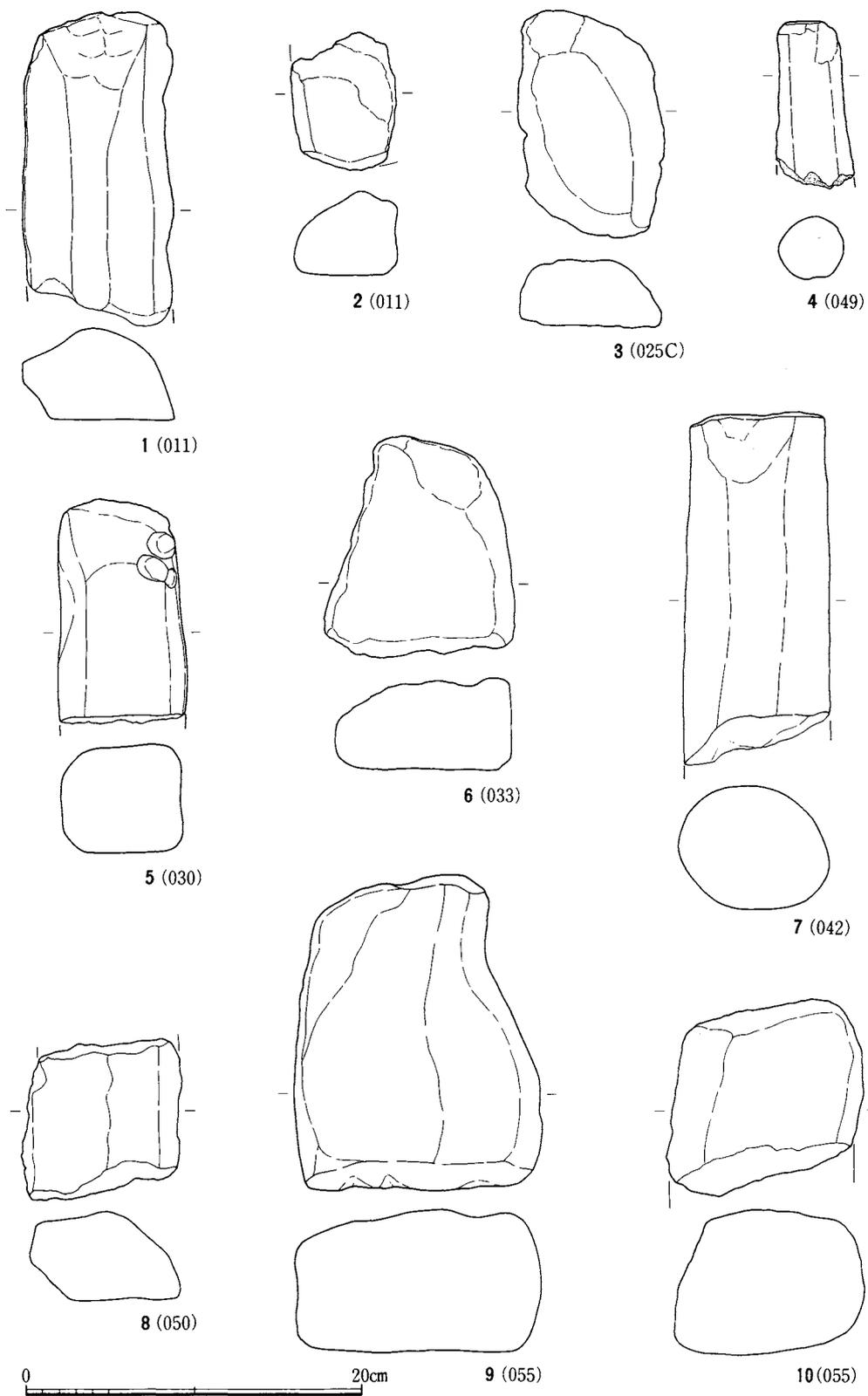
第62図 住居跡出土土錘

支脚（第63・64図、図版94）

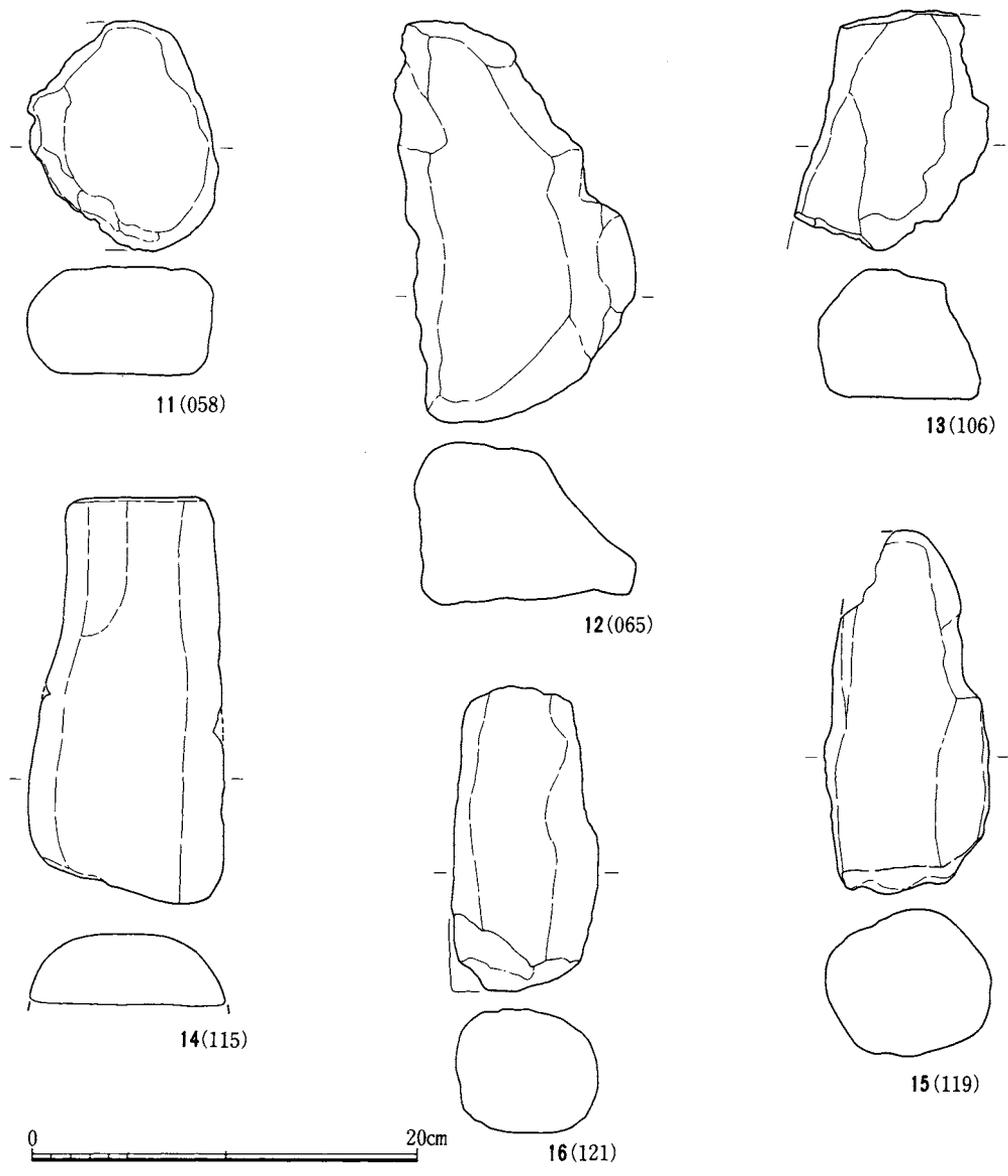
実測可能な支脚を検出した奈良・平安時代の住居跡は14軒である。破損品が多いが、形態的に円筒状に近いもの（1・4・5・7・15・16）と底面が広がる台形に近いもの（6・9・13・14）の2タイプに分けられるようである。多くの支脚が砂粒を多く含む胎土で造られているため、器表面がかなりざらつく。支脚の出土状況を住居跡別にみると、ほぼ使用時の原位置を保っていると考えられるのは、042（7）・055（9・10）・119（15）・121（16）号住居跡例である。燃焼部の奥に底面密着の状態を立てられていた。15・16はやや浮いているが、これは、燃焼部底面上にローム土を貼りつけてカマドを構築しているためであって、底面密着と変わらない状況である。ただ、121号住居跡を除いてカマド内には杯・椀を主体とした土器が多く遺存しており、カマドの使用状態を現しているものではないと思われる。なお、9・10は同一個体となろう。また、燃焼部内に立てられてはいるものの、原位置からややずれている例に、011（1）・025C（3）・030（5）・033（6）号住居跡があげられる。底面から浮いた状態のものが多い。033号住居跡例は、煙道部に立てられた支脚を須恵器と土師器の甕の破片で囲むように遺存している。049（4）・115（14）号住居跡はカマドの袖を削平してその上に支脚を置いている。また、065（12）号住居跡例はカマド検出面に横位で出土していることより、カマドを意図的に破壊した後その上面に置いたことが考えられる。その他では、050（8）号住居跡ではカマド前面、106（13）号住居跡ではカマドと反対側の南西コーナー近くの床面上にそれぞれ遺存していた。

石製品（第65・66図、図版93）

1は033号住居跡の覆土中から検出された砥石である。上半部を欠損する。側面の3面はかなり磨り込まれており、1面のみに線状の研磨痕が残る。砂岩製である。2は038号住居跡の床面上からの出土である。破損品であるが、板状を呈する大形のものであろう。図の上面及び左側面に研磨が加えられる。下面は剝離のため明瞭ではないが、若干線状の研磨痕が認められる。砂岩系の砥石であろう。3は041号住居跡の覆土中の出土である。下半部を欠損するため用途は不明であるが、滑石製の模造品の可能性もある。側面は粗い調整が加えられており、斜位の擦痕が認められる。上下面には丁寧な研磨が施される。4～6は砂岩系の砥石である。4は119号住居跡の床面上から検出された。原石を荒く打ち欠いてそのまま利用したようである。多面体となるが、何面かが磨られている。図の上面は全面が磨られ、さらに細かい線状の研磨痕が多く認められる。5も122号住居跡床面上からの出土である。下半部を欠損するが、全面が磨られている。また、頭部及び両側面には線状の研磨痕が数条残る。6は110号住居跡南東コーナー近くの床面上から検出された。ほぼ完形品である。獣足状に先端部が肥厚する形態を呈する。上面及び側面はかなり磨り込まれて、先端部には数条の研磨痕が顕著に認められる。下面は欠損した後再利用しており、やはり線状の研磨痕が数条認められる。7は051号住居跡の床面中央、

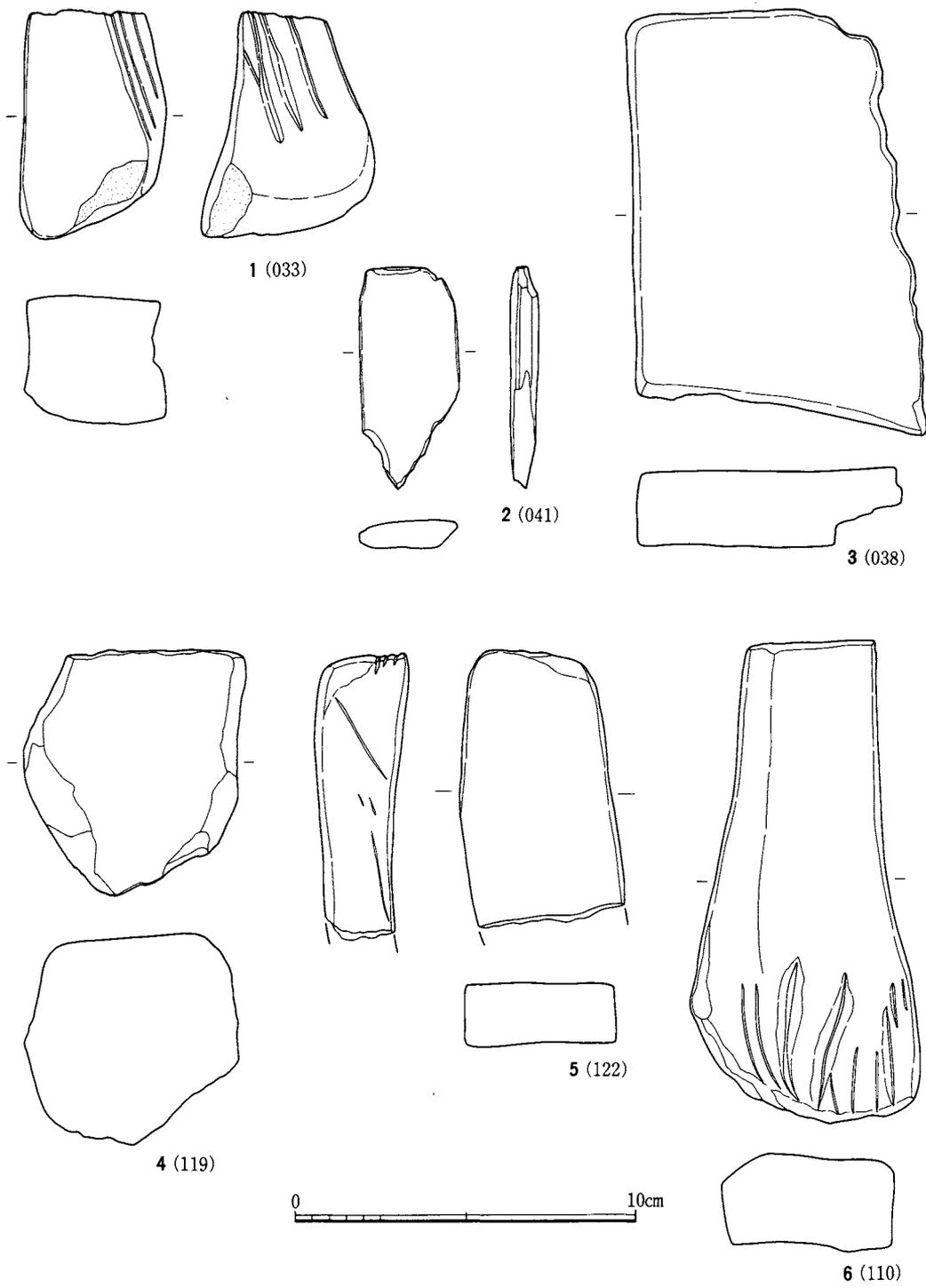


第63図 住居跡出土支脚(1)

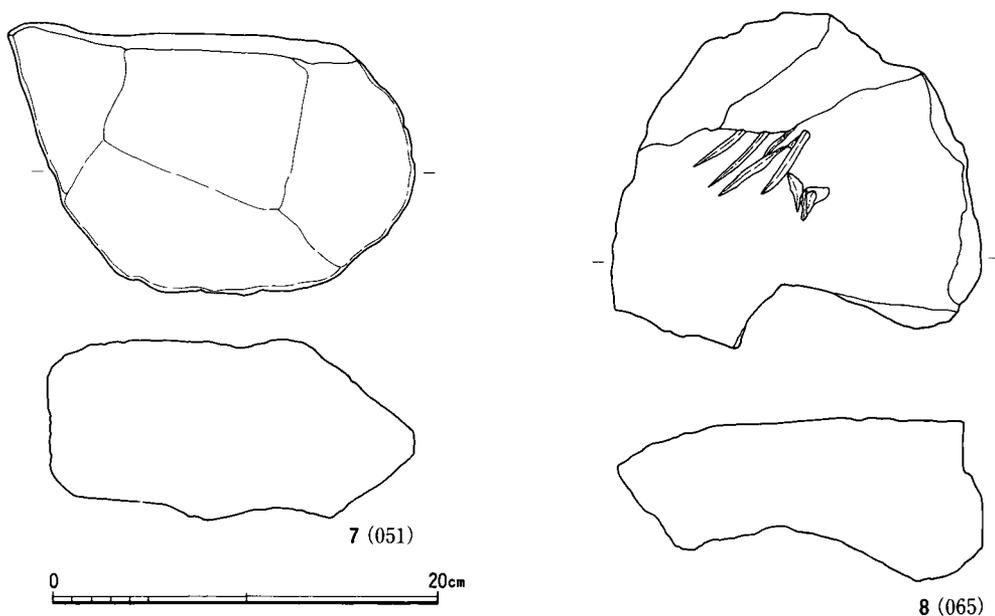


第64図 住居跡出土支脚(2)

焼土の下から検出された。全体に火を受けて煤が付着している。砂岩の原石をそのまま利用した砥石で、何面かに研磨痕が認められる。その形状及び重さから床面において使用したものと思われる。8は065号住居跡のカマド上面から出土した砥石である。部分的に数条の研磨痕が残るが、全体的に火を受けている。本住居跡のカマドが意図的に破壊されている状況を考えると、本例は砥石としての機能を終了した後にカマドの補強材として再利用し、カマド廃絶に伴って上面に置かれたものと思われる。



第65図 住居跡出土石製品(1)



第66図 住居跡出土石製品(2)

2. 掘立柱建物跡

本遺跡では掘立柱建物跡の棟数がきわめて少なく、3棟を検出したのみである。ただ、調査区が限定されており、区域外に存在する可能性が強い。また、伴出する遺物がまったく確認されなかったため明確な所属時期は不明である。

HT01 (第67図)

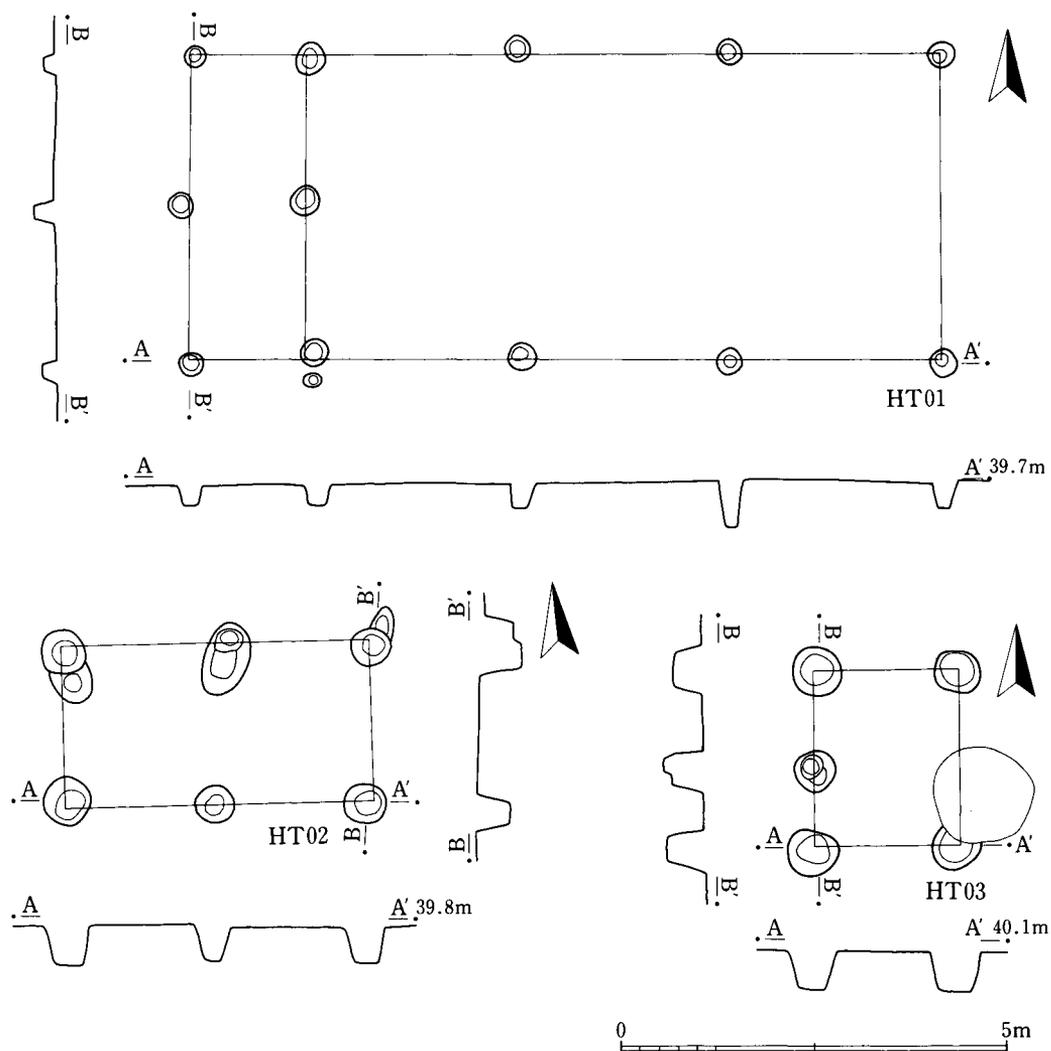
調査区南端、D9グリッド東側に所在する。東側で124号住居跡と重複するため、梁の中央部分の掘り方が検出できなかった。ただ、掘り方自体が浅いため、住居跡によって攪乱されたのか、あるいは覆土中に存在していたのかは残念ながら確認できなかった。規模は、身舎部分で3間×2間で、西側に片廂を有する。桁行は2.8m等間と広く、梁行は1.8m等間を測る。廂は梁から1.5mの位置に掘り込まれる。掘り方の規模は小さく、径30cm前後の円形を呈する。柱痕は不明である。主軸方向はN-2°-Wを指す。

HT02 (第67図、図版38)

G1区南西端、035号住居跡の北西1mに位置する。2間×1間の小規模な建物で、梁間2.1m、桁行2.0m等間を基本とするが、北側中央がやや東に寄っている。掘り方は、径50~60cmの円形を呈し、HT01よりやや大きくなる。北側の3本の柱穴には、方向は異なるが、2段に掘り込まれた掘り方が検出された。北側のみでやや疑問が残るが、おそらく柱を抜き取った痕であろう。柱痕は不明である。主軸方向はN-5°-Eを指す。

HT03 (第67図、図版38)

G2区北側に所在する。2間×1間の小規模な建物と思われるが、東側は661号土壌により切られるため、中央の柱穴が攪乱されている。梁行は1.8m、桁行は1.3m、1.1mと中央の柱穴がやや南側に寄る。掘り方は、径55~65cmの円形を呈し、深さ50cm程を測る。中央の柱穴のみ2段掘りされるが、これは、すべての柱を抜き取る際に中央の柱掘り方が小さいために広げる必要があったためであろう。柱痕は検出されなかったが、掘り方内の覆土中にロームブロックをかなり多く含んでいることより、抜き取った後に埋め戻された可能性が強い。主軸方向はN-88°-Eを指す。



第67図 掘立柱建物跡

3. 土 壙

本遺跡では多くの土壙が検出されているが、確実に平安時代に比定される土壙は多くない。ここでは、実測可能な該期の土器を出土した土壙を取り上げて説明することにするが、あくまで土器の年代であって確実に遺構の時期を表すものとは限らない。

5 1 2 号土壙 (第70図)

G 3 区南端、109号住居跡の北西 2 m程に位置する。長軸1.6m、短軸1.4mの不整な楕円形を呈する。確認面からの深さは0.3mを測る。覆土はロームブロックを含む層で形成されており、埋め戻した状況が考えられる。

覆土上層より内面黒色処理の高台付椀の破片が検出された。

5 1 6 号土壙 (第70図、図版33)

G 4 区東端、110号住居跡の東 3 m程に所在する。長軸1.6m、短軸0.8mを測るやや不整な長楕円形を呈する。長軸方向はN-40°-Eを指す。壁の立ち上がりは緩やかで、U字形に近い断面となる。確認面からの深さは25cm程である。底面は平坦ではなく、特に北東側の凸凹が激しいが、全体的にかなり堅緻な状況である。覆土はローム粒を多く含む茶褐色土の単層で、やはり埋め戻しているものと思われる。

内面黒色処理の高台付椀と高台付小皿の完形品が北東側の底面に密着した状態（正位）で出土した。出土状況と埋め戻しであることを考えると確実に本土壙に伴う土器であろう。

5 2 2 号土壙 (第70図)

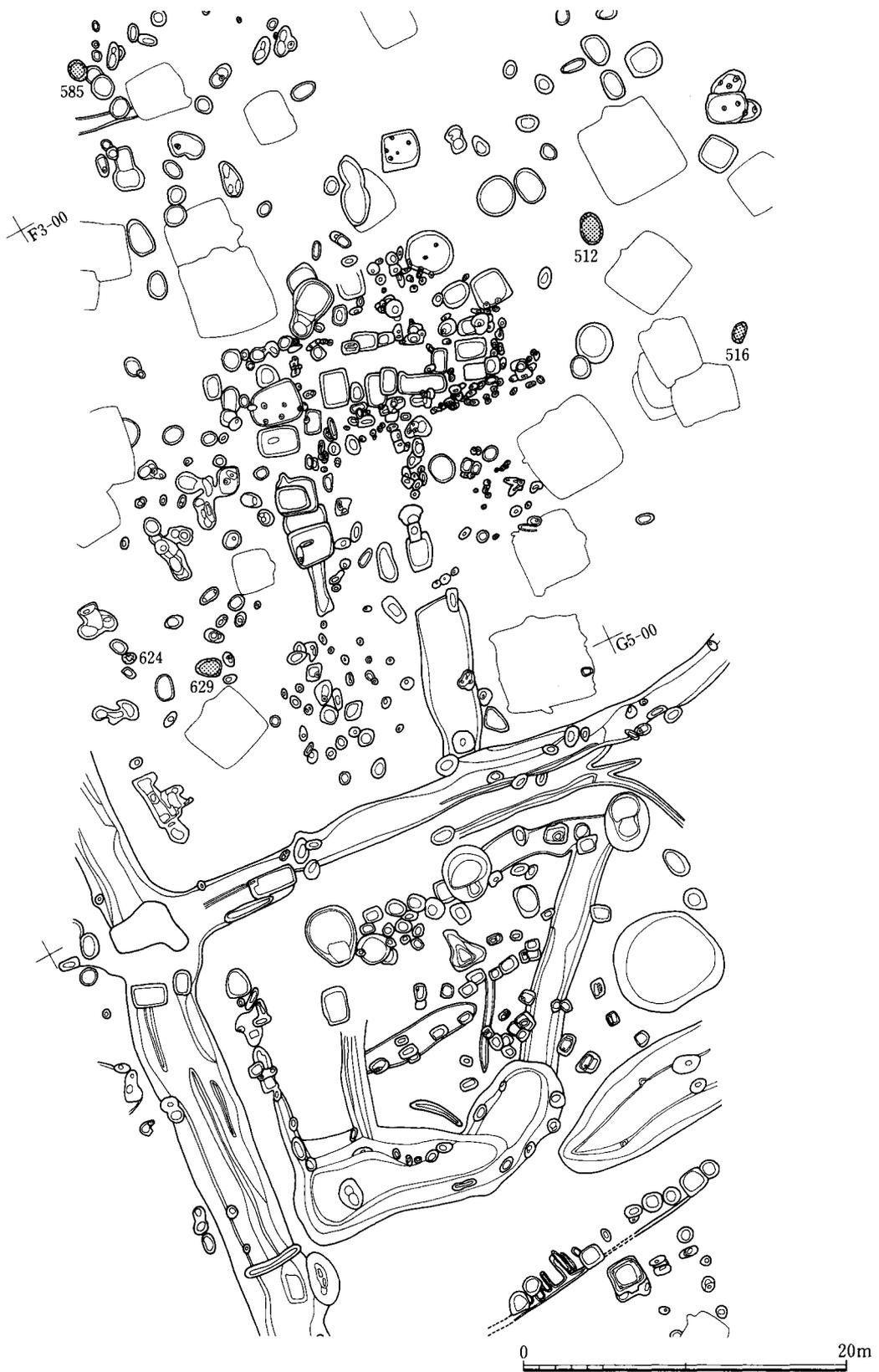
F 7 区、120号住居跡の南西 1 m程に位置する。径1.1mの不整形を呈し、確認面からの深さ0.2mを測る。覆土中にローム粒子の混入がほとんどみられない。

壁際に内面黒色処理の杯底部が遺存している。

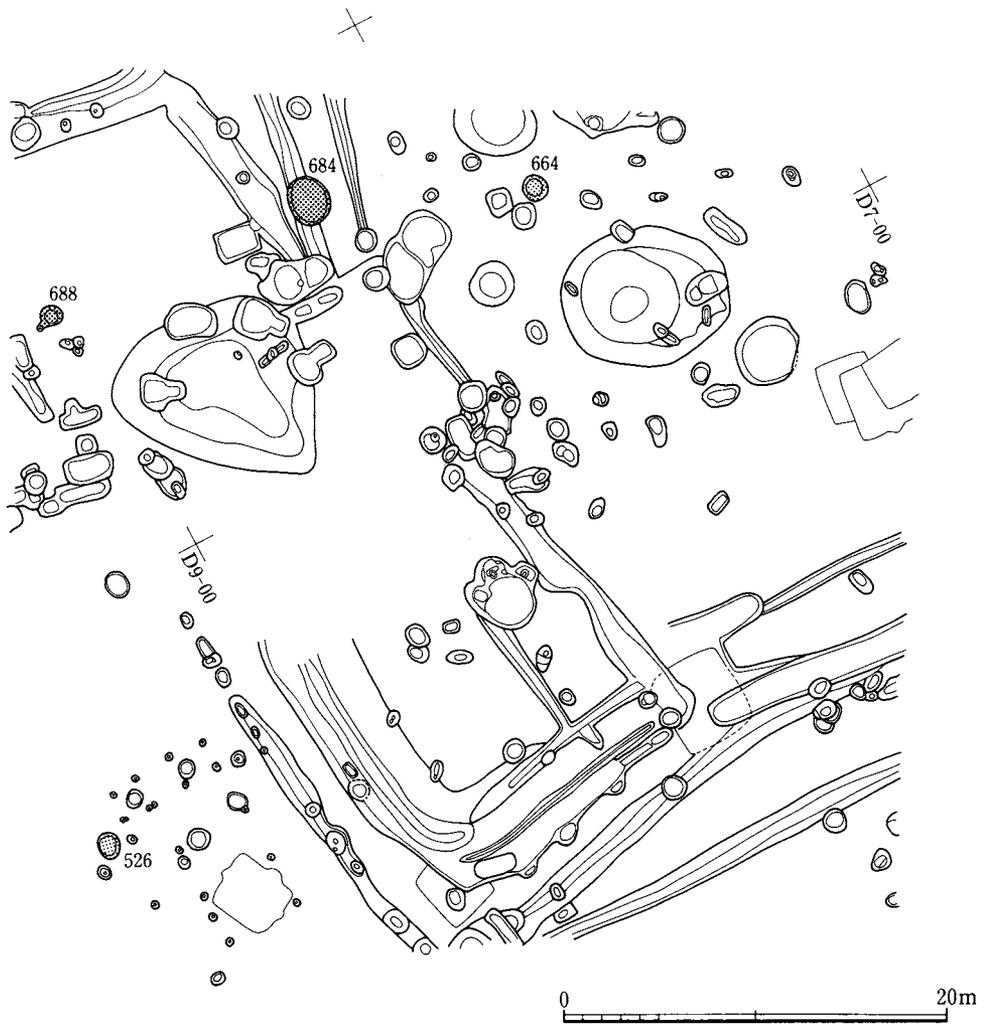
5 2 6 号土壙 (第70図、図版33)

D 9 区、掘立柱建物跡 (HT-01) の南 3 m程に所在する。長径1.2m、短径1.1mの略円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面はやや丸味を有し、中央が最も深くなる。確認面からの深さは中央部で0.3mを測る。底面の南西端には深さ15cmの小ピットが穿たれている。覆土下層にはローム粒子を多く含んでおり、この層上面に土器が多く遺存していた。人為的な埋め戻しと考えられる。

遺物は、高台付椀及び小皿の他に甕の小破片もみられる。



第68図 平安時代土壙配置図(1)



第69図 平安時代土坑配置図(2)

537号土坑 (第70図)

E7区、110号住居跡の北東60cm程に所在する。平面形は円形を呈し、径1.0m、深さ0.8mを測る。壁・底面とも堅緻で、ローム粒を含む土で埋め戻されている。

遺物の出土は少ないが、杯・甕片が底面から検出されている。

552号土坑 (第70図)

F0区北端、012号住居跡の南西1.5m程に位置し、551号土坑と重複する。土層状況より本土坑の方が新しいことは明瞭である。径1.4mの円形プランを呈し、確認面より0.4mの深さを測る。壁・底面とも堅緻で、底面はほぼ平坦である。覆土はローム粒及びロームブロックを多く含む層で形成されており、人為的な埋め戻しが考えられる。

遺物は底面から覆土上層にかけて多量に検出された。図示できた土器は、杯6点、高台付椀

3点、鉢1点、小形甕1点である。完形品も含まれており、埋め戻しに伴って意図的に埋められたようである。

5 5 9号土壌（第70図）

F 0区、019号住居跡の南1m程に位置する。南北長1.0m、東西長1.1mの略三角形を呈する。確認面からの掘り込みは10cm程度である。覆土中に焼土・炭化材・白色の砂質粘土を多く含むことより、住居跡のカマドとなる可能性が高い。

2層中より内面黒色処理の高台付椀等が検出された。

5 6 1号土壌（第70図、図版34）

F 1区北東端、023号住居跡の南壁に近接して所在する。南北長1.2m、東西長1.3mの略円形を呈する。壁はほぼ直立して立ち上がり、東側に狭いテラスを有する。底面は堅緻でほぼ平坦であるが、東側に向ってやや低くなる。底面北西端には径25cm、深さ15cmのピットが穿たれる。覆土中にはローム粒子・ロームブロックを僅かに含んでおり、埋め戻された可能性が高い。

底面直上で杯とほぼ完形の鉄鏝が検出された。

5 6 3号土壌（第70図）

G 0区南西端に023号住居跡を切って所在する。径1.1mの円形を呈し、確認面からの深さ0.4mを測る。底面は平坦で堅緻である。覆土状況から、埋め戻したものと思われる。

遺物の出土は少ないが、覆土中から墨書土器片が検出された。墨書内容は、切っている023号住居跡の一括品と同様であり、おそらく、埋め戻しの土のなかに混入していたものと思われる。なお、出土墨書土器は023号住居跡の土器のなかに載せている（第41図96・98・107）。

5 6 5号土壌（第71図、図版34）

G 2区、035号住居跡の南側床面を切って所在する。径1.5mの円形を呈し、035号住居跡の床面から0.5m、住居跡の確認面から0.9mの深さを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、東側で部分的にオーバーハングする。床面は平坦で堅緻な状況である。覆土中にローム粒・炭化粒を多く含んでおり、やはり埋め戻しと思われる。

遺物は、底面より浮いて2層から3層上面にかけて多量に検出された。26・31は入子となり、28の蓋となるような状況で出土している。27・29の杯は正位で検出されている。

5 6 7号土壌（第71図、図版34）

G 1区、030号住居跡の南西2m程に位置し、東側で568号土壌とやや重複する。径0.9mの円

形を呈し、確認面から0.3mの深さである。覆土はローム粒を含む暗褐色土1層である。埋め戻しの土と思われる。

底面から10cmほど上で、鉄鏝2本と土師器の小破片が出土した。

569号土壙（第71図）

G1区、041号住居跡の西側床面を掘り込んで所在する。径2.0mの略円形を呈する。確認面からの深さは1.1mを測る。壁は垂直に近く立ち上がり、底面近くでやや膨らむ。底面は平坦で堅緻である。底面に粘性の強いロームブロックを含む黒褐色土を敷き、その上に遺物を置いているようである。上部は、ローム粒子を多く含む土で埋め戻している。

遺物は、5層上面に破砕された状態で検出された。土師器の甑1個体である。

582号土壙（第71図、図版35）

G1区、033A号住居跡の西壁を切って所在する。1辺1.4mの隅丸方形を呈し、確認面より65cmの深さを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦で堅緻である。覆土中には、ローム粒の他にカマド部材と同様の砂質粘土や焼土・炭化材が多く含まれており、明らかに埋め戻したことが考えられる。しかも、埋め戻しはかなり短期間と想定される。

遺物は、底面から覆土中層にかけて多量に出土しているが、土器は小破片がほとんどで実測できるものは内面黒色処理の高台付椀1点のみである。焼土・炭化材・砂質粘土の出土と考え合わせると、住居跡内で不要となったものを何らかの目的のもとに埋めたことが考えられる。

585号土壙（第71図、図版35）

F2区の調査区西端に位置し、590号土壙と南東側で若干重複する。径1.3mの円形を呈し、確認面より0.3mの深さを測る。覆土中にはローム粒・焼土粒・砂粒を多く含んでおり、埋め戻したものと思われる。遺物は2層中に含まれていた。

出土した土器は、図示した高台付椀・杯の他に甕の小破片がみられる。

624号土壙（第71図）

E4区、調査区東側に所在する。長径1.0m、短径0.7mの楕円形プランを呈し、確認面より45cmの深さである。断面形は三角形となる。覆土中にローム粒を多く含む。

高台付椀1点のみ検出された。

629号土壙（第71図、図版36）

F4区東側、062号住居跡の北1m程に位置する。長軸1.5m、短軸1.2mを測る小判形のプラ

ンを呈する。確認面からの深さは20cmで、底面中央に向けて徐々に深くなる。覆土中には、ロームブロック・焼土・炭化物を多く含み、埋め戻しの可能性が高い。

ほぼ完形に近い高台付杯が西側の床面から18cm程上で倒位状態で検出されている。

661号土壙（第71図）

G2区、035号住居跡の南2m程に位置し、掘立柱建物跡（HT-03）と重複する。南東の柱掘り方と切り合っており、土層状況より本土壙のほうが新しいことは明瞭である。径1.3mの円形を呈し、確認面より0.8mの深さである。壁はほぼ垂直に立ち上がるが、西側でオーバーハングする部分が認められる。底面は平坦で、良好な状態である。1・2層中にはロームブロック・焼土等を多く含み、3層にはロームブロックがほとんど混入しない。遺物の出土が1層下半から2層中に集中することより、ある程度埋め戻したのちに不要となった土器を廃棄し、さらに焼土等を含む土を埋め戻したことが考えられる。

出土した土器は1/3以下の遺存状況で、杯・椀類がほとんどである。

664号土壙（第72図）

C7区南側に所在する。長軸1.4m、短軸1.2mの略円形を呈する。確認面からの深さは0.3mを測る。覆土はローム粒を含む暗褐色土の単一層である。

遺物の出土は少ないが、覆土上層より高台付椀と甕の小破片が検出された。

665号土壙（第72図）

C7区、664号土壙の南東に隣接する。東西長1.4m、南北長1.1mの隅丸長方形を呈する。確認面からの深さは0.3mを測る。壁はやや斜位に立ち上がり、底面は平坦である。覆土は、664号土壙同様ロームブロックを含む暗褐色土で構成される。

遺物は覆土上層で10点程確認されたが、ほとんど杯・椀の小破片である。

672号土壙（第72図）

Gア区、045C・D号住居跡を切って掘り込まれる。1辺1.1mの隅丸方形を呈し、確認面より0.3mの深さを測る。覆土は、ロームブロック及びローム粒を多く含んだ層であり、埋め戻された状況が考えられる。

遺物の出土は少ないが、平安時代の杯の小片が覆土中より検出された。

684号土壙（第72図、図版37）

C8区に所在する。長軸2.5m、短軸2.2mのやや不整な円形を呈し、確認面からの掘り込み

は0.7mを測る。壁は北側でほぼ垂直となるものの、他はやや斜位となる。底面は平坦で、かなり堅緻である。覆土上層はロームブロックを多く含み、下層はロームブロックの他に炭化材を多く含むようになる。かなり短期間に埋め戻しが行なわれたようである。遺物は、2層下半から4層にかけてみられる。

検出された遺物は土師器及び須恵器に限られるが、かなり多く出土している。完形あるいは完形に近い土師器がほとんどで、杯・小皿類15個体、内面黒色処理の高台付椀3点、足高高台付杯10個体分である。須恵器は破片状態であるが、土師器群とは明らかに時期を異なる。ただ、出土状況より自然的に混入したものではなく、土師器群とともに一括して埋められたことは確実である。おそらく、前時代の須恵器を破片状態で保有していたか、どこかで拾得したものを納めた可能性が強い。

688号土壌（第72図）

C9区北端に位置する。長軸1.5m、短軸1.1mを測り、南側に突出する部分がみられる。円形部分は確認面より38cmを測り、突出部分は14cmほど高くなり、テラス状を呈する。

覆土上層より、土師器の皿が1点検出された。

691号土壌（第72図）

C9区、073号住居跡の北東コーナーに近接して所在する。径1.1mの円形を呈し、確認面より0.9mの深さを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

墨書土器片が2点覆土中で検出されたが、文字内容から073号住居跡と同様であり、埋め戻しの際に混入したものと思われる。

701号土壌（第72図、図版37）

B10区に所在する。長軸1.8mを測り、中央で括れる瓢箪形を呈する。確認面からの深さは西側で7cm、東側で35cmを測る。中央部分は底面より1段深く掘り込まれている。覆土中には焼土及び炭化材が多く遺存している。

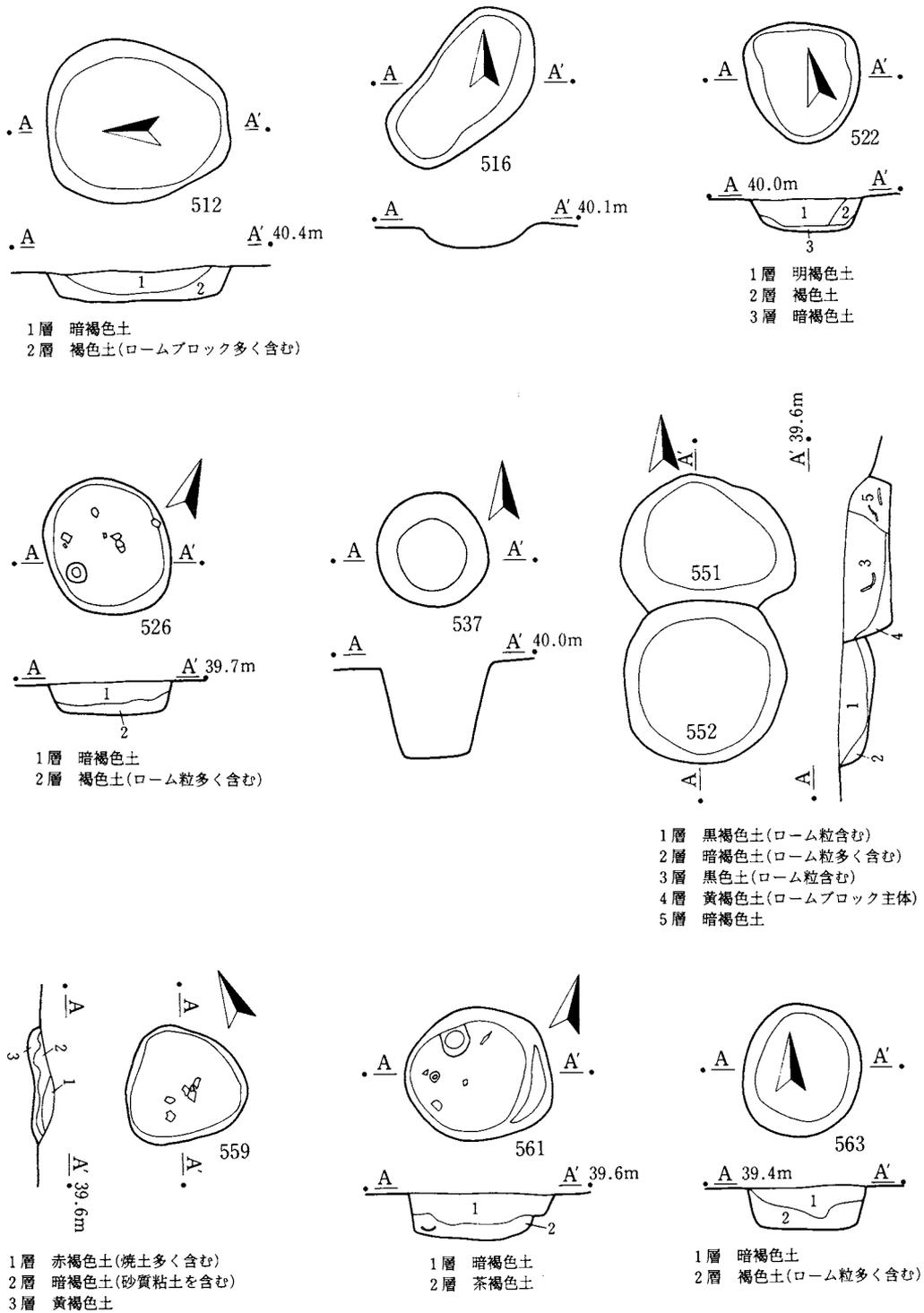
底面より10cm程上で杯が2点出土した。49は倒位、50は正位状態である。このレベルで炭化材の遺存がみられる。覆土状況及び遺構のプランより、土器焼成遺構の可能性も考えられる。

P21号土壌（第72図）

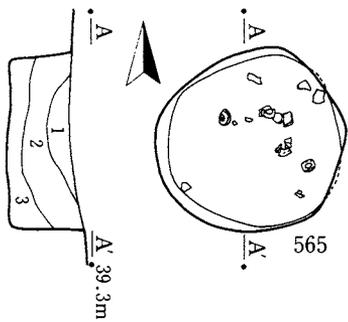
G2区東端に位置し、101号住居跡を切って掘り込まれる。長径1.6m、短径1.4mの略円形を呈し、確認面より0.8mの深さを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦で堅緻である。覆土はほぼ3層に分かれ、上層はロームブロック主体、下層は炭化物主体の層である。意図的

に埋め戻した状況を呈する。

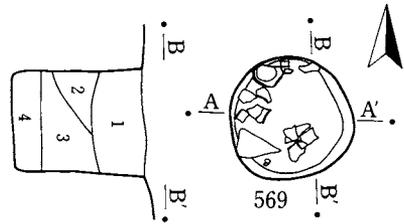
4層上面に土器の出土がみられる。杯の墨書土器片が2点含まれる。



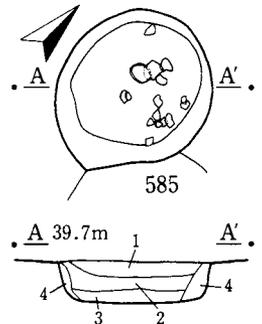
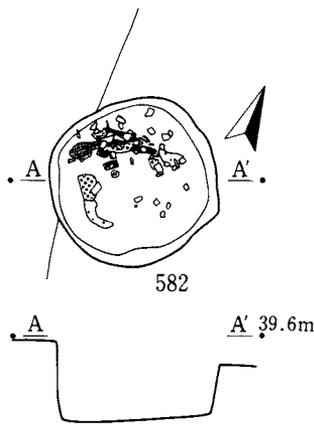
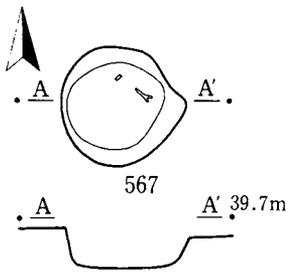
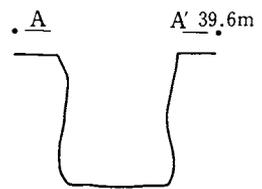
第70図 平安時代土壌(1)



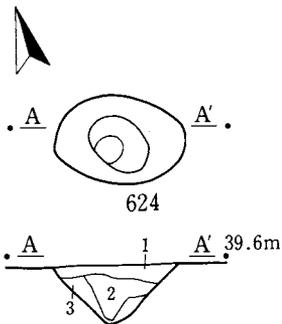
- 1層 黒褐色土
- 2層 茶褐色土(ローム粒多く含む)
- 3層 黒褐色土(ローム粒多く含む)



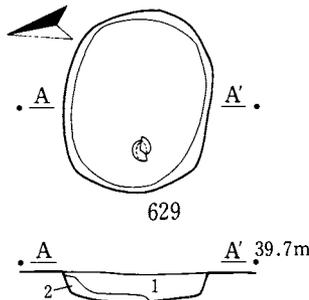
- 1層 褐色土(ローム粒含む)
- 2層 明褐色土(ローム粒多く含む)
- 3層 暗褐色土
- 4層 黒褐色土(ロームブロック含む)



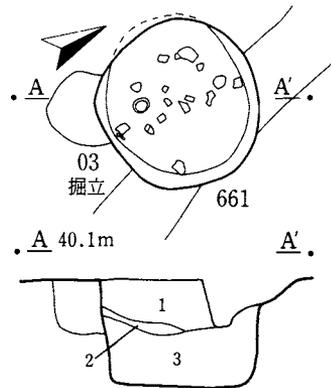
- 1層 暗褐色土
- 2層 黒褐色土(ローム粒・焼土粒含む)
- 3層 褐色土(ローム粒多く含む)
- 4層 黄褐色土



- 1層 暗褐色土
- 2層 明褐色土(ローム粒多く含む)
- 3層 黄褐色土



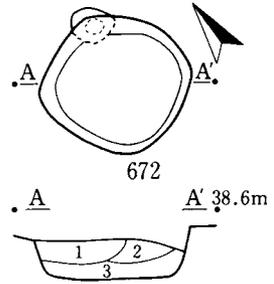
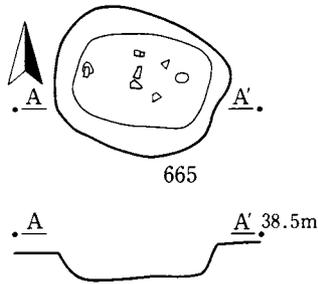
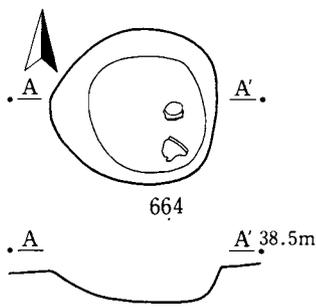
- 1層 茶褐色土(ロームブロック・焼土含む)
- 2層 暗褐色土



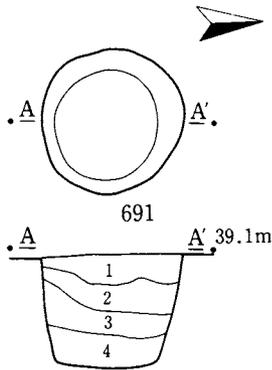
- 1層 褐色土(炭化物・ロームブロック多く含む)
- 2層 赤褐色土(焼土粒主体)
- 3層 明褐色土



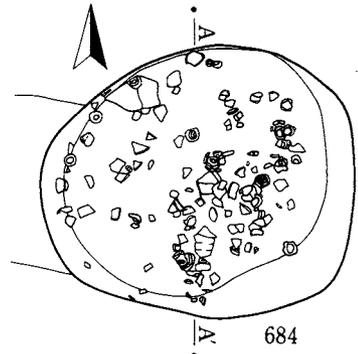
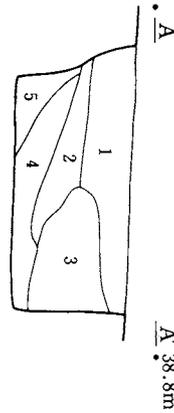
第71図 平安時代土壇(2)



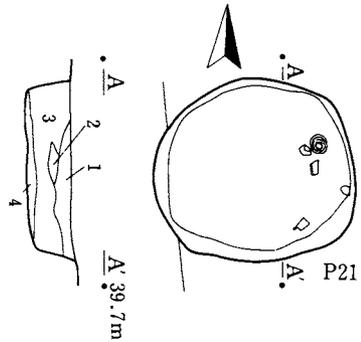
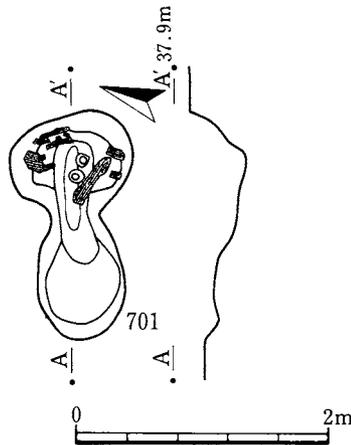
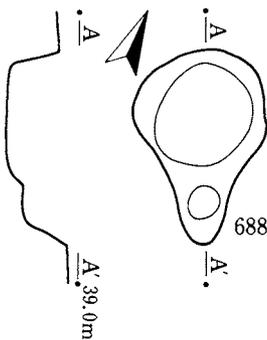
- 1層 明褐色土(ロームブロック主体)
- 2層 褐色土(ローム粒多く含む)
- 3層 暗褐色土(ロームブロック・焼土ブロック含む)



- 1層 明褐色土(ローム粒多く含む)
- 2層 茶褐色土(ローム粒多く含む)
- 3層 褐色土(ローム粒少く含む)
- 4層 暗褐色土



- 1層 褐色土(ロームブロック多く含む)
- 2層 茶褐色土(ロームブロック・炭化粒多く含む)
- 3層 明褐色土(ロームブロック主体)
- 4層 暗褐色土(炭化粒多く含む)
- 5層 明褐色土(ロームブロック含む)



- 1層 明褐色土(ロームブロック主体)
- 2層 灰褐色土(砂粒多く含む)
- 3層 褐色土
- 4層 黒色土(炭化粒主体)

第72図 平安時代土壙(3)

土壙出土土器

5 1 2号土壙（第73図1）

1は炭素吸着による内面黒色処理を施した土師器の椀で、体部の大半を欠損する。推定口径15.8cm、器高7.9cmを測る。体部は半球形を呈し、そのまま口縁部に至る。内外面とも丁寧なミガキが施される。高台は強く外側に踏張り、底面中央が沈線状に巡る。底部は回転糸切り後、周囲にナデを加える。全体に分厚い造りである。胎土は緻密で小砂粒を多く含む。

5 1 6号土壙（第73図2・3、図版66）

2は完形の高台付椀で、炭素吸着による内面黒色処理が施される。口径16.5cm、器高6.8cmを測る。体部は膨らみを以て立ち上がり、口縁部で大きく外反する。内面全体から外面下方に及ぶ4分割のミガキが加えられる。高台は断面三角形状を呈し、小さめに造られる。底部は回転糸切り後周囲にナデ調整が施される。胎土は緻密で、石英・雲母の小粒子を含む。色調は黄褐色を呈する。3は口径8.8cm、器高3.6cmを測る高台付小皿である。2同様炭素吸着による内面黒色処理が施される。全体に厚手の造りで、成形時の歪みが認められる。体部は外反気味に大きく開き、内面に4分割のミガキが施されるが、ミガキの幅は広い。外面は丁寧なナデ調整である。高台は高く、下端で外側に強く屈曲する。胎土は緻密で小砂粒を多く含み、色調は赤褐色を呈する。

5 2 2号土壙（第73図4）

4は内面黒色処理の土師器の杯で、上半部を欠損するが、大形品となろう。内面のミガキはきわめて細かく丁寧である。体部下端から底部全面には手持ちヘラケズリ調整が加えられる。胎土は比較的緻密で、長石・石英の中砂粒を多く含む。底部から体部にかけて黒斑が認められる。

5 2 5号土壙（第73図5）

5は高台付の椀と思われるが高台部は欠損する。体部は内湾し、口縁部で大きく外反する。全体に丁寧な横ナデで、体部外面下端に手持ちヘラケズリが加えられる。胎土はやや粗く、長石・石英の砂粒を多く含む。全体に火を受けており、特に内面は器面の荒れが激しい。

5 2 6号土壙（第73図6・7）

6は高台付椀の体部片である。推定口径14.8cmを測る。体部は膨らみを有し、口縁部でやや外反する。体部内面はミガキ、外面は丁寧な横ナデが加えられる。胎土は緻密で小砂粒を多く含み、黄褐色の色調を呈する。7は推定口径10.5cm、器高2.5cmを測る小皿である。口縁部は大

きく外反し、口唇端部に沈線状の凹みが巡る。底部は上げ底で、中心切りに近い回転糸切り離し未調整である。胎土は粗く、砂粒の混入がかなり多い。色調は黄褐色を呈する。

537号土壙（第73図8・9）

8は推定口径14.8cm、器高4.4cmを測る土師器の杯である。かなり分厚い造りで、口縁部が外反する。体部内外面とも横ナデ調整で、外面下端には爪先状の強い回転痕が明瞭に残る。回転方向は右である。底部は回転糸切り未調整で、粘土のはみだしが認められる。底部内面には黒斑、外面には煤の付着が観察される。胎土はやや粗く、小砂粒を多く含む。9は大形の甕の底部片である。胴部内面は丁寧なナデ、外面は横位のヘラケズリ後粗いミガキが加えられる。底部はナデ調整で、部分的にミガキが施される。胎土は砂質を帯びて粗く、小砂粒を多く含む。全体に火を受け、外面に煤の付着が認められる。

552号土壙（第73図10～20、図版66）

10～15は底部回転糸切り未調整の杯で、11・12・14はほぼ完形品である。10・13は体部上半が直線的に外傾するタイプである。内外面とも丁寧に横ナデ調整される。10は口径12.4cm、器高3.7cmを測り、黒褐色の色調を呈する。13の底部外面には黒斑が認められる。11・12は体部が内湾し、そのまま口縁部に至るものである。口径12.0cm、器高3.6cm程を測る。底部は突出気味に切り残され、内面中央が1段高くなっている。内外面とも丁寧なナデ調整であるが、胎土が軟らかい状態でかなり強く施すため、胎土の割れが若干みられる。胎土は緻密で、小砂粒を多く含む。色調は暗黄褐色を呈する。11の体部外面には煤の付着が顕著に認められる。14は完形品で、口径12.0cm、器高4.5cmと口径に比して器高が深くなる。体部は内湾気味に開き、口唇部でやや肥厚する。内外面とも右回転の丁寧なナデが加えられる。胎土は緻密で長石・石英の小砂粒を含み、黄褐色の色調を呈する。体部内面には靨及び葉痕が観察される。15は推定口径12.6cm、器高3.5cmを測る。小さめの底部から体部が内湾気味に大きく開き、口縁部でやや外反する。体部内外面とも丁寧なナデ調整、底部は糸切りの収束部に段差が生じている。胎土は他の杯と異なり、かなり緻密で、焼成も堅緻である。内外面に火禿痕が顕著に残る。16・17は高台付碗である。体部外面及び高台部は丁寧な横ナデ、内面は細かいミガキを加えて黒色処理を施している。16は推定口径12.8cm、器高6.6cmを測り、胎土・焼成とも11・12の杯と同様である。17は全体に火を受け、煤の付着が認められる。18は高台部が大きく底部内面にミガキが認められないことより、足高高台付杯の可能性が高い。色調は黄褐色を呈するが、被熱による煤の付着が顕著である。19は小形甕で、図示の1/3程の遺存である。口縁部はくの字状に開き、断面三角形状の口唇部を呈する。頸部外面には横ナデの稜が隆帯状に残る。胴部内面は小口状工具による粗いナデ、外面は幅広のヘラケズリが施される。なお、口唇部上端にはいくつかの凹みが残っ

ている。乾燥時に生じたものであろう。胎土は粗く、長石・石英・雲母粒を多く含む。被熱による煤の付着がみられる。20は推定口径23.4cm、器高11.5cmを測る鉢である。半球形の体部に直立する口縁部を有する。口縁部外面から胴部内面は丁寧な横ナデ、外面には幅広のヘラケズリが加えられる。胎土は緻密で小砂粒を多く含む。

5 5 9号土壙 (第74図21～23)

21は高台付碗で、図示の1/4程の遺存である。推定口径17.0cm、器高6.1cmを測る。底部はやや外側に張り、低い高台が貼り付けられる。体部内外面とも丁寧な細かいミガキが加えられ、内面黒色処理が施される。胎土は緻密で、小砂粒の混入も少ない。全体に火を受けているようである。22は高台付小皿の高台部であろう。裾が大きく外側に開く形態を呈する。23は甕で全体に分厚い造りである。砂質を帯びる軟らかい胎土で砂粒を多く含む。被熱による赤変及び煤の付着がみられる。

5 6 1号土壙 (第74図24)

24は底部糸切り未調整の杯の底部片である。体部は左回転の横ナデ調整が施される。胎土は緻密で黄褐色の色調を呈する。

5 6 5号土壙 (第74図25～33、図版66)

25～31は底部回転糸切り未調整の杯で、30以外は完形あるいは完形に近いものである。25は口径11.9cm、器高3.9cmを測る。小さな底部から体部が直線的に開き、内外面とも丁寧な右回転の横ナデが施される。内面下半のロクロ目が顕著に残る。胎土はきわめて緻密で砂粒の混入が少なく精選された感が強い。色調は黄褐色を呈する。使用による磨耗はほとんど認められない。本資料の体部外面には3ヶ所に墨書が記される。判読困難であるが、展開図の左が「子三」と思われる以外は不明と言わざるを得ない。26～30は突出気味の底部に内湾する体部が開く共通の形態を呈している。体部内外面とも丁寧な右回転の横ナデ調整が施される。法量もほぼ同様で、口径11.4～11.8cm、器高3.0～3.5cmを測る。胎土はやや砂質を帯び軟らかい。26の体部外面には横位に「子」の墨書が大きめに記される。28・29は被熱による煤の付着が激しい。27はあまり使用された痕跡がなく、黄褐色の色調を呈する。30は体部の開きが大きくなる。やはり煤の付着が著しい。31は器形・法量とも同様であるが、器肉がかなり厚くなる。底部の糸切りも前者に比べて粗く、異なった糸を使用している。胎土中の砂粒の混入が多くなる。32はその形態より、足高高台付杯の高台部と思われる。底部中央からややずれた位置に焼成後の穿孔が施されている。孔の状況から杯部から高台に向けての片側穿孔であることは明瞭であるが、用途は不明である。被熱による煤の付着がみられる。33は土師器の甕の下半部片である。かなり

大形となろう。胴部外面は格子叩き目で下端部にヘラケズリ調整を加える。胎土はやや粗く、長石・石英・赤色粒子を多く含む。被熱による煤の付着及び内面の荒れが認められる。

5 6 9号土壙（第74図34、図版67）

34は口径28.2cm、器高26.5cmを測る土師器の甑である。口縁部は緩く外反し、端部は平坦となる。口唇部中央は浅い沈線状を呈する。胴部は上半に最大形を有し、下半は直線的にすばまる。口縁部外面から胴部内面は丁寧なナデが施される。胴部外面は長方形の格子叩きで部分的にナデが施され、下端には幅広のケズリが加えられる。底部は部分的な遺存であるが、五孔を呈するものであろう。ヘラによる面取りが観察される。胎土は比較的緻密で、長石・石英粒を多く含み、黄褐色の色調を呈する。内外面とも被熱による煤の付着が著しい。

5 8 2号土壙（第74図35）

35は推定口径11.0cm、器高4.5cmを測る小形の高台付椀である。1/3程の遺存であるが全体に丁寧な造りである。体部外面は丁寧なナデ調整で、ナデが強いためか粘土の割れが若干見られる。口縁部外面から体部内面は四分割のミガキで内面黒色処理される。胎土は緻密で、小砂粒を多く含む。焼成はきわめて良好で暗褐色の色調を呈する。

5 8 5号土壙（第74図36～38）

36は椀の小片で、高台が付くものであろう。口縁部が緩く外反する。内面のミガキは横位で黒色処理が施される。37は推定口径12.6cm、器高4.3cmを測る土師器の杯である。体部内外面とも右回転の丁寧な横ナデで、ロクロ目が強く残る。底部は回転糸切り末調整である。胎土は緻密で、長石・石英・赤色粒子を僅かに含み、黄褐色の色調を呈する。38は足高高台付杯の高台部であろう。丁寧な横ナデ調整で、黄褐色の色調を呈する。

6 1 4号土壙（第75図39）

39は墨書土器片で底部外面に記載される。「野」の残面であろうか。

6 2 4号土壙（第75図40）

40は推定口径15.4cmを測る高台付椀で、高台部を欠く。比較的薄手の造りである。体部外面は横ナデ調整で、下端に左回転のヘラケズリが加えられる。内面はミガキが施され、黒色処理が認められる。

6 2 9号土壙 (第75図41、図版67)

41は口径14.2cm、器高6.7cmを測る高台付杯で、体部の歪みが著しい。体部は器肉が厚く、口縁部が大きく外反する。内外面とも丁寧な右回転の横ナデ調整が施される。高台は高く、大きく外側に開く。胎土はやや粗く、中砂粒をかなり多く含む。焼成は堅緻で、須恵器に近い硬質な感を受ける。色調は暗褐色を呈する。

6 6 1号土壙 (第75図42～47、図版67)

42～45は底部回転糸切り未調整の土師器杯である。42～44は口径12cm前後で器高は3.7cmを測る。42は体部中央のナデが強く、上半がやや肥厚している。体部と底部の境は不明瞭である。胎土は緻密で砂粒の混入が少なく、黄褐色の色調を呈する。43・44は底部が若干突出するが、43は薄く仕上げられ、体部が内湾気味となる。44は厚手で、体部下半で屈曲して直線的に口唇部に至る。口唇端部は尖頭状となる。内外面とも横ナデ調整で小砂粒を多く含む。45は内面黒色処理を施す杯の小片である。体部外面は丁寧な横ナデ、内面は細かいミガキが加えられる。底部はやや突出し、回転糸切り未調整である。二次的に火を受けている。46は高台付椀で、体部下端に回転ヘラケズリを加える。内面は丁寧なミガキ調整後黒色処理を施す。やはり火を受けている。47は推定口径13.5cmを測る高台付椀で、高台部を欠損する。体部はかなり薄く仕上げられ、ロクロ目は弱い。口唇部はやや肥厚して外側に短く屈曲する。内面のミガキは細く施され、内面黒色処理が認められる。高台接合面には環状の刻みが数条加えられる。胎土は緻密で雲母粒が若干観察される。内外面とも被熱による赤変及び剥落が顕著である。

6 6 4号土壙 (第75図48、図版67)

48は推定口径16.4cm、器高6.4cmを測る大形の高台付深椀である。体部はかなり薄く仕上げられ、口縁部が緩く外反する整美な形態を呈する。体部外面は丁寧な横ナデ、内面は横位の細かいミガキが加えられ、黒色処理が施される。貼り付け高台は低く、外側に強く踏張る。高台底面には浅い沈線が1条巡っている。胎土は比較的緻密であるが、長石・雲母粒子を多く含む。内外面とも二次的に火を受けている。

6 9 1号土壙 (第75図51・52)

2点とも墨書土器片である。51は体部外面に横位で記され、隣接する073号住居跡出土と同一の文字であることから、「子吉原」で完結するものである。52は底部外面記載で、判読不能である。

701号土壙（第75図49・50、図版67）

49・50は法量・形態・胎土等同様のタイプである。口径11.8cm、器高3.6cmを測る。体部下半に強い稜を有し、上半が直線的に開く。口唇部は上方に摘みあげられるため断面三角形状を呈する。内外面とも丁寧な横ナデ調整で、内面は特に強くナデ付けられているため粘土の割れが若干見られる。底部は回転糸切り未調整で、やや突出する。胎土は僅かに砂質を帯び、器表面がざらつく。黄褐色の色調を呈する。

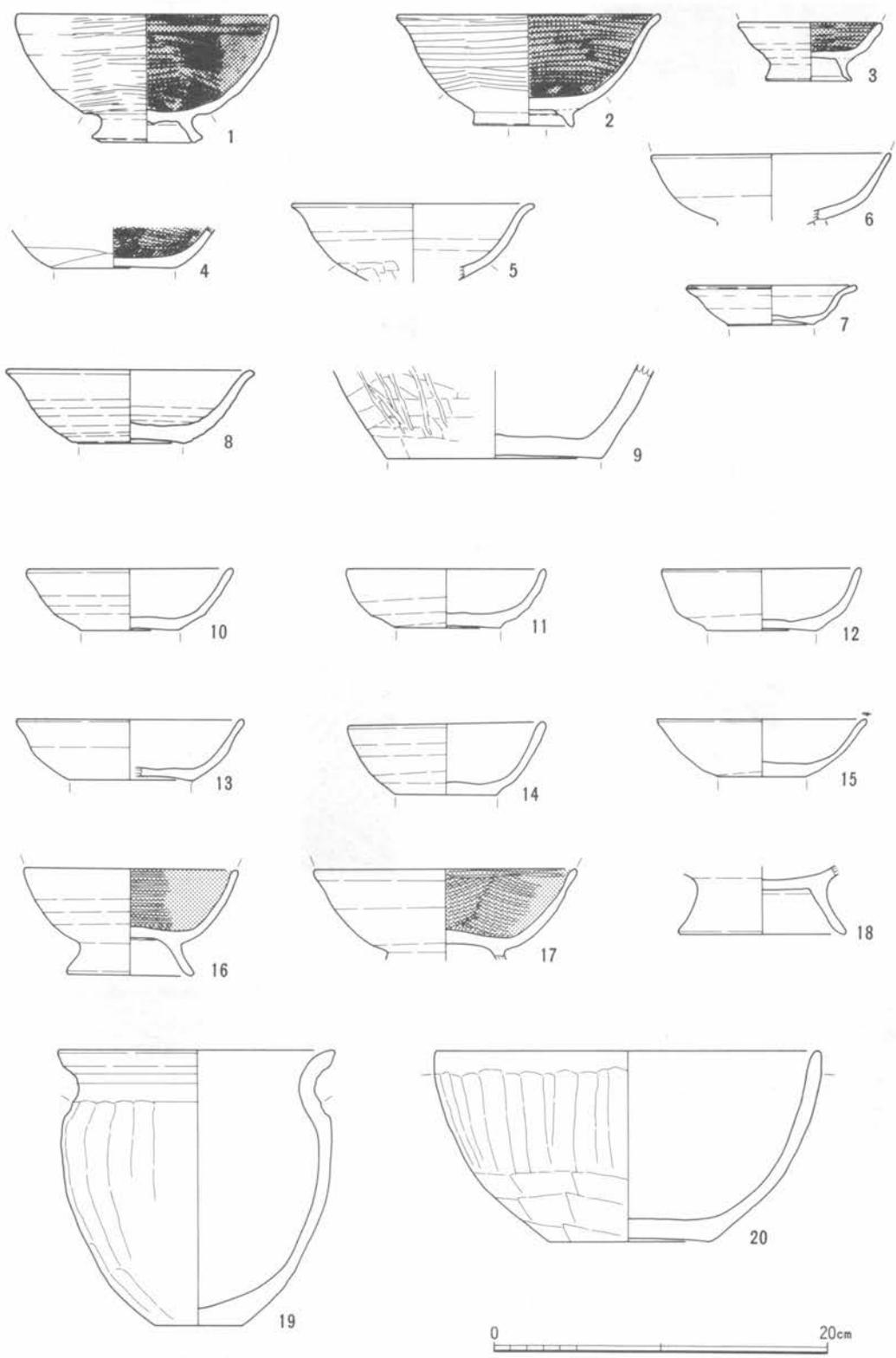
P21号土壙（第75図53～63、図版67）

53～57は土師器の杯で、底部は回転糸切り未調整である。器形等より3つに分類できる。53・54は口径12.0cm、器高3.0～3.4cmとやや扁平な形を呈する。体部は内湾気味に立ち上がり、底部との境はやや不明瞭である。色調は黄白色を呈するが、53は被熱による赤変が著しく、54の体部下端に火瘃痕が残る。55・56は口径12.0cm前後、器高3.4～3.7cmとやや深くなる。体部はほぼ直線的に開き、底部との境は明瞭になる。焼成はかなり硬質で、胎土中に砂粒を多く含む。色調は黄褐色で、内面中心に被熱による黒変が著しい。57は器高4.0cmとさらに深くなる。内外面とも丁寧なナデでクロ目は弱い。底部は厚く切り残され、内面中央がへそ状に1段高く残る。胎土は前者に比して軟らかく砂粒の混入も少なくなる。色調は黄白色を呈し、やはり火を受けている。58は推定口径14.5cmを測る高台付碗で高台部を欠く。体部は丸味を有し、口縁部で大きく外反する。外面は丁寧な横ナデで、下端に右回転のヘラケズリを加える。内面は横位の細かいミガキ後黒色処理が施される。胎土は緻密で赤色粒子の混入が目立つ。被熱による変色が見られる。59～61は墨書土器片で、いずれも体部外面に記される。判読困難であるが、59はかなり習熟した筆使いで2列に書いているようである。60も繊細な感を受ける。62は土師器の甑の底部片である。五孔となろう。63は土師器甕の胴部片である。外面は斜位の格子叩きが施されるが、正方形と長方形の2種類の叩き具が観察される。内面は小口状工具によるナデが加えられる。胎土は緻密で雲母粒を若干含む。被熱による変色及び剝離が顕著である。

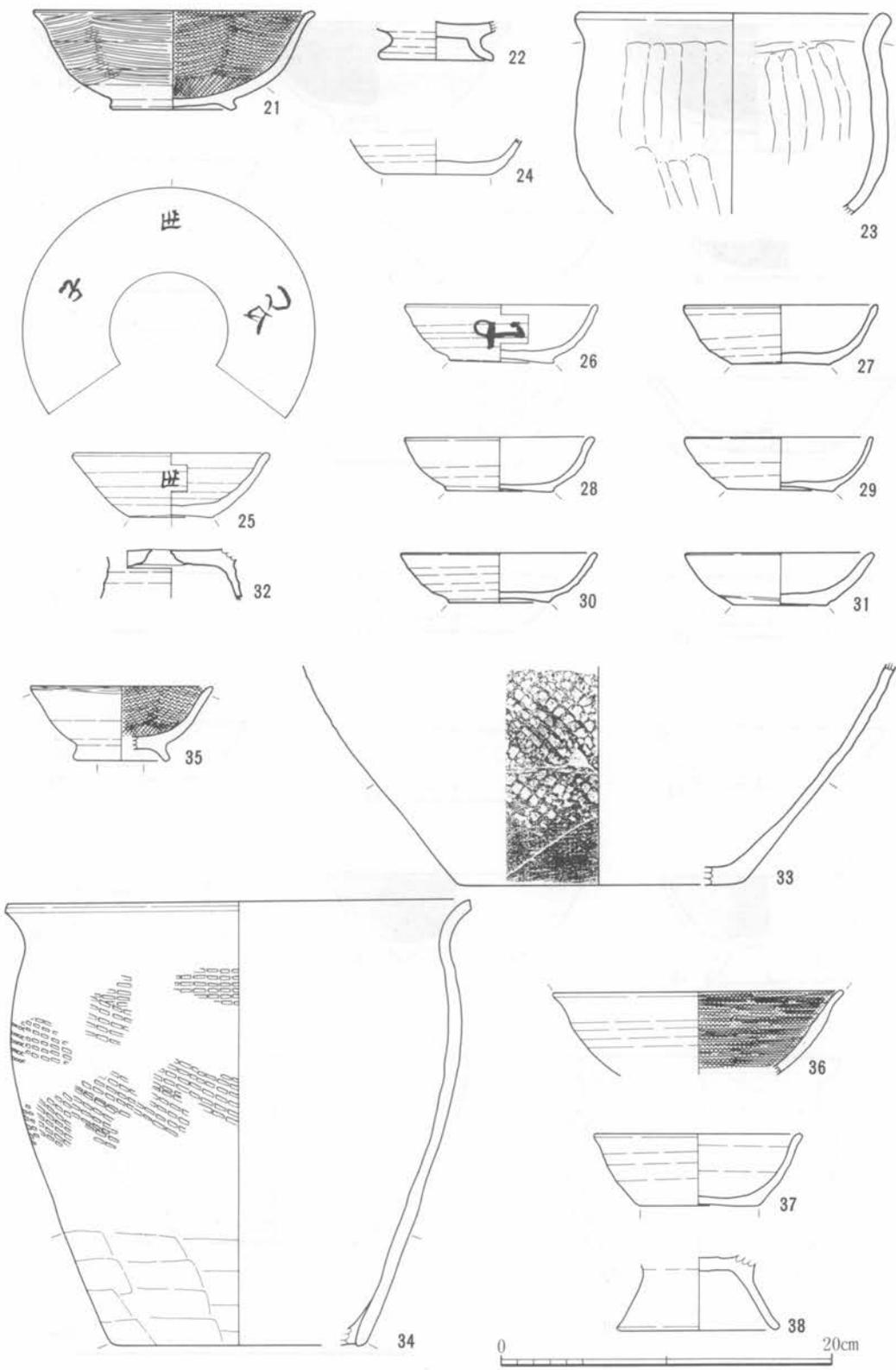
684号土壙（第76・77図64～95、図版68・69）

64～76は底部回転糸切り未調整の土師器杯である。すべて火を受けているようである。64は若干歪みが認められるが、体部がほぼ直線的に開く形態を呈する。口径11.8cm、器高3.2cmを測る。胎土はやや粗く、小砂粒を多く含む。黄褐色の色調を呈する。65は体部が内湾しそのまま口縁部に至る。66は口径11.3cm、器高3.6cmを測る。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部でやや外反する。底部は回転糸切り後ナデが加えられる。周縁に沈線が1条巡っていることから、高台を意識したのかもしれない。胎土は粗く、中砂粒を多く含む。激しく火を受けたため器表面の荒れが著しい。67は口径10.5cm、器高3.1cmとやや小形になる。内外面とも丁寧な横ナデ調

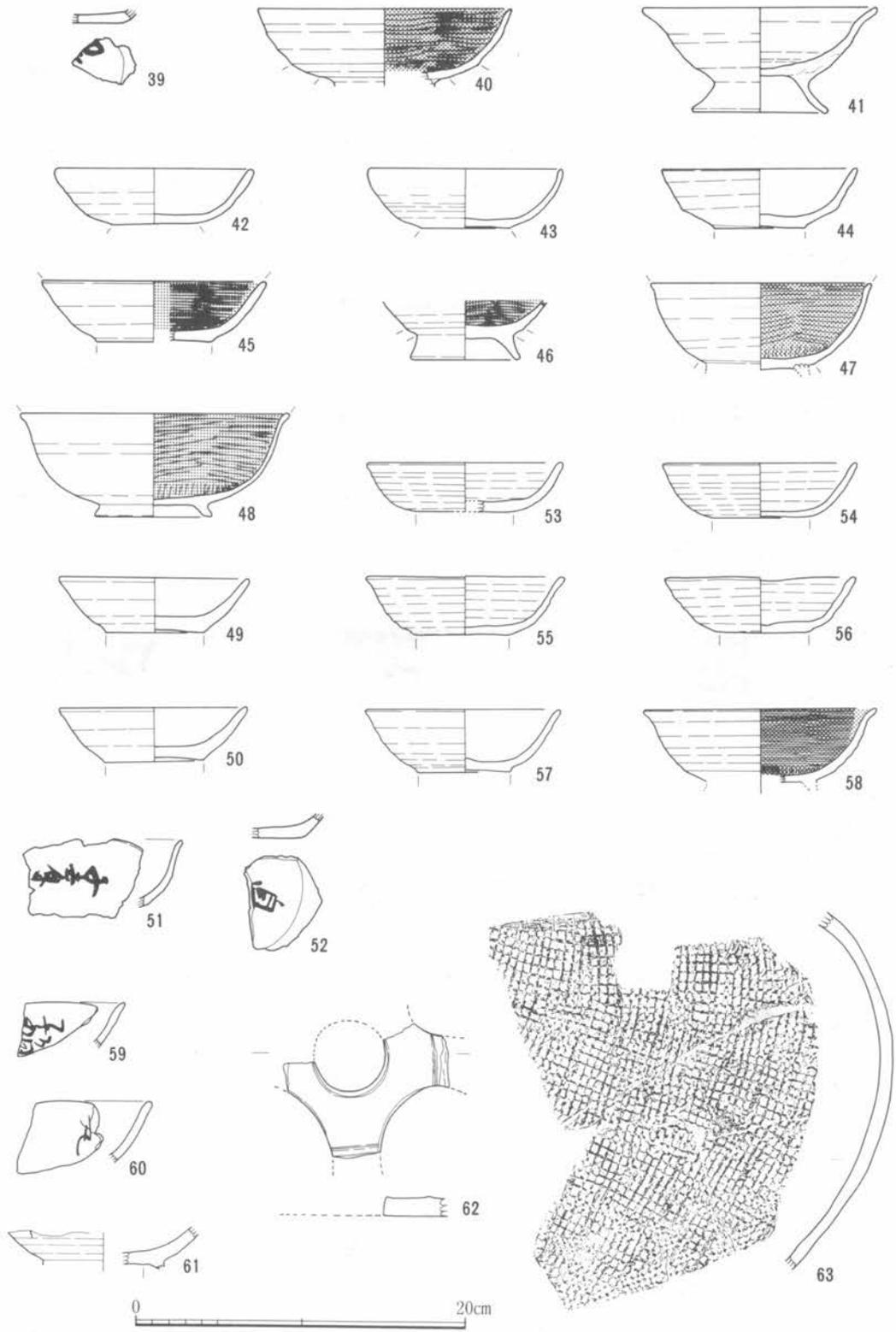
整でロクロ目がほとんど認められない。胎土は緻密で黄褐色の色調を呈する。68～76は高台を厚く切り残す一群である。68～74は体部中央が外側に強く張りだし、口縁部が緩く外反する。口径10.4～11.0cm、器高2.9～3.4cmを測る。胎土は比較的緻密で小砂粒を多く含む。黄褐色の色調を基本とする。75・76は全体に分厚い造りで、器高に比して口径が小さくなる。法量は、75が口径10.7cm、器高3.5cm、76が口径9.8cm、器高3.3cmを測る。胎土は前者と同様である。77・78は底部回転糸切り未調整の土師器小皿である。77は口径10.7cm、器高2.5cmを測り、体部と底部の境が不明瞭である。全体に丁寧な横ナデ調整であるが、口縁部外面のナデが強いため下端に弱い稜を有する。胎土は緻密で黄褐色を呈する。78は底部が若干突出し、外反する口縁部を持つ。底部の糸切りは中心切りに近い。胎土はやや粗くなり、全体にざらつく感を示す。79～81は内面黒色処理の高台付椀である。79は口径13.8cm、器高5.6cmを測る。体部は丸味を有し、口唇部で若干外反する。外面は丁寧な横ナデ、内面は四分割の細かいミガキが加えられる。高台は比較的高く、内面下端に強い稜を有して外側に屈曲する。底部には回転糸切り痕が残る。胎土はやや粗く、小砂粒を多く含む。80・81は口径11.8～12.0cm、器高4.2～4.6cmを測る。体部外面は丁寧な横ナデでロクロ目は弱い。内面には四分割の細かいミガキが施されるが、80は口縁部外面に及んでいる。高台は貼り付けで、横ナデ調整される。底部には回転糸切り痕が認められる。胎土は緻密で小砂粒を比較的多く含む。80は被熱が激しいため、黒色土器B類と間違える程に黒変している。81の体部外面には判読困難な墨書が記される。筆使いからすると倒位で書かれているようである。82～91は足高高台付杯及び椀である。器形等から2つに分類できる。82・83・85・86は杯部の膨らみが弱く、口縁部が外反し、高台があまり高くない一群である。口径15.0～15.4cm、器高6.4～6.8cmを測る。体部内外面とも丁寧な横ナデで、ロクロ目は弱い。高台はハの字状に大きく開き端部で若干外側に開くものもある。胎土は緻密で砂粒の混入もあまり多くない。黄褐色の色調を呈する。84・87～89は体部が球形の椀形を呈し、高台が高くなるタイプである。完形品がないため法量は不明であるが、口径は前者と同様で器高がかなり高くなると思われる。体部はやはり横ナデ調整であるが、ロクロ目が強く残る。高台の開きは少なく、下端で内面に稜を有して外側に屈曲する。胎土は前者と明らかに異なり、やや粗く小砂粒を多く含むようになる。しかも、前者が完形に近く火を受けた痕跡が認められないのに対し、後者は遺存状況が悪くなり、被熱による器面の荒れが激しい。これは、廃棄される直前の土器が置かれた状況に違いがあったことを示すものであろう。92～95は須恵器甕の破片で、95はかなり大形品である。それぞれ胎土・叩き具・調整が異なっており別個体と思われる。



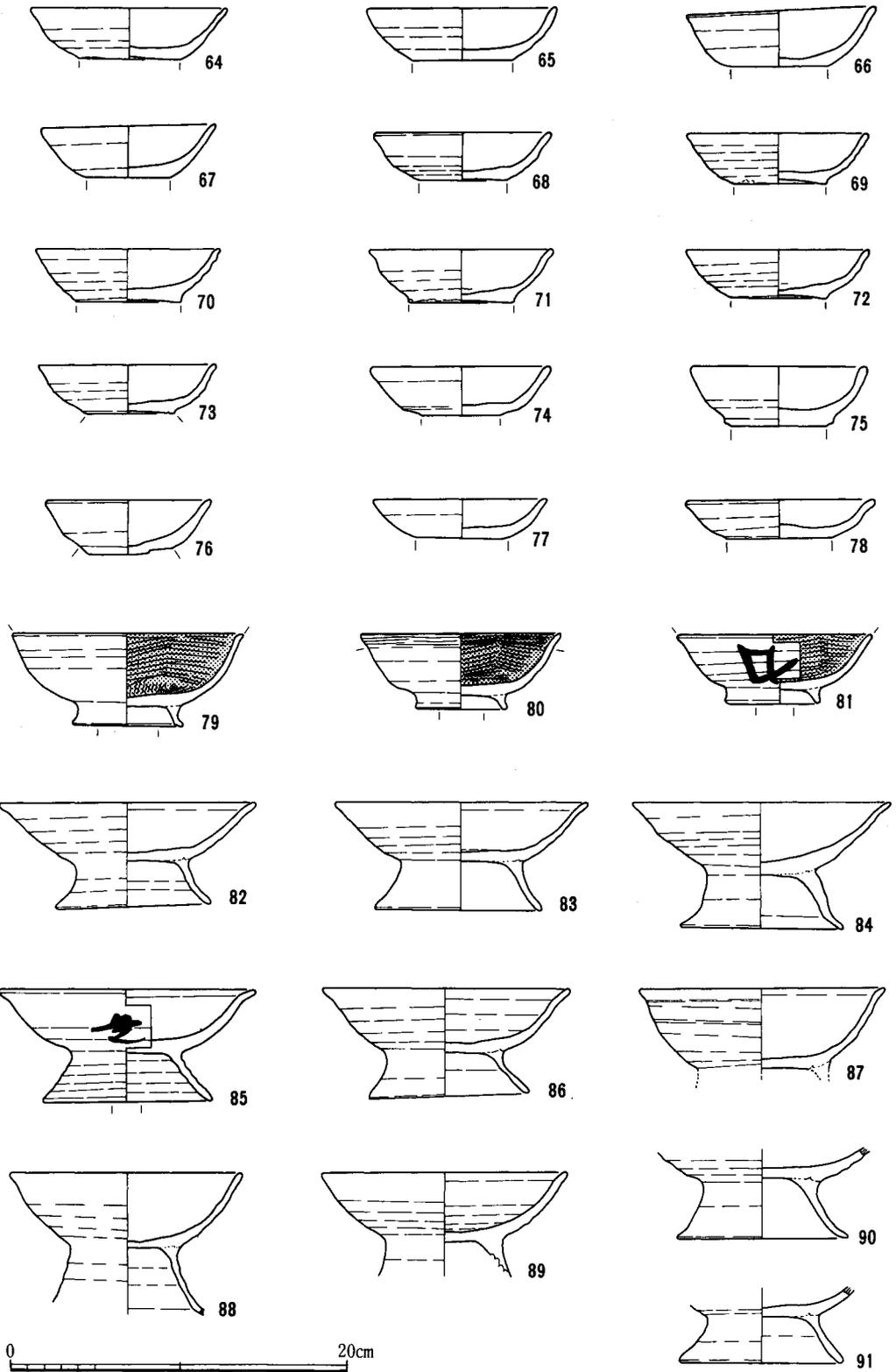
第73図 土城出土土器(1)512(1)・516(2,3)・522(4)・525(5)・526(6,7)・537(8,9)・552(10~20)



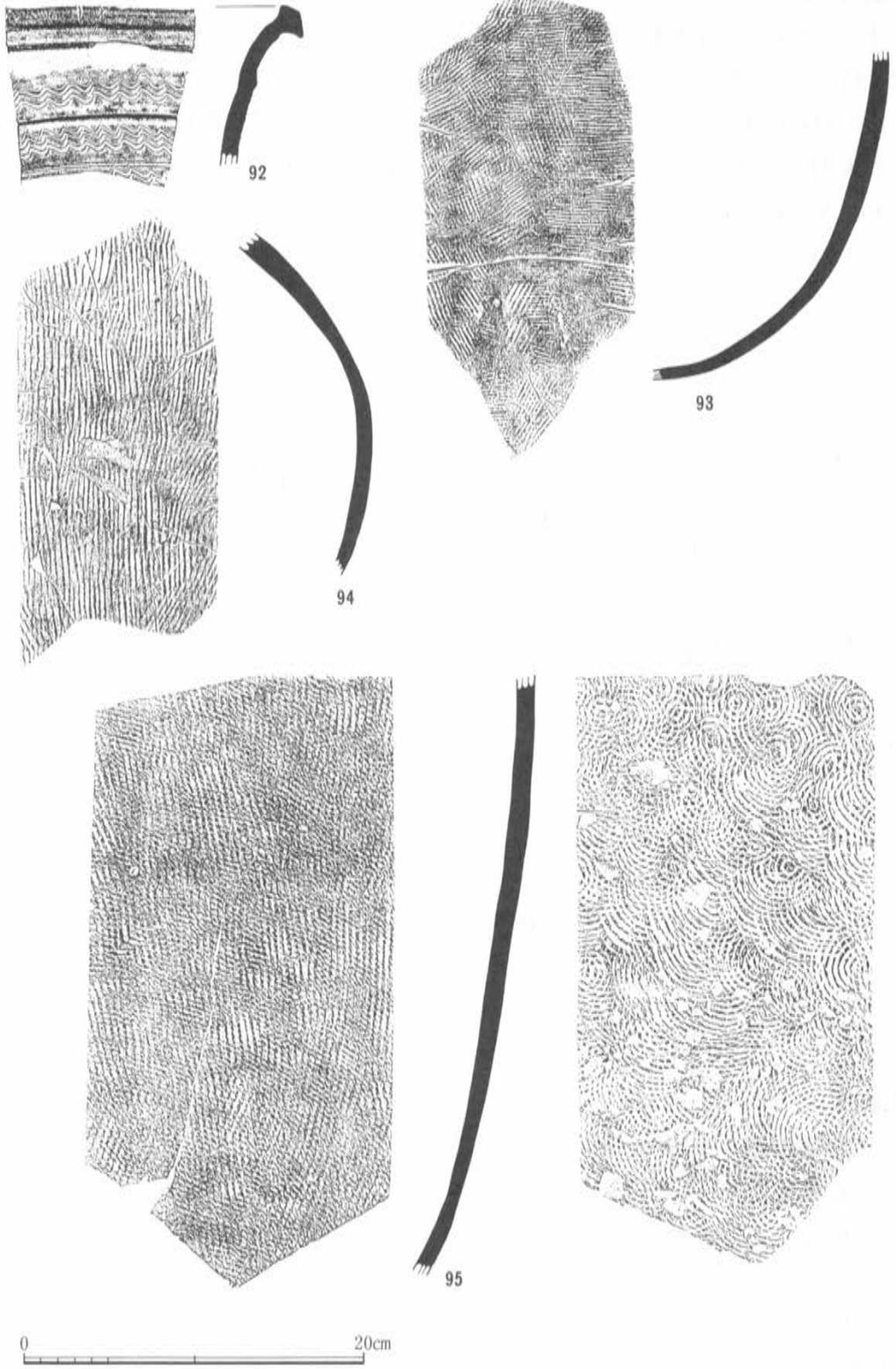
第74図 土壙出土土器(2)559(21~23)・561(24)・565(25~33)・569(34)・582(35)・585(36~38)



第75図 土壙出土土器(3)614(39)・624(40)・629(41)・661(42~47)・
 664(48)・701(49、50)・691(51、52)・P21(53~63)



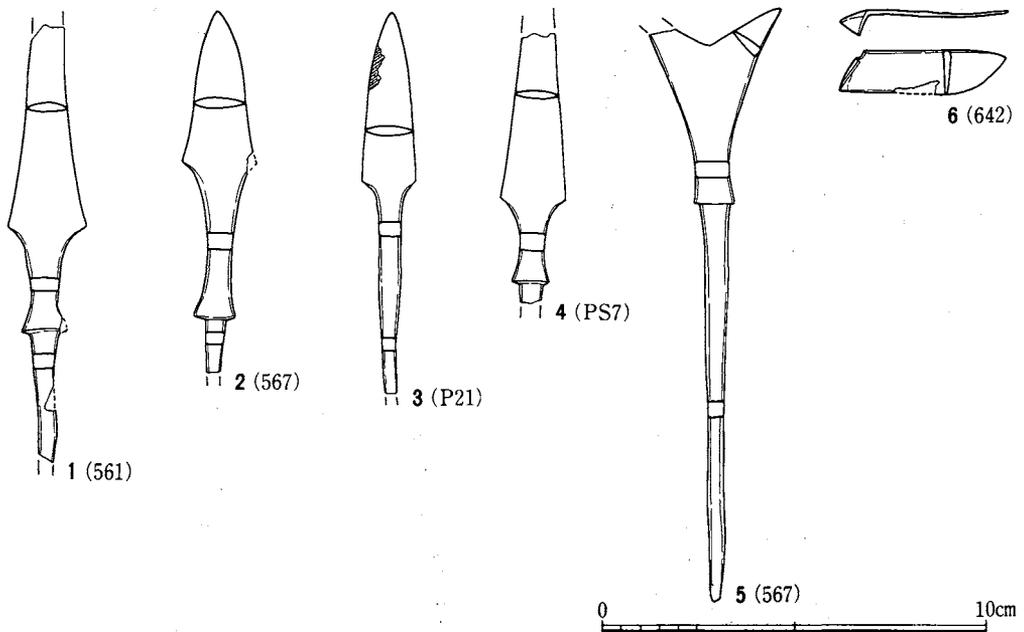
第76图 土壙出土土器(4) 684



第77图 土坑出土土器(5) 684

鉄製品 (第78図、図版90)

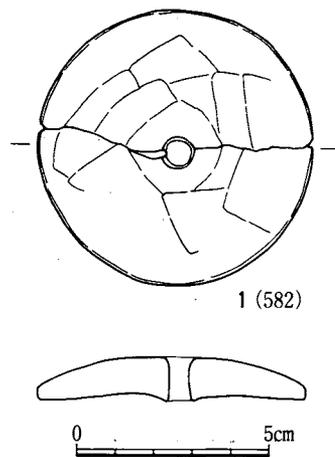
1～4は両丸造りの柳葉式鉄鏃である。1・4は同一タイプで鏃身が長く、篔被ぎが短い。2も類似タイプであるが、鏃身が短く、篔被ぎが長くなる。鏃身長3.9cm、篔被ぎ長3.9cmを測る。3は鏃身長4.3cmを測り、長三角形式に近くなる。身部には木質が若干付着している。5は雁股式鉄鏃で、先端部を僅かに欠く。全長15.0cm、鏃身長5.0cm、茎長10.0cmを測る。6は全長4.4cm、幅1.1cmを測る小形品である。刃部を僅かに欠損するが、ほぼ完形である。基部を斜位に折り曲げていることより、柄の装着が想定される。鎌のようなものであろうか。



第78図 土壙出土鉄製品

土製品 (第79図)

1は582号土壙から出土した紡錘車である。直径7cm、最大厚1.1cmを測る正円形を呈する。重さは58.5gである。上面はヘラケズリ後粗いミガキを加える。側面はナデ調整で、底面の周縁にヘラケズリを施す。中央の孔は径0.9cmで底面側に粘土のはみだしが見られる。胎土は緻密で雲母細粒子を多く含む。黒褐色の色調を呈する。



第79図 土壙出土土製品

第3節 中・近世

中近世の遺構として明確に捉えられるものは少ないが、多くの性格不明の土壌は当該期に含まれる可能性がある。

1. 土壌墓

501号土壌（第82図、図版32）

G2区、044号住居跡の南東1.5m程に所在する。北側の谷頭から約25m内側に入り込んだ位置である。規模は92×87cmを測り、南北にやや長い方形を呈する。長軸方向はN-0°-Eを指す。確認面からの掘り込みは5cmと浅いが、耕作により削平されているようで本来はある程度の深さがあったものと思われる。壁はやや斜位に立ち上がり、底面は平坦で堅緻である。覆土は暗褐色土1層でローム粒を若干含む。

遺物は和鏡・銅製蓋を伴う青白磁合子・青磁碗・鉄製品（短刀・鋏・毛抜き）各1点で、底面北側に集中して検出された。和鏡と合子は並んでおり、合子は北側に傾いた状態である。銅製蓋はやはずれてはいるが埋納時には一体となっていたものである。内容物は検出されなかった。和鏡は鏡面を上にしてやはり北側に傾いている。和鏡の下からは鋏・毛抜き・青磁碗が出土している。鉄製品が和鏡と碗の間に挟まれた状態である。和鏡から15cm東側に離れた位置に短刀がある。底面から若干浮いて、峰を北側、刃部を東側に向けている。和鏡等に織物、毛抜きに木質の付着が認められることと遺物の出土状況から、青磁碗片の上に鋏・毛抜きを置き、さらに和鏡を載せているようである。この和鏡は、織物に包まれ、木箱に納められていた可能性がある。

508号土壌（第82図、図版32）

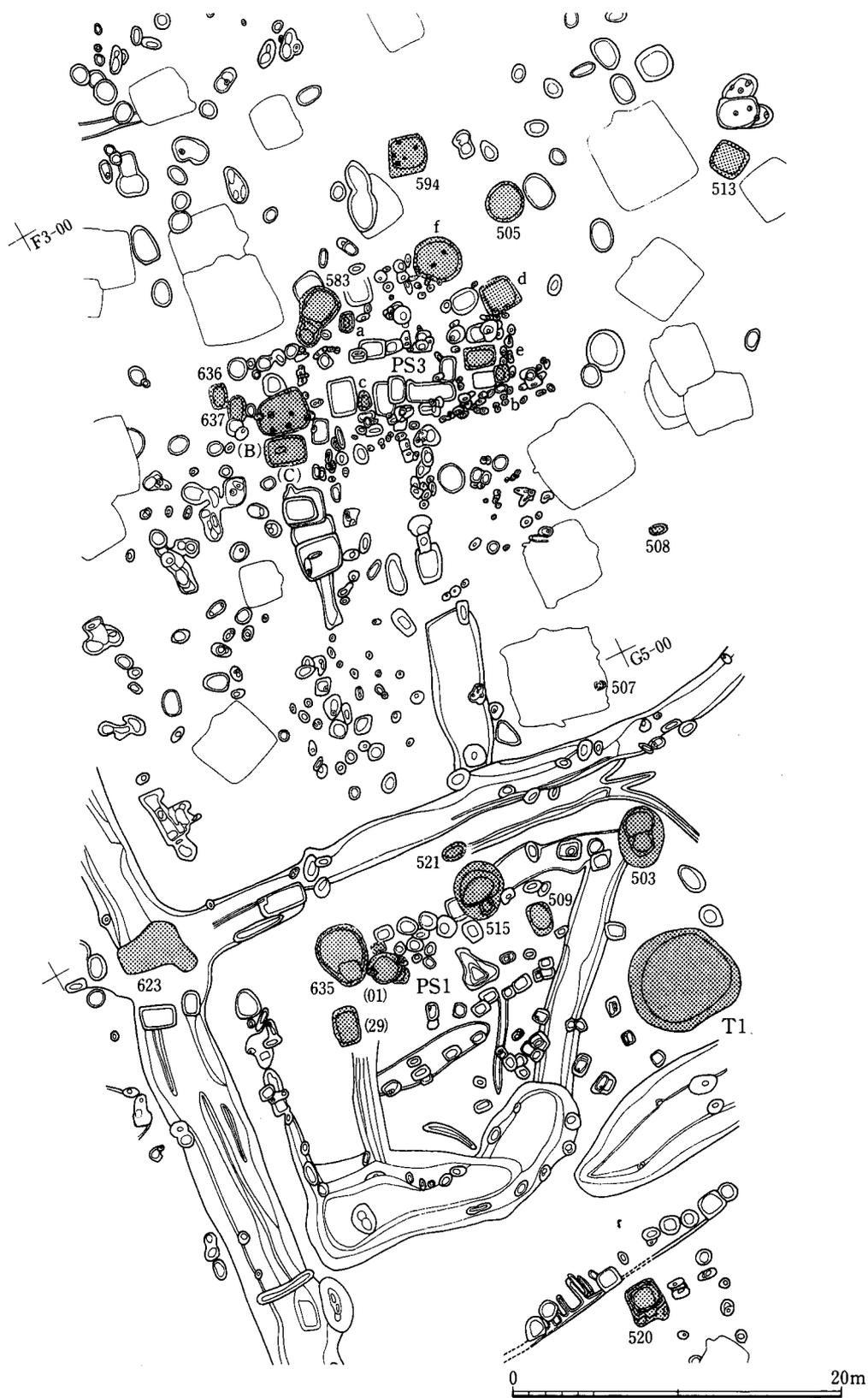
G4区、113号住居跡の南3.5mに所在する。長軸90cm、短軸76cmの楕円形状を呈し、確認面からの深さ8cmを測り、壁は斜位に立ち上がる。底面はハードローム上面に位置し中央に向けてやや低くなっている。長軸方向はN-60°-Wを指す。覆土は暗褐色土1層である。

北東コーナーに接して完形の白磁皿が1点検出された。底面直上で正位状態である。

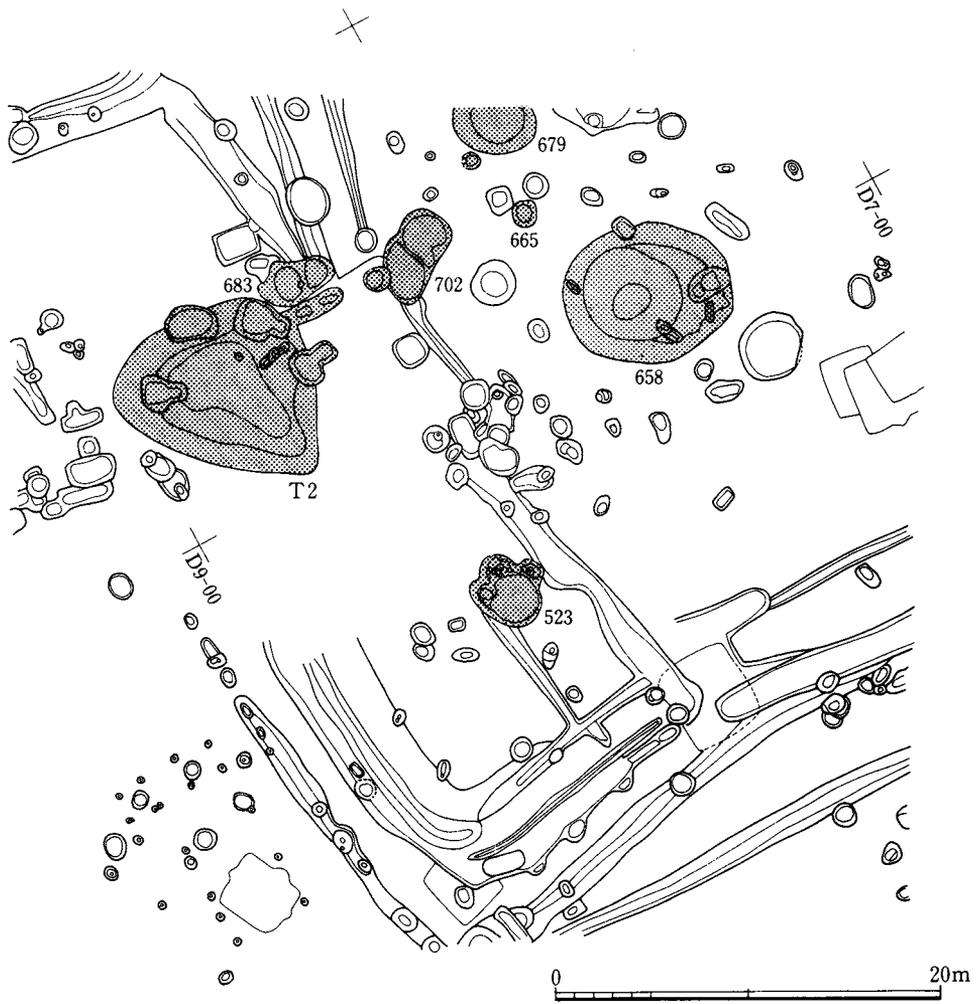
土壌墓出土遺物

501号土壌（第83図1~6、原色図版1、図版95）

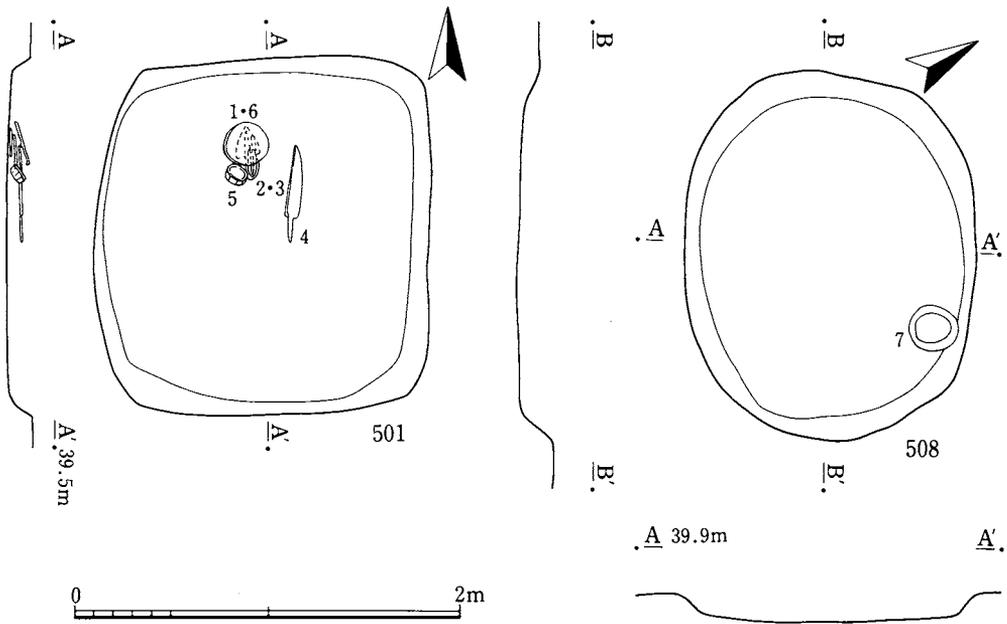
和鏡（1） 縁が僅かに外傾し、平坦な鏡面を呈する円鏡である。緑青の噴き出しが少なく、遺存状態はきわめて良好である。各部の計測値は、直径10.88cm、縁高0.65cm、縁幅0.22cm、重量112.8gである。鏡胎は薄く、鏡背面には直径7.8cmの単界線が巡っている。界線の幅は0.1cm



第80图 中世土坑群配置图(1)



第81图 中世土墳群配置图(2)



第82图 501・508号土墳墓

平均で、半円状の断面形を呈する。鈕及び座鈕は高さ0.55cmを測る菊座鈕である。鏡背の図柄は菊座鈕を中心に配置され、界線上にも及んでいる。雀と思われる双鳥が左右に配されるが、対称的に天地逆となり、地文となる山吹文も鈕をはさんで方向が逆となる。これは、図柄を両方向から見られる二面式構図を意図したもので、隔鈕反対飛交と呼ばれている。鏡式は「山吹双鳥鏡」となろう。主鑄文となる山吹文と双鳥の文様構成及び細く低い単界線等の特徴より本鏡は平安時代後期から鎌倉時代初期にかけての製品と思われる。

和鋏（2） 全長13.4cm、刃長5.9cm、把長7.0cmを測る。両枝の内側に刃を付けた握鋏式である。握りの頭部はU字形を呈し、バネ状になっている。握り部は頭部から中央にかけて厚さ0.2cmと薄い、刃部側に移行するに従い方形の断面に近くなってくる。刃部は若干外反するようである。刃部及び握り部の一部に平織りの目の細かい織物と木質が若干付着している。

毛抜き（3） 全長7.7cm、頭部幅0.5cm、厚さ0.2cmを測る。薄い鉄板を折り曲げており、和鋏同様U字形の頭部を呈する。握りは内側に徐々にすぼまり、刃部は幅が狭くなり丸くなって内側に湾曲する。部分的に目の細かい平織りの織物及び木質の付着が認められる。

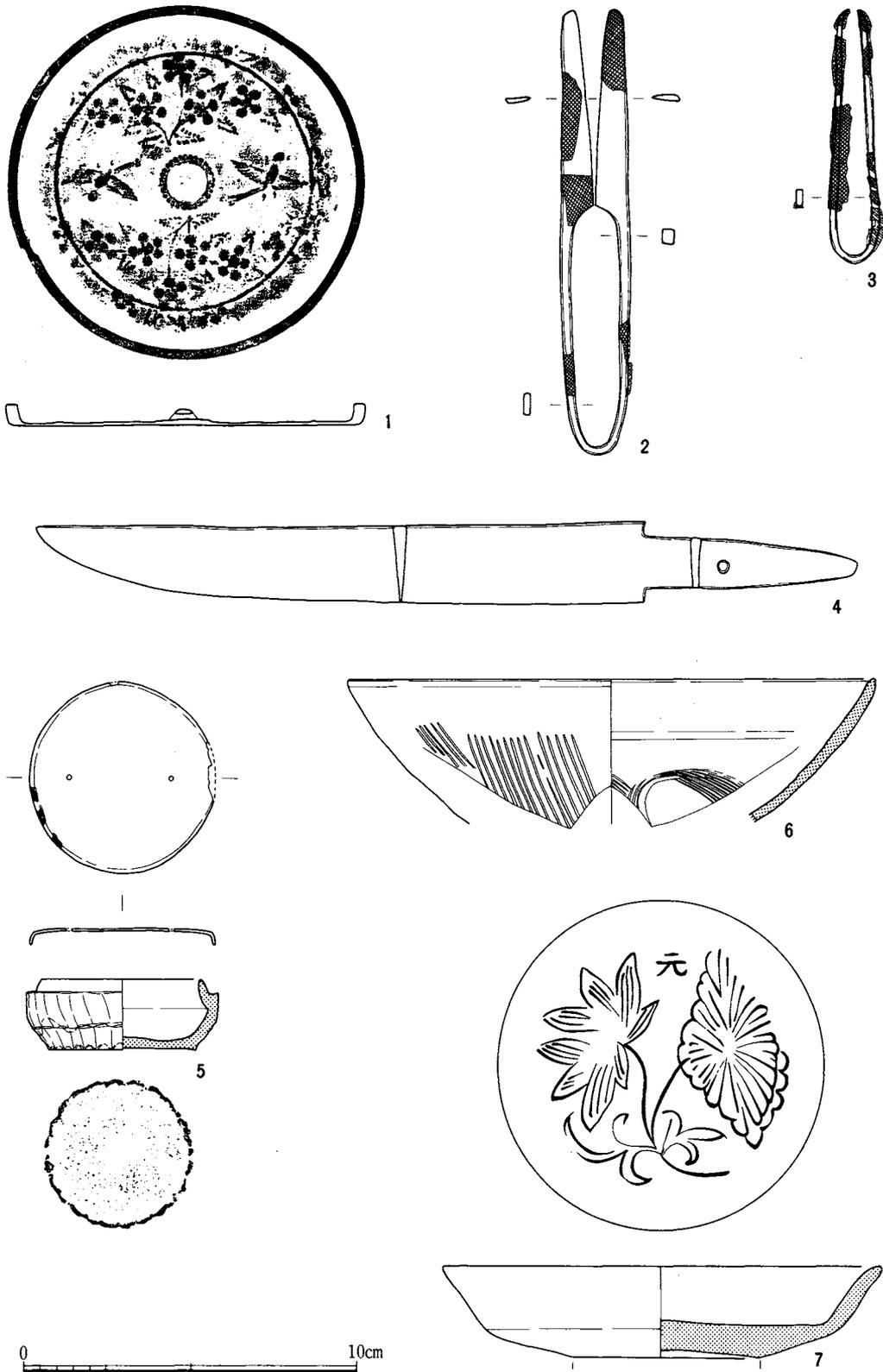
短刀（4） 全長24.8cm、身部長18.2cm、茎長6.6cm、身幅2.3cm、棟幅0.4cmを測る。身部は平棟平造りで、棟側が鋒にかけてやや外反する。峰はふくらの枯れた形態を呈する。関は両関で直角に切り込まれる。茎は尻に向けて徐々に幅を減じ、尻は直線状を呈する。関部より2.3cmの位置に径0.4cmの目釘孔が穿たれる。

合子（5） 身は青白磁で、口径4.8cm、器高2.1cm、底径4.4cmを測る。型造りで、形状は平型である。側面は型押しによる菊座形を呈する。淡青色（影青）の透明釉が体部外面上半及び内面に掛けられる。軟らかい素地で白色を呈する。蓋は銅製で、口径5.5cmを測る。緑青が全体に噴き出し、口縁部を若干欠損するが遺存は比較的良好である。天井部に径1.5mmの小孔が2カ所穿たれる。天井部と口縁部は銀蠟付けにより接合されたものではなく、円盤状の銅板を折り返して成形したようである。部分的な織物の付着が外面に認められるが、鉄錆化していることから、合子自体が包まれているのではなく、和鏡を包んでいた織物が鉄製品の錆とともに付着したと思われる。

碗（6） 青磁製で、推定口径16.0cmを測る。全体の1/6程の遺存である。外面にはヘラ状工具による5本1単位の沈線が刻まれ、内面は細かい櫛歯状工具で草花文様が描かれている。内面上半には幅3mmの浅い沈線が1条巡っている。硬質の素地で灰白色を呈する。釉はガラス質のやや黄色味がかかった緑色である。同安窯系の製品であろう。

508号土壙（第83図7、原色図版2）

7は完形の青白磁皿である。口径13.2cm、底径5.5cm、器高2.7cmを測る。体部は中位で内側に屈曲し、口縁部は薄く引き出されている。平底の底部はやや上げ底となり、回転ヘラケズリ



第83图 土墳墓出土遺物(501:1~6、508:7)

される。底部内面の見込み部は平坦で、立ち上がり部が外面の屈曲部と同一レベルにあるため底部はかなり厚くなる。内面見込みには「元」の文字を伴う草花文のスタンプが押される。胎土は粗く、やや黄色味がかかった灰白色を呈する。釉は比較的厚めに掛かり、底部の釉は施釉後ケズリ取っているようである。貫入が顕著に認められる。器形及び文様から太宰府出土のⅧ—2類と同様であるが、「元」の文字は伴っていない。

6 2 3号土壙（第84図、図版36）

E 5区、009号溝と001号溝が接する位置に掘り込まれている。溝の覆土中からの掘り込みであるが、明確な掘り込み面は確認できなかった。確認された面の上場は東西に長い長方形を呈し、長軸3.9m、短軸2.5mを測る。底面は南北に長い長形状に一段深く掘り込まれる。規模は3.9×1.4mを測る。

底面から頭位を北側に向けた状態で人骨が1体検出された。成人男子と思われる。他に遺物の出土はなかった。

5 9 4号土壙（第84図、図版35）

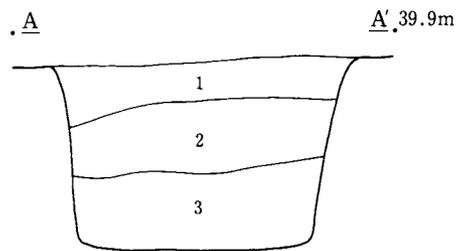
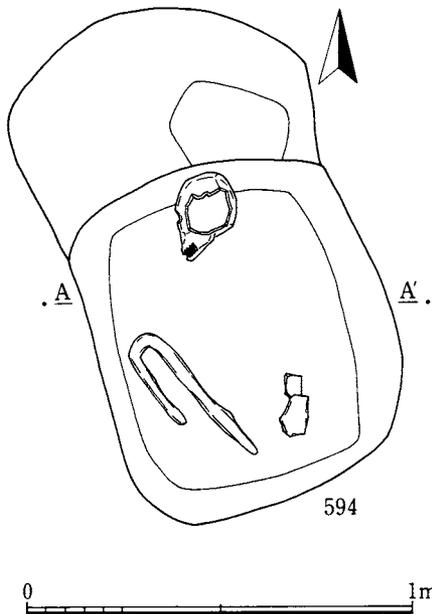
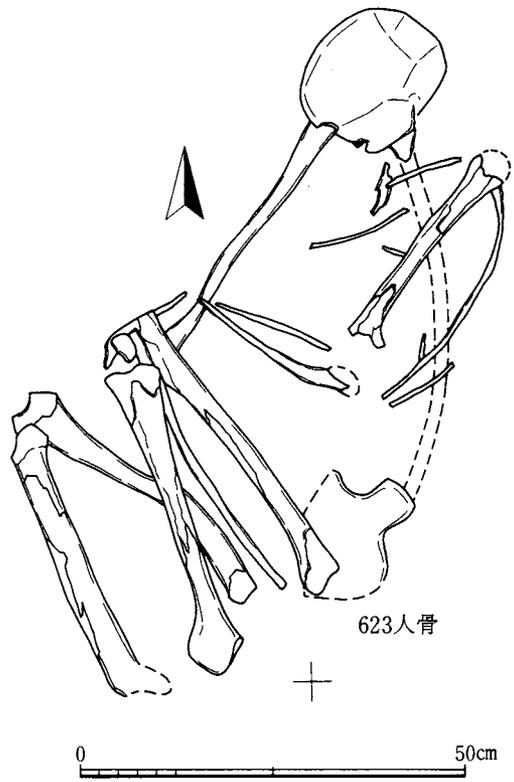
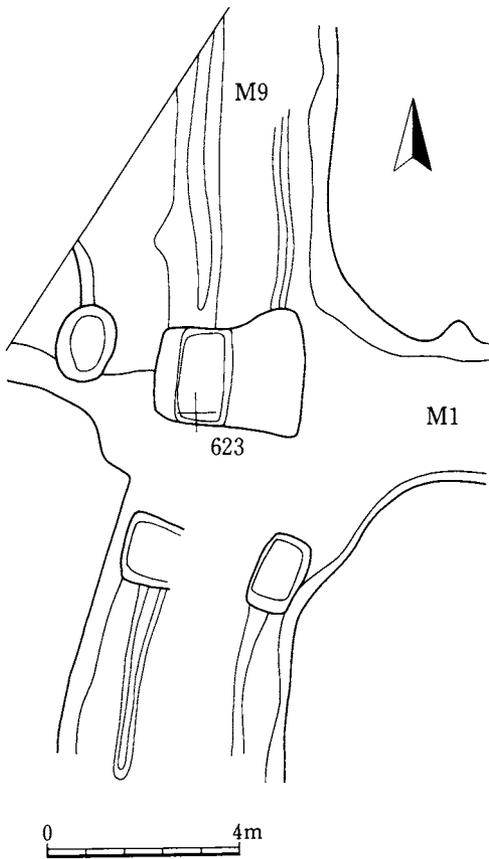
F 3区に所在し、中世土壙群の北端に位置する。北側の掘り込みは本土壙に伴うものではなかろう。長軸0.9m、短軸0.8mを測り、南北にやや長い長方形を呈する。確認面からの掘り込みは0.5mで、壁はほぼ直立する。底面は比較的堅緻で、平坦である。覆土中にロームブロックを多く含むことより、本土壙は埋め戻されたようである。

底面から若干浮いて人骨が検出された。遺存状態はあまりよくない。頭骸骨が北側にあり、足が折り曲げられていることから、623号土壙墓と同様の埋葬状態と考えられる。他の伴出遺物はなかった。

5 0 7号土壙（第85図）

F 5区に所在し、115号住居跡の東壁を切って掘り込まれる。長径0.9m、短径0.75mの規模を測り、平面形は東西に長い楕円形を呈する。確認面からの掘り込みは0.45mで、壁は斜位に立ち上がる。底面はほぼ平坦で、東側にピットが2ヵ所掘り込まれる。いずれも15cm程の深さである。覆土下層状況より、底面に暗褐色土を敷き、その上に馬頭を置いて埋め戻した可能性が強い。

東側から馬歯が検出されている。遺存状況は不良であるが、下顎の歯が11本(長さ5cm)、上顎の歯が6本(長さ3.5cm)確認された。他の伴出遺物はなかった。



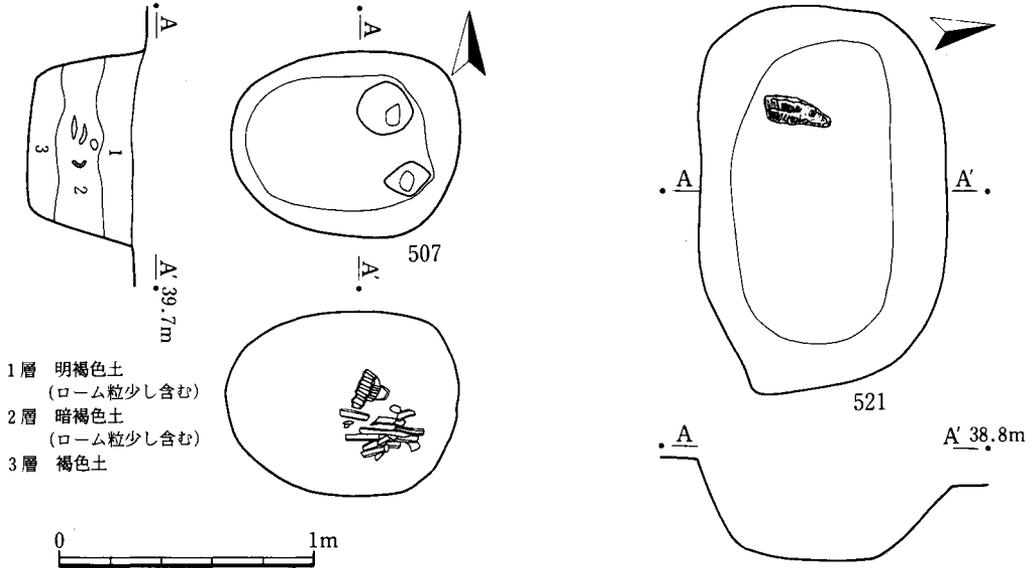
- 1層 褐色土(ロームブロック多く含む)
- 2層 明褐色土(ロームブロック主体)
- 3層 暗褐色土(ロームブロック含む)

第84図 594・623号土墳墓

5 2 1号土壌 (第85図、図版33)

F 5 区、1号溝の南側に所在する。長軸1.55m、短軸1.0mの東西に長い隅丸長方形を呈する。確認面からの深さは0.4mを測り、壁は斜位に立ち上がる。底面は比較的堅緻であるが中央に向けて徐々に深くなる。覆土はローム粒を多く含み、埋め戻された可能性が強い。

馬頭が西側から検出されている。底面から10cm程浮いた状態であり、507号土壌と同様の状況である。



第85図 馬歯出土土壌

2. 粘土敷土壌

5 0 9号土壌 (第86図、図版32)

F 5 区、515号地下式土壌の南東2mに所在する。平面形は南北に長い長方形を呈し、長軸1.9m、短軸1.5mを測る。確認面からの深さは0.45mで、壁は斜位に立ち上がる。底面は堅緻である。覆土中層以下には厚く白色粘土が充填されている。

遺物の出土はなかった。

6 3 6号土壌 (第86図、図版36)

F 3 区に所在し、中世土壌群の北東端に位置する。南東コーナーで637号土壌を一部切って構築される。平面形は南北に長い長方形を呈し、長軸1.4m、短軸1.1mを測る。確認面からの深さは0.4mで、壁は斜位に立ち上がる。底面は平坦で堅緻である。底面から壁にかけて青味がかった良質な白色粘土が貼り付けられている。底面は厚さ4cmと薄く、壁側は厚くなり、14cm程を測る。粘土以外の覆土は、ロームブロックを若干含むしまりのよい暗褐色土で形成される。

遺物の出土はなかった。

637号土壙（第86図、図版36）

636号土壙と一部重複し、南壁と東壁が土壙により若干切られる。平面形は南北に長い長方形を呈し、推定長軸1.7m、短軸1.2mを測る。確認面からの深さは0.4mで、壁は直立気味に丁寧に掘り込まれる。底面は堅緻でやや凹凸が見られる。底面から壁にかけてロームブロックを含むが良質な白色粘土を貼り付けている。厚さは15cm程度でほぼ一定である。粘土以外の覆土は硬質な褐色土で、ロームブロックを多く含んでいる。

遺物の出土はなかった。

801号土壙（第86図、図版37）

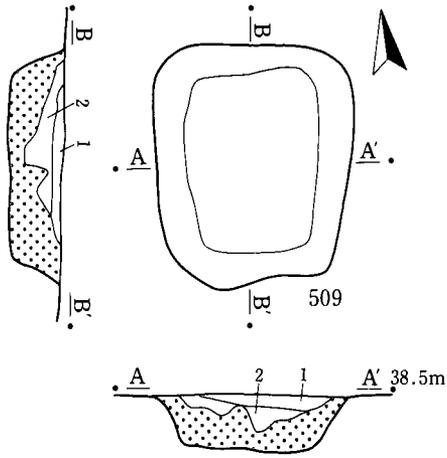
遺跡東側の取り付け道路内で検出された遺構で、075号住居跡の南側に近接する。平面形は南北に長い長方形を呈するが、西辺に比して東辺がやや長くなっている。長軸1.7m、短軸1.4mを測り、確認面からの深さは0.3mである。壁はやや斜位に立ち上がる。底面は堅緻であるが、北側に向けて若干低くなっている。貼り付けられた粘土は良質な白色を呈し、底面で15cmの深さを測る。上層の覆土はしまりのよい暗褐色土が主体で、白色粘土を多く含んでいる。

遺物の出土はなかった。

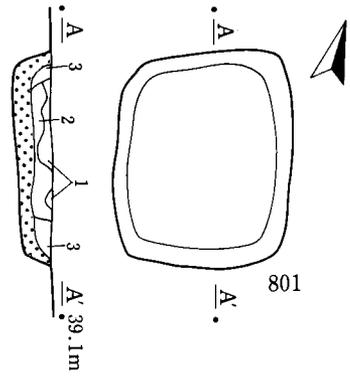
P S 3土壙群（第86図、図版39）

本土壙群からは3基の粘土敷土壙が検出されているが、調査時では枝番号を付していないため、ここでは説明上図の上からa・b・cとしておく。これらは主軸方位を同じくする。a号土壙は本土壙群の北端、583号地下式土壙の南東に隣接する。平面形は長方形を呈し、長軸1.1m、短軸0.9mを測る。確認面からの掘り込みは17cmと浅く、壁は斜位に立ち上がる。底面は楕円形プランを呈する。白色粘土は土壙内全体に充填されているが、他の例からすると、本土壙は底面近くのみを検出と思われ、本来は内面に貼り付けられていたようである。b号土壙はG4区、本土壙群の東端に位置する。平面形は隅丸の長方形を呈し、長軸1.2m、短軸1.0mを測る。確認面からの深さは0.2mで、壁は斜位に立ち上がる。底面は平坦で、白色粘土が厚さ7cmで内面に貼り付けられる。底面中央の粘土上面に比較的大きな雲母片岩が検出された。本土壙に伴う確証はない。c号土壙はa号土壙の南3.8mに所在する。平面形は長方形を呈し、長軸1.2m、短軸0.9mを測る。確認面からの深さは0.35cmで、壁・底面とも堅緻である。内面には厚さ10cm程で白色粘土が貼り付けられている。

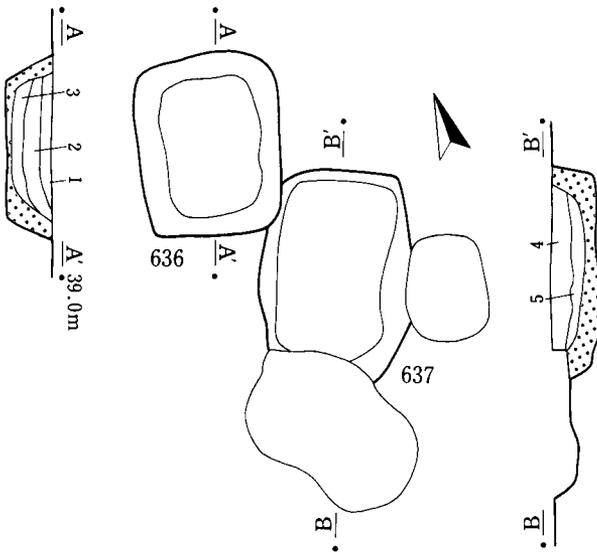
以上の3基は規模・主軸方位ともほぼ同様であり、时期的にほとんど差は認められないと思われる。ただ、伴出遺物がないため時期は不明といわざるをえない。



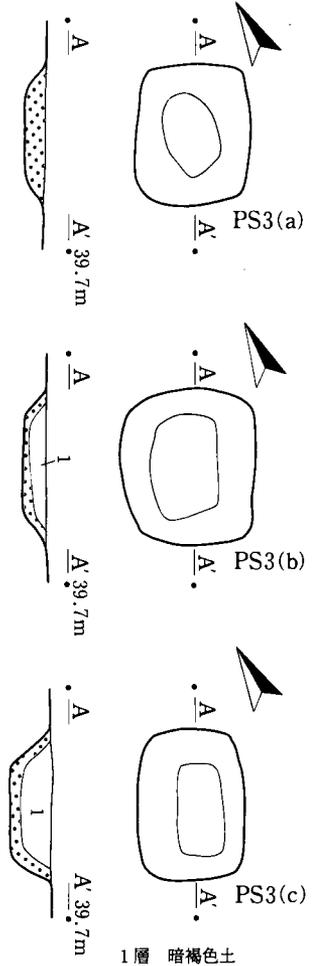
- 1層 褐色土
- 2層 明褐色土(ロームブロック少し含む)



- 1層 暗褐色土
- 2層 粘土(暗褐色土含む)
- 3層 粘土(暗褐色土多く含む)



- 1層 暗褐色土(ロームブロック少し含む)
- 2層 褐色土(ローム粒・焼土粒・炭化粒少し含む)
- 3層 暗茶褐色土(ロームブロック・焼土粒少し含む)
- 4層 褐色土(粘土ブロック含む)
- 5層 茶褐色土(ロームブロック多く含む)



- 1層 暗褐色土

第86図 粘土敷土壌

3. 地下式土壙

503号土壙（第87図）

F5区に所在し、2号溝が屈曲する位置に構築される。全体に楕円形状を呈するが、天井部は崩れているようである。確認された上場の規模は3.6×2.6mを測り、主室部の深さは2.7mである。主軸方位はN-23°-Eを指す。入口は竪壙で、確認面からの深さは2.2mである。底面は径1.1mの略円形で、ほぼ平坦のまま主室部に移行する。主室部は1.7×1.2mの北辺が短い台形状を呈する。底面周囲には粘土が遺存している。覆土中には天井部及び壁の崩落と思われるロームブロックが多く含まれている。

出土した遺物は小片が多く、しかも覆土中からほとんどである。

515号土壙（第87図、図版33）

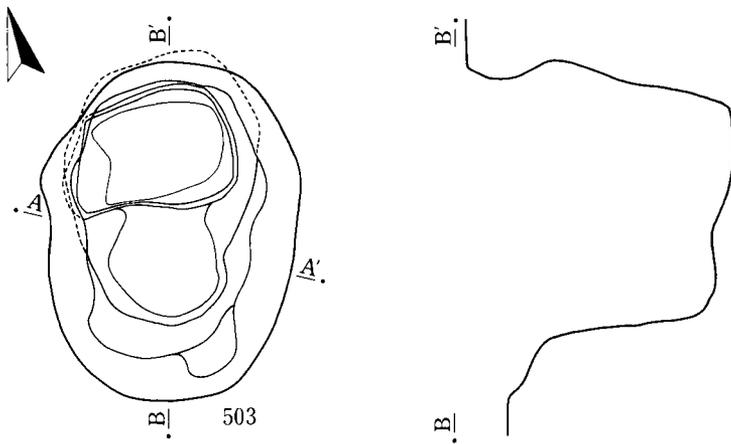
F5区、503号土壙の西8mに所在する。2号溝の端部にあたり、あたかも503号土壙と溝によって繋がっているかのようである。全体に不整形となっているが、天井部及び壁が崩落していると思われ、本来は底面と相似形を呈していたのであろう。確認された上場の規模は3.3×3.1mを測り、主軸方位はN-7°-Eを指す。入口は竪壙で、確認面からの深さは1.8mである。底面は楕円形プランを呈し、南東側に小横穴がみられる。主室部は竪壙から30cm程深く掘り込まれ、全体の形状は不整な半円形である。確認面からの深さは2.4mを測る。北側の壁中位にも奥に延びる小横穴が穿たれている。覆土中にロームブロックを多く含むが、特に主室部側の中層以上に集中していることから、天井部の崩落が予想できよう。

遺物の出土は比較的多いが、覆土中の破片がほとんどである。

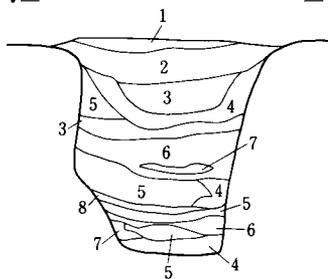
523号土壙（第88図、図版33）

D8区に所在する。503・515号土壙同様9号溝から派生する小溝の端部に位置する。確認面の平面形はきわめて不整形である。主軸方位は、西側を入口と考えるとN-93°-Wとなる。入口は竪壙であるが、底面から30cm程上に小さなテラスが形成されている。階段ではなかろう。底面は横長の長方形を呈し、主室部に向けて一段低い掘り込みが設けられる。底面の深さは確認面から0.9mを測る。主室部は3.0×2.7mの横長の楕円形プランである。主室部の入口を挟んだ両側に半円状の掘り込みが見られる。南側は主室部底面より20cm低く、北側は33cm高いレベルである。覆土の詳細な観察はできなかったが、主室部側にロームブロックの落ち込んだ層が確認された。

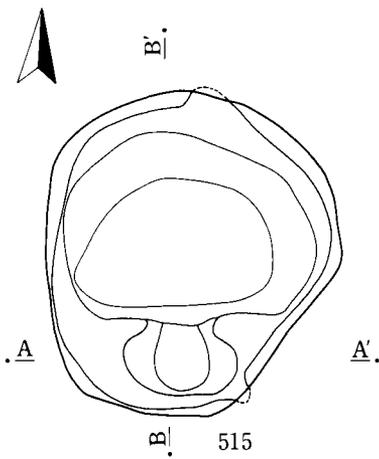
遺物の出土はほとんどなかった。



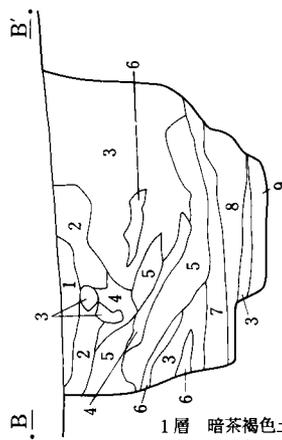
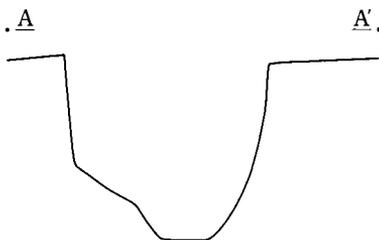
.A A' 38.9m



- 1層 茶褐色土
- 2層 暗褐色土
- 3層 黄褐色土(ロームブロック主体)
- 4層 暗茶褐色土(ロームブロック少し含む)
- 5層 黄色土(ロームブロック土)
- 6層 茶褐色土(粘土・ローム粒・焼土粒含む)
- 7層 粘土ブロック
- 8層 暗褐色土(炭化粒含む)



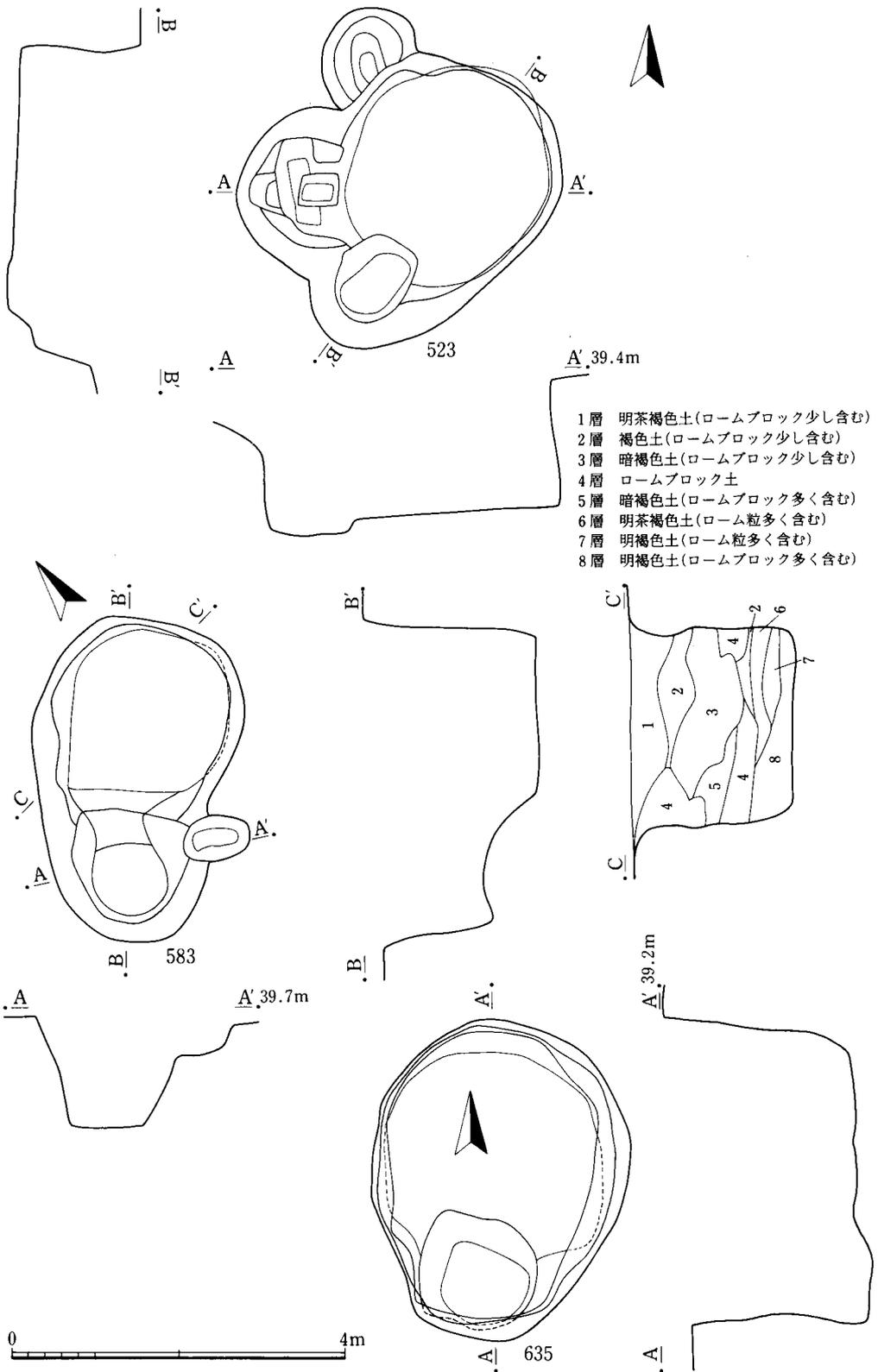
.A A' 39.2m



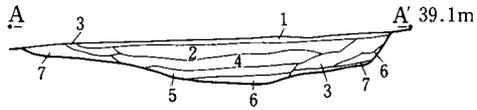
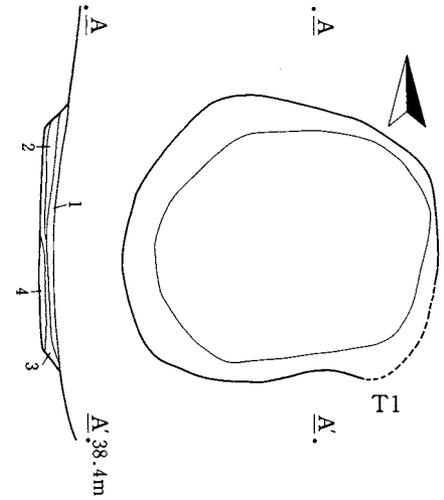
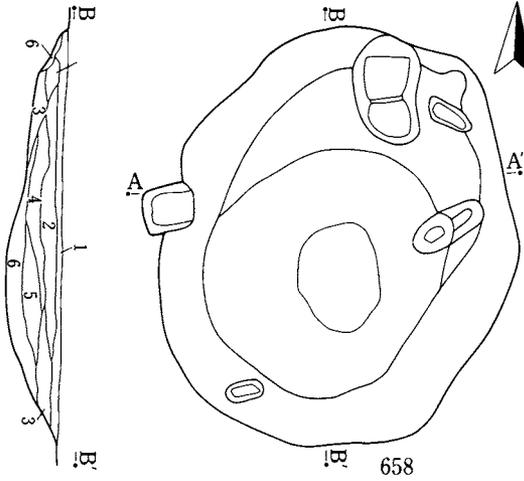
- 1層 暗茶褐色土(ローム粒多く含む)
- 2層 黄褐色土(ローム粒・ロームブロック多く含む)
- 3層 黄色土(ロームブロック土)
- 4層 茶褐色土(ローム粒少し含む)
- 5層 茶褐色土(ローム粒多く含む)
- 6層 暗褐色土(炭化粒多く含む)
- 7層 暗茶褐色土(炭化粒・焼土粒多く含む)
- 8層 茶褐色土(ロームブロック含む)
- 9層 黒色土(焼土粒・炭化粒多く含む)



第87図 地下式土壙(1)

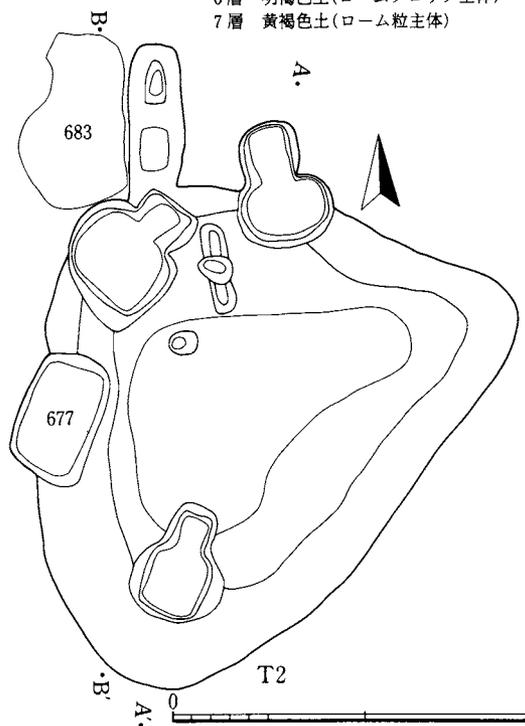
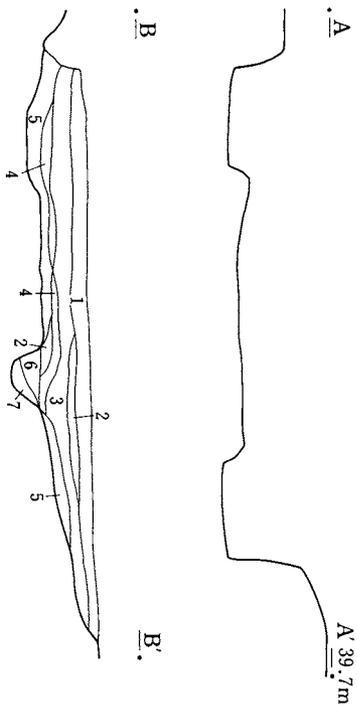


第88図 地下式土壌(2)



- 658
- 1層 褐色土(炭化粒含む)
 - 2層 暗茶褐色土(ロームブロック含む)
 - 3層 茶褐色土(ローム粒若干含む)
 - 4層 褐色土(ローム粒多く含む)
 - 5層 明褐色土(ローム粒多く含む)
 - 6層 明茶褐色土(ローム粒・ロームブロック多く含む)
 - 7層 黄褐色土(ローム粒主体)

- T 1
- 1層 暗褐色土(ローム粒・焼土粒若干含む)
 - 2層 茶褐色土(粘土粒含む)
 - 3層 黄褐色土(粒土ブロック多く含む)
 - 4層 褐色土(炭化粒・粘土粒多く含む)



- T 2
- 1層 暗褐色土
 - 2層 褐色土
 - 3層 茶褐色土(ローム粒・ロームブロック多く含む)
 - 4層 暗茶褐色土(ロームブロック多く含む)
 - 5層 明褐色土(ロームブロック多く含む)
 - 6層 明褐色土(ロームブロック主体)
 - 7層 黄褐色土(ローム粒主体)

第89図 大形土塙

5 8 3号土壙（第88図、図版35）

F 3区、中世土壙群の北端に所在する。確認面の平面形は瓢箪形を呈し、規模は3.9×2.5mを測る。入口と主室の主軸が若干ずれているが、主軸方位はN-47°-Eとなろう。入口は竪壙で、確認面からの深さ1.3mである。底面は略円形を呈し、主室に向けて低くなっていく。主室とのレベル差は0.6mを測る。入口の南東側に、底面から0.8m上で小横穴が掘り込まれている。主室底面はほぼ平坦で、1辺1.9mの方形状を呈している。覆土中のロームブロックは比較的底面に近い位置に集中するため、構築後早い段階で崩落した可能性が高い。

遺物の出土はほとんどなかった。

6 3 5号土壙（第88図）

E 5区、515号土壙の西8mに所在する。503号土壙を含めた3基の地下式土壙はE 5区南側に集中する中世土壙群の北端を区切るかのように主軸方位を同一にしながほぼ等間隔で東西に構築されている。注目される分布状況である。平面形は南側に突出する帆立貝状を呈する。入口は竪壙で、1.4×1.2mの横長長方形を呈する。主軸方位はN-5°-Eを指す。確認面からの深さ2.3mを測る。主室部は入口の一部を取り込んだ形で形成される。入口の底面より25cm高いレベルに底面が位置する。底面の平面形は北側が円形で、入口側は肩が張っている。覆土はロームブロックを多く含んでおり、天井部の崩落土と思われる。

遺物は比較的多く出土しているが、やはり覆土中からの破片が主体である。

4. 大形土壙

6 5 8号土壙（第89図）

C 7・D 7区にまたがって所在する。周囲の遺構の密度は薄い。平面形は不整な楕円形を呈し、長軸8.7m、短軸7.6mを測る。確認面は南側に傾斜し、北側から壙底面までの深さは1.1mを測る。掘り方断面はU字形となる。壁中に5ヵ所のピットが掘り込まれる。北側のピットは規模が比較的大きく、長軸2.3m、短軸1.4mの楕円形を呈する。深さは0.4~0.5mである。覆土は全体に軟質で、ローム粒・ロームブロックをかなり多く含んでいる。

遺物は中世陶磁器類を主体に多く検出されたが、本土壙に伴うものとは断定できない。ただ、廃絶段階を示す有効な資料ではある。

T 1号土壙（第89図）

F 5区・F 6区にまたがり、F 5区中世土壙群の東端、3（B）号溝の北側に位置する。平面形は不整な楕円形を呈し、長軸6.6m、短軸5.9mを測る。確認面からの深さは0.5mと規模に比して浅い。壁は斜位に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。壁・底面ともそれほど堅緻では

ない。覆土中層以下には白色粘土ブロックが多く含まれている。

遺物の出土は少ない。

T 2号土壙 (第89図)

C 8区に所在し、付近の遺構の密度は薄い。平面形は不整形で、最大長10.6mを測る。確認面からの深さは1.8mである。壁中にはピット以外に4基の土壙が認められる。北側の2基と南側の1基は同様の形態を示す。地下式土壙状の掘り方で、北側に入口にあたる長方形の掘り込み、南側に主室にあたる正方形の掘り込みが設けられる。長軸の規模は2.4~2.8mを測る。この3基の土壙は後世の所産とも考えられようが、覆土中からの掘り込み面が検出されなかったため、本土壙に伴うものとして捉えたい。西側で重複する677号土壙は、2.7×1.7mの長方形プランを呈し、確認面から1.6の深さを測る。本土壙より新しい時期の掘り込みであろう。

中世を主体とした土器片が出土しているが、ほとんど小片である。

5. その他の土壙

5 2 0号土壙 (第90図)

F 6区、3(B)号溝の南側に所在する。確認面はやや北側に傾斜する。重複する遺構はない。平面形は方形を呈し、長軸2.3m、短軸1.9mを測る。主軸方位はN-0°-Eを指す。主屋部は1辺1.9mの正方形で、確認面からの深さは、傾斜地にあるため北側で0.5m、南側で0.7mとなる。壁はやや斜位に立ち上がる。底面はハードローム中に形成され、堅緻である。ほぼ平坦であるが、中央部が若干低くなっている。全周する周溝が巡っており、幅0.2~0.3cm、深さ10cm程を測る。柱穴は4隅の周溝内に配置される。長径20~25cmの楕円形プランで、深さは、南西側が50cmで、他は30cm程度である。南壁中央は壁から20cm程外側に突出し、底面から斜位に立ち上がっている。入口となるのであろうか。南側の張り出し部両端に径15cm、深さ25cmのピットが設けられる。入口施設に係る柱穴と思われる。この部分はきわめて不整形であるが、柱材の抜き取りのために大きく掘り広げられた結果であろう。覆土中にはローム粒及びロームブロックが多く含まれており、意図的に埋め戻された可能性が強い。

遺物の出土はなかった。

P S 3 (B)・(C)号土壙 (第90図、図版39)

F 3区、中世土壙群の西端に所在し、壁を接して構築される。(B)号土壙は長軸3.1m、短軸2.6mを測り、東辺がやや広がる不整形長方形を呈する。確認面からの掘り込みは0.5mである。底面は平坦で、3本のピットが確認された。径25cm程で、深さは20~25cmを測る。東側底面上に灰の遺存がみられる。完形土器(57)が北東コーナーの底面から37cm上で横位になって出土

した。(C)号土壌は長軸2.4m、短軸1.9mを測る長方形を呈する。確認面からの掘り込みは0.8mである。底面は平坦で、西側にピットが掘り込まれる。同一掘り方内に2本のピットが存在し、いずれも径20cm、深さ45cmの円形プランを呈する。東側のピットは西壁に向けて傾斜している。南端底面上に灰の遺物が確認された。両土壌とも覆土中にロームブロックが多く含まれており、埋め戻されたようである。

P S 1 (29) 号土壌 (第91図)

E 5 区に所在する。中世土壌群の西端に位置し、7号溝を切って構築される。長軸2.1m、短軸1.5mを測り、長方形プランを呈する。確認面からの掘り込みは0.4mである。底面は平坦で、北側にピットが1本確認された。長径0.4mの楕円形状で、深さは0.3mを測る。

遺物の出土はほとんどなかった。

P S 3 (d) 号土壌 (第91図)

G 3 区、中世土壌群の東端に位置する。1辺2.2mの不整な正方形を呈し、確認面より0.3mの深さを測る。底面は平坦で、南側に2本のピットが掘り込まれる。本土壌に伴うものかどうか明確ではない。

遺物はほとんど確認されなかったが、覆土上層から瀬戸の小皿片が出土している。

P S 3 (e) 号土壌 (第91図)

F 3 区、中世土壌群の西側に位置し、(c)号土壌の西に近接する。長軸2.2m、短軸1.7mを測り、長方形プランを呈する。確認面からの掘り込みは0.7mである。底面は平坦で、壁・底面ともきわめて堅緻である。

遺物の出土はなかった。

5 1 3 号土壌 (第91図)

G 3・G 4 区にまたがって所在し、107号住居跡の南東側に隣接する。長軸2.3m、短軸2.1mを測り、長方形プランを呈する。確認面からの掘り込みは0.4mである。底面にはやや凹凸が見られる。覆土中にロームブロックを多く含んでおり、全体に埋め戻したようである。

遺物の出土は少ない。

6 6 5 号土壌 (第91図)

C 7 区南東側に所在する。長軸1.3m、短軸1.1mを測り、隅丸長方形プランを呈する。確認面からの掘り込みは0.3mである。壁は斜位に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

遺物の出土は比較的多いが、覆土中の小片が主体である。土師質の小皿及び中世陶器片が見られるが図示できるほどではない。

699号土壙（第91図）

C8区、大形土壙（T2）の北西2mに所在する。北西コーナーで溝と若干重複する。長軸2.2m、短軸1.7mを測り、長方形プランを呈する。確認面からの掘り込みは0.3mである。壁は斜位に立ち上がり、良好な状態である。底面はほぼ平坦である。

505号土壙（第92図、図版32）

G3区、中世土壙群の北東端付近に所在する。径2.5mの略円形を呈し、確認面より0.2mの深さを測る。壁は斜位に立ち上がり、底面はやや凹凸が認められる。覆土は暗褐色土1層であるが、ロームブロックが多く含まれ埋め戻しの可能性が高い。

土師器小皿が出土している。5は北壁際、6は床面中央上から検出された。

679号土壙（第92図）

C7区南端に所在し、西側半分程が調査区域外となる。最大径4.4mの円形状を呈し、確認面より0.2mの深さを測る。規模に比して掘り込みが浅い。壁と底面の明瞭な区別は認められず、全体にだらだらとした掘り方である。

覆土中から土師器小皿・中世陶磁器が出土している。

683号土壙（第92図、図版37）

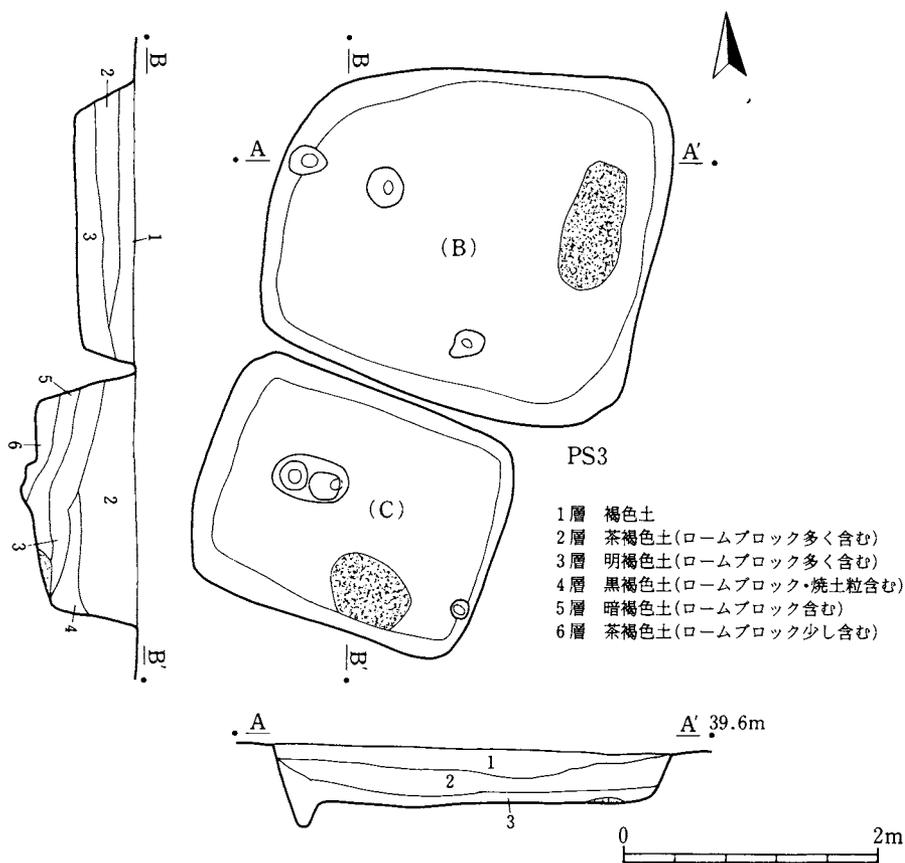
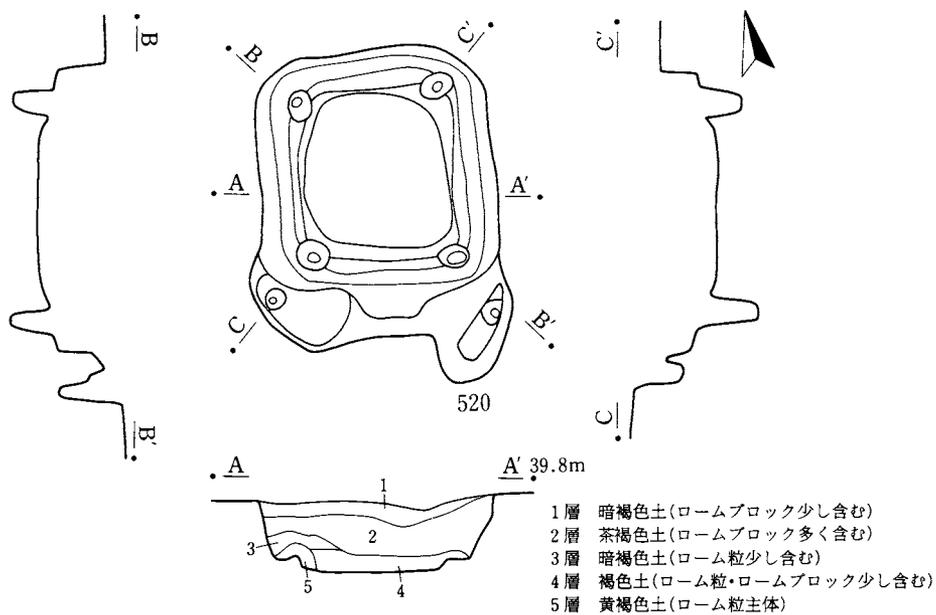
C8区に所在し、大形土壙（T2）の北西側に接する。31・35号溝を切って構築される。長軸4.1m、短軸2.4mを測り、地下式土壙的な形態を示す。北側の掘り方は方形を呈し、1辺1.8m、確認面からの深さ0.4mを測る。底面は南に向かい低くなる。南側は楕円形プランで、北側底面より20cm程深い。覆土はかなり軟質で、大きなロームブロックを多く含んでいる。覆土上層から蜆の散布が部分的に認められた。

覆土中より、土師器小皿・内耳鍋・中世陶磁器・五輪塔等が比較的多く出土した。

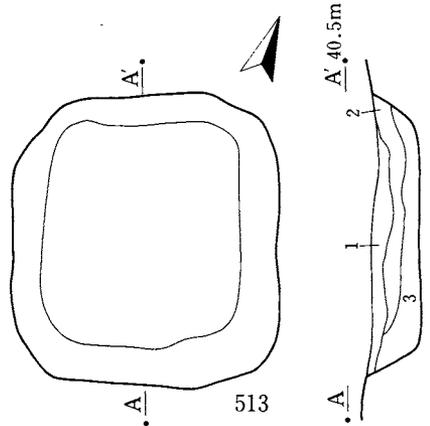
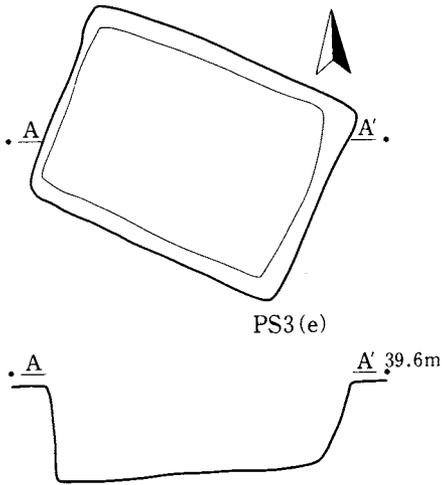
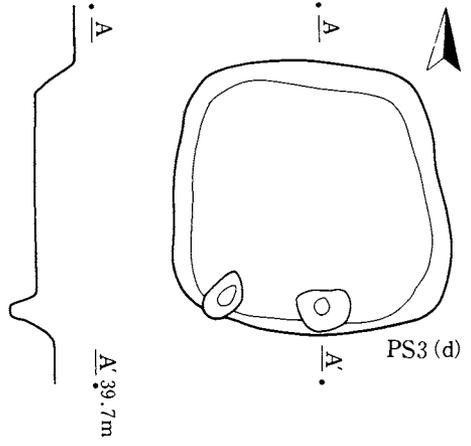
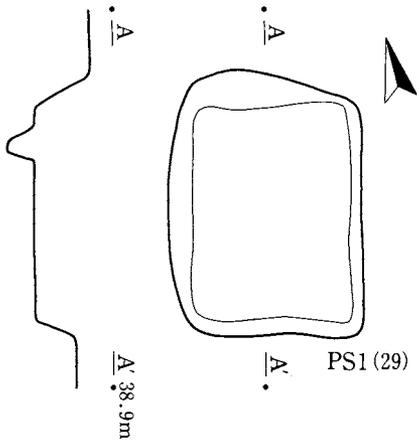
702号土壙（第92図）

C8区、683号土壙の北2mに位置する。長軸4.9m、短軸2.6mを測る。底面は2段に掘り込まれ、北側が20cm程深い。南側の確認面からの深さは1.3mである。683号土壙同様地下式土壙的な形態を示す。

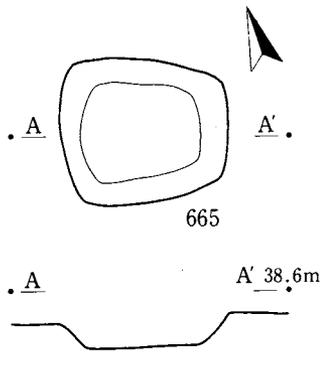
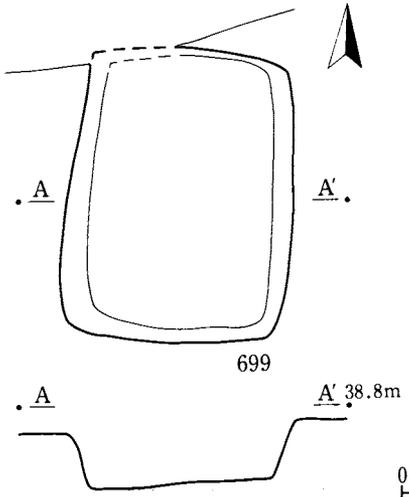
遺物の出土は少ないが、覆土中より中世陶磁器片が検出されている。



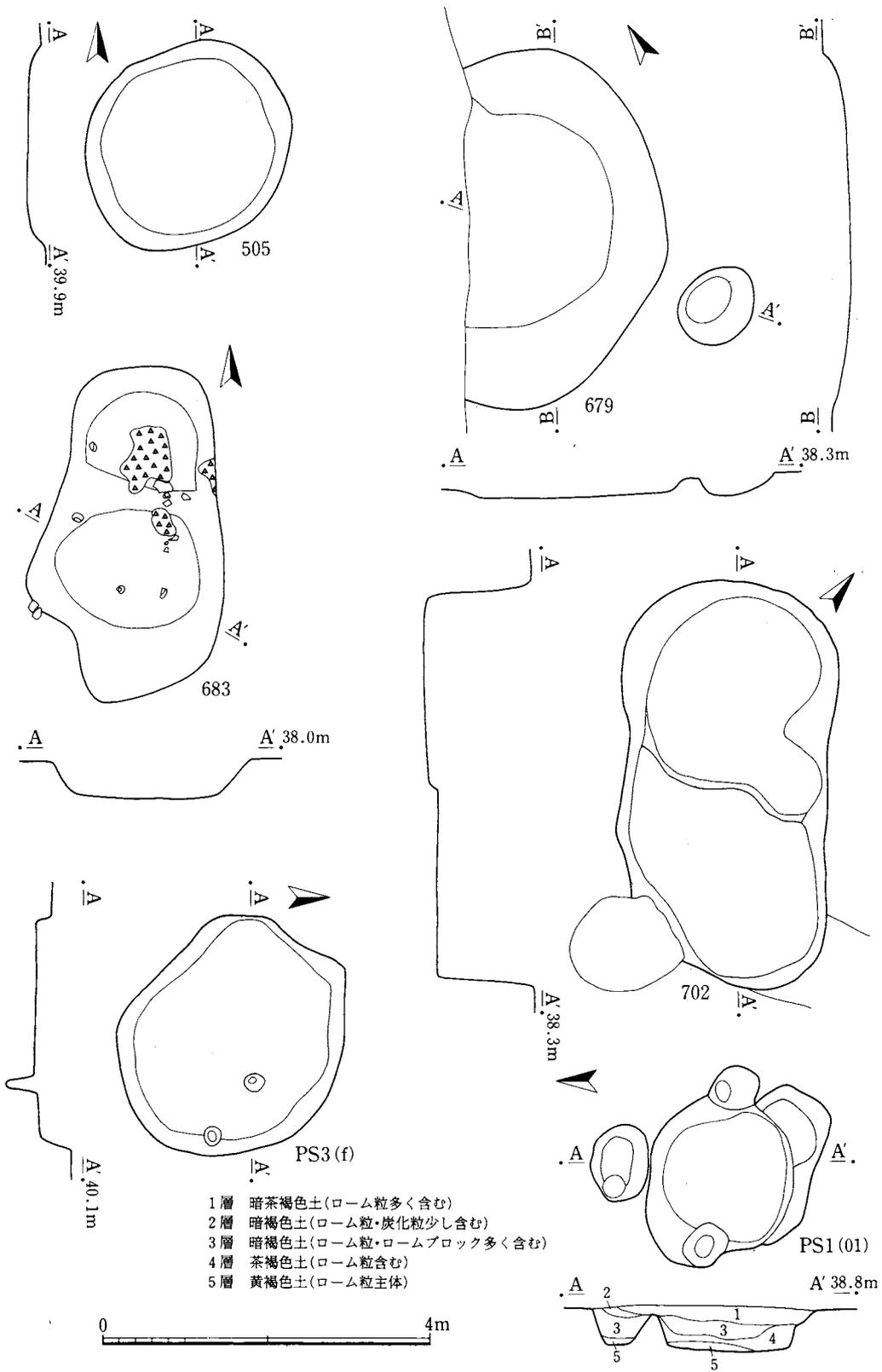
第90図 土壌(1)



- 1層 明褐色土(ロームブロック多く含む)
- 2層 褐色土
- 3層 黄褐色土(ローム粒多く含む)



第91図 土壌(2)



第92図 土壌(3)

PS3 (f) 号土壙 (第92図)

G3区、中世土壙群の北東端に位置する。径2.9mの不整円形を呈し、確認面より0.4mの深さを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。底面南側にピットが2本掘り込まれる。径20cmの円形プランで、深さは北側が37cm、南側が15cmである。

遺物の出土はなかった。

PS1 (01) 号土壙 (第92図)

E5区、中世土壙群の北西端に所在する。径1.0mの略円形を呈し、北東側に突出部を有する。主体部は確認面から0.4mの深さを測り、底面はほぼ平坦である。南壁と北壁に径30cm程、底面からの深さ15cmのピットが掘り込まれる。突出部は幅0.5mで、主体部底面より7cm高い。覆土中にローム粒及びロームブロックを多く含む。

遺物の出土はなかった。

土壙出土土器

503号土壙 (第93図1～3)

1は土師器小皿で、推定口径9.0cm、器高2.6cmを測る。体部は直線的に開き、内外面とも丁寧な横ナデ調整が施される。底部は若干突出し、回転糸切り未調整である。胎土は緻密で、やや砂質を帯びる。二次的に火を受け赤変が認められる。2は小形器台となろうか。口径6.6cm、器高4.4cmを測る。脚端部に欠損が見られる。器形から、上下逆となる可能性もある。体部は部厚く、口唇部が丸く収められる。内外面とも丁寧な横ナデ調整である。脚部は薄くなり、やや内湾する。中央には径0.7cm程の孔が焼成前に穿たれている。上から下へ穿孔しているようで、下端に粘土のみだしが観察される。胎土は緻密で小砂粒の混入も少なく、黄褐色の色調を呈する。火を受けた痕跡はない。3は内耳鍋の口縁部片である。口唇部は平坦で、現存する範囲内では2個1対の内耳が貼り付けられている。全体にナデ調整が施され、内面下半には小口状の痕跡が見られる。胎土は緻密で、雲母粒をかなり多く含んでいる。外面全体に煤の付着が著しい。

505号土壙 (第93図4～6)

4は小皿の小片である。推定口径8.9cm、器高1.8cmを測る。器肉が部厚く、全体にナデ調整される。底部は回転糸切り未調整である。胎土はやや砂質を帯び、黄褐色の色調を呈する。5は土師器の高台付小皿である。口径9.3cm、器高3.8cmを測る。やはり全体に部厚く造られ、体部は4の小皿と相似形であるが、ロクロ目がやや強くなる。高台は直線的に開き、端部は丸く収められる。6は高台部のみの遺存である。体部内面は丁寧なミガキが加えられ、黒色処理

が施される。高台部は短く、端部は平坦となる。内面には粗い「十」の記号が見られる。焼成前で、内側に残る痕跡から、篠状工具によって行なわれたことが想定される。胎土は緻密で小砂粒の混入も少ない。色調は黄褐色を呈する。

5 1 3 号土壙 (第93図7)

7は土師器杯の小片で、底径7.0cmを測る。体部内外面とも丁寧な横ナデで、ロクロ目が強く残る。底部は回転糸切り未調整である。胎土は緻密で小砂粒を比較的多く含み、燈褐色の色調を呈する。

5 1 5 号土壙 (第93図8)

8は推定口径15.8cmを測る常滑の甕の口縁部片である。口縁部は外側に大きく開き、垂直につまみ上げられている。胴部は口縁下から大きく開いており、頸部はきわめて短くなる。釉は観察されない。

6 3 5 号土壙 (第93図9～12)

9は瀬戸灰釉三足盤の体部下半片である。口径30cmを超える大形品となろう。体部外面は上半横ナデでロクロ目が顕著に残り、下半には回転ヘラケズリが加えられる。調整の変換点には1条の浅い沈線が巡り、この部分まで緑色の灰釉がかけられている。内面は丁寧な横ナデで、腰の部分を除き灰釉が認められるが、器面が露出している部分は何らかの使用で磨られている。底部は回転ヘラケズリ調整で、W字形の足が貼り付けられる。胎土は白色軟質で、やや粗い。内面に被熱の痕跡が見られる。14世紀後半から15世紀前半の所産であろう。10は口径12.3cm、器高4.1cmを測る土師器杯である。体部外面には右回転の横ナデ痕が強く残り、底部は回転糸切り未調整となる。胎土は緻密で長石粒を多く含み、燈褐色の色調を呈する。11は内耳鍋で底部を欠損する。推定口径38cmを測る。破片中では内耳は確認されないが、1対付けられていたと思われる。粘土紐の巻き上げで、接合部を指で押さえながらナデつけたものである。胎土は粗く、外面全体に煤の付着が著しい。12は胴部外面ヘラケズリ調整の甕で、被熱による器面の劣化が激しい。

6 5 8 号土壙 (第93図13～18)

13は外耳土釜の口縁部片である。口縁部はやや内傾し、平坦な口唇部が中央で若干凹む。火受け部は幅9.5cmで上方に延びる。耳は接合面から欠損している。内面は指ナデ、外面はヘラ状工具によるナデが加えられる。胎土はやや粗く、火受け部外面に煤の付着が見られる。14は灰釉鉢の底部片であろう。産地は不明である。体部外面は回転ヘラケズリ調整され、特に下端は

丁寧面に面取りされる。底部は回転糸切り未調整で高台はナデが施される。緑色の灰釉が内面全体にかけられる。胎土は灰白色を呈する。15は瀬戸灰釉瓶子の胴部片である。図上方に巴文、下に細い櫛描文が配される。外面全体に黄緑色の灰釉がかかり、内面には煤の付着が見られる。煤は破損面にも及んでいる。16は常滑の鉢の小片である。片口となる可能性もある。推定口径24.8cm、器高9.2cmを測る。外面は指によるオサエが強く、粘土の割れが部分的に観察される。内面は磨られており、褐色の釉が口唇部から外面上端に施される。17はN字状口縁を呈する常滑甕の口縁部片である。内外面に褐色の釉が認められる。18は常滑鉢の底部片である。14～18は14世紀後半から15世紀前半の所産と思われる。

663号土壙 (第93図19)

19は緑釉瓶の頸部片である。頸部下端に1条の低い突帯が巡る。胎土は須恵器的で白色粒子を多く含む。色調は暗灰色を呈する。濃緑色の釉が内外面に施されているが火を受けたためかやや変質している。

665号土壙 (第93図20)

20は底部回転糸切り未調整の土師器小皿である。内外面とも右回転の横ナデ調整で、ロクロ目が強く残る。胎土は緻密で長石・石英粒を含み、燈褐色の色調を呈する。

677号土壙 (第93図21～23)

21は緑釉の高台付椀で、底部付近が若干遺存しているのみである。体部内面には線状の粗いミガキが加えられる。高台は貼り付けで、断面三角形状を呈する。内面から高台外面まで濃緑色の釉がかけられる。発色が良好で、かなり光沢がある。高台内面から底部外面には褐色の釉が認められる。胎土は軟質で、黄灰色を呈する。産地は不明である。22は瀬戸灰釉平椀の底部片である。高台は削り出しで、内側が若干削り取られる。淡緑色の灰釉が内面全体に比較的厚くかけられている。14世紀後半から15世紀前半の所産である。23は663号土壙19同様頸部下端に突帯が巡る緑釉瓶の頸部片であるが、同一個体ではない。突帯は、19が断面三角形を呈するのに対し、本例は丸味を有する。濃緑色の釉は19より丁寧にかけられ、頸部内面には光沢がある。胎土は同様である。

668号土壙 (第94図24～26)

24は底部回転糸切り未調整の土師器小皿である。被熱による器面の劣化が認められる。25は小形器台であろうか。全体に分厚い造りで、中央に径0.6cmの孔が穿たれる。焼成前の行為である。胎土はやや粗く、小砂粒を多く含む。26は推定口径35.2cmを測る内耳鍋である。小破片の

みの遺存であるが、全体に造りは丁寧である。口唇部はT字状に肥厚し、中央がやや凹む。胎土は緻密で雲母小粒子をかなり多く含む。外面には煤が付着している。

679号土壙（第94図27～31）

27・28は土師器小皿である。27はほぼ完形で、口径8.1cm、器高2.6cmを測る。体部は右回転の丁寧な横ナデ調整で、底部は厚く切り残される。28は全体に薄手となる。いずれも胎土は緻密で、二次的に火を受けている。29・30は器台形土器とも呼称できようか。29は推定口径8.0cm、器高5.6cmを測る。全体にナデ調整されるが、歪みが著しい。粘土紐の接合痕が残っている。胎土はやや砂質を帯び、黄褐色の色調を呈する。30は器形が若干異なるが、胎土・調整等同様である。31は土師器盤の底部片であろうか。円錐状の足が3個貼り付けられる。底部は回転糸切り未調整である。胎土は砂質でやや粗く雲母粒の混入が見られる。黄褐色の色調を呈する。

683号土壙（第94図32～39）

32・33は口径11.5cm前後を測る土師器杯である。全体に分厚い造りで体部が直線的に開く。体部は右回転の丁寧な横ナデ調整で、ロクロ目が強く残る。底部は回転糸切り未調整である。胎土は緻密であるが小砂粒を多く含み、器面がざらつく。色調は黄褐色を呈する。34～36は小皿で、口径7.6～8.6cm、器高2.3～2.5cmを測る。底部は厚く切り残され、体部が直線的に開く。36の口縁部の一部に灯明使用の痕跡が認められる。37は造りが粗い甕で、下半部を欠く。口縁部は肥厚し、頸部には強いナデによる稜が明瞭に残る。胴部外面はヘラケズリが施され、粘土紐のつぎ目が観察される。胎土は粗く、小砂粒を多く含む。38は内耳鍋で、外面全体に煤が付着する。雲母粒の混入が顕著である。39は常滑の甕の口縁部片で、N字状の口縁部形態を呈する。口縁部外面から胴部内面には褐色の釉、胴部外面には黄緑色の釉が見られる。胎土は硬質で長石大粒子を多く含む。黒色の噴き出しが特徴的である。

702号土壙（第94図40・41）

40は瀬戸の天目茶碗で、推定口径11.8cmを測る。やや外反する口縁部を有し、口唇部が尖頭状となる。内外面ともあまり光沢のない褐色の鉄釉がかけられている。底部は不明であるが、低い削り出し高台となろう。41は瀬戸の皿の底部片である。かなり大形と思われる。体部外面下端及び底面は回転ヘラケズリ調整が施される。内面には被熱によって変質した灰釉が遺存している。見込み部には径3.5cmの釉が認められない部分があり、トチンの痕跡とも考えられる。40は15世紀前半、41は14世紀後半から15世紀前半に比定される。

T 1号土壙 (第94図42)

42は底部回転糸切り未調整の土師器小皿である。内外面とも右回転の横ナデ調整で、ロクロ目が強く残る。胎土は緻密で、暗褐色の色調を呈する。

T 2号土壙 (第94図43～47)

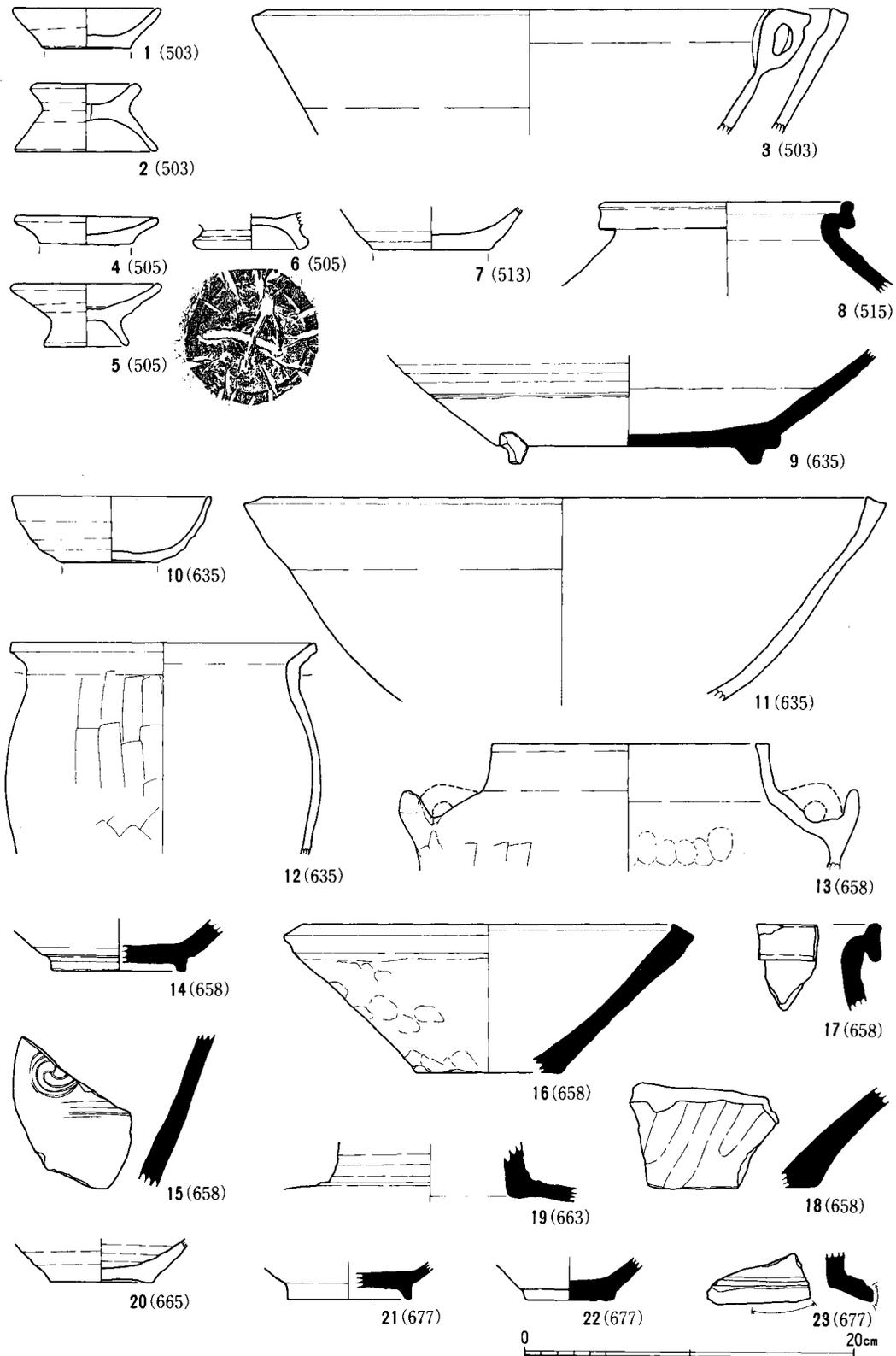
43は瀬戸灰釉平椀で、底径5.0cmを測る。体部外面下端には右方向の回転ヘラケズリ調整が加えられる。底部は回転糸切り未調整である。高台は貼り付けとなり、底面内側が1段凹んでいる。灰釉はやや暗い黄緑色を呈し、比較的厚くかけられる。44・45は瀬戸灰釉皿の底部片である。底部は回転糸切り未調整で、体部下端のヘラケズリは施されない。釉は発色の良好な緑色を呈し、底部外面と体部下端を除きかけられる。見込み部にトチンの痕跡が認められる。46は瀬戸鉄釉天目茶碗の高台部である。削り出し高台と思われ、内側は回転ヘラケズリによりかなり削り込まれる。光沢のある黒褐色の釉が厚く見込みに残る。高台は露胎のままである。47は瀬戸鉄釉花瓶の頸部片である。外面の黒褐色の釉はあまり光沢がなく、部分的に灰がかかっている。43～45は14世紀後半から15世紀前半、46・47は15世紀後半から16世紀前半の所産であろう。

P S 1土壙群 (第94図48～51)

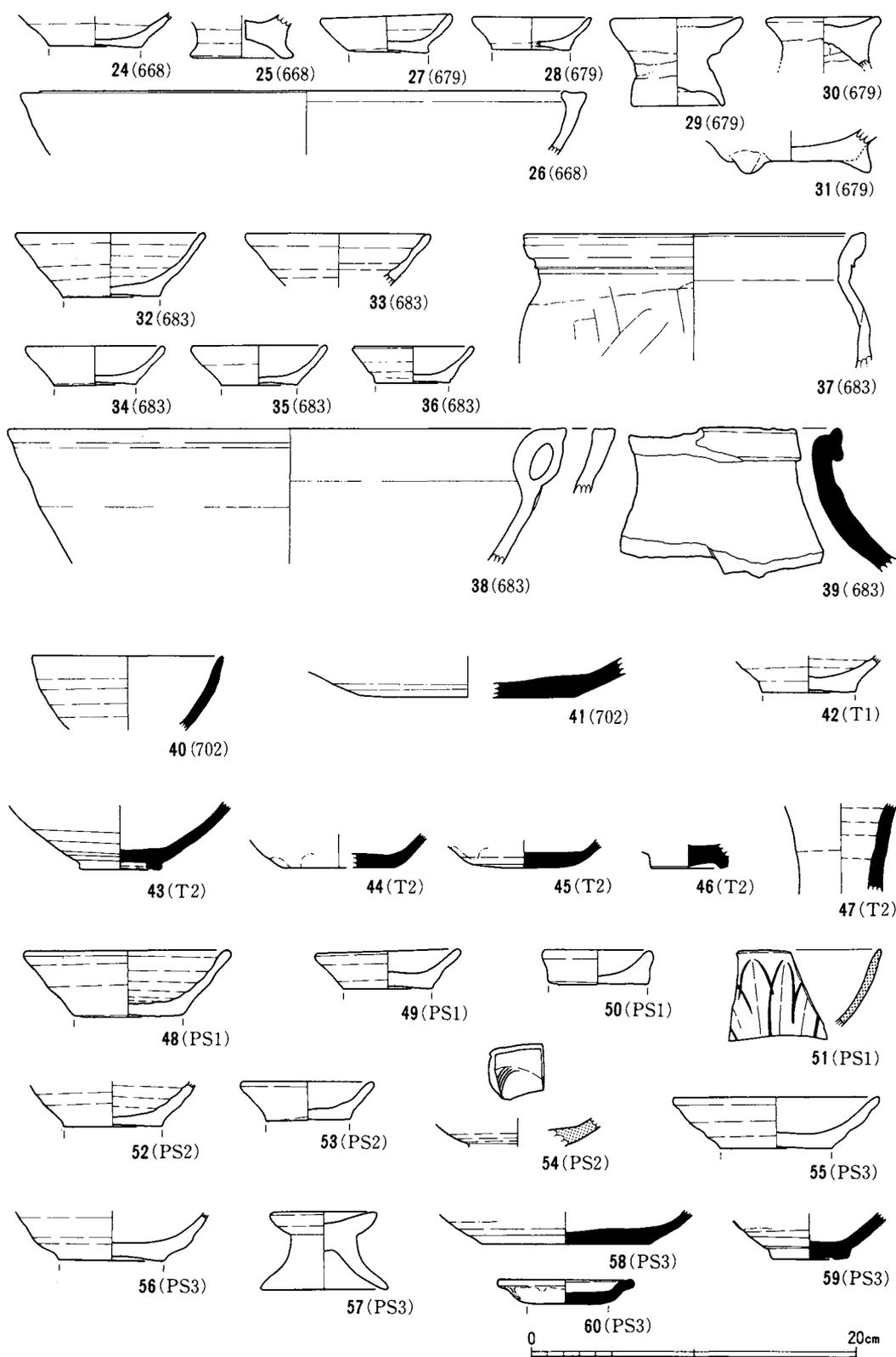
48は推定口径12.6cm、器高4.1cmを測る土師器杯である。体部は直線的に開き、口縁部で若干肥厚する。内外面とも右回転の丁寧な横ナデで、ロクロ目が強く残る。底部は回転糸切り未調整である。胎土はやや砂質を帯び器面がざらつく。色調は赤褐色を呈する。49は48を小形にしたタイプで、胎土・調整等同様である。口径9.0cm、器高2.4cmを測る。50は口径6.8cm、器高2.1cmを測る箱形の皿である。底部回転糸切り未調整で、体部は丁寧に横ナデされる。胎土は緻密であるが、長石・石英小粒子を多く含む。口縁部に煤の付着が認められ、破損部にも及んでいる。51は龍泉窯系の青磁椀である。体部外面に鎬をもつ蓮弁文を有する。青味を帯びた緑色の釉が全面に厚くかかる。発色は良好である。太宰府編年のI-5・b類で、14世紀中葉から後半に比定されよう。

P S 2土壙群 (第94図52～54)

52・53は土師器小皿で、底部回転糸切り未調整である。52の上半部には煤が付着しており、破損面が輪花状を呈する。意識的なものかどうかは不明である。53は口径8.2cm、器高2.5cmを測る。54は龍泉窯系の青磁椀で、内面見込みに櫛描文が認められる。釉はややくすんだ緑色を呈する。



第93図 土壇出土土器(1)



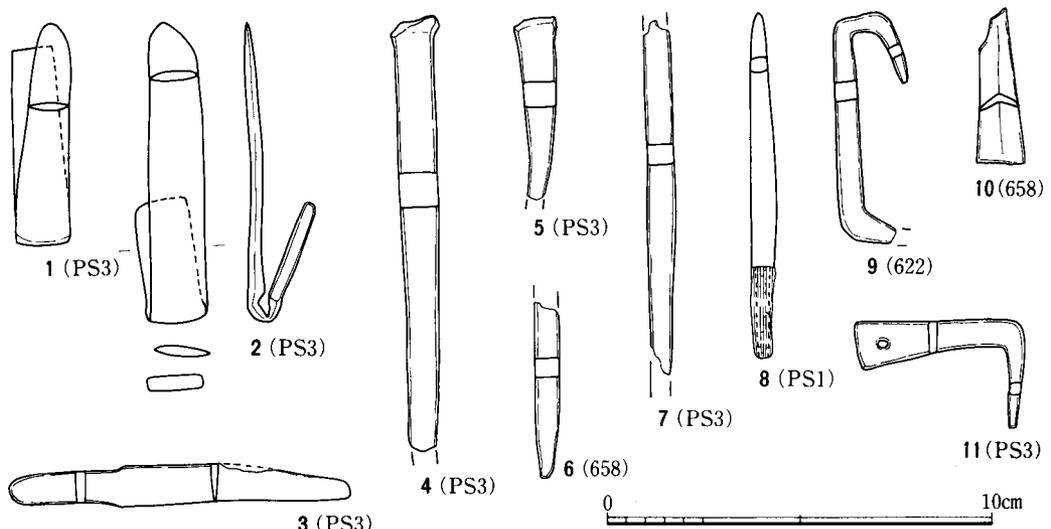
第94図 土壙出土土器(2)

PS3 土壙群 (第94図55~60)

55・56は底部回転糸切り未調整の土師器杯である。55は推定口径12.6cm、器高3.2cmを測る。内外面とも横ナデ調整で、外面にはロクロ目が強く残るが、内面はきわめて平滑である。56は口縁部を欠損する。内面全体に炭化物が付着し、こぼれるように外面にも流れている。体部の破損面にも認められることから、意図的に口縁部を折った後に何らかの容器として使用した可能性が高い。漆か墨であろう。57は土師器の小形器台である。分厚い造りで、口径6.6cm、器高4.8cmを測る。全体に横ナデ調整される。胎土はやや砂質を帯び、黄褐色の色調を呈する。58は瀬戸灰釉盤の底部片である。底部外面と体部下端が回転ヘラケズリ調整される。釉の発色は淡緑色である。底部の破損面には漆が付着しており、接合するための接着剤として利用したようである。59は瀬戸灰釉平椀の底部片である。体部外面下端は回転ヘラケズリが加えられる。高台は削り出でて、内面が浅く削り取られ、底面には回転糸切り痕が残る。釉調は58と同様である。60は瀬戸灰釉皿で、推定口径8.4cm、器高1.5cmを測る。口縁部が折縁状に外側に大きく開く。底部は回転糸切り未調整である。釉は内面のみにかけられ、発色はくすんだ白色である。58~60は14世紀後半から15世紀前半の所産であろう。

鉄製品 (第95図、図版90)

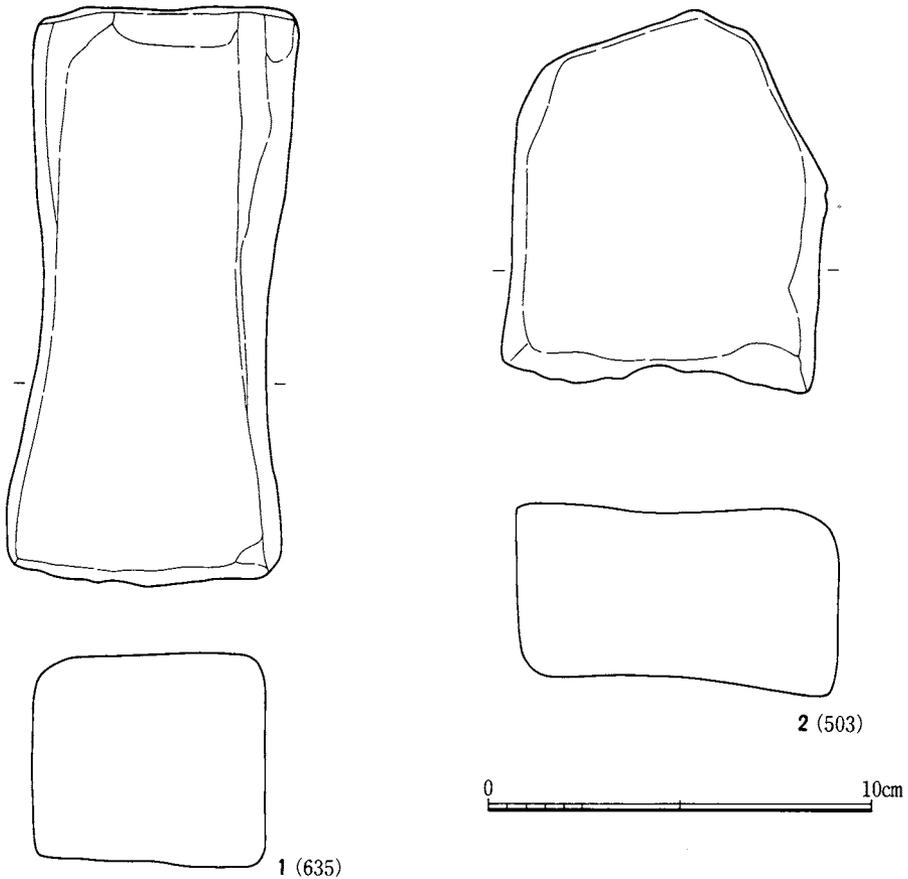
1・2は槍先であろうか。身部は両丸造りで、明瞭な関をもたない。茎は断面長方形となる。いずれも人為的に折り返されており、溶解して再利用しようとしたことが窺える。3はほぼ完形の刀子である。全長8.8cmを測る。身部は平棟平造りで、棟側が内湾している。両関である。4~7は角釘である。8は錐であろうか。先端が尖り、明瞭な関を有する。茎には木質が良好に遺存している。9は門金具と思われる。10・11は不明である。



第95図 土壙出土鉄製品

石製品 (第96図)

1・2とも砂岩製の砥石である。1は角柱状を呈し、4側面がかなり磨られている。2には被熱の痕跡が認められる。



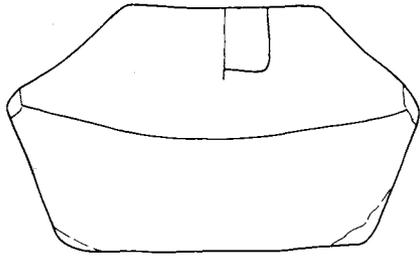
第96図 土壌出土石製品

五輪塔 (第97図 1～6)

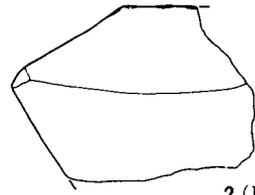
1・2は火輪である。1は完形で、軒径21.5cm、高さ12.6cmを測る。下面は鑿により粗く仕上げられている。2は欠損品であるが、1とほぼ同様の法量であろう。3は地輪となろう。下面は粗い仕上げで、側面には仕上げ加工が加えられる。4～6は空風輪である。本来空風輪はつながって造られており、5・6は風輪を欠くことになる。4は下端に突起を有し、幅10.6cm、高さ18.0cmを測る。4・5は空輪の先端に低い突起を有するが、6は平坦に切られている。

宝篋印塔 (第97図 7・8)

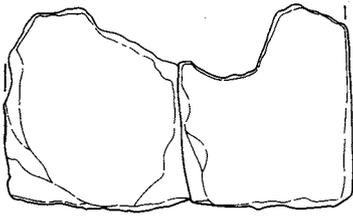
7・8とも塔身となろうか。欠損するため特に7は不明瞭である。8は幅12.4cm、高さ21.7cmを測る。



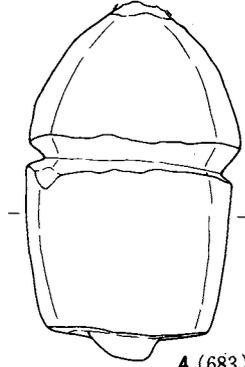
1 (I3·203)



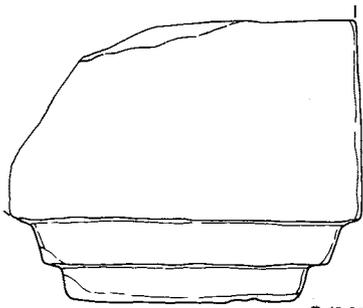
2 (B9)



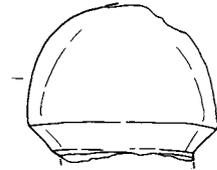
3 (M7)



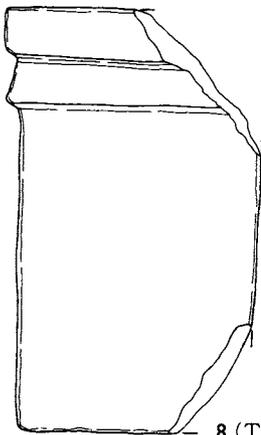
4 (683)



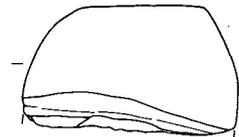
7 (M3)



5 (M9)



8 (T2)



6 (M9)



第97图 土壙出土五輪塔・宝篋印塔



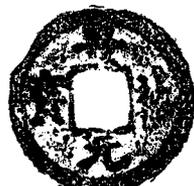
1 (M11)



2 (M2)



3 (515)



4 (PS1)



5 (PS3)



6 (F4-04)



7 (M2)



8 (PS1)



9 (PS1)



10 (M1)



11 (115)



12 (515)



13 (045B)



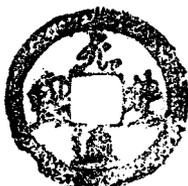
14 (G 1-00)



15 (PS1)



16 (I1-23)



17 (I0-40)



18 (E5-44)



19 (515)



20 (M2)



第98図 輸入錢貨拓影(1)



21 (M30)



22 (M30)



23 (PS1)



24 (515)



25 (M2)



26 (515)



27 (M2)



28 (表採)



第99図 輸入錢貨拓影(2)



1 (696)



2 (696)



3 (696)



4 (696)



5 (696)



6 (696)



7 (D8-04)



8 (H2)



9 (表採)



第100図 寬永通寶・文久錢拓影

輸入銭貨 (第98・99図)

番号	銭種	出土地点	W(g)	G(mm)	N(mm)	g(mm)	n(mm)	T(mm)	初铸年代
1	太平通寶	11号溝	2.4	23.975	19.0	7.1	6.05	1.375	976
2	景德元寶	2号溝	3.5	24.1	18.15	7.3	6.0	1.35	1004
3	景德元寶	515号土壙	2.8	24.45	19.85	7.6	6.1	1.2	1004
4	景德元寶	P S 1 土壙群	3.2	25.1	20.25	9.0	6.75	1.35	1004
5	祥符元寶	P S 3 土壙群	3.4	25.2	18.95	6.875	5.9	1.375	1008
6	祥符元寶	F 4-04	2.7	24.3	18.4	7.175	6.1	1.28	1008
7	祥符元寶	2号溝	3.4	24.8	18.0	7.4	5.9	1.2	1008
8	祥符元寶	P S 1 土壙群	2.1	24.25	17.9	7.0	6.05	1.225	1008
9	皇宋通寶	P S 1 土壙群	3.0	24.55	19.5	9.05	8.2	1.4	1037
10	皇宋通寶	1号溝	2.3	24.85	19.6	8.55	7.55	1.12	1037
11	皇宋通寶	515号土壙	3.4	24.15	19.9	7.6	6.35	1.5	1037
12	皇宋通寶	515号土壙	2.7	24.6	20.0	8.2	6.8	1.1	1037
13	治平元寶	045B住居	3.1	23.4	19.3	7.95	6.0	1.575	1064
14	熙寧元寶	G 1-00	2.8	23.9	19.15	7.1	6.4	1.175	1068
15	熙寧元寶	P S 1 土壙群	2.9	22.85	19.2	7.7	5.9	1.2	1068
16	熙寧元寶	I 1-23	2.6	23.55	18.7	7.7	6.8	1.25	1068
17	元豐通寶	I 0-40	3.0	24.55	18.6	7.5	6.3	1.375	1078
18	元祐通寶	E 5-44	2.8	24.4	19.35	8.4	7.0	1.2	1086
19	聖崇元寶	515号土壙	3.1	23.5	18.4	7.9	6.5	1.3	1101
20	政和通寶	2号溝	1.8	23.65	21.15	8.15	6.8	1.2	1111
21	洪武通寶	30号溝	2.7	23.525	20.05	7.4	5.8	1.55	1368
22	洪武通寶	30号溝	2.6	24.0	19.85	7.0	5.65	1.35	1368
23	永樂通寶	P S 1 土壙群	2.4	25.0	20.9	7.0	5.8	1.2	1408
24	永樂通寶	515号土壙	3.1	24.9	21.2	6.9	5.65	1.3	1408
25	永樂通寶	2号溝	3.6	24.8	20.9	6.75	5.6	1.425	1408
26	永樂通寶	515号土壙	2.7	25.4	20.7	7.1	5.7	1.1	1408
27	朝鮮通寶	2号溝	3.0	23.4	20.05	7.1	5.6	1.375	1423
28	朝鮮通寶	表採	3.0	23.5	20.0	8.15	5.8	1.4	1423

各計測点については今泉潔氏の方法を用いた

参考文献『中市西野遺跡・白山遺跡・村上遺跡発掘調査報告書』(助千葉県文化財センター 1989 P70)

寛永通宝・文久銭 (第100図)

番号	銭種	出土地点	W(g)	G(mm)	N(mm)	g(mm)	n(mm)	T(mm)
1	寛永通寶	696号土壙	2.8	25.2	20.2	7.4	6.3	1.1
2	寛永通寶	696号土壙	4.3	25.3	20.05	7.2	5.75	1.55
3	寛永通寶	696号土壙	3.6	25.8	20.0	7.2	5.55	1.425
4	寛永通寶	696号土壙	4.2	24.8	19.4	7.1	5.55	1.5
5	寛永通寶	696号土壙	3.3	25.6	20.1	7.3	5.6	1.45
6	寛永通寶	I 1 - 44	2.0	24.6	19.5	6.85	5.8	1.1
7	寛永通寶	D 8 - 04	2.5	23.15	19.0	8.2	6.4	1.1
8	寛永通寶	H 2	2.5	23.0	18.6	7.7	6.1	1.1
9	文久永寶	表採	3.0	27.1	20.0	8.2	6.5	1.1

第4節 その他の遺構と遺物

1. 溝

本遺跡では36条の溝が検出されているが、この内、東西南北に走る溝は後章で述べるように8世紀から9世紀までの集落形成に非常に強く関与している。ここでは、いくつかの溝を取り上げ説明していく。

1号溝 (第101図)

E 5区からG 5区にかけて東西に走る。調査範囲のなかでは長さ40m程確認され、西側で9号溝と合流する。東側は調査区域外に続くが、この溝が現道と一致していることを考えると、さらに40m程延びた後に北側に屈曲すると思われる。幅3.0~2.0mで東側に移行するに従い徐々に狭くなる。深さは0.2~0.6mを測り、9号溝に向かうにつれて深くなっていく。おそらく排水を9号溝に集めるためであろう。覆土中層にロームブロック土が含まれている。

9号溝 (第101・102図、図版39)

E 3区中央からE 8区南端まで続き、その後西側にほぼ直角に折れ曲がり11号溝となる。調査範囲内では南北に約80m確認された。北側は調査区域外に延びると考えられるが、北西取り付け道路の調査範囲に検出されていないため、どこかで屈曲するものと考えられる。いくつかの竪穴住居と重複しており、071・128・126号住居跡を切り、127号住居跡によって切られている。幅は、28号溝との合流点以北では4.0~5.0mと広く、南側で3.0m程に狭まり、南端で再び広く

なる。深さは北側で1.0m、南側で0.4mを測り、北側に移行するにつれて徐々に深くなっている。これもやはり排水を考えた掘り方であろうか。覆土最下層はロームブロックを主体とした土を埋め込んでおり、その上面にローム粒子と黒色土を混ぜて突き固めたきわめて硬い層が認められる。28号溝以北は底面両側に2本平行して確認されたが、南側では1本となり幅が広がる。この硬い層は溝をある程度人為的に埋め戻して形成された可能性が強く、道路として再利用した状況が考えられる。

遺物の出土はかなり多いが、先述した道路面の上下で土器群の様相が異なっている。当初の溝底面及び壁際で1～4の須恵器・土師器、硬い土の上面で5・6の土師器小皿が検出されている。図示できなかったが、道路面上からは中世陶磁器の小破片も多く出土しており、この面の上下では明瞭に時期差が存在していると考えられる。竪穴住居との切り合い及び溝掘削の時期を示していると思われる底面遺存の土器群を考え合わせると、本溝は8世紀前半に形成され、10世紀以降道路として再利用されたようである。この状況は後章で検討する集落景観と一致しており、きわめて注目される。

28号溝（第101図）

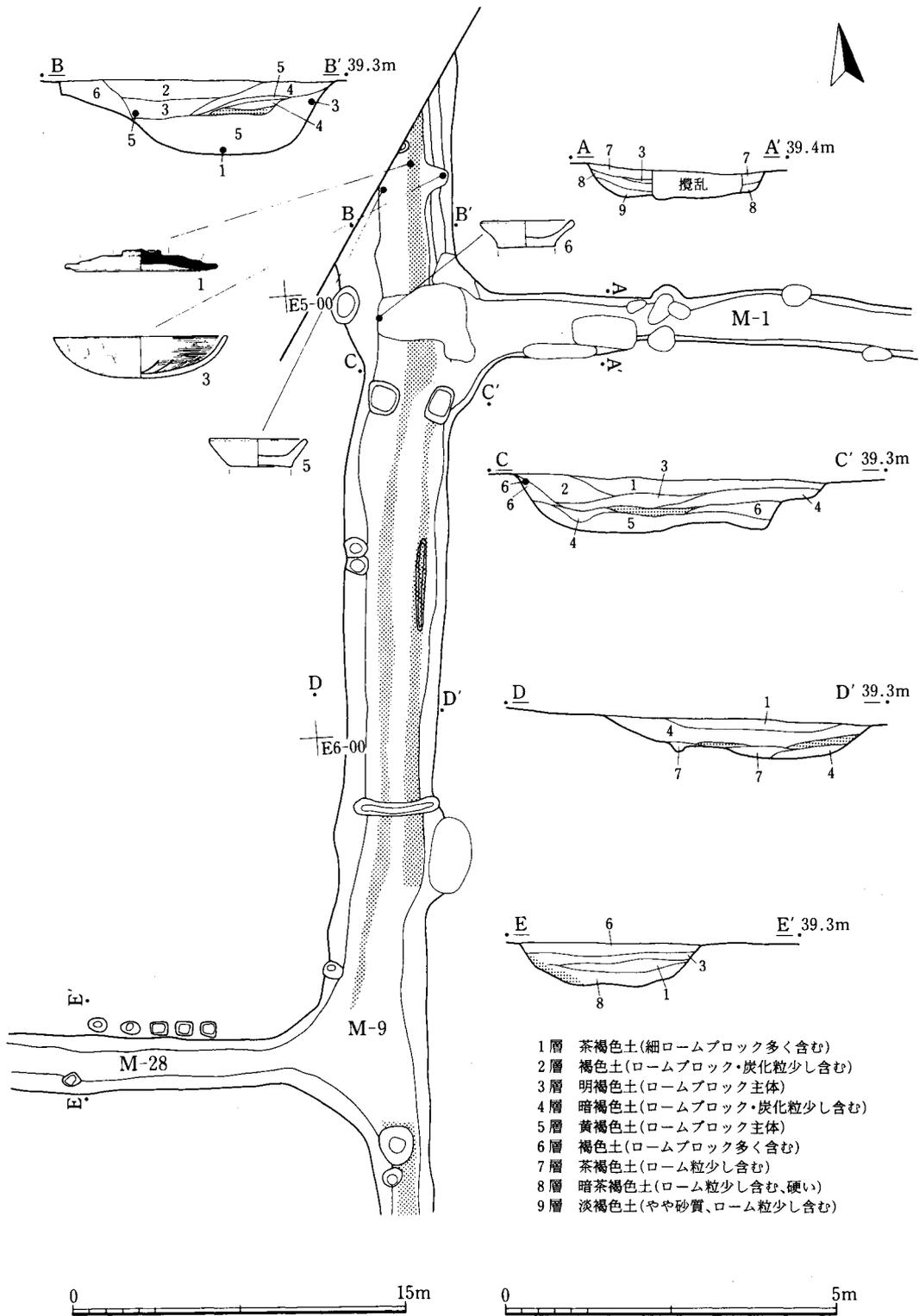
D6区南側を東西に走る溝である。東側は9号溝に合流し、西側は調査区域外に延びる。検出された長さは15m程である。調査区域外西側は、本溝と一致するかのように現道が続いており、これに沿って形成されている可能性が強い。幅2.2～2.6m、深さ0.4～0.6mを測り、西側に向けて徐々に低くなっている。9号溝の合流する部分がやや低く掘り込まれているため、本溝の底面とのレベル差は0.2m程である。ただ、道路面のレベルはほぼ同様に保たれている。覆土中にはローム粒・ロームブロックを多く含んでおり、埋め戻された可能性もある。また、底面壁際にはロームブロックのかなり硬い層が認められ、9号溝同様後世道路として利用されたようである。

遺物の出土はあまり多くなく、溝掘削当初の時期を示すものは検出されなかった。

8号溝（第102図）

E6区からE8区にかけて南北に走る。9号溝にほぼ平行して掘り込まれており、検出された長さは約40mである。南側は調査区域外に続くと思われる。北側は不明瞭であるが、この部分の北は緩い傾斜面となり、中世の3号溝が存在していることを考えると自然的に傾斜面に流れ込んでいる可能性が強い。幅0.8～1.4mを測り、一定していない。深さは0.2～0.4mで北側が深くなっている。遺物の出土は少ないが、10世紀以降の土器片が認められる。

以上の状況から、本溝は9号溝が道路として再利用された段階で掘り込まれたと考えられ、側溝となろう。



第101図 溝1・溝9・溝28

1 1号溝 (第102図)

D 8区南側で東西に走る。9号溝の南端からほぼ直角に折れ曲がる溝であり、本来は同一時期に掘削された同一の性格を有するものと考えられる。検出された長さは約15mで、西側は不明である。確認面が西に向かって低くなっており、さらに西側には浅い谷が存在していることから、この溝はそれほど西に続くものではないと考える。幅4.3mを測り、2段掘りされる。確認面からテラス面までの深さは0.3mで、中央の掘り込みは幅1.0~1.2m、深さ0.2m程を測る。覆土中にはローム粒・ロームブロックが多く含まれ、埋め戻された可能性が強い。また、南側のテラス面直上にロームブロックのきわめて硬い層が薄く形成されており、9・28号溝同様後世道路として再利用されたようである。

出土した土器は少ないが、図示した土師器杯(13)は完形品である。底面より浮いた状態で検出されたが、この部分は攪乱されており、完形であることを考えると溝に伴う土器として捉えておきたい。他の小破片を概観すると、13と同タイプの内外面赤彩の土師器杯と10世紀以降の土器群に明瞭に区別される。9号溝同様溝の機能の変遷を考えるうえで注目される。

1 2号溝 (第102図)

E 9区北端を東西に走る溝である。11号溝と平行する。掘り方は幅1.0~1.4mを測り、不規則である。深さは0.1m程と浅い。底面及び西側延長線上にピットが掘り込まれる。不規則な配置であるが、11号溝に伴う遺構として捉えることもできよう。推定であるが、溝外側を区画する柵のようなものかもしれない。

遺物の出土は少なく、時期を決定する資料はない。

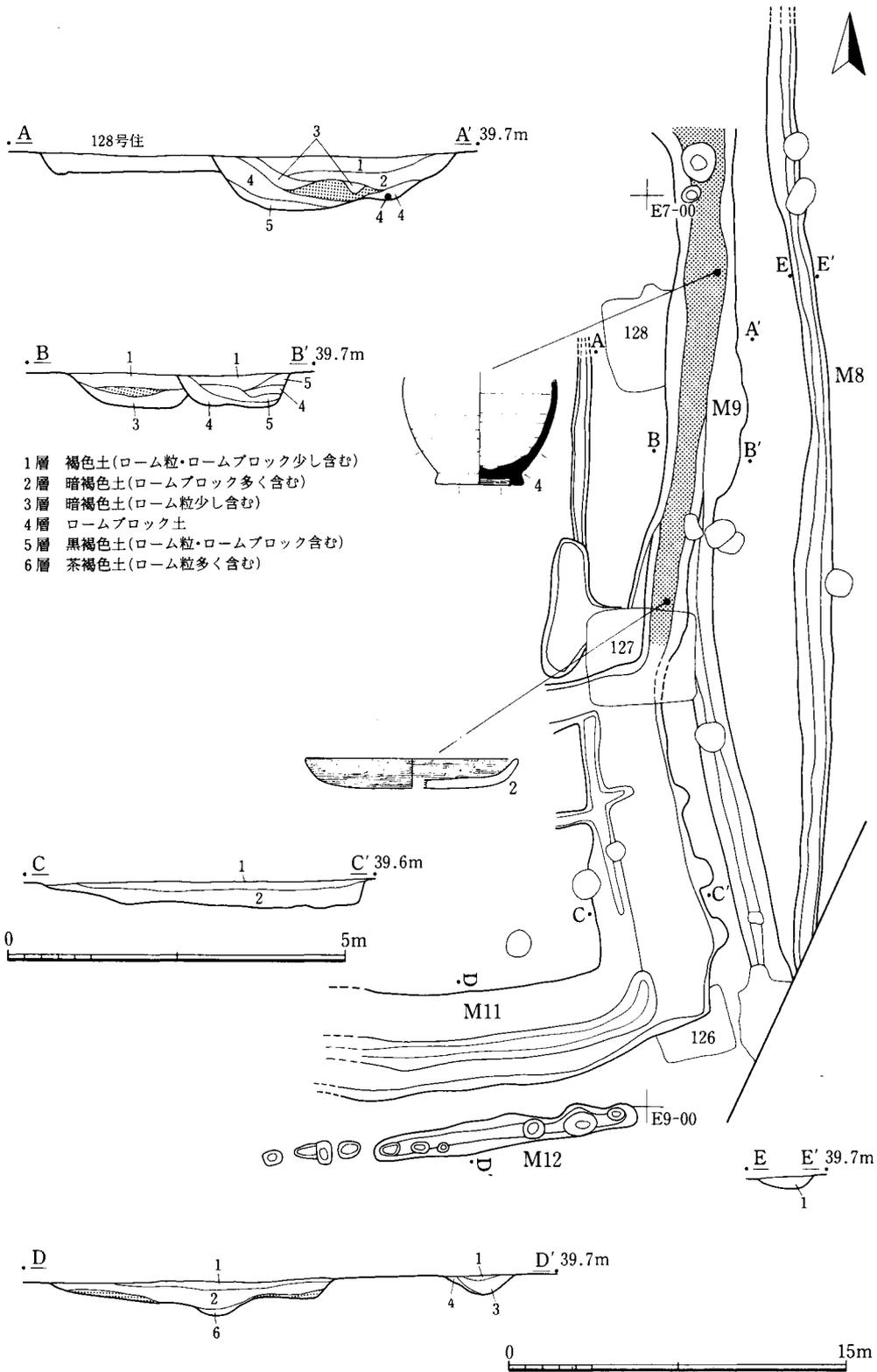
2号溝 (第103図)

F 5区に所在する。515号地下式土壇から503号地下式土壇を結び、屈曲して3(B)号溝につながっている。幅2.4m、深さ0.2~0.3mを測る。底面両側が幅0.6~0.9m、底面からの深さ0.1mで側溝状に凹んでいる。覆土はロームブロックを多く含んだ褐色土1層でかなり硬質である。

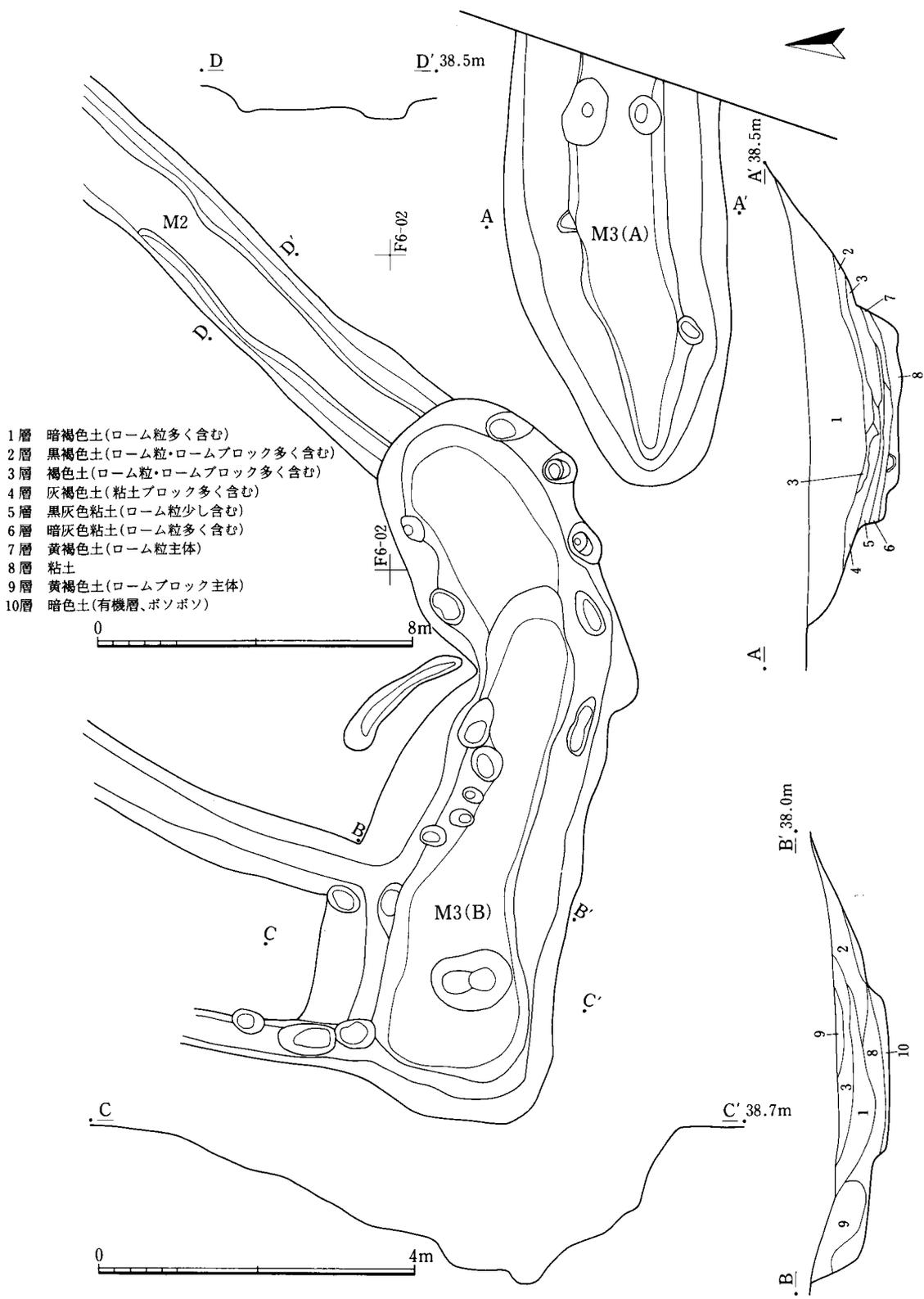
遺物は北側で比較的多く検出されたが、ほとんど小破片である。龍泉窯の碗片(1)が底面直上、輸入銭貨4枚が南東側側溝中から出土した。他の小破片も中世の所産であり、溝の時期を当該期に当てることができよう。

3(A)・(B)号溝 (第103図、図版39)

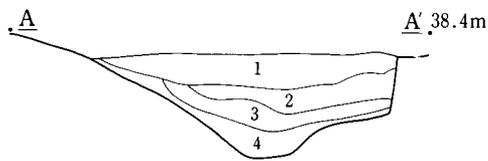
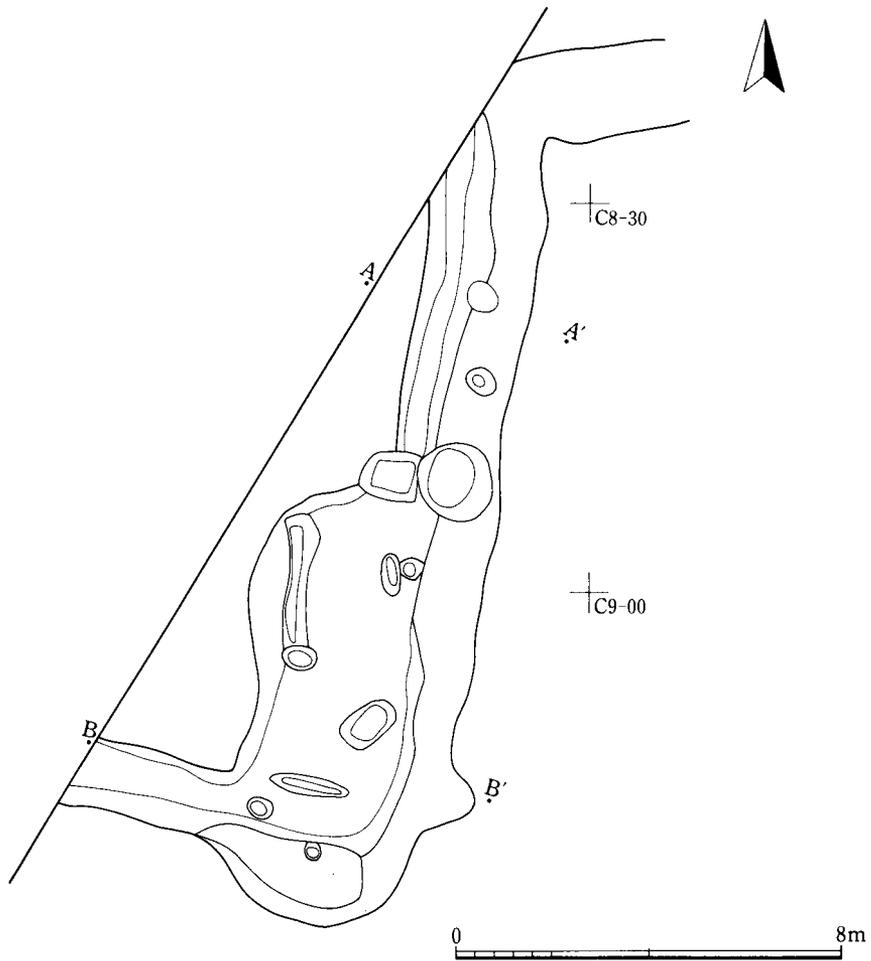
E 6・F 6区北側に所在する。緩い斜面の最も低い場所に構築される。(B)は「く」の字状に屈曲し、北側から3本の溝が入り込んでいる。幅4.0~5.6mを測り、きわめて不規則な掘り



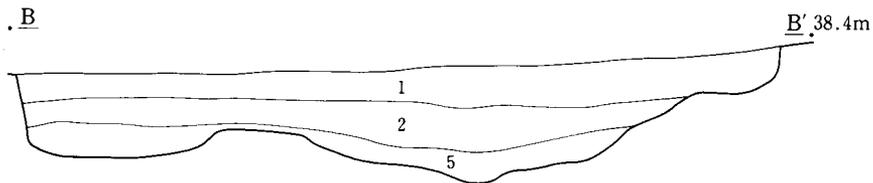
第102図 溝8・溝9・溝11・溝12



第103図 溝2・溝3(A)・(B)



- 1層 褐色土(ロームブロック多く含む)
- 2層 淡褐色土(ロームブロック多く含む)
- 3層 茶褐色土(ロームブロック多く含む)
- 4層 暗茶褐色土(ロームブロック・炭化粒少し含む)
- 5層 明褐色土(ロームブロック主体)



第104図 溝30

方である。西に向かい徐々に深くなり、西端で深さ1.4mとなる。底面は粘土層を0.3m程掘り込んで形成される。底面には2.0×1.4mの楕円形を呈する土壌が掘り込まれ、底面からの深さ0.7mを測る。東側は0.2m程高くなっている。壁中には掘り込みの浅いピットが並んでいる。覆土最下層は有機物層が形成されており、北側の溝から流れ込んだものが溜まったような状況を呈する。その上面には粘土層が堆積しており、雨水等によって侵食された壁が崩れたものであろう。(A)は西側を検出したのみで、東側は調査区域外に延びている。最大幅5.6m、深さ1.5mを測り、東に向けて徐々に深くなる。底面はやはり粘土層を掘り込んで形成されている。覆土最下層には粘土が堆積しており、(B)号溝同様の状況が考えられる。

遺物は底面近くに多く遺存しており、中世土器・陶磁器及び五輪塔等が主体を占めている。溝も当該期に形成されたものと考えられる。

30号溝 (第104図)

B8・B9区に所在する。主体が西側調査区域外にあるため詳細な状況は不明である。掘り方は不規則で、南側で直角に折れる。幅1.4～2.4mを測り、南東コーナーが方形に膨らんでいる。確認面が南側に傾斜しているため、深さは0.5～1.0mであるが、底面はほぼ平坦である。底面及び壁中に小ピットがいくつか認められる。覆土全体にロームブロックを多く含んでおり、人為的に埋め戻した可能性が高い。

出土した土器は覆土中がほとんどで、溝の形成時期を確定するには至らなかった。

上記以外にも多くの溝が検出されているが、出土した土器で性格を断定できるものが少ないため詳細な記述は省略する。なお、他の溝の配置は付図を参照していただきたい。

溝出土土器

9号溝 (第105図1～8、図版70)

1は須恵器蓋である。推定口径13.8cm、器高1.9cmを測り、全体に厚手に造られる。天井部外面は右回転のヘラケズリが加えられる。カエリが痕跡程度に内側に認められ、口縁端部が若干上反りとなる。つまみは扁平で、径3.4cm、高さ0.5cmを測る。中央部が端部よりやや高くなる。胎土はやや粗く、長石小砂粒を多く含む。色調は暗灰色を呈する。2は内外面赤彩の土師器盤である。推定口径19.2cm、器高2.6cmを測る。体部と底部の境は明瞭ではなく、全体にやや厚手の造りである。内面はナデ、外面はヘラケズリ後全面にミガキが加えられる。胎土は緻密でやや軟質である。胎土自体の色調もやや赤味がかっている。3は丸底の土師器杯で、やはり内外面とも赤彩される。推定口径15.6cm、器高3.8cmを測り、2より器肉が薄くなる。体部内面はナデ後細かいミガキ、外面にはヘラケズリ後かなり粗いミガキが加えられている。胎土は緻密で小砂粒の混入も少ないが、雲母粒が若干認められる。胎土の色調は黄褐色を呈する。口唇部か

ら体部外面は器面が荒れているため、赤彩が部分的に剥げている。4は灰釉瓶の下半部である。底径12.0cmを測る。胴部は丸味を有して立ち上がり、内外面とも横ナデ調整で外面下端に回転ヘラケズリが加えられる。底部外面には回転糸切り痕が残る。高台は貼り付けで、短く外側に開き、裾が広がる。濃緑色の釉が外面全体にかかるが、均一でなく溜まり状となっている部分も見られる。内面見込み部にも釉が付着している。胎土は緻密で、灰白色の色調を呈する。5・6は土師器小皿である。口径8.6cm、器高2.5cm前後を測る。体部は直線的に開き、内外面とも丁寧に横ナデ調整される。底部は回転糸切り未調整である。胎土は緻密で、5には小砂粒が多く含まれている。5の口縁部の一部に油煙が付着しており、灯明皿として使用されたようである。7は柱状高台を呈する皿であろうか。体部を欠く。底部は回転糸切り未調整で、側面は横ナデ調整される。胎土中に長石・赤色粒子を多く含む。8は土師器羽釜の破片である。口縁は若干内傾し、内側が短く折り返されている。鏝は断面三角形を呈し、整形はやや雑である。図下端に横位のヘラケズリが観察される。胎土は比較的緻密で、長石・石英の小砂粒を多く含む。

1号溝（第105図9～11）

9は推定口径12.0cmを測る杯で、内外面とも丁寧な横ナデ調整が施され、ロクロ目が強く残る。胎土は緻密で、長石・雲母小粒子を含む。色調は黄褐色を呈する。体部外面には煤の付着が顕著に認められる。10は器台であろうか。上半部を欠損する。中央からややずれた位置に径0.5cmの孔が穿たれている。焼成前で下から上への穿孔である。胎土は緻密で砂粒の混入も少なく、丁寧に成形されている。色調は黄褐色を呈する。11は底部回転糸切り未調整の小皿であろう。

8号溝（第105図12）

12は推定口径12.2cm、器高4.3cmを測る杯の小片である。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部でやや外反する。内外面とも丁寧な横ナデ調整で、外面下端には手持ちヘラケズリが加えられる。底部は回転糸切り未調整である。胎土はやや粗く、砂粒を多く含み、燈褐色の色調を呈する。

11号溝（第105図13・14、図版70）

13は内外面赤彩の完形の杯である。口径13.0cm、器高4.7cmを測る。体部は直線的に開き、口縁部で若干肥厚する。内外面とも丁寧な横ナデ調整で、外面下端に右方向の回転ヘラケズリが加えられる。底部は全面手持ちヘラケズリである。胎土は緻密で、砂粒の混入も少ない。口唇部の磨耗が激しく、赤彩が剥げている。外面は煤の付着が著しい。14は須恵器甕の胴部片である。内面全体に墨が付着しており、転用硯として使用されたようである。

2 2号溝 (第105図15)

15は土師器小皿で、口縁部を若干欠損する。口径9.2cm、器高1.1cmを測る。きわめて扁平で、底部が分厚いため内面中央と口唇部の高さがほぼ同じとなる。底部は回転糸切り未調整で、体部には左回転横ナデが施される。

3 0号溝 (第105図16・17、図版70)

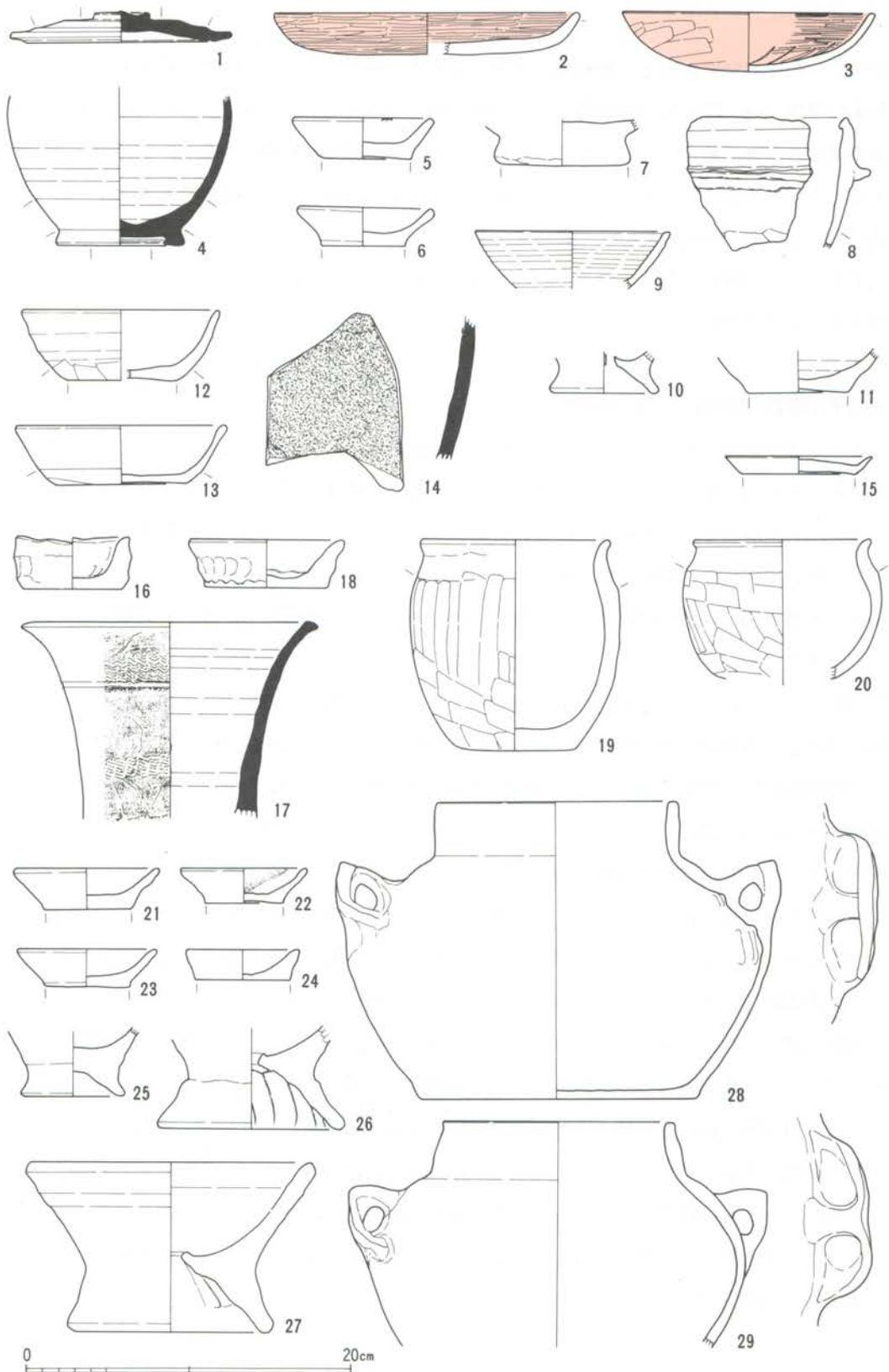
16は手捏ね土器である。体部内面は横ナデで、見込み部にヘラの当たりが認められる。外面は凹凸が顕著に見られ、輪積み痕が残る。底部は木葉痕をナデにより消している。17は須恵器大形壺の口頸部である。口縁部で大きく開き、口径18.2cmを測る。口唇部はほぼ平坦になり、外傾する。頸部外面には1条の沈線と2段の櫛描波状文が施される。沈線は上段の波状文直下に配されるが、一部で重複している。これによると、沈線後波状文が加えられている。胎土は緻密で、砂粒もほとんど含まない。色調は淡青灰色を呈する。

3 3号溝 (第105図18~20、図版71)

18は口径9.6cm、器高3.0cmを測る比較的大形の手捏ね土器である。指ナデ調整で、内外面に輪積み痕が残る。底部には木葉痕が明瞭に観察される。胎土は緻密で砂粒を多く含むが、焼成はかなり硬質である。口縁部破損後火を受けており、内面及び破損面に煤が付着している。19・20は小形甕である。19は完形で、口径11.8cm、器高12.9cmを測る。厚手の造りで、非常に重量感がある。口縁部が短く外反し、肩部に最大径を有する。口縁部外面から胴部内面は丁寧なナデ、胴部外面は強いヘラケズリが施される。底部はヘラケズリ後ナデが加えられる。胎土は緻密で、長石・雲母・赤色粒子を多く含む。色調は黄褐色を呈し、黒斑が底部に認められる。20は球形に近い胴部に短く外反する口縁部が続く。胎土・調整等19と同様である。

3号溝 (第105図21~29、図版71)

21~24は底部回転糸切り未調整の土師器小皿で、形態的に体部が直線的に開くもの(21~23)、体部が直立するもの(24)に分けられる。前者は口径7.8~9.0cm、器高2.2~2.6cmでややバラツキが見られる。21は胎土が粗く、器面がざらつく感じである。焼成も不良で、黄褐色の色調を呈する。口縁部の一部に油煙が付着している。22・23は胎土が緻密で、砂粒の混入も少ない。焼成は良好である。22の内面には漆と思われる炭化物の付着が認められる。23の口縁部には油煙の痕跡がある。25は高台付皿となろうか。火を受けかなり脆くなっている。26・27は器形的に高台付碗となろうか。厚手の造りで、体部内外面及び高台外面に丁寧な横ナデが施される。高台内面は横ナデ後丸頭状工具により粘土を掻き取っている。中央部には焼成前の孔が穿たれ

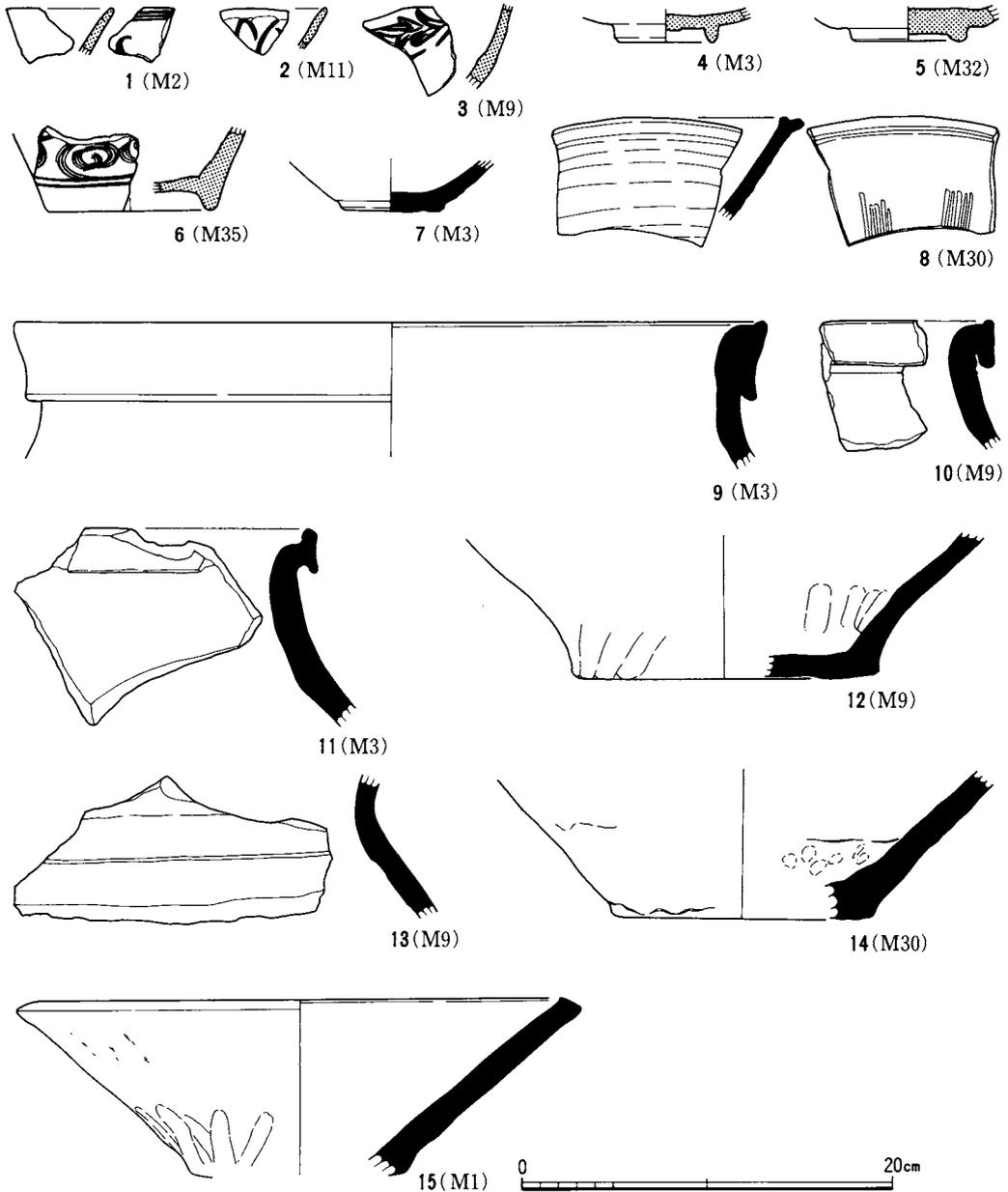


第105图 沟出土土器 (M9 : 1~8, M1 : 9~11, M8 : 12, M11 : 13·14, M22 : 15, M30 : 16·17, M33 : 18~20, M3 : 21~29)

ている。胎土は砂質を帯び、黄褐色の色調を呈する。体部内面に煤の付着が観察される。27は推定口径18.0cm、器高10.3cmを測る。28・29は外耳土釜である。28は推定口径15.2cm、器高18.0cmを測る。全体に薄手の造りである。口縁部は直立し、胴部最大径から底部に向けて直線的にすぼまる。内外面とも丁寧なナデ調整が施され、外面には粘土接合の痕跡である微妙な凹凸が認められる。胎土は比較的緻密で雲母粒の混入が目立つ。29も28とほぼ同様な形態・調整・胎土を示すが、口縁部が若干内傾する。28・29とも胴部最大径以下に煤の付着が激しく、使用状態を示すものと思われる。

溝出土陶磁器（第106図、原色図版2）

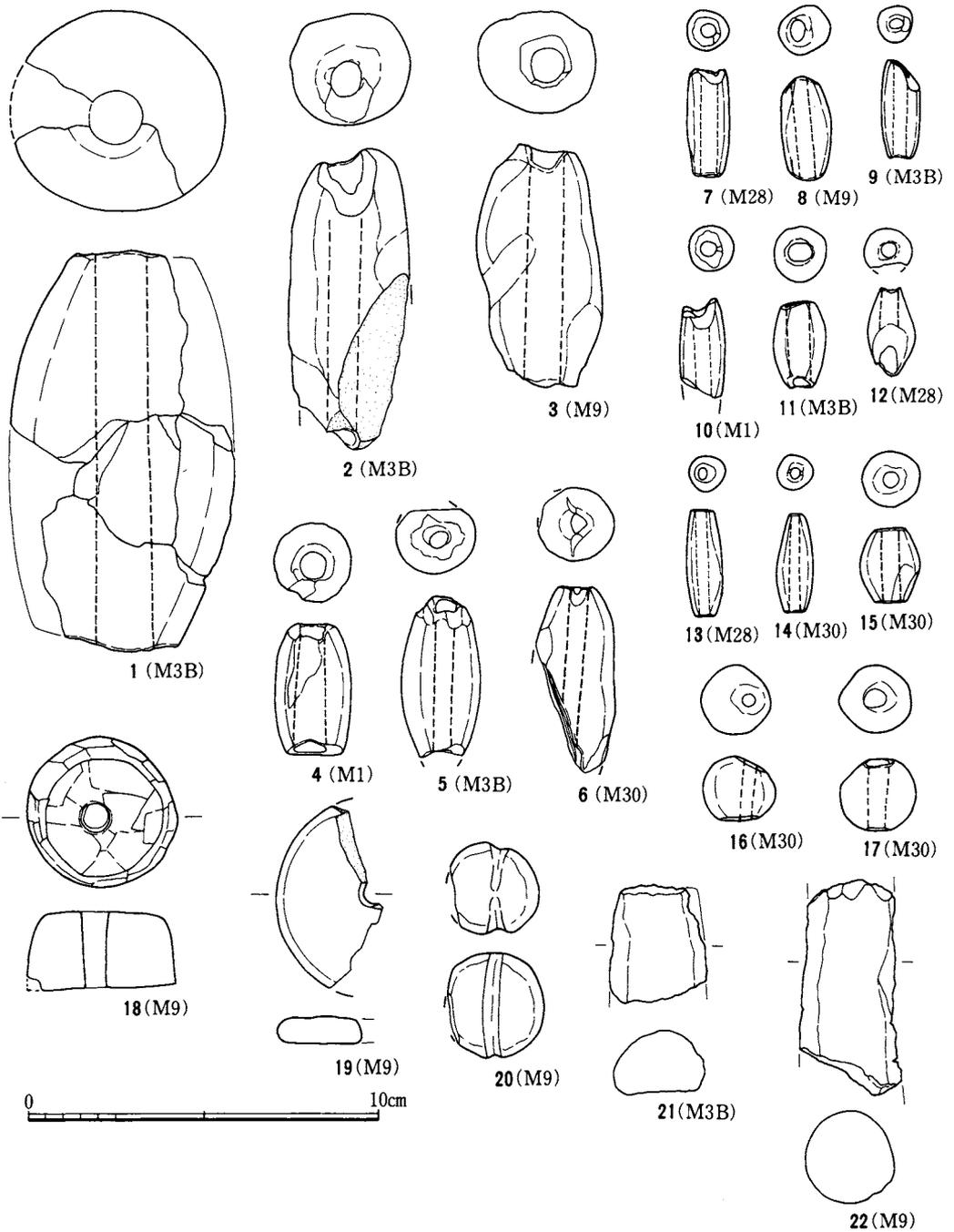
1～5は龍泉窯系青磁片である。1は碗の口縁部片で、内面上端に3条の浅い沈線、その下に片彫りの花文が配されているが小破片のため全体の文様は不明である。発色は青味がかかった緑色で、光沢がある。12世紀後半から13世紀前半のものと考えられる。2は鑄蓮弁文を外面に施した碗の口縁部片である。釉の発色はやや緑がかかった青色で、光沢がある。太宰府編年のI-5-b類に相当し、13世紀後半から14世紀前半の年代が考えられる。3は壺の胴部片であろう。小破片であるが、外面に牡丹文が見られる。緑がほとんど入らないきれいな青色の釉が比較的厚くかけられる。14世紀代の所産であろう。4・5は底部片である。4は皿となろうか。高台は高く、外底面と畳付が露胎となる。釉の発色は緑がかかった青色を呈し、貫入が顕著である。14世紀後半の年代となろう。5は碗で、底部が1.4cmとかなり厚くなる。高台は断面四角で、畳付とその内部が露胎となる。釉の発色は淡い青色を呈し、貫入は認められない。2と同様の時期であろう。6は青白磁梅瓶の底部片である。高台は露胎の内側を削って形成される。胴部下端に2条の沈線を施し、その上に櫛を施文具とした渦巻き文が配される。釉の発色は、透明で青味を帯びている。14世紀代の年代が考えられる。7は瀬戸灰釉平碗である。高台は削り出しで、内側が浅く削り取られるため、高台底面と底部中央に回転糸切り痕が残っている。灰釉は内面に認められ、あまり光沢のないくすんだ緑色を呈する。8は唐津の摺り鉢である。口縁部が「て」の字状に屈曲し、褐色の光沢のない鉄釉が全面にかけられている。9～15は常滑片で、9～14が甕、15が捏ね鉢である。9は推定口径40.8cmを測る大形品で、無釉となる。13は外面に緑色の釉がかけられる。15は推定口径30.6cm、器高9.4cmを測る。体部外面下半は強く絞り込まれている。口縁部外面から内面全体に褐色の釉がかけられ、外面は赤褐色の胎土を露出している。様式的には常滑土の感を受けるが、焼き上がりが異なっており、窯を断定することは難しい。15世紀段階のものであろう。



第106図 溝出土陶磁器

溝出土土製品 (第107図、図版91)

土錘 (1~17・20) 1はかなり大形となる。破損が激しく詳細は不明であるが、造りが丁寧で焼成時の黒斑が認められる。2・3も比較的大形で、手捏ねによる器面の凹凸が顕著である。3の図上端は平坦に切られている。2は黄褐色、3は黒褐色を呈する。4はほぼ完形品で、比較的丁寧な造りである。上下面は平坦に切られている。両端の同一方向に紐擦れによる磨耗及び破損が観察される。胎土中に雲母粒子を多く含む。5・6は楕円形を呈する。7~9・10・



第107図 溝出土土製品

13・14は円錐形を呈する小形品である。造りは丁寧で、両端を平坦に切るものが多い。11・12・15は算盤形に近い形態を示す。16・17は球形土錘である。20も球形となるが、穿孔は施さず、両側面に溝を加えている。

紡錘車 (18・19) 18はほぼ完形である。上面及び側面にヘラケズリ、底面にはナデ後弱いミガキが施される。胎土は緻密で小砂粒を多く含む。焼成は良好である。上面径3.4cm、底面径4.0cm、器高2.2cm、孔径0.8cm、重量50.4gを測る。19は土師器杯の底部を再利用したもので、回転糸切り痕が残る。ほぼ中央に両側から穿った孔が認められる。

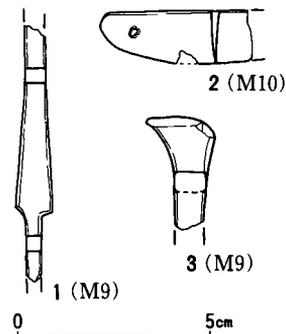
支脚 (21・22) 21は上端部のみ、22は上下端部を欠損する。

溝出土土錘計測表

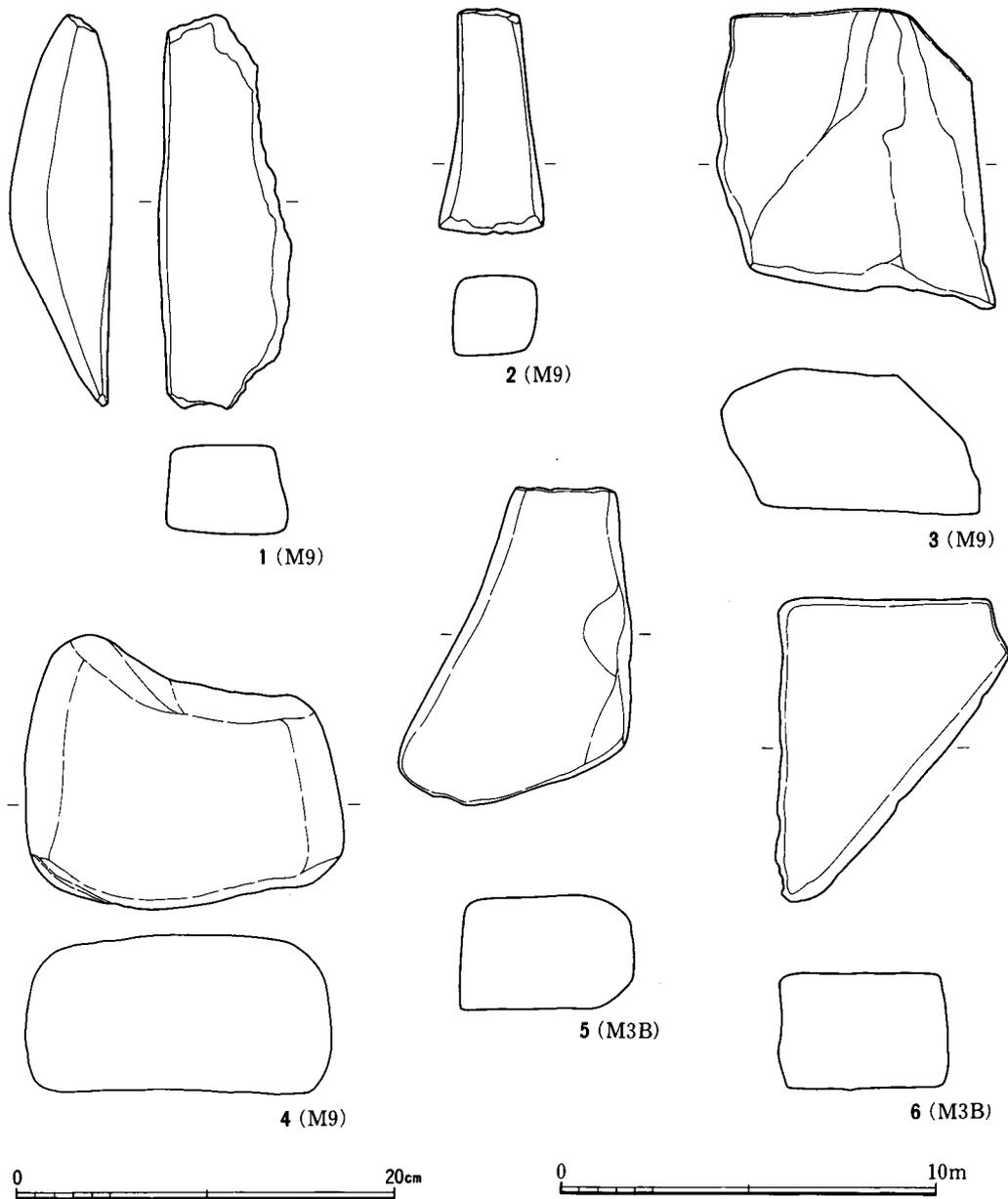
番号	長さ (cm)	径 (cm)	孔径 (cm)	重さ (g)	出土遺物 番号	
1	10.72	6.04	1.65	198.3	M-3(B)	0003
2	8.72	3.43	1.03	89.1	M-3(B)	0023
3	6.9	3.37	1.02	64.8	M-9	0020
4	3.72	2.2	0.83	17.1	M-1	0018
5	4.56	2.25	0.52	17.5	M3(B)	0004
6	(5.35)	2.35	0.47	22.8	M-30	0008
7	3.16	1.17	0.4	4.5	M-28	0044
8	3.08	1.47	0.51	5.2	M-9	0234
9	2.80	1.10	0.36	2.7	M-3(B)	0036
10	2.67	1.25	0.38	3.7	M-1	0032
11	2.4	1.58	0.6	5.3	M-3(B)	0023
12	2.49	1.34	0.48	3.2	M-28	0002
13	3.04	1.07	0.35	3.5	M-28	0025
14	2.76	1.02	0.34	2.4	M-30	0008
15	2.13	1.67	0.5	5.3	M-30	0008
16	1.9	2.05	0.52	6.8	M-30	0008
17	2.04	2.15	0.51	7.6	M-30	0003
20	2.98	2.79	—	22.9	M-9	0232

溝出土鉄製品 (第108図)

1は鉄鏃となるのであろうか。先端部及び基下半を欠損する。断面長方形で、両側に明瞭な関を有する。2は穂摘み具と思われる。端部に小孔が穿たれている。3は方形の頭部を呈する釘で下半部を欠く。



第108図 溝出土鉄製品



第109図 溝出土石製品

溝出土石製品（第109図、図版93）

1～3・5・6は砥石である。1は凝灰岩製で、中央が山形に高くなっている。欠損部以外はかなり磨耗している。2は上端部を欠く。断面方形で下端部が広がる形態を示す。4側面及び底面まで使用した痕跡が認められる。安山岩製である。3は砂岩製で、火を受けている。5は上端部を欠損する。裾広がり形態で、図裏面に線状の研磨痕が残る。やはり砂岩製となる。6も砂岩製で、板状を呈する。4は用途不明であるが、全体にかなり火を受けており、煤の付着も見られることからカマドに使用されたものと思われる。

2. 製鉄関連（第110図）

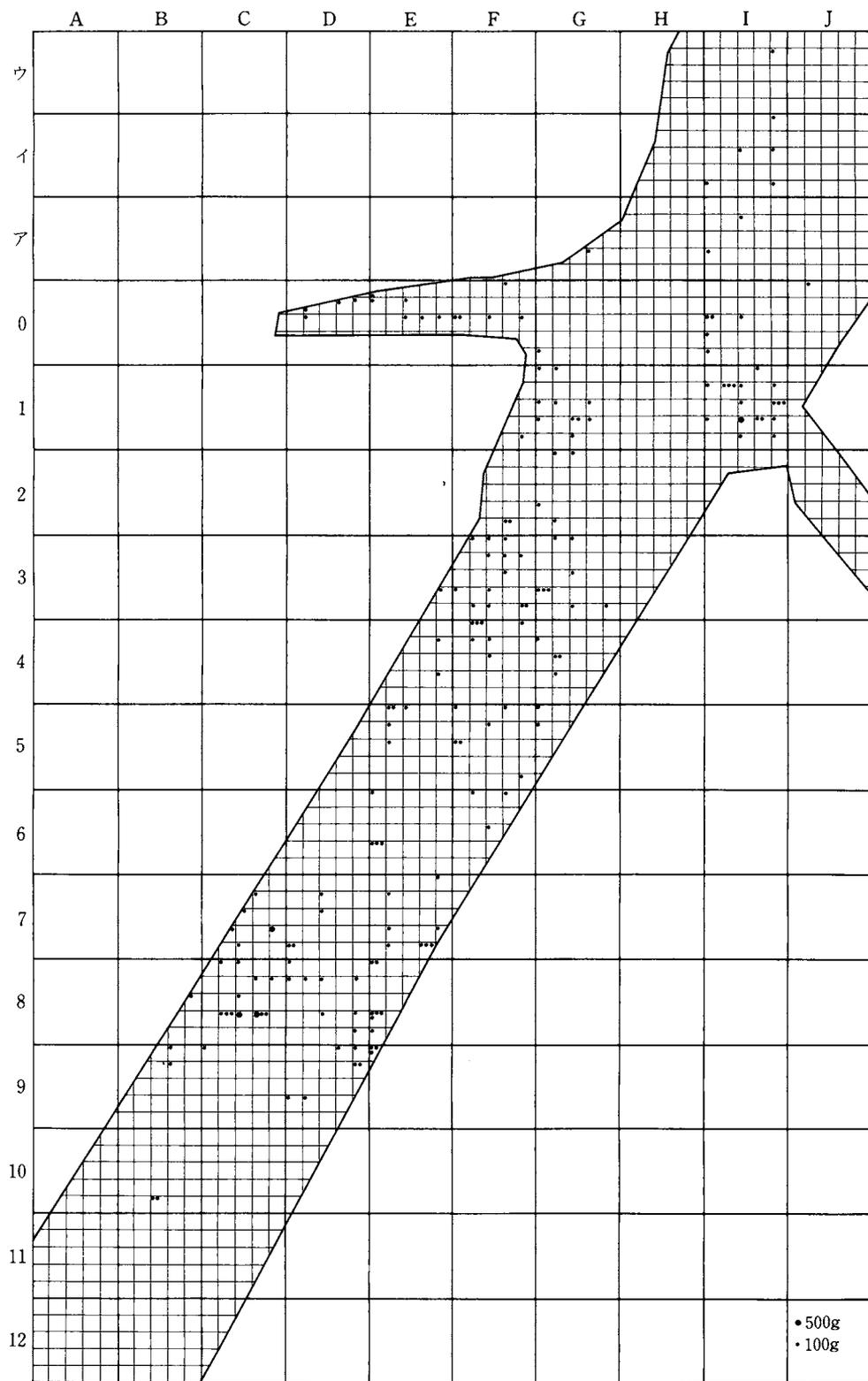
本遺跡の調査範囲内に関する限り製鉄に係る遺構は検出されなかったが、鉄滓が全体的に散在していた。ほとんどが鍛造鍛冶滓で、総重量は13,650gを測る。出土分布は第110図で明らかのように、北側のI1区及び南側のC7・8区、D7・8区、E7・8区に集中する傾向が強い。北側は斜面上端部にあたり、調査時に製鉄関連遺構の存在を想定したが、検出することはできなかった。また、南側は大形の658号土壌・T2号土壌の覆土中からの出土が多く、廃棄的な可能性が強い。他にも9号溝の覆土上層から比較的多く出土している。

026号住居跡や中世土壌群から出土した鉄製品に再利用を意図した状態のものが認められることから、本遺跡付近に鍛冶工房跡が検出される可能性はきわめて高いと思われる。その時期は、溝内における出土状況より先述した溝区画の機能が終了する10世紀以降の段階であろう。

3. グリッド出土遺物

(1) 土師器（第111図）

1～10は土師器杯である。体部内外面とも横ナデ調整で、4以外の底部は回転糸切り未調整となる。3は器肉がかなり厚く、胎土中に長石・赤色粒子を多く含む。4は体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部で緩く外反する。底部は回転糸切り離しで、体部下端から底部周縁に手持ちヘラケズリを加える。5は完形品で、口径12.7cm、器高4.0cmを測る。体部のロクロ目は強く残る。体部外面に「主」あるいは「生」と思われる刻書が認められる。6は口径に比して器高が深いタイプで、底部が若干突出する。左回転の調整が加えられ、砂粒の混入は少ない。11は推定口径13.6cm、器高2.5cmを測る土師器の皿である。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部で外反する。調整は内外面とも右回転の横ナデで、底部は回転糸切り未調整となる。12は体部が内湾する土師器の小皿である。13～22は体部が直線的に立ち上がる土師器小皿で、形態的にバラエティーが見られる。23～28は内面黒色処理が施される土師器碗である。23～25は口径16.1cm～17.9cmを測る大形品である。23・25は内外面ともミガキが加えられ、特徴的な高台を有する。23は断面長方形で、下面中央に浅い沈線が1条巡る。25は体部との接合部に明瞭な段が形



第110図 鉄滓分布図 (1/1,600)

成され、23同様浅い沈線状の窪みが巡っている。26も大形となろうが、口縁部を欠損する。高台は断面三角形を呈する。なお、口縁部の破損状態がやや特異で、全体に波状を呈している。自然的な結果とするには若干疑問が残り、あるいは輪花を意図した打ち欠きが行われた可能性もある。29～31は足高高台付杯である。32は完形の高台付小皿で、体部内面に四分割のミガキが施され、黒色処理が加えられる。口径8.9cm、器高3.4cmを測る。33～35は土師器甕である。33は口縁部が短く屈曲し、端部が平坦で中央が若干窪む。

(2) 須恵器 (第112図)

36・37は杯である。36は全体に摩耗が激しく、推定口径13.9cm、器高3.5cmを測る。体部は内湾気味に立ち上がり、上半部で外反する。底部は全面回転ヘラケズリ調整される。胎土中に長石粒を主体とする砂粒を多く含み、暗灰色の色調を呈する。常陸産であろう。37は完全な還元炎焼成にならない暗褐色の色調を呈する。体部内外面とも横ナデ調整で、底部は回転ヘラ切りとなる。38・39は蓋である。38は口径15.4cm、器高3.7cmを測り、全体に丁寧な造りである。端部はやや内傾気味に折り曲げられ、整美な宝珠形つまみが付けられる。つまみ接合部内面が大きく膨らんでいる。全体に丁寧な横ナデ調整で、天井部外面には回転ヘラケズリが加えられる。灰白色の色調を呈し、黒色の吹き出しが認められることから、東海産と推定される。39は小片であるが、やや外傾気味に折り曲げられる端部を有し、天井部外面に回転ヘラケズリが加えられる。長石粒を主とする小砂粒を多く含んでおり、常陸産と考えられる。40は大甕の口頸部片である。推定口径31.0cmを測る。3条の浅い沈線に囲まれた部分に細かい波状櫛描文を施し以下にはカキ目が加えられる。砂粒の混入は少なく、暗灰色の色調を呈する。41は五孔となる甑である。上半部に平行叩き、下端に幅広のヘラケズリが施される。胎土は粗く、長石・雲母粒を多く含む。42は大甕の破片を利用した転用硯である。内面は同心円、外面には平行叩きが見られる。側面は研磨が加えられ、内面に墨が付着している。43～47は外面に同心円叩きを施すものである。内面は無文となる。胎土から、44と47は同一個体と思われるが、他は各々別個体である。43は唯一円文の形状が確認され、11重の正円で、直径5.4cmを測る。胴部下端にヘラケズリが加えられる。胎土はやや粗く、長石粒を多く含み、焼成は良好である。暗灰色を呈する。44は軟質の胎土で、雲母粒を多く含む。内外器表面はやや黄色味があった白色を呈し、内部が黒色となる。いわゆるサンドイッチ状の焼き上がりである。45は器肉が薄くなり、色調は灰白色を呈する。44同様軟質な胎土である。46は43に類似するがやや軟質となる。

(3) 墨書・刻書土器 (第113図、図版83～85)

1は推定口径12.2cm、器高3.5cmを測る杯である。体部は直線的に開き、体部下端から底部全面に回転ヘラケズリが加えられる。底部外面に「神□」と記される。2は体部下端から底部全

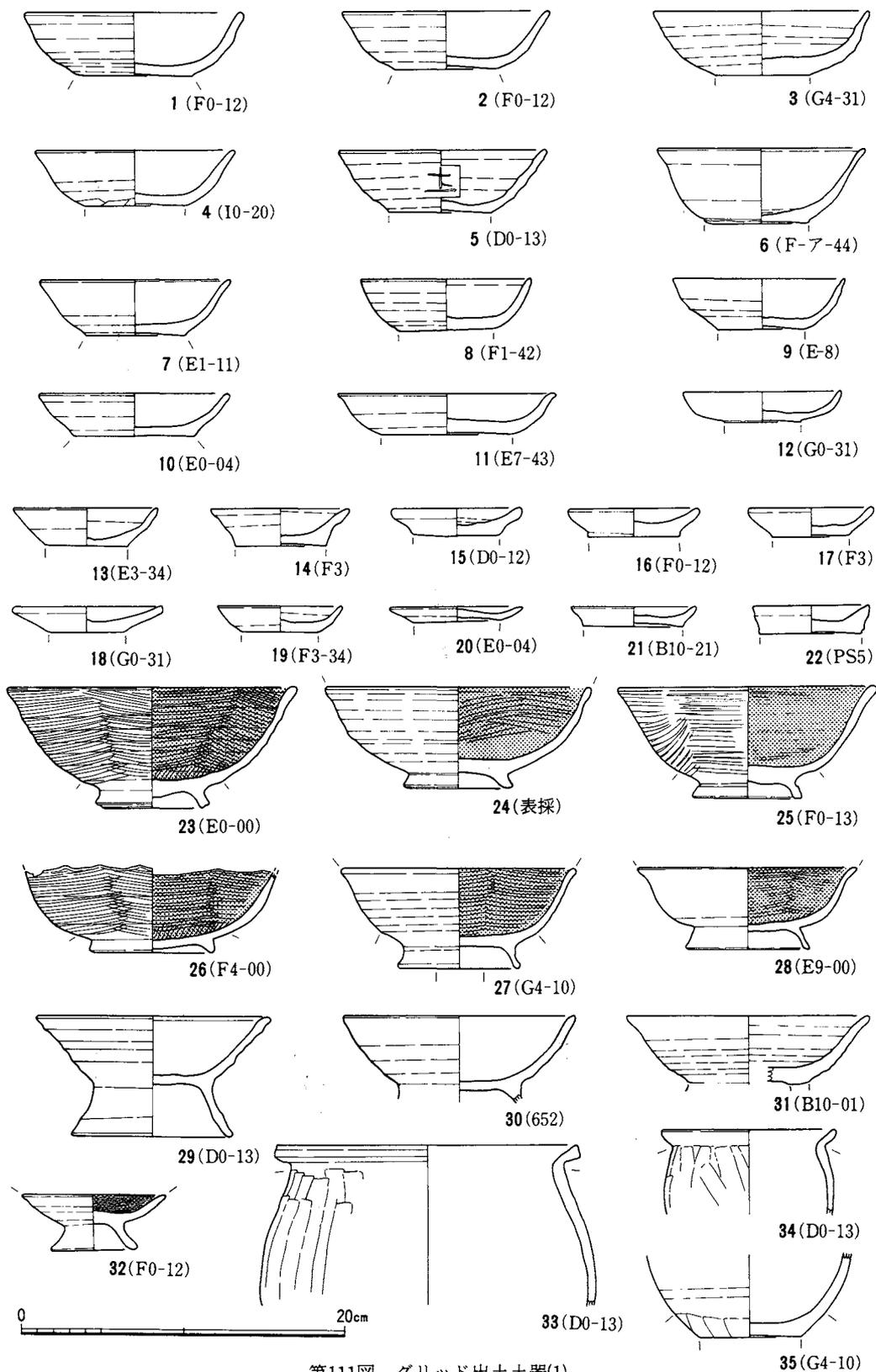
面に手持ちヘラケズリが施される。「八富」と判読できよう。3は体部下端から底部全面手持ちヘラケズリで、内面黒色処理される。墨書は「正上」と読める。4は底径8.0cmを測る。底部は静止糸切り離して、体部下端から底部周縁に回転ヘラケズリ調整が加えられる。底部外面に「正上」と記される。28は口径13.4cm、器高3.7cmを測る土師器杯で、内面黒色処理が施される。底部は回転糸切り未調整である。体部外面に正位で墨書されるが、「保」となるうか。他は底部あるいは体部の小片で釈文については別表を参照していただきたい。

(4) 陶磁器 (第114図、原色図版3)

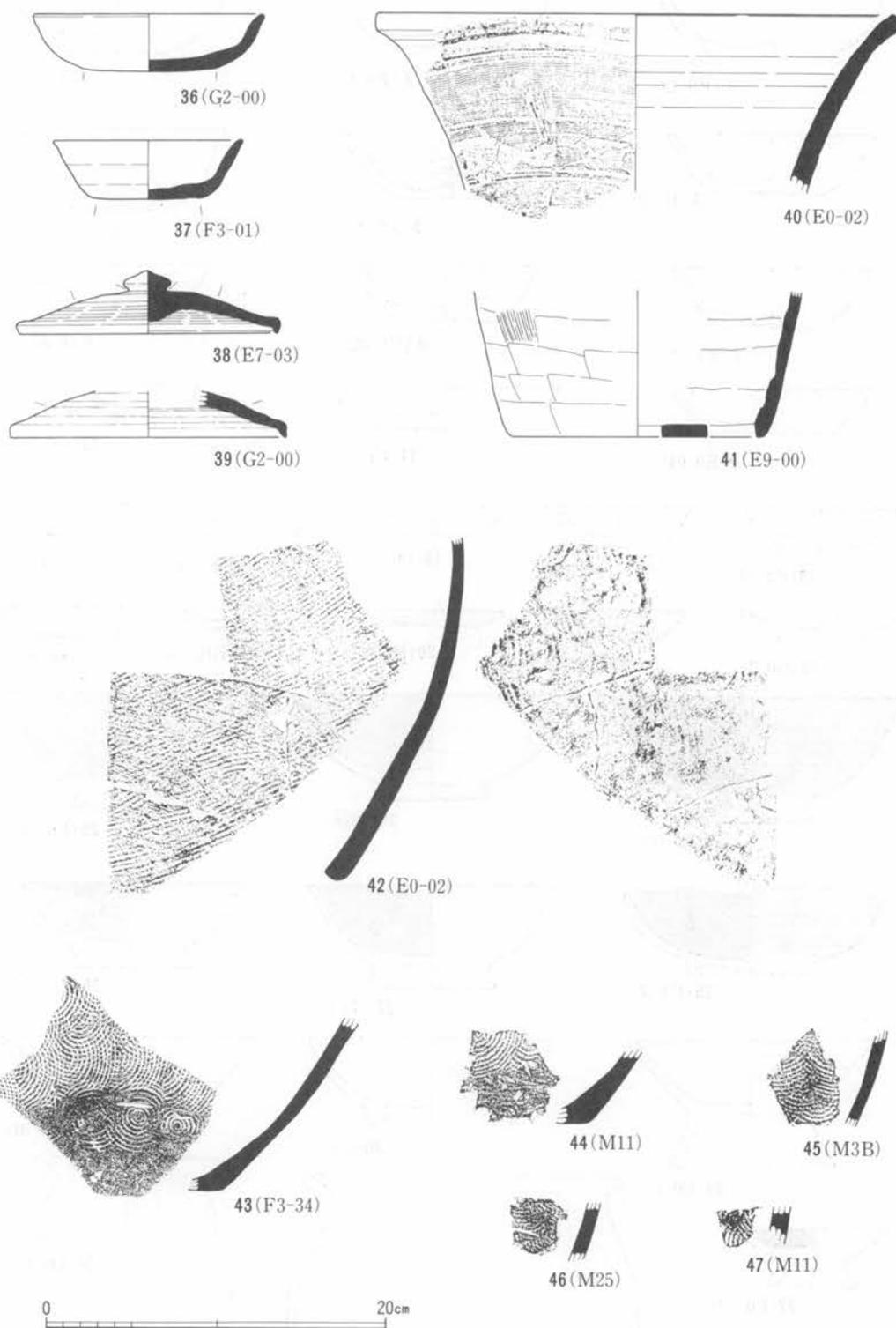
1は緑釉の口縁部片であるが、器形等の詳細は不明である。口縁端部には花卉状の切り込みを入れ、その部分の延長線上に外面では沈線、内面には突帯が施される。なお、口縁部の切り込みは釉を掛けた後に行われているようで、釉は削り取られている。胎土は緻密で黄白色の色調を呈する。釉の発色は濃緑色である。2・3は頸部下端に突帯を有する緑釉の瓶の破片である。突帯の形態等より別個体と考えられる。胎土はいずれも須恵質である。2は貫入のような釉の割れが顕著で発色は不良である。3はほとんど光沢を有しないが、濃緑色を呈する。4は2・3と同様の胎土を示す緑釉の底部片である。高台を欠損する。釉は光沢のない白色に近く、かなり変質しているようである。なお、胎土中に白色の混入物を縞状に含んでいる。5は同安窯系の青磁碗の口縁部片である。外面にやや幅広の櫛目、内面には細かいクシ状工具による花文状の文様が施される。内面上方には櫛目を切って沈線が巡っている。釉の発色はいわゆる飴色ガラス質である。太宰府編年I類に相当すると思われ、12世紀末から13世紀の所産と考えられる。6～8は龍泉窯系の青磁碗である。6は草花文、8にはシャープさを欠く不明瞭な文様が認められる。釉調は、6・7がやや青味がかかった濃い緑色を呈し、8はややくすんだ緑色で貫入が顕著である。6・7は底部の器肉が厚く、8は高台内面が深く削り取られるため体部下端と同様な厚さである。前者は12世紀後半～13世紀前半、後者は13世紀後半～14世紀前半の年代が与えられよう。9は折縁深皿の口縁部片で、内外面とも灰釉が掛けられる。14世紀後半～15世紀前半の所産であろう。10は常滑の甕の底部片である。

(5) 銅鏡 (第115図、図版96)

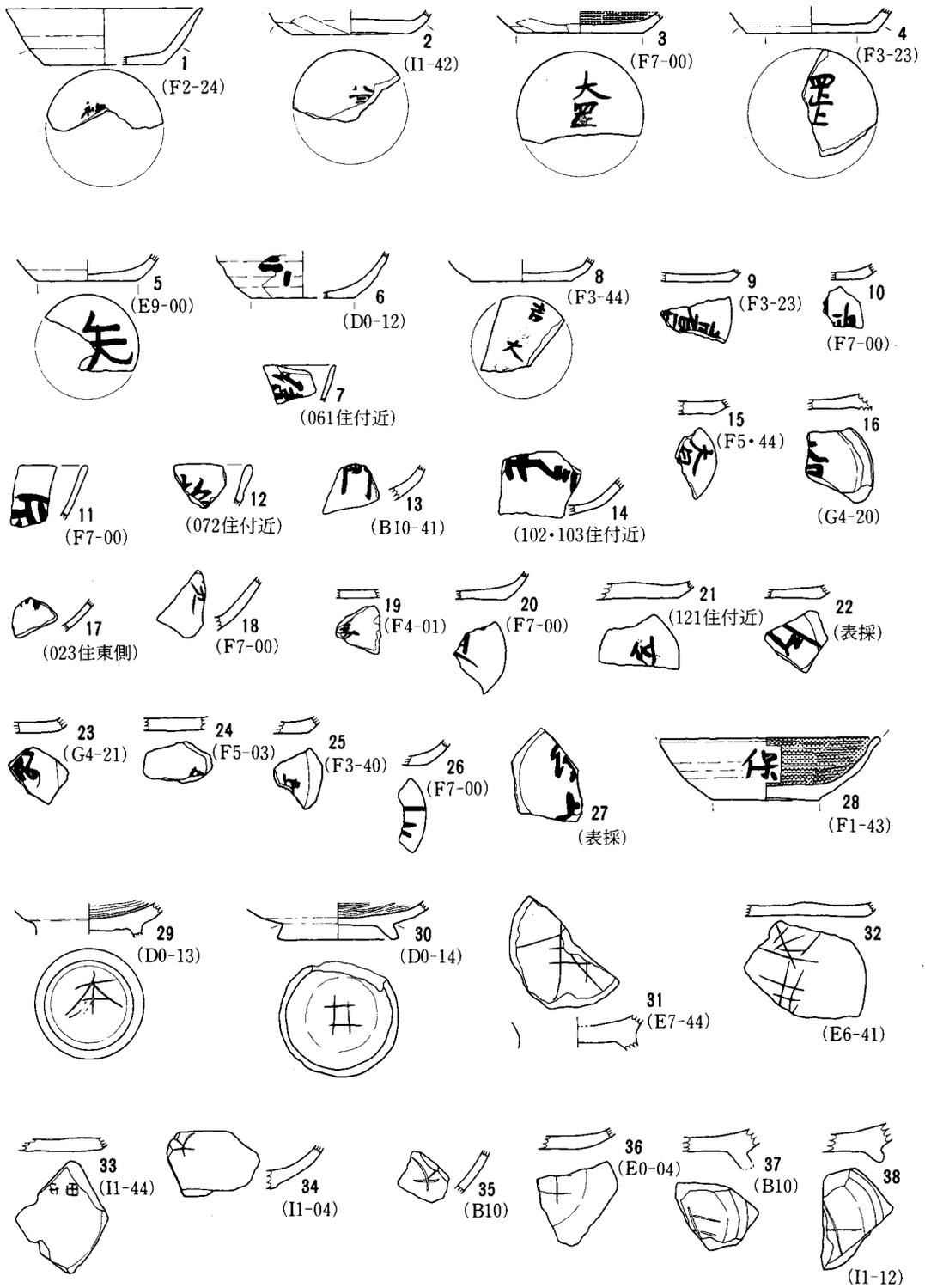
全体の1/5程の遺存であるが、推定口径7.6cm、現存高1.5cmを測る。体部外面は直線的、内面はやや内湾する。口唇部の厚さ3mmで、下方でも1mm程度の厚さである。全体的にやや厚手の造りといえよう。



第111図 グリッド出土土器(1)

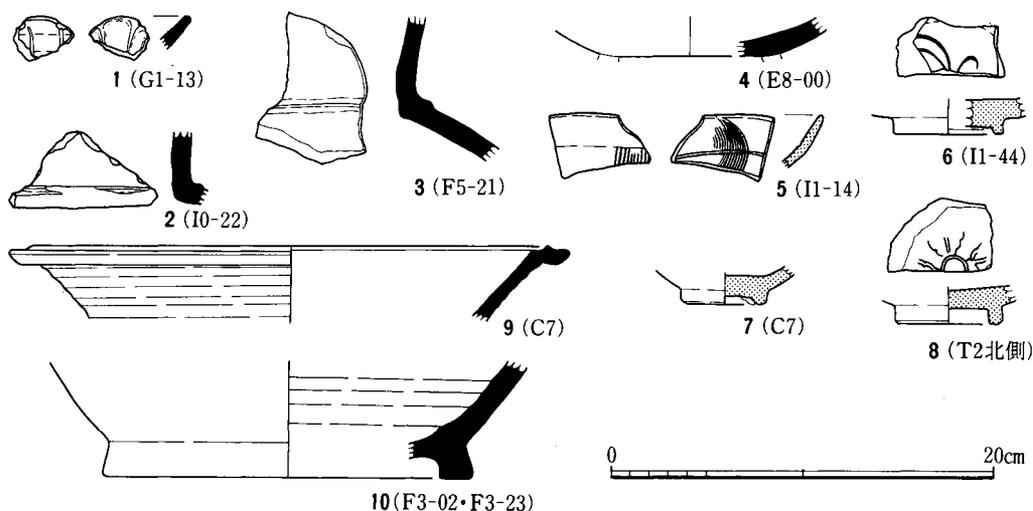


第112図 グリッド出土土器(2)

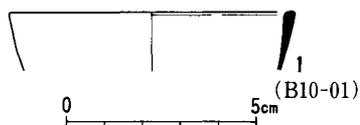


0 20cm

第113図 グリッド出土墨書・線刻土器



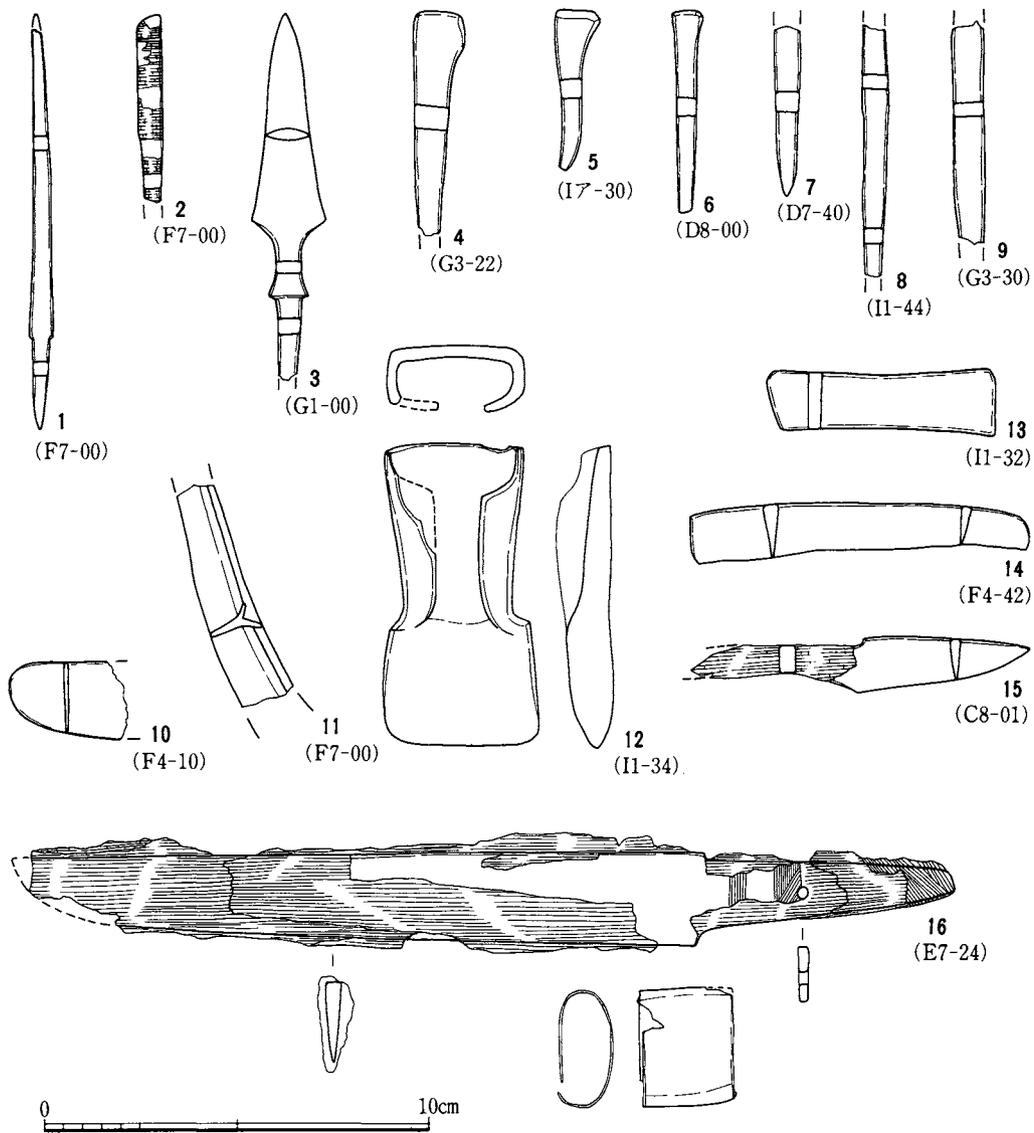
第114図 グリッド出土陶磁器



第115図 グリッド出土銅鏡

(6) 鉄製品 (第116図、図版90)

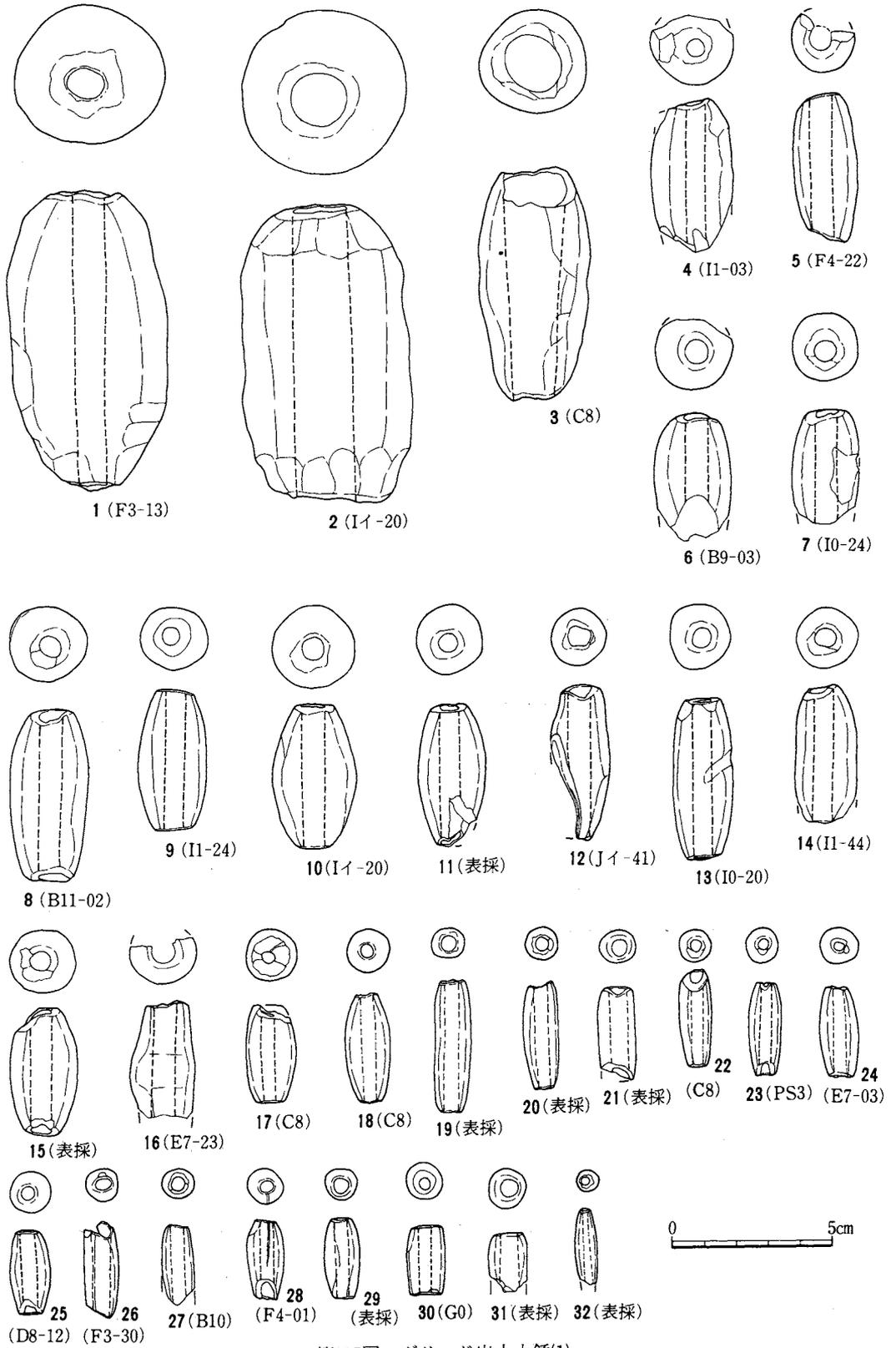
1は全長10.5cmを測る尖頭状の不明鉄製品である。断面方形で、錆で不明瞭ではあるが関を有している。2は片関の片刃箭式鉄鏃である。全体に横方向木目の木質が付着する。3は両丸造りの長三角形式鉄鏃で、茎尻を欠損する。身部は細身で全長5.4cmを測る。関はスカート状に広がり、方形の断面を呈する。4～9は鉄釘であろう。10は薄い板状を呈する。鏃の先端部とも考えられるが、詳細は不明である。11は鋤先の一部である。細身の小形品となろう。12はほぼ完形の鋤先で、全長7.8cmを測る。袋部は断面方形で、上側がやや幅広となり、完全に閉じてはいない。身部は幅4.0cmを測り、若干横長の方形を呈する。刃部は図の左側が僅かに上がっている。木質の遺存は確認されなかった。13は板状の長方形を呈するが、性格不明である。14は全長8.8cmを測り、刃部が形成される。全体にやや内湾し、先端部は丸く収められる。鏃のような機能が考えられるが、基部の折り返しは認められない。15は刀子で、茎尻を欠損する。身部は全長4.5cmと茎に比して短く何度か研ぎ返された可能性が強い。関部は棟側が直角、刃側が三角形状の両関となる。木質の付着が茎全体に見られる。16は推定全長24.7cmを測る短刀である。鋒を若干欠損する。両関平棟平造りで、全体に薄く仕上げられる。茎尻は斜位に切られ、ほぼ中央に目釘孔が穿たれる。全体に木質が遺存している。幅2.3cmの薄い銅板を折り曲げた楕円形の貴金具が伴う。金の貼り付けは認められない。



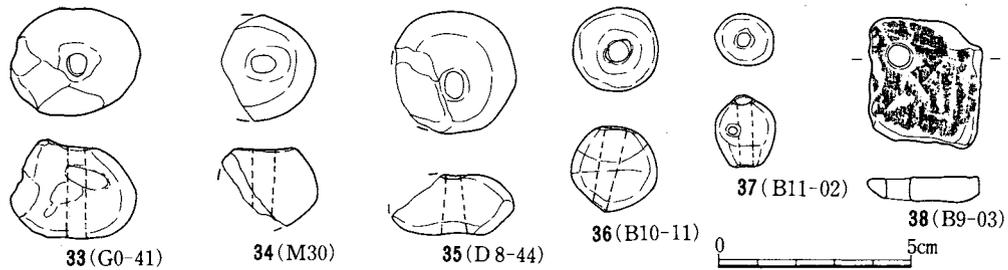
第116図 グリッド出土鉄製品

(7) 土錘 (第117・118図、図版91・92)

1・2はかなり大形品で、1は楕円形状、2は筒状を呈する。全体に指による成形が施されているが、両端部側は指頭によるオサエが強くすぼまる形態を示す。2にはナデの痕跡が残る。1は胎土中に砂粒を多く含み、赤褐色の色調を呈する。なお、1・2とも他の土錘に見られる紐ずれが確認されないことから、異なった使用状況が窺える。3は口径が大きく、1・2と同様大形品の部類にはいるものと思われるが、明瞭な紐ずれが認められる。4～16は楕円形状を呈する。長さ5.4～4.0cm、最大径2.7～1.8cmの範囲内の法量である。部分的に欠損している例が多いが、8・9・13・15は完形品である。9以外は両側の孔の同一方向に紐による摩耗及び



第117図 グリッド出土土錘(1)



第118図 グリッド出土土錘(2)

擦痕が観察され、使用状態を示すものであろう。なお、9・11は両端部を平坦に切り落とし、丁寧なナデが加えられる。17・18も楕円形状であるが、やや小形となる。19～31は管状に近い形態で、端部側の径がやや小さくなる。32はきわめて小形の円錐形を呈する。他の土錘に比べて整形が丁寧で、ミガキが施され、光沢を有する。33～36は略円形の平面形で、縦断面が算盤玉に近い形態を示す。33は造りがやや粗く、長石粒を多く含む。36は球形、37はやや縦長となる。37には側面から穿孔しようとした痕跡が認められる。38は外面平行叩きの須恵器甕の胴部片を利用したものである。方形に荒く割り、コーナー近くに穿孔が加えられる。この穿孔はかなり丁寧で、孔側面がきれいにナデられている。土錘に含めたが明確ではない。

グリッド出土土錘計測表

番号	長さ(cm)	径(cm)	孔径(cm)	重さ(g)	出土遺物	番号
1	9.53	4.89	1.19	201.0	F 3-13	0109
2	9.39	5.46	1.79	288.8	I イ-20	0271
3	7.28	3.39	1.60	69.2	C 8	0095
4	(4.85)	2.66	0.55	(23.4)	I 1-03	0223
5	4.75	1.95	0.68	(11.7)	F 4-22	0137
6	(3.9)	2.42	0.73	(15.5)	B 9-03	0408
7	(3.6)	2.18	0.66	(14.1)	I 0-24	0241
8	5.37	2.5	0.70	30.1	B11-02	0422
9	4.46	2.16	0.65	19.1	I 1-24	0204
10	4.46	2.65	0.70	25.7	I イ-20	0271
11	4.4	2.1	0.64	16.4	表採	—
12	4.8	1.8	0.78	(12.7)	J イ-41	0189
13	4.97	1.92	0.60	17.1	I 0-20	0232
14	4.26	1.95	0.64	(12.6)	I 1-44	0181

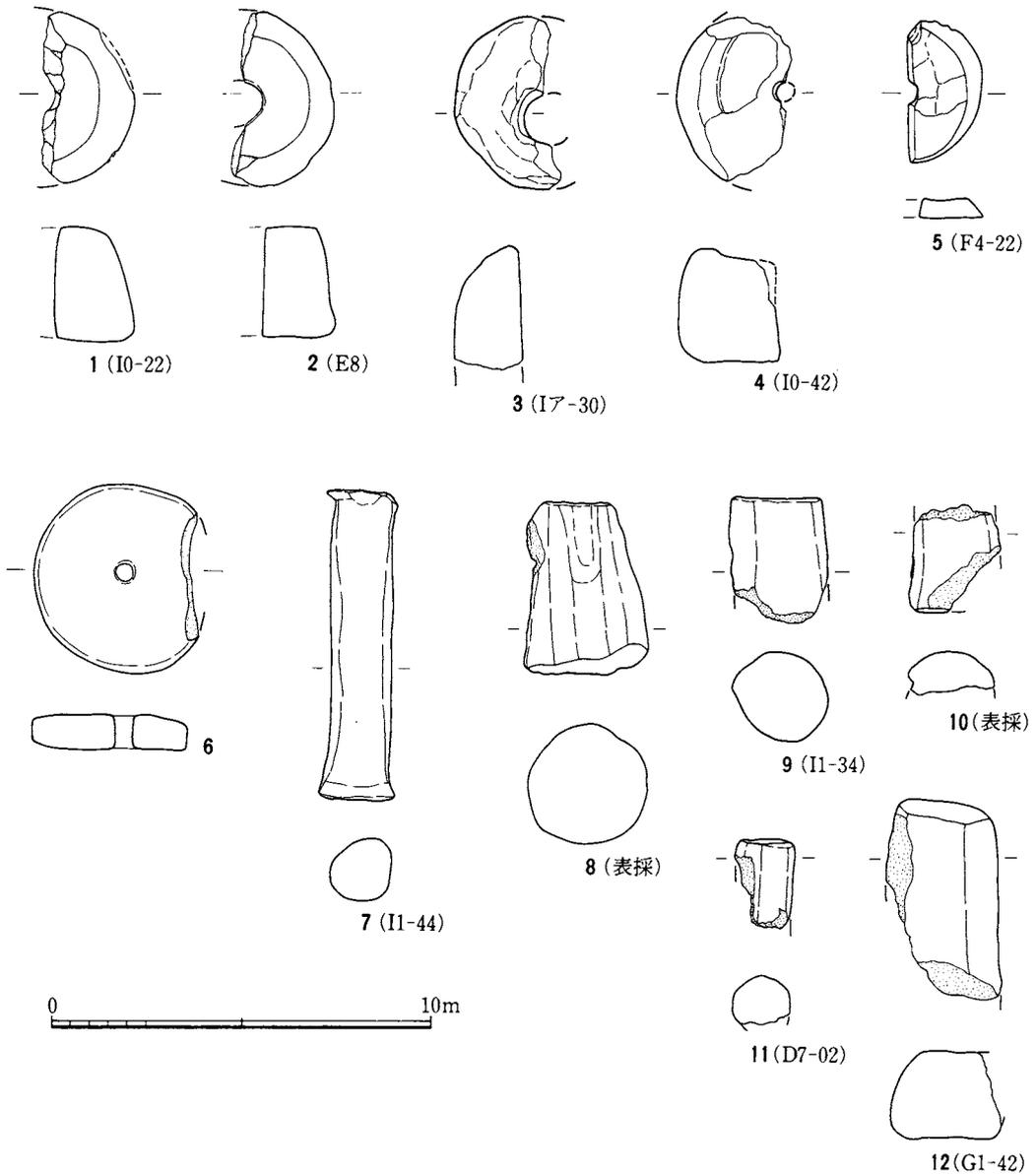
15	3.97	2.04	0.60	14.7	表採	
16	(3.64)	2.05	0.80	(9.4)	E 7-23	0003
17	3.00	1.60	0.38	7.6	C 8	0001
18	3.43	1.42	0.50	6.2	C 8	0012
19	4.17	1.18	0.45	5.4	表採	
20	3.34	1.08	0.32	3.5	表採	
21	2.90	1.24	0.54	3.6	表採	
22	3.0	0.98	0.38	2.9	C 8	0026
23	2.85	1.1	0.34	2.9	PS 3付近	0050
24	2.82	1.20	0.32	3.7	E 7-03	0111
25	2.66	1.27	0.43	3.6	D 8-12	0003
26	2.95	1.10	0.55	2.4	F 3-30	0001
27	(2.52)	0.99	0.37	(1.7)	B10	0404
28	2.46	1.10	0.40	2.8	F 4-01	0133
29	2.51	1.70	0.38	2.6	表採	
30	2.12	1.18	0.35	3.4	G 0	0059
31	(1.81)	2.90	0.49	(2.2)	表採	
32	(2.35)	0.69	0.18	(1.1)	表採	
33	2.55	3.30	0.60	22.9	G 0-41	0355
34	(1.94)	(2.73)	0.55	(9.4)	M30	0409
35	1.23	(3.32)	0.96	(16.3)	D 8-44	0160
36	2.14	2.24	0.64	9.6	B10-11	0395
37	1.77	1.52	0.54	3.4	B11-02	0423
38	3.29	2.91	0.68	8.9	B 9-03	0407

(8) 紡錘車 (第119図 1～6、図版91)

1～4は土製で、約1/2を欠損する。3は土錘の可能性もある。1・2は台形状を呈し、高さ3.0cmを測る。器面は丁寧にナデ調整される。胎土はやや粗く、長石の小砂粒を多く含む。4は側面が湾曲し、上径と底径の差が少ない。上面周縁が一段高く成形されている。上面及び側面には赤彩が施されているようである。5は滑石製で、下半を欠損する。上面も1/3程が遺存しているのみである。中央の破損面は意図的に割られた感が強く、他のものに再利用しようとした可能性も考えられる。6は須恵器の底部を利用したものである。全体に擦られており、原器表面を残していない。胎土中に雲母粒を多く含む。

(9) 支脚 (第119図7~12)

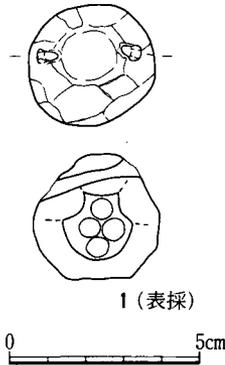
7は器高16.3cm、中央径3.1cmを測る完形品である。筒状の形態で、上下端部が僅かに広がる。調整は丁寧なナデで、端部及び上下面に指頭痕が残る。胎土は比較的緻密で、砂粒を多く含む。側面に煤及びカマド部材の砂質粘土が付着する。8・10は上部、9・11・12は下部を欠損する。いずれも被熱が著しい。



第119図 グリッド出土紡錘車・支脚 (1/4)

(10) 不明土製品 (第120図、図版96)

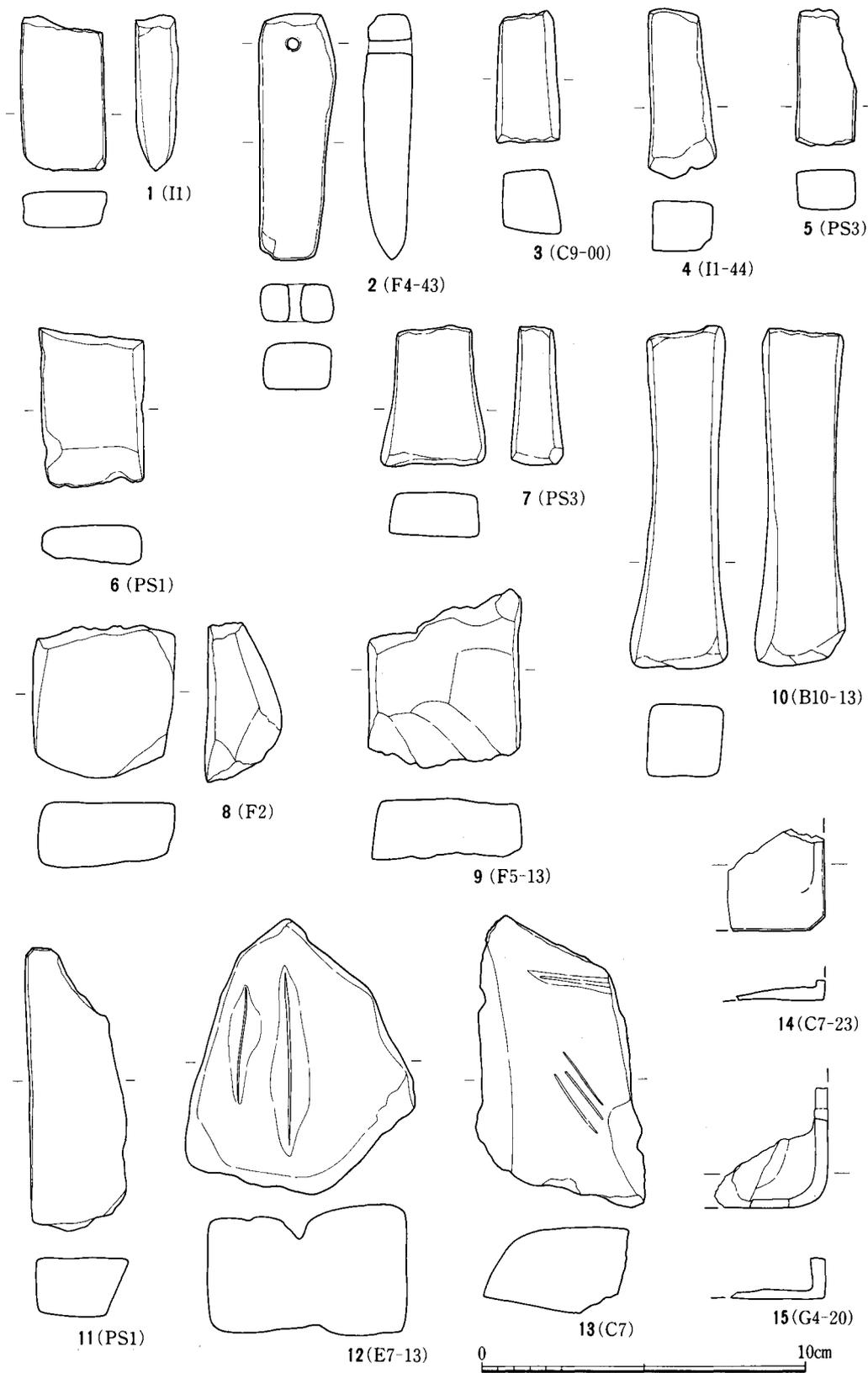
形状的には土鈴に近いが下部のスリットは施されていない。高さ3.2cm、幅3.3cmを測り、上側が若干突出する形態である。成形は、下半分を半球形状にし、その上に粘土紐を積み上げ、最後に蓋をするような方法を用いているようである。上部に貫通する穿孔が施され、孔の上端には紐による擦れが若干認められることからぶら下げて使用した可能性が強い。内部は空洞で径5～6mmの略円形を呈する土製小玉が入っている。調整は粗く、指頭による強いナデツケが加えられるため器面の凹凸が顕著である。



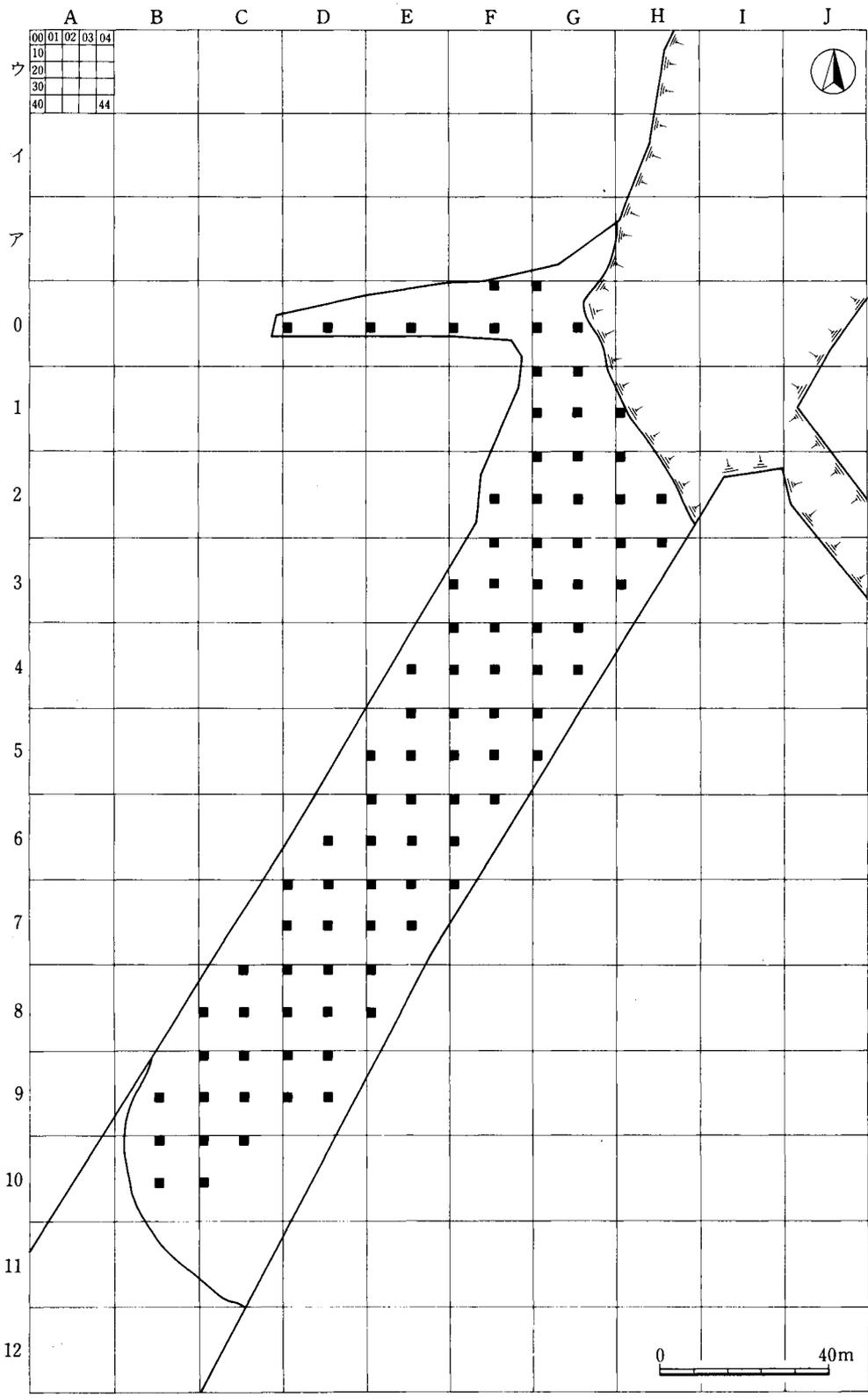
第120図 グリッド出土土製品

(11) 石製品 (第121図、図版93)

1～13は砥石である。1・2・6は先端部が刃状を呈するものである。2は完形品で、全長7.7cm、最大幅2.3cmを測る。全体に丁寧な研磨が認められ、上部部に貫通孔が穿たれる。砂岩製である。1・6は上半を欠損するが、2より大形となろう。側面には線状の擦痕が残る。1は安山岩、6は砂岩製である。3～5は断面方形の小形品で中央部のみ遺存である。全面が丁寧に研磨される。3・5は安山岩、4は凝灰岩製である。7は偏平で、上部を欠損する。下端がやや広がる形態である。安山岩製。8・9も安山岩製で、9には線状の研磨痕が多条残る。10は断面正方形の角柱状を呈する。4面ともきわめて平滑である。凝灰岩製。11も凝灰岩製である。12・13は砂岩製である。12は不整形で上部部を若干欠損するのみである。側面及び下面は平滑な研磨、表裏面には線状の深い研磨が認められる。断面三角形で、刃部を有する鉄製品を研いだようである。13にも線状の研磨痕が残るが、12程深くない。14・15は硯である。小片のため全容は不明であるが、側縁は垂直に立つようである。滑石製で、造りは丁寧である。



第121図 グリッド出土石製品



第122図 旧石器時代確認グリッド配置図 (S=1/1,600)

第5節 旧石器・縄文時代

旧石器時代

本遺跡の上層の遺構調査時に旧石器時代に属すると思われる尖頭器・ナイフ形石器等が出土した。出土地点を中心に遺跡全体の約4%にあたる364㎡に確認のグリッドを入れたが、遺物は全く出土しなかった。なお、本遺跡の基本層序は次の通りである。(第122・123図)

1層 表土層(耕作土)

2層 橙褐色土層、所謂、新期テフラを含む層である。

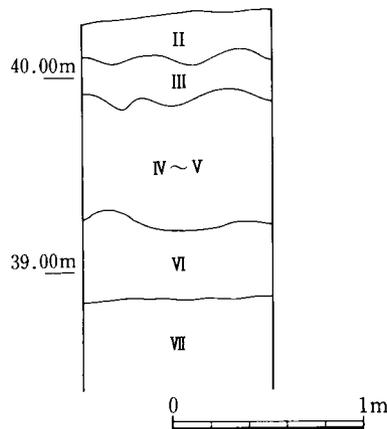
3層 黄褐色軟質ローム層、所謂、ソフトローム層である。

4層～5層 黄褐色硬質ローム層、所謂、ハードローム層で、第1黒色帯にあたる層である。

比較的厚い堆積をしている。

6層 明褐色硬質ローム層、始良T n火山灰層で、上部に黄白色のブロックが目立つ。

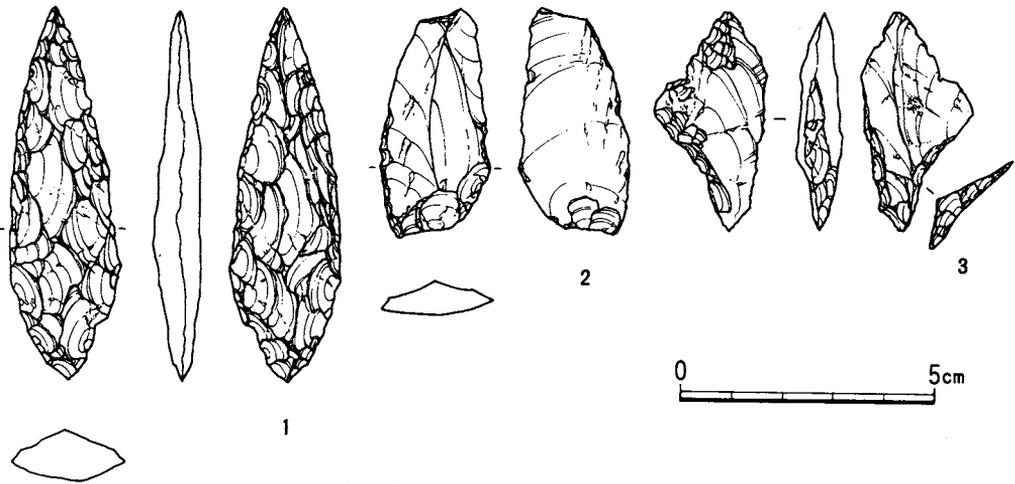
7層 暗黄褐色ローム層、所謂、第2黒色帯に相当する層で、赤色スコリアを多く含む。



第123図 吉原三王遺跡基本層序柱状図 (F4-00)

出土石器 (第124図、図版101)

1は木の葉形を呈する尖頭器である。器面全体に調整剥離を施し、細部の調整は両側縁部に集中する。石質は安山岩である。最大長7.52cm、最大幅2.14cm、厚さ0.87mm、重さ13.3gを測る。2・3はナイフ形石器である。2は表・裏面に主要剥離面をもち、微細な調整により基部を整形する。石質は珪質頁岩である。最大長4.65cm、最大幅2.34cm、厚さ0.74cm、重さ6.2gを測る。3も2と同様で、主要剥離面を表裏に残し、基部と刃部を微細な調整により整形する。石質は黒曜石である。最大長4.33cm、最大幅2.14cm、厚さ0.76cm、重さ4.6gを測る。



第124図 旧石器時代石器実測図

縄文時代

1. 土壌

本遺跡から検出された縄文時代の遺構は、台地中央部、調査区の南側にいちしている。遺構は全て土壌で、21基確認された。全体の平面分布からD9グリッドに合計10基の土壌が集中している。(第125図)

J-1号土壌 (第126図)

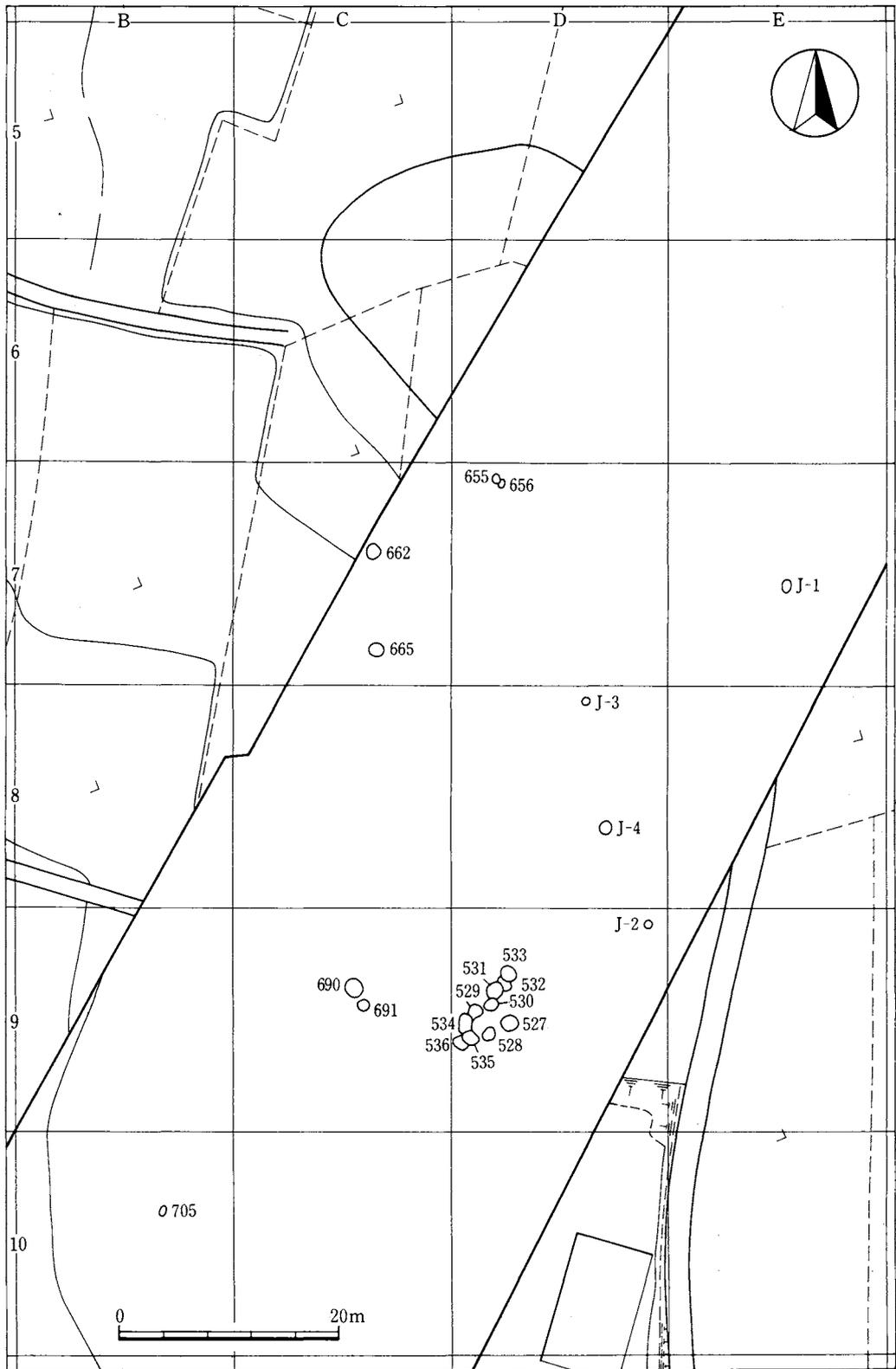
E7-22グリッド、122号住居跡の東側に位置する。122号住居跡のプラン検出中に鉢形土器が出土した。土器は、底部を上にした状態で、口縁部から胴部にかけてつぶれていた。本土器出土地点には縄文土器包含層はなく、包含層中に捨てられた土器と解釈するよりはむしろ、何らかの遺構が存在していたが遺構の掘り込みが浅く、検出が困難であったと理解する。出土土器から本遺構は加曾利EIV期のものと判断できる。

J-2号土壌 (第126図、図版38)

D9-04グリッドにおいて検出した土壌である。土壌の中央には、口縁部を欠く深鉢形土器が正位の状態で埋められており、土壌と呼ぶよりむしろ埋甕遺構である。形態は、長径87cm・短径65cmの楕円形を呈する。掘り込みは確認面から深いところで約23cm、浅いところで約10cmで、底面にはやや凹凸が認められる。出土土器から本遺構は加曾利E期のものと判断できる。

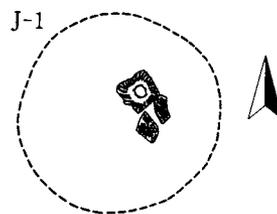
J-3号土壌 (第127図)

D8-02グリッドにおいて検出した土壌である。形態は直径約120cmの円形プランを呈する。



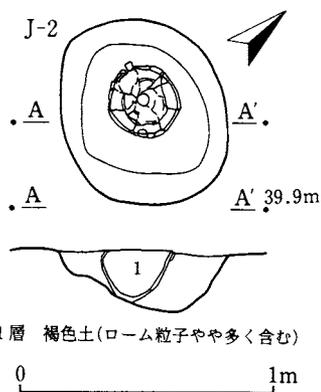
第125図 縄文時代遺構配置図 (S=1/600)

確認面からの掘り込みは、約70cmを測り、壁がほぼ垂直に立ち上がる。また、底面は平坦である。土層中にはロームブロックを含む層が第4層において認められ、また、土の堆積が自然堆積ではないことから埋め戻されたものと判断できる。本土壌の覆土中から加曾利EIV式土器が破片で出土している。



J-4号土壙（第127図）

D 8-33グリッドにおいて検出した土壙である。形態は直径約120cmの円形プランを呈する。確認面からの掘り込みは、約50cmを測り、壁がほぼ垂直に立ち上がる。また、底面は平坦である。土層中にはロームブロックを含む層が認められ、また、土の堆積が自然堆積ではないことから埋め戻されたものと判断した。本土壌の底面直上から加曾利EIV式土器が破片で出土している。



第126図 縄文時代土壙(1)

527号土壙（第127図）

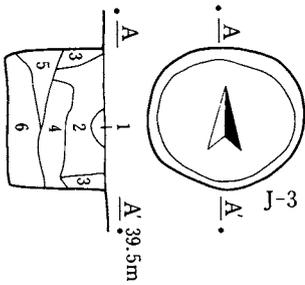
D 9-21グリッドにおいて検出した土壙である。形態は直径約150cmの円形プランを呈する。確認面からの掘り込みは、約65cmを測り、壁がほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦である。土層中にはロームブロックを含む層が認められ、また、土の堆積が自然堆積ではないことから埋め戻されたものと判断した。本土壌の覆土中から加曾利EIV式土器が出土している。

528号土壙（第127図）

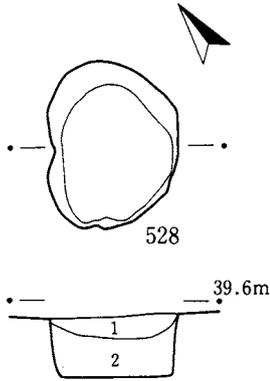
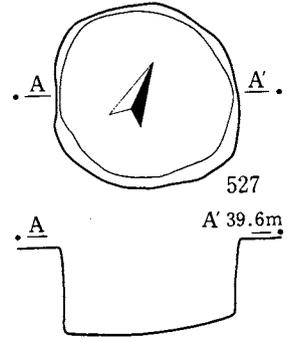
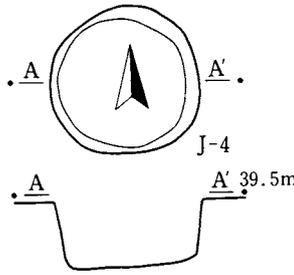
D 9-20グリッドにおいて検出した土壙である。形態は長径約130cm、短径100cmの不整形プランを呈する。確認面からの掘り込みは、約45cmを測り、壁がほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦である。土層中にはロームブロックを含む層が認められる。本土壌の覆土中から加曾利EIV式土器が出土している。

530～533号土壙（第127図）

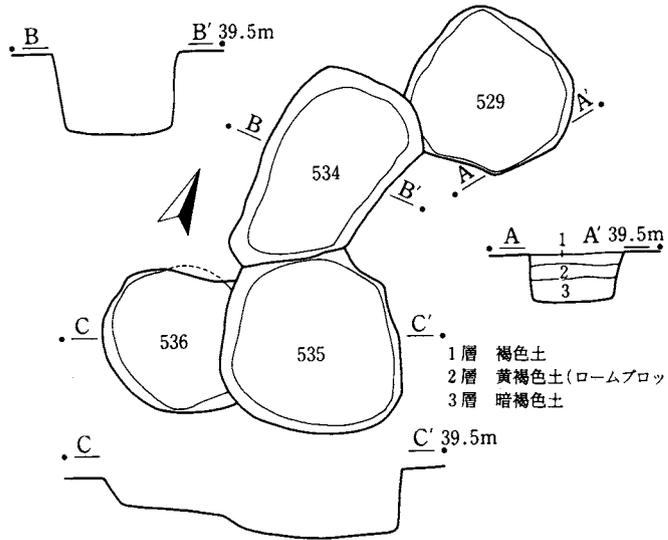
D 9グリッドに集中する土壙群の一つである。530号土壙は単独であるが、531号・532号・533号土壙はそれぞれ切り合い認められた。530号土壙は120cmの円形プランを呈する。531号から533号土壙は、100cmから160cmの円形プランを呈するものと思われる。土層の切り合い関係から古い順に533号→532号→531号の順に構築されたものと思われる。土層は全て水平堆積で、中間部



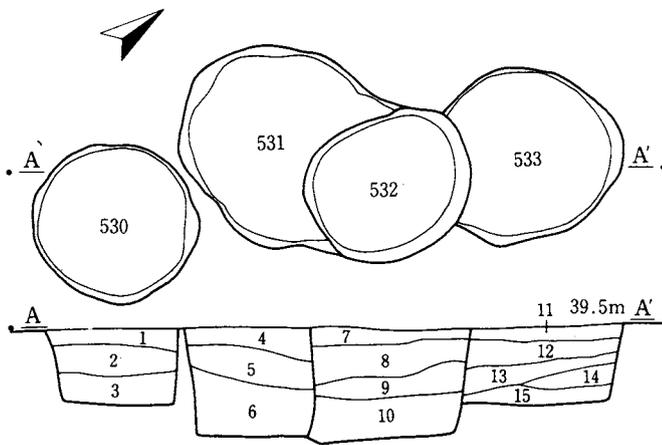
- 1層 赤褐色土(焼土ブロック)
- 2層 黒褐色土(ローム粒子・焼土粒子含む)
- 3層 黄褐色土(ローム粒子多く含む)
- 4層 黄褐色土(ロームブロック含む)
- 5層 暗褐色土(ロームブロック若干含む)
- 6層 褐色土(ローム粒子を多く含む)



- 1層 暗褐色土(ローム粒を含む)
- 2層 褐色土(ローム粒子・ロームブロックをやや多く含む)



- 1層 褐色土
- 2層 黄褐色土(ロームブロック)
- 3層 暗褐色土



- 1層 褐色土(ローム粒子若干含む)
- 2層 暗褐色土(ロームブロックを含む)
- 3層 黒褐色土(粒子が細かい)
- 4層 明褐色土(ロームブロック多く含む)
- 5層 褐色土(ロームブロック多く含む)
- 6層 黄褐色土(ロームブロック多く含む)
- 7層 褐色土(ローム粒子がやや多い)
- 8層 茶褐色土(ロームブロックをやや多く含む)
- 9層 暗褐色土(しまりが弱くバサバサである)
- 10層 黒褐色土(黒味を帯びバサバサである)
- 11層 暗褐色土(ローム粒子を含む)
- 12層 褐色土(ロームブロックを多く含む)
- 13層 黒褐色土(粘性を示す)
- 14層 暗褐色土(黒味を帯び粘性を示す)
- 15層 黄褐色土(粘性を示す)



第127図 縄文時代土壇(2)

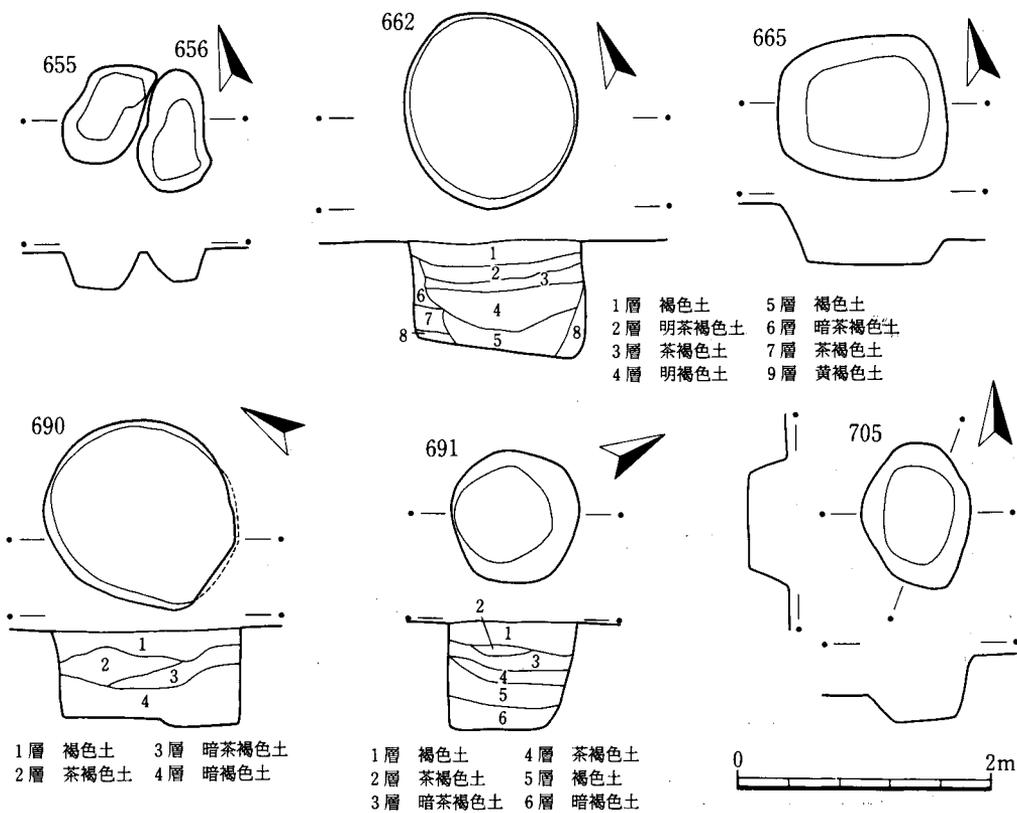
の土層中にロームブロックを多く含む層が認められることから本土壤は埋め戻されたものと考えられる。底面は平坦である。なお、533号土壙から加曾利EIV式土器の大形破片が出土している。

529、534～536号土壙（第127図）

529、534～536号土壙は530～533号土壙と同様D9グリッドに集中する土壙群の一つである。529号土壙と530号土壙はわずか数cmは離れるだけである。527～536号土壙は一つの土壙群として捉えられるものであるが、説明の便宜上切り合いを示した土壙群はまとめて説明した。529号、535号、536号土壙は直径約100cmから150cmの円形プランを呈するが、534号土壙は長径180cm、短径100cmの長楕円形プランを呈する。切り合いは不明である。底面は全て平坦である。536号土壙の一部はオーバーハングする。なお、534号、535号、536号土壙から出土した遺物が接合している。

655、656号土壙（第128図）

D7-01グリッドより検出した土壙である。2基の土壙が並んだ状態で検出された。長径約90cm、短径約60cmの不整形プランを呈する。底面までの深さは655号土壙が30cmで、656号土壙



第128図 縄文時代土壙(3)

が25cmであり、底面にやや凹凸が見られる。加曾利EIV式土器が若干出土している。

662号土壙（第128図）

C7-23グリッドにおいて検出された土壙である。平面形態は直径150cmの円形プランを呈する。底面までの深さは、確認面から90cmを測り、底面は平坦である。土層はほぼ自然堆積であるがロームブロックがやや多く目立つ。

665号土壙（第128図）

C7-43グリッドにおいて検出された土壙である。平面形態は長径130cm、短径110cmの隅丸長方形を呈する。底面までの深さは、確認面から40cmを測り、底面は平坦である。加曾利EIV式土器の小破片が数点出土した。

690号土壙（第128図）

C9-12グリッドにおいて検出された土壙である。平面形態は直径150cmの円形プランを呈する。底面までの深さは、確認面から80cmを測り、底面は僅かに段差を有する。土層はほぼ自然堆積であるがロームブロックがやや多く目立つ。

691号土壙（第128図）

C9-12グリッドにおいて検出された土壙である。平面形態は直径100cmの円形プランを呈する。底面までの深さは、確認面から約80cmを測り、底面は平坦である。土層はほぼ自然堆積であるがロームブロックがやや多く目立つ。

705号土壙（第128図）

B10-13グリッドにおいて検出された土壙である。平面形態は長径110cm、短径90cmの楕円形を呈する。底面までの深さは、確認面から50cmを測り、底面は平坦である。

2. 土壙出土遺物

J-1号土壙（第129図3、図版97）

第129図3は、口縁部がキャリパー状を呈する鉢形土器である。口縁部直下に無文帯をもち、胴部との文様の境には一段の稜をもつ。胴部の文様は、単節縄文（RL）を口縁部付近で横位、以下斜位に施す。口縁部は半分ほど欠損する。器高約20cm、口径約20cm、底部の直径約6cmを測る。本土器は縄文以外に文様の特徴がないが、器形や口唇部形態から加曾利EIV式土器と考えられる。

J-2号土壙（第129図1、図版97）

第129図1は、口縁部を欠く深鉢形土器である。胴下半部でやや膨らみをもちながら底部へと移行する器形を呈する。文様は、全て縄文である。無節縄文（L）により縦位施文を行ない、底部直上は文様が施されず、無文となる。スクリントーンにより図示したように胴下半部の内面に炭化物が付着する。口縁部を欠くため帰属時期ははっきりしないため、一応加曾利E式土器として捉えたい。

J-3号土壙（第131図10～19、図版98）

10は口縁部直下に無文帯をもち、沈線によるU字状文・逆U字状文を施すものである。逆U字状文の口縁部直下には突起が付けられる。地文の縄文は単節縄文（LR）により縦位施文する。11～15は口縁部直下に無文帯をもち、微隆起線によるU字状文・逆U字状文を施すものである。14・15はその胴部破片である。11・14は単節縄文（RL）で、その他は単節縄文（LR）が施される16・17は上記の土器の縄文部の破片である。原体は単節縄文（LR）である。18は細い竹串状の工具を用いて、口縁部直下から縦位の条線を施すものである。19は無文の土器であり、表・裏面にケズリの痕を顕著に残す土器である。断面の厚さや器形等からミニチュア土器と考えられる。これらは全て加曾利EIV式土器と考えられる。

J-4号土壙（第129図2、第131図20・21、図版97・98）

2は口縁部がやや外反し、胴部で僅かな膨らみをもつ鉢形土器と考えられる。口縁部直下にやや幅の広い無文帯を有する。胴部の文様は、単節縄文（RL）を地文として施したのち、幅の広い粘土帯を波状に施す。粘土帯は無文で、粘土帯上は丁寧なミガキが施される。また、波状部には粘土を多く積み上げ、突起状にする。推定口径26cmを測る。20は胴部の破片であり、沈線による楕円状の区画帯と磨消縄文帯が認められる。21は単節縄文（LR）のみ施された土器で、縄文以外の文様は認められない。これらは全て加曾利EIV式土器と考えられる。

527号土壙（第129図4～6、第131図22～25、図版98）

4は口縁部が内湾し、キャリパー状になり、胴部でくびれる。更に、胴下半部で膨らみを持ちながら底部に移行する。所謂、瓢箪形を呈する。口縁部直下には無文帯を有し、一段の稜をもつ。文様は単節縄文（LR）を施したのち、沈線による波状文・U字文・逆U字文・円形文等を描き縄文部を区画する。区画された縄文部以外の縄文部は丁寧なミガキにより磨り消される。5は底部直上の破片で、単節縄文（LR）が施される。6は胴部のくびれ部の破片である。地文に単節縄文（LR）を施したのち、隆帯により区画文・円形文等を作成するものである。22は口縁部直下に無文帯を有し、胴部が縄文となるものである。胎土・器面調整・原体が6と

類似しており、あるいは6の口縁部破片かもしれない。23は胴部のくびれ部の破片で、擦の粗い単節縄文(LR)を施している。24・25は土器片を利用した土錘である。周囲を丁寧に調整し、長径部に切り目を作成する。24は胴部破片を25は口縁部破片を用いる。これらは全て加曾利EIV式土器と考えられる。

528号土壙 (第130図7)

7は口縁部を欠くが、キャリパー状を呈する深鉢形土器であろう。地文に単節縄文(RL)を施し、沈線によって円形文・逆U字文を作成するものである。円形文や逆U字文内は縄文を残すが、その他の部分は縄文を磨り消す。一部に縄文を磨り消した痕が残る。加曾利EIV式土器に比定できよう。

533号土壙 (第130図8、第131図26~31、図版97・98)

8は口縁部が若干内湾し、胴部でくびれる深鉢形土器である。口縁部直下に無文帯を有し、胴部が縄文となる。縄文の原体は、単節縄文(LR)である。26は口縁部に数単位の小波状口縁をもつ深鉢形土器である。口縁部直下に無文帯をもち、胴部には隆帯による逆U字文を施すものである。縄文の原体は単節縄文(LR)である。27は口縁部が内湾する深鉢形土器である。口縁部直下は無文で、以下に竹串状の工具を用いたと思われる刺突を二段に巡らす。胴部は条線文が縦位に施される。28、29は口縁部が無文帯を有し、以下縄文を施すものである。縄文の原体は単節縄文(LR)で、29には原体の末端が縦位に認められる。30は沈線による曲線文が認められる。31は口縁部が内湾する深鉢形土器である。口縁部直下に無文帯を有し、波頂部には突起が付けられる。胴部には縄文を区画するU字文等が沈線により施される。これらは何れも加曾利EIV式土器と考えられる。

534号土壙 (第130図9、図版97)

9は533号・534号・535号より出土した土器が接合したものである。口縁部破片は535号土壙から胴部の大形破片は534号土壙からそれぞれ出土している。胴部の小破片1点がやや距離の離れた533号土壙から出土している。この遺物が本土壙に伴うものなのかは判然としない。この土器の器形は、口縁部が内湾し、胴部でくびれる深鉢形土器である。口縁部直下に無文帯を有し、隆帯によるU字文・逆U字文を作成するものである。縄文の原体は単節縄文(RL)である。加曾利EIV式土器に比定できよう。

535号土壙 (第131図32、図版98)

32は深鉢形土器の胴下半部の破片である。隆帯による区画がなされる。縄文の原体は単節縄

文（LR）である。

655号土壙（第132図33、図版98）

33は深鉢形土器の胴部の破片である。隆帯による区画がなされる。縄文の原体は単節縄文（RL）である。

656号土壙（第132図34～38、図版98）

34は口縁部の破片である。隆帯による逆U字文が認められる。縄文の原体は単節縄文（RL）である。35は胴部の破片である。隆帯によるU字文・逆U字文が部分的に認められる。縄文の原体は単節縄文（LR）である。36は縄文のみ施された胴部の破片である。縄文の原体は単節縄文（LR）である。37は底部の破片である。底部直上には文様が施されておらず、ナデによる調整がなされている。38は土器片を利用した土器片錘である。一方を欠くが、周囲を丁寧に調整している。これらは加曾利EIV式土器に比定されよう。

665号土壙（第132図39）

39は深鉢形土器の口縁部の破片である。隆帯による区画がなされる。縄文の原体は単節縄文（LR）である。口縁部直下の隆帯上には部分的にキザミが施される。

690号土壙（第132図40～43、図版98）

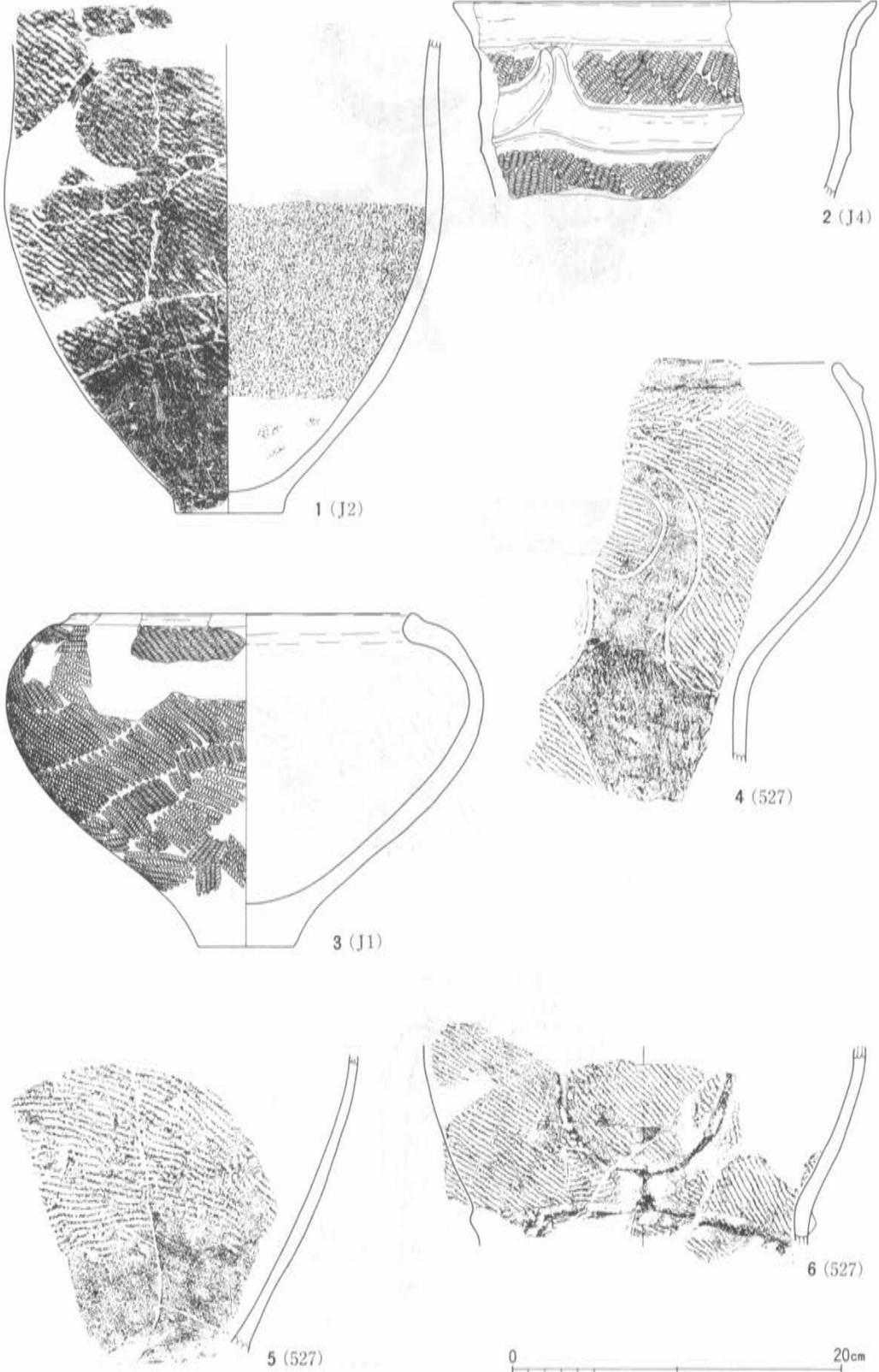
40～43は全て胴部破片である。40.41は沈線による区画がなされる。縄文は単節縄文（LR）である。42.43は縄文のみ施されたものである。42は単節縄文（LR）を施し、43は単節縄文（RL）を施している。

691号土壙（第132図44～51、図版98）

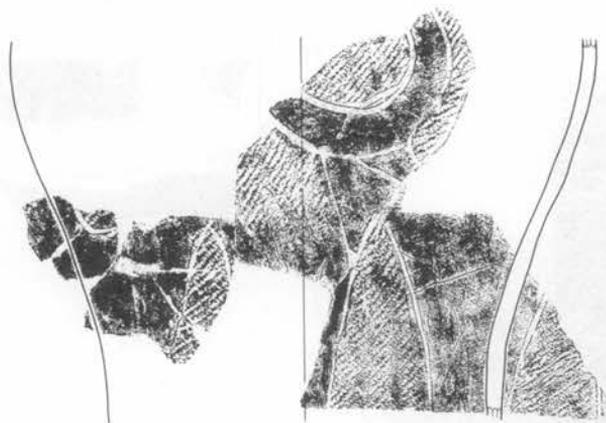
44は無文土器である。45は原体の不明な燃の細かな縄文を施す。46、47は隆帯による区画をもつものである。48は縄文のみを施す胴部の破片である。単節縄文（RL）を施す。49～51は土器破片を利用した土器片錘である。丁寧に周囲を加工する。

705号土壙（第132図52～54、図版98）

52、53は深鉢形土器の胴下半部の破片であり、同一個体と考えられる。隆帯による逆U字文が認められる。52の一部にはU字文の一部が認められる。単節縄文（LR）と思われる。54は52、53の底部の破片であろうか。胎土や器面調整が類似する。底径5.6cmを測る。底面には炭化物の付着が認められる。



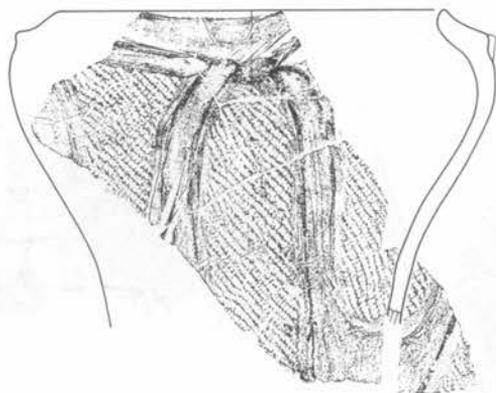
第129図 遺構出土遺物(1)



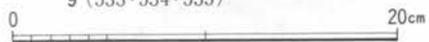
7 (528)



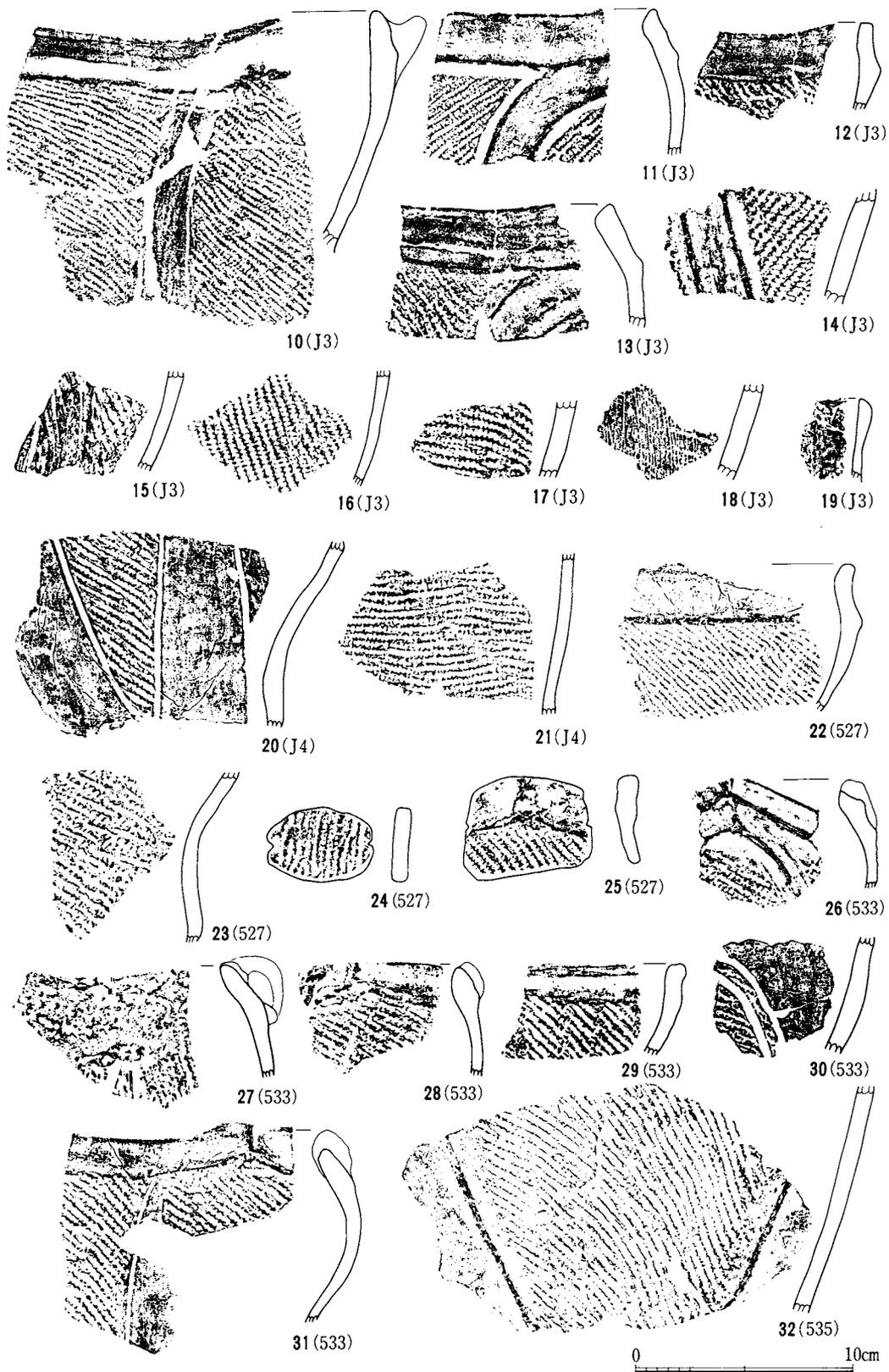
8 (533)



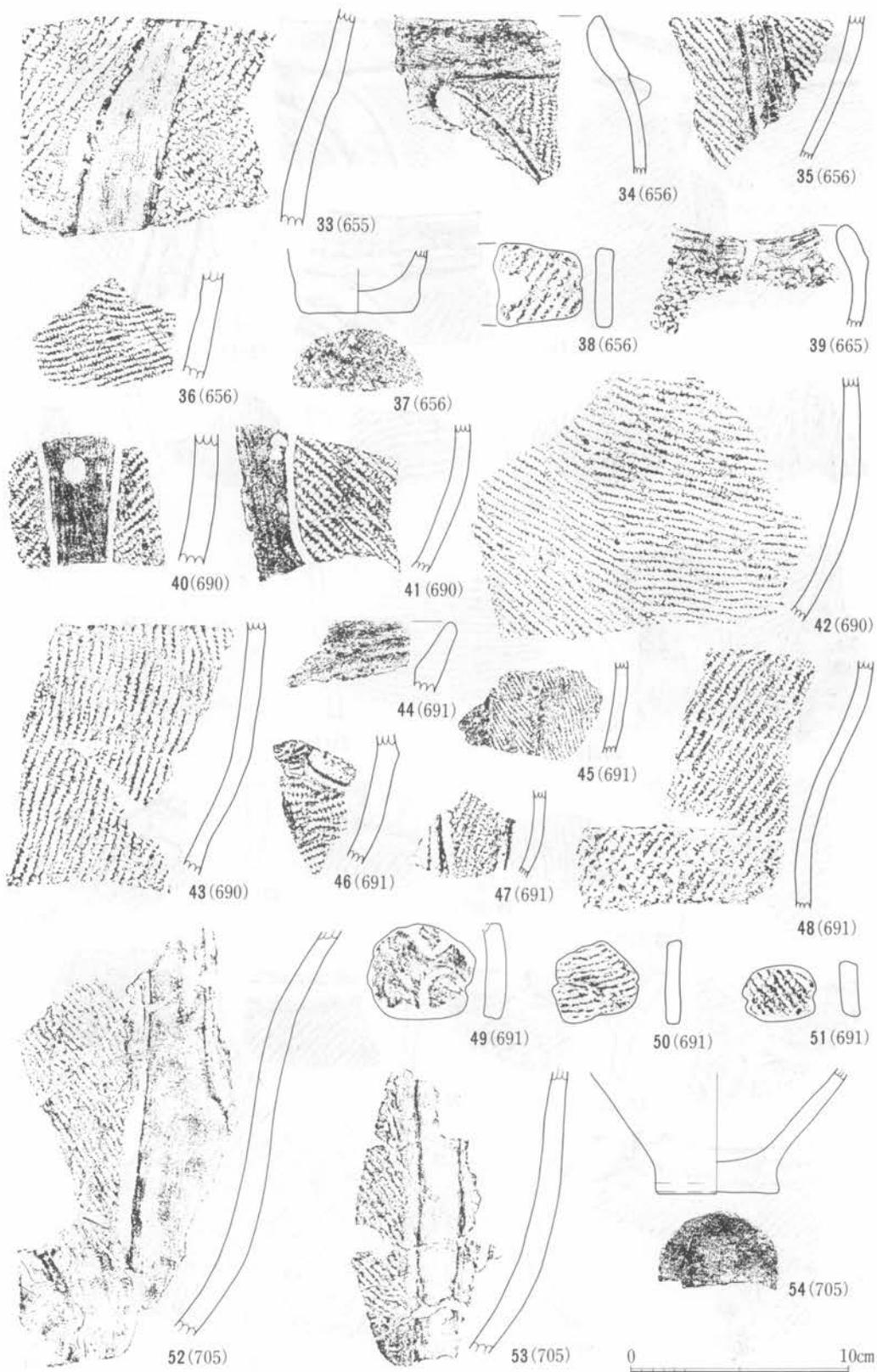
9 (533・534・535)



第130図 遺構出土遺物(2)



第131図 遺構出土遺物(3)



第132図 遺構出土遺物(4)

3. グリッド出土土器

当遺跡からは縄文時代早期から後期に至る土器破片が出土している。早期に属するものを第1群、前期に属するものを第2群、中期に属するものを第3群、後期に属するものを第4群として以下説明を加える。

第1群土器（第134図7～29、図版99）

早期に属する土器片として、その前葉の撚糸文系土器（第1類）、中葉の沈線文系土器（第2類）、後葉の条痕文系土器（第3類）がそれぞれ出土した。

第1類（7～11）

早期前半期の撚糸文系土器である。7は口唇部形態が丸頭状を呈する。口縁部直下に無文帯をもち撚の粗い単節縄文（LR）を施す。内面は丁寧なミガキである。10は胴部の破片であるが土器の特徴が7と同様である原体は単節縄文（RL）である。8は口唇部形態が角頭状を呈する。口縁部直下から撚糸文（R）を縦位に施文する。内面の調整は口縁部直下がナデ、以下胴部がケズリ（←）である。9は口唇部形態が丸頭状を呈し、口縁部で僅かに外反する。口縁部直下より撚糸文（R）を施す。内面の調整は口縁部直下がナデ、以下胴部がケズリである。ケズリの方向は不明である。11は胴部の破片である。単節縄文（RL）の撚り紐を軸棒に巻きつけ、鋸歯状に施すものである。一部に文様が交差し、格子状に認められる部分がある。内面の調整は丁寧なミガキである。11は文様施文技法から考えるとたいへん珍しい。また、この文様が鋸歯状を呈することから撚糸文系土器終末期に位置づけられるものと考えられる。

第2類（12～17）

早期中葉に位置づけられる沈線文系土器群を一括した。形式的に三戸式土器（第1種）と田戸下層式土器（第2種）に分けられる。量的には少なく、断片的である。

第1種（12）

12は胴部の破片であるが、おそらく、口縁部直下から横位の細沈線を胴部中位まで施し、その沈線間に数本一単位の集合沈線を施すものである。この場合集合沈線は8本を一単位としており、斜位の集合沈線は全体として幾何学文（鋸歯状文が多い）を描くものである。胴下半部の文様については不明だが、この類の土器は口縁部直下から胴部中の沈線文帯と胴下半部から底部に至る条痕文帯という少段構成をとる。

第2種（13～17）

13～17は田戸下層式土器である。田戸下層式土器は横位の沈線により口縁部直下の文様帯・胴部の文様帯・底部付近の文様帯という大きくは三つの文様帯を作出した後、それぞれの文様帯に幾何学的な文様を作出する。13、14、16は胴部の幾何学文部の破片である。13に見られるように胴部の幾何学文には縦位の刺突により文様帯を分帯する場合がある。この場合細沈線に

よる幾何学文は鋸歯状文を作出するものが多い。16は太沈線による幾何学文を施し、その太沈線に沿って細沈線が施される。この細沈線は付属的な文様要素であり、場合によっては刺突文が施される。15は口縁部直下の破片と考えられる。口縁部直下から太沈線により数本一単位のN字状文や鋸歯状文を描くものと考えられる。17は底部付近の破片である。底部付近の文様としては横位の太沈線・斜位の太沈線を施すものが一般的である。この場合は斜位の太沈線が巡らされたものと考えられる。

第3類 (18~29)

子母口式土器を一括する。子母口式土器は大きくは有文土器と無文土器に分けられる。有文土器は口縁部が若干外反する砲弾形を呈する深鉢形土器が一般的である。波状口縁となるものも見られる。文様は、口縁部直下に集約されるものが多く、胴部から底部にかけては無文で、器面調整に付けられた擦痕や条痕が認められる。口縁部直下の文様としては、刺突文・沈線文・絡条体圧痕文等が施され、口唇部にも同様な文様が施文される場合が多い。また、無文土器は器形は有文土器と変わらない。器面調整により付けられた刷目状工具による擦痕・ケズリによる擦痕・条痕等が認められる。これらの土器には微量の植物繊維を含むものが一般的である。

18~20は口縁部直下に文様を有する有文土器である。18は口唇部形態が丸頭状を呈し、口唇部に刺突文が施される。口縁部直下に角頭状の工具を用いた刺突文を2段に巡らす。19は口縁部が若干外反する器形を呈する。口唇部形態は尖頭状を呈し、口唇部にキザミが施される。文様は口縁部直下に[状の刺突を1段巡らす。内面にはケズリによる擦痕が顕著に認められる。20は口唇部形態が角頭状を呈し、口唇部には絡条体圧痕文が施される。21~27は無文土器である。21は口縁部が若干外反する。口唇部形態は丸頭状を呈し、口唇にはキザミが認められる。器面は刷目状工具による擦痕が認められる。22は口唇部形態が角頭状を呈し、口唇上には沈線による格子文が認められる。器面は刷目状工具による擦痕が顕著である。23は胴部の破片であり、この土器だけで有文土器か無文土器かははっきりしない。24~29は器面のどちらか一方もしくは両面に条痕をもつものである。24は内面に条痕をもつものである。25、26は表裏面に条痕をもつ。27は表面に条痕をもち、内面は刷目状工具による擦痕が顕著に認められる。何れも胎土に微量の植物繊維を含む。28、29は底部である。器面が摩滅しており、器面の調整は不明である。

第2群土器 (第133図1、第134図30~35、図版99)

前期に属する土器を一括する。前期前半の黒浜式土器(第1類)と後半の浮島式土器(第2類)とに分けられる。

第1類 (30)

30は黒浜式土器と考えられる。胎土に植物繊維を多量に含み、焼成が良好である。器面には

単節縄文（RL）の斜縄文が施される。

第2類（1、31～35）

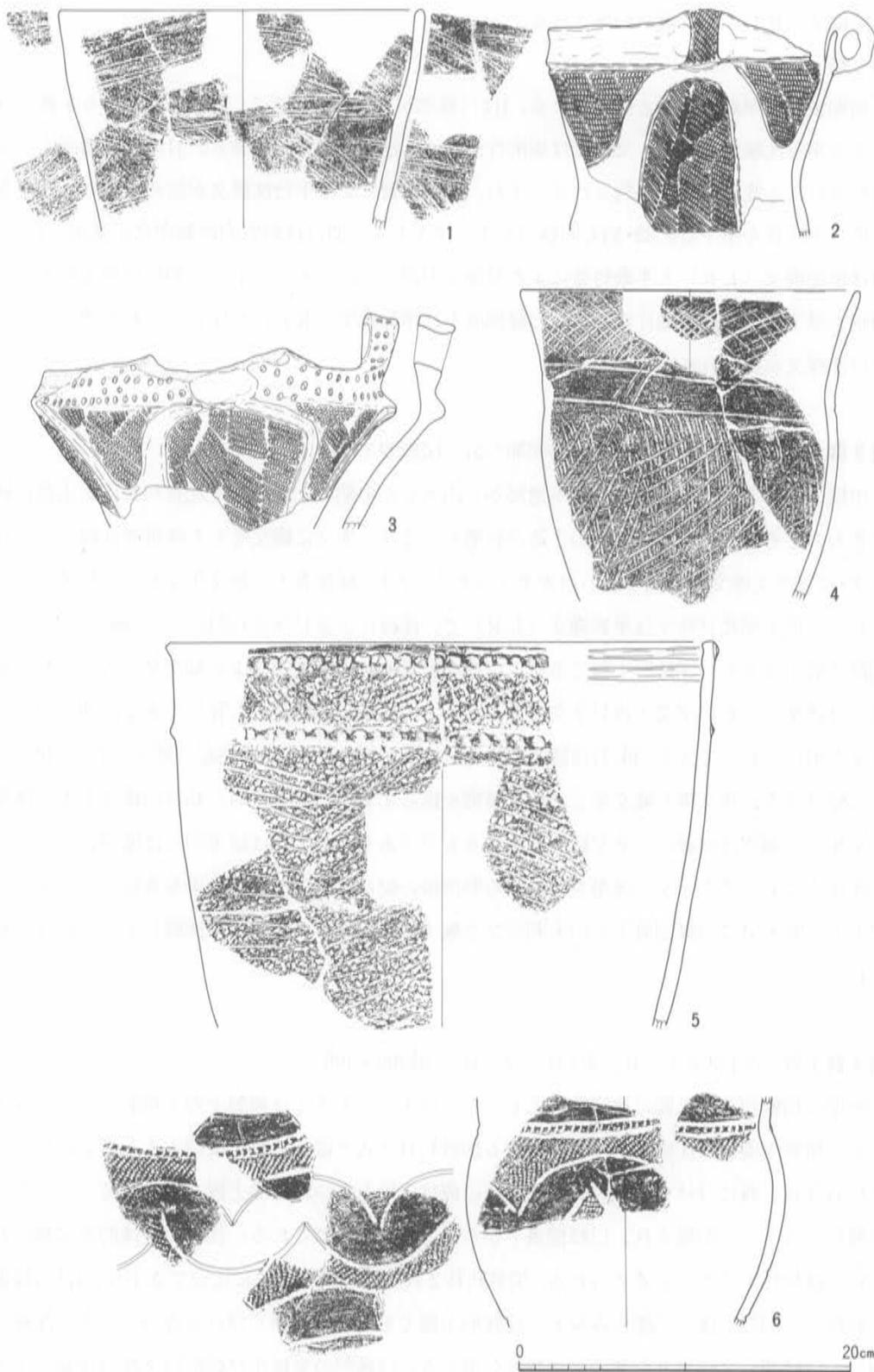
前期後半の浮島式土器と考えられる。1は口唇部が丸頭状を呈する。口縁部直下から半截竹管による平行沈線文を施す。文様には規則性がない。推定口径22cmを測る。31は口縁部直下に半截竹管による変形爪形文が施される。また、半截竹管による平行沈線文が認められる。口唇部形態は丸頭状を呈する。32・33も同様のモチーフをもつ。33には斜方向の刺突文が認められる。34は単節縄文（LR）と半截竹管による斜線文が認められるものである。35は口唇部形態が丸頭状を呈する口縁部の破片である。口縁部直下に単節縄文（RL）が施し、それを地文として平行沈線文が施されるものである。

第3群土器（第133図2・3、第135図36～51、図版99・100）

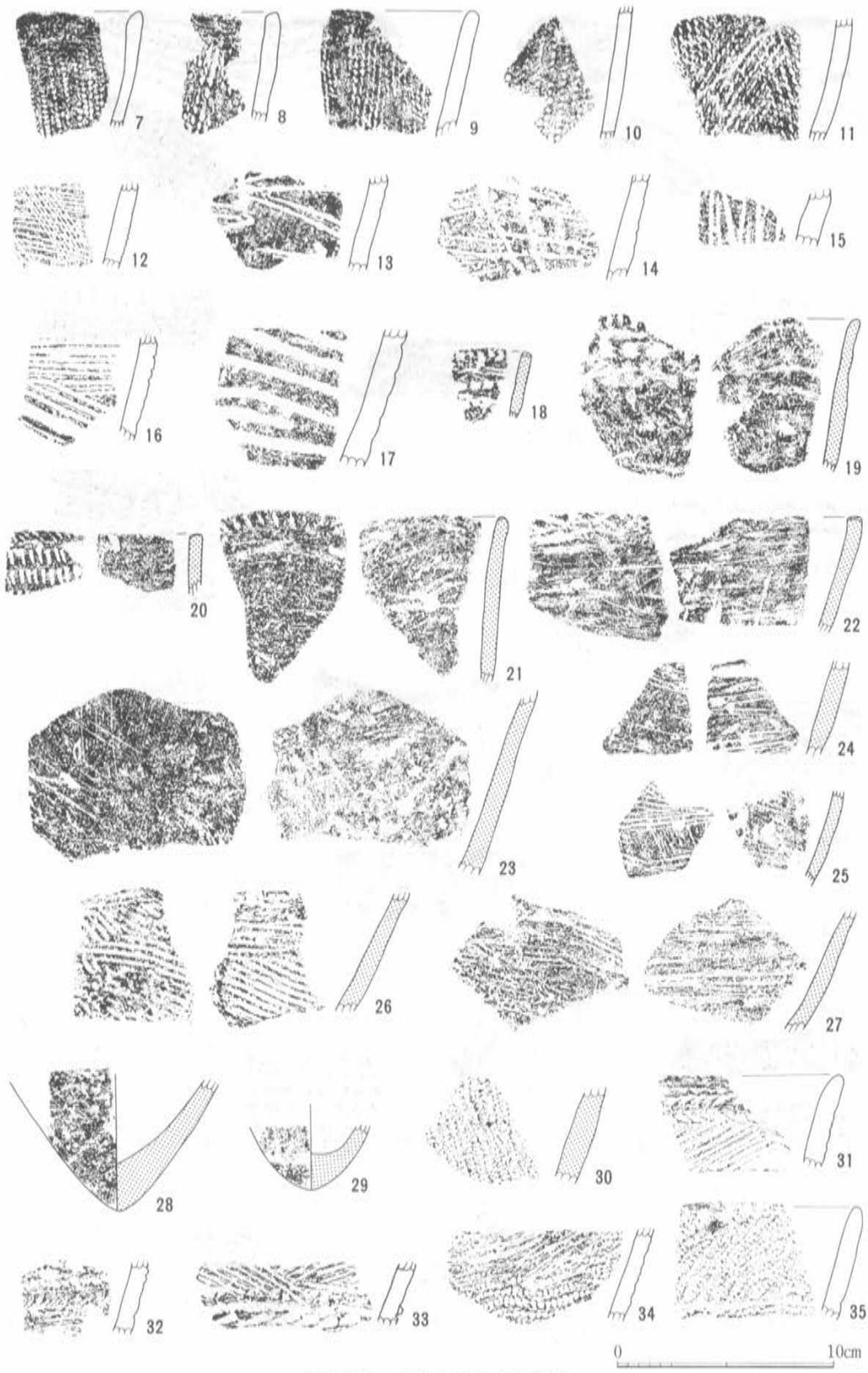
中期に属する土器を一括した。本遺跡から出土した中期の土器は全て加曾利EIV式土器に属するものと考えられる。これらの土器の特徴としては、地文に縄文をもち隆帯や沈線によりU字文・逆U字文等文様を描くものが大半を占める。2は口縁部直下に無文帯をもち、把手が付けられる。把手部及び地文は単節縄文（LR）で、沈線によるU字文・逆U字文が施される。3は胴部で最小径をもつ深鉢形土器である。口縁部直下には円形竹管による刺突文が巡らされ、胴部には隆帯によるU字文・逆U字文が施される。地文は単節縄文（LR）である。36～39は隆帯文を用いたものである。36、37は隆帯によるU地文が施される。39は突起が認められる。40～43は口縁部直下の無文帯と縄文部との境に隆帯を巡らすものである。44、45は口縁部直下に隆帯文を用い、胴部は沈線による文様を作出するものである。46～49は結果的には隆帯による文様を作出するものであるが、隆帯を作出する磨消帯の幅が広く沈線的な効果を表現しているものである。50・51は口縁部直下に円形刺突文を施すものである。胴部には沈線による曲線文が施される。

第4群土器（第133図4～6、第135図52～54、図版99・100）

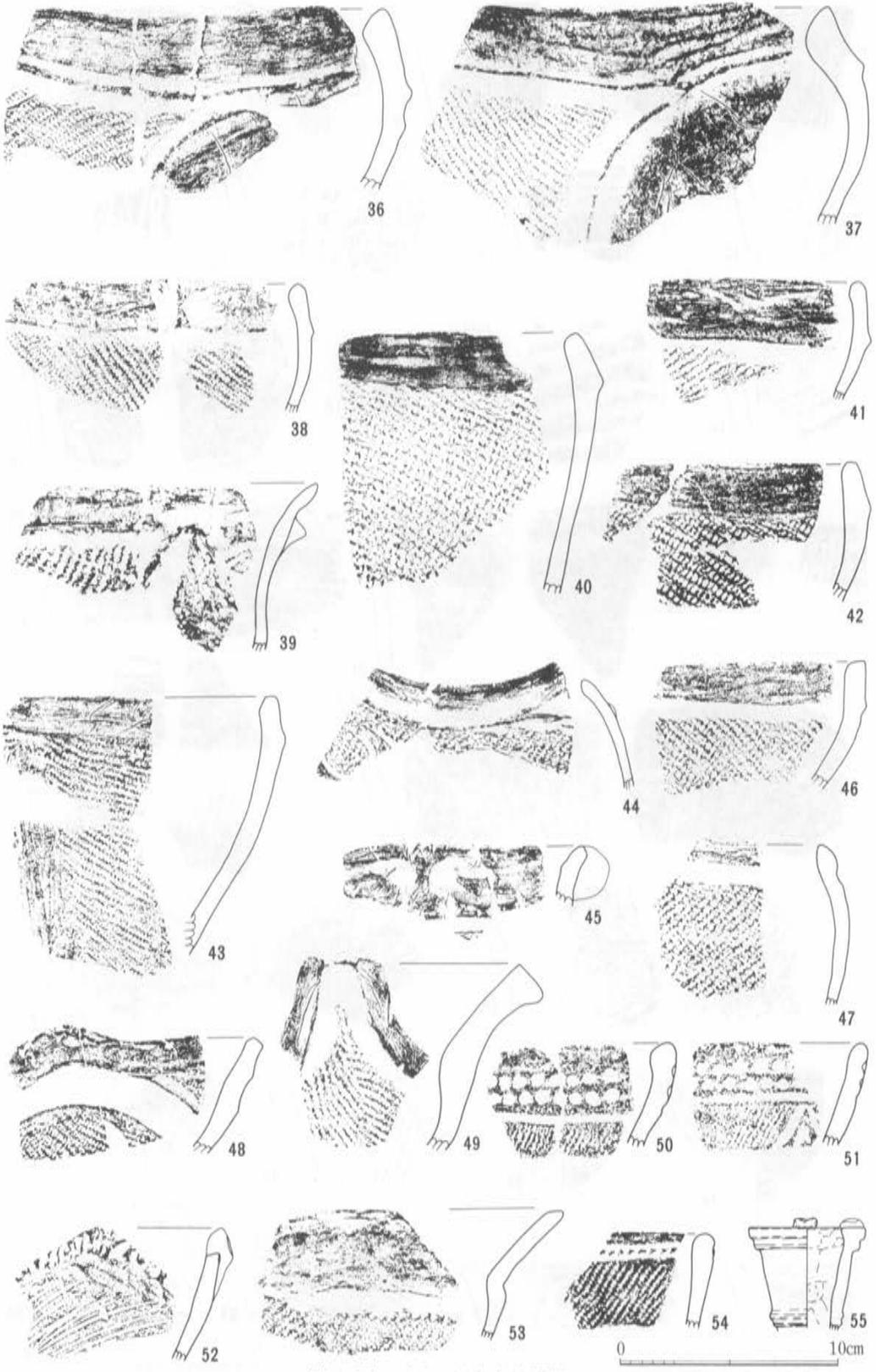
後期の加曾利B式土器に比定されるものを一括する。大きくは精製土器と粗製土器に分けられる。精製土器には沈線を主体文様とする加曾利B2式土器とそれに後続すると考えられる加曾利B3式土器に分けられる。52は数単位の波状口縁をもつ深鉢形土器の破片と考えられる。口唇部にはキザミが施され、口縁部直下から斜位の沈線が施される。沈線の全体的な文様はおそらく綾杉状を呈すると考えられる。加曾利B2式土器の精製土器に比定できよう。4は口縁部が外反し、胴部で僅かに膨らみをもつ深鉢形土器である。胴部のくびれる部分に二条の沈線を施し、口縁部の文様帯と胴部の文様帯を分帯する。口縁部の文様及び胴部の文様は沈線による格子状文を作出する。加曾利B2式土器の粗製土器に比定できよう。53は口縁部が極端に外反



第133図 グリッド出土土器(1)



第134図 グリッド出土土器(2)



第135図 グリッド出土土器(3)

する浅鉢形土器もしくは台付土器の口縁部破片と考えられる。口縁部直下は無文、以下は単節縄文(LR)が施される。無文部と縄文部は沈線により分帯される。加曾利B3式土器に比定できよう。54は口唇部形態が丸頭状を呈する。口縁部直下には沈線と刺突による梯子状の文様が施され、以下単節縄文(LR)が施文される。6は胴部の破片で沈線によるコンパス文が描かれる。胴部のくびれ部には沈線と刺突による梯子状の文様が施される。地文は単節縄文(LR)である。54と6は胎土・文様等の特徴から同一個体と考えられるが、接合しなかったため別々に図示した。これらは加曾利B3式土器に比定される。5は加曾利B式土器の粗製土器で、特に、紐線文系土器と呼ばれるものである。撚の粗い縄文と斜位の細沈線を地文とし、口縁部直下及び口縁部下数cmに紐線を施す。紐線上は指頭による押捺がなされる。

4. グリッド出土特殊土器及び土製品

特殊土器 (第135図55)

第135図55に図示した土器は全体の約1/4が残存するものを推定復元したものである。表面は丁寧なミガキがなされ、隆帯が巡らされ、その上に沈線が施される。内面はケズリの痕が顕著に残り丁寧な調整はなされていない。口唇部上及び隆帯上には瘤状の貼り付けがなされる。また、この土器の口唇部上から表面全体及び内面の一部には赤色顔料による塗彩がなされている。时期的には文様の特徴が少なく、不明な点が多いが、瘤状の貼り付けや沈線が浮線的なことから晩期後半の土器の可能性が高い。更に、器形や赤色顔料による塗彩から祭祀的な土器の可能性が高いと考えられる。

土製円盤 (第136図1～11、図版100)

本遺跡より縄文時代に属する土器片を用いた土製円盤が出土している。1～11は土製円盤である。すべて土器片を用い、周囲を丁寧に調整する。10は有孔土製円盤となる。

土器片錘 (第136図12～29、図版100)

12～29は土器片を用いて両サイドに切り目を入れた土器片錘である。15は口縁部破片を用いている他は全て胴部の破片が利用されている。16・17は約半分欠損する。その他は一部を欠くものがあるが全て完形に近い。19～28は小形の土器片錘である。

5. グリッド出土石器

本遺跡から出土した石器は有舌尖頭器・石鏃・磨製石斧・磨り石・凹石・砥石・軽石製品等である。縄文時代の遺構より出土したものはなく、それ以降の遺構及びグリッドより出土したものである。

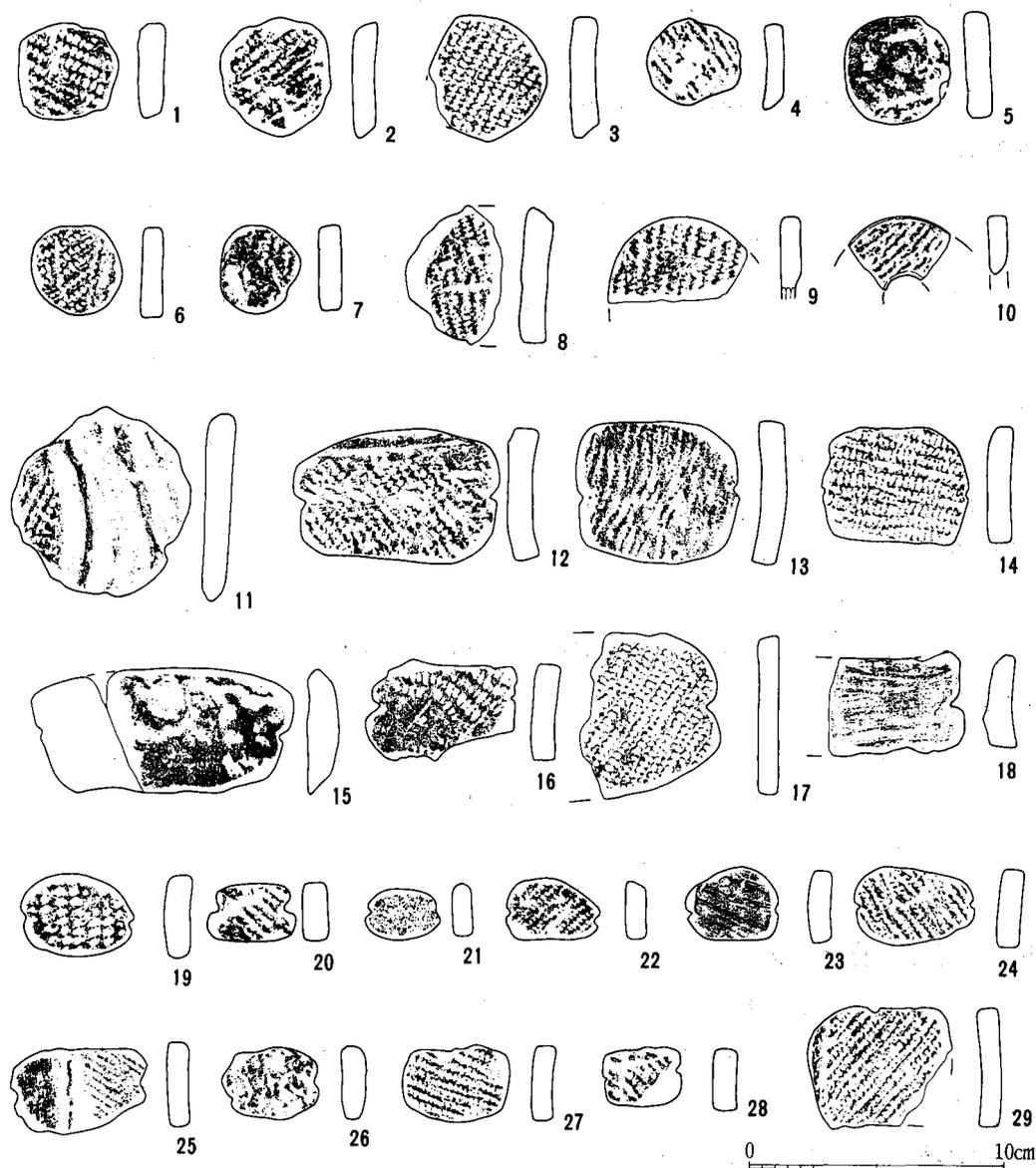
有舌尖頭器 (第137図1～2、図版101)

1は先端部及び基部を欠く。細部の調整は両側縁部に集中する。2は小形のもので、有舌尖頭

器というよりはむしろ有茎鏃に近いものと考えられる。細部の調整は両側縁に集中する。

石鏃 (第137図3~10、図版101)

形態的には二等辺三角形を呈するもの・五角形を呈するもの・三角形を呈するものに分けられる。3・4は挟りがやや大きく二等辺三角形を呈するものである。5~8は挟りが小さく二等辺三角形を呈するものである。9は挟りが殆どなく五角形を呈するものである。10は挟りが殆どなく三角形を呈するものである。細部の最終的な調整は両側縁部及び基部に集中する。ただ、8は細部の調整が先端部に集中し、側縁部及び基部にはあまり認められないことや主要剝離面をそのまま残すことなどから石鏃未製品と思われる。



第136図 グリッド出土土製品

磨製石斧 (第138図11~17、図版102)

7点の磨製石斧が出土した。17以外は欠損品で、先端部や基部等を欠く。11~15は比較的大形の磨製石斧である。16・17は小形である。器面のほぼ全面が研磨され、たいへん丁寧な調整を行なっているものが多い。17は扁平な自然石を用い、両側縁部に調整の痕を残す。刃部及び器面に研磨の痕が認められる。これらの磨製石斧の断面形態には楕円形のもの(11・14・17)・長方形のもの(12・15・16)・円形のもの(13)とがある。

磨石・敲石 (第138図18~29、図版102)

円形・楕円形等の河原石を用い、表裏面は磨石として用い、表裏面の中央部及び側縁部は敲石として用いられるものが一般的である。敲石としての使用度により18のような分銅形を呈するものや19のような隅丸方形を呈するものことができあがると考えられる。一般的には円形・楕円形を呈するものが多い。27は台石の破片を利用した敲石と思われる。28・29は磨石としてのみ用いられたものと思われる。

石皿・凹石 (第138図30~32、図版102)

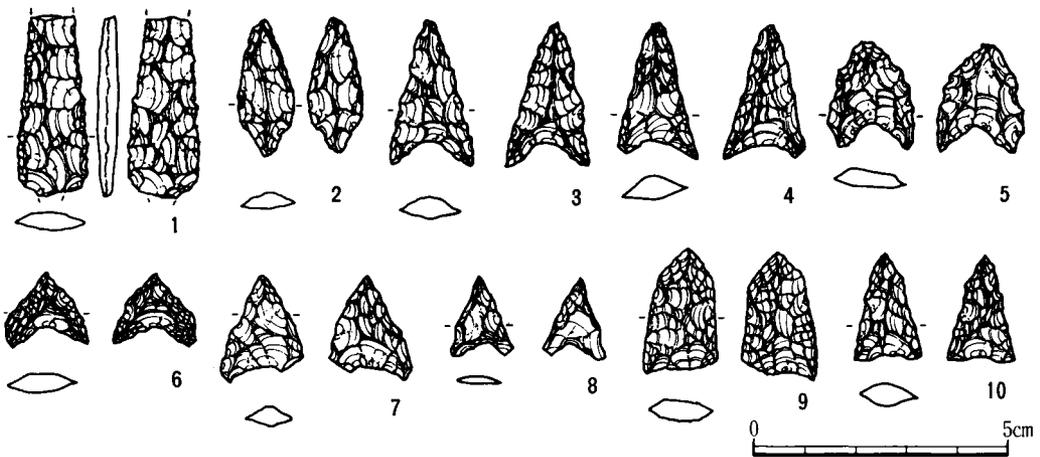
30は石皿の破片である。裏面は凹石として使用されている。31も同様である。石皿として使用していたものが欠損したために凹石として用いられたものであろう。32は軟質の粘板岩を用いた凹石である。

砥石 (第138図33、図版102)

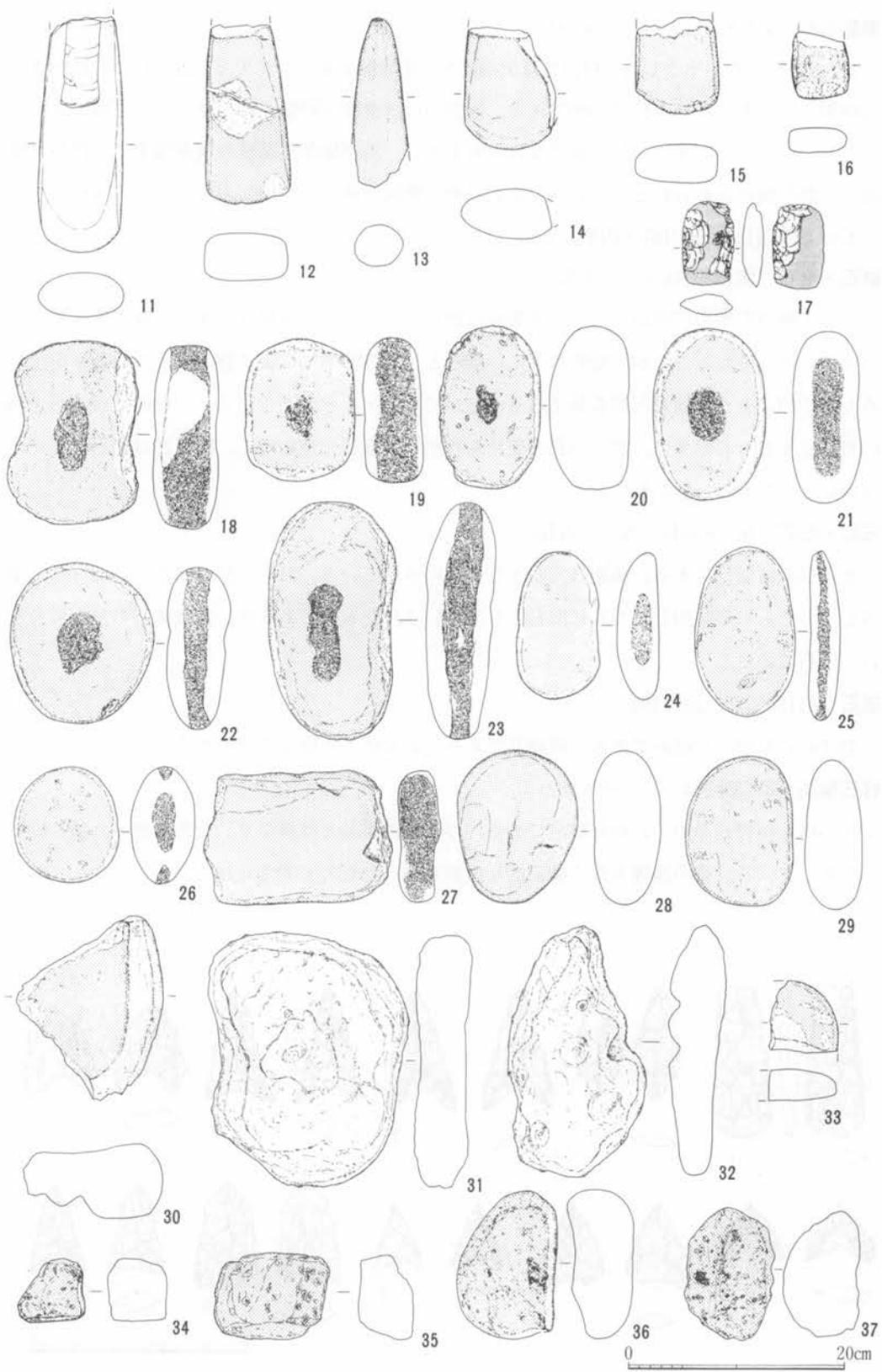
33は砂岩を用いた砥石である。破損品であるため全体の形態は不明である。

軽石製品 (第138図34~37、図版102)

大小様々な軽石を用いた軽石製品である。浮き等の製品とは異なり、全面に磨った痕が面として残っている。骨角器等を磨く砥石的な役割をもったものと考えられる。



第137図 グリッド出土石器(1)



第138図 グリッド出土石器(2)

石器観察表

挿図番号	器種	法 量 (cm・g)				石 材	調 整	出土位置	遺物番号
		長さ	幅	厚さ	重さ				
1	有舌尖頭器	3.520	1.470	0.360	3.8	安 山 岩	先端部及び基部が欠損する。細部の調整は両側縁に集中する。微細な調整剝離が認められる。	M-9	0022
2	有舌尖頭器	2.640	1.090	0.325	0.7	安 山 岩	細部の調整は両側縁に集中する。微細な調整剝離は側縁部にわずかに認められる。小形の有舌尖頭器である。	B10-42	0424
3	石 鏃	2.820	1.640	0.430	1.8	ギョウカイ質 安 山 岩	挟りがやや大きく、二等辺三角形を呈する。主要剝離を残さず、調整が全面に及ぶ。最終的な調整は両側縁部に集中する。	表 採	—
4	石 鏃	2.710	1.570	0.540	1.5	玉 髓	挟りがやや大きく、二等辺三角形を呈する。主要剝離を残さず、調整がほぼ全面に及ぶ。最終的な調整は両側縁部及び先端部に集中する。	111	0009
5	石 鏃	2.180	2.710	0.400	0.9	珪 質 頁 岩	挟りがやや大きく、不整形を呈する。主要剝離面を一面に残し、調整がほぼ全面に及ぶ。最終的な調整は両側縁部に集中するが、調整が細かい。	656	0002
6	石 鏃	1.435	1.605	0.385	0.3	黒 曜 石	挟りが小さく、二等辺三角形を呈する。主要剝離面を残さず、調整が全面に及ぶ。最終的な調整は両側縁部に集中する。	504	0071
7	石 鏃	1.960	1.665	0.400	0.5	玄 武 岩	挟りが小さく、二等辺三角形を呈する。主要剝離面を残さず、調整が全面に及ぶが、粗い調整である。翼部の一部が欠損する。	667	0006
8	石 鏃	1.580	1.290	0.280	0.2	チャート	挟りが小さく、二等辺三角形を呈する。主要剝離面を一部に残す。細部の調整は先端部に集中する。調整が粗く、石鏃未製品とも考えられる。	667	0009
9	石 鏃	2.430	1.430	0.435	0.8	玉 髓	挟りがほとんどなく、五角形を呈する。主要剝離面を残さず、調整が全面に及ぶ。最終的な調整は両側縁部及び基部に集中する。	016	0004
10	石 鏃	2.100	1.315	0.485	0.7	チャート	挟りがほとんどなく、二等辺三角形を呈する。主要剝離面を残さず、調整が全面に及ぶ。最終的な調整は両側縁部に集中する。	070	0023
11	磨製石斧	14.8	5.33	2.85	380	ケ イ 質 砂 岩	全面に丁寧なミガキを施し、刃部には若干の使用痕が認められる。一部に基部方向からの剝離面が認められる。	056	0131
12	磨製石斧	111.2	4.93	3.95	362	輝石安山岩	胴部で2つに割れたものが接合した。基部及び胴部の一部が欠損する。研磨は全面に及び断面形態は四角形を呈する。	071	0001 0002
13	磨製石斧	10.67	3.00	2.74	125	ケ イ 質 砂 岩	基部のみ残存する磨製石斧である。研磨は全面に及び、断面形態は円形を呈する。	M-3 B	0025
14	磨製石斧	7.30	5.74	3.85	222	砂 岩	刃部のみ残存する磨製石斧の破片である。研磨は全面に及ぶ。	110	0002
15	磨製石斧	5.77	5.14	2.74	125	砂 岩	刃部のみ残存する。研磨は全面に及び、断面形態は四角形を呈する。	M-9	0112

挿 図 番 号	器 種	法 量 (cm・g)				石 材	調 整	出土位置	遺物 番号
		長さ	幅	厚さ	重さ				
16	磨製石斧	4.10	3.60	1.80	45	安山岩	刃部のみ残存する。研磨は全面に及ぶものと考えられるが、器面にキズ残が多く、不明である。刃部は丁寧に磨かれる。	グリッド	0217
17	磨製石斧	5.34	3.22	1.28	32	頁岩	小形でやや扁平な自然石を用い、側縁部、刃部に加工を施した後、刃部及び表、裏面に研磨を加えたものである。	012	0022
18	磨 敲 石 石	11.18	7.85	4.34	600	輝安山石 安山岩	楕円形の自然石を用い、表裏面共に使用した痕(ミガキ)が認められている。磨石の側縁部及び表、裏面の中央部は敲石として用いられている。特に両側縁部の使用が著しく、平面形態が分形を呈する。	M-00	0002
19	磨 敲 石 石	8.88	6.90	3.84	430	安山岩	楕円形の自然石を用い、表・裏面共に使用した痕(ミガキ)が認められる。磨石の側縁部及び表・裏面の中央部は敲石として用いられている。平面形態は隅丸方形を呈する。	686	0001
20	磨 敲 石 石	9.97	6.32	5.04	450	安山岩	楕円形の自然石を用い、表・裏面共に使用した痕(ミガキ)が認められる。磨石の中央部は敲石として用いられている。側縁部にも若干の痕跡が認められる。	M-9	0213
21	磨 敲 石 石	10.04	7.04	4.23	528	角閃石 安山岩	楕円形の自然石を用い、表・裏面共に使用した痕(ミガキ)が認められる。磨石の中央部及び側縁部の一部は敲石として用いられている。	グリッド	0139
22	磨 敲 石 石	9.74	8.90	3.79	475	花崗斑岩	円形の自然石を用い、両面共に磨石として用いられている。また、中央部及び側縁部は敲石として用いられている。	グリッド	0292
23	磨 敲 石 石	14.39	7.45	4.30	800	安山岩	楕円形の自然石を用い、両面共に磨石として用いている。また、中央部及び側縁部は敲石として利用されている。	004	0003
24	磨 敲 石 石	8.89	5.25	2.70	190	砂岩	楕円形の自然石を用い、両面共に磨石として用いられている。両側縁部は敲石として若干の使用痕が認められる。	M-3	0020
25	磨 敲 石 石	10.30	6.10	1.88	188	砂岩	楕円形の自然石を用い、両面共に磨石として用いられている。側縁部は敲石として利用される。	104	0004
26	磨 敲 石 石	7.14	6.44	3.78	240	砂岩	円形の自然石を用い、両面共に磨石として用いられる。側縁部は部分的に敲石として利用される。	M-9	0097
27	磨石(台石) 敲石	8.00	11.52	2.30	430	雲母片岩	扁平な河原石を用い、両面共に磨石として用いられる。二方の側縁部は敲石として用いられる。	553	0001
28	磨石	9.26	7.57	4.30	410	石英砂岩	楕円形の自然石を用い全面を磨石として使用する。	グリッド	0364
29	磨石	9.39	6.84	3.24	345	石英砂岩	楕円形の自然石を用い全面を磨石として使用する。	011	0006
30	石 凹 皿 石	11.00	8.85	4.66	450	安山岩	石皿の破片である。使用面は若干レンズ状を呈する。石皿が破損した残に裏面を凹石として使用する。	表採	—

挿 図 番 号	器 種	法 量 (cm・g)				石 材	調 整	出土位置	遺物 番号
		長さ	幅	厚さ	重さ				
31	石 皿 凹 石	15.24	12.35	3.31	1092	雲 母 片 岩	石皿の破片と思われる。両面が若干レンズ状を呈する。一面の中央部に凹部が認められることから凹石として使用されたものと思われる。	030	0022
32	凹 石	15.36	8.15	3.67	460	雲 母 片 岩	軟質の粘板岩を用いた凹石である。凹部が6ヶ所に認められる。	256	0017
33	砥 石	4.40	4.45	2.18	58	砂 石	砂石を用いた砥石である。表・裏面及び側面が使用される。	グリッド	0046
34	軽石製品	3.87	3.75	3.74	20	浮 岩	角状に使用される。使用面は平坦である。	122	0003
35	軽石製品	5.07	6.70	3.45	32	浮 岩	角状に使用される。使用面は平坦である。	グリッド	0308
36	軽石製品	9.00	5.98	3.75	51	浮 岩	楕円状に使用される。使用面の一面は平坦であるがその他の面は凹部が認められる。	表採	—
37	軽石製品	7.97	5.47	5.02	43	浮 岩	不整状に使用される。ほぼ全面に使用された痕を残す。34～37は骨角器等を砥ぎだす砥石として使用された可能性がある。	表採	—

第3章 考察

第1節 吉原三王遺跡出土の土器

(1) 土器分類

吉原三王遺跡からは100軒を超す竪穴住居跡と土壙等が検出された。時期的には古墳時代後期から中世にかけての所産と考えられる。ここでは、竪穴住居跡内及び一括資料を出土した土壙内からの土器を扱ってその様相を把握してみたい。また、出土土器の主体が土師器の杯・皿・碗類であるため、その他の器種及び須恵器は補足的に取り扱うこととする。

1. 古墳時代 (第139図)

当該期の土師器は、杯10類・碗2類・鉢4類・甕9類に分類できる。

杯A 須恵器杯模倣形態の杯で、口縁部下に明瞭な稜を有し、口縁部が内傾するもの。底部は丸底である。口縁部内外面・体部内面にヘラミガキが施される。内面黒色処理を行なうものも見られる。

杯B 須恵器杯を模倣したと考えられるもの。口縁部下に明瞭な稜を有し、直立する口縁部を呈する。杯A同様口縁部内外面・体部内面にヘラミガキが加えられる。内面黒色処理を施す割合が杯Aよりやや増加する。1点のみであるが、内外面ともミガキが加えられ、両面黒色処理となるものもある。

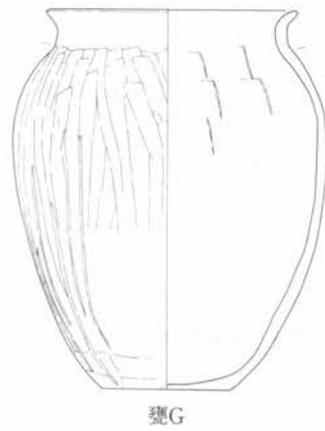
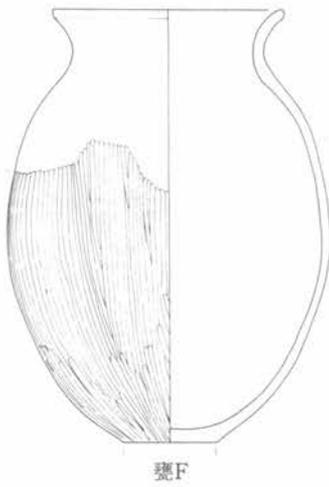
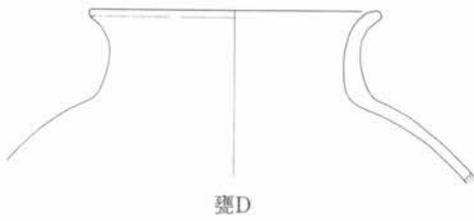
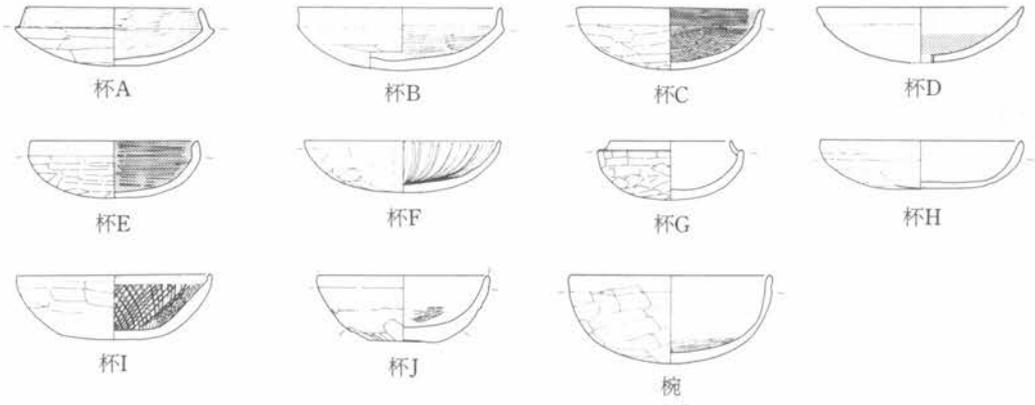
杯C 点数は少ないが、口縁部下に明瞭な稜を有し、口縁部が若干外傾するタイプである。調整方法は杯A・Bと同様である。内面黒色処理と両面黒色処理の2者が見られる。

杯D 2点のみの出土である。丸底の底部から弱い稜を持って口縁部が大きく外傾するものである。ミガキは加えられず、外面ヘラケズリ後ナデ調整が施される。

杯E 杯A・Bのような須恵器杯模倣形態とは考えられず、丸底の体部から弱い稜を形成して短い口縁部が立ち上がるタイプである。当該期の杯のなかでは最も出土量が多い。かなりバラエティーがあり、さらに分類できそうであるが煩雑になるため大きな分類の中に含めておく。体部内面にヘラミガキを加えるものが主体である。内面黒色処理の割合は比較的多い。

杯F 丸底で口縁部が内湾気味となるもの。底部から口縁部にかけてヘラケズリが加えられる。法量的にバラツキが認められる。内面に放射状の暗文を施すものも若干ながら存在する。

杯G 1点のみ確認された。口径に比して器高が深く、口縁部が外反気味に大きく内傾するものである。体部外面ヘラケズリ調整となる。全体に丁寧な造りである。



第139圖 古墳時代土師器分類圖 (1/6)

杯H 口径15cm前後で、器高が浅く平底状の底部となる。皿的な器形を呈する一群である。出土量は少ない。底部から体部外面にヘラケズリが施される。

杯I 1点のみの出土である。平底で口縁部内側が浅い沈線状に凹む。内面に斜格子状暗文が施される。

杯J 小さな平底で、器高が高いもの。体部外面はヘラケズリ調整で、輪積み痕が残っている。底部外面には木葉痕が認められる。出土量は少ない。

椀 出土量が少なく、形態差が認められないため一括した。丸底で器高が高く、短い口縁部が外反気味に直立する。外面ヘラケズリ、内面ミガキ調整となる。内面に斜格子状暗文を施すものもある。

甕A 球形に近い胴部で、口縁部がやや外傾し、口唇部で緩く外反するもの。最大径が胴部中位にある。胴部外面は縦位のヘラケズリが全面に施される。

甕B Aに類似するが、口縁部の外反度が大きくなる。口唇部で受け口状を呈するものもある。Aよりやや小形となるものが多い。最大径はやはり中位にあり、調整はAと同様である。

甕C 甕Aに近いが、胴部が長胴気味となるもの。

甕D 出土量が少なく、完形となるものはない。大形の甕で、胴部がきわめて大きくなるタイプである。中位に最大径を有する球形胴となろう。全体にナデ調整が施される。

甕E 長胴で、口縁部がくの字状に外反する。最大径は口縁部に位置する。胴部外面に縦位の長いヘラケズリが加えられ、一部カンナ飛びの痕跡が見られる。底部中央がかなり薄く削りだされている。

甕F 常総型タイプを呈する。口縁部は大きく外反し、胴部中央に最大径を有する。底部は小さい。胴部外面上半はナデ調整で、下半に丁寧なヘラミガキが加えられる。

甕G F同様常総型である。長胴となり、胴部上半に最大径を有する。口縁部は短く外反し、口唇部がやや上方につまみ上げられる。外面はヘラケズリ後Aより粗いヘラミガキが最大径以下に加えられる。ミガキが口縁部直下まで延びるものもある。

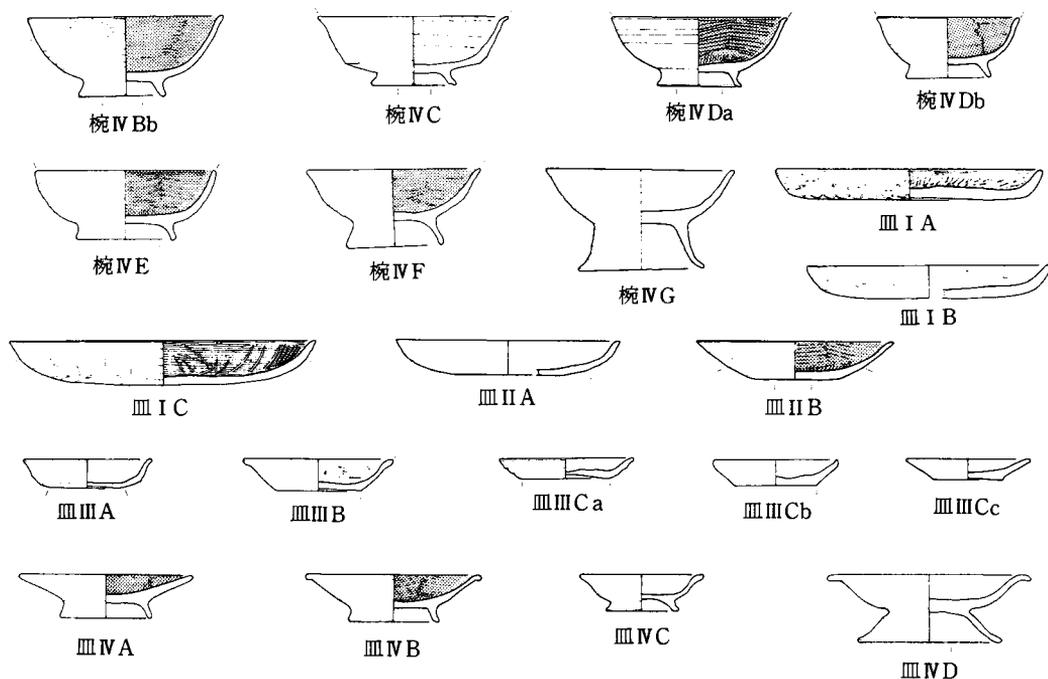
甕H 1点のみの出土である。バケツ形の器形を呈し、口唇部で若干外反する。外面全体に縦位の長いヘラケズリが施され、かなり丁寧な造りとなる。

2. 奈良・平安時代 (第141・142図)

この時代の土師器は、杯・椀・皿類を対象とし、その他の甕等は出土量がそれほど多くないためここでは検討を加えないこととする。なお、分類上古墳時代以来の整形技法を用いているものをI類、いわゆるロクロ(回転台)を使用したと思われる一群をII類、ロクロ使用で底部



第140図 奈良・平安時代土師器分類図(1) (1/6)



第141図 奈良・平安時代土師器分類図(2) (1/6)

が回転糸切り未調整となるものをⅢ類、高台がつくものをⅣ類として大きく分類し説明していく。

杯ⅠA 丸底の底部から内湾気味に体部が開くもの。体部内面はミガキ、外面はヘラケズリが施される。内外面赤彩されるものも存在する。口径から、16cm前後のもの（a）と12cm（b）に分けられる。

杯ⅠB 1点のみの出土である。古墳時代の杯Ⅰの系統を引くもので、底部に木葉痕が残る。内面ナデ、外面ヘラケズリが施される。

杯ⅡA いわゆる盤状杯タイプを呈する。口径15cm前後を測る。底部が大きく、体部は直線的に開き、体部下端から底部全面にヘラケズリが加えられる。内外面とも赤彩が施されている。底部外面には赤彩後線刻が見られる。

杯ⅡB 1点のみの出土である。Aの器高を高くした形態を呈する。体部下端から底部全面にヘラケズリが加えられ、内外面赤彩される。

杯ⅡC これも1点のみである。体部が内湾気味に開く。体部外面から底部全面に手持ちヘラケズリを施し、さらに弱いミガキが加えられる。

杯ⅡD いわゆる箱形を呈する杯である。口径12.0cm前後を測り、大きめの底部から体部が直線的に開く。体部の開きは少ない。調整技法により3種に分けられる。a—体部下端から底部全面に回転あるいは手持ちヘラケズリを施すもの。b—体部下端から底部周縁に手持ちヘラケ

ズリを加え、底部中央に回転糸切り痕を残すもの。c—一部部下端のヘラケズリを施さず、底部が全面ヘラケズリ調整されるもの。

杯II E Dと似たタイプであるが、大きめの底部から体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部で若干外反する。体部下端から底部全面に回転及び手持ちヘラケズリが施される。

杯II F 口径12.0cm前後を測り、比較的大きめの底部から体部が直線的に開くものである。Dより体部の開きは大きくなる。調整技法より2種に分けられる。a—一部部下端から底部周縁に手持ちヘラケズリを施し、底部中央に回転糸切り痕を残すもの。b—一部部下端の手持ちヘラケズリは施さず、底部全面がヘラケズリ調整されるもの。

杯II G 口径に比して器高が低い一群である。大きめの底部から体部が内湾気味に開く。体部下端から底部周縁に手持ちヘラケズリを施し、底部中央に回転糸切り痕を残す。体部外面のロクロ目が強い。

杯II H 口径12cm前後を測り、底径が口径の1/2程となるもの。体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部で若干外反する。調整技法により3種に分けられる。a—一部部下端から底部全面に手持ちヘラケズリを加えるもの。b—一部部下端に手持ちヘラケズリを施さず、底部は回転糸切り後全面手持ちヘラケズリが加えられるもの。本類の中では最も多いタイプである。c—一部部下端から底部周縁に手持ちヘラケズリを施し、底部中央に回転糸切り痕を残すもの。

杯II I 口径12cm前後を測り、底径が口径の1/2以下となるもの。体部は内湾気味に大きく開き、口縁部での外反度も強くなる。体部下端のヘラケズリは施されない。底部の調整技法により2種に分けられる。a—回転糸切り後全面に手持ちヘラケズリを加えるもの。b—回転糸切り後周縁に手持ちヘラケズリを加えるもの。

杯II J 出土量は少ない。体部が内湾してそのまま開き、口縁部の外反が見られないもの。体部は丁寧な横ナデ調整で、ロクロ目が弱くなる。底部は回転糸切り後全面手持ちヘラケズリが加えられる。

杯II K 口径に比して器高が高く、体部が直線的に開くタイプ。出土量が比較的多く、いくつかバラエティーが認められるが、調整技法により大きく2つに分けられる。a—一部部下端にヘラケズリを加えず、回転糸切り後周縁に手持ちヘラケズリを施すもの。b—一部部下端から底部全面に手持ちヘラケズリを施すもの。底部中央に回転糸切り痕が残るものもある。

杯II L 底径が口径の1/2程で、器高が低い体部の開きが大きくなるもの。体部が直線的に立ち上がり、口縁部で若干外反する。体部外面のロクロ目が強いものが多い。調整技法より2種に分けられる。a—一部部下端から底部全面に手持ちヘラケズリ調整を加えるもの。b—底部全面に手持ちヘラケズリを加えるが、体部の再調整が認められないもの。

杯II M 口径14.0~16.0cmと大形になる一群である。体部外面横ナデ、内面ミガキで黒色処理が施される。体部が直線的に開き、内面の立ち上がりが明瞭で、口縁部は若干外反する。底部

全面手持ちヘラケズリで、体部下端にヘラケズリを加えるものもある。

杯ⅢA 出土量は少ない。底径が口径の1/2程で、径高指数30前後を測る。杯ⅡKの底部が回転糸切り未調整となるタイプである。

杯ⅢB 底径が口径の1/2以下で、径高指数25～30を測るもの。体部外面は丁寧な横ナデ調整で、ロクロ目は全体に弱くなる。形態・法量により3種に分けられる。a 一体部が内湾気味に開き、口縁部で外反するもの。b 一体部が内湾気味に開きそのまま口縁部に至るもの。c 口径・器高とも小さくなり、小皿的な様相を有するもの。

杯ⅢC 出土量は少ない。底径が口径の1/2以下で、口径に比して器高が高くなるため径高指数30～32となるもの。体部が直線的に開き、口縁部は外反しない。体部外面のロクロ目は比較的強い。

杯ⅢD 出土量は少ない。器高に比して口径が13.6～15.5cmと大きくなる。径高指数は24～25である。体部中央から下半が膨らみ、口縁部でやや外反する形態を呈する。内面黒色処理が施されるものも見られる。

杯ⅢE 体部外面中央が外側に強く膨らみ、外反する口縁部を有する。Ⅲ類の中では最も出土量が多い。法量・形態から3種に分けられる。a 口径10.6～11.4cm、器高3.0～3.5cmを測り、径高指数が27～31を示す。E類の典型タイプで最も出土量が多い。形態・法量ともかなり規格化された様相を表している。b aのやや大形化した一群である。口径12.0～12.5cm、器高3.6～4.2cmを測り、径高指数30～34となる。口縁部の外反度はやや弱くなる。c 全体に器肉が厚くなるが、特に底部が顕著である。出土量は少ない。

杯ⅢF 体部が内湾気味に開き、そのまま口縁部に至る形態を示す。口縁部は外反しない。形態・法量より2種に分けられる。a 一体部中央の膨らみがやや強く、底部が突出気味となる。口径11.5～12.2cm、器高3.0～3.6cm、径高指数25～30を測る。b 一体部の膨らみは弱く、滑らかに口縁部に移行する。底部の突出はほとんど認められない。径高指数30～31を示し、aに比して器高が若干高くなる。内面黒色処理されるものも見られる。

杯ⅢG Ⅲ群の中ではかなり大形となる。体部が内湾気味に開き、口縁部で外反する。口径14.8～15.7cm、器高5.0～5.8cmを測る。径高指数は33～37を示す。

杯ⅣA いわゆる足高高台付杯と呼称される一群である。ハの字状に開く長い高台が貼り付けられる。杯部形態にややバラエティーが認められるが、体部の膨らみが弱く口縁部で若干外反する。底部外面は全面ナデ調整が加えられる。

碗ⅡA 口径14.3～16.5cmを測り、内面にミガキが施され黒色処理が加えられるもの。体部外面横ナデ、底部は全面ヘラケズリ調整となる。径高指数は30～33を示す。器形より2種に分けられる。a 一体部が内湾して開き、口縁部で大きく外反するもの。b 一体部が直線的に開き、

口縁部の外反度も弱くなるもの。

椀ⅢA 内面黒色処理され、椀ⅡAと同様の器形を呈すもの。器形・法量より2種に分けられる。a—一部部が膨らみを有して立ち上がり、口縁部で若干外反する。内面にミガキが施される。口径16.8～17.2cm、器高4.9～5.2cm、径高指数29～31を測る。b—一部部の膨らみが強くなり、口縁部が大きく外反する。体部内面と口縁部外面にミガキが加えられる。外面全体にミガキを施すものもある。口径15.8～18.1cm、器高5.2～5.9cm、径高指数31～34とaに比してやや大形となる。

椀ⅢB 出土量は少ない。体部と底部の境が不明瞭で全体に半球形に近くなるもの。内面ミガキ後黒色処理が施される。体部外面下端に回転ヘラケズリを加えるものもある。

椀ⅢC やはり出土量が少なく、特徴的な器形を示す。体部がかなり強く膨らみ、口縁部が短く外側に屈曲する。底部は若干突出気味で、体部内面ミガキに黒色処理を施すものもある。

椀ⅣA 体部に比して高台が小さく、口縁部はほとんど外反しない。内面はミガキで黒色処理が施される。体部外面下端に回転ヘラケズリが加えられる。底部外面はナデ調整されるが、回転糸切り痕を残すものもある。口径16.5cm、器高5.8～6.3cm、径高指数35～38を測る。

椀ⅣB IV群の中では最も出土量が多い。体部の膨らみが強く、口縁部で大きく外反する。体部内面ミガキ、外面横ナデで口縁部にミガキが加えられ、底部外面は中央に回転糸切り痕を残すものと全面ナデ調整されるものがある。高台形態にはバラエティーが認められる。内面黒色処理が施される。径高指数は33～41を示す。法量より2種に分類できる。a—口径16.4～19.0cm、器高5.7～6.7cmを測るもの。体部内外面および高台内面までミガキが施され、両面黒色処理となるものも存在する。b—口径14.6～16.1cmを測るもの。

椀ⅣC 特徴的な器形を呈し、出土量は少ない。体部下半に明瞭な稜を有して上半が直線的に立ち上がり、口縁部で大きく外反する。高台はハの字状に広がり、下端内側が明確に凹んでいる。黒色処理は施されない。口径15.0cm、器高5.2～6.0cmを測る。

椀ⅣD 体部が内湾して立ち上がり、口縁部で緩く外反する。体部内面ミガキ、外面横ナデで、口縁部外面にミガキ、体部外面下端に回転ヘラケズリを加えるものもある。高台は比較的高く、ハの字状に開く。下端が外側に強く屈曲するもの、下端面が内傾するもの等いくつかバラエティーが存在する。底部外面は全面ナデ調整されるものと中央に回転糸切り痕を残すものがある。径高指数35～42を示す。法量より2種に分けられる。a—口径12.3～14.3cm、器高4.4～5.4cmを測るもの。b—口径11.2～11.8cm、器高4.1～4.7cmを測るもの。

椀ⅣE 出土量は少ない。体部が内湾して立ち上がりそのまま口縁部に至る。口縁部は外反せず、全体に半球形状を呈する。高台もかなり高くなる。内面ミガキで黒色処理が施される。口径12.9～14.4cm、器高5.3～6.6cm、径高指数50前後を測る。

椀ⅣF やはり出土量は少ない。体部は内湾して大きく開き、上半部で外反する。体部外面横

ナデ、内面にミガキを加えるものは黒色処理が施される。高台はE同様高い。口径13.7~14.9cm、器高6.3cm、径高指数42~45を測る。

椀IVG いわゆる足高高台の形態を示すものである。

皿IA 平底で、底径がかなり大きくなるもの。体部は直線的に外傾する。体部内面はナデ後ミガキ、外面はヘラケズリ後ミガキが加えられる。底部外面にもミガキが施される。内外面赤彩される。口径19.6~21.0cm、器高2.3~2.7cmを測る。

皿IB 平底であるが、体部と底部の境が不明瞭である。体部は内湾気味に立ち上がる。調整はAと同様で内外面赤彩される。口径19.0cm、器高2.5cmを測る。1点のみの出土である。

皿IC かなり丁寧な造りで、底部は丸底に近くなり、口縁部で若干外反する。体部内面横位のミガキ後放射状のミガキが加えられ、外面にはヘラケズリが施される。口径24.0cm、器高3.3cmと大形品である。1点のみの出土である。

皿IIA やはり1点のみの出土例である。平底底部から体部が内湾気味に大きく開き、口縁部でやや外反する。内外面横ナデ調整で、体部下端から底部全面に回転ヘラケズリが加えられる。口径17.6cm、器高2.6cmを測る。

皿IIB 出土量は少ない。小さめの底部から体部が直線的に開き、口縁部でやや外反するものと上方につまみ上げられるものがある。体部下端から底部周縁に回転ヘラケズリが加えられ、中央に回転糸切り痕を残す。内面ミガキで黒色処理を施すものもある。

皿IIIA 体部が内湾して大きく開き、口縁部で外反するもの。法量にバラツキがあり、口径10.1~13.5cm、器高2.2~3.3cm、径高指数22~27を測る。

皿IIIB 口径9.0~11.5cm、器高2.1~2.8cmを測り、体部が直線的に開く。口縁部で若干外反する。内面にミガキが施され、黒色処理されるものもある。径高指数21~28を示す。

皿IIIC 口径7.8~10.6cmを測る典型的な小皿となるものである。出土量は多い。器形より3種に分けられる。a—体部中央が強く膨らみ、口縁部で外反するもの。Cの中では大きめである。b—体部が直線的に開き、口縁端部が上方に向けた三角形状を呈するもの。Cでは最も多い出土量である。c—底部が小さくなるため、体部の開きが大きい。体部は直線的である。

皿IIVA 体部が直線あるいは外反気味に開き、そのまま口縁部に至るもの。高台の開きは少ない。内面ミガキで黒色処理が施される。

皿IVB 1点のみの出土である。体部はAより深く、口縁部で外側に屈曲する。高台下端部が外傾する。やはり内面黒色処理が施される。

皿IVC 口径9.5cmを測る小皿となるものである。体部下半に膨らみを有し上半部で大きく外反する。高台は外側に強く開き、下端部で外屈する。

皿IVD 高い高台が貼り付けられ、口縁部が大きく外反する。

(2) 土器変遷 (付図2・3)

上記の土器分類をもとに住居跡及び土壇出土の土器を検討した結果本遺跡出土の土器は古墳時代5期、奈良平安時代12期に分類できた。以下で各期の土器様相及び実年代を説明する。

古墳時代Ⅰ期

当該期は、杯A・B・Eが主体となる時期である。杯Bには僅かながら黒色処理が施されるものがある。杯Aは口径12.0～14.0cmを測り、径高指数33～40を示す。次期の杯Aに比して器高がやや深くなる。土師器杯では他に杯C・Dが存在する。高杯は杯部のみの遺存であるが、内面黒色処理、外面赤彩が加えられるもので、長脚を呈する特徴的な器形となろう。他には、箱形を呈する手捏ね土器が比較的多く含まれる。甕の良好な資料はみられなかった。

本期の年代を明確に示すことは難しいが、佐原市の小六谷台遺跡^{註1}007号住居跡出土土器群とほぼ同様な様相を示すことから、6世紀後半段階を中心とした時期に捉えておきたい。

古墳時代Ⅱ期

この時期は、土器の様相に前期とほとんど差が認められないが、杯A・Bに比して杯Eの割合がやや多くなる。また、杯Aの口径が前段階より全体的に小さくなる傾向が強い。他には球形胴を呈する甕A及び小形甕が認められる。手捏ね土器にはいくつかのパラエティーが存在する。

本期の年代は前代とあまり相違ないが、杯に小形化の兆しが認められることから、6世紀末から7世紀初頭の年代が考えられる。

古墳時代Ⅲ期

この段階になると、前代までの様相とかなり異なってくる。土師器杯では杯A・Bが少なくなり、杯E・Fが主体となってくる。あらたに出現する杯Fは丸底で器高が深いものと平底に近く器高が浅いものの両者が認められる。杯A・Bは口径に比して器高が浅くなる。杯Eはすべて内面黒色処理が施される。高杯は内面黒色処理で長脚形態を呈する。甕は、常総型となる甕F、甕D、小形の甕Cなどが存在する。

本期は、杯E・Fが主体となる点で前期とは若干時期差を有するものとする。千葉市高沢遺跡のⅠb期とした土師器杯に様相が類似^{註2}している。ここではTK80段階の須恵器を供伴しており、7世紀前半段階を中心とした時期に捉えておきたい。

古墳時代Ⅳ期

この時期では、杯A・Bのいわゆる須恵器模倣タイプの土師器杯が消失し、杯E・Fで構成

される。杯Fの体部内面には放射状の暗文が認められる。他には丸底で口縁部が若干外反する椀が伴う。内面に斜格子暗文を施すものも見られる。カエリを有する須恵器杯蓋が1点存在する。

本期は、栄町向台遺跡S I 3出土土器と共通の様相を有して^{註3}おり、7世紀後半段階と考えられる。供伴する須恵器杯蓋は口径12cm程の小形品で、東海系と思われほぼ同様の年代であろう。前段階とは空白期間が存在する。

古墳時代V期

この段階になると土器量も多く、比較的良好なセットとして捉えることができる。前代に引き続き杯A・Bが存在せず、杯Eも減少するようである。主体となるものは杯F・H・Jである。杯Fは口径12.0cm前後の小形品が圧倒的に多くなり、内面に放射状暗文を加えるものも含まれる。杯Jは初めて出現するタイプであるが、この段階のみに存在している。杯では他にE・Iが僅かながら認められるが、いずれもかなり特徴的な形態を呈している。杯Eは丸底の皿に近い形態を呈し、口唇部を若干つまみ上げている。杯Iは内面に斜格子状暗文を施し、口縁部内面が浅い沈線状にくぼむ。かなり丁寧な造りで、胎土とともに他の同時期の土師器杯とは若干異なる感を受ける。上総において8世紀代に見られるいわゆる「上総型杯」とも形態的にやや異なるようである。底径がかなり小さく、明瞭な平底となっていない点や古い様相を有していると考えたい。須恵器杯では、底部が高台と同一レベルまで突出する高台付杯が伴出している。土師器甕は、小形の甕C・Eと常総型と思われる甕Gが主体となる。

本期の年代は、土師器杯Fが小形化し、平底に近い形態を呈する杯Hが出現することから前段階より新しくなることは確実である。また、土師器杯Iは内面に浅い沈線^{註4}を施しており、「上総型杯」の出現段階の大きな特徴と考えられ、7世紀末の年代が当てられている。須恵器高台付杯は、伊場遺跡A類の範疇に入るものであろう。報文では一応8世紀前葉の土器群として捉えられているが、同遺跡の大溝内奈良時代層の最下層からA類の土器群が出土しており、同層内から干支年号をもった木簡が存在していることから7世紀代に求めることも不可能ではない^{註5}としている。以上の状況より、本期は7世紀末を中心とした時期に考えておきたい。

奈良・平安時代I期

この段階では、土師器杯I A a及びI Cが認められるが、前者が主体となる。これは古墳時代杯Fの系統を引き継いだ形態のもので、内面にミガキが加えられる。内外面赤彩される特徴も有する。杯蓋は2点確認され、土師器と須恵器の両者が存在する。前者は折り返し、後者はかなり退化したカエリが付くものである。他に須恵器の杯が認められる。

本期は、常陸産と思われる須恵器杯蓋と須恵器模倣の折り返し杯蓋が混在しており、前代の

様相を引き継いだ土師器杯の存在とともに8世紀初頭に比定できよう。

奈良・平安時代Ⅱ期

この段階になると、土師器杯はⅠA a・ⅠB類で構成されるが、新たに大形の皿ⅠA・ⅠB・ⅠCが出現する。この皿は本期のみに認められるタイプである。皿ⅠA・ⅠB類は内外面ともミガキが施され、赤彩が加えられる特徴を有する。須恵器の杯は2種類認められる。丸底気味で体部が大きく開くものと、平底で体部が直線的に開くものである。胎土等より前者は湖西産、後者は常陸産となる可能性が強い。また、鉢のミニチュア的な手捏ね土器が比較的多く存在するのも本期の特徴である。

本期の年代は、常陸産の須恵器杯が完全に平底化し、体部の立ち上がりが明瞭となる点前代より新しい様相と考えられ、8世紀前半を中心とした時期に捉えられよう。

奈良・平安時代Ⅲ期

前期と様相が異なり、新たにロクロ土師器杯が出現する。土師器杯は盤状杯タイプのⅡA、偏平な箱型を呈するⅡD cが主体となる。他に杯ⅡBが見られる。杯ⅡA・ⅡBには内外面赤彩が施される。須恵器は常陸産と思われる杯が存在しており、形態的に土師器杯ⅡD cと類似する。

本期は、盤状杯タイプの杯が出現し、須恵器の口径が前段階より小さくなることより、8世紀中葉を中心とした時期が考えられよう。

奈良・平安時代Ⅳ期

この段階になると、いわゆる箱型杯が主体となる。盤状杯タイプは消失し、土師器杯ⅡD a、ⅡE、ⅡF a、ⅡF bで構成される。土師器皿は、無高台の大形品ⅡAが見られる。須恵器の良好な資料は認められないが、高台付杯が伴出している。他に、口唇部を垂直につまみ上げ、胴部外面下半にヘラミガキを加える「常総型」甕が伴っている。

本期の年代を考えるのに良好な資料として、佐原市上の台遺跡A区3号住居跡^{註6}があげられる。かなり多くの箱形杯とともに常陸産と思われる須恵器杯が伴出しており、8世紀後半段階の年代を考えている。一方、佐原市東野遺跡009号住居跡^{註7}でも同様の土師器のセットが検出されている。ここでは後出する土器の様相も含まれていることから8世紀末としている。以上の状況より、本期は8世紀第Ⅲ四半期から第Ⅳ四半期前半頃となろう。本遺跡において墨書土器が出現するのはこの段階である。

奈良・平安時代V期

この時期は前段階と後出段階の過渡的な様相を強く示すため、いくつかのタイプが混在する特徴を有する。土師器杯は、前段階に引き続きII D a、II F a、II F b、II Eが存在し、新たに外面ヘラケズリ後内外面に弱いヘラミガキを有するII C、II D b、内面黒色処理を施したII M aが加わる。土師器甕は前代とほとんど変化がなく、「常総型」甕を主体としている。須恵器は、口縁部がほぼ水平に開き、胴部がバケツ形を呈する五孔の甗が認められる。

本期の年代は、前段階に近い様相もあり、東野遺跡004号住居跡出土土器群とほぼ同時期と考えられることから、8世紀末から9世紀第I四半期に比定しておきたい。

奈良・平安時代VI期

土師器杯の形態にバラエティーが多いことが大きな特徴である。前段階にみられた体部が直線的に開くII F a・F b、底径と口径の差が小さいII G、内面黒色処理のII M aが存続し、新たに底径が口径の1/2近くとなるII H a・H b、底径が口径の1/2以下となるII I a・I b、底径が口径の1/2以下で器高が浅くなるII J、底径が口径の1/2近くで、器高が深くなるII K a・K bが出現する。土師器皿の出土量は少ないが、これにもいくつかのタイプが認められる。無高台のII Bと高台を有するIV Aが存在する。II Bの器高が深いものとIV Aには内面黒色処理が加えられる。土師器甕は前代に引き続き常総型が伴っており、口唇部を上方につまみ上げる小形のものも見られる。甗は1点のみであるが、胴部上半横位叩き目、下半ヘラミガキを施し単孔形態を呈する。やはり常総型の特徴を有するが器肉がきわめて薄くなる点若干異質である。この段階では椀の成立は認められないようである。

本期の土器群と共通する要素を持つものとして、八千代市北海道遺跡D048号遺構^{註8}、印旛群栄町向台遺跡S I 20^{註9}の一括土器群があげられる。北海道遺跡では「承和五年二月□」（838年）の墨書土器が出土している。本遺跡でも、この時期に「□香取郡大坏郷中臣人成女之替承□」と記された墨書土器が検出されており、最後の文字が「承和」と判読できる可能性が強くほぼ同時期と捉えられよう。以上より、本期の年代は9世紀第II四半期に比定される。なお、この段階の特徴である杯のバラエティーの豊富さは本遺跡の性格を考える上で重要な要素である。すなわち、後節で述べるように本遺跡が周囲の集落を取り込んだ形で機能しており、土器の供給先も必然的に多くなると思われる。向井台遺跡例もかなりバラエティーが存在しており、官衙的性格を有する大畑I遺跡に隣接している状況は本遺跡と共通する側面を表しているようである。

奈良・平安時代VII期

この段階でも前段階の様相を引き継ぎ、土師器杯にバラエティーが存在する。前期に引き続

き見られるタイプはII H a・H b・I a・J・K a・L aであるが、全体的に底径が小さくなる傾向が強い。一方、新たにHタイプで器高が深くなるH c、底径が口径の1/2以下で器高が浅いL a・L b、内面黒色処理されるMタイプで前時期より底径が小さくなり体部が内湾気味立ち上がるM bが出現してくる。また、内面黒色処理の無高台椀II Aもこの段階になって見られるタイプである。土師器皿は前時期同様高台の付くIV Aが認められるが、器肉が厚く小形化する。須恵器は、底径が口径の1/2以下で体部が直線的に大きく開き、体部下端から底部全面に手持ちヘラケズリを加える杯と、丸底で高台が付く皿がみられる。

本期は、前段階からの土師器杯の底径が小さくなり、体部無調整のものが多くなることから後出的様相が窺える。また、小形の須恵器杯は我孫子市新木東台遺跡^{註10}において須恵器杯が消滅する段階と類似していることから、9世紀第III四半期に比定できよう。なお、内面黒色処理土器のセット（杯・皿・椀）の中では椀の出現が最も遅れるようである。

奈良・平安時代VIII期

後節で述べるようにこの段階は集落自体が一旦収束する時期に当たり、土器量も多くない。大きな特徴は、底部に手持ちヘラケズリを加えるものと回転糸切り未調整となるものが混在する点である。II群ではI a・K bが認められるが、I aでは口縁部の外反が大きくなり、K bでは前時期よりさらに底径が小さくなりやはり口縁部が大きく外反する。底部未調整のIII群はA類のみが確認された。土師器皿は口縁部が大きく外反するIV Bが存在する。

本期の年代に対する積極的な根拠はないが、前段階より後出的な様相が認められることと、9世紀第IV四半期とした佐原市中山遺跡^{註11}009・010号住居跡で回転糸切り未調整の杯が出現していることから、本期も当該時期に比定しておく。

奈良・平安時代IX期

この段階になると前時期までの様相とはかなり異なり、底部未調整の杯と内面黒色の椀が主体となる。前代から続くII群タイプの土師器杯はK a及び内面黒色処理のM a・M bがあるが、きわめて客体的な存在である。主体となる土師器杯はIII B bとIII Gである。また、足高高台付杯と称される杯IV Aも比較的多い。椀では無高台と有高台の両者が認められるが、後者の方が若干多い。無高台の椀は底部回転糸切り未調整のIII A a・A bが比較的多く、底部がやや丸みを有するIII Bが僅かに含まれる。これらの椀はほとんど口径17cm前後に集中する。有高台の椀はややバラエティーを有するが、口径17cm弱のIV A、口径15cm前後のIV B b・IV Cが主体となる。さらに足高高台の椀IV Gも見られる。他に、口径12～14cmを測るIV D a・IV D b・IV E・IV Fが客体的に存在する。土師器甕は口縁部が短く外反し、平坦な口唇部を有するタイプである。胴部外面に格子叩き及び縄目叩きを施すものもある。

本期は前代までと比べて土器様相がかなり異なっており、主体を占める杯・碗とも器種分化あるいは法量分化が単純になってくる特徴がある。また、前段階との過渡的様相が認められないことからⅧ期とⅨ期の間に空白期間が存在すると考えられる。年代を付与できるほどの積極的根拠はないが、杯では底部に再調整を加えるものが見られなくなること、内面黒色処理土器に無高台と有高台が混在すること、明瞭な足高高台付き杯及び碗が出現することなどから、寺内氏編年のⅡ期に相当すると思われ、^{註12}10世紀中葉を中心とした時期に比定できよう。

奈良・平安時代Ⅹ期

この段階では土師器杯がさらに小形化し、前代に見られた碗の法量分化が明確になる。また、土師器小皿が若干ながら出現してくる。土師器杯では、Ⅱ群タイプが消滅し、底部糸切り未調整のⅢ群のみで構成される。主体となる杯はⅢB b・ⅢB aで、口縁部が外反するⅢB aの割合が前時期より多くなる。また、足高高台の杯ⅣAも比較的多い。新たに出現するものはⅢE a・ⅢE b・ⅢF aである。特に口径11cm前後を測るⅢE aは本期の中で最も多くみられるタイプである。無高台の碗は前代に比して少なくなり、その中では底部が突出する特徴的な形態を呈するⅢCがこの時期のみに存在する。高台付碗の基本的な組成は前時期と変わらないが、口径17cm前後のⅣA・ⅣB a、口径15cm前後のⅣB b、口径11～14cmのⅣD a・ⅣD b・ⅣEと法量分化がさらに明確となる。この段階において出現するタイプはⅣB aである。また、前代に続き足高高台の碗ⅣGが見られる。土師器甕の様相は前時期とほとんど変わらないが、量はかなり少ない。他に灰釉の長頸瓶の底部片が伴出している。

本期は、前代で成立した土師器杯・碗のセットが確立する段階であり、前段階より新しい時期となろう。下総において同様の様相を示す良好な資料は少ないが、我孫子市羽黒前遺跡101号土壌から出土した一括土器群が年代を考える上で参考となろう。^{註13}ここからは、本期の主体を占める杯ⅢE a及び足高高台の杯ⅣAとともに虎溪山1号窯式古段階（折戸53号窯式第三段階）の灰釉碗が検出されている。本遺跡出土の灰釉長頸瓶も折戸53号窯式第三段階期と思われる、ほぼこの年代を与えることができよう。実年代に関しては前川要氏が詳細に検討しており、10世紀第Ⅲ四半期には存在しているとされている。^{註14}以上より本期はやや幅を持って10世紀後半を中心とした時期に比定されよう。なお、この段階から土師器小皿が出現しており、従来考えられている時期より早まるようである。

奈良・平安時代Ⅺ期

この段階は、土師器小皿が主体的となる時期である。土師器杯は、ⅢB a・ⅢE a・ⅢE c・ⅢGが認められるが客体的存在である。土師器碗は、無高台と有高台の両者が見られる。無高台の碗はⅢA a・ⅢA b・ⅢBで構成されるが、器高が深く口縁部の外反度が大きいⅢA bが

主体となる。高台付椀は口径17cm前後のIVA・IVB a、口径15cm前後のIVB bがある。この中ではIVB aの割合が多く、無高台のIIIA b同様器高が深くなるタイプである。また、前段階まで存在した口径11～14cmの小形の椀はきわめて少なくなるようである。土師器小皿は、前段階からのIIIC aが存続しているが、IIIAタイプは認められない。また、この段階に出現するものに、小皿の中では器高が深くなるIIIB、体部が直線的に開き断面三角形状の口唇部を呈するIIIC b、底径と口径の差が大きくなるIIIC cがある。IIIBタイプには内面黒色処理を施すものも見られる。他には、ハの字状の高台が付くIVC、これを大形化したようなIVDが含まれる。甕は個体数が少ないため明瞭な傾向は捉えられないが、3孔となる甕が伴出しており注目される。

本期の年代比定はかなり困難であるが、前段階で出現した土師器小皿が増加し、いくつかのパラエティーが認められること及びこの様相が^{註15} 笹生衛氏編年のII-2期に相当すると思われることから、11世紀前半と捉えておきたい。

奈良・平安時代Ⅺ期

この段階は集落の消滅時期に当たり、土器群の明瞭な様相は捉えられない。主体を占めるものは前段階に引き続き土師器小皿IIIC bで、他にかなり器高が浅くなった杯IIIB c、内面黒色処理が施される高台付きの小椀が若干見られる程度である。

本期の年代は前段階から続くものと考え、11世紀中葉としておく。

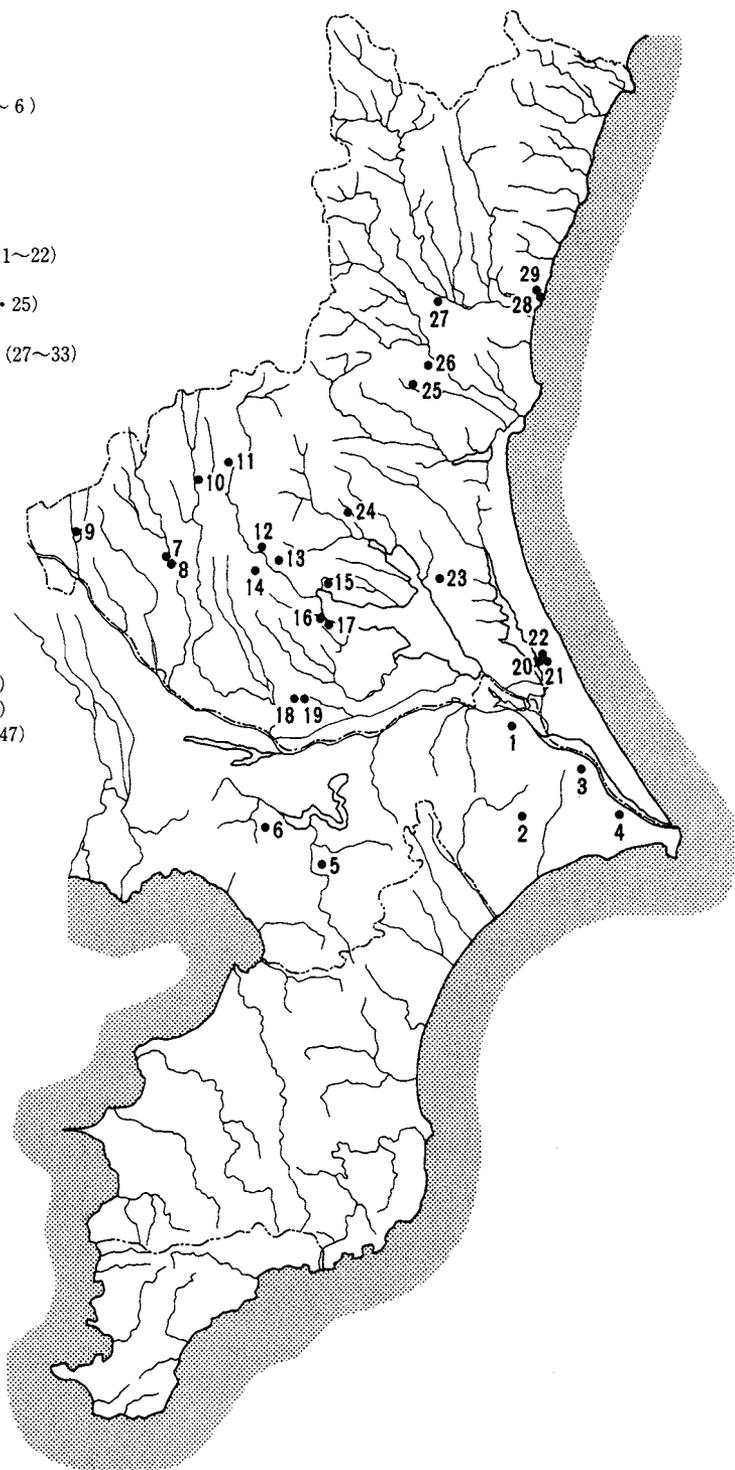
(3) 外面同心円叩き須恵器

本遺跡における須恵器の出土はあまり多くないが、その中で外面に同心円叩きを施す甕の破片が6点検出された。本来同心円叩きは外面に叩き目を施すための内面の当て具として用いられることが一般的であり、そこには工具の逆転現象とともに同心円に一種の文様の効果が窺^{註16}える。この種の須恵器については、完形品となるものが少ないため従来よりあまり注目されることはなかったが、酒井清治氏により房総地域におけるいくつかの例が紹介され、年代観も含めた検討^{註17}がなされた。その後、川井正一氏は茨城県内の類例を集成し、その問題点を提起している^{註18}。ここでは、従来注目されることが少なかった同種の須恵器が茨城県及び千葉県に比較的多く分布する状況が認められることから(第142図)、千葉県の類例を紹介しその傾向を提示しておきたい。なお、資料数がきわめて限定されるため、詳細な検討は後日を待たねばならない。

吉原三王遺跡(第143図1～6)

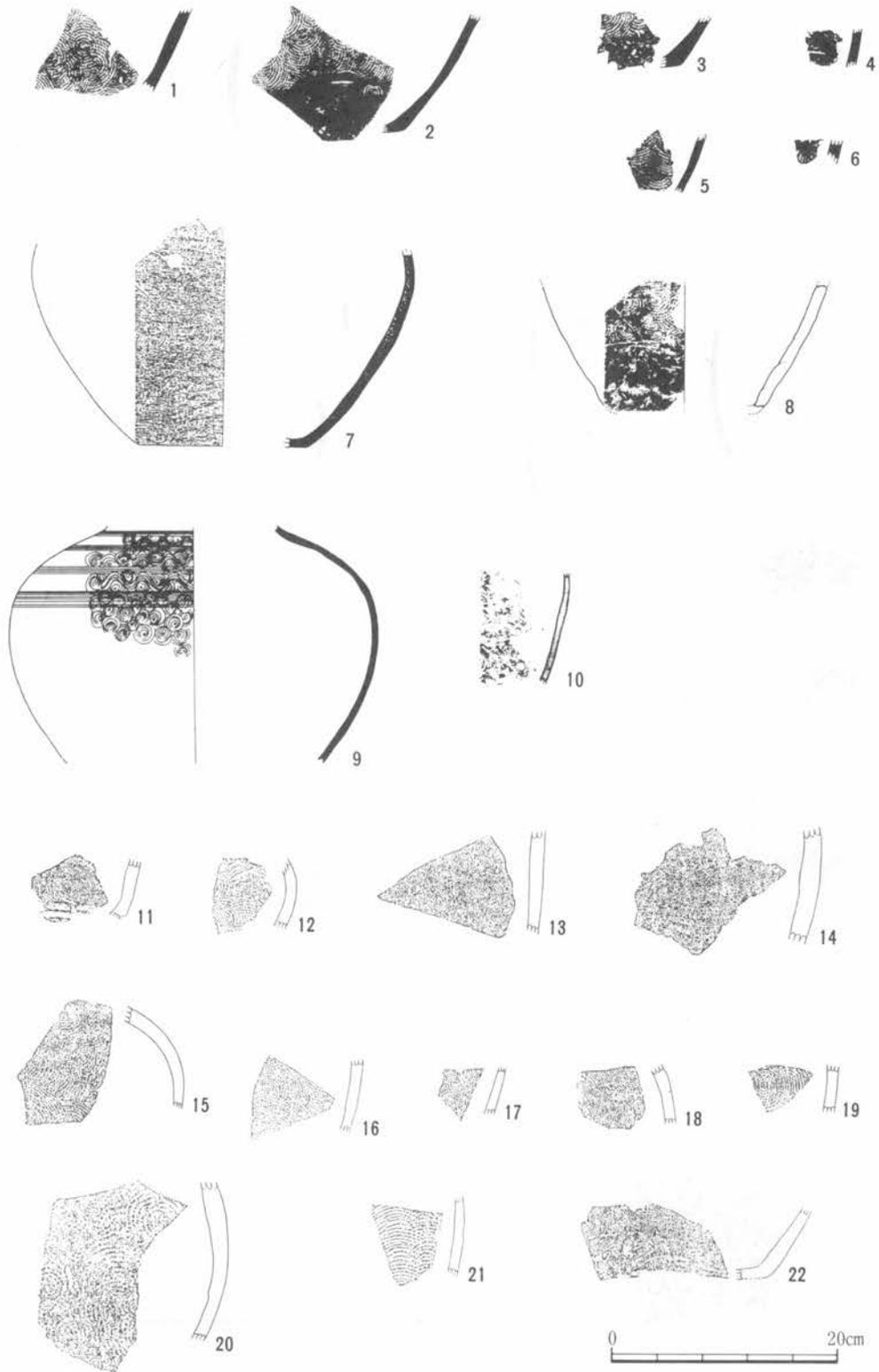
住居跡内から1点、グリッド中から5点の計6点検出されている。年代の把握できる資料は1のみで他の伴出土器より7世紀末と考えられる。胎土等から3種に分けられる。1・3・5・6はかなり軟らかい胎土で雲母粒を多く含む。焼き上がりは不良で、内外器表面は白色、内部

1. 吉原三王遺跡 (1~6)
2. 清和乙遺跡 (7)
3. 東ノ台古墳
4. 野尻遺跡 (8)
5. 大篠塚遺跡 (9)
6. 村上遺跡 (10)
7. 国生本屋敷遺跡 (11~22)
8. 一盃館遺跡 (23)
9. 北新田A遺跡 (24・25)
10. 竹垣前遺跡 (26)
11. 上西郷谷西原遺跡 (27~33)
12. 小田橋遺跡
13. 田宮遺跡
14. 柴崎遺跡
15. 五斗落遺跡 (34)
16. 宮脇遺跡 (35)
17. 竹來遺跡 (36)
18. 南三島遺跡 (37)
19. 外八代遺跡 (38)
20. 広内遺跡 (39)
21. 新町遺跡 (40)
22. 厨台遺跡 (41)
23. 原遺跡 (42・43)
24. 鹿の子C遺跡 (44)
25. 大塚新地遺跡 (45)
26. 台渡里廃寺 (46・47)
27. ニッ堂遺跡 (48)
28. 古坊地遺跡 (49)
29. 泉前遺跡

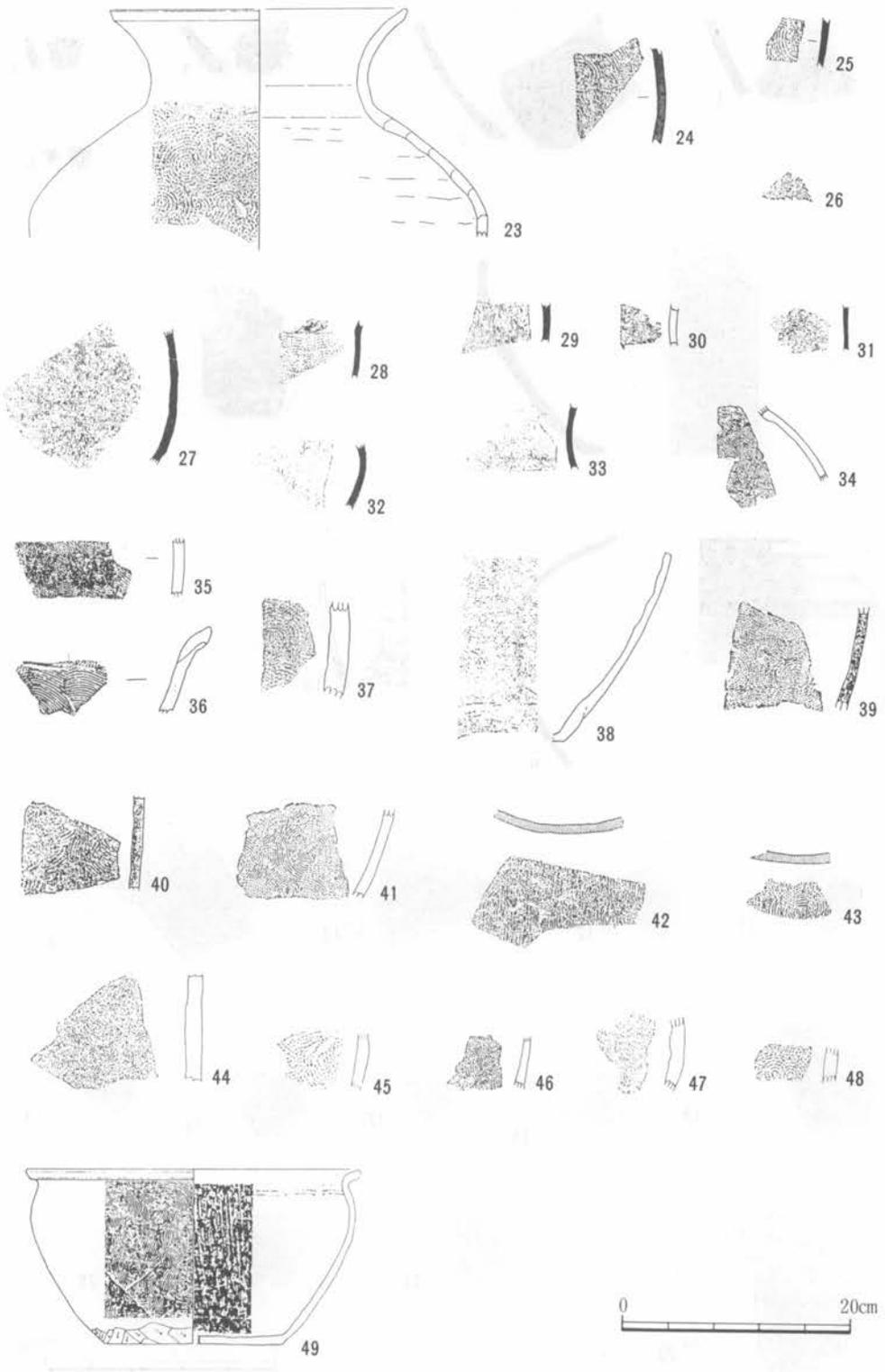


第142図 外面同心円叩き須恵器出土遺跡分布図

遺跡名の後の()内の数字は第143・144図の土器番号と一致する



第143図 外面同心円叩き須恵器集成図(1)



第144図 外面同心円叩き須恵器集成図(2)

が黒色のいわゆるサンドイッチ状の色調を呈する。同一個体となる可能性があるのは5と6である。2は長石粒を多く含み、雲母粒は認められない。焼き上がりは硬質で暗青灰色を呈する。4は長石・雲母粒を含み、暗灰色を呈する。この中で叩き具を復元できるものは1と2である。1は11重まで確認でき、直径6.0cmを測る。2は15重で、直径8.0cmを測る。

^{註19}
清和乙遺跡（第143図7）

香取郡干潟町清和乙字軍野に所在し、栗山川によって開析された標高47m程の台地上に立地する。調査の結果、古墳時代から平安時代にかけての27軒の竪穴住居跡等が検出されている。同心円文を有する須恵器はG 1003号住居跡から出土しており、円文は直径5.0cm、十重まで確認できる。下端部にヘラケズリを加え、円文部分にはナデが認められる。胎土中に雲母粒を多く含み、焼成は良好である。色調は内面灰白色、外面暗灰色を呈する。内外面赤彩の盤状杯タイプの杯が供伴しており、8世紀前半と考えられている。

^{註20}
野尻遺跡（第143図8）

銚子市野尻町に所在し、北東側に利根川を望む標高50m程の台地縁辺部に立地する。古墳時代後半を主体とした集落と、後期から終末にかけての円墳2基、方墳3基が検出されている。同心円文の須恵器は方墳の南側に近接する42号住居跡から出土している。外面同心円、内面無文の当て具痕が観察される。胎土中に白色粒子を多く含み、多孔質である。青灰色の色調を呈する。供伴する土器から7世紀代と思われるが明確ではない。

^{註21}
大篠塚遺跡（第143図9）

佐倉市大篠塚字郷ノ台に所在し、鹿島川によって開析された標高25m程の小規模な舌状台地のほぼ中央に位置する。検出された住居跡は弥生時代末から平安時代にかけての51軒で、古墳時代後半から奈良時代を主体とする。同心円文の須恵器は第13号住居跡から出土している。外面は同心円文を地文とし、上半部に4単位のカキ目を巡らし、間に波状文を加えている。胎土等は不明である。同住居内の供伴遺物より8世紀初頭の年代が考えられる。

^{註22}
村上込の内遺跡（第143図10）

八千代市村上字込の内に所在し、印旛沼水系の新川によって開析された標高27mの比較的広い台地上に位置する。検出された遺構は、古墳時代後期から平安時代を主体に竪穴住居跡169軒、掘立柱建物跡24棟等である。同心円の須恵器は110号遺構（竪穴住居跡）のカマド内より出土している。外面同心円文、内面ナデ調整で、胎土は緻密である。灰褐色の色調を呈する。供伴遺物より8世紀末から9世紀初頭の時期と思われる。

茨城県内の資料（第143図11～第144図）については川井氏により詳しく述べられているためここでは省略するが、同心円文はほぼ正円で、8重から18重まで確認でき、その直径は4～9cmほどのものがある。また、胎土中に雲母粒を含むものも多く認められている。時期的には7世紀末から9世紀初頭までとしている。

以上のようにみても、各遺跡の外面同心円文の叩きを有する須恵器にはいくつかの共通性が認められる。以下で簡単にその様相を述べておきたい。

まず時期に関しては、茨城県の資料では供伴遺物との関係より7世期末から9世紀初頭と把握している。千葉県では、吉原三王遺跡・清和乙遺跡・大篠塚遺跡例が7世期末から8世紀前半、村上込の内遺跡例が8世期末から9世紀初頭と考えられる。ただ、主体となるものは川井氏が記したように8世紀前半となろう。次に分布であるが、第142図より、茨城県南部から千葉県北部に集中する傾向が強いことが明らかである。この分布範囲には6世紀中葉から7世紀後半にかけて見られるいわゆる「変則的古墳」が形成され、古墳時代から平安時代まで続く「常総型甕」が集中し、さらには長石・雲母粒を含む底部ヘラ切りの須恵器杯が存在する。すなわち、古墳時代後半から平安時代にかけて何らかの関係を有していた地域にみられる一現象として捉えることができよう。また、その出土状況及び出土量を概観すると、遺構外からのものが多く、住居跡内でも各遺跡1住居のみである。この状況は、川井氏が述べているように1集落内において数個体のみしか存在せず、きわめて特殊な性格のものとも考えることができよう。

資料的に限定されているため深く検討することは困難であるが、8世紀前半を中心とした時期に、限られた地域で外面に同心円叩きを施す行為がなされていた傾向は指摘できよう。しかも、その機能にはある特殊性が考えられるようである。また、下総地域において明瞭な須恵器窯が検出されていない現時点でその供給先を特定することはできないが、胎土中に雲母粒あるいは長石粒を多く含むことから、常陸南西部の窯跡群の可能性もある。ただ、本遺跡に見られるサンドイッチ状の焼き上がりはこれらの窯跡群では見られないものであり、在地に小規模な須恵器窯が存在する状況も考えられよう。いずれにしても、常総地域において地方窯が展開する7世紀後半以降古墳時代的同心円文を外面に施す技法が8世紀前半を中心に普遍化したことは事実である。しかも、その供給量はきわめて限られ、大量生産されることはなかったようである。また、使用目的にも特殊性が窺われ、破片状態で検出されることが多いことから意図的に破碎された可能性もある。

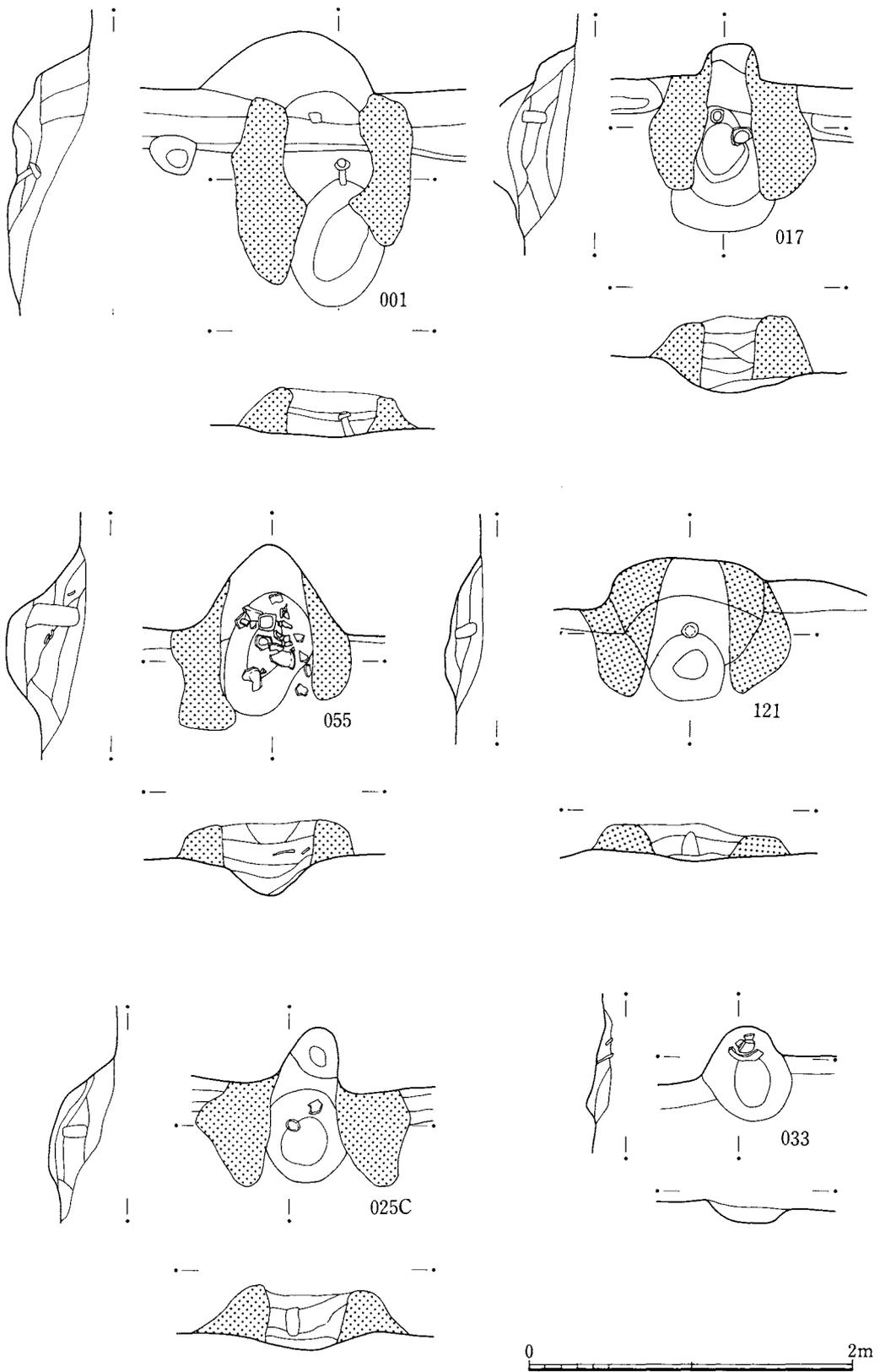
本稿では、他遺跡の検討を十分に行えなかったために明瞭な傾向を呈示するまでいたらなかったが、破片資料がほとんどであることを考えると特に下総地域において類例が増加する可能性は十分にあると考える。その時点でさらに検討していきたい。

第2節 カマド内遺物出土状況

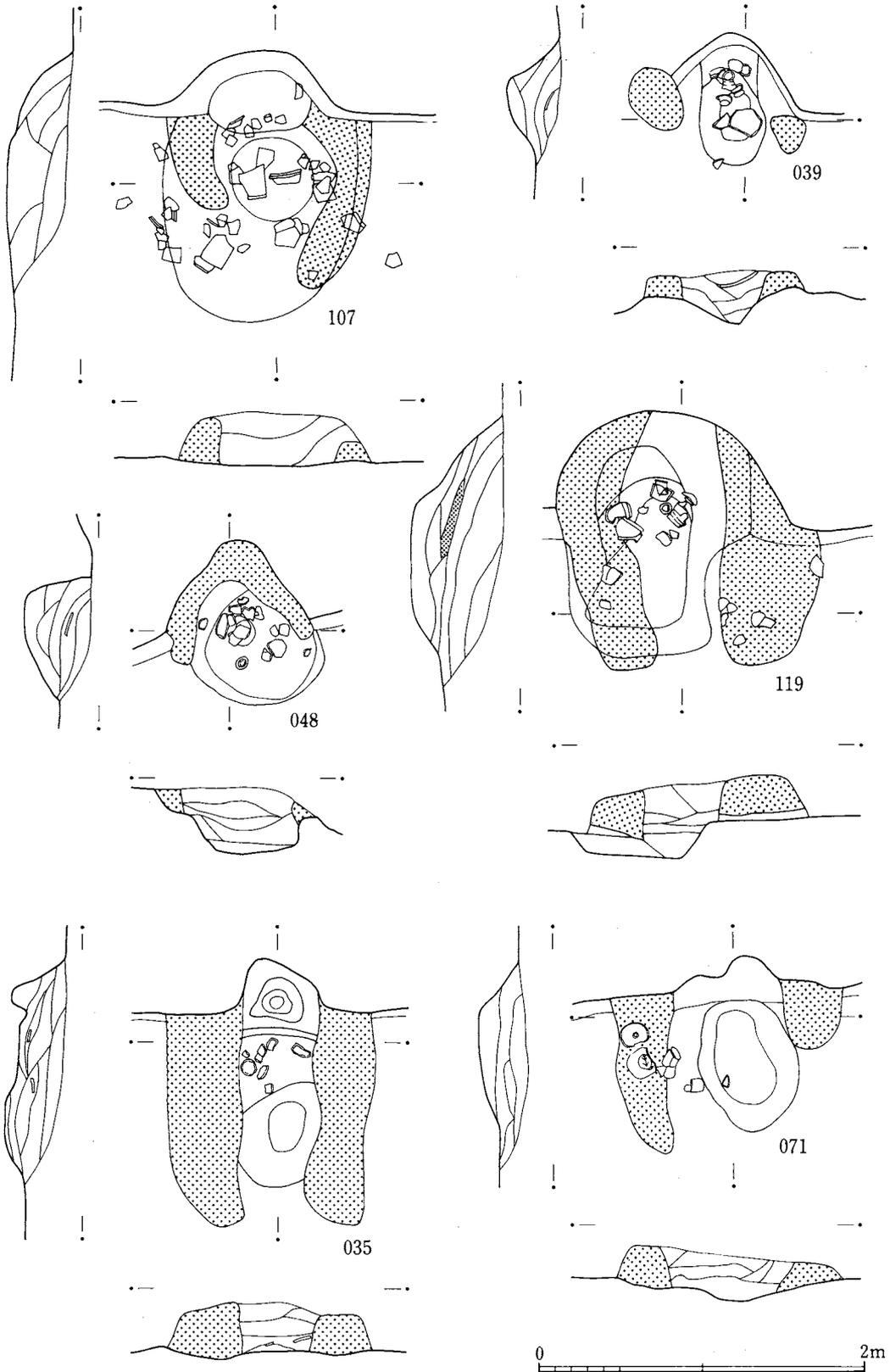
カマドは、古墳時代以降の竪穴住居に伴う重要な施設として従来より考究されてきているが、最近になって遺物の出土状況等から廃棄に伴う祭祀の可能性が指摘されてきている。^{註23}筆者も、佐原市馬場遺跡の平安時代住居跡から出土した墨書土器より祭祀の存在を想定したことがある。^{註24}しかしながら、すべての住居跡で確認されているのではなく、しかもその出土状況にはいくつかのパターンが認められることから、ここでは本遺跡において遺物を出土するカマドを集成し、そこに認められる類型を呈示し、問題点をあげるにとどめる。なお、カマド廃棄に関しては従来より古墳時代を主体に考えられてきたが、本遺跡では平安時代まで含めて一括して取り扱うこととする。

本遺跡においてカマド内から遺物が出土する例はかなり多いが、比較的良好に遺存状況を捉えられるものは第145・146図に示した12軒である。これらは出土状況から、大きく①燃烧部内に支脚が遺存するタイプ（第145図）、②支脚は存在せず、土器が燃烧部内に多く遺存するタイプ（第146図）に分けられる。①では、支脚が底面に密着するものと、底面よりやや浮いた状態で立っているものの両者が見られる。前者に001・033号住居跡がある。001号住居跡では支脚の上部に焼けた痕跡のない手捏ね土器が倒位状態で置かれていた。また、033号住居跡では支脚を囲むように甑の破片が置かれている。甑自体の被熱は顕著ではなく、煤が若干付着する程度である。いずれも使用時の形態をとどめるものではなかろう。後者では017・025C号住居跡が既に燃烧部内に堆積土があったことを想定させるものである。055・121号住居跡も支脚下に堆積土が認められるが、これはロームブロックが主体であり、カマド構築当初に埋め戻された可能性が強く、支脚の位置からしても使用時の状態をとどめているようである。②は土器片が多いため後世の流れ込みとも考えられるが、048号住居跡では完形の杯が中層に遺存しており、簡単に処理することはできない。カマド内の覆土状況も含めて、廃棄段階に一括して投棄した可能性も存在しよう。この行為自体の意味は不明である。071号住居跡では袖の下にほぼ完形の杯蓋（正位）と杯（倒位）が検出された。土圧によって押しつぶされた状態であり、カマド構築前に意図的に置かれたのであろう。

以上より①・②ともカマドを廃棄する最終段階の行為の表れとする事ができそうである。それは古墳時代に限った現象ではなく、カマドが使用される間連綿と続くものと考えたい。その行為の意図するものを解釈することは非常に難しいが、001号住居跡例や馬場遺跡のカマド内墨書土器の出土状況から想定するができそうである。すなわち、これらは杯あるいは手捏ね土器を逆さに置いてカマド内部を封じ込める意識があったのではなかろうかということである。さらに、封じ込めるものはカマドの構築材あるいは土器片でもかまわず、その結果として廃棄パターンにいくつかの状況が生じるのであろう。



第145図 カマド内遺物出土状況図(1)



第146図 カマド内遺物出土状況図(2)

第3節 出土文字資料について

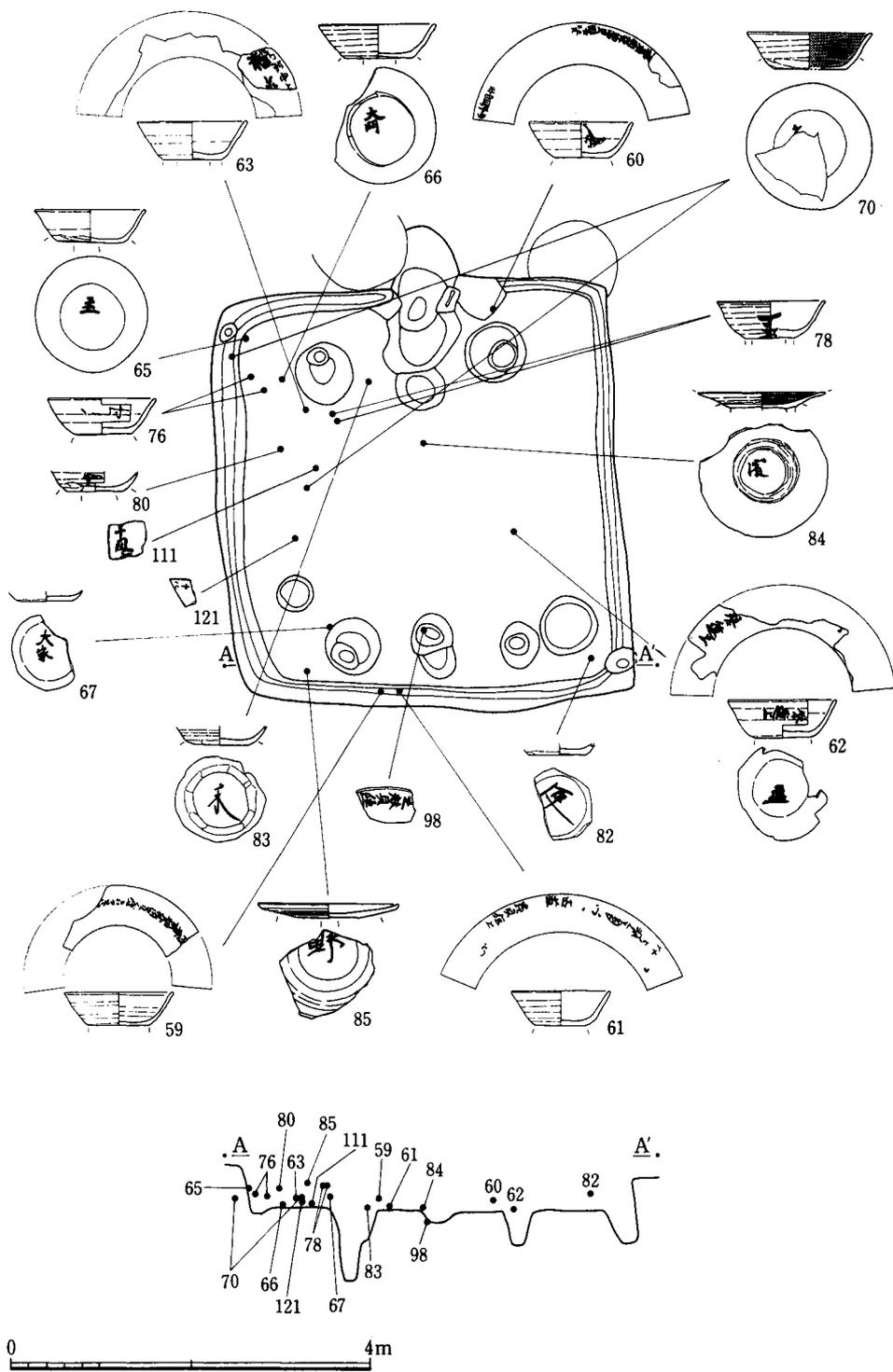
吉原三王遺跡からは100点程の文字資料が検出されている。墨書土器が大半で、他にグリッドからの線刻土器が10点と朱書が1点認められる。第1節で検討した土器の編年からみると、文字資料の年代は8世紀後半から9世紀末までのほぼ100年の範囲に含まれると考えられる。ここでは、出土した文字資料の考古学的側面、すなわち、時期変遷・出土状況と遺構の関係及び文字内容の検討を中心とし、補足的に文献的側面を加えて考察してみたい。

出土状況

ここでは比較的多量の墨書土器を出土した竪穴住居跡を取り上げ、その出土状況を検討してみたい。というのも、従来の墨書土器の研究が遺構と遊離した形で文字内容を検討することに終始する傾向が強く、そのために墨書土器の使用形態が不鮮明な状態となっていることがみられるからである。

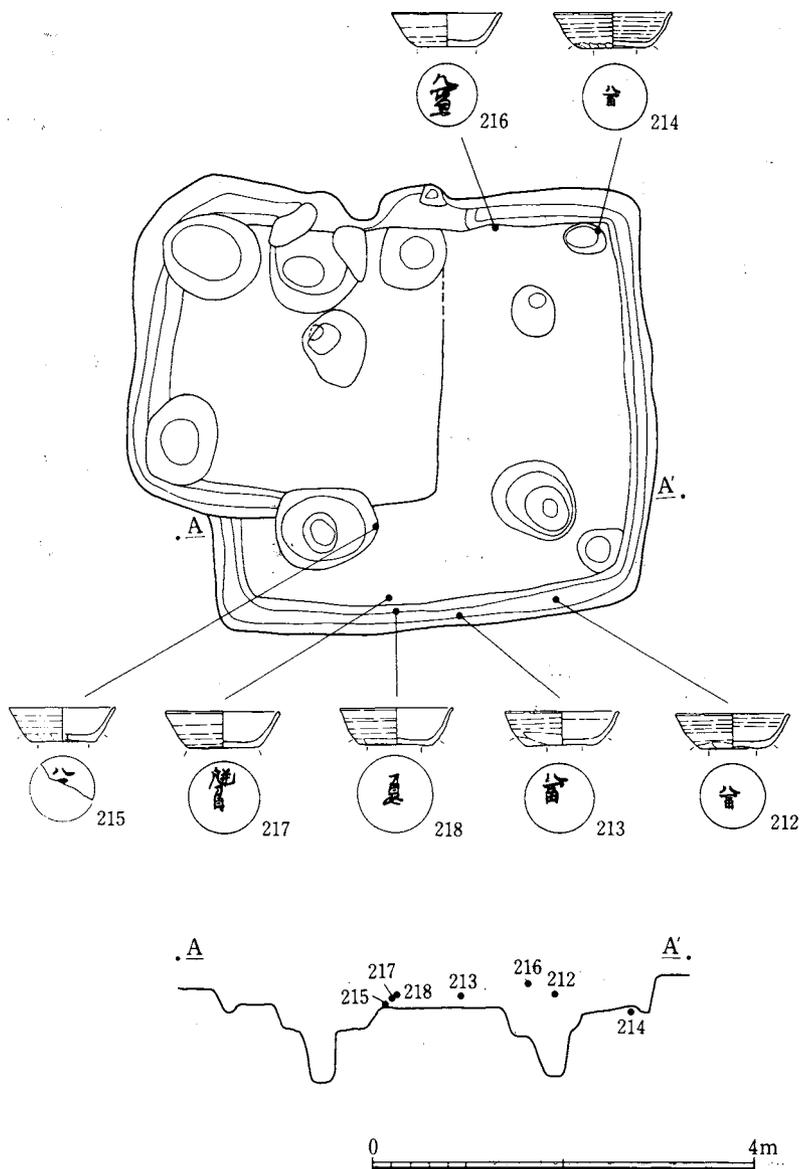
023号住居跡（第147図）

本住居跡からは75点の文字資料が出土している。墨書が73点、朱書が2点である。ただ、朱書は土器の胎土及び文字内容・書体から同一個体となる可能性が強い。図示した墨書土器は、調査段階でドットを落として取り上げたものであり、これ以外の小破片となった資料は覆土中からの出土として捉えることができる。また、第41図の89・90・93・97は住居西側の遺構外より検出された。図示した墨書土器の出土状況を概観すると、住居跡の西側に集中することと床面から覆土上層にかけて比較的連続と出土する傾向が認められる。この状況からでは、本来本住居跡に伴うものと、後に混入したものとを識別することは不可能に近い。一方、墨書の内容をみると、底部外面に1字ないし2字の文字を記すものと、体部外面に横位で文書的な記載をするものの2種類に大きく分けられる。前者の「主」と「大門」に注目すると、両者とも完形あるいは完形に近いもので、「大門」が床面上正位で遺存し、「主」は壁上より落下した状態とも考えることができる。この2個体の杯が023号住居跡の土器群の中ではやや古い様相を示すことより、本住居の廃絶段階に最も近い土器として捉えることも可能である。ただ、後者の61の完形品が周溝上から検出されている状況もあり、この2種類を出土位置から分けて考えることには危険が伴う。一方、注目される出土状況を呈するものに60と98があげられる。これらは体部外面に文書的な記載をするタイプで、60はカマドの右袖上面、68は出入り口ピットの底面からの出土である。特に、68の墨書土器片は出入り口施設の支柱を抜き去った後に入り込んだことが明瞭であり、60を含めて本住居の廃絶後ほとんど時期を置かずにこの状況が発生したと考えることができよう。

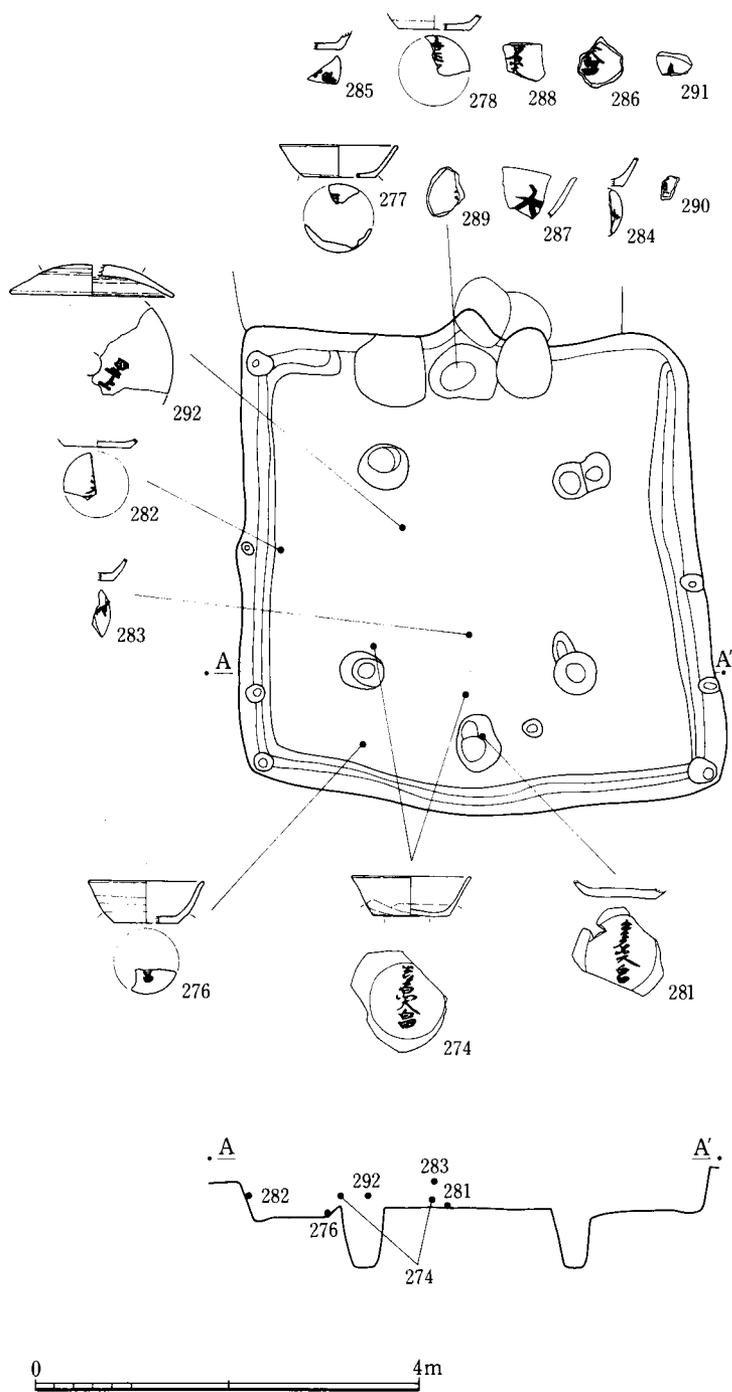


第147图 023号住居跡墨書土器出土状况

本住居の墨書土器の出土状況には複雑な様相があり、これを以て断定することには多くの危険が存在するものと思われる。ただ、床面上から覆土上層に至る土器群にはほとんど時期差が認められないこと、文書的な記載内容をもつ墨書が床面上及び遺構外からも検出されている状況を考えると、本住居の廃絶後まもなく墨書土器群の廃棄あるいは遺棄行為が行なわれた可能性が強い。



第148図 047A号住居跡墨書土器出土状況



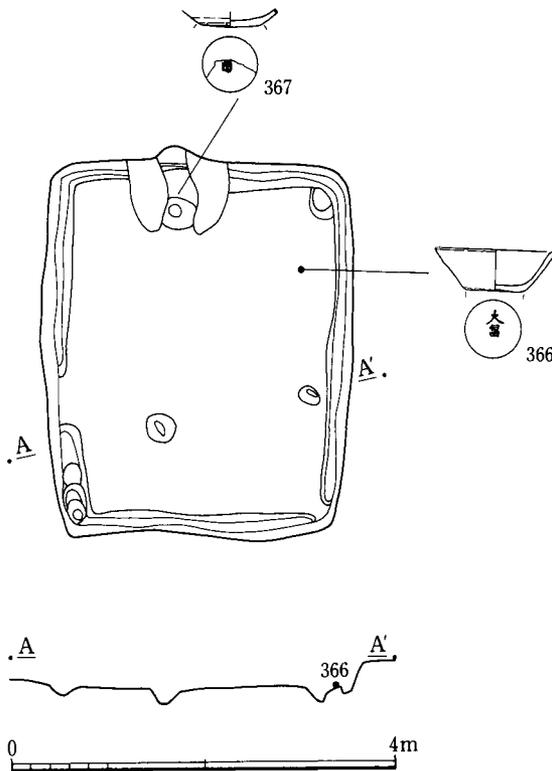
第149图 056号住居跡墨書土器出土状況

047A号住居跡（第148図）

本住居跡の墨書土器は北壁と南壁直下に散在して遺存していた。しかも、完形あるいは完形に近いものがほとんどで、明らかに住居に伴う墨書土器として捉えられよう。個別に見ると、北側の216は床面からかなり浮いておりカマドの上面に置かれていたものと思われる。また、214は北東コーナーの床面に密着して正位状態で検出された。一方、南側の4点は床面上10cm程の同一レベルで遺存していた。これは、本来床面上に存在していたものではなく、南壁上面に置かれていたものが壁の崩壊とともに内側に落ち込んだ状況を窺わせるものである。以上より、本住居跡の墨書土器は最終使用状態に近い遺存状況を表しているものと考えられる。

056号住居跡（第149図）

本住居跡の墨書土器はすべて破片状態で、南西側の床面から覆土上層にかけて認められる。また、墨書土器16点のうち10点がカマド内から出土している点特徴的である。この状況は047A号住居跡とは異なり、むしろ023号住居跡例と似ている部分がある。ただ、主体となる「吉原大島」がこの住居内で完結すること、カマド内に多く遺存することを考え合わせると住居に伴出する墨書土器として捉えることができよう。ただ、破片のみで構成される点は注目しておきたい。



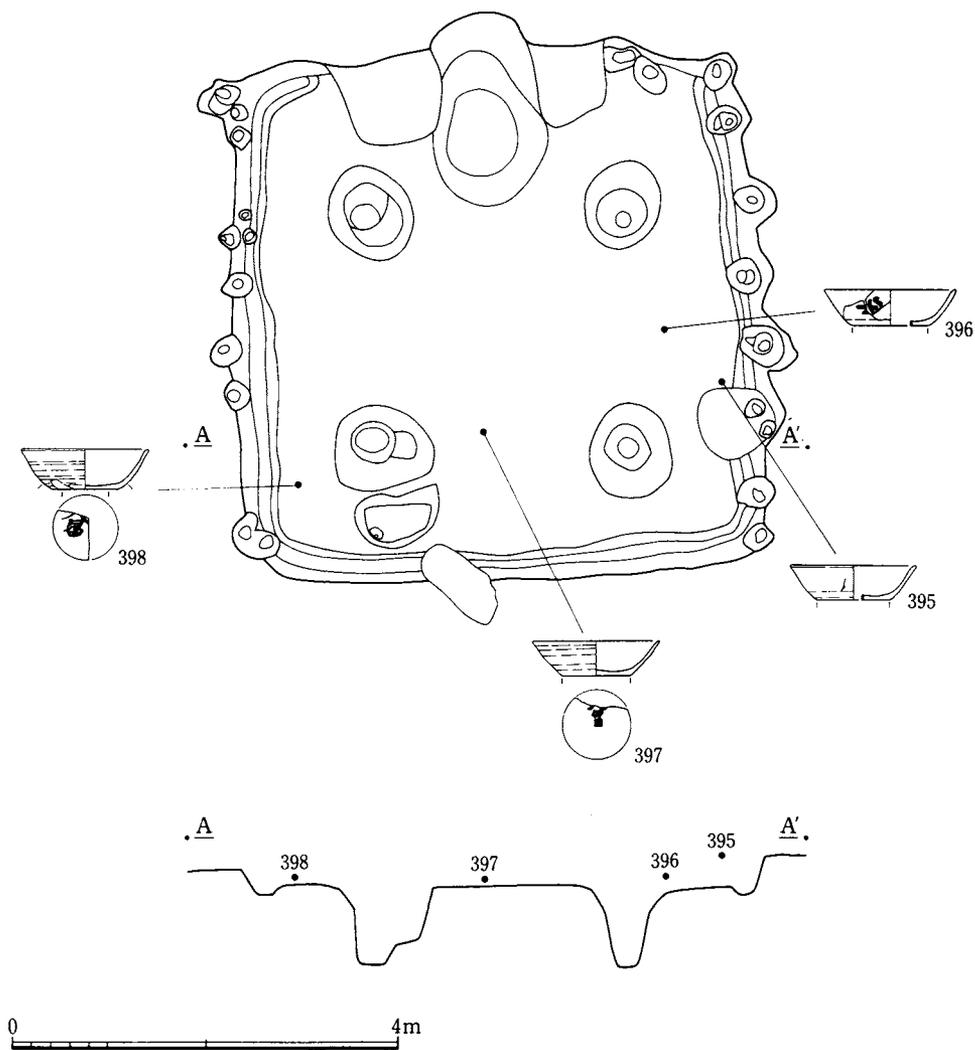
第150図 110号住居跡墨書土器出土状況

110号住居跡（第150図）

本住居跡では5点の墨書土器が検出されており、カマド内及び北東床面上から出土した2点の「大島」は明らかに伴うものと思われる。他の3点は覆土中の小破片であり、書体や文字内容に差異が認められることより、後に混入した可能性も考えられる。出土点数が他に比べて少ないものの、完形に近い墨書土器が床面上から出土していることからみて、最終状態を示していると考えられる。

115号住居跡 (第151図)

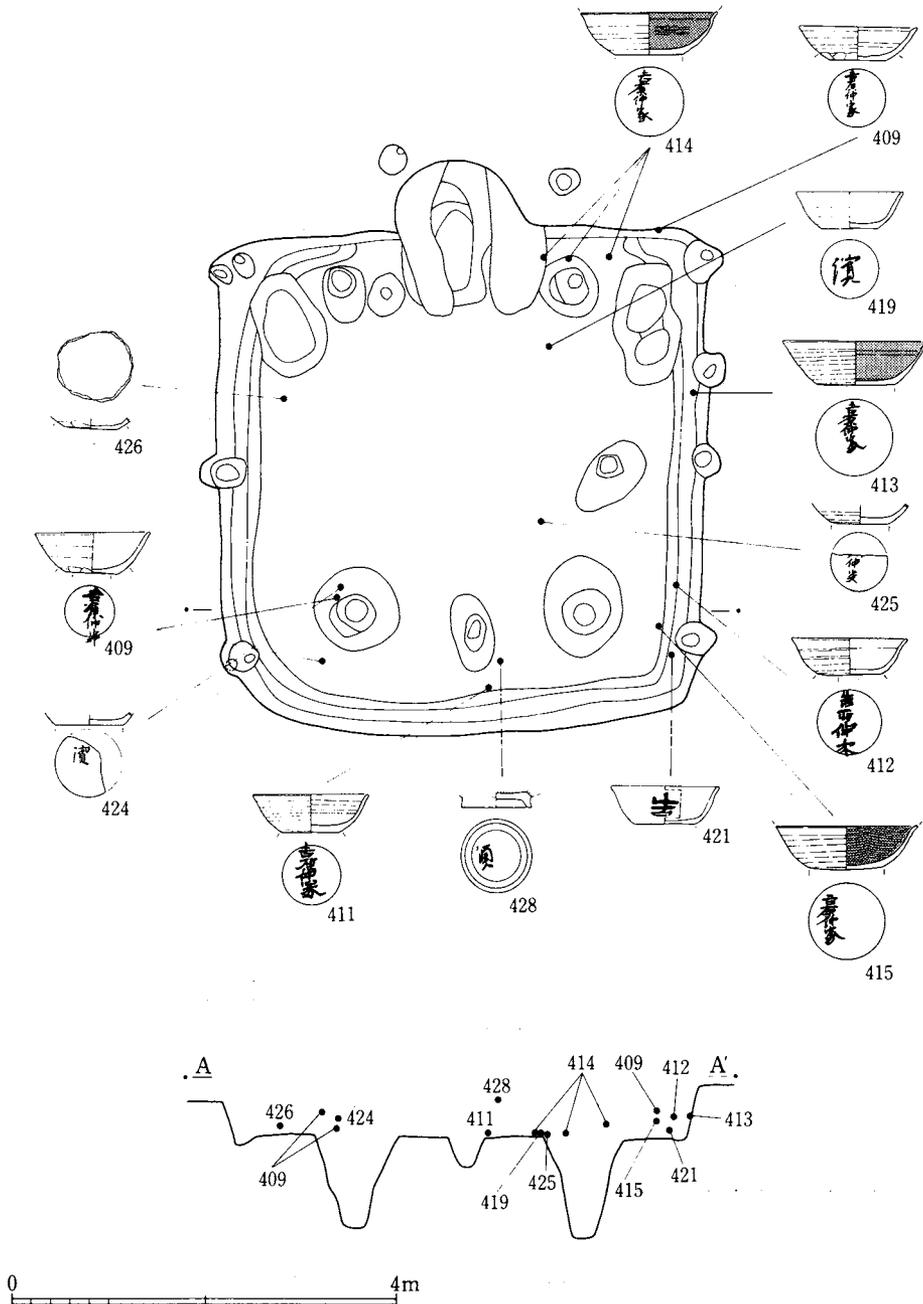
本住居跡は比較的大形で壁柱穴を有しており、056号住居跡と共通するものがある。墨書土器は9点検出されているが、破片状態のものが多い。床面上からは397・398の「大畠」のみで、他は覆土中の出土である。この状況からみると、本住居跡の主体となる「大畠」が床面上、他は覆土中に所在するようであり、破片ではあるが底部記載の「大畠」は住居の廃絶段階で置かれていたようである。



第151図 115号住居跡墨書土器出土状況

119号住居跡 (第152図)

115号住居跡同様壁柱穴をもつ比較的大形の住居である。墨書土器は12点検出され、全点図示してある。全体を見ると、西壁を除く壁際に集中する傾向が顕著で、しかも壁際の土器は完形あるいは完形に近いものとなっている。この状況は047A号住居跡と共通するものである。主体となる「吉原仲家」に注目すると、北東コーナーに2個体、東側に1個体、南東コーナーに2



第152図 119号住居跡墨書土器出土状況

個体、南側に1個体、南西コーナーに1個体と出土位置が大きく分けられる。また、周溝上の底面からかなり浮いた状態で出土しているものも多く認められることから、047A号住居跡同様壁にあったものが壁の崩壊とともに内部に落ち込んだ状況を想定できる。421の「吉」にも同様のことが言えよう。一方「濱」の2個体は、419が完形ではないものの床面上にあり、424は底部片で覆土中からの出土である。後述する墨書土器の時期変遷のなかで、書体の時間的変化が認められることからすると、424は混入したものと解することができる。

特徴ある墨書土器を比較的多く出土した6軒の竪穴住居跡を取り上げて個々に検討した結果、おおよそ以下の3つのパターンに分けられそうである。

①、住居の廃絶段階に多量の墨書土器が遺棄あるいは廃棄され、その多くが西側からの流入と思われるもの(023号住居跡)。

②、壁上にあったと思われる墨書土器が落ち込んだ状態で壁際に遺存し、最終使用状態に近いもの。完形及び完形に近い土器がほとんどである(047A・119号住居跡)。

③、完形品がなく、破片状態で床面から覆土中に遺存するもの。カマド内からの出土が特徴的である(056・110・115号住居跡)。

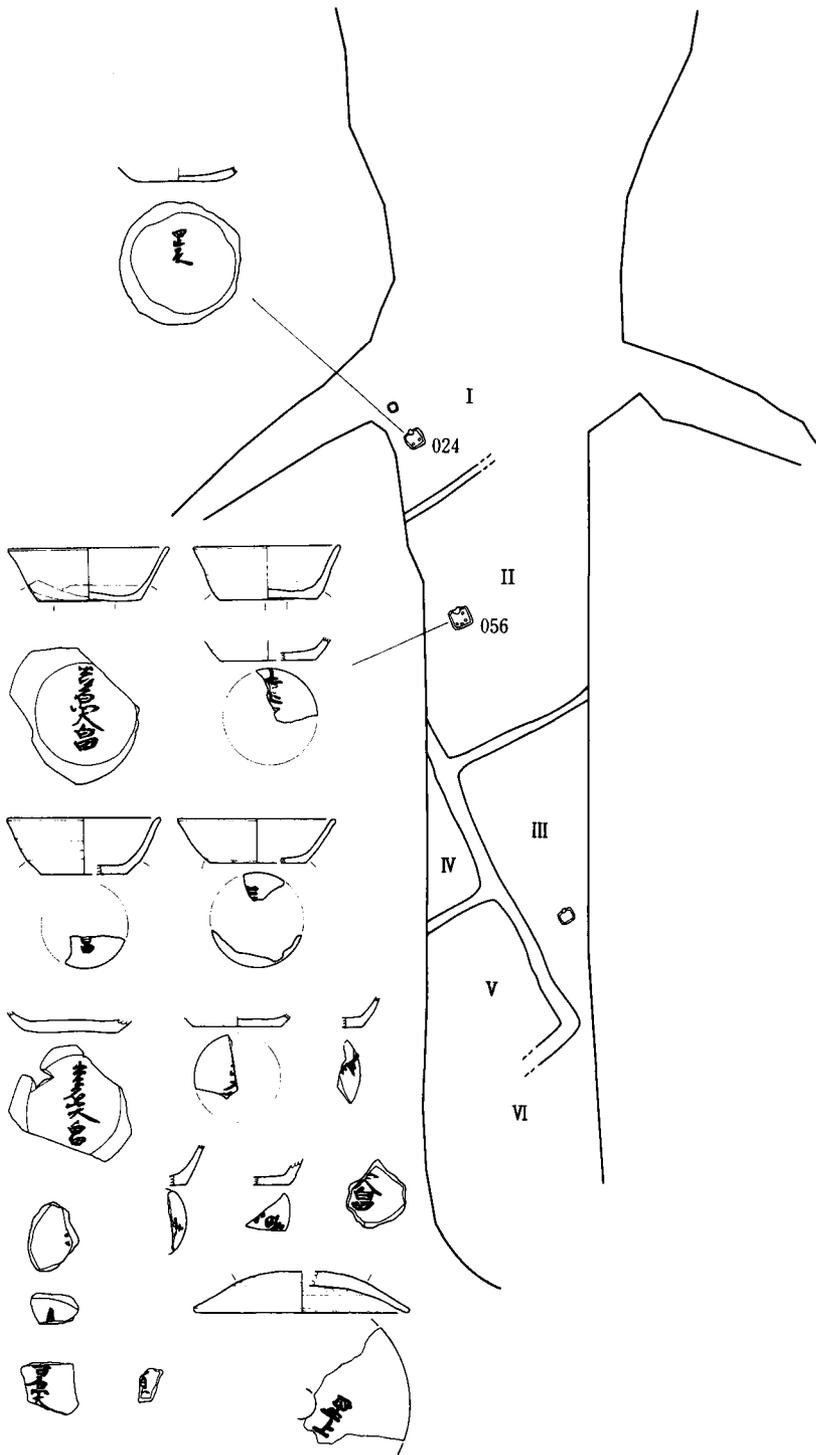
この状況を墨書土器と対比してみると、きわめて興味ある現象が浮かび上がってくる。すなわち、①のパターンは「香取郡大坏郷……」に代表される文書的な内容の墨書土器を多く含み、他の住居跡から出土したものとは性格が異なると思われるのに対し、②・③パターンは「吉原仲家」のようなその住居の主体となる墨書土器で構成され、一住居内で完結する内容を含んだものとなっている。また、②のパターンは「八富」と「吉原仲家」、③のパターンは「吉原大畠」と「大畠」に代表される。特に③は後述する墨書土器の時期変遷において同一区域内に所在し、時期を異なりながらもお互い共通する文字を所有している。「八富」の解釈が難しいが、ある期間「大畠」を共通の内容としたグループの存在が看取される。

時期別分布と特徴

ここでは、墨書土器の出現期である8世紀後半から消滅期にあたる10世紀代までの様相を検討するが、時期ごとに分けることによって遺構が分断される危険性を踏まえたうえであくまで時期的な流れのなかで墨書土器が変化するという前提を含んでおきたい。また、墨書土器の出現から消滅にかけて溝が大きく関与していると思われることより、説明上便宜的にIからVI区に調査区内を分けておく。

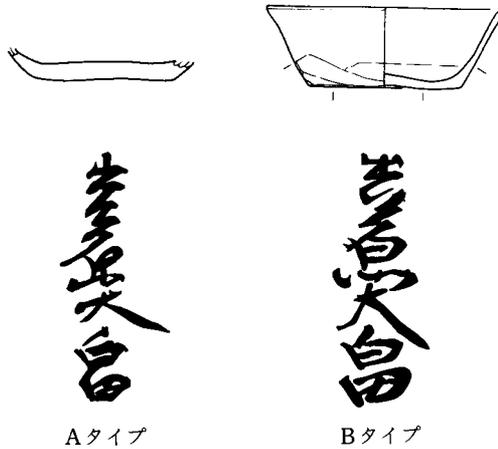
奈良・平安時代Ⅳ期(第153図)

墨書土器が出現する段階である。後述する集落の展開のなかで、この時期は溝による区画が



第153図 墨書土器時期別分布図(1)

設定され、区画内に計画的な竪穴住居跡の配置を行なっていることが考えられる。墨書土器が出現するのもこの状況下である。この段階では、I区の024号住居跡で1点、II区の056号住居跡で15点みられる。他に056号住居跡付近グリッド内で2点検出された。I区では「罌上」。「罌足」は覆土中の出土であり、本住居跡の伴出土器と確定することはできない。ただ、土器の時期としてはこの段階の新しいほうに含まれるものである。人名と考えられる。II区では1軒の竪穴住居に限定されている。完形となるものではなく、底部の小破片が多いが、文字の遺存状況及び土器の様相より同一個体となるものはない。すなわち、「吉原大島」が12点、土師器の蓋上面に書かれた「罌上」が1点ということになる。また、056号住居跡近くから検出された墨書土器は残存部より「吉原大島」と「罌上」に考えられる。「吉原大島」の書体を概観すると、第154図のようにA・Bの2グループに分けられそうである。Aはくずしが顕著となり、「島」の上下のバランスがBとは全く異なっている。他にも外見上の差異が認められることより別筆と考えられるようである。この状況は土器のタイプと相対しており、Aが切り離し後全面に一方方向のヘラケズリ調整を加えるもの、Bは回転糸切り後周囲に回転ヘラケズリを施すものである。グリッド出土の「吉原大島」はBタイプとなる。墨書を土器に書く段階が問題となるが、このような状況は後述する竪穴住居跡にも認められることより注目しておきたい。

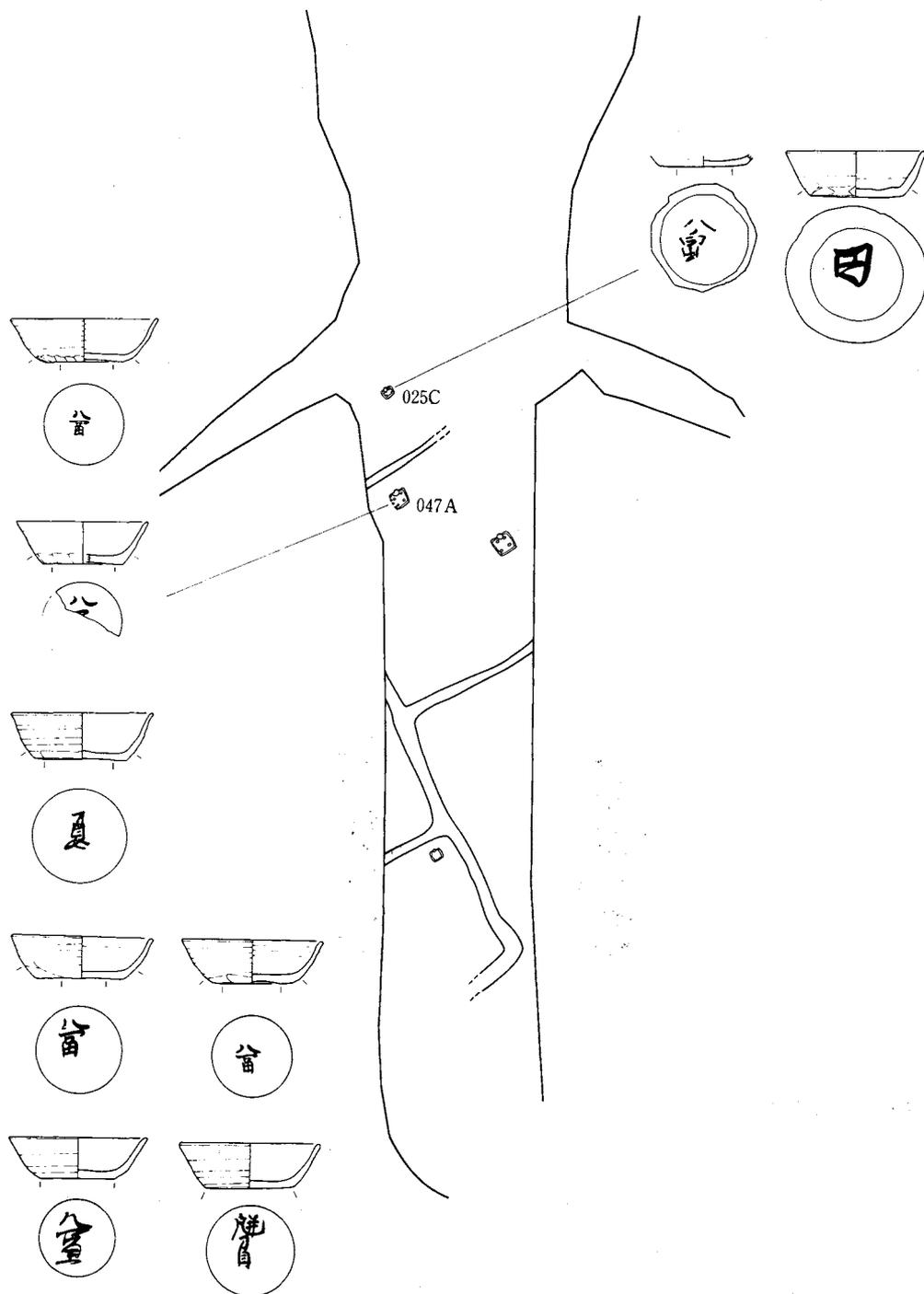


第154図 墨書土器タイプ別分類図

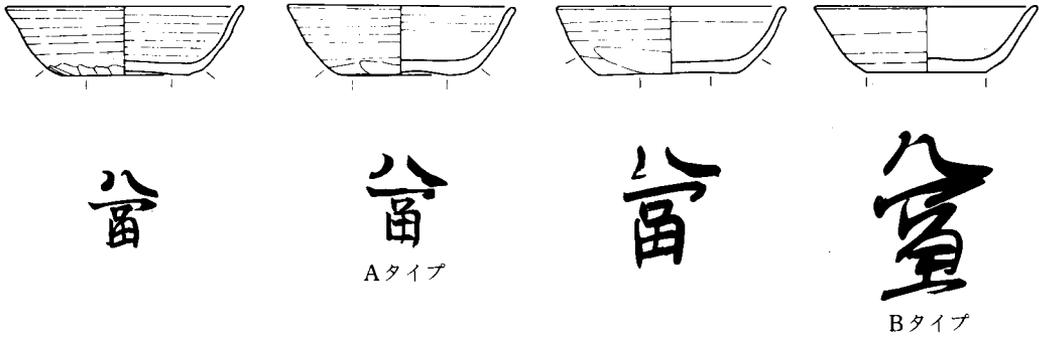
奈良・平安時代V期（第155図）

この段階ではI・II区内に認められる。II区の107号住居跡で「吉原大島」が1点、047A号住居跡で「八富」が5点、「瓶刀自」1点、「刀自女」1点が存在する。他に、047A号住居跡の付近で「神□」が1点みられる。I区の025C号住居跡では「大島」・「田」が出土している。「大島」は「八富」とも読めそうであるが、「大」の上端部が磨耗しており、次の段階に存在する「八富」の「富」の書体と照らし合わせると下の文字は「島」と読むほうが自然であろう。107号住

居跡の「吉原大畠」は前代の056号住居跡のBタイプの墨書土器と同様であり、ほとんど時期差は認められない。047A号住居跡の墨書土器は完形あるいは完形に近いものが主体で、056号住居跡例とは様相が異なる。一方、主体を占める「八富」には、056号住居跡でみられたような土



第155図 墨書土器時期別分布図(2)



第156図 墨書土器タイプ別分類図

器のタイプに相対する書体の違いが認められる。第156図に示したように、Aタイプは体部外面から底部周縁に手持ちヘラケズリを加えるもので、Bタイプは1点のみであるが、体部のヘラケズリはなく底部全面に手持ちヘラケズリを施すものである。Aタイプの文字は全体に小さめで、「富」が楷書的に書かれるのに対し、Bタイプは「八」こそAと似るが、「富」がかなり大きくくずし字に近くなる。しかも、「田」の下の「一」が余分に加わっている。

以上の状況から、II区内においては前代の「吉原大畠」のグループに引き続き「八富」に代表されるグループが存在したことが想定される。しかも、「吉原大畠」と「八富」がお互いに何らかの関係を有していた可能性も考えられる。

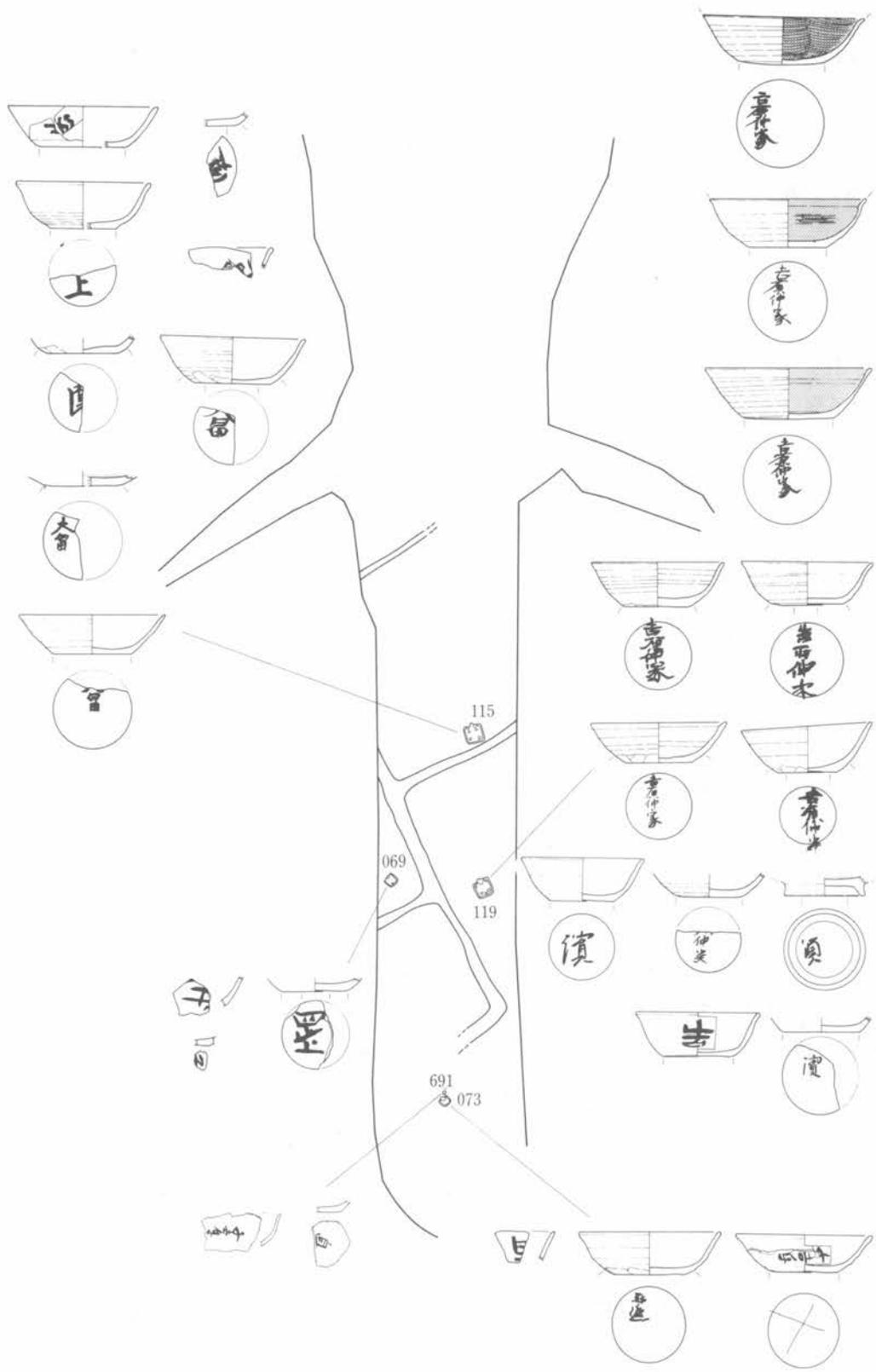
奈良・平安時代VI期（第157図）

この段階の竪穴住居跡の軒数も少ないが、I区内の023号住居跡のみに墨書土器が存在する。ただ、グリッド中の出土であるが、II区内では「吉原大畠」、III区内で「罌上」が確認されている。II区内の「吉原大畠」は前代から続くものとして考えられるが、土器のタイプ及び文字の主体に違いが認められる。また、調査区内に限ってみれば、「罌上」はIII区内に新たに出現した墨書といえよう。

023号住居跡の墨書土器の詳細については後述するが、前段階までの墨書土器とは明らかに性格が異なるようである。すなわち、出土状況で検討したように023号住居跡以外の墨書は出土した竪穴住居跡に属するのに対し、本住居跡では住居内及び周囲に意図的に廃棄されたことが考えられる点である。また、文書的な内容の墨書が主体をなすことも重要な要素である。

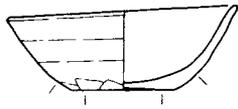
奈良・平安時代VII期（第158図）

II・III・IV区内で各1軒認められる。また、溝区画外のVI区にも1軒存在する。II区南端に位置する115号住居跡では、「大畠」4点、「罌上」1点、不明3点が出土している。この区は、8世紀第IV四半期に「吉原大畠」が主体となった区域であり、本住居跡を代表する「大畠」を



第158図 墨書土器時期別分布図(4)

同一の系譜で捉えることも可能であろう。また、「大島」が書かれる土器のタイプは、底部全面に手持ちヘラケズリを施すもの（Aタイプ）と、体部下端から底部周縁に手持ちヘラケズリを加えるもの（Bタイプ）に分けられる。書体は「吉原大島」の「大島」と類似しており、「吉原大島」のAタイプと本例のAタイプ、Bタイプと本例のBタイプが共通するようである。Ⅲ区西側に位置する119号住居跡からは「吉原仲家」8点、「濱」2点、「吉」1点、不明1点が出土している。他に北側のグリッド中から「大島」1点がみられる。出土したグリッドが南側に傾斜することより、Ⅱ区内の115号住居跡から流れ込んだものと思われる。また、119号住居跡近くのグリッド中から底部の小片であるが、「吉原仲家」の「吉」の残画と思われる墨書土器が検出されている。調査区内に限ってみれば、この段階になって初めてⅢ区に大量の墨書土器を所有する竪穴住居跡が出現する。しかも、墨書内容も前段階までには見られなかった新出のものである。主体となる「吉原仲家」が書かれた土器のタイプは、ロクロ目が弱く、糸切り後周縁に手持ちヘラケズリを施し、やや軟らかい胎土のもの（A）、ロクロ目が強く、底部全面に手持ちヘラケズリを施し、砂粒の混入が少ない洗練された胎土のもの（B）、口径が大きく、内面黒色処理が施され、白色に近い色調を呈するもの（C）の3タイプに分けられる（第159図）。409の杯は体部下端から底部全面に手持ちヘラケズリを施すもので、A～Cには属さないが、胎土及び色調よりCタイプの範疇に含まれる。これを墨書の書体と比較してみると、A・Bタイプは個体ごとに差異があり、共通性を抽出することは困難であるが、「原」の文字に注目すると「厂」の「一」の書き方にAとBでは違いが認められる。一方、CタイプはA・Bとは全く異なり、繊細な感を呈する筆使いで、かなり熟練した書き手の存在が予想される。全体の文字構成がやや右側に湾曲する特徴を有し、413と415は「家」の「ノ」の部分に筆割れが生じている。ここでも、前例のように土器のタイプに相対した書体の違いが存在する可能性が強い。「濱」は2点存在するが、419は回転糸切り未調整、424は底部全面に手持ちヘラケズリを加えるものである。「濱」は奈良・平安時代Ⅵ期の023号住居跡で1点認められる。424に注目すると、偏は023号住居跡例、旁は419に類似する。424の杯がやや古い様相を呈していることより、書体の時間的な変遷を微妙に表しているのかもしれない。Ⅳ区では、南東側に位置する069号住居跡より3点の墨書土器が検出されている。「罌上」が1点と不明が2点である。「罌上」は奈良・平安時代Ⅳ期のⅡ区で2点認められるが、書体は異なるようである。溝区域外となるⅥ区の073号住居跡からは、「子吉原」1点、「野邊」1点、不明1点が出土している。また、本住居跡の北東に隣接する691号土壇より、やはり「子吉原」1点、不明1点が存在する。「子吉原」が記される杯は胎土・調整とも同様に、書体も、部分的にくずしが行なわれているが全体的には共通している。また、Ⅱ区の「吉原大島」、Ⅲ区の「吉原仲家」の「吉原」とは、記載位置及び書体が異なっている。おそらく別のグループとして捉えられるであろう。



吉原大島



吉原家



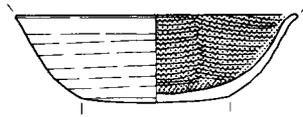
神楽

Bタイプ

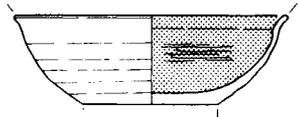


吉原大島

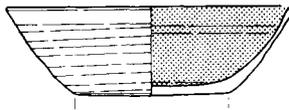
Aタイプ



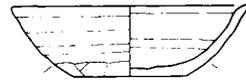
吉原家



吉原家



吉原家



吉原家

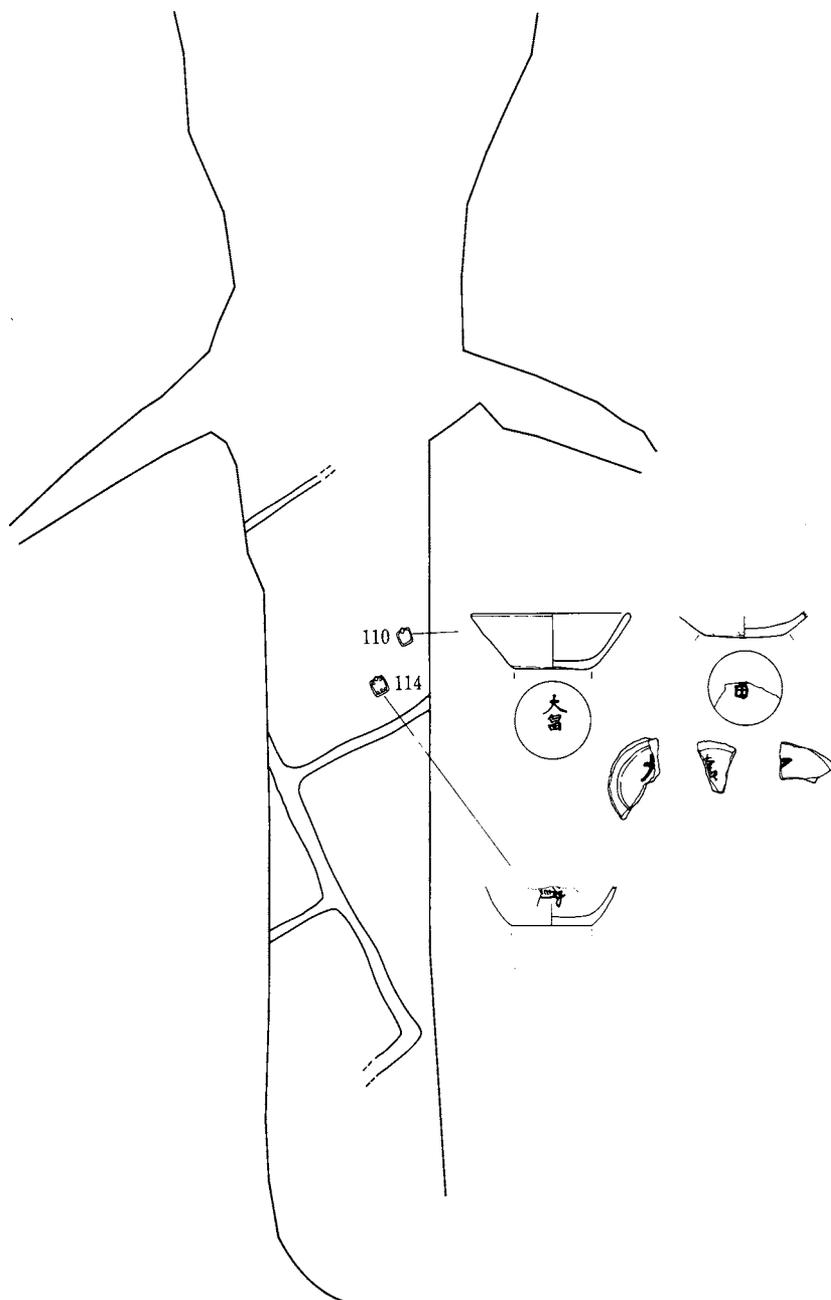
Cタイプ

第159図 墨書土器タイプ別分類図

奈良・平安時代Ⅷ期 (第160図)

この段階では、II区内の2軒の竪穴住居跡に墨書土器が見られる。110号住居跡で、「大」と「島」の残画と思われるものを含めて「大島」が3点、「吉原」の残画と思われるもの1点、不明1点が出土している。なお、「吉原」は土器の遺存状況より後に続く文字の存在が予想される。「吉原大島」となるか。また、114号住居跡では偏を欠損する「濱」が1点、グリッド中より「大島」の残画が1点見られる。この区域は、奈良・平安時代Ⅳ期に「吉原大島」、奈良・平安時代Ⅶ期に「大島」の墨書が存在しており、同一の系譜として考えることができる。唯一完存

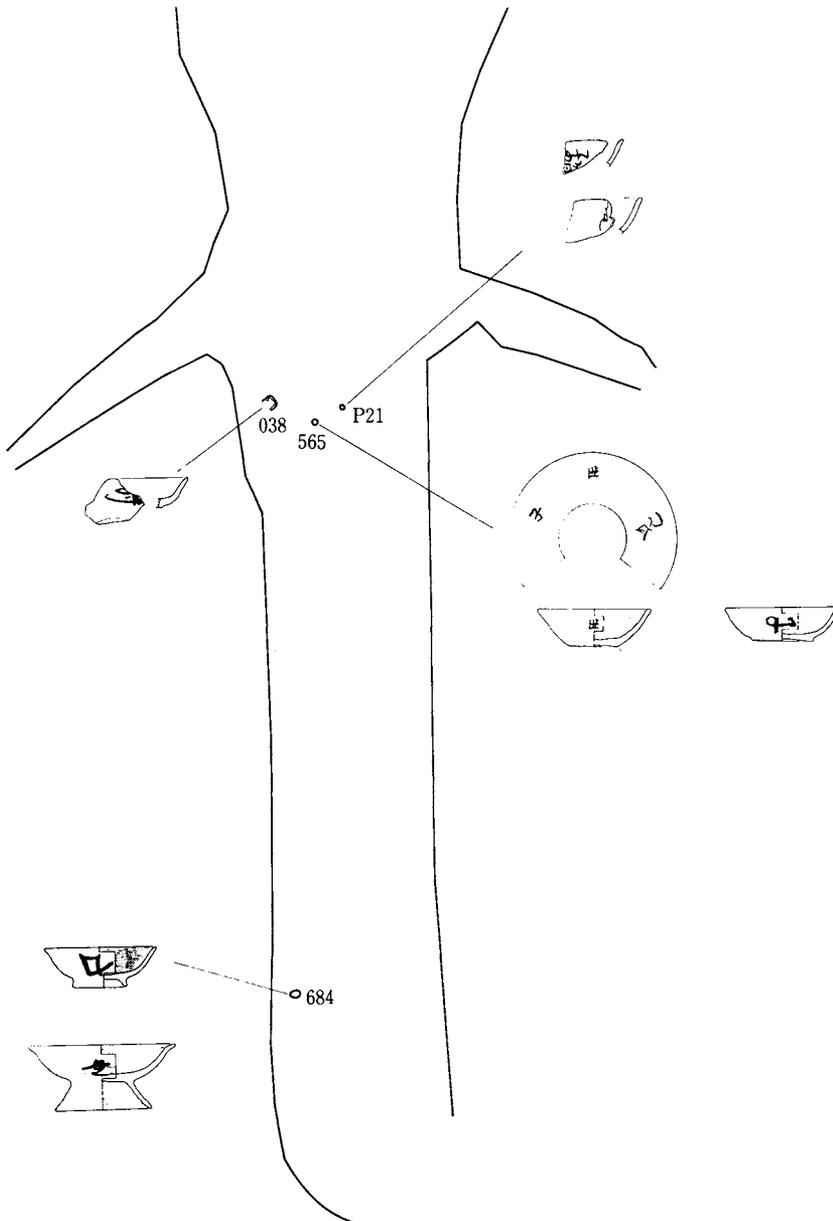
する「大島」は、やや繊細な感じの筆使いであるが、前期のAタイプの「大島」と書体が相似するようである。他には、III区及びVI区のグリッド中より判読困難な墨書土器片が若干見られる程度である。



第160図 墨書土器時期別分布図(5)

奈良・平安時代Ⅸ・Ⅹ期（第161図）

竪穴住居跡からの出土は038号住居跡の1点のみで、Ⅱ区北端の565・P21号土壇、Ⅴ区の684号土壇から数点ずつ検出されたのみである。565号土壇の26の杯が「子」と思われる以外は判読不能で、9世紀代までの墨書土器とは内容が異なるようである。区画溝としての機能がほぼこの段階で終了している状況を考えると、集落自体の変容を端的に表しているのかもしれない。きわめて限られた範囲の調査で断定することはもちろんできないが、当該期が墨書土器の消滅期となる可能性が強い。



第161図 墨書土器時期別分布図(6)

以上、本遺跡において墨書土器が展開する8世紀後半から10世紀代までの様相を検討してきたが、その中でいくつかの注目される状況が浮かび上がってきた。後節の集落の展開を考えるうえで非常に重要な位置を占めるため、ここで要点をまとめておく。ただし、あくまで限られた調査範囲であり、台地全体を対象としたものではないことを断っておく。

- 1) 墨書土器が主体を占める8世紀後半から9世紀末までは、区画としての溝の機能が存続する期間に相当し、10世紀以降は文字内容が変質している。
- 2) 各区で主体となる墨書土器はその区域内で完結し、他の区域には見られない。また、壁柱穴をもつ比較的大形の竪穴住居に集中する傾向が強い。

II区—「吉原大島」・「八富」・「大島」

III区—「吉原仲家」

- 3) 023号住居跡出土の大量の墨書土器は他とは性格の異なる面もあり、1軒の竪穴住居の範疇では捉えられないものである。
- 4) II区及びIII区で主体となる「吉原大島」・「八富」・「大島」・「吉原仲家」は、記載される土師器杯のタイプに相対する書体の違いが考えられる。

文字内容

ここでは、各遺構から出土した文字資料について検討を加えていくが、前述したように023号住居跡と他の遺構の文字資料では性格が異なることより、これらを分けて考えていきたい。また、023号住居跡以外の遺構でも内容の解釈が困難なものは無理が生じるため対象には含まないこととする。

023号住居跡出土一括墨書土器

本住居跡の文字資料は記載位置よりおおきく底部と体部に分けられる。底部墨書には、「大門」・「主」・「大家」・「濱」・「禾」・「便」・「野」と不明が1点がある。このうち、「濱」と「野」は他の住居跡でも検出されており、詳細は後述する。ここでは、「大門」と「大家」に注目して順に説明を加えていきたい。まず「大門」であるが、管見の墨書に類例を求めることはできなかった。ただ、茨城県石岡市の鹿の子C遺跡^{註25}142号住居跡から篋書資料であるが、土師器杯底部に記された「大門」が1点出土している。鹿の子C遺跡は、大量の漆紙文書や墨書土器が検出され、特徴的な遺構とともに国衙工房としての機能を有している遺跡であり、「大門」の性格を考えるうえで貴重な資料である。他に、古代の官衙跡擬定地の字名としていくつか見られる。本遺跡周辺では、北東1.7kmの大字津の宮内の低地に「大門」という小字が残っている。神道山古墳群が所在する台地の下で、津の宮の利根川べりに現存する鳥居から香取神宮に続く古道沿いに位置する。まさしく香取神宮への「大門」を示す地域であり、本住居跡例と比較して注目される。

ちなみに80が「椿」と読めるとするならば、「大門」よりやや香取神宮側の台地上に「椿山」が
残存しており、これとの関連も興味深いものとなろう。「大家」例は將監塚・古井戸遺跡^{註26}や鹿の
子C遺跡等いくつかの遺跡で出土例が認められる。これらの遺跡の性格は、一般集落と呼べる
ものではないだけに本遺跡を検討するうえで参考となる資料である。

体部墨書は58点検出されたが、78や80は1字あるいは2字で完結するものであり、底部墨書
と共通すると考えてここでは対象に含んでいない。また、この体部墨書についてはすでに報告
があり^{註27}、現時点でもそれほど変更がないためここでは新しい資料を含めて簡単にまとめておき
たい。まず、体部墨書の記載内容は大きく3つに分けられる。

①、地名+人名+「替進上」

59. 香取郡大坏郷中臣人成女之替承

60. 香取郡大坏郷中臣人成女贊 年四月十日

61. 道女替進上

62. 替進上、主（抹消、底部）

他に95の郷戸主中臣 、98の之贊進、99の成替進、101の進、102の替も含まれよう。

②、年月日

100. 年十一月 104. 四日長 111. 十月九 123. 年二

③、人名

63. 加万附申上 87. 長 部伊加 88. 伊加万

福承（別筆）

89・90. 真×伊加万（朱書） 91. 真 92. 加万 93. 部

94. 部伊 96. 占部中臣 97. 占部 113. 真 117. 真

①の59と60を合わせて判断すると、「替（進上）」の後に年月日を記している。さらに、②の
104と129より年月日の次に文字が続くことも明白である。この文字が問題であるが、①のよう
に字間を開けずに文字を書き連ねていることからすると、断片でも文字の後の余白を持つもの
は文章の最後尾であると判断することが可能である。となると、③の92の「加万」は最後尾と
なる。そして、この「加万」は③の各断片を合わせて考えると「真敷部伊加万」という人物が
浮かび上がってくる。この例でいくと、103の「長」、105の「中」、106の「良」、114の「世」
も最後尾に位置する人名となろう。断片がほとんどで完全な内容は不明であるが、以上の状況
を総合的に判断すると、郡郷名+人名+「替進上」+年月日+人名の記載様式を基本形態として
おり、最後尾の人名を略することもある。このように、断片が主体で一見煩雑なようであるが、
整理すると体部墨書はほとんど同一の事柄に関わる内容と理解される。

このような記載様式の墨書土器は他に見られず、むしろ通常の文書の書式を想起させるもの
である。そこで、正倉院文書の内から貢進交替に関わる文書の一例を参考のために引用してお

く。

甲斐国司解（『大日本古文書』四—523～524）

甲斐国司解 申貢上逃走仕丁替事

坤宮官廡丁巨麻郡栗原郷漢人部千代 髮髯二疵

右、同郷漢人部町代之替

以前、被仁部省去九月卅日符簡、逃走仕丁如件、国宜承知、更点其替、每司別紙保良離宮早速貢上者、謹依符旨、点定替丁、貢上如件、仍録事状、附都留郡散仕矢作部宮麻呂申上 謹解

天平宝字五年十二月廿三日從七位上行目小治田朝臣朝集使

正六位上行員外目桑原村主足床

從五位下行守山口忌寸佐美麻呂

（傍点筆者）

この例では、交替のものを進上する場合、誰の替りであるのか、誰が部領し進上するかの2つの要素が記載されている。この解釈を本例に当て嵌めてみると、香取郡大坏郷の女性（中臣人成女）の替りの者を貢進する内容と判断できる。そして、進上する人物は③の63と87～91から □長（職名）+真髮部伊加万（人名）が想定される。ただ、59とほぼ同様の記載である60は後の部分が不鮮明であるが、「之」の文字が記されてないようである。この場合には「中臣人成女」を誰かの替りに進上する内容とも解釈できる。この解釈が妥当であるならば、この2個体の墨書土器の使用にはある程度の時間差が当然存在するであろう。すなわち、「中臣人成女」に対する貢進と交替の両者を示す可能性が考えられるのである。これは、59が流れ込んだ状況に近いもの、60がカマド袖上面からの出土という点に関係してくる。つまり、カマド廃絶に伴うと思われる60の方がより先行する段階を示しているのであろう。ただ、土器の様相からはほとんど差が認められず、この時間差はきわめて短期間と思われる。

一方、「大坏郷」は『和名類聚抄』の香取郡「大槻郷」に相当することは間違いない。この大坏郷は東南院文書中の天平勝宝2年（750）年12月28日付治省牒（『大日本古文書』三—477）に「婢稻主女年廿^年髮^髮墨^墨子^子 總國香取郡神戸大槻郷戸主中臣部真敷之婢」とみえる。また、香取文書の大禰宜實房讓状には、「下総国香取神領大槻郷内」とある。これによると、「神戸大槻郷」は香取神宮に封ぜられた神戸であることが明白で、郷が神戸に指定されたことを示している。となると、023号住居跡の体部墨書の多くは神戸大槻郷の女性の貢進交替に関わる内容と判断できよう。

「大槻郷」の地名比定についてはいくつかの説があり現時点では断定することができない。後述する地名墨書土器が他の地域から移動している可能性が強いことより、「大槻郷」の墨書土器を以て俄に本遺跡を大槻郷に属すると考えることはできない。ただ、前掲の大禰宜家文書によると、「鉾山里」に「大槻池尻」、「香取村」内に「大槻池上」の地名が記載されており、復元した条里概念図^{註28}によると本遺跡の位置する「吉原里」の西側部分に位置している。大槻郷が香

取郷の西側に所在することを考え合わせると、大槻郷内の遺跡となる可能性が強いであろう。

体部墨書では他に月日の記載がいくつか見られる。「四月十日」・「十月九」・「十一月」等があるが、特に4月と11月は香取神宮の神事が多い月である。神戸からの女性貢進が香取神宮の神事に関わると推定されるだけに興味深い現象である。ちなみに、12年毎の午年に行なわれる神幸祭は4月である。

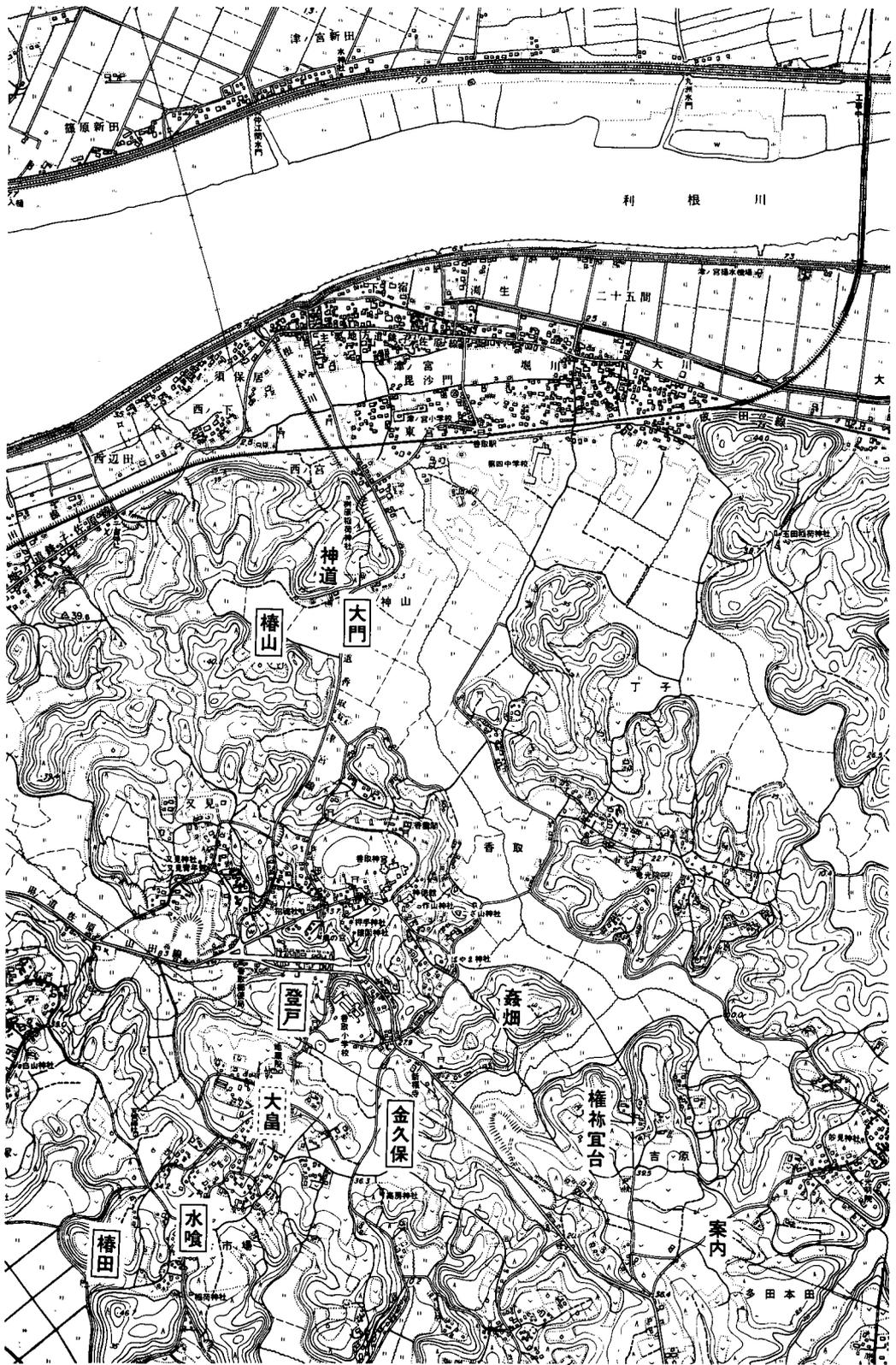
他に注目されるものに59と60の墨書土器の破損状況がある。いずれもほぼ同様の記載様式で、両者に共通する破損部分は「香取郡」の前、すなわち、文章の頭である。文字数及び内容は不明であるが、「香」の前の残面を見るかぎり同様といえる。59のみでは単なる破損と考えてしまいが、60はほぼ完形であり、欠損しているのはこの部分だけである。しかも、破損状況を観察すると、内側から外側に向けて意図的に折っている可能性が強い。偶然の欠損とも考えられようが、これほど一致することはむしろ不自然であり、ここでは人為的な破損として捉えておきたい。となると、この欠損部分の文字が重要となってくる。「香取郡」の前に位置することからすると、「下総国」が妥当であろうが、残面ではむしろ「用」のようにも読める。あるいは、この墨書土器の使用目的を記したのかもしれない。あくまで推定であり、判断はできないが、いずれにしても実際に使用するに際しては文頭の部分が不要となるわけでこの点にも注目しておきたい。

その他の墨書土器

ここでは023号住居跡以外から出土した墨書土器の内容を検討する。

「吉原大島」・「大島」

この2種類の文字はII区内にのみ存在しており、同一の系譜で捉えられるものである。時期的に「吉原大島」から「大島」への変遷が考えられるが、これらは、中世の大禰宜家文書中に地名として記載されている。「吉原」は、香取社領34ヶ里の三條一里に「吉原里」がみられる。「大島」は、大禰宜職に付属する金丸犬丸各島の所在地として、香取村内に「大島村五段」が存在する。また、同文書内「大禰宜實房讓状寫斷簡」の「下総國香取神領大槻郷内葛原牧内織服村」の四至として「限北雨引堺・田多・吉原・大島堺」が記されている。この史料は12世紀代の記載であり、この段階では「吉原」と「大島」が別の地域として捉えられている。本遺跡の墨書土器が「吉原大島」から「大島」へ変化している状況を考えると、9世紀前半に「吉原大島」が「吉原」と「大島」に分割されたかあるいは「吉原大島」の「吉原」を省略した記載が行なわれたことが考えられる。また、前掲文書の15～16世紀の検注帳には、「大島村金窪」・「大島村水食」・「大島村登戸」等がある。この大島村に続く3ヵ所の地名は現在の新市場付近に残っており、前述の四至地名と現存する地名を比較すると、「大島」は本遺跡の西側に近接する地域に比定することが可能であろう。



第162図 地名墨書土器関連小字位置図

「吉原仲家」

この文字はⅢ区内にのみ存在する。「吉原」は前述と同様の地名と思われるが、「仲家」は同文書中に記載例がない。この解釈は困難であるが、いわゆる“家”の属性を示すものと「大島」のように地名を指すものの両者が考えられる。ただ、前出の香取社領三條四里に「新家里」が存在する例もあり、「仲家」が地名となる可能性が強い。

「濱」

「濱」は、9世紀第Ⅱ四半期以降Ⅰ～Ⅲ区にまたがって確認される文字である。この点では、「吉原大島」や「吉原仲家」とは出土分布が異なるものであるが、1軒の住居内から1・2点出土するのみで、あくまで客体の存在である。やはり地名と考えられ、香取社領三條五里の「濱里」に比定されるものであろう。

上記以外の底部に1あるいは2文字で書かれた文字資料にも地名として理解されるのが認められる。このような状況をどのように理解するかが次の問題となる。この狭い調査範囲内にこれらの地名が存在していたとは考えられず、むしろ墨書土器が移動したことを想定せざるを得ない状況である。集落の展開のなかで詳述するが、この状況こそ本遺跡を考えるうえで重要な要素を含んでいるのである。

		第 42 図 125	土師器	杯	□	体部外面左	覆土中	VI期		
		第 42 図 126	土師器	杯	□	体部外面左	覆土中	VI期		
		第 42 図 127	土師器	杯	一□	体部外面左	覆土中	VI期		
		第 42 図 128	土師器	杯	□長	体部外面左	覆土中	VI期		
		第 42 図 129	土師器	杯	田□	体部外面左	覆土中	VI期		
		第 42 図 130	土師器	杯	□□	体部外面左	覆土中	VI期		
		第 42 図 131	土師器	杯	□	不 明	覆土中	VI期		
		第 42 図 132	土師器	杯	□ □上	底部内面 底部外面	覆土中	VI期		
		第 42 図 133	土師器	杯	田	底部外面	床面	VI期		
		第 42 図 134	土師器	杯	加	底部外面	覆土中	VI期		
		第 42 図 135	土師器	杯	田	底部外面	覆土中	VI期		
		第 42 図 136	土師器	杯	田	底部外面	覆土中	VI期		
		第 42 図 137	土師器	杯	田	底部外面	床面	VI期		
		第 42 図 138	土師器	杯	因	底部外面	覆土中	VI期		
		第 42 図 139	土師器	杯	□	底部外面	覆土中	VI期		
		第 42 図 140	土師器	杯	□	底部外面	覆土中	VI期		
024	号	住	第 43 图 150	土師器	杯	罍足	底部外面	覆土中	IV期	
025	C	号	住	第 43 图 155	土師器	杯	田	底部外面	床面直上	V期
			第 43 图 156	土師器	杯	八富	底部外面	床面直上	V期	
027	号	住	第 43 图 162	土師器	杯	前	体部外面左	覆土中		
			第 44 图 163	土師器	杯	□	底部外面	覆土中		
038	号	住	第 44 图 186	土師器	杯	前	体部外面左	床面直上	X期	
047	A	号	住	第 46 图 212	土師器	杯	八富	底部外面	床面直上	V期
			第 46 图 213	土師器	杯	八富	底部外面	床面直上	V期	
			第 46 图 214	土師器	杯	八富	底部外面	床面直上	V期	
			第 46 图 215	土師器	杯	八富	底部外面	床面直上	V期	
			第 46 图 216	土師器	杯	八富	底部外面	床面直上	V期	
			第 46 图 217	土師器	杯	匙刀自	底部外面	床面直上	V期	
			第 46 图 218	土師器	杯	刀自女	底部外面	床面直上	V期	
056	号	住	第 49 图 274	土師器	杯	吉原大畠	底部外面	床面直上	IV期	
			第 49 图 276	土師器	杯	□ 畠	底部外面	覆土中	IV期	
			第 49 图 277	土師器	杯	罍 □	底部外面	覆土中	IV期	
			第 49 图 278	土師器	杯	吉罍 □	底部外面	覆土中	IV期	
			第 49 图 281	土師器	杯	吉原大畠	底部外面	覆土中	IV期	
			第 49 图 282	土師器	杯	□□大□	底部外面	覆土中	IV期	
			第 49 图 283	土師器	杯	吉 □	底部外面	覆土中	IV期	
			第 49 图 284	土師器	杯	吉 □	底部外面	覆土中	IV期	
			第 49 图 285	土師器	杯	吉罍 □	底部外面	覆土中	IV期	
			第 49 图 286	土師器	杯	□罍大畠	底部外面	覆土中	IV期	
			第 49 图 287	土師器	杯	大	体部外面左	覆土中	IV期	
			第 49 图 288	土師器	杯	吉原大□	底部外面	覆土中	IV期	
			第 49 图 289	土師器	杯	□	底部外面	覆土中	IV期	
			第 49 图 290	土師器	杯	□罍 □	底部外面	覆土中	IV期	
			第 49 图 291	土師器	杯	□	底部外面	覆土中	IV期	
			第 49 图 292	土師器	蓋	罍上	天井部外面	床面直上	IV期	
060	号	住	第 50 图 298	土師器	杯	大 (刻書)	底部内面	カマド上面		
069	号	住	第 50 图 314	土師器	杯	罍上	底部外面	覆土中	VII期	
			第 50 图 315	土師器	杯	□	体部外面	覆土中	VII期	
			第 50 图 316	土師器	杯	□	底部外面	覆土中	VII期	
070	号	住	第 51 图 320	土師器	杯	取	体部外面左	覆土中		
073	号	住	第 51 图 325	土師器	杯	子吉原 × (ヘラ記号)	体部外面左 底部外面	床面直上	VII期	
			第 51 图 326	土師器	杯	野邊	底部外面	床面直上	VII期	
			第 51 图 330	土師器	杯	罍	体部外面上	覆土中	VII期	
074	号	住	第 51 图 335	土師器	杯	罍	体部外面左	覆土中		
107	号	住	第 53 图 360	土師器	杯	吉原大畠	底部外面	覆土中	V期	
110	号	住	第 54 图 366	土師器	杯	大畠	底部外面	床面直上	VIII期	
			第 54 图 367	土師器	杯	□ 畠	底部外面	カマド内	VIII期	
			第 54 图 370	土師器	高台杯	□	底部外面	覆土中	VIII期	
			第 54 图 371	土師器	杯	吉原 □	底部外面	覆土中	VIII期	
			第 54 图 372	土師器	杯	□	底部外面	覆土中	VIII期	
114	号	住	第 54 图 391	土師器	杯	罍	体部外面左	覆土中	VIII期	

115 号 住	第 55 图 395	土師器	杯	□	体部外面	覆土中	VII期
	第 55 图 396	土師器	杯	固	体部外面右	覆土中	VII期
	第 55 图 397	土師器	杯	大畠	底部外面	覆土中	VII期
	第 55 图 398	土師器	杯	大畠	底部外面	覆土中	VII期
	第 55 图 399	土師器	杯	□上	底部外面	覆土中	VII期
	第 55 图 403	土師器	杯	大畠	底部外面	覆土中	VII期
	第 55 图 404	土師器	杯	□	底部外面	覆土中	VII期
	第 55 图 405	土師器	杯	大畠	体部外面左	覆土中	VII期
119 号 住	第 55 图 406	土師器	杯	□	底部外面	覆土中	VII期
	第 55 图 409	土師器	杯	吉原仲家	底部外面	覆土中	VII期
	第 55 图 410	土師器	杯	吉原仲家	底部外面	床面直上	VII期
	第 55 图 411	土師器	杯	吉原仲家	底部外面	床面直上	VII期
	第 55 图 412	土師器	杯	吉原仲家	底部外面	覆土中	VII期
	第 55 图 413	土師器	杯	吉原仲家	底部外面	覆土中	VII期
	第 55 图 414	土師器	杯	吉原仲家	底部外面	覆土中	VII期
	第 55 图 415	土師器	杯	吉原仲家	底部外面	床面直上	VII期
	第 56 图 419	土師器	杯	濱	底部外面	床面直上	VII期
	第 56 图 421	土師器	杯	吉	体部外面上	床面直上	VII期
	第 56 图 424	土師器	杯	濱	底部外面	覆土中	VII期
	第 56 图 425	土師器	杯	□ 吉原仲家	底部外面	床面直上	VII期
	第 56 图 428	土師器	高台皿	濱力類	底部外面	覆土中	VII期
	565 号 土	第 74 图 25	土師器	杯	田、□、□□	体部外面上	
第 74 图 26		土師器	杯	子	体部外面左		X期
614 号 土	第 75 图 39	土師器	杯	鬮力	底部外面	覆土中	
691 号 土	第 75 图 51	土師器	杯	子吉原	体部外面左		VII期
	第 75 图 52	土師器	杯	□	底部外面		VII期
P 21 号 土	第 75 图 59	土師器	杯	□□、□□ (横 2 列)	体部外面左		
	第 75 图 60	土師器	杯	□	体部外面左		
	第 75 图 61	土師器	高台椀	□	体部外面		
684 号 土	第 76 图 81	土師器	高台椀	田	体部外面下		X期
	第 76 图 85	土師器	高台杯	□	体部外面上		X期
F 2 -24	第 113 图 1	土師器	杯	田□	底部外面		
I 1 -42	第 113 图 2	土師器	杯	八富	底部外面		
F 7 -00	第 113 图 3	土師器	杯	大正	底部外面		
F 3 -23	第 113 图 4	土師器	杯	正上	底部外面		
E 9 -00	第 113 图 5	土師器	杯	矢	底部外面		
D 0 -12	第 113 图 6	土師器	杯	□	体部外面		
061 住 付 近	第 113 图 7	土師器	杯	□	体部外面		
F 3 -44	第 113 图 8	土師器	杯	吉園大園	底部外面		
F 3 -23	第 113 图 9	土師器	杯	吉原□□	底部外面		
F 7 -00	第 113 图 10	土師器	杯	吉□□	底部外面		
F 7 -00	第 113 图 11	土師器	杯	□	体部外面		
072 号 住	第 113 图 12	土師器	杯	□	体部外面上		
B 10-41	第 113 图 13	土師器	杯	田力	体部外面上		
102・103号住付近	第 113 图 14	土師器	杯	□□	体部外面		
F 5 -44	第 113 图 15	土師器	杯	大園	底部外面		
G 4 -20	第 113 图 16	土師器	高台皿	田園	底部外面		
023 住 東 側	第 113 图 17	土師器	杯	□	体部外面		
F 7 - 00	第 113 图 18	土師器	杯	□	体部外面左		
F 4 -01	第 113 图 19	土師器	杯	□□ 田	底部外面		
F 7 -00	第 113 图 20	土師器	杯	田力	底部外面		
121 号 住	第 113 图 21	土師器	杯	□	底部外面		
表 探	第 113 图 22	土師器	杯	□	底部外面		
G 4 -21	第 113 图 23	土師器	杯	□	底部外面		
F 5 -03	第 113 图 24	土師器	杯	□	底部外面		
F 3 -40	第 113 图 25	土師器	杯	□	底部外面		
F 7 -00	第 113 图 26	土師器	杯	□	底部外面		
表 探	第 113 图 27	土師器	杯	□ 田	底部外面		
F 1 -43	第 113 图 28	土師器	杯	保	体部外面上		

023住居

023住居

023住居

023住居

023住居

023住居

023住居

023住居

023住居

563土城

023住居

023住居

023住居

023住居

023住居

023住居

563土城

023住居

0 5cm

第163图 出土文字資料(1)

047A住居

047A住居

047A住居

047A住居

047A住居

047A住居

056住居

056住居

107住居

056住居

056住居

115住居

115住居

025C住居

110住居

115住居

115住居

119住居

119住居

119住居

119住居

119住居

119住居

119住居

119住居

119住居

073住居

691土壙

119住居

119住居

023住居

114住居

074住居

119住居

F3-23

056住居

069住居

024住居

F7-00

025C住居

027住居

038住居

024住居

115住居

119住居

0 5cm

第164图 出土文字资料(2)

115住居

073住居

023住居

023住居

F2-24

B10-41

070住居

684土壇

565土壇

F1-43

565土壇

0 5cm

第165図 出土文字資料(3)

E6-41

E7-44

D0-13

D0-13

I1-04

B10

I1-44

E0-04

I1-12

B10

0 5cm

第166図 出土文字資料(4)

第4節 平安時代末から中世にかけての土壇墓

吉原三王遺跡において平安時代から中世にかけての土壇はかなり多く検出されているが、明確に時期を確定できるものは少ない。この内土壇墓として捉えられる例はさらに少なくなってしまう。これはあくまで出土遺物が検出されないためであり、群として把握できる方形プランの土壇群は該期の墓として考えることができそうである。ここでは、輸入陶磁器等を出土する土壇墓を取り上げて若干検討したい。

本遺跡において輸入陶磁器が検出された土壇墓は、501・508号土壇の2例のみである。501号土壇は掘り込みの浅い長方形プランを呈し、和鏡（山吹双鳥鏡）1面と鉄製和鋏・毛抜き・短刀の他に銅製蓋を伴う青白磁合子・青磁碗が出土している。同安窯系の青磁碗等の年代から本土壇は12世紀末から13世紀前半頃の構築と考えられる。508号土壇は楕円形プランを呈し、青白磁の皿が1点検出された。この皿は太宰府編年Ⅷ-2-b類に相当し、501号土壇とほぼ同様の年代が考えられる。土壇墓より輸入陶磁器が出土する例は少なく、さらに和鏡を伴うものは数例にすぎない。和鏡と輸入陶磁器を埋納した例は、兵庫県多利・前田遺跡、同前田天神遺跡、

山口県鑄銭司大歳遺跡、京都府前櫛遺跡、同平安京右京三条三坊内木棺墓等があげられる。この中では、本遺跡501号土壇例と同様な埋納遺物を出土する多利・前田遺跡が注目される。^{註29}土壇墓と思われるSX-1より和鏡1面（瑞花双鳥鏡）・鉄製和鋏1・鉄製毛抜き1・刀子片1・不明金属製品2・青白磁蓋付き小壺1・青白磁合子身1・白磁皿1・土師器皿8点が検出された。この内、鉄製の和鋏と毛抜きは白磁皿の破片を敷いてその上に置かれたような状況を呈している。501号土壇でも青磁椀の破片上に和鋏と毛抜き及び和鏡が置かれており、破片となった陶磁器の使用方法に共通のものが見られる。

以上のように、本遺跡と共通する内容を有する土壇墓は畿内以西に見られる。千葉県内では和鏡と輸入陶磁器等を伴う例は現在まで確認されていないが、和鏡と鉄製品あるいは小皿が伴うものは笹生衛氏により集成分析されている。^{註30}それらの遺跡と本遺跡とは輸入陶磁器が含まれているかいないかの差があるのみで、土壇墓という本質的な意味合いは変わるものではなからう。むしろ重要な点は、先述した和鏡と輸入陶磁器を埋納する土壇墓を検出した各遺跡が大形の掘立柱建物を伴うような一般集落とはかけ離れた状況を呈することである。そこには、かなり強力な支配者層の存在が想定される。本遺跡の場合は、香取神宮が大きく関与したことが予想される。国家的支配を受けた神郡体制が崩壊する平安時代後期以降、香取神宮自体の変質に伴い、大戸庄に代表されるような中世的な社領開発が展開されるようになる。すなわち、香取神宮の影響のもとに新たな領有関係が生じ、本遺跡一帯もその中に取り込まれ、12世紀後半以降墓地として利用されたようである。このような要因の中で、501号土壇墓のような状況が生まれてくるのであろう。

第5節 集落の展開

ここでは、今まで検討してきた土器及び墨書土器等を含めて時期ごとの集落様相を検討し、本遺跡の性格をまとめてみたい。ただ、調査範囲がきわめて限定されており、これを以て台地全体に汎用することには躊躇せざるを得ない。全体的な状況が判明したうえで再度検討されることを期待する。

古墳時代I期（第167図）

本遺跡の集落形成が開始される時期である。北側から入り込む小支谷に面する谷頭付近に占地する。4軒のみであるが、2軒を1単位とした2つのグループにきれいに分かれる。東側は大形と小形の住居がセットとなっている。主軸方向は、N-5°~7°-Eの範囲に含まれ、かなり強い規制が働いていたようである。集落開始時の台地北側占地は、北側に展開する支谷に対して生産基盤を求めた結果であらう。

古墳時代Ⅱ期（第168図）

前代と同様北側に寄った位置に集中する。谷頭の西側に3軒でやはり2軒1単位で構成されているようである。この内、002号住居跡と016号住居跡は主軸方向を同一にするが、001号住居跡は若干主軸を異なる。ただ、001号住居跡は一括土器の様相が複雑であり、やや時期が遅れる可能性もある。いずれにしても北側指向は前段階と変わらない。

古墳時代Ⅲ期（第169図）

この段階の住居跡は調査区北で1軒のみ存在する。主軸方向が異なるが、北側指向という点では前段階とほとんど変化はない。また、018号住居跡の土器様相は前段階ときわめて類似しており、本期は前時期からの連続的な変化の中で捉えられるものである。

古墳時代Ⅳ期（第170図）

本期も2軒と住居数は少ないが、前段階までとは様相がやや異なってくる。北側の017号住居跡は相変わらず北側指向であるが、057号住居跡は谷頭からやや南側に移動するようになる。この時期以降集落は南に延びてくるが、その初源がこの段階となる。出土する土器の様相も前段階までとは異なり、いわゆる模倣タイプの杯A～Cが見られなくなり、杯E・Fが主体となってくる。なかには放射状の暗文を施す杯もある。土器の様相からすると、前段階とはやや空白を置いた時期の所産と考えられる。

古墳時代Ⅴ期（第171図）

本期は前段階の様相を受けて集落が拡大する時期である。7軒の住居跡が確認され、ほぼ2軒1単位でグループが構成されている（013・015、043・044、128・129）。北側の2グループは前代までと同様の立地で、単独で存在する059号住居跡は前時期の057号住居跡を引き継いだ感がある。また、南側のグループは今まで住居跡が存在しなかった地域であり、さらに南側の地域の開発が行なわれたことを想定させる状況である。

奈良・平安時代Ⅰ期（第172図）

本時期になると集落構成が前段階までと異なり、背景に大きな変化が起こったことを想定させる。古墳時代の集落がほぼ2軒1単位で谷頭付近に集中していたのに対し、この時期には住居が単独で散在するようになる。4軒の住居跡から出土した土器群より、北側の3軒はほぼ同時期、南側の071号住居跡はやや古く、前時期に含まれる可能性もある。この状況と対応して注目されるのが、調査区内を東西南北に走る溝の存在である。溝の掘削時期が問題であるが、

第2章で述べたように中央を南北に走る9号溝の底面から検出された土器群の様相及び本期の古相を呈する071号住居跡を切っている状況から、この段階から次期にかけて集落を区画する溝が形成された可能性がきわめて強いと思われる。以降、区画溝による規制が竪穴住居跡の分布に如実に現われるようになる。前述の墨書土器の分布で設定した区分けによると、本期はI区に2軒、II区に1軒構築されている。

奈良・平安時代II期 (173図)

前代の規制が明瞭に認められる時期である。I・II・V・VI区に各1軒ずつ存在する。I区では北側の支谷に面する縁辺部に位置し、II区では区画内の南側中央に立地する。区画内の住居の位置は、以降の時期を参照するとI区ではほぼこの付近に集中し、II区では順次移動している状況が見られる。V区では北東隅に占地している。以降もこの位置は変わらないが、この状況は南西側から入り込む浅い谷が影響して限られた部分にしか構築できなかったためと思われる。区画外のVI区では南北に走る9号溝の延長線上に1軒存在する。この段階の住居跡の主軸方向は、区画内の北側3軒が座標北から西に9°振れた範囲内であり、溝の方向と一致する。区画外の124号住居跡はN-28°-Wとやや主軸方向が異なる。

奈良・平安時代III期 (第174図)

この段階では、北側のI区内に2軒検出されたのみである。伴出土器より020号住居跡の方がやや先行する様相が認められることから、020から028号住居跡への移動の可能性も考えられる。主軸方向は、020号住居跡がほぼ座標北で、028号住居跡が10°程西に傾く。I区以外ではこの段階の住居は認められないが、区画溝形成以来継続していたII区内に住居が構築されなかったとはどうも考えられず、推定となってしまいが、隣接する調査区域外に存在するものとして捉えておきたい。というのも、II区内における住居の位置が時期が下るに従い南側中央から時計回りに占地を変える傾向が見られるからである。次期の住居が西側に位置することを考慮すると本時期の住居は調査区域の西側に隣接する可能性が高い。

奈良・平安時代IV期 (第175図)

I区に2軒、II区に1軒確認された。また、今まで住居が認められなかったIII区に新たに1軒出現する。以降この区画に構築される住居はほぼ同様の位置となるが、これは区画内北側に浅い谷が入り込むため必然的に限定された結果であろう。この段階になってI区とII区に墨書土器が現われてくる。I区は021・024号住居跡で、主軸方向がやや異なるものの中規模と小規模の床面積を有し、2軒1単位のグループと考えられる。墨書土器は024号住居跡で1点であり、底部のみの遺存状況及び覆土中の出土を考えると、確定できない資料である。主体的な墨書が

見られるのはII区の056号住居跡である。前述したように区画内の住居の位置が西側に移動する。壁柱穴を有する比較的大形の住居跡で、主軸方向は溝とほぼ一致する。III区でも溝と平行する122号住居跡が存在するが、小規模で墨書土器は認められない。この段階の特色は、溝区画が形成されて以来の1区画内1ないし2軒の存在は踏襲されており、その区画内にのみ見られる地名墨書が出現する状況である。

奈良・平安時代V期（第176図）

この段階に存在する住居跡は、I区で1軒、II区で2軒、V区で1軒である。すべての住居跡に墨書土器が検出された。I区では相変わらず客体的な墨書内容であり、V区ではこの段階から出現してくる。注目されるのはII区である。047A号住居跡と107号住居跡が該当し、主軸方向はほぼ同様であるが、区画内の対角線上に位置する。出土する墨書土器も「八富」と「吉原大島」で共通するものは見られない。107号住居跡の「吉原大島」は、カマド内から1点のみの出土で、書体・杯のタイプとも前期の056号住居跡とほとんど変わらない。056号住居跡から107号住居跡へ移動するに際し、「吉原大島」の墨書土器を所持し、住居廃絶の段階でカマド内に廃棄されたことが予想される。また、区画内北側には「八富」を主体とする047A号住居跡が存在する。この北側区域に住居が立地するのはこの段階の1軒のみであり、「吉原大島」および「大島」が南側半分のみで移動している状況を考えると、あるいはII区内において北と南が意図的に区割されていた可能性もある。

奈良・平安時代VI期（第177図）

この段階に該当する住居跡は少なく、I区で1軒、VI区で1軒のみである。特に、継続してみられたII区ではこの期間のみ空白となる。ただ、前期同様区画の東側に立地するのであれば、調査区外に存在する可能性が想定されよう。ここで注目されるのは、I区の023号住居跡である。前述したように、本住居跡は他の住居跡出土の墨書土器とはまったく異なる性格を有する文書的な内容の墨書が大量に検出されている。出土状況に複雑な様相があり即断することはできないが、この段階以降区画としての溝の機能が停止するまでI区内に住居が形成されなくなるということが大きな意味を含んでいるかもしれない。すなわち、廃棄ブロックとしてこの付近を選んだのであれば、後に住居区域として利用されなくなる可能性が考えられるからである。このようにみてもI区には興味深い特徴が看取される。墨書土器が主体的に認められるII区・III区では前後を通して壁柱穴を有する大形の住居跡に集中する傾向が見られるのに対し、I区では住居の規模も小さく、主体となる墨書が伴っていない。すなわち、I区と他の区では根本的に性格が異なっていた可能性が強いと思われる。その端的な様相がこの段階に廃棄という形で現われたのではなかろうか。

奈良・平安時代Ⅶ期（第178図）

この段階では前期より住居数が増加し、1区画1軒の状況が再び明瞭となってくる。前述したようにⅠ区では住居が認められなくなり、Ⅱ～Ⅳ区及びⅥ区に各1軒配置される。Ⅱ区では東側から南側に住居が移動し、溝区画形成段階の位置に近くなる。この住居跡でも区内特有の墨書「大島」が出土している。奈良・平安時代Ⅴ期までは「吉原大島」という記載であったものがこの段階以降「大島」に変化している。第3節で検討したように、この変化は「大島」が分村したか「吉原」を省略したかのいずれかが考えられる。ただ、Ⅲ区に存在する「吉原仲家」の例を考えると前者の可能性が強であろう。いずれにしても、「吉」の存在等も含めて「吉原大島」と「大島」はきわめて密接な関係を有しているがため同一区画内に居を構えるようになったようである。Ⅲ区ではⅣ期以来空白があり、この段階で「吉原仲家」を主体とする墨書土器を有する大形の住居が形成される。「仲家」の地名比定は困難であるが、「吉原」からすると遺跡近隣に存在することは間違いなからう。ただ、「吉原大島」や「大島」とは明瞭に区画が異なっており別の地域単位と想定され、しかも、単発的な出現であるだけに本遺跡において主体となるものでもなかったようである。区画外のⅥ区には前代に引き続き1軒存在するが、やや溝に近寄った位置に移動する。この区域は溝区画が存続する期間内のみ住居が形成されており、その計画性が示唆される。また、東側の124号住居跡と重複する掘立柱建物跡は溝の方向と柱筋が一致しており、区画溝に伴って構築された可能性が強い。時期の比定は困難であるが、重複する124号住居跡よりは新しく考えたほうが自然であり、本段階か前期の所産として捉えておきたい。特徴的な形態を示しており、区画溝との位置関係を含めてその機能には興味深いものが想定できそうであるが、現段階では特定することはできない。墨書としては「子吉原」が見られる。記載部位が体部外面で、他の地名墨書が底部に記されているのとは対照的である。しかも、「吉原」の書体もかなり異なっており、「吉原」内の別の集団の存在が予想される。

奈良・平安時代Ⅷ期（第179図）

この段階に該当する住居跡はⅡ区内にしかみられなくなる。しかも、Ⅱ区内では前段階までかなり大規模な住居が構築されていたのに対し、この段階の住居は明らかに小形となっている。特に、前期から継続する「大島」の墨書土器を有している110号住居跡は柱穴さえ持たないものである。次の段階の集落状況とは明瞭に異なっており、そこにはかなり大きな画期が存在したものであると思われる。すなわち、8世紀前半以降継続してきた溝区画による居住範囲の強い規制が解除されることによって次期以降の集落の増大を生んだのであろう。この変化は、Ⅷ期からⅨ期に移行する10世紀を前後する段階に想定される。その背景には、本遺跡と関係する香取神宮内部の変化が当然考えられるが、それを特定するまでには至っていない。

奈良・平安時代Ⅸ期（第180図）

前時期とは若干空白期間を置き、住居数が飛躍的に増大し集落の様相が一変する。もちろん、前段階までの時期区分より1時期が長いいため単純に比較はできないが、増加する状況は明らかである。住居の分布からは、060号住居跡を南端とする北側のグループと南側に存在する3軒のグループに大きく分かれるようである。また、この時期以降北側から入り込む小さな谷に住居が形成されるようになる。北側の区域は、Ⅵ期（9世紀第Ⅱ四半期）以降住居が営まれなかった地域であり、この段階に突如として多くの住居が出現する背景には前段階で想定した溝区画による居住規制の解除が大きく関与しているものと思われる。しかも、この北側の占地状況は本遺跡の集落が開始する6世紀後半以降から区画溝の機能が発生する8世紀初頭までの間基本形態として認められてきたものである。すなわち、古墳時代において指向していた北側に展開する支谷及び沖積地の開発がこの段階に至って再び行なわれるようになったことが想定される。その表れが小支谷内に出現した居住域なのであろう。

奈良・平安時代Ⅹ期（第181図）

この段階も前期とほぼ同様の状況で、北側のグループと南側の2軒のグループに分けられる。また、北側のグループは前段階でやや雑然とした様相を呈していたが、古墳時代Ⅰ期と似たような立地を示している。すなわち、北側と南側に各1軒単独で存在し、中央に数軒のまとまりが見られる。特に中央の4軒はかなり小規模で主軸方向がほぼ一致し、038号住居跡からは「前」の墨書土器が1点検出されている。また、北側の小支谷内には前期に続き主軸を同じくする1軒の住居が構築されている。

奈良・平安時代Ⅺ期（第182図）

この段階になると、南側には住居が見られなくなり、北側に偏在するようになる。北側の分布形態は前段階の3グループがさらに明瞭となり、北側で5軒、中央で3軒、南側で1軒の構成となる。北側指向がさらに強くなった結果であろう。また、前段階に引き続き小支谷内に1軒の住居跡が存在しているが、この段階以降見られなくなる。

奈良・平安時代Ⅻ期（第183図）

本遺跡における集落の最終段階で、北側の縁辺部とやや南側にきわめて小形の3軒の住居跡が形成されている。集落の最終状況を端的に示す様相である。この段階以降住居の構築は行なわれないが、台地上は新たに墓域として利用されるようになる。

きわめて限られた調査範囲であるが、古墳時代後期から平安時代にかけての集落の動向を検討してきた結果、非常に興味深い状況が観察された。ここでは、全体の流れのなかでその様相をまとめておく。第1の画期は古墳時代から奈良時代に移行する段階にある。本遺跡の集落開始以降、北側に展開する小支谷への指向、言い換えるならば、生産基盤としての開発行為を意識した状況が古墳時代を通じた基本形態であった。この様相に変化が生じてきたのが7世紀第IV四半期で、その契機は南側への住居範囲の拡大である。それを受けた形で、8世紀初頭に区画溝が設定され1区画1軒の竪穴住居跡の存在が基本形態となった。1区画の規模は、比較的全体が推察できるII区で南北長65m、東西長70mを測る。ただ、III・V区はそれぞれ東と西から浅い谷が入り込んでおり四辺で囲い込むような溝は形成されていない可能性がある。そして、この基本形態が受け継がれる過程で出現してきたのが8世紀代第IV四半期の墨書土器である。全体の流れのなかでは大きな変化はないが、墨書土器を使用するという点からすれば小画期として捉えることもできよう。この段階以降9世紀末まで墨書土器が存続し、1区画1軒の基本形態が明瞭に観察される。そして、各区独自の地名墨書土器と地名比定から、香取神宮領と思われる本遺跡の西側に展開する集落を対象としたきわめて特異な特徴を有する遺跡として捉えることができそうである。すなわち、II区・III区にみられる「大畠」・「八富」・「吉原仲家」等の地名が1単位の区画溝内で完結することは、上位機関からのかなり強い強制力によって居住範囲が設定されていることを示すものであろう。第二の画期は10世紀前半となろう。区画溝の機能が終了することにより、前代までの集落景観が一変し、本遺跡の古墳時代の様相にきわめて近くなる。この背景には、古墳時代同様北側の低地の開発を指向した新しい集団の存在が想定される。ただ、全体が判明していない現在、新しい集団の移住であるのかあるいは内部の変質であるのかは断定できない。

以上、本遺跡において2つの大きな画期を示したが、この変化がいかなる要因によって現われ消滅していくのかを若干考えてみたい。まず、8世紀初頭という時期は、各郡衙遺跡の出現が7世紀第IV四半期から8世紀第I四半期に集中する傾向がみられるように、令制による地域支配がほぼ全国的に成立した時期と考えることができる。香取神宮自体の成立年代は不明であるが、本遺跡を含む香取郡が成立当初より神郡としての性格を有していることからすると、香取神宮同様強い国家的支配を受けていた状況が想定される。集落景観がこの段階で溝区画を伴い一変することがこれを如実に表わしているのである。しかも、023号住居跡出土の墨書土器にある「大坏郷」は『和名類聚抄』の香取郡「大槻郷」に相当しており、天平勝宝2（750年）の治部省牒にある「神戸大槻郷」という記載は、この時期にすでに香取神宮に対して神戸が封ぜられていたことを示している。“神戸”の設定は、国家権力による政治的色彩の強い現象であることは明確であり、本遺跡において8世紀初頭から継続する溝区画はまさにこの国家的規制による神戸の特殊な様相の一端を呈示しているようである。すなわち、香取神宮に付属するある

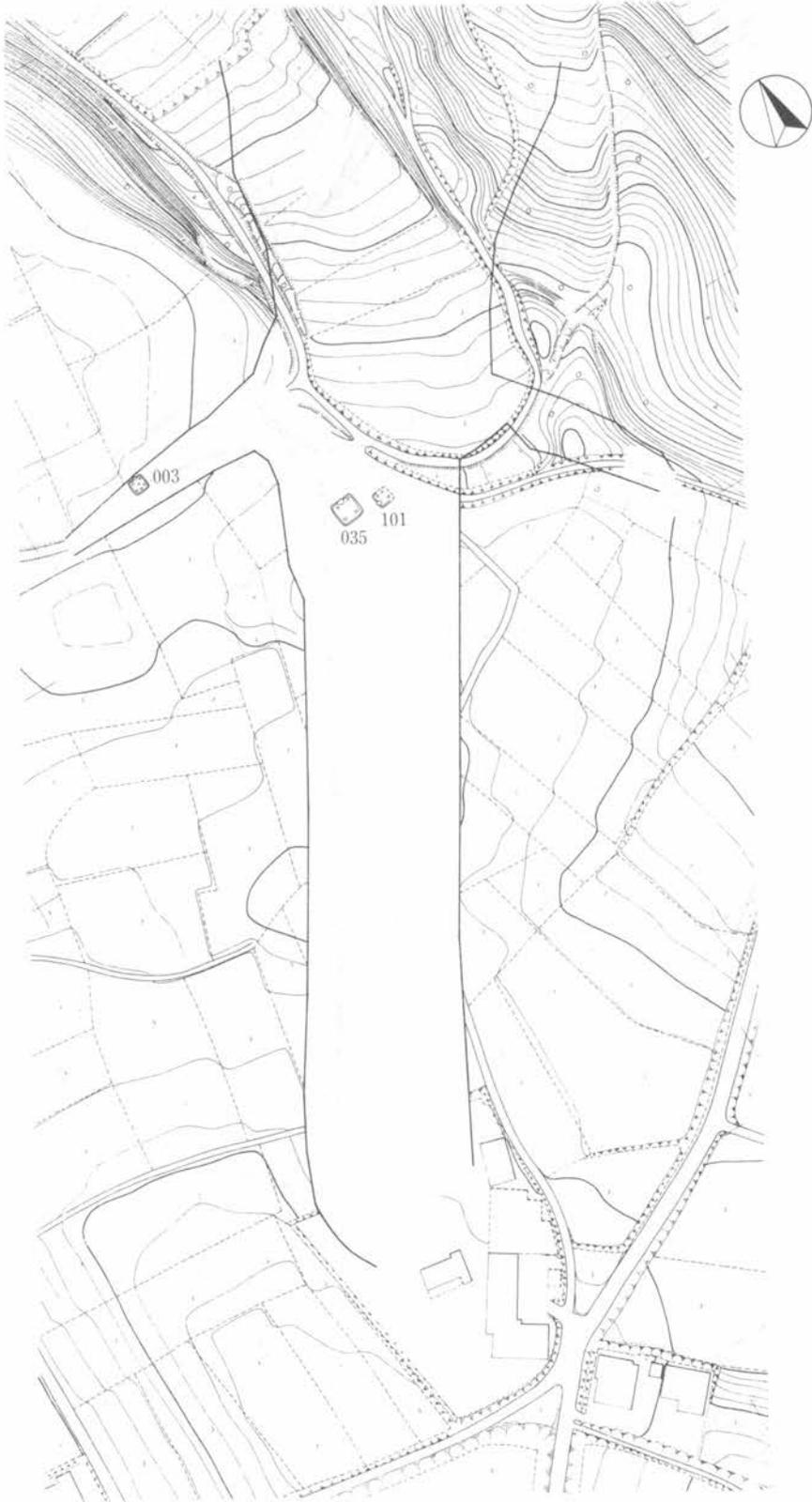
種の官衙的遺跡として本遺跡を考えることが最も妥当と思われる。また、区画溝の機能が終了する10世紀初頭も多くの郡衙遺跡が終息を迎える段階である。この変化がどのような背景で生じてくるかは非常に難しい問題であるが、8世紀以来の画一化された支配体制の変質が大きな要因を占めているようである。本遺跡の変化もまさにこの時期にあたり、遺跡の性格は異なるものの同様な衰退現象を示しているのである。

このように本遺跡の特徴である区画溝を伴う特殊な遺構群は、律令体制の象徴である郡衙遺跡と同様な動向を示し、香取神宮との関係を含めて、かなり強い国家的支配を受けていたことを想定したが、次に本遺跡の主体を占める8世紀初頭から9世紀末までに絞り、遺構・遺物を含めた形で他遺跡の類例を考えてみたい。まず注目されるのが区画溝の存在である。区画としての溝ということになると国府や郡衙等の官衙遺跡に多く見られる。ただ、これらは施設を区画する機能を第一としており、本遺跡のように居住空間を制限しているものではない。また、本遺跡と同様に神宮との関連が注目されている斎王宮と推定される三重県多気郡明和町古里遺跡では1辺120m程の方形区画が整然と配置され、規模こそ異なるが本遺跡と似た様相が見受けられる。しかし、ここでもやはり役所を計画的に配置するための区画であり、本例とは性格が異なるようである。一方、区画溝と墨書土器との関係で注目される遺跡に佐倉市江原台遺跡(第186～188図)があげられる。第186図で明らかなように、東西南北に走る方形区画溝によって掘立柱建物群が4区に分割されている。II区ではA群、III区ではB～Dの3群、IV区ではE～Gの3群のまとまりが見られる。奈良・平安時代の竪穴住居も掘立柱建物の各群にまとまる傾向が強く、明瞭に群としての分割が認められる。この傾向と墨書土器の分布を重ね合わせると非常に興味深い様相が浮かび上がってくる。II区では8世紀末から9世紀中葉にかけて墨書土器が存在しているが、主体となるものはなく比較的短期間で遺構とともに終息している。III区では墨書土器の出現がやや遅れ、9世紀に入って初めて所有するようになり、10世紀初頭で終わりを迎える。この区ではCグループに集中する傾向が強く、「由」が主体を占める。また、Dグループにはやや時期が遅れて「仁」が若干見られる。一方、IV区では9世紀中葉までの集落の展開がほとんどなく、僅かに線刻が存在するのみであるが、9世紀後半以降住居数の増大が認められるようになると墨書土器がほとんどの住居で検出されてくる。竪穴住居と墨書土器の集中傾向からすると、E・Fグループが一群となって「中村」を共有している。南側のGグループはあまり顕著ではないが「子仲」が主体となっているようである。このようにみてもII区には特徴が認められないものの、III区では「由」と「仁」を共有する集団、IV区では「中村」と「子仲」を共有する集団が明瞭に区別された居住空間を保持していたことが窺えよう。しかもそれが溝によって区画された範囲内で完結していることも特徴であろう。この状況と対照的な様相を示すのがI区である。1間×2間の小規模な掘立柱建物跡が1棟のみで、竪穴住居数もそれほど多くない。しかしながら、この区には非常に重要な要素が認められる。それは瓦塔

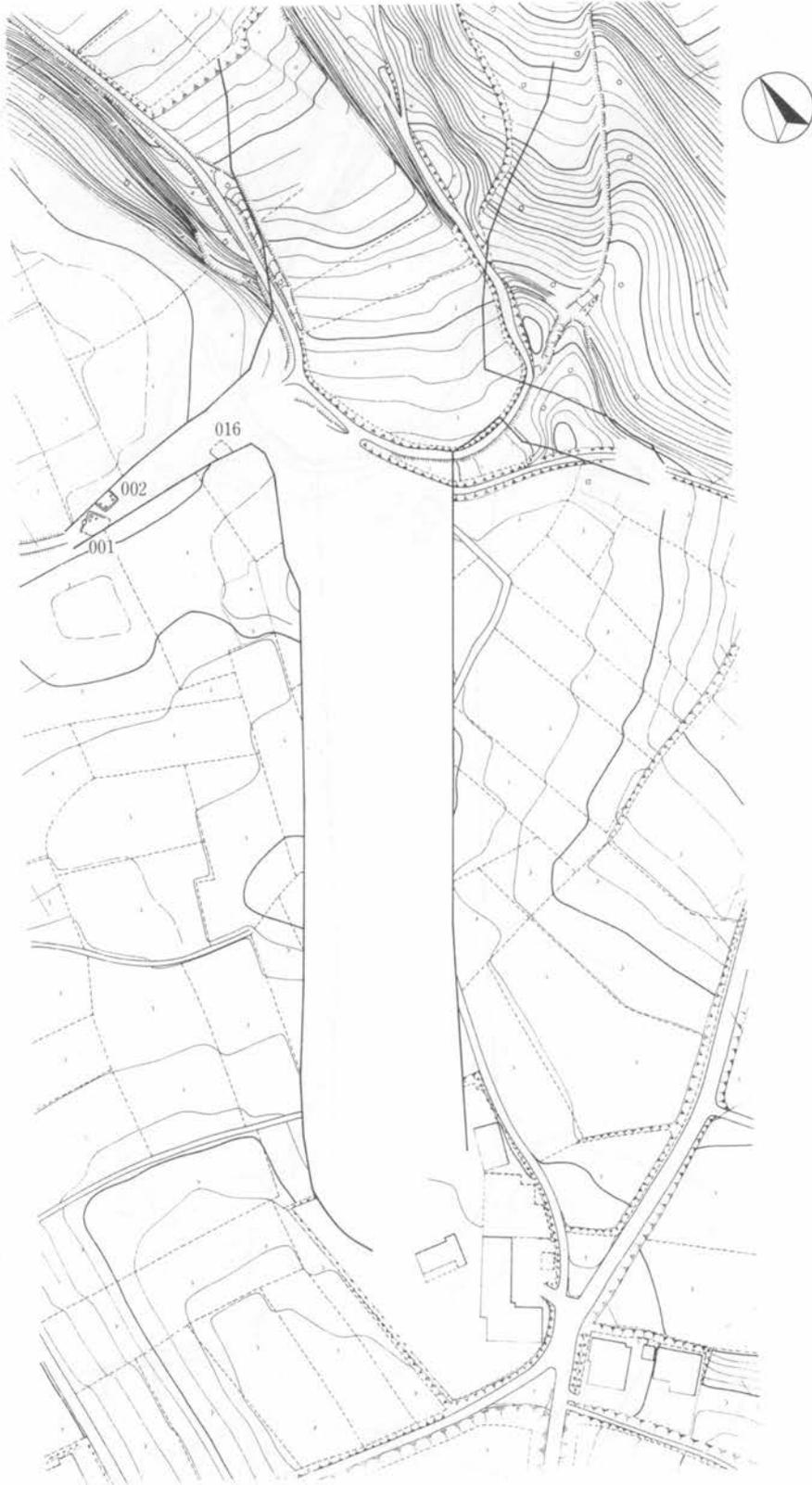
と「寺」の墨書土器の存在である。瓦塔は報告によるといわゆる円形周溝状遺構の周溝内からの出土と記載されている。問題はこの特殊な遺構の性格である。他に類例がないため推定とならざるを得ないが、私見では周溝内の方形部分になんらかの形で瓦塔が安置され、それが南側の周溝内に転落した状況を想定しておきたい。となると、周溝部分には聖域を俗界から区別するための機能があり、南側の小規模な掘立柱建物はこの付属する施設と考えられる。しかも、竪穴住居が展開する8世紀末以降の住居群がこの特殊遺構を円形に取り囲むように配置されていることは当該期の施設として考えても間違いではなかろう。一方、墨書土器の出土は他の区に比べて少ないが、興味深い現象が見られる。「寺」は先述したように瓦塔との関係で捉えられる。他では「丈」・「仁」・「子仲」がある。「丈」と「仁」はⅢ区で主体となっているもので、「子仲」はⅣ区のみ存在するものである。区画溝内で完結していた墨書土器がこの区では混在する状況を呈している。以上のことからすると、このⅠ区は他の区画内に存在する集団の共通の宗教的な場としての機能を有していたと思われる。北東側にやや突出する台地の縁辺部という立地も注目しておきたい。遺跡自体の成立背景が吉原三王遺跡とは異なるために直接比較することは困難であろうが、一定の区画ごとに集団の居住が規制され、これらに共通する祭祀的な空間を設定している状況は本遺跡を考えるうえで参考となろう。また、溝は伴わないが、遺構群と墨書土器との関係から方形区画が想定されている遺跡に群馬県伊勢崎市の書上上原之城遺跡^{註32}がある。この遺跡は佐位郡衙推定地である十三宝塚遺跡の周辺に位置する。ここでは、「金」・「布」・「福」の3つの墨書土器が1辺40～50mの方形区画内に各々まとまっており、区画内特有の単位集団の存在が想定されている。他にも同一台地上で区域を分けて個別な集団が占地している例はいくつか認められるが、本遺跡のように1区画1住居というものは本質的に異なるようである。

以上のことから本遺跡の動向をまとめてみると以下のようなになるであろう。

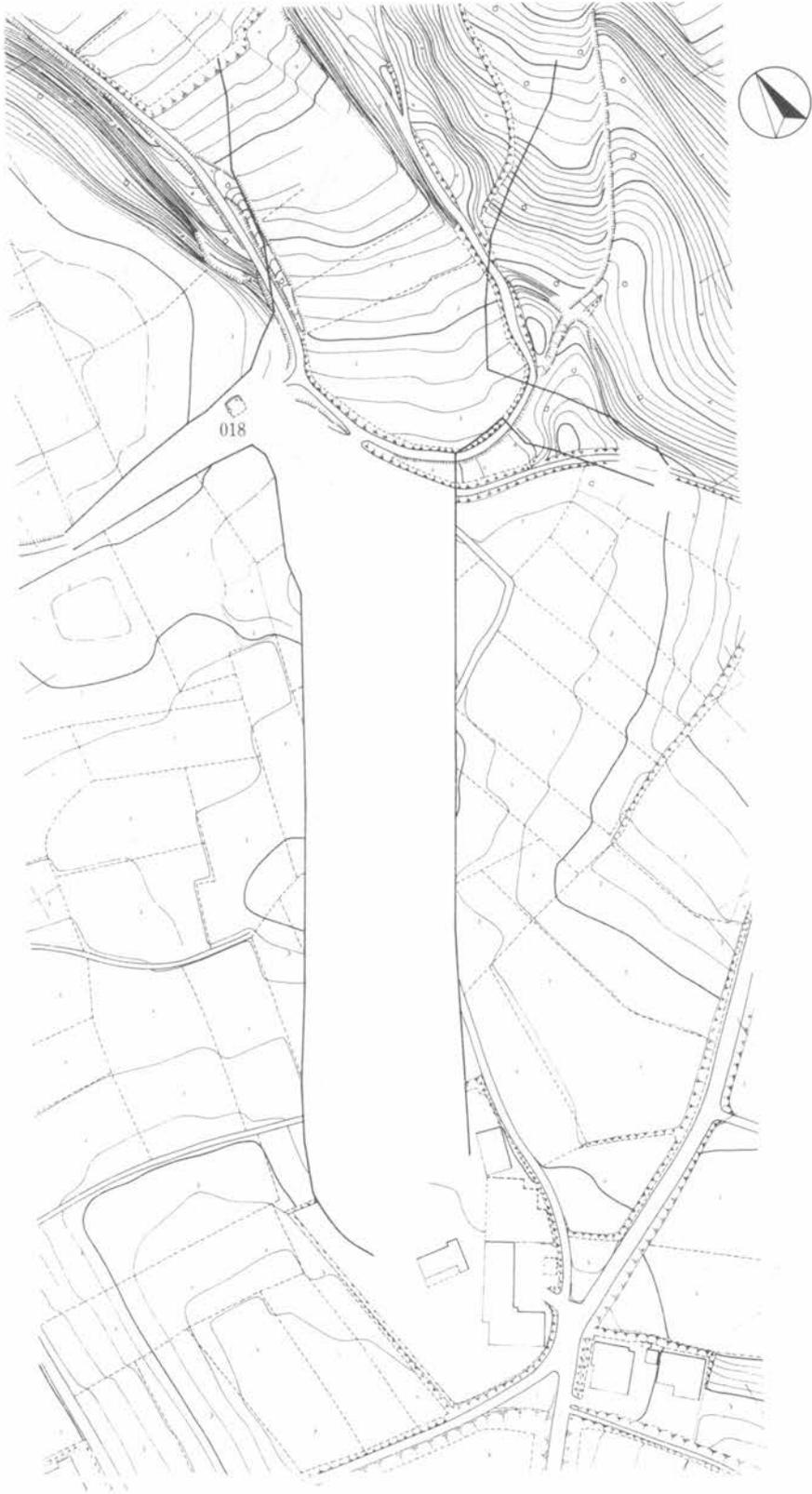
- ①、集落が開始する6世紀後半以降の古墳時代と、区画溝の機能が終了する10世紀以降の集落は北側の低地を生産基盤とした一般的な集落として捉えることができる。
- ②、8世紀初頭から9世紀末までの約200年間は1区画1竪穴住居というかなり強い規制が受け継がれる。
- ③、各区画内に独自の地名墨書土器が存在し、地名の推定から、本遺跡の西側に展開する香取神宮のいくつかの神戸集落の特殊な居住区域としての機能が推定される。
- ④、「……香取郡大坏郷……」の墨書土器を出土する023号住居跡が属するⅠ区は他の区と異なり、区画外の位置にあって最終段階に廃棄場所として利用された可能性が強い。
- ⑤、本遺跡の8世紀初頭から9世紀末までの段階は、郡衙等の官衙遺跡と同様の時期に出現し終息する状況にあり、②・③から香取神宮を媒体としたかなり強い国家的規制が存在していたことが想定される。



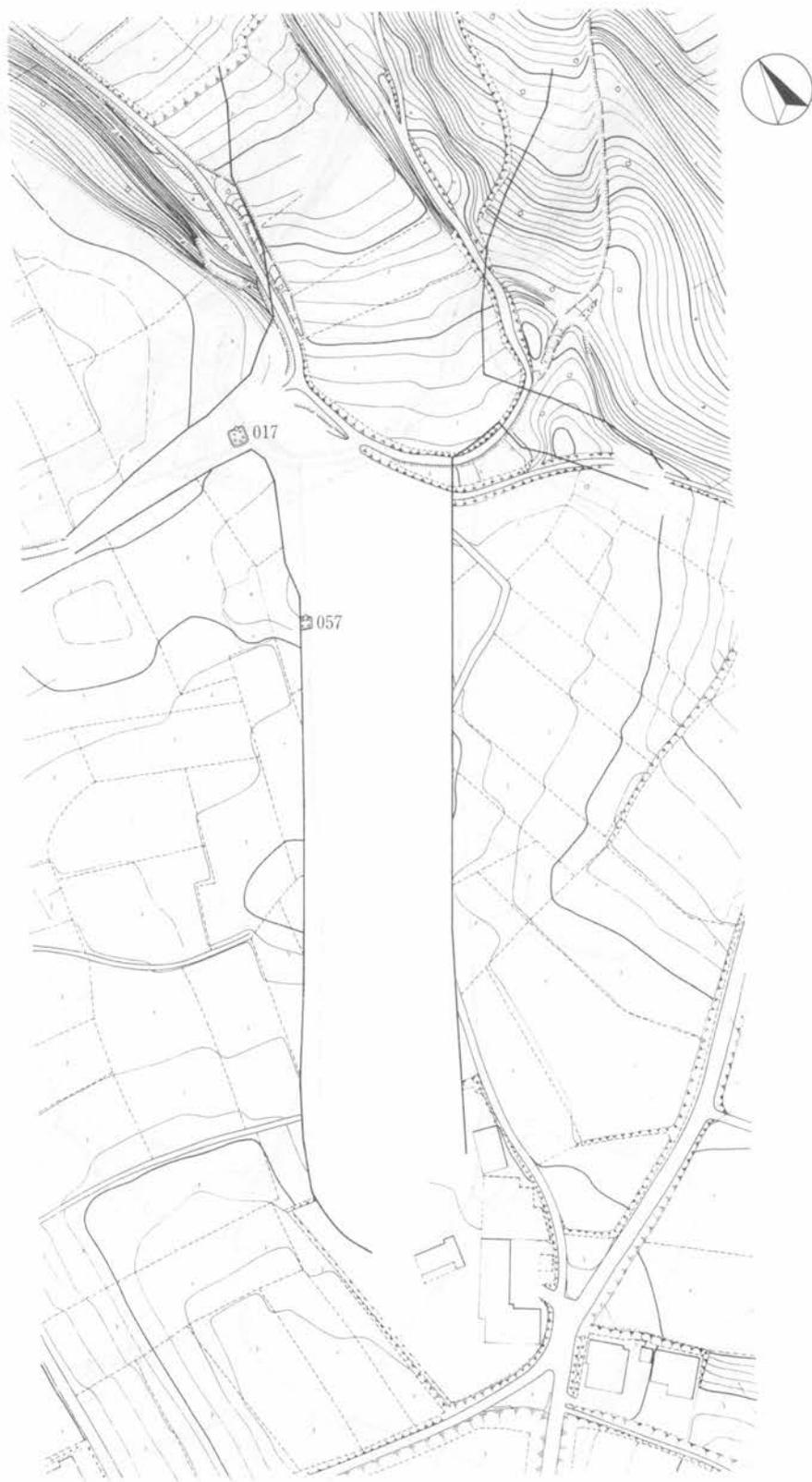
第167図 集落変遷図 古墳時代I期 (1/2,000)



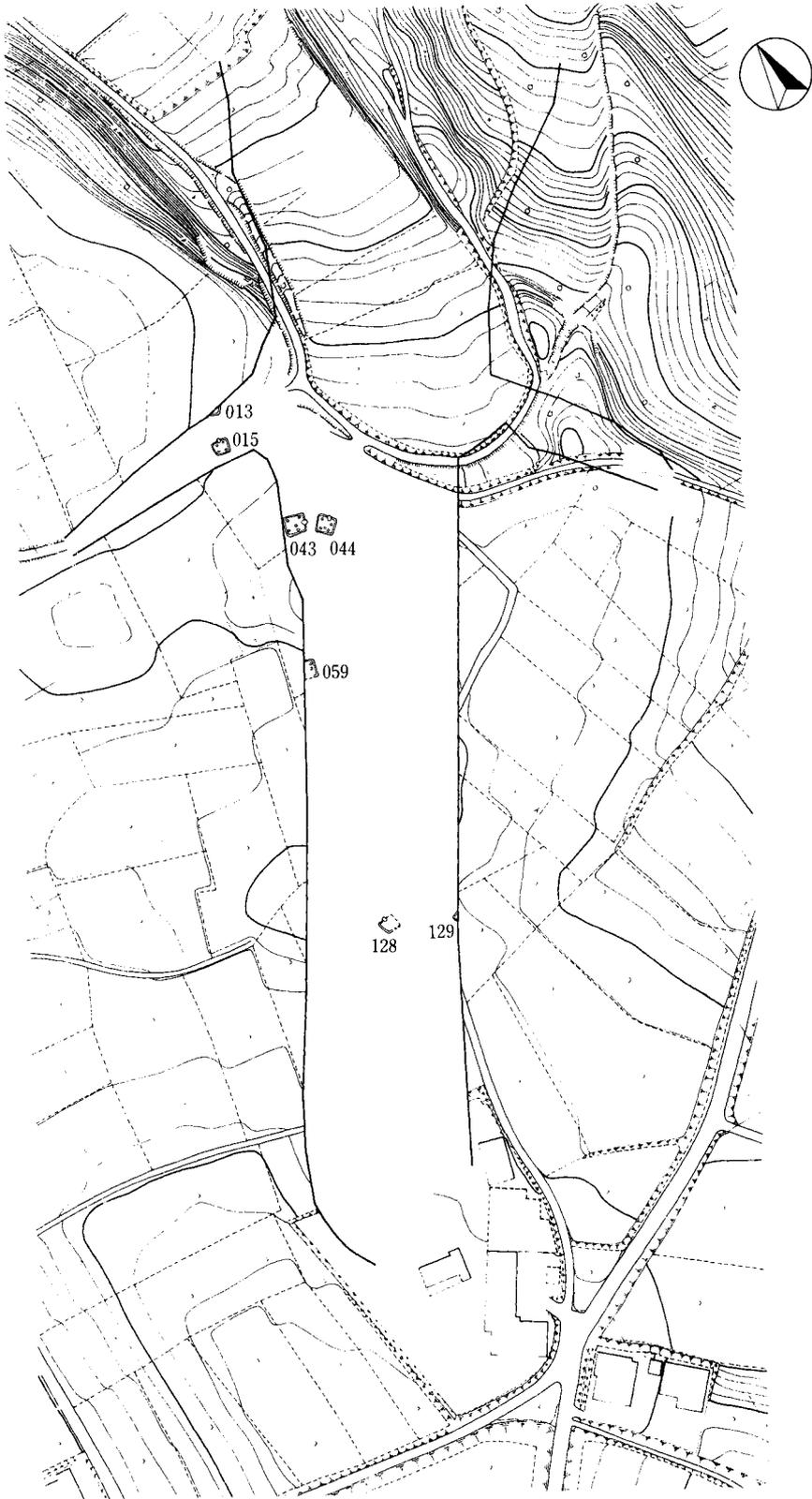
第168図 集落変遷図 古墳時代Ⅱ期 (1/2,000)



第169図 集落変遷図 古墳時代Ⅲ期 (1/2,000)



第170図 集落変遷図 古墳時代Ⅳ期 (1/2,000)



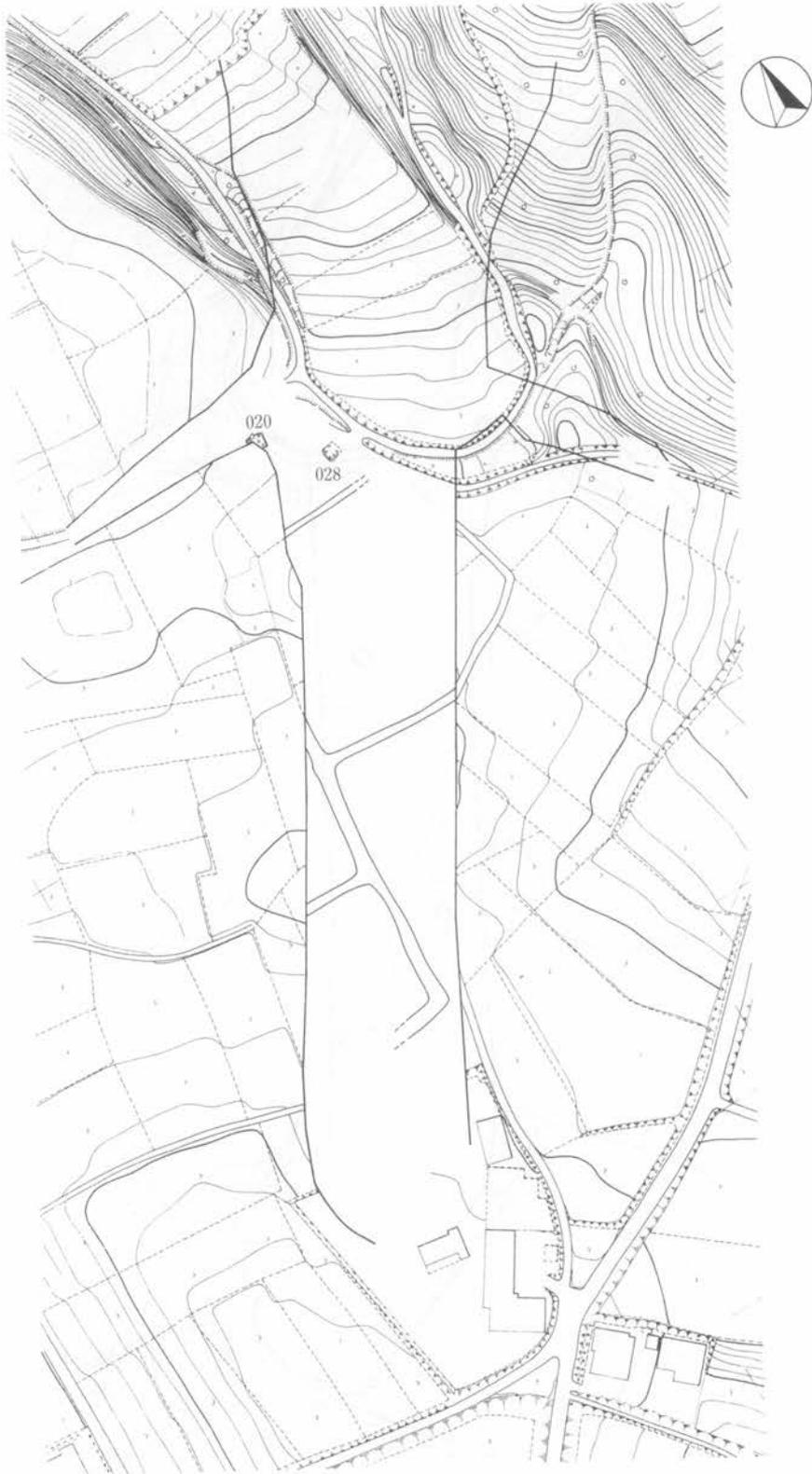
第171図 集落変遷図 古墳時代Ⅴ期 (1/2,000)



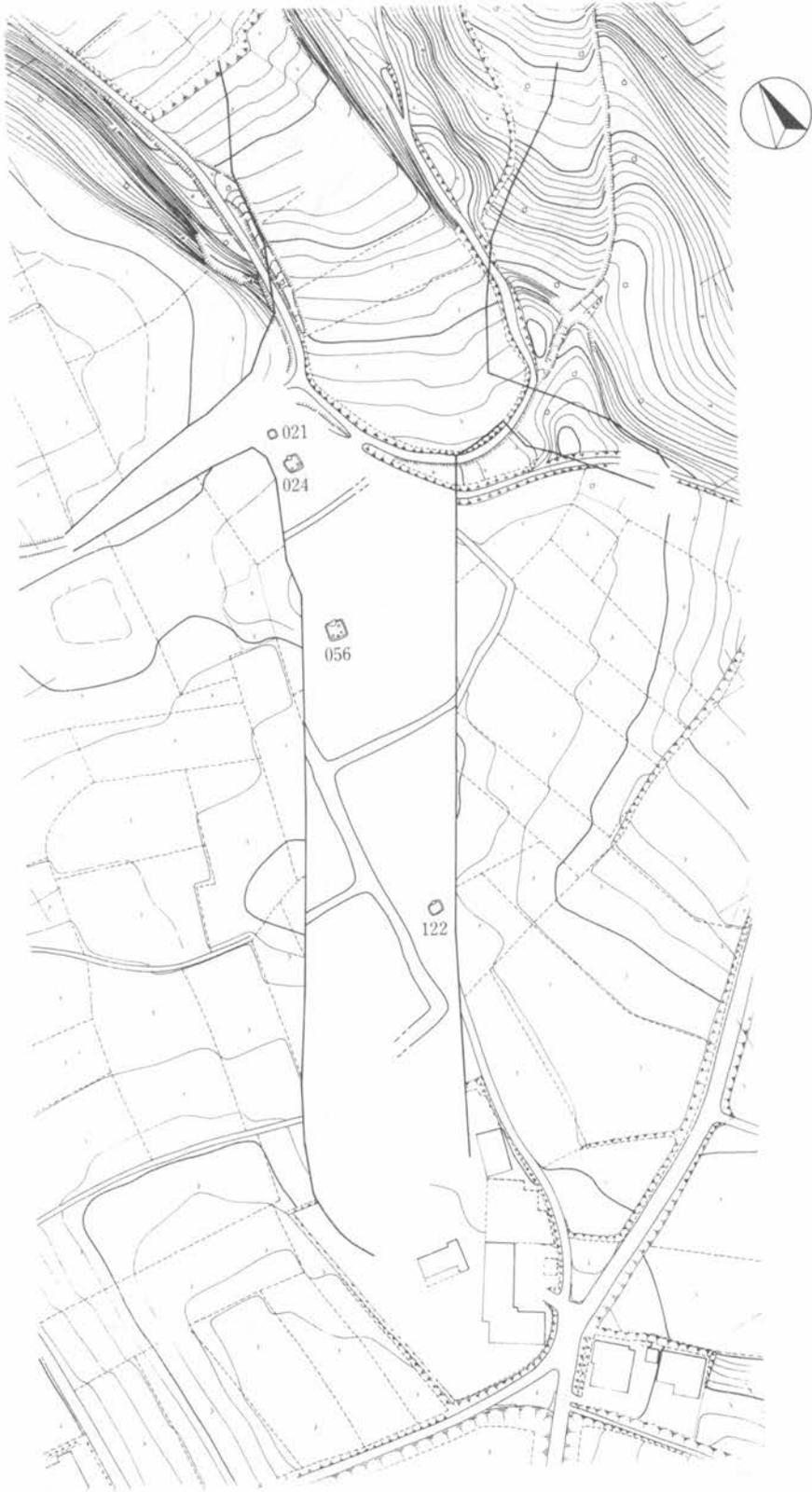
第172図 集落変遷図 奈良・平安時代I期 (1/2,000)



第173図 集落変遷図 奈良・平安時代Ⅱ期 (1/2,000)



第174図 集落変遷図 奈良・平安時代Ⅲ期 (1/2,000)



第175図 集落変遷図 奈良・平安時代Ⅳ期 (1/2,000)



第176図 集落変遷図 奈良・平安時代Ⅴ期 (1/2,000)



第177図 集落変遷図 奈良・平安時代VI期 (1/2,000)



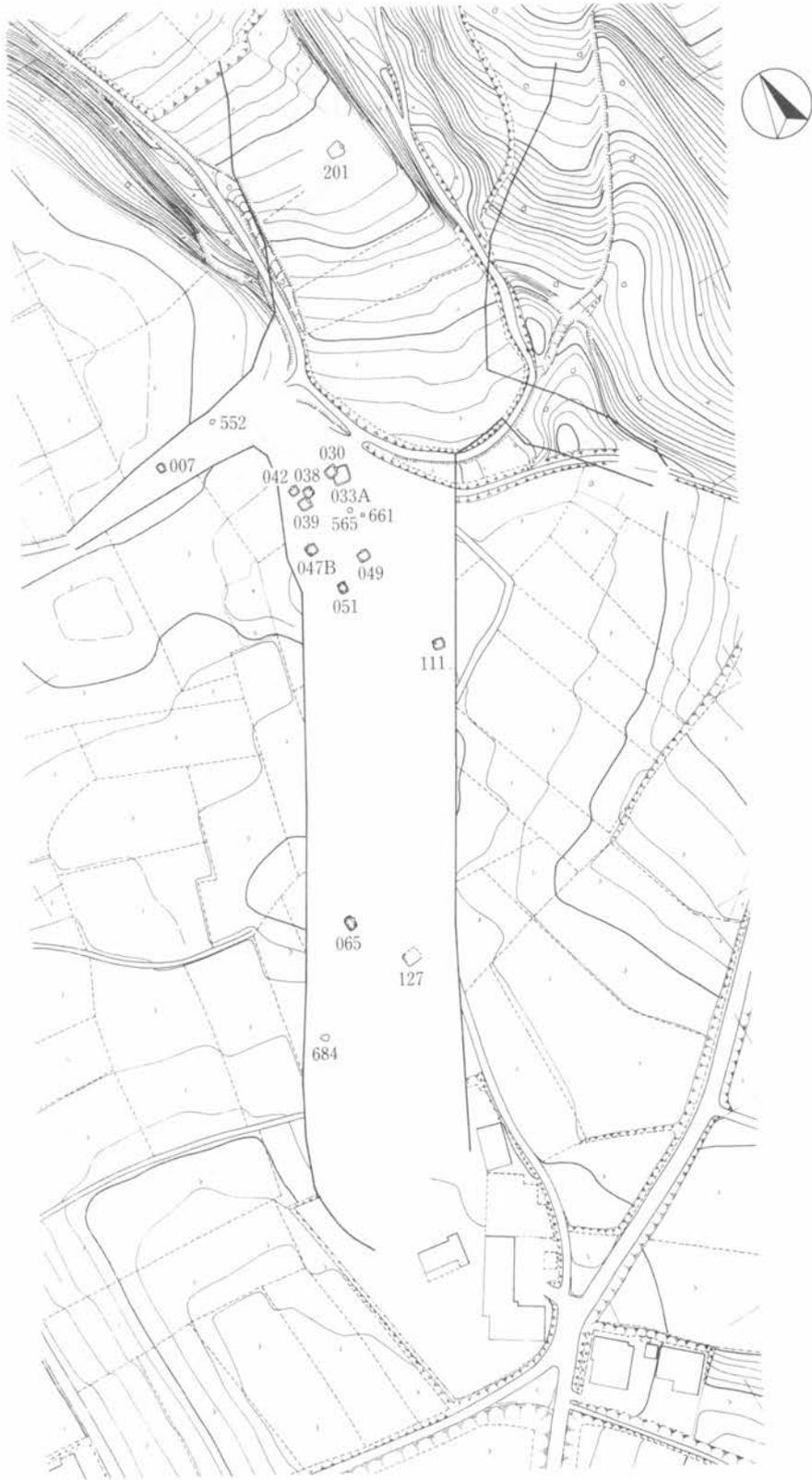
第178図 集落変遷図 奈良・平安時代Ⅶ期 (1/2,000)



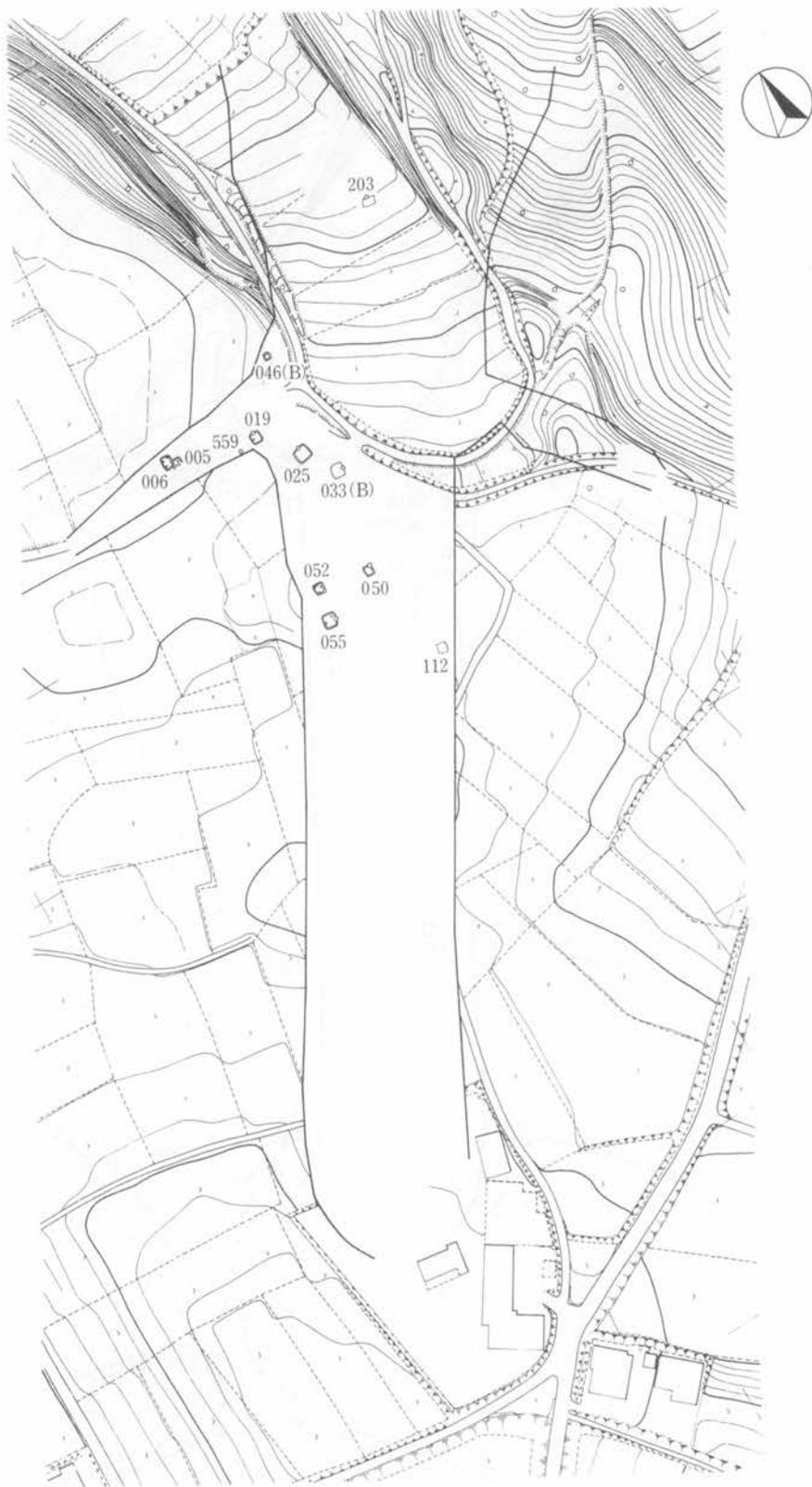
第179図 集落変遷図 奈良・平安時代Ⅷ期 (1/2,000)



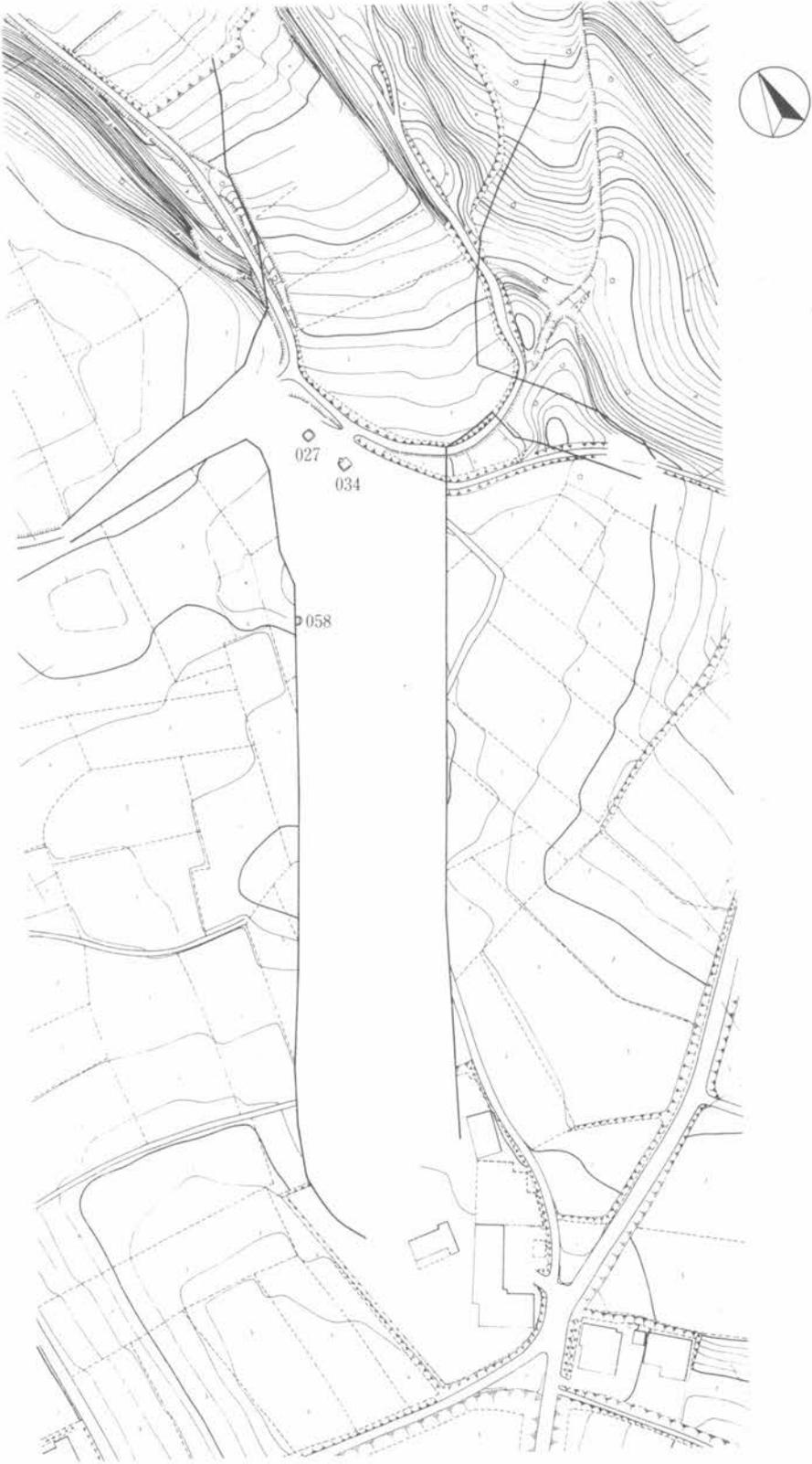
第180図 集落変遷図 奈良・平安時代Ⅸ期 (1/2,000)



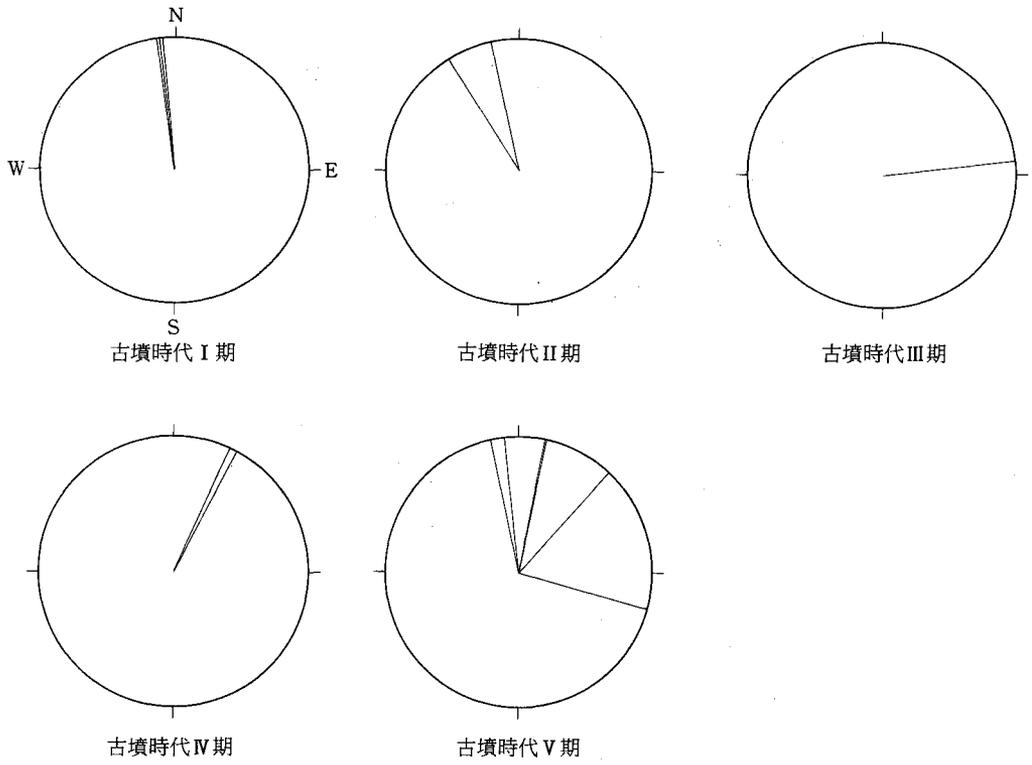
第181図 集落変遷図 奈良・平安時代X期 (1/2,000)



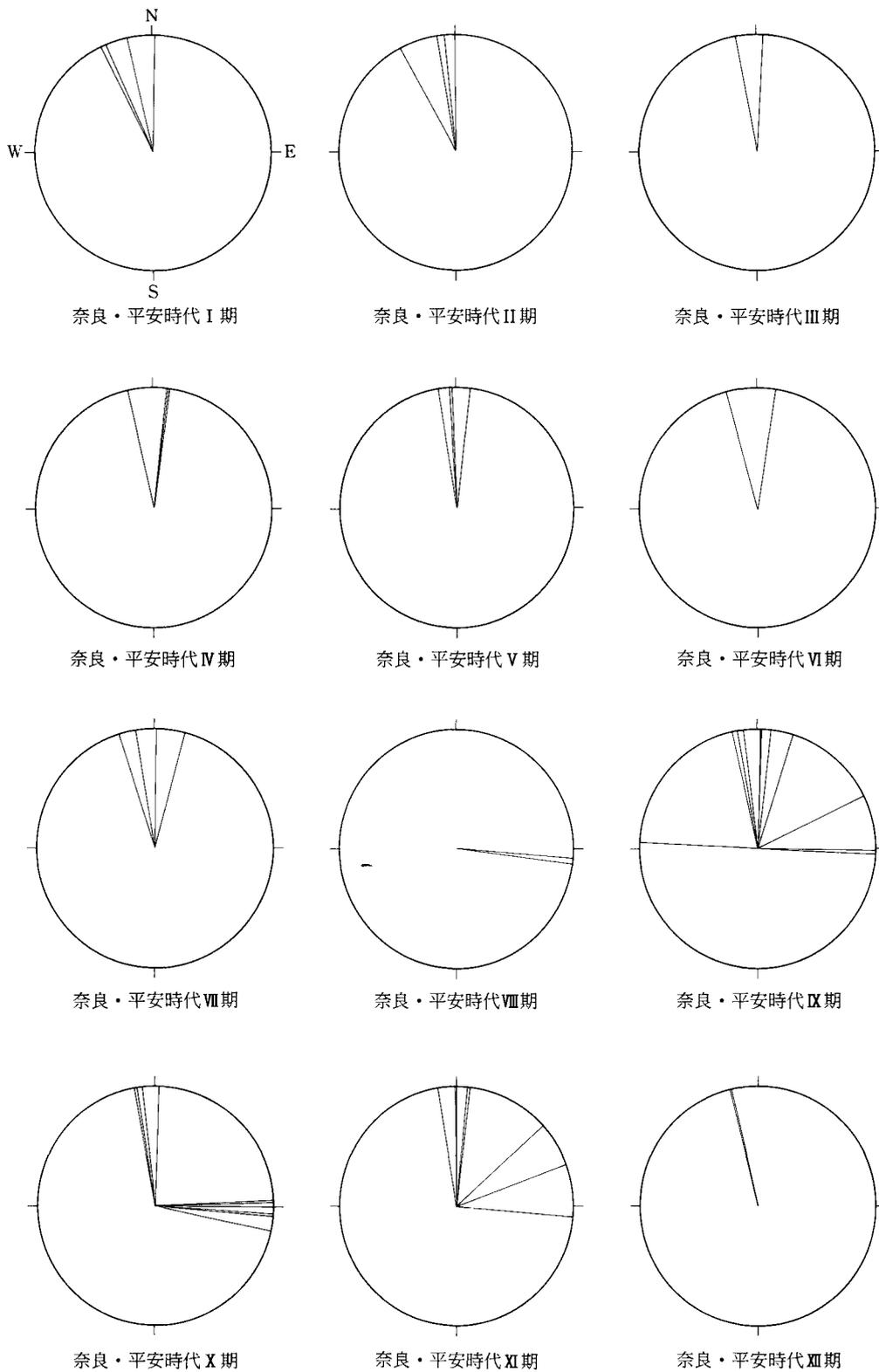
第182図 集落変遷図 奈良・平安時代Ⅺ期 (1/2,000)



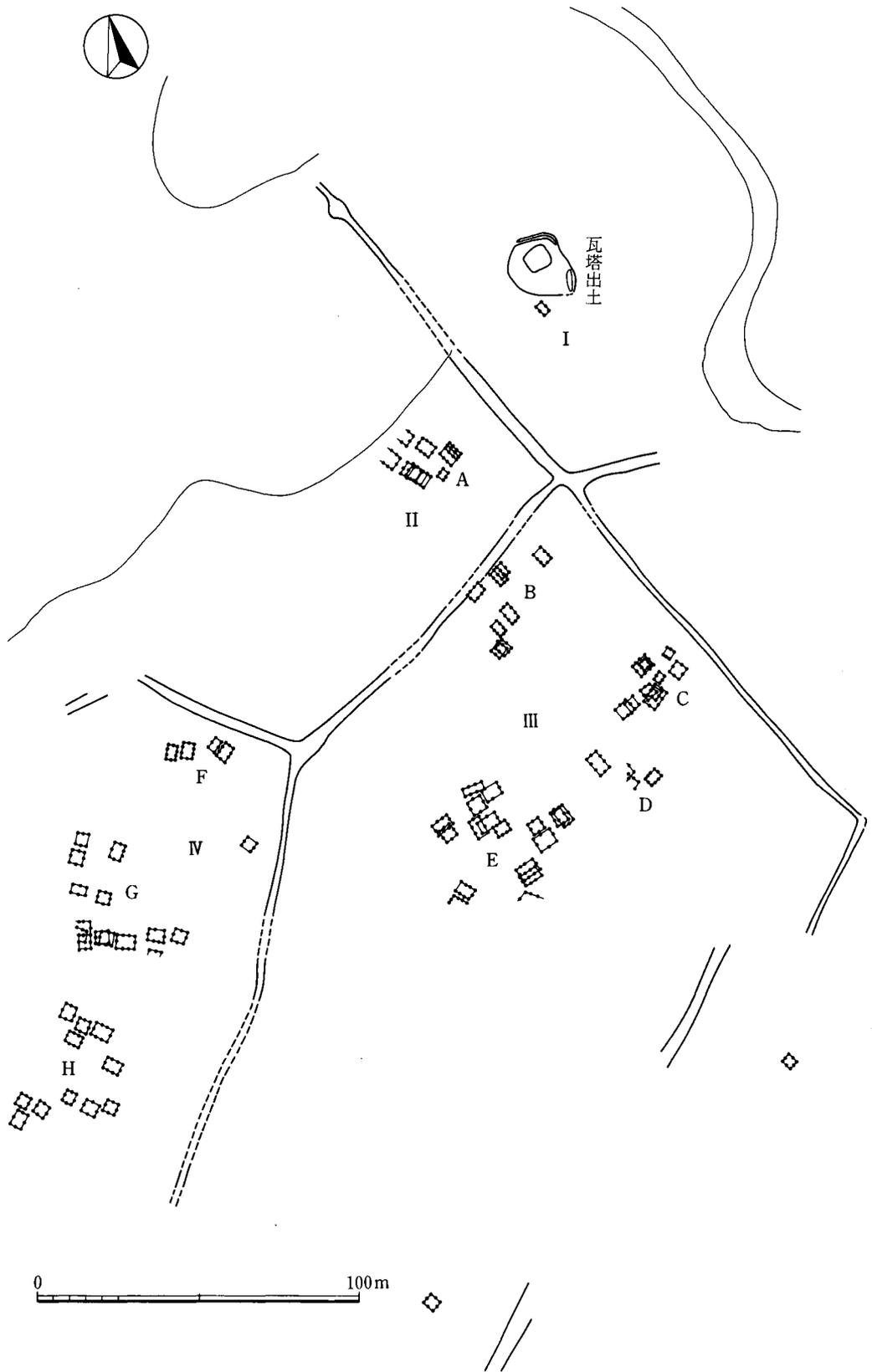
第183図 集落変遷図 奈良・平安時代Ⅱ期 (1/2,000)



第184図 竪穴住居跡時期別主軸方向変遷図（古墳時代）



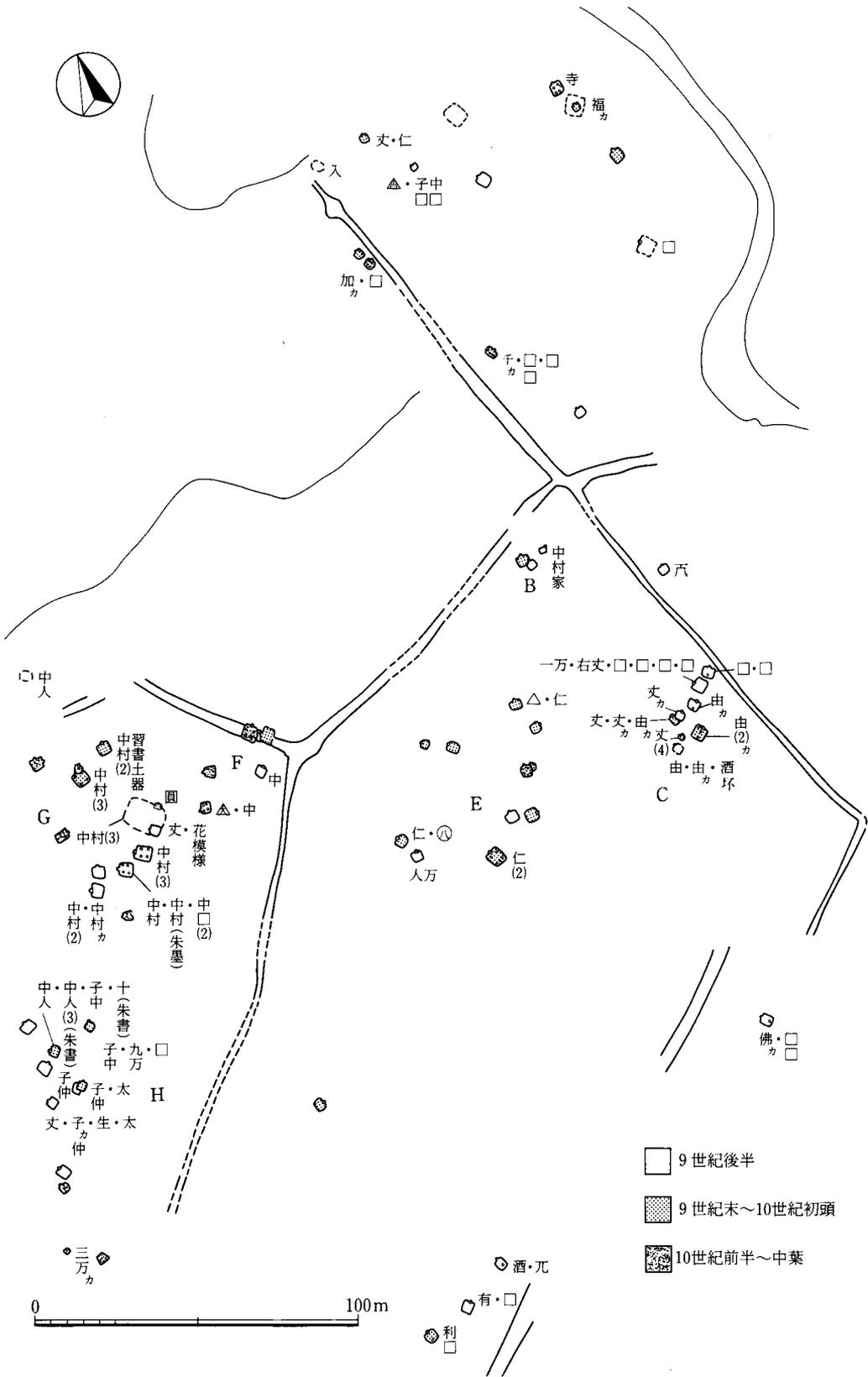
第185図 竪穴住居跡時期別主軸方向変遷図（奈良・平安時代）



第186图 江原台遺跡掘立柱建物跡分布图



第187図 江原台遺跡墨書土器時期別分布図(1)



第188図 江原台遺跡墨書土器時期別分布図(2)

- 註1 栗田則久 1988 「小六谷台遺跡」『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書IV』（助千葉県文化財センター）
- 註2 関口達彦 1987 「千葉市高沢遺跡」『房総における歴史時代土器の研究』房総歴史考古学研究会
- 註3 石田広美 1985 「向台遺跡の調査」『主要地方道成田安食線道路改良工事（住宅地関連事業）地内埋蔵文化財発掘調査報告書』（助千葉県文化財センター）
- 註4 佐久間豊 1983 「斜格子状暗文を有する土師器坏について」『史館』第15号
- 註5 川江秀孝 1980 「墨書土器の形態分類」『伊場遺跡遺物編』2 伊場遺跡発掘調査報告書第4冊 浜松市教育委員会
- 註6 原田享二 1987 「佐原市玉造上の台遺跡」『房総における歴史時代土器の研究』房総歴史考古学研究会
- 註7 栗田則久 1988 「東野遺跡」『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書IV』（助千葉県文化財センター）
- 註8 阪田正一 1985 「八千代市北海道遺跡」（助千葉県文化財センター）
- 註9 註3と同じ
- 註10 石田守一 1987 「我孫子市新木東台遺跡」『房総における歴史時代土器の研究』房総歴史考古学研究会
- 註11 栗田則久 1988 「中山遺跡」『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書IV』（助千葉県文化財センター）
- 註12 寺内博之 1986 「下総・上総国における古代末期の土器様相」『神奈川考古第21号シンポジウム古代末期～中世における在地系土器の諸問題』神奈川考古同人会
- 註13 註12と同じ
- 註14 前川 要 1984 「猿投窯における灰釉陶器生産最末期の諸様相—瀬戸市百代寺窯出土遺物を中心にして—」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』III
- 註15 笹生 衛 1989 「房総における古代末期から中世初期の土器様相」『史館』第21号
- 註16 樫村宣行氏は「内面にみられた同心円文を外面にだすことにより、装飾を意識し工具が逆転して…」と述べ、その装飾性を強調している。川崎純徳他 1982 『泉前遺跡（第二次）』日立市文化財報告第12集 日立市教育委員会
- 註17 酒井清治 1981 「房総における須恵器生産の予察（I）」『史館』第13号
- 註18 川井正一 1988 「外面に同心円叩き目を有する須恵器について」『婆良岐考古』第10号 本稿は川井氏の御教示によるところが多く、資料の転載もさせて頂いた。
- 註19 太田文雄氏のご好意により実現させて頂いた。
- 註20 小松繁他 1978 「銚子市野尻遺跡発掘調査報告書」銚子市教育委員会
- 註21 栗本佳弘 1970 「佐倉市大篠塚遺跡」『埋蔵文化財調査報告書』千葉県文化財保護協会
- 註22 天野努他 1974 「村上込の内遺跡の調査」『八千代市村上遺跡群』（助千葉県都市公社）
- 註23 小林清隆 1989 「カマド内出土遺物の意味について」『研究連絡誌』第24号（助千葉県文化財センター）
- 註24 栗田則久 1988 「出土状況よりみた墨書土器の機能」『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書』

IV] (助千葉県文化財センター

- 註25 川井正一他 1983 「鹿の子C遺跡」『常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書』5 茨城県教育財団
- 註26 赤熊浩一他 1988 「将監塚・古井戸歴史時代編II」『埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告集』第71集 (助埼玉県埋蔵文化財調査事業団)
- 註27 栗田則久 1984 「佐原市吉原三王遺跡出土の墨書土器について」『研究連絡誌』第10号 (助千葉県文化財センター)
- 平川南他 1986 「千葉県吉原三王遺跡の墨書土器」『考古学雑誌』第71巻第3号
- 栗田則久 1987 「旧香取郡出土の墨書土器」『古代』第83号
- 註28 木村礎・高島緑雄編 1969 「耕地と集落の歴史—香取社領村落の中世と近世—」P109第2図
- 註29 加古千恵子他 1987 「多利・前田遺跡」『多利遺跡群発掘調査報告』兵庫県埋蔵文化財調査報告書第46冊 兵庫県教育委員会
- 註30 笹生 衛 1986 「有吉北貝塚における中世土壌墓とその出土遺物—中世初期土壌墓の様相について—」『研究連絡誌』第15・16号 (助千葉県文化財センター)
- 註31 高田博他 1980 『佐倉市江原台遺跡発掘調査報告書』II (助千葉県文化財センター)
- なお、挿図の作成及び遺跡の性格については小牧(旧姓長内)美知枝氏より多大なる御教示を受けた。
- 註32 井上唯雄他 1989 「群馬県出土の墨書土器—文字の普及と遺跡の性格に関連して—」『群馬県出土の墨書・刻書土器集成』(1) 群馬県教育委員会

竪穴住居跡一覧表

No	プラン	南北×東西(m)	面積(m ²)	主 軸	カ マ ド	貯蔵穴	主柱穴	副柱穴	周 溝	時 期	備 考
001	正方形	5.1×6.14	17.1	N-32°-W	北西壁中央	—	(1)	(2)	あ り	古墳II	焼失
002	正方形	3.3×5.64	14.9	—	—	—	(2)	(2)	あ り	古墳II	
003	正方形	4.18×4.44	14.3	N-5°-W	北壁中央	1	4	1	全 周	古墳I	
004	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	欠番
005	方 形	—	—	—	—	—	(2)	—	な し	奈平XI	006号住居跡を切る
006	正方形	3.4×3.2	9.7	N-70°-E	東壁中央	なし	4	1	全 周	奈平XI	007号住居跡を切る
007	方 形	—	—	—	—	—	—	—	な し	奈平X	
008	方 形	—	—	—	—	—	(2)	—	な し	奈平IX	006号住居跡に切られる
009	—	—	—	—	—	—	(2)	—	—	奈 平	床面のみ若干遺存
010	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	欠番
011	長方形	2.8×3.2	6.6	N-98°-E	東壁中央	なし	4	なし	全 周	奈平IX	床下ピットあり
012	正方形	4.0×4.3	12.7	N-2°-E	北壁中央	なし	4	5	全 周	奈平I	拡張
013	方 形	—	—	—	—	—	—	1	あ り	古墳V	2軒重複
014	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	欠番
015	正方形	4.2×4.5	14.0	N-12°-E	北東壁中央	なし	4	なし	全 周	古墳V	016号住居跡を切る
016	正方形	4.9×4.7	18.0	N-12°-W	北壁中央	なし	4	1	全 周	古墳II	015号住居跡に切られる
017	正方形	4.9×4.8	18.1	N-8°-E	北壁東側	なし	4	2	全 周	古墳IV	
018	方 形	—	—	N-84°-E	東壁中央	1	(1)	—	あ り	古墳III	
019	正方形	3.4×3.4	8.4	N-0°-E	北壁東側	なし	1	なし	全 周	奈平XI	020号住居跡を切る
020	正方形	5.0×4.7	17.8	N-3°-E	北壁中央	1	(3)	(3)	ほぼ全周	奈平III	
021	正方形	2.4×—	4.4	N-8°-E	北壁中央	なし	(2)	(1)	な し	奈平IV	560号土壌に切られる
022	正方形	3.8×4.3	10.1	N-0°-E	北壁中央	なし	4	4	全 周	奈平II	021号住居跡に切られる
023	正方形	4.8×4.5	19.4	N-9°-E	北壁中央	なし	4	4	全 周	奈平IV	墨書土器多量出土
024	正方形	4.5×4.3	13.5	N-11°-W	北壁中央	なし	2	2	全 周	奈平IV	023号住居跡に切られる
025	長方形	(5.8×4.3)	(22.6)	N-12°-W	北壁東側	—	—	—	な し	奈平XI	025(B)号住居跡に切られる
025B	正方形	4.5×4.3	15.2	N-10°-W	—	なし	なし	なし	な し	奈 平	
025C	正方形	3.0×3.5	8.2	N-9°-W	北壁中央	なし	3	2	3 辺	奈平V	025・026号住居跡の下
026	正方形	3.0×3.3	9.4	N-9°-W	—	—	3	1	な し	奈 平	
027	正方形	3.1×3.1	6.9	N-12°-W	—	なし	1	1	全 周	奈平XII	
028	長方形	4.0×(3.5)	(9.7)	N-10°-W	北壁中央	なし	4	4	あ り	奈平III	
029	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	欠番
030	正方形	2.8×2.9	8.3	N-93°-E	東壁北側	なし	2	なし	全 周	奈平X	031・033(A)号住居跡を切る
031	方 形	2.8×—	—	—	—	—	—	—	な し	不 明	
032	方 形	—	—	—	—	—	—	—	—	奈平I	一部のみ確認

No	プラン	南北×東西(m)	面積(m ²)	主 軸	カ マ ド	貯蔵穴	主柱穴	副柱穴	周 溝	時 期	備 考
033A	正方形	5.0×5.0	(23.8)	N-2°-E	—	なし	1	なし	あり	奈平X	
033B	正方形	(3.4×3.6)	(12.2)	N-87°-E	東壁中央	なし	1	2	なし	奈平XI	平面推定
034	方 形	2.9×—	—	N-12°-W	北壁中央	なし	なし	なし	全 周	奈平Ⅻ	033(A)号住居跡を切る
035	正方形	6.8×6.7	39.5	N-6°-W	北壁中央	1	4	なし	全 周	古墳I	溝565号土壌に切られる
036	正方形	3.9×3.6	11.9	N-64°-E	東壁中央	なし	3	4	1 辺	奈平IX	038号住居跡に切られる
037	方 形	—	—	—	—	—	(1)	(2)	あり	不明	
038	方 形	3.1×—	(7.3)	N-9°-W	北壁東側	—	2	1	あり	奈平X	040号住居跡に切られる
039	長方形	3.9×3.1	8.8	N-87°-E	東壁中央	なし	2	2	ほぼ全周	奈平X	
040	長方形	3.7×3.0	8.8	N-87°-W	東壁中央	なし	なし	なし	あり	不明	部分的に確認
041	正方形	3.5×3.3	8.3	N-7°-W	北壁中央	—	—	—	あり	奈平IX	
042	長方形	2.2×3.0	6.2	N-10°-W	北壁中央	なし	なし	3	あり	奈平X	
043	長方形	4.9×6.0	22.7	N-105°-E	東壁中央	なし	2	2	全 周	古墳V	床下土壌
044	正方形	5.0×4.9	17.9	N-43°-E	北東壁中央	なし	4	(2)	全 周	古墳V	溝に切れる
045A	長方形	2.4×3.2	6.8	N-80°-E	東壁中央	なし	2	1	なし	不明	045(B)号住居跡を切る
045B	方 形	—	—	—	—	—	—	—	—	不明	
045C	正方形	2.6×2.3	4.2	N-25°-E	—	なし	なし	1	なし	不明	045(A)号住居跡と重複
045D	正方形	—	—	N-42°-W	北 壁	—	—	(1)	なし	不明	045(C)号住居跡と重複
046A	—	—	—	—	—	—	—	—	—	奈 平	
046B	正方形	2.5×2.2	4.1	N-0°-W	北壁西側	なし	なし	なし	なし	奈平XI	046(A)号住居跡と重複
047A	正方形	4.4×4.6	15.1	N-2°-W	北壁中央	なし	4	2	全 周	奈平V	047(B)号住居跡に切られる
047B	正方形	3.4×3.2	7.6	N-2°-E	北壁中央	なし	3	なし	全 周	奈平IX	
048	長方形	3.3×2.3	5.3	N-108°-E	東壁南側	なし	なし	なし	全 周	奈平IX	049号住居跡と一部重複
049	正方形	2.8×2.3	8.3	N-6°-W	北壁中央	なし	なし	なし	3 辺	奈平X	050号住居跡に切られる
050	正方形	3.0×2.8	7.4	N-48°-E	北 東 隅	なし	なし	なし	全 周	奈平XI	
051	正方形	3.0×2.6	5.9	N-95°-E	東壁南側	なし	4	1	3 辺	奈平X	焼失
052	正方形	3.1×3.4	6.3	N-7°-E	南 東 隅	なし	なし	なし	全 周	奈平XI	焼失
053	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	欠番
054	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	欠番
055	正方形	4.3×4.2	13.5	N-95°-E	東壁中央	なし	(3)	1	あり	奈平XI	056号住居跡と重複
056	正方形	5.0×4.8	16.7	N-8°-E	北壁中央	なし	4	8	3 辺	奈平IV	壁柱穴あり
057	正方形	3.6×—	8.9	N-25°-E	北東壁中央	—	4	(2)	全 周	古墳IV	058号住居跡と重複
058	方 形	2.4×—	—	—	—	—	—	—	なし	奈平Ⅻ	

No.	プラン	南北×東西(m)	面積(m ²)	主 軸	カ マ ド	貯蔵穴	主柱穴	副柱穴	周 溝	時 期	備 考
059	—	4.7×—	—	N-12°-E	北壁中央	—	(2)	—	全 周	古墳V	060号住居跡に切られる
060	正方形	3.4×3.4	9.4	N-91°-E	東壁北側	—	—	—	なし	奈平IX	059号住居跡を切る
061	正方形	2.5×2.4	5.4	N-107°-E	東壁中央	なし	2	なし	なし	不明	
062	正方形	3.8×4.1	11.6	N-20°-W	北壁中央	なし	4	1	全 周	古 墳	
063	長方形	4.0×4.6	12.7	N-9°-W	北壁中央	なし	4	1	全 周	奈平II	064・065号住居跡と重複
064	方 形	—	—	—	—	—	—	—	なし	不明	
065	正方形	3.3×3.1	8.2	N-88°-E	東壁北側	なし	4	1	全 周	奈平X	
066	長方形	3.1×3.6	10.5	N-93°-E	東壁中央	なし	なし	なし	なし	奈平IX	和鏡出土、065号住居跡に切られる
067	正方形	3.0×3.3	8.8	—	—	なし	(2)	—	なし	不明	
068	正方形	2.6×2.8	5.5	N-12°-W	北壁中央	なし	なし	なし	1 辺	奈平IX	069号住居跡を切る
069	正方形	3.2×3.5	9.1	N-17°-W	北壁東側	なし	1	2	部 分	奈平VII	
070	正方形	3.0×3.1	7.6	N-7°-E	北壁中央	なし	なし	なし	なし	奈平V	
071	方 形	3.6×—	—	N-23°-W	北壁中央	なし	(3)	(2)	あ り	奈平I	9号溝に切られる
072	方 形	—	—	—	—	—	—	—	あ り	不明	
073	正方形	2.6×3.0	6.0	N-9°-W	北壁中央	なし	なし	なし	ほぼ全周	奈平VII	
074	正方形	4.0×3.9	11.0	N-15°-W	北壁中央	なし	4	3	全 周	奈平VI	南壁を土壌が切る
075	長方形	4.3×3.7	11.5	N-12°-W	北壁中央	なし	4	1	全 周	奈平I	
101	—	5.2×—	—	N-7°-W	—	—	3	1	あ り	古墳I	P21号土壌に切られる
102	正方形	3.5×3.4	(8.4)	N-1°-E	—	—	(1)	—	全 周	不明	103号住居跡に切られる
103	正方形	3.9×3.8	10.3	N-2°-E	北壁西側	なし	2	1	全 周	奈平IX	
104	方 形	4.1×—	—	N-2°-E	北壁中央	—	—	(3)	なし	不明	
105	方 形	—×3.5	—	N-94°-E	—	—	(1)	(1)	なし	不明	
106	長方形	2.4×2.9	5.0	N-94°-E	東壁南側	なし	なし	なし	3 辺	不明	焼失
107	正方形	5.5×5.4	20.8	N-3°-W	北壁中央	なし	4	2	全 周	奈平V	
108	正方形	3.2×3.1	—	N-5°-W	—	なし	2	なし	なし	不明	床面のみ確認
109	正方形	3.9×4.1	10.7	N-25°-W	北壁中央	なし	4	1	全 周	奈平I	
110	長方形	3.8×3.3	9.1	N-6°-E	北壁西側	なし	なし	2	全 周	奈平VIII	111号住居跡に切られる
111	正方形	3.5×3.4	9.9	N-102°-E	東壁中央	なし	2	2	2 辺	奈平X	
112	方 形	3.4×—	—	N-6°-E	—	—	—	—	なし	奈平XI	
113	正方形	5.2×5.4	20.1	N-50°-W	北壁中央	なし	4	4	全 周	奈平II	
114	正方形	4.0×4.0	11.1	N-95°-E	東壁中央	なし	4	6	全 周	奈平VIII	
115	正方形	5.5×5.5	22.7	N-15°-E	北壁中央	なし	4	18	3 辺	奈平VII	壁柱穴あり
116	方 形	3.4×—	—	—	—	—	—	—	あ り	不明	
117	方 形	3.2×—	—	—	—	—	—	—	なし	不明	
118	長方形	4.0×3.4	11.9	N-27°-E	—	なし	4	8	なし	不明	
119	正方形	5.1×5.1	18.8	N-1°-E	北壁中央	なし	4	12	全 周	奈平VII	壁柱穴あり

No	プラン	南北×東西(m)	面積(m ²)	主 軸	カ マ ド	貯蔵穴	主柱穴	副柱穴	周 溝	時 期	備 考
120	正方形	2.6×2.8	7.0	N-18°-W	北壁東川	なし	1	2	全 周	不 明	
121	正方形	3.0×3.1	8.0	N-10°-W	北壁中央	なし	なし	なし	な し	奈平IX	焼失か。122号住居跡を切る
122	正方形	3.4×3.7	7.9	N-8°-E	北壁中央	なし	なし	なし	全 周	奈平IV	123号住居跡の拡張か
123	正方形	2.7×2.8	5.3	N-8°-E	北壁中央	なし	なし	なし	全 周	奈 平	
124	正方形	3.2×3.6	7.4	N-28°-W	北壁中央	なし	なし	4	全 周	奈平II	
125	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	欠番
126	正方形	2.9×3.3	7.2	N-17°-W	—	なし	なし	なし	全 周	不 明	
127	方 形	—	—	—	—	—	—	—	—	奈平X	9号溝を切る
128	—	4.1×—	—	N-6°-W	北壁中央	—	(2)	—	あ り	古墳V	9号溝に切られる
129	—	—	—	N-12°-W	—	—	—	—	あ り	古墳V	大半が調査区域外
201	正方形	3.9×4.0	13.9	N-90°-E	東壁中央	なし	なし	なし	な し	奈平X	
202	長方形	—	—	—	東壁中央	なし	なし	なし	な し	奈平IX	
203	—	—	—	—	—	—	—	—	—	奈平XI	カマドのみ遺存
204	方 形	—	—	—	南 壁	—	—	—	な し	奈 平	

附圖 2 古墳時代出土土器變遷圖 (1/6)

	土師器杯			土師器碗・鉢	土師器高杯	土師器壺	土師器小形壺	土師器瓶	須惠器
I 期	 		 						
II 期 600	 	 	 				 		
III 期	 				 		 		
650									
IV 期				 		 			
V 期 700	 	 	 	 		 			

附圖3 奈良・平安時代出土土器變遷圖 (1/6)

	土師器杯・碗	土師器杯蓋	土師器皿	土師器鉢	土師器壺	土師器小形壺	土師器瓶	須惠器・灰軸
700 I 期	I Aa 35 I B 322	324		340 330	41	36	44	33 37
II 期	I Aa 35 I B 322	I Ab 37	I A 305 304 I C 383 I B 2	339	440 441			34 435 437 438 1
III 750 期	II A 43 II Dc 150	II A 144 II B 21						164
IV 期	II Da 149 273	II Fa 274 II Fb 279	II E 148 280	II A 284	292 151	157		324
V 800 期	II G 212 213 215 155	II Fb 217 218 219	I Ma 220 II C 318		138 303			361
VI 850 期	II E 72 II Ha 331 II Hb 80 74	II Hb 59 61 II Ka 82 II Ib 78	II Fa 65 II Fb 73 II G 71 II Ma 70	II B 88 85 II A 84	147	141	146	81
VII 期	II Ha 328 II Ib 412 II Lb 384	II Lb 325 II Ka 402 410	II Ma 413 416 II Mb 415	IV A 427		429 430		328 329
VIII 期	III A 366 368	II Ib 389 II Ka 388	II La 390	IV B 392	373	393		374
900								
IX 950 期	II Ka 25 III G 344 232 III C 346 III Eb 37	III Ba 26 III D 311 28 III G 183	碗 III B 430 III Ab 180 IV A 28 III E 346 IV Da 347	IV Db 349 III C 231 III G 351 IV F 352	357 358 359	23 34 37	204	312
X 期	III C 25 III G 377 III D 445 III Eb 18	III Fa 26 III Fb 306 III Ea 70 III Ec 75	碗 III C 240 III b 445 IV A 375 IV Ba 446	IV Da 79 III C 389 IV Db 224 III C 87	III A 78 17 III Ca 18 379 III B 327 III C 281	440 308 236	208 244	255
XI 1,000 期	III G 238 4 III Ba 1 249	碗 III Aa 247 III Ab 257 III B 5	VI Ba 260 21 IV Bb 7	IV D 482 31	III B 283 244 III Ca 8 10 III Cc 47	285 252 286 279	273 48 23	12
1,050 期	III Bc 178	碗 III C 140		III Cb 288 289	161 280			

千葉県文化財センター調査報告第178集

佐原市吉原三王遺跡

—東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅴ(佐原地区2)—

印刷 平成2年3月20日

発行 平成2年3月30日

発行 日本道路公団東京第一建設局
東京都港区虎ノ門1-18-1
03(502)7431

編集 財団法人 千葉県文化財センター
千葉市葛城2-10-1 0472(25)6478

印刷 株式会社 太陽堂印刷所
千葉市末広1-4-27 0472(22)1121

佐原市吉原三王遺跡

—東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅴ(佐原地区2)—

(写真図版編)

1 9 9 0

日本道路公団東京第一建設局
財団法人 千葉県文化財センター

佐原市吉原三王遺跡

—東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅴ(佐原地区2)—

(写真図版編)

1 9 9 0

日本道路公団東京第一建設局
財団法人 千葉県文化財センター



501号土壙墓出土遺物



住居跡出土八稜鏡



508号土壤墓出土青白磁皿



青磁・青白磁



緑釉陶器

- | | | |
|------|-----------------------|--------------------|
| 図版18 | 048～050号住居跡全景 | 113号住居跡全景 |
| | 048号住居跡カマド内遺物出土状況 | 114号住居跡全景 |
| | 051号住居跡全景 | 図版29 |
| 図版19 | 051号住居跡遺物出土状況 | 115号住居跡全景 |
| | 051号住居跡遺物出土状況（拡大） | 115号住居跡重複土壌内馬歯出土状況 |
| | 052号住居跡全景 | 118号住居跡全景 |
| 図版20 | 053号住居跡全景 | 図版30 |
| | 055号住居跡カマド内遺物出土状況 | 119号住居跡カマド内遺物出土状況 |
| | 055・056号住居跡全景 | 120号住居跡全景 |
| 図版21 | 057号住居跡全景 | 121～123号住居跡全景 |
| | 059号住居跡全景 | 図版31 |
| | 059号住居跡遺物出土状況 | 124号住居跡全景 |
| 図版22 | 061号住居跡全景 | 128号住居跡全景 |
| | 062号住居跡全景 | 201号住居跡遺物出土状況 |
| | 063・065号住居跡全景 | 202号住居跡カマド内遺物出土状況 |
| 図版23 | 065～067号住居跡全景 | 301・302号土壌全景 |
| | 065号住居跡土錘出土状況 | 図版32 |
| | 066号住居跡和鏡出土状況 | 501号土壌全景 |
| | 068・069号住居跡全景 | 501号土壌和鏡出土状況 |
| | 071号住居跡カマド内遺物出土状況 | 501号土壌和鉄出土状況 |
| 図版24 | 071号住居跡全景 | 505号土壌全景 |
| | 073号住居跡全景 | 508号土壌全景 |
| | 074号住居跡全景 | 509号土壌全景 |
| 図版25 | 075号住居跡全景 | 図版33 |
| | 101号住居跡全景 | 515号土壌全景 |
| | 102・103号住居跡遺物出土状況 | 516号土壌全景 |
| 図版26 | 102・103号住居跡全景 | 517～519号土壌全景 |
| | 104号住居跡全景 | 521号土壌全景 |
| | 106号住居跡全景 | 523号土壌全景 |
| 図版27 | 107号住居跡全景 | 526号土壌全景 |
| | 108号住居跡全景 | 図版34 |
| | 109号住居跡全景 | 527号土壌全景 |
| 図版28 | 110～112・116・117号住居跡全景 | 552号土壌全景 |
| | | 561号土壌全景 |
| | | 565号土壌全景 |
| | | 566号土壌全景 |
| | | 567号土壌全景 |

- 図版35 582号土壙全景
 583号土壙全景
 585号土壙全景
 589号土壙全景
 594号土壙全景
 597・598号土壙全景
 図版36 623号土壙人骨出土状況
 629号土壙全景
 636号土壙全景 (完掘後)
 636号土壙全景
 637号土壙全景
 図版37 683号土壙遺物出土状況
 684号土壙全景
 684号土壙遺物出土状況
 701号土壙全景
 801号土壙全景
 図版38 掘立柱建物跡 (HT-02) 全景
 掘立柱建物跡 (HT-03) 全景
 569号土壙全景
 埋甕 (J-2) 出土状況
 図版39 PS3土壙群全景
 PS3土壙群全景 (西側)
 9号溝全景
 9号溝道路面状況
 3号溝全景
 図版40 古墳時代住居跡出土土器(1)
 図版41 古墳時代住居跡出土土器(2)
 図版42 古墳時代住居跡出土土器(3)
 図版43 古墳時代住居跡出土土器(4)
 図版44 古墳時代住居跡出土土器(5)
 図版45 古墳時代住居跡出土土器(6)
 図版46 古墳時代住居跡出土土器(7)
 図版47 古墳時代住居跡出土土器(8)
- 奈良・平安時代住居跡出土土器(1)
 図版48 奈良・平安時代住居跡出土土器(2)
 図版49 奈良・平安時代住居跡出土土器(3)
 図版50 奈良・平安時代住居跡出土土器(4)
 図版51 奈良・平安時代住居跡出土土器(5)
 図版52 奈良・平安時代住居跡出土土器(6)
 図版53 奈良・平安時代住居跡出土土器(7)
 図版54 奈良・平安時代住居跡出土土器(8)
 図版55 奈良・平安時代住居跡出土土器(9)
 図版56 奈良・平安時代住居跡出土土器(10)
 図版57 奈良・平安時代住居跡出土土器(11)
 図版58 奈良・平安時代住居跡出土土器(12)
 図版59 奈良・平安時代住居跡出土土器(13)
 図版60 奈良・平安時代住居跡出土土器(14)
 図版61 奈良・平安時代住居跡出土土器(15)
 図版62 奈良・平安時代住居跡出土土器(16)
 図版63 奈良・平安時代住居跡出土土器(17)
 図版64 奈良・平安時代住居跡出土土器(18)
 図版65 奈良・平安時代住居跡出土土器(19)
 図版66 奈良・平安時代土壙出土土器(1)
 図版67 奈良・平安時代土壙出土土器(2)
 図版68 奈良・平安時代土壙出土土器(3)
 図版69 奈良・平安時代土壙出土土器(4)
 図版70 溝出土土器(1)
 図版71 溝出土土器(2)
 図版72 墨書土器 (023号住居跡59)
 図版73 墨書土器 (023号住居跡60)
 図版74 墨書土器 (023号住居跡61)
 図版75 文字資料集成(1)
 図版76 文字資料集成(2)
 図版77 文字資料集成(3)
 図版78 文字資料集成(4)
 図版79 文字資料集成(5)

- 図版80 文字資料集成(6)
- 図版81 文字資料集成(7)
- 図版82 文字資料集成(8)
- 図版83 文字資料集成(9)
- 図版84 文字資料集成(10)
- 図版85 文字資料集成(11)
- 図版86 古墳時代住居跡出土遺物
外面同心円叩き須恵器
- 図版87 中世陶器（瀬戸）
- 図版88 中世陶器（常滑）
- 図版89 住居跡出土鉄製品
- 図版90 土壇出土鉄製品
グリッド出土鉄製品
- 図版91 紡錘車
大形土錘
- 図版92 住居跡・溝出土土錘
グリッド出土土錘
- 図版93 住居跡出土砥石
溝・グリッド出土砥石
- 図版94 住居跡出土支脚
- 図版95 066号住居跡出土八稜鏡X線写真
501号土壇墓出土山吹双鳥鏡X線写真
- 図版96 グリッド出土銅鏡
グリッド出土土製品
同上X線写真
- 図版97 遺構出土縄文土器
- 図版98 遺構出土縄文土器
- 図版99 グリッド出土縄文土器
- 図版100 グリッド出土縄文土器
グリッド出土土製品
- 図版101 グリッド出土石器
- 図版102 グリッド出土石器

写 真 图 版



吉原三玉遺跡

吉原三玉遺跡航空写真（遠景）



調査区域



吉原三王遺跡遠景



吉原三王遺跡近景



吉原三王遺跡全景



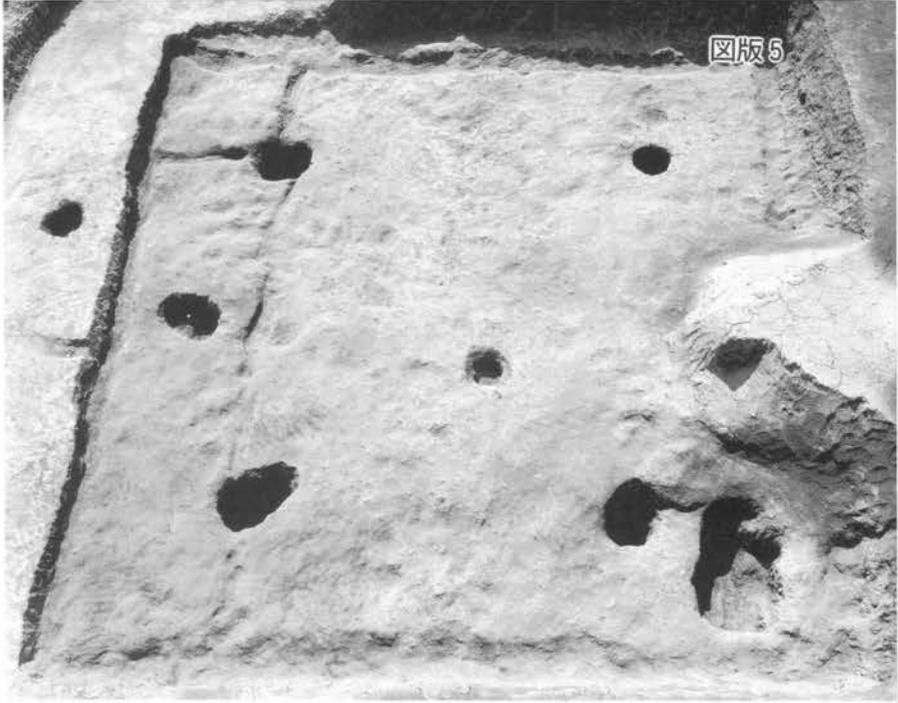
吉原三王遺跡全景（北側）



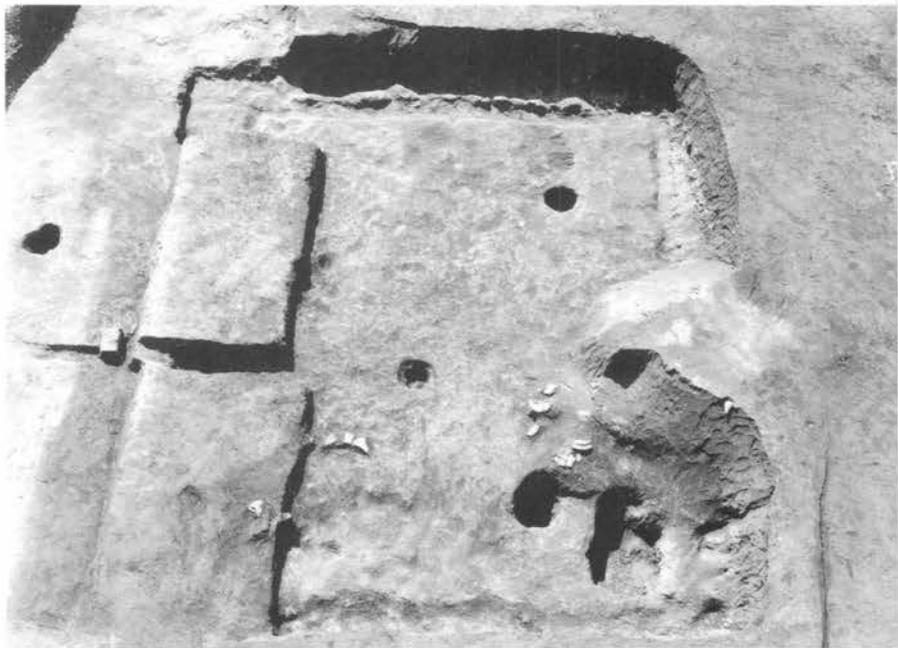
001号住居跡全景



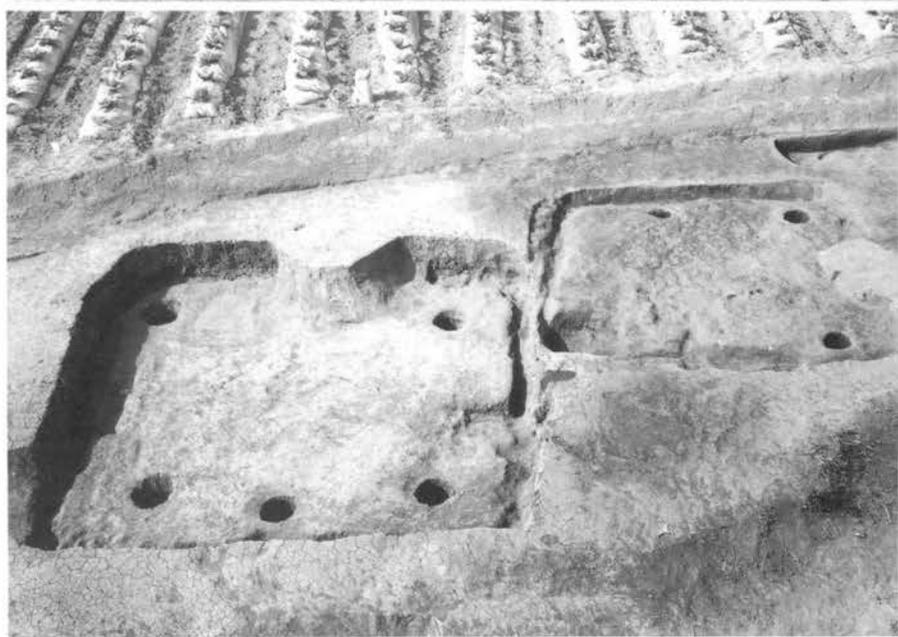
002号住居跡全景



003号住居跡全景



003号住居跡遺物出土狀況



011・012号住居跡全景



005~009号住居跡全景



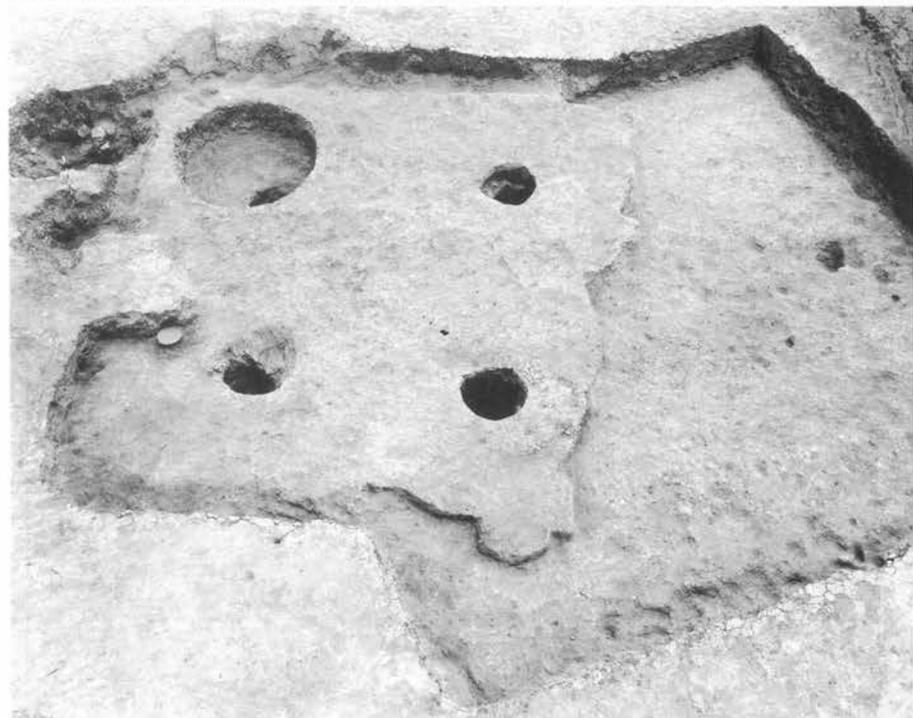
012A・012B号住居跡全景



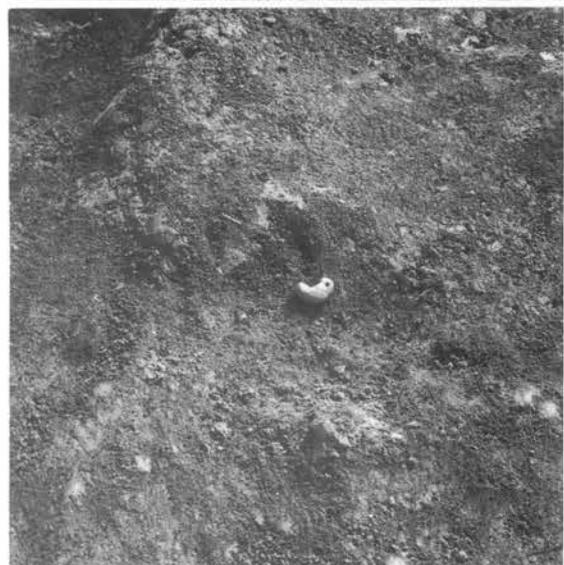
013号住居跡全景



014号住居跡全景



015・016号住居跡全景



016号住居跡土製勾玉出土状況



016号住居跡全景



017号住居跡全景



017号住居跡カマド状況



017号住居跡遺物出土状況



018号住居跡全景



018号住居跡遺物出土状況



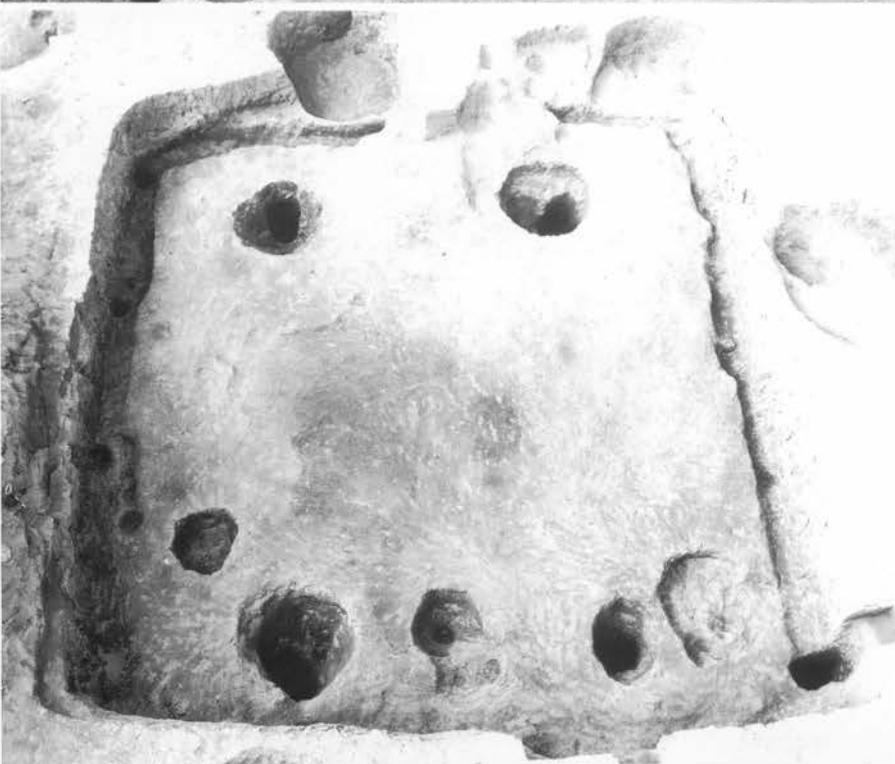
019・020号住居跡全景



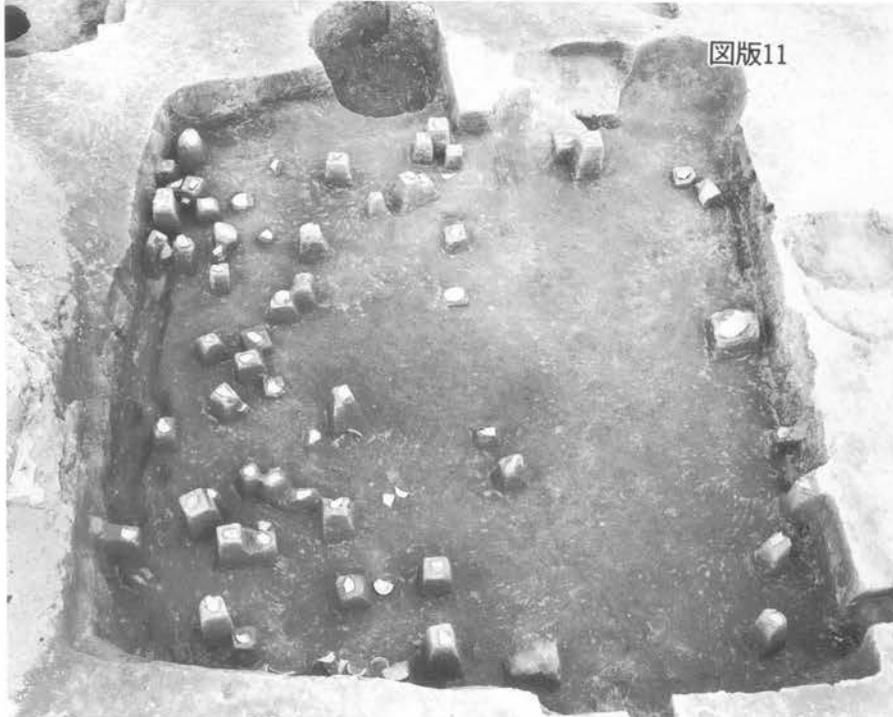
022号住居跡全景



022号住居跡遺物出土状況



023号住居跡全景



023号住居跡遺物出土状況



023号住居跡遺物出土状況（北西側）



023号住居跡遺物出土状況（北西側拡大）



墨書土器59

墨書土器61

023号住居跡遺物出土状況（南側）



023号住居跡遺物出土状況（墨書土器「濱」）



024号住居跡全景



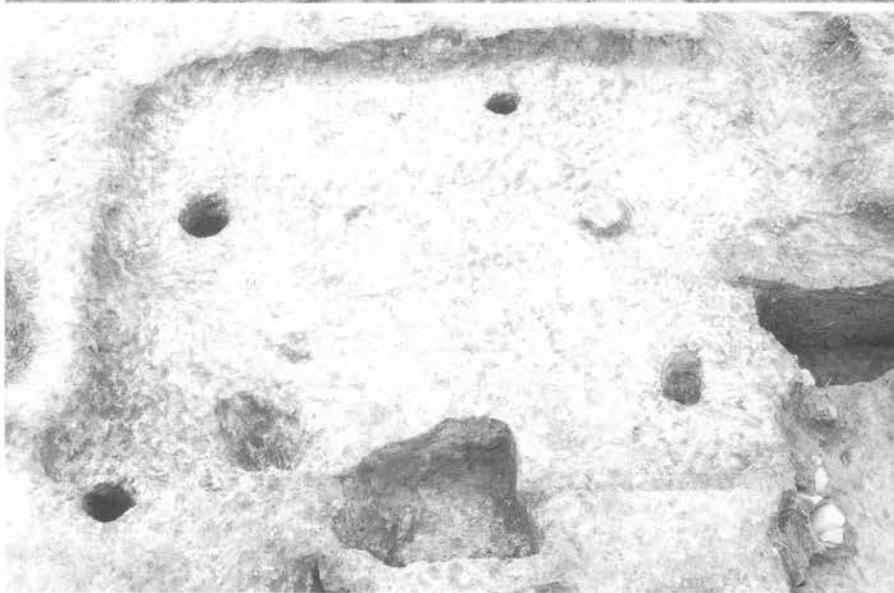
025 A・025 B号住居跡全景



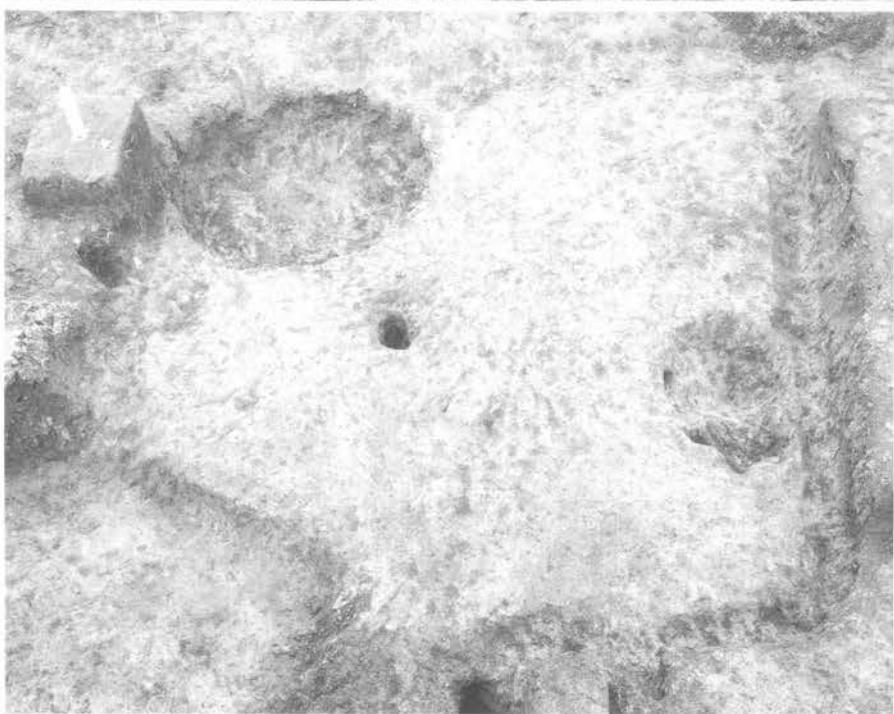
025 C号住居跡全景



025C · 026号住居跡全景



026号住居跡全景



027号住居跡全景



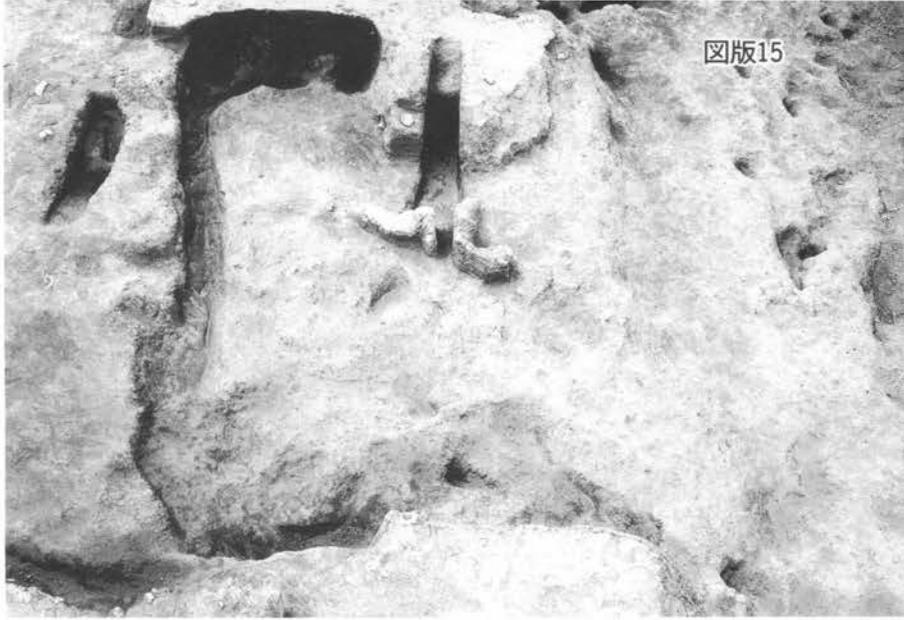
028号住居跡全景



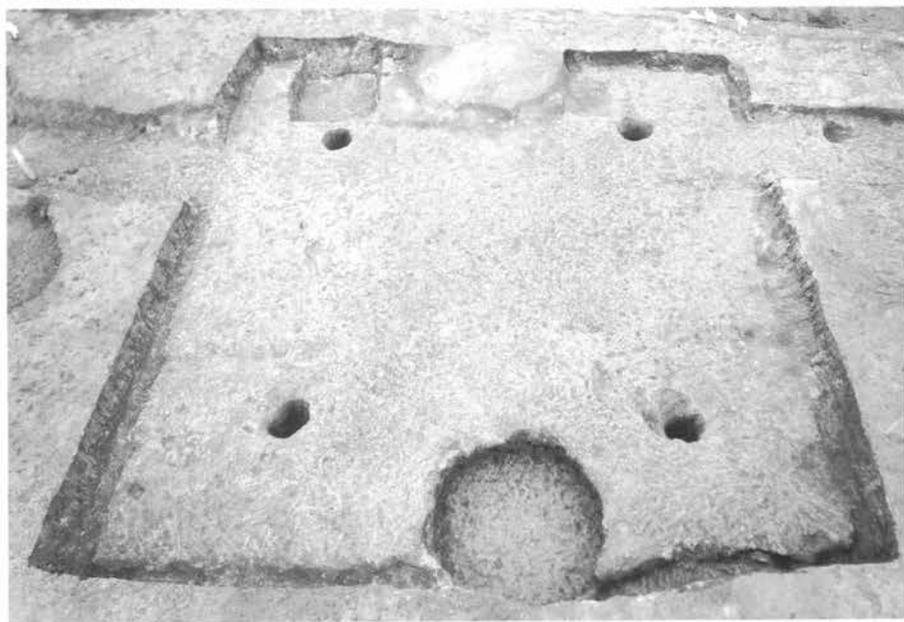
028～034号住居跡全景



033号住居跡カマド内遺物出土状況



034号住居跡全景



035号住居跡全景



036~042号住居跡全景



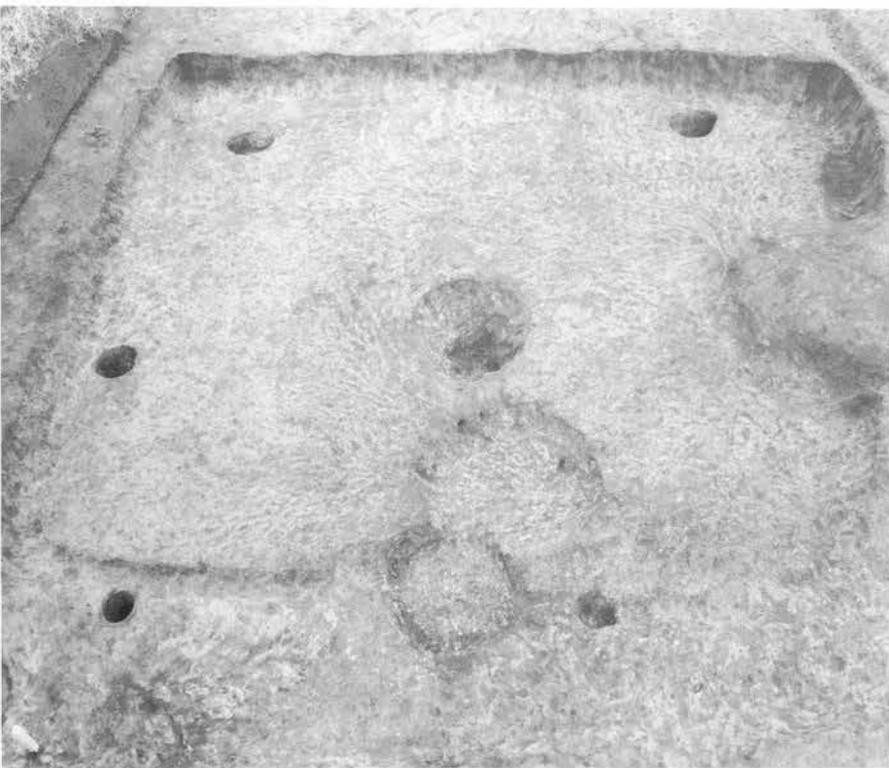
037号住居跡全景



039号住居跡カマド内遺物出土状況



040号住居跡遺物出土状況



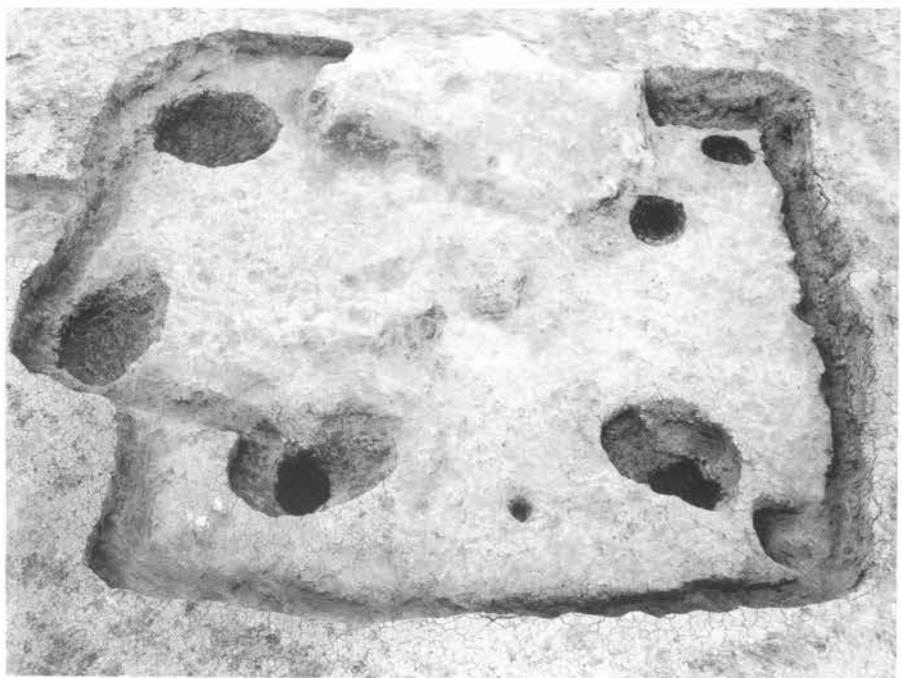
043号住居跡全景



044号住居跡全景



044号住居跡遺物出土状況 (カマド右側)



047号住居跡全景



048～050号住居跡全景



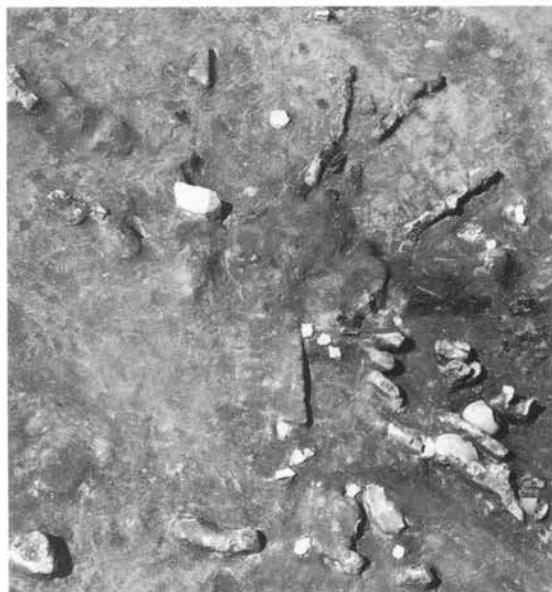
048号住居跡カマド内遺物出土状況



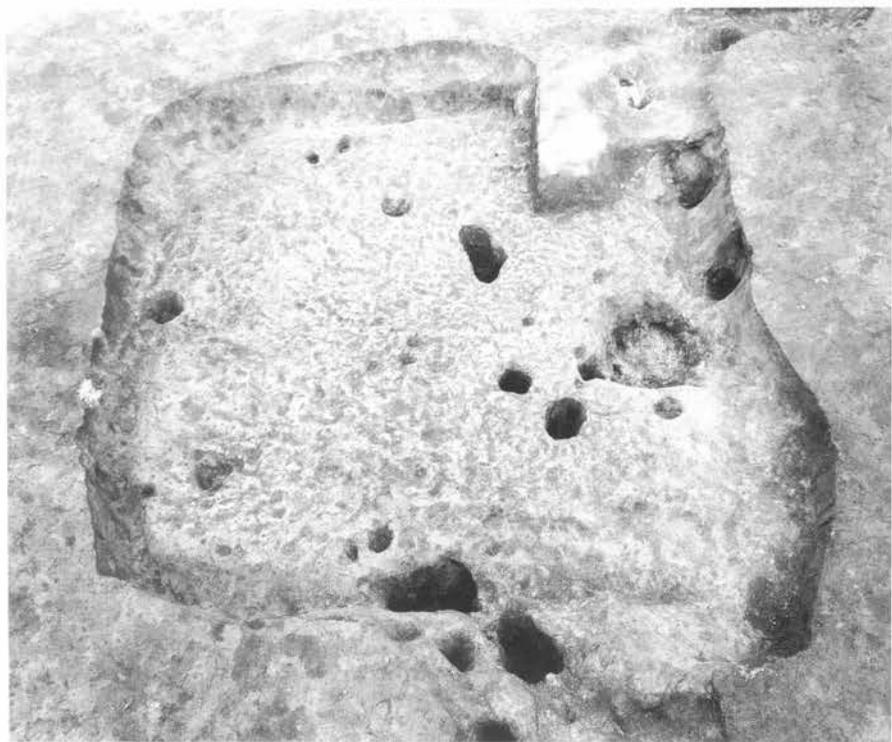
051号住居跡全景



051号住居跡遺物出土状況



051号住居跡遺物出土状況（拡大）



052号住居跡全景



053号住居跡全景



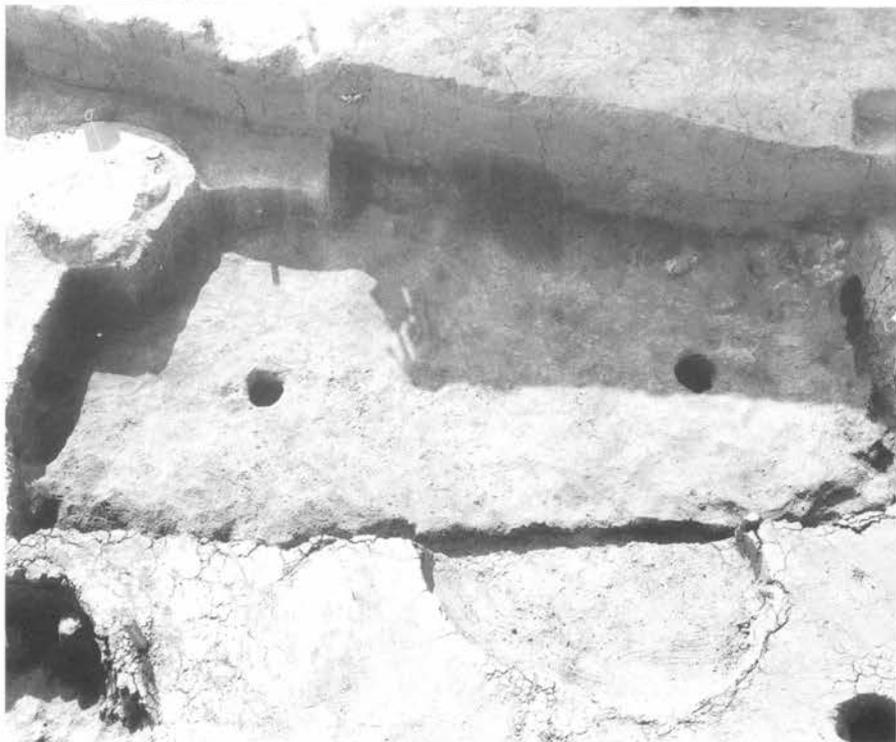
055号住居跡カマド内遺物出土状況



055・056号住居跡全景



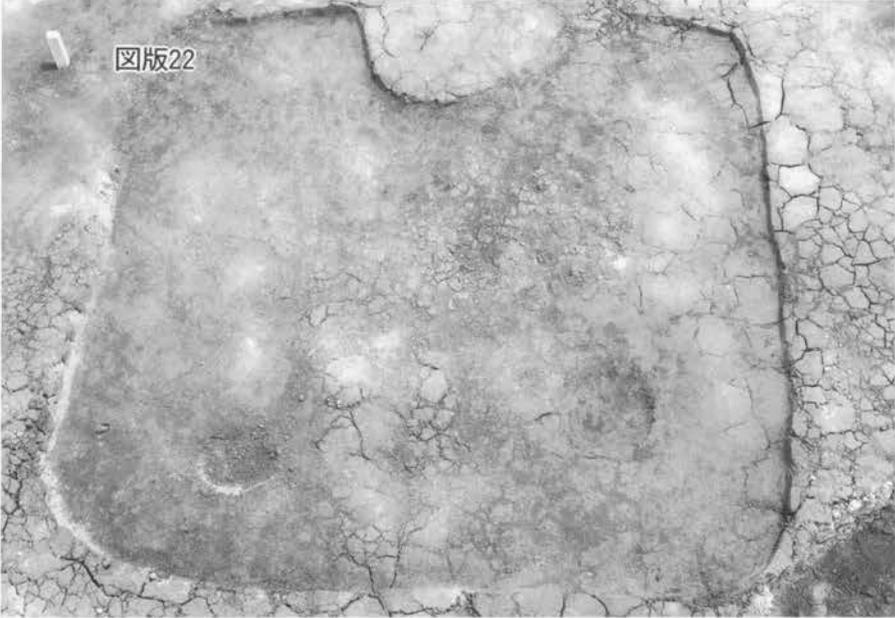
057号住居跡全景



059号住居跡全景



059号住居跡遺物出土狀況



061号住居跡全景



062号住居跡全景



063・065号住居跡全景



065～067号住居跡全景



065号住居跡土錘出土状況



066号住居跡和鏡出土状況



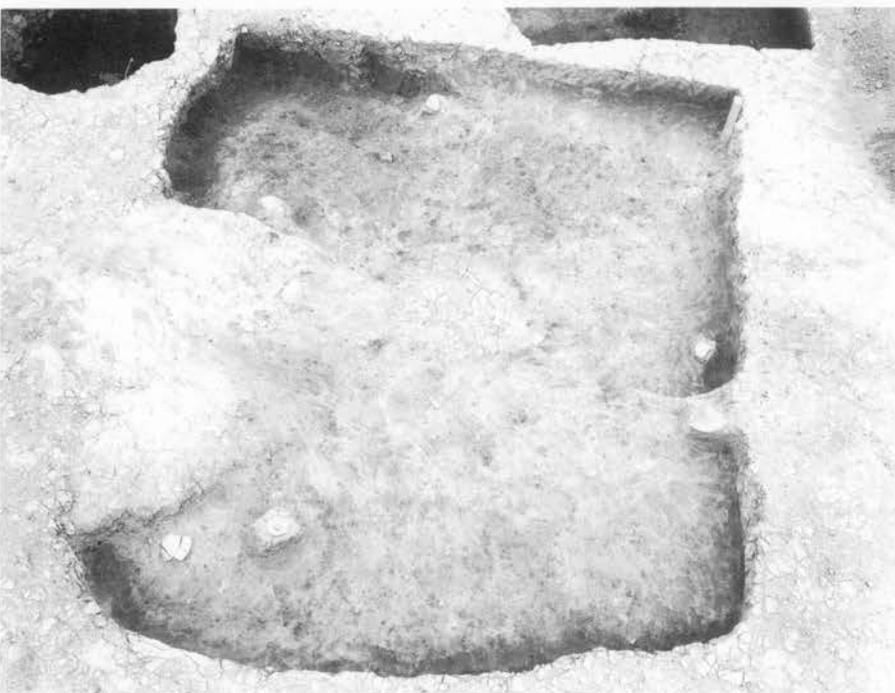
068・069号住居跡全景



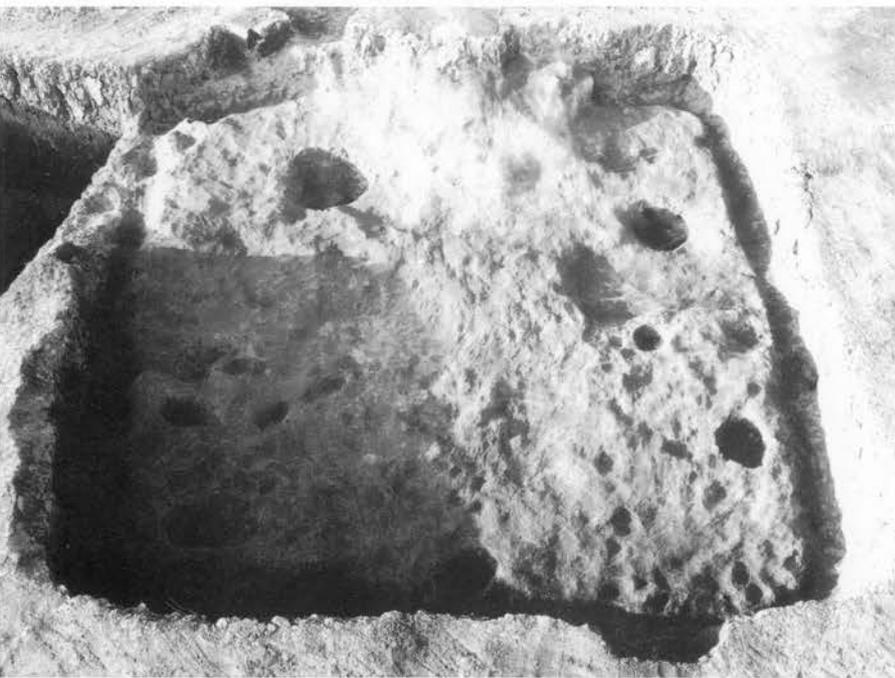
071号住居跡カマド内遺物出土状況



071号住居跡全景



073号住居跡全景



074号住居跡全景



075号住居跡全景



101号住居跡全景



102・103号住居跡遺物出土状況



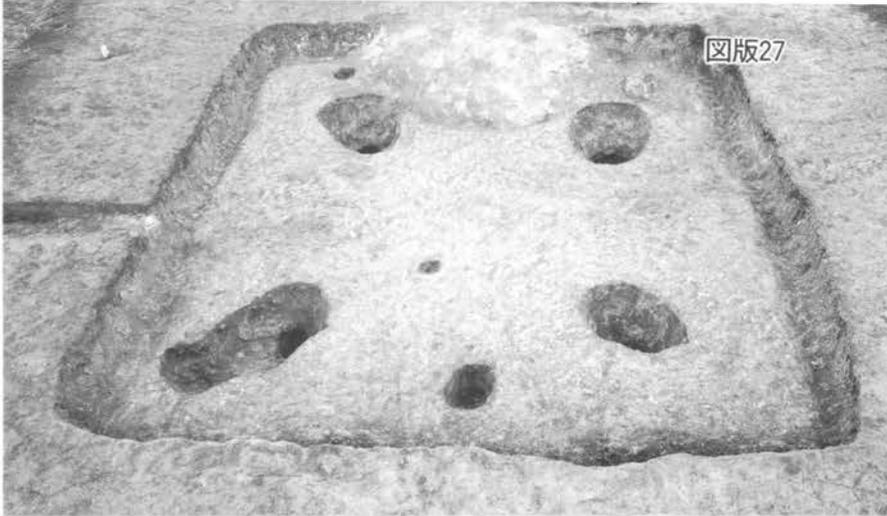
102·103号住居跡全景



104号住居跡全景



106号住居跡全景



107号住居跡全景



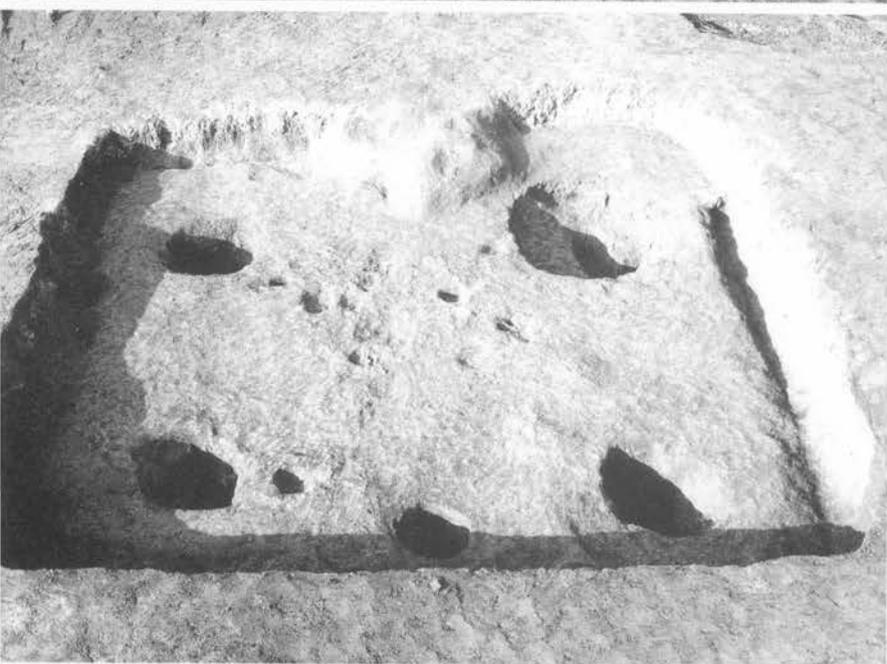
108号住居跡全景



109号住居跡全景



110~112·116·117号住居跡全景



113号住居跡全景



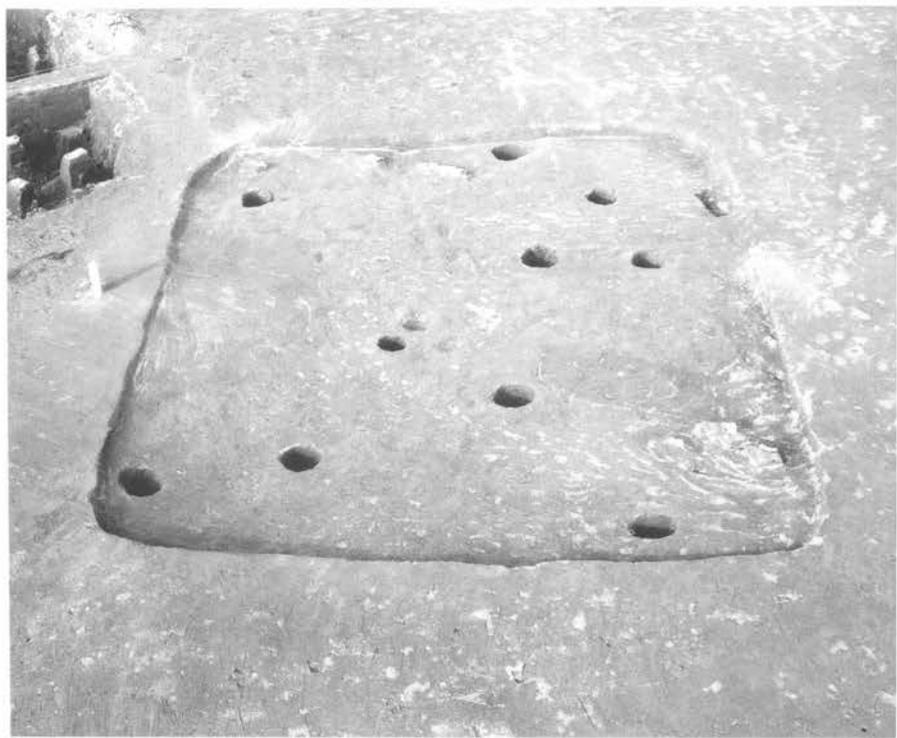
114号住居跡全景



115号住居跡全景



115号住居跡重複土壙内馬齒出土狀況



118号住居跡全景



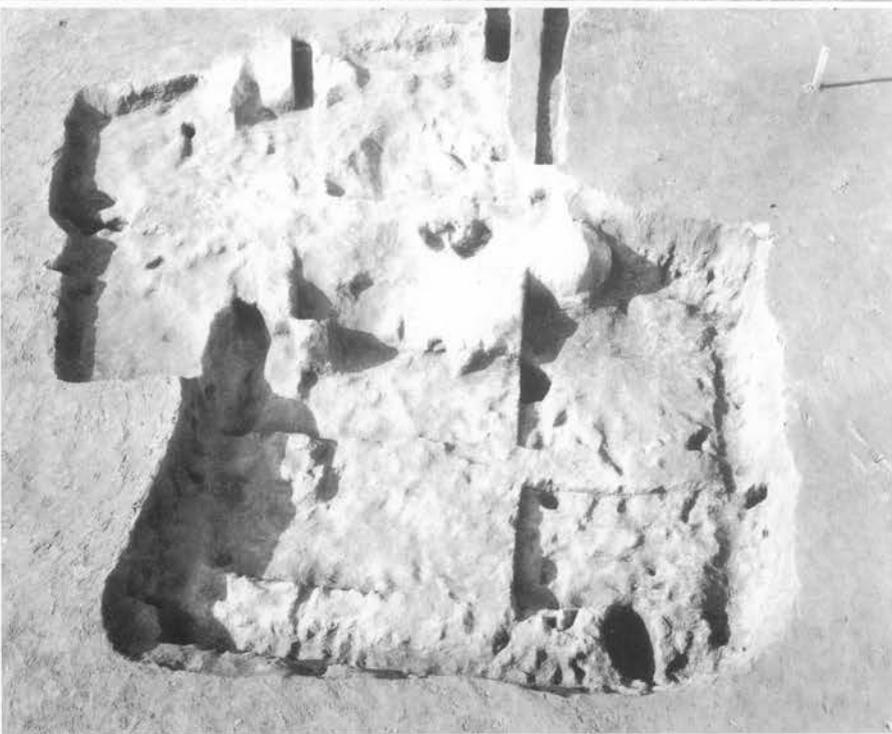
119号住居跡全景



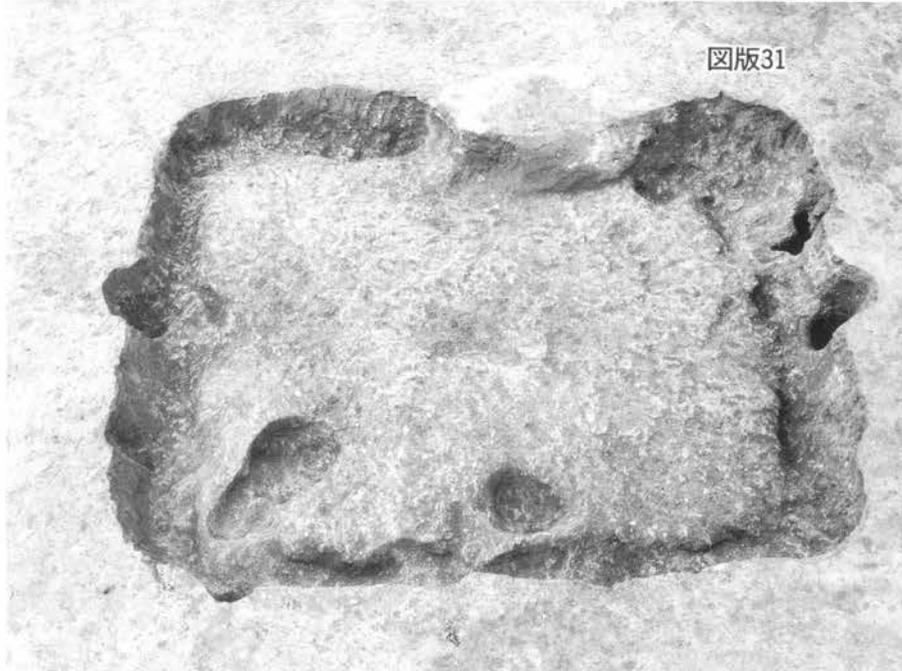
119号住居跡カマド内遺物出土状況



120号住居跡全景



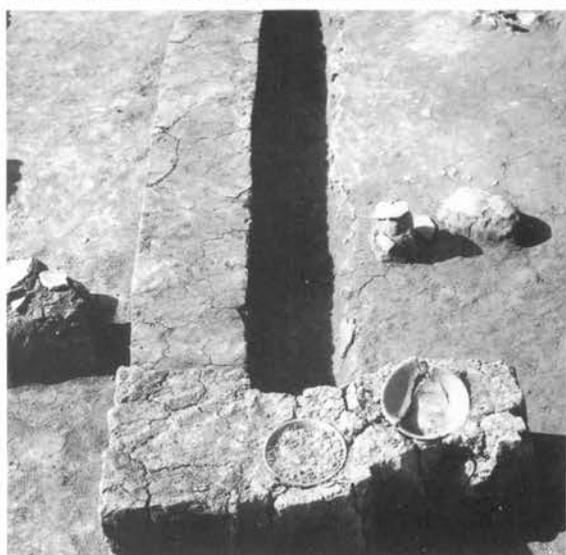
121～123号住居跡全景



124号住居跡全景



128号住居跡全景



201号住居跡遺物出土状況



202号住居跡カマド内遺物出土状況



301・302号土壙全景



501号土壙全景



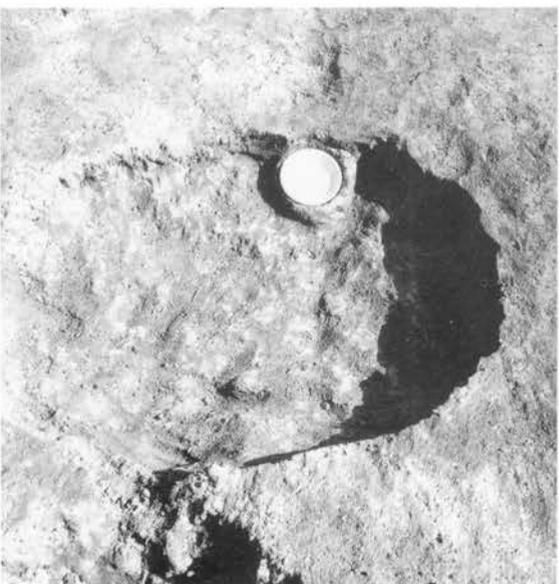
501号土壙和鏡出土狀況



501号土壙和劍出土狀況



505号土壙全景



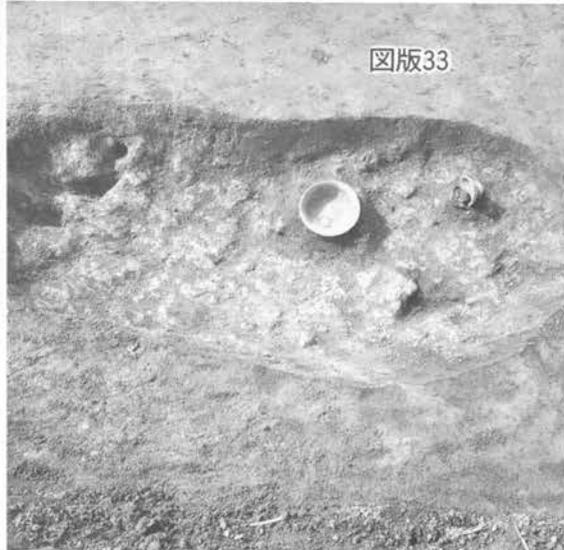
508号土壙全景



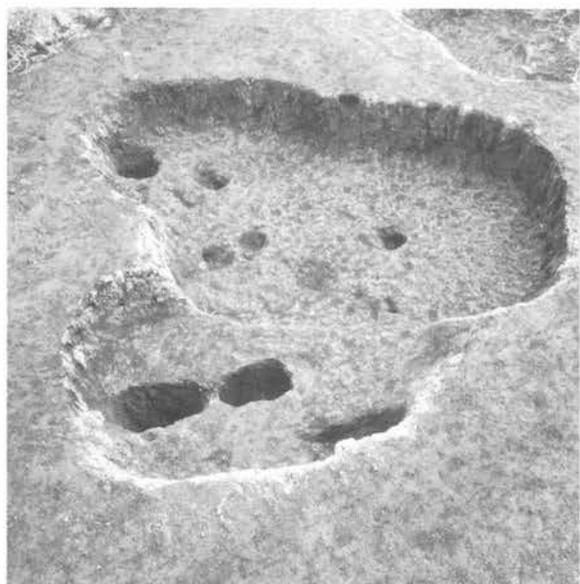
509号土壙全景



515号土坑全景



516号土坑全景



517~519号土坑全景



521号土坑全景



523号土坑全景



526号土坑全景



527号土坑全景



552号土坑全景



561号土坑全景



565号土坑全景



566号土坑全景



567号土坑全景



582号土壙全景



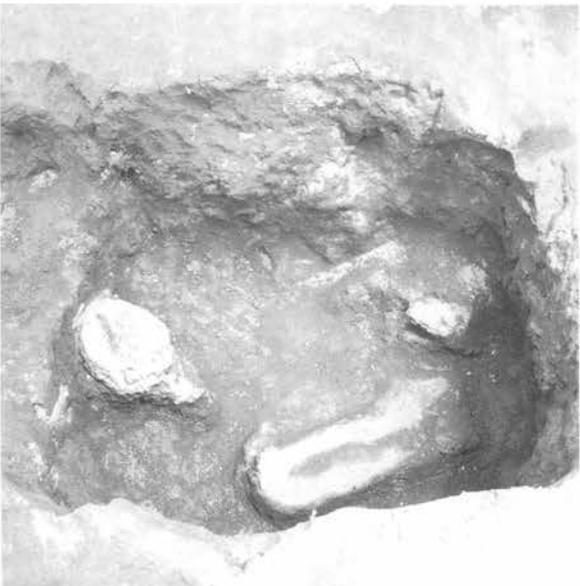
583号土壙全景



585号土壙全景



589号土壙全景



594号土壙全景



597·598号土壙全景



623号土壙人骨出土状况



629号土壙全景



636号土壙全景 (完掘後)



636号土壙全景



637号土壙全景



683号土壙遺物出土状況



684号土壙全景



684号土壙遺物出土状況



701号土壙全景

801号土壙全景





掘立柱建物跡 (HT-02) 全景



掘立柱建物跡 (HT-03) 全景



569号土壙全景



埋甕 (J-2) 出土状況



PS 3 土壙群全景



PS 3 土壙群全景 (西側)



9号溝全景



9号溝道路面狀況



3号溝全景



1(001)



6(001)



13(001)



10(001)



16(001)



20(002)



25(003)



24(002)



31(003)

古墳時代住居跡出土土器(1)

古墳時代住居跡出土土器(2)



33(013)



38(015)



39(015)



42(015)



46(015)



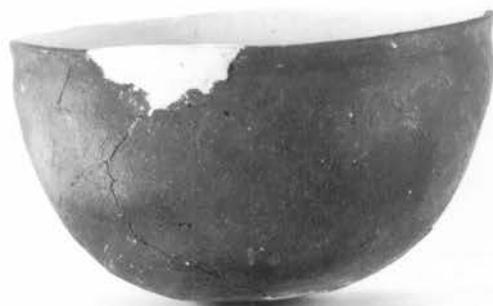
48(015)



35(013)



40(015)



47(015)



53(016)



55(016)



60(016)



61(016)



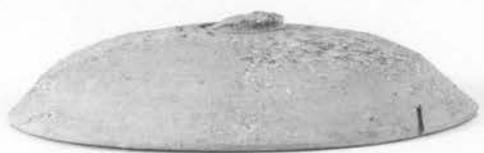
57(016)



58(016)



62(016)



63(017)



66(017)



67(017)



70(018)



72(018)

古墳時代住居跡出土土器(3)

古墳時代住居跡出土土器(4)



73(018)



74(018)



69(018)



79(018)



80(018)



82(018)



83(018)



84(018)



90(018)



85(018)



86(018)



87(018)



97(035)



94(035)



99(035)



98(035)



103(044)



102(044)



104(044)

古墳時代住居跡出土土器(6)



105(044)



112(043)



113(043)



117(057)



120(057)



121(057)



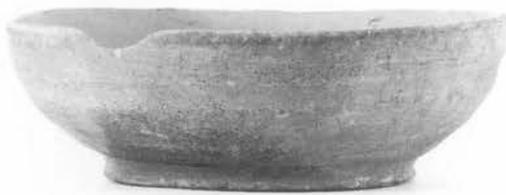
110(044)



116(043)



119(057)



122(059)



123(059)



125(059)



126(059)



127(059)



128(059)



129(062)



131(101)



132(101)



134(101)

古墳時代住居跡出土土器(8)



136(128)



138(128)



137(128)



140(129)

奈良・平安時代住居跡出土土器(1)



8(006)



5(006)



10(006)



11(006)



13(007)



14(007)



15(007)



16(007)



17(007)



18(009)



19(009)



26(011)



28(011)



35(012)



38(012)



39(012)



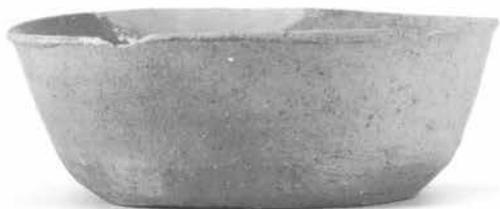
41(012)



46(019)



47(019)



53(021)



54(022)



55(022)



57(022)



58(022)



61(023)



66(023)



65(023)



69(023)



68(023)



70(023)



71(023)



72(023)



73(023)



75(023)



76(023)



77(023)



78(023)



79(023)



84(023)



141(023)



86(023)



145(023)

奈良・平安時代住居跡出土土器(5)



148(024)



149(024)



157(025C)



155(025C)



159(026)



158(025C)



160(027)



161(027)



165(028)



166(028)



167(030)



168(030)



169(030)



172(033)



173(033)



175(033)



176(033)



180(036)



182(036)



183(036)



184(038)



188(038)

奈良・平安時代住居跡出土土器(6)

奈良・平安時代住居跡出土土器(7)



189(039)



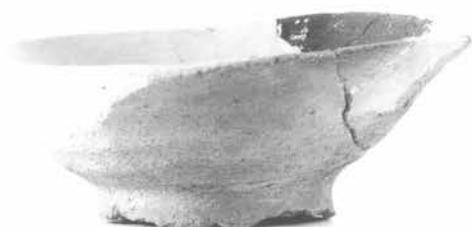
191(039)



192(039)



198(040)



199(040)



200(041)



201(041)



206(042)



207(042)



212(047A)



213(047A)



214(047A)



216(047A)



217(047A)



218(047A)



222(047B)



223(047B)



226(047B)



225(047B)



227(047B)



228(048)



229(048)



230(048)



231(048)



233(049)



234(049)



240(051)



241(051)



243(051)



245(051)



246(052)



247(052)



249(052)



251(052)



252(052)



256(055)



257 (055)



258 (055)

奈良・平安時代住居跡出土土器(10)



260 (055)



263 (055)



265 (055)



266 (055)



268 (055)



269 (055)



270 (055)



274 (056)



275 (056)



277 (056)

奈良・平安時代住居跡出土土器(1)



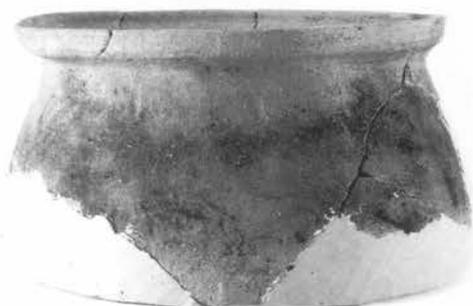
277(056)



296(056)



293(056)



297(056)



300(058)



304(063)



302(060)



306(063)



305(063)



308(065)



311(068)



318(070)



319(070)



321(070)



322(071)



324(071)



323(071)



329(073)



328(073)



331(074)



332(074)



335(074)



337(074)



338(074)



339(075)



340(075)



341(075)



345(103)



344(103)



343(103)



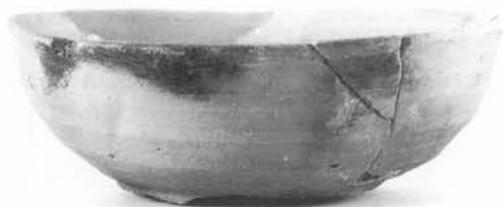
347(103)



349(103)



348(103)



350(103)



351(103)



352(103)



357(103)



358(103)



362(107)



360(107)



368(110)



366(110)



369(110)



373(110)



375(111)



376(111)



377(111)



378(111)



379(111)



380(111)



383(113)



385(113)



386(113)



387(113)



388(114)



389(114)



390(114)



391(114)



395(115)



401(115)



410(119)



411(119)



412(119)



413(119)



414(119)



415(119)



416(119)



417(119)



419(119)



421(119)



429(119)



435(124)



437(124)



436(124)



439(124)



438(124)



440(124)



442(127)



443(201)



444(201)



445(201)



446(201)



447(201)



2(516)



3(516)



10(552)



11(552)



12(552)



14(552)



25(565)



26(565)



27(565)



28(565)



29(565)



31(565)

奈良・平安時代土壇出土土器(2)



34(569)



41(629)



42(661)



48(664)



49(701)



50(701)



53(P21)



55(P21)



56(P21)



64(684)



66(684)



67(684)



68(684)



69(684)



70(684)



71(684)



72(684)



73(684)



75(684)



76(684)



77(684)



78(684)



74(684)



79(684)



80(684)



81(684)



82(684)



83(684)



84(684)



85(684)



88(684)



86(684)



7(508)



1(M9)



3(M9)

沟出土土器(1)



4(M9)



5(M9)



6(M9)



13(M11)



16(M30)



17(M30)

沟出土土器(2)



18(M33)



19(M33)



21(M3)



22(M3)



23(M3)



24(M3)



26(M3)



28(M3)



29(M3)



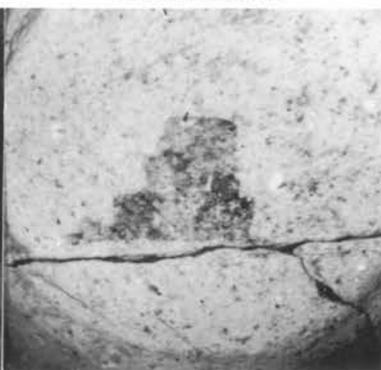
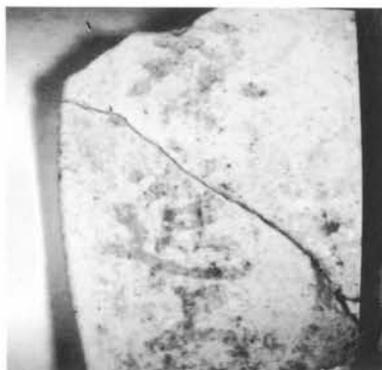
墨書土器 (023号住居跡59)



墨書土器 (023号住居跡60)



墨書土器 (023号住居跡61)



023(62)

023(63)



023(65)

023(66)

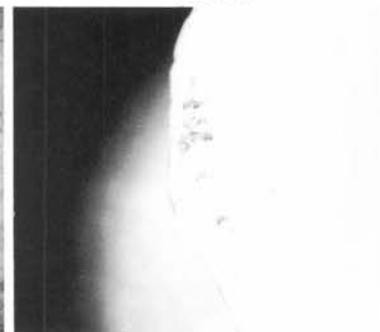
023(67)



023(68)

023(69)

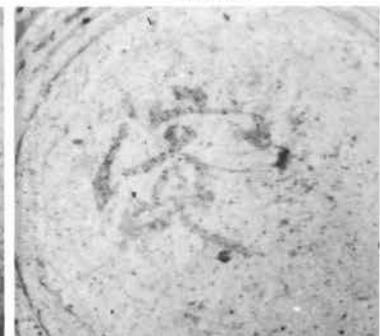
023(70)



023(76)

023(78)

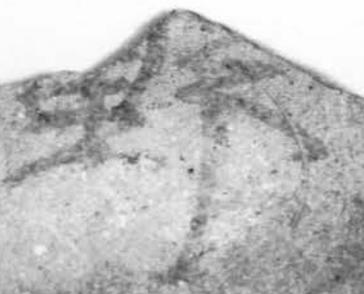
023(80)



023(82)

023(83)

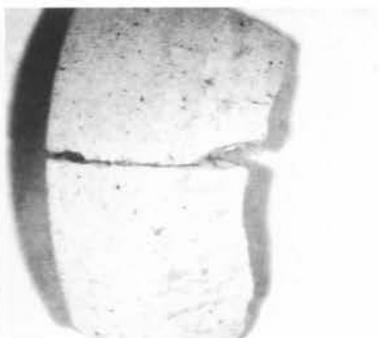
023(84)



023(85)



023(87)



023(88)



023(89・90)



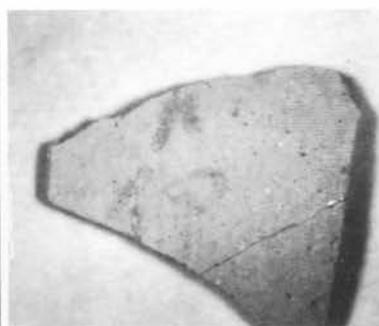
023(91)



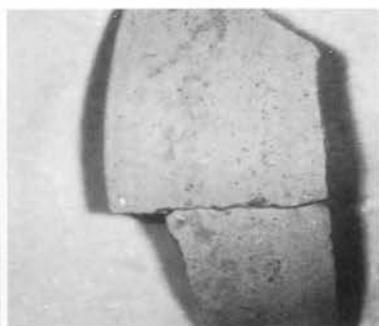
023(92)



023(93)



023(94)



023(95)



023(96)



023(97)



023(98)



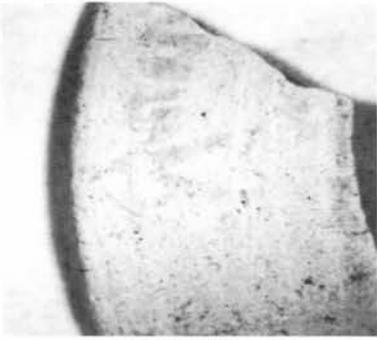
023(99)



023(100)



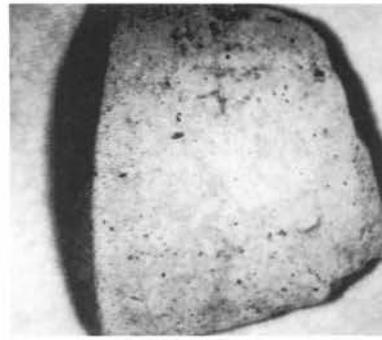
023(102)



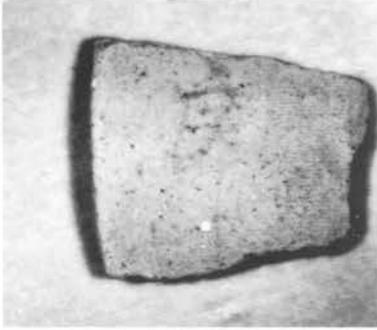
023(103)



023(104)



023(105)



023(106)



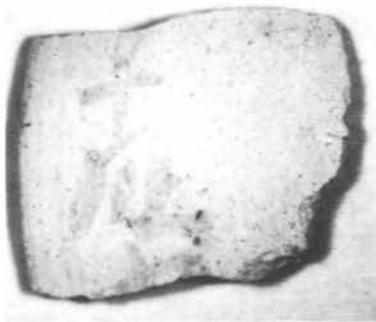
023(107)



023(108)



023(109)



023(111)



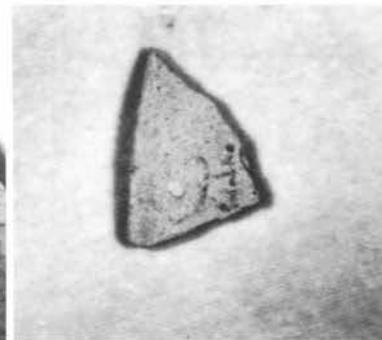
023(112)



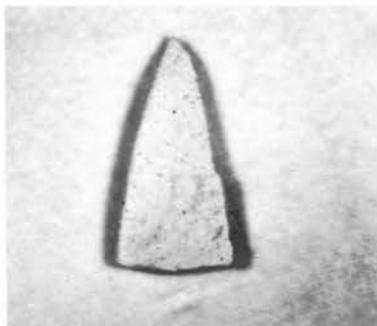
023(113)



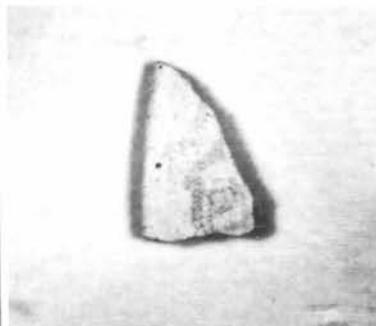
023(114)



023(115)



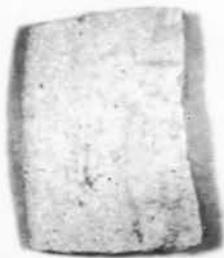
023(116)



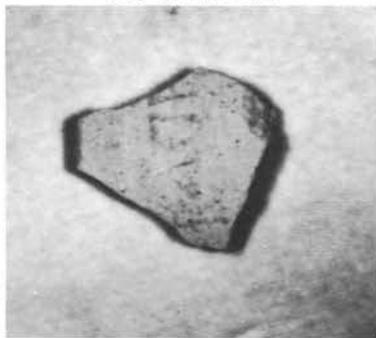
023(117)



023(119)



023(120)



023(122)



023(124)



023(126)



023(127)



023(128)



023(129)



023(130)



023(132)



023(133)



023(134)



023(135)



023(136)



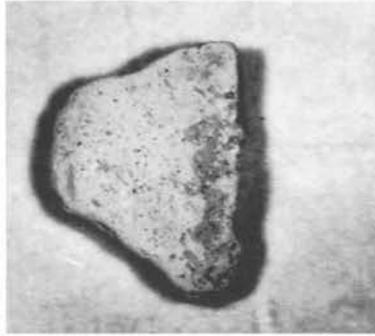
025(C155)



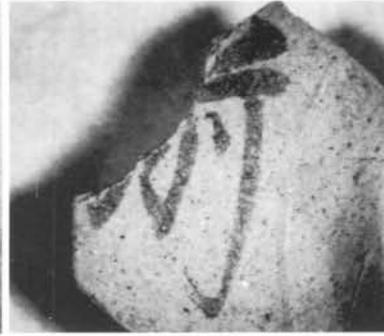
025(C156)



027(162)



027(163)



038(186)



047A(212)



047A(213)



047A(214)



047A(216)



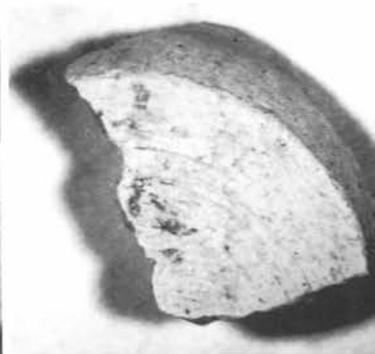
047A(217)



047A(218)



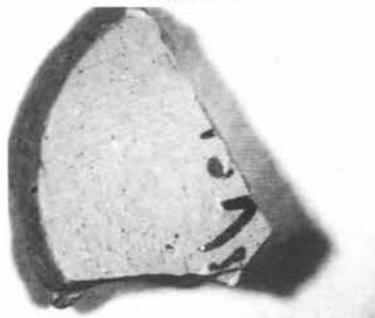
056(274)



056(218)



056(281)



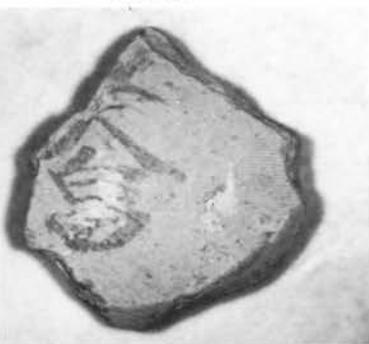
056(282)



056(283)



056(285)



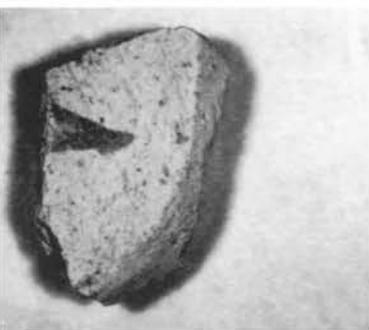
056(286)



056(288)



056(290)



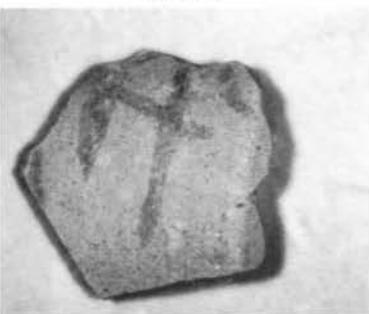
056(291)



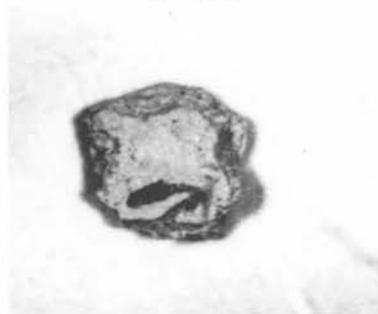
056(292)



069(314)



069(315)



069(316)



070(320)



073(325)



073(326)



073(330)



074(334)



107(360)



110(366)



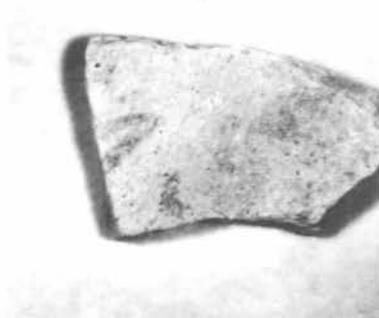
110(367)



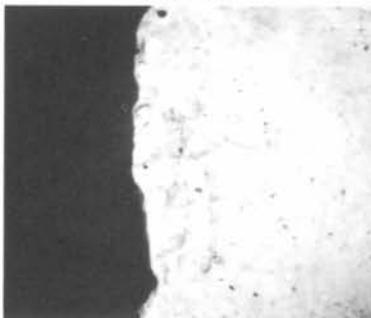
110(371)



110(370)



110(372)



114(391)



115(405)



115(396)



115(397)



115(398)



115(399)



115(403)



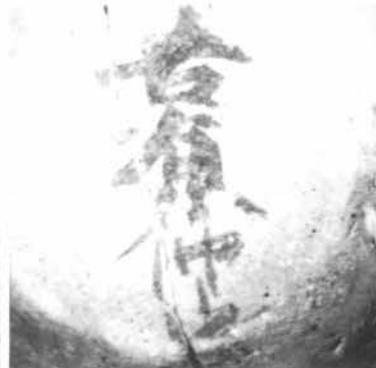
115(404)



115(406)



119(409)



119(410)



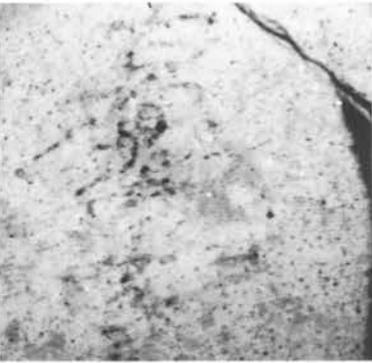
119(411)



119(412)



119(413)



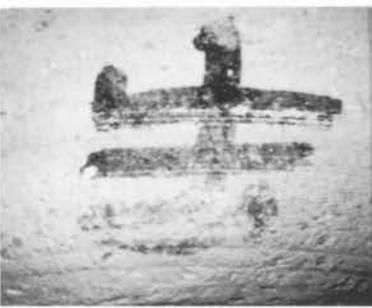
119(414)



119(415)



119(419)



119(421)



119(424)



119(425)



119(428)



583



565(26)



565(25)

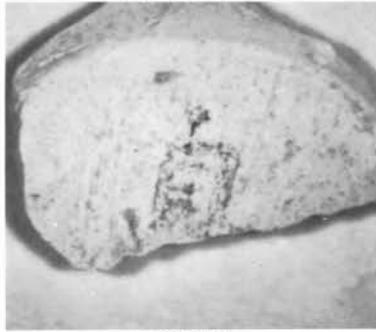


565(25)

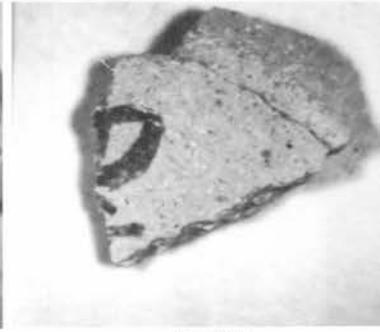




691(51)



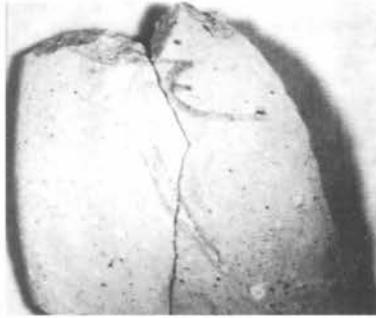
691(52)



614(39)



P21(59)



P21(60)



684(81)



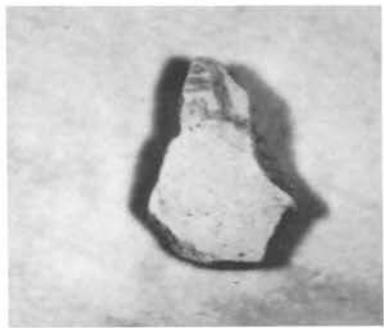
684(85)



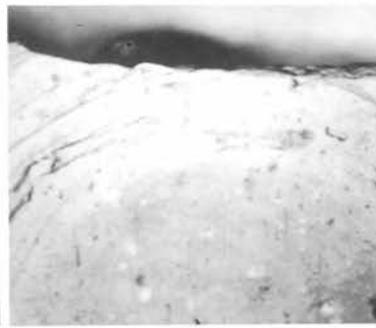
M9



M9



M9



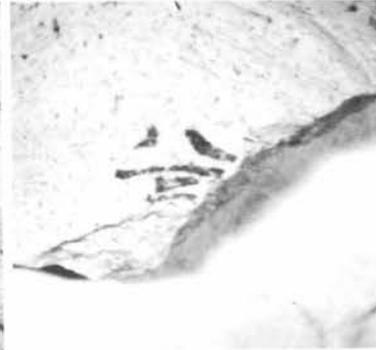
M9



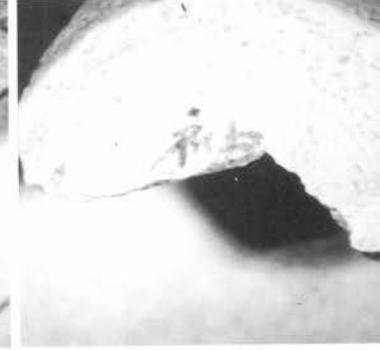
M25



043(28)



I1-42(2)



F2-24(1)



F7-00(3)



F3-23(4)



E9-00(5)



F3-44(8)



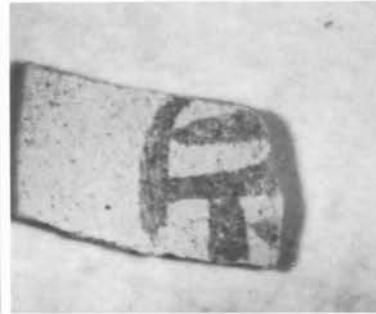
F3-23(9)



F7-00(10)



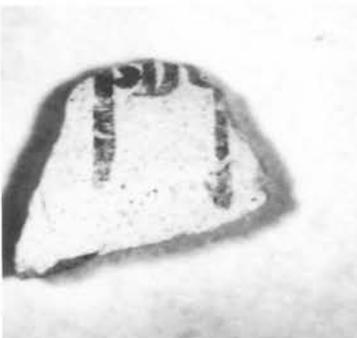
061住付近(7)



F7-00(11)



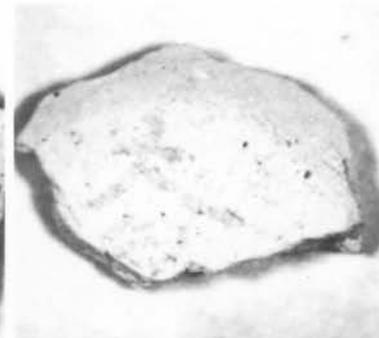
072(12)



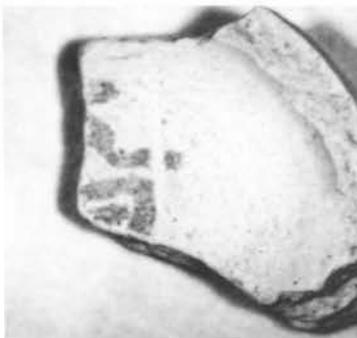
B10-41(13)



102・103住付近(14)



F5-44(15)



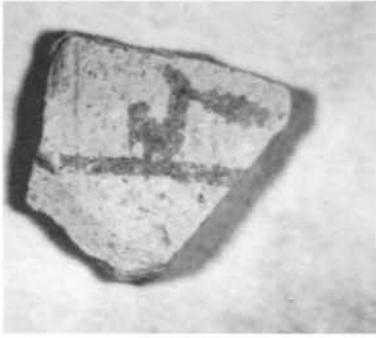
G4-20(16)



F7-00(18)



121(21)



表土中(22)



G 4-21(23)



F7-00(26)



(27)



B9-03



表採



D0-13(29)



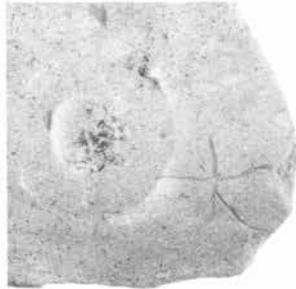
F7-44(31)



F 6-41(32)



I 1-44(33)



I 1-04(34)



B10(35)



012(36)



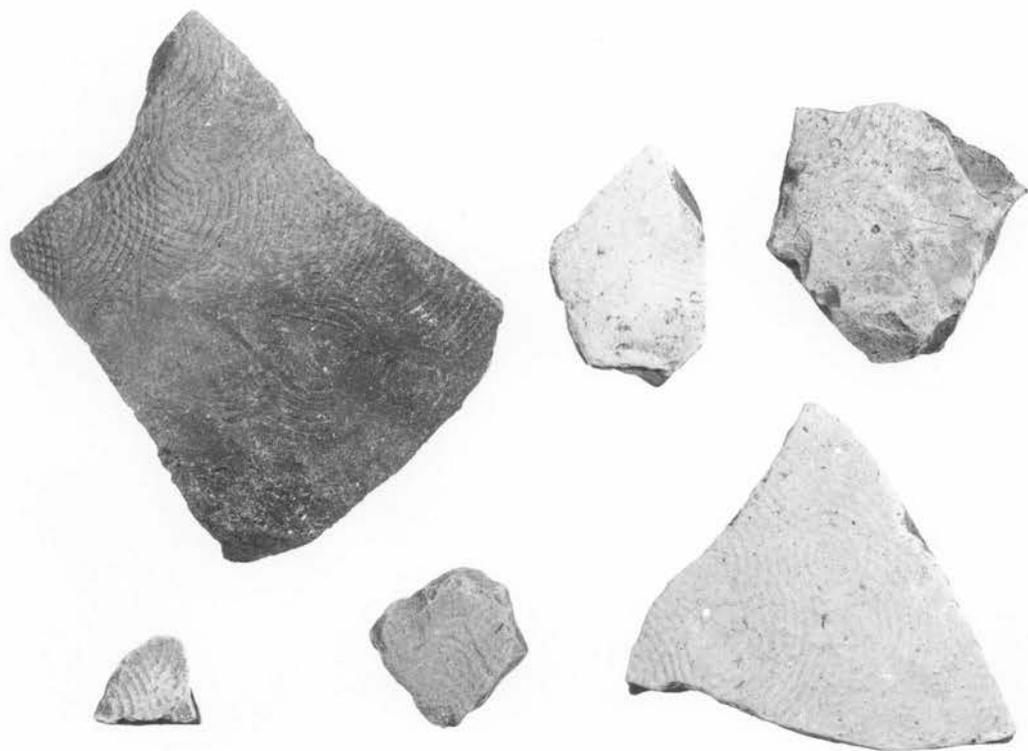
B10(37)

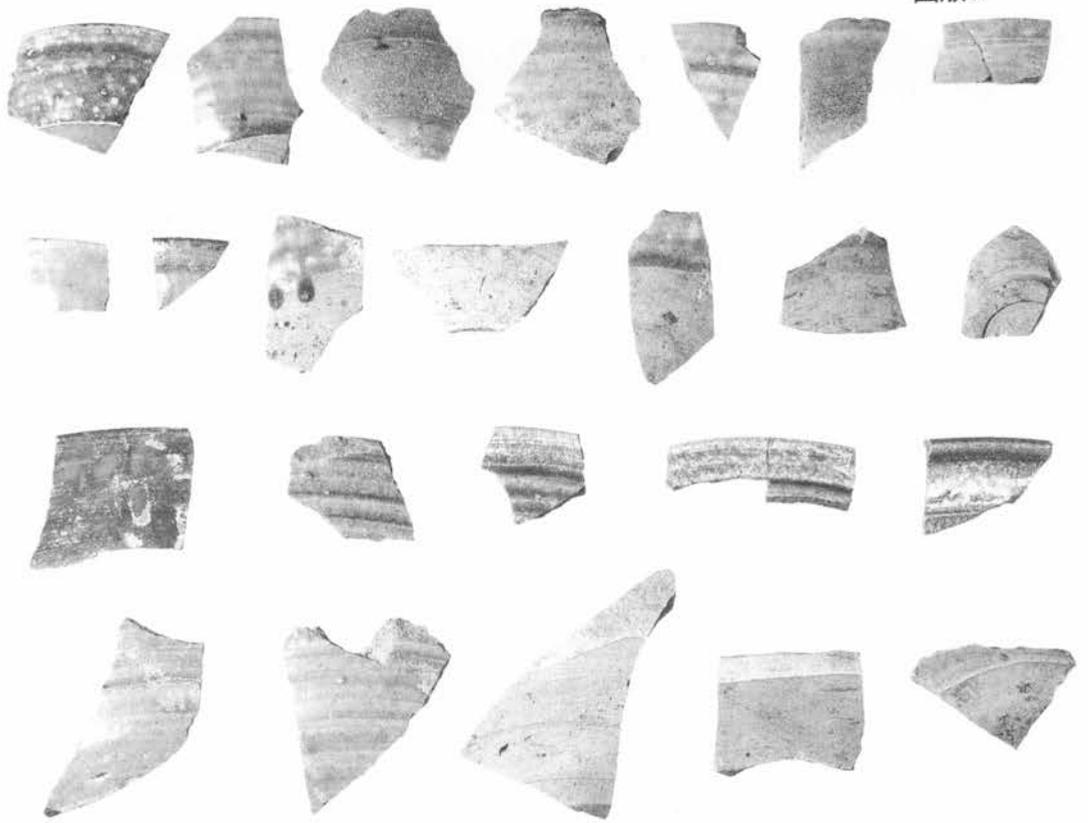


I 1-12(38)



古墳時代住居跡出土遺物
外面同心円叩き須恵器

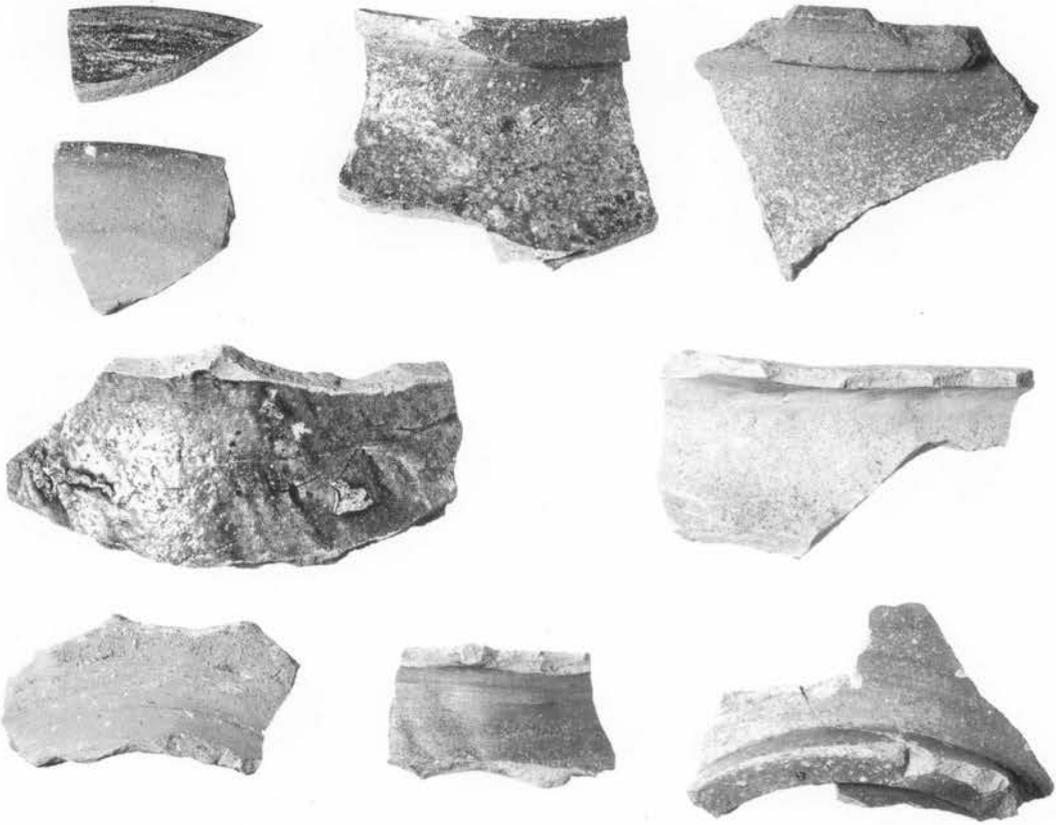




中世陶器 (瀬戸)

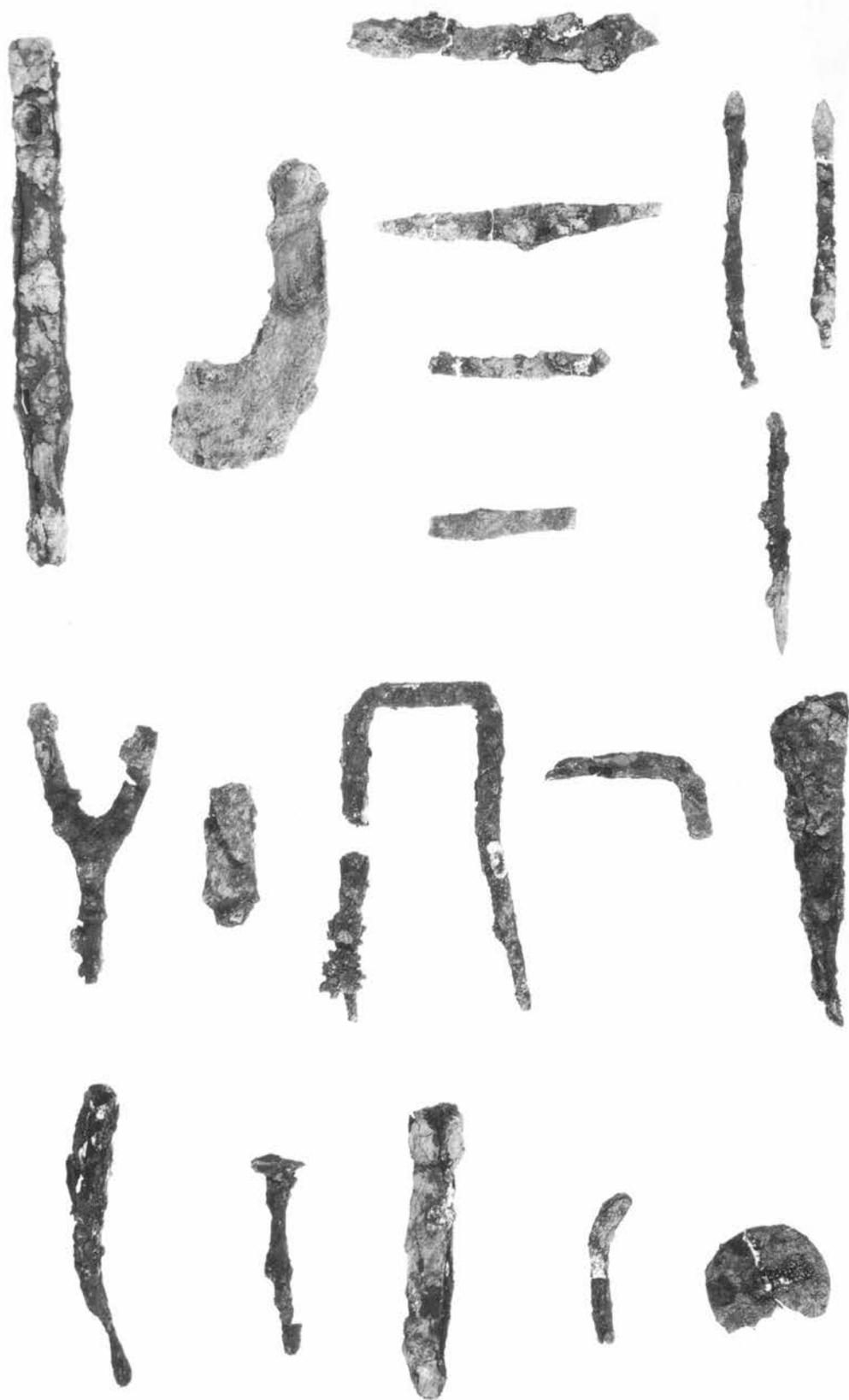
中世陶器 (瀬戸)





中世陶器 (常滑)
中世陶器 (常滑)

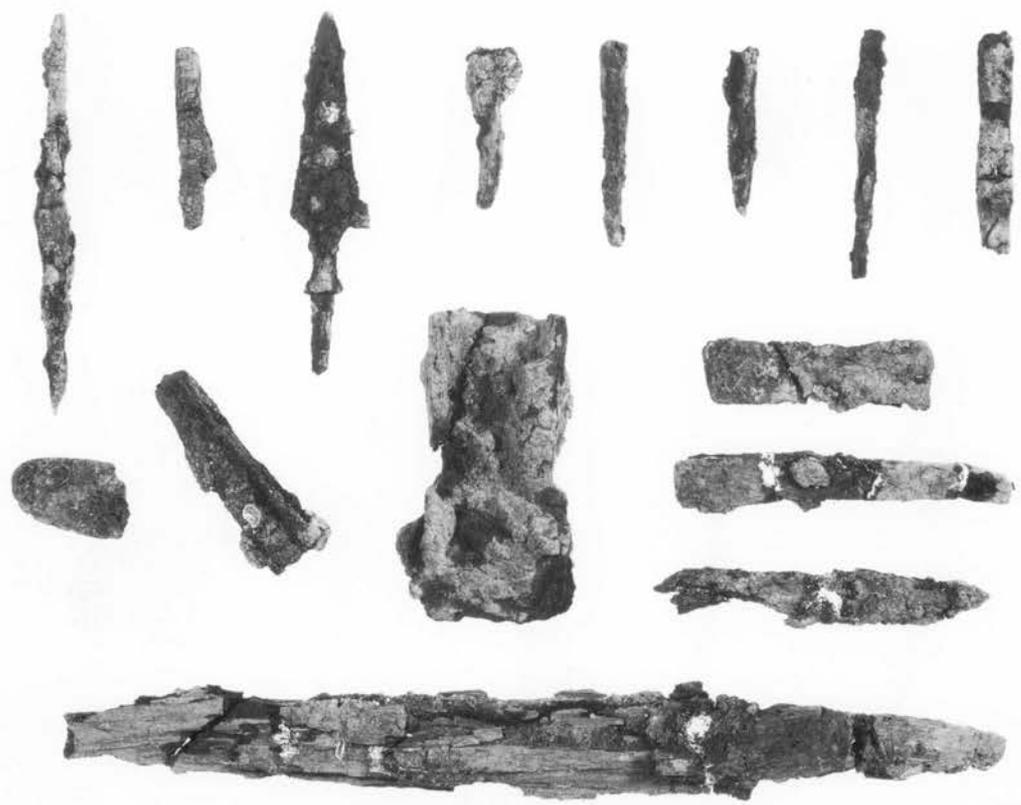


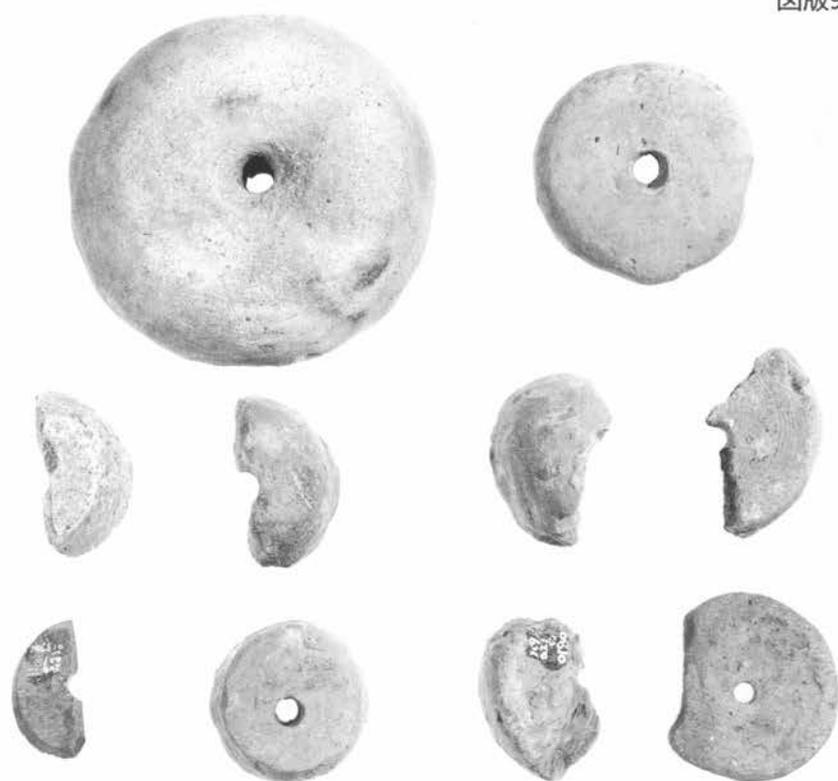


住居跡出土鉄製品



土壌出土鉄製品
グリッド出土鉄製品





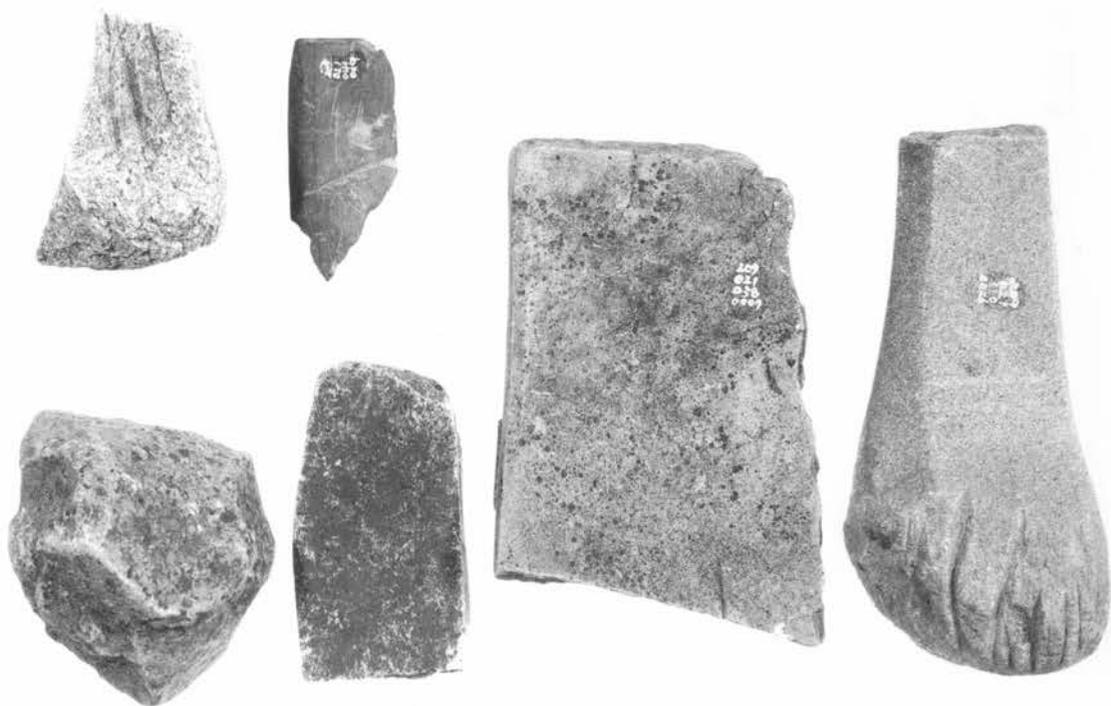
紡錘車
大形土錘





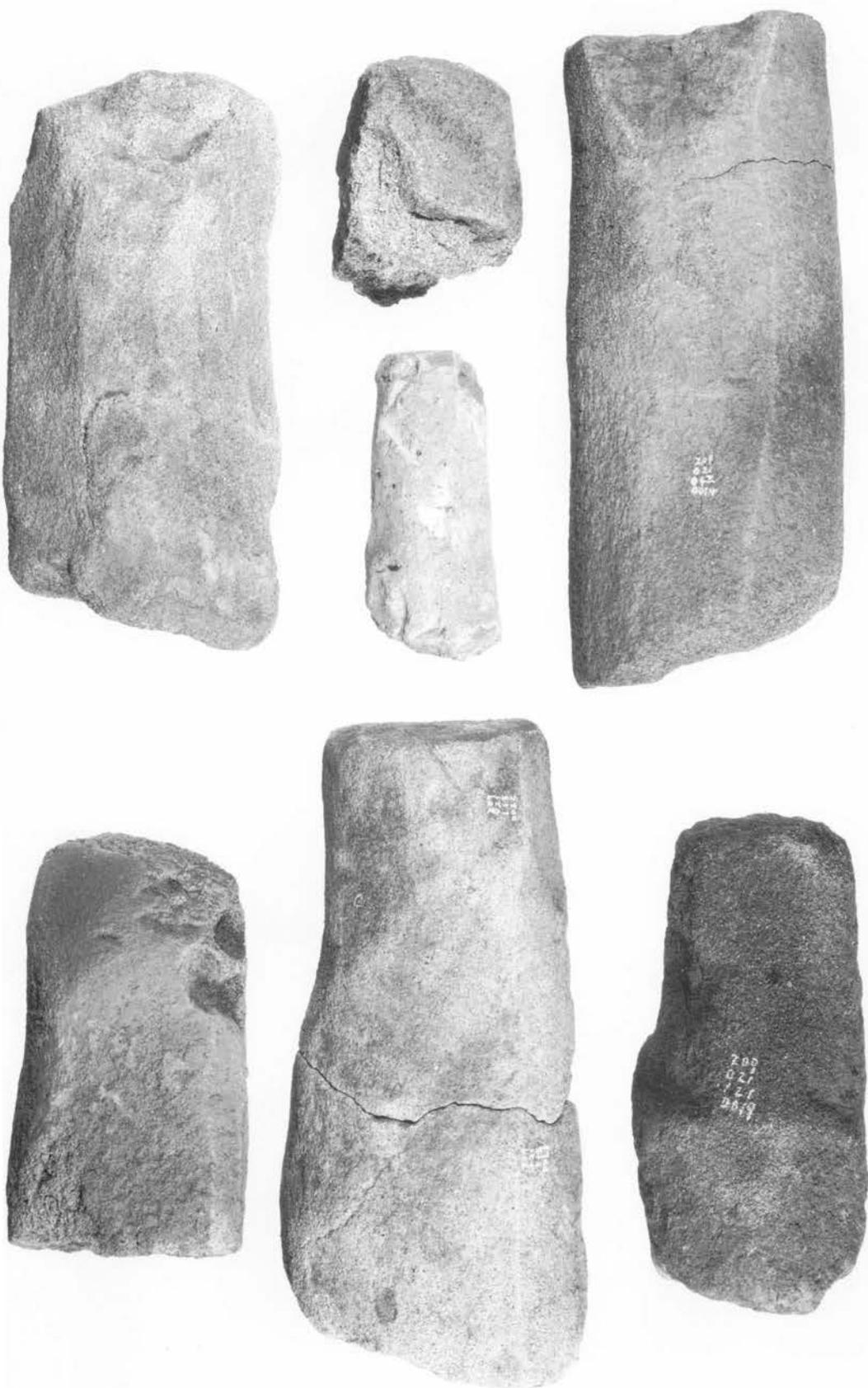
住居跡・溝出土土錘
グリッド出土土錘



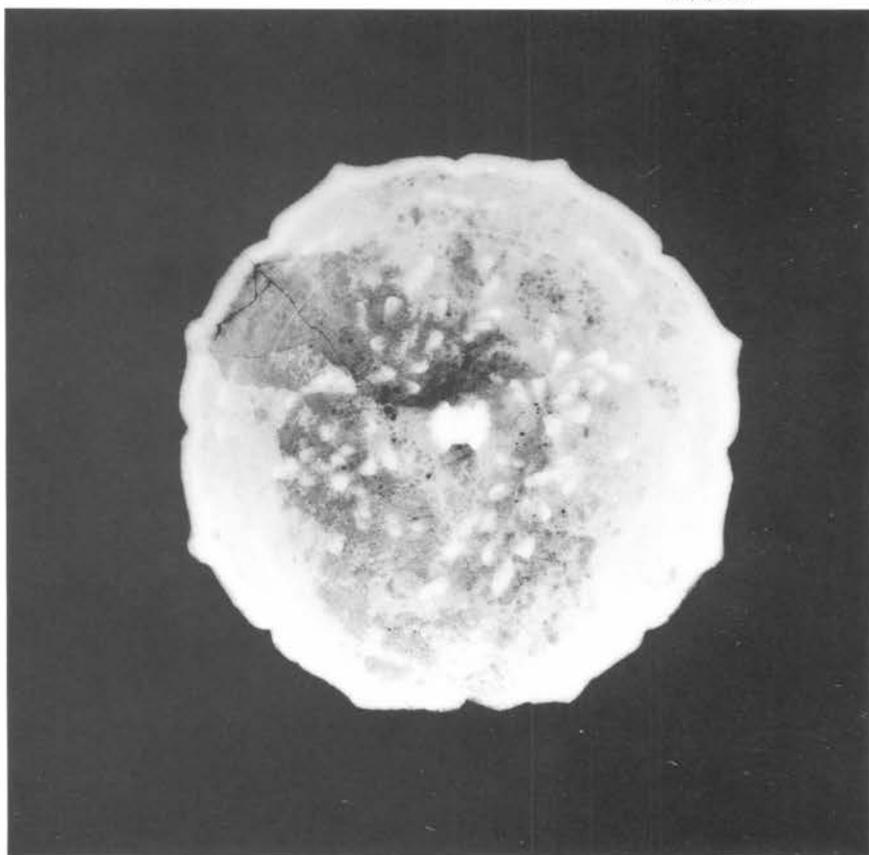


住居跡出土砥石
溝・グリッド出土砥石

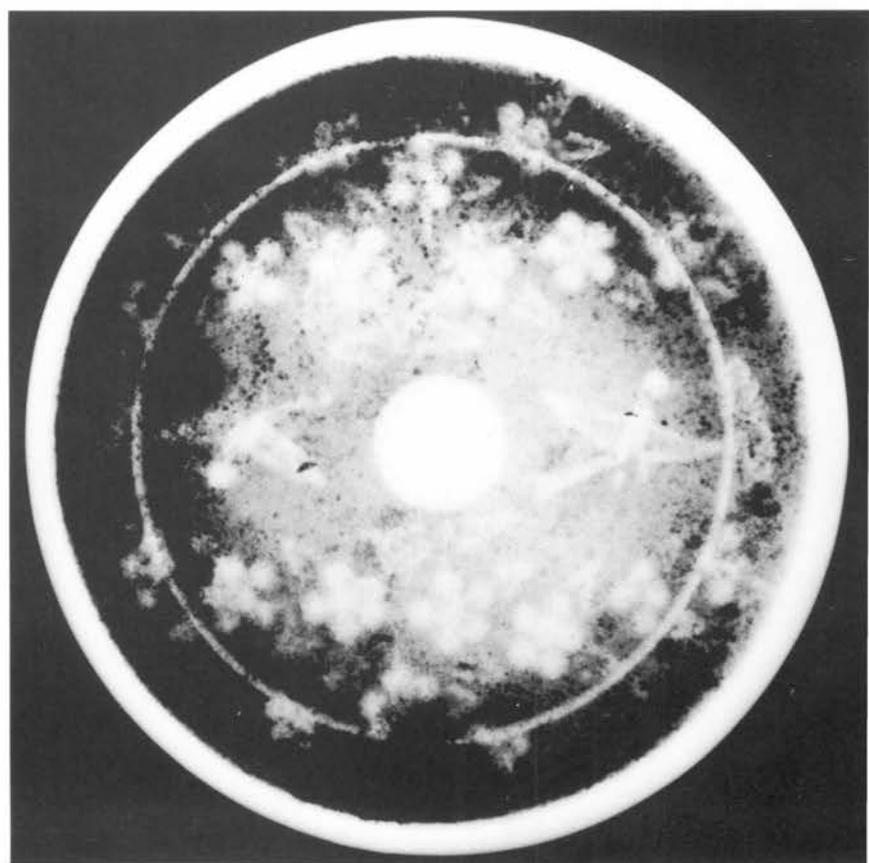




住居跡出土支脚



066号住居跡出土八稜鏡X線写真



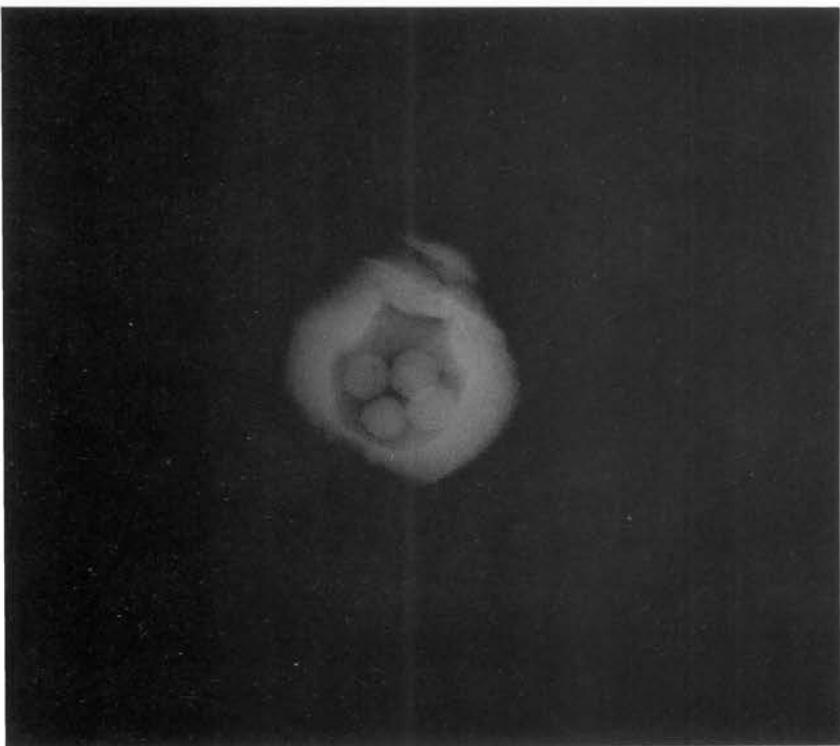
501号土壌墓出土山吹双鳥鏡X線写真



グリッド出土銅鉦



グリッド出土土製品



同上X線写真



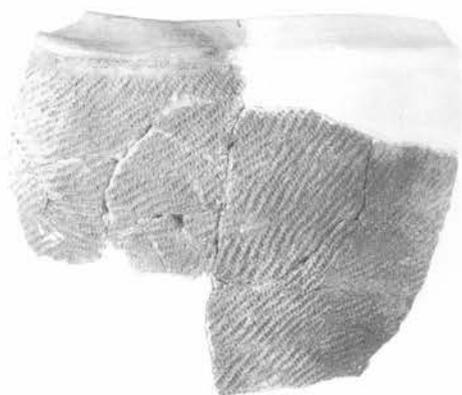
3(J1)



9(533~535)



1(J2)

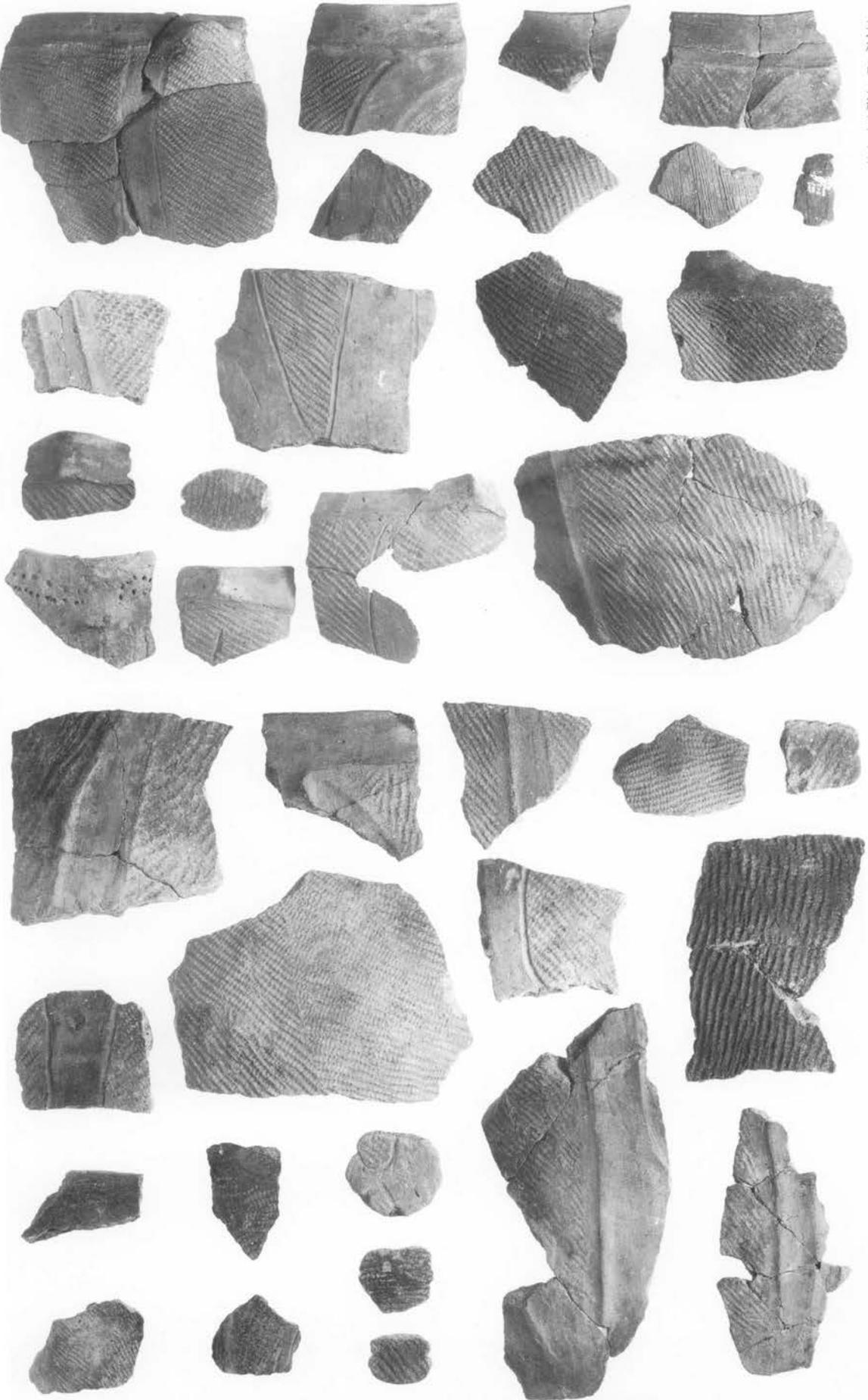


8(533)



2(J4)

遺構出土縄文土器



グリッド出土縄文土器



1



3



2



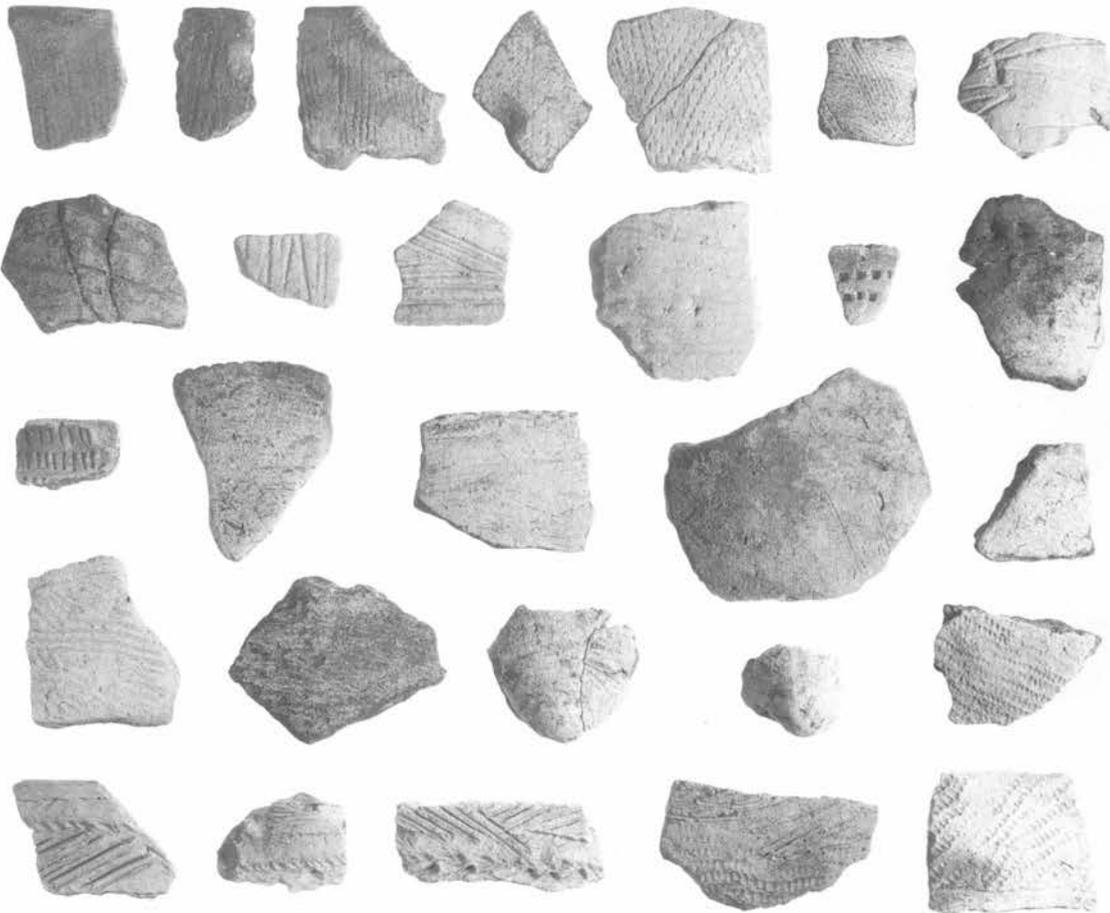
6

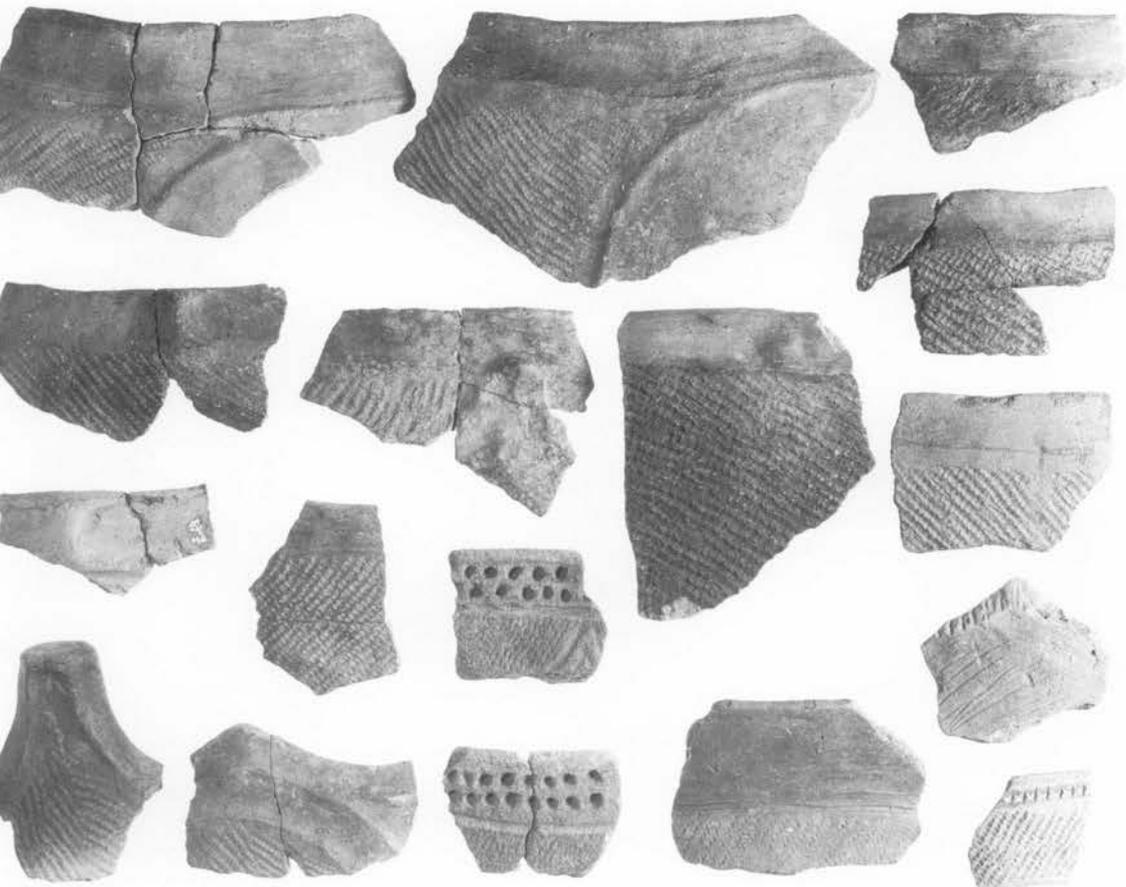


4



5





グリッド出土縄文土器



グリッド出土土製品

グリッド出土石器



